
千里の道も一歩から～組織壊滅への道のり・・・そして、迷宮に迷い込んだ。

ウッキー君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千里の道も一歩からゝ組織壊滅への道のり・・・そして、迷宮に迷い込んだ。

【Nコード】

N4393M

【作者名】

ウッキー君

【あらすじ】

全ての始まりは『ひぐらしのなく頃に』 『ひぐらしのなく頃に - 解』 『ひぐらしのなく頃に - 礼』の世界で大きな軸としての物語は『名探偵コナン』それにゆつくりと徐々に緩く絡み付いてくる『まじっく快斗』 『金田一少年の事件簿』 『踊る大捜査線』 『相棒』 『心霊探偵八雲』の世界そして今、自分たちが生きている“この世つまり現実”^{リアル}と言う世界、このリアルの世界の代表として(?)出てくるのは今や国民的アイドルとして名を馳せている『AKB48』

『SKE48』『NMB48』『SDN48』そしてある不思議な玉によって交わる事になってしまった世界『涼宮ハルヒの憂鬱』『ONE PIECE』『NARUTO - 疾風伝』『ドラゴンボールZ』『灼眼のシャナ』の世界とある我侘な神様によって連れて行かれたもうひとつの『NARUTO』『NARUTO - 疾風伝』『ONE PIECE』逆に自分が神様となって仕事の一環として介入することになった『鋼の錬金術師』『とある魔術の禁書目録』『とある科学の超電磁砲』『涼宮ハルヒの憂鬱』『NARUTO』『NARUTO - 疾風伝』の世界といういくつもの世界が混合する物語

- 1 只今迷走中なのでゴールが見えていません><
- 2 AKB48のファンの方は途中から覚悟して(?)読んでくださいもしかしたら気に食わない事が起ってしまうかもです
- 3 様々な世界が混ざり合っているのかかなり短い作品も多々あります
- 4 警告タグは付いていますがそこまで危なくないと思います
- 5 紹介に予定が入っています

それでも良ければこの駄作に評価をお願いします・・・

小説合併の経緯について

どーも‘ウツキー君’です><

えーっと、手っ取り早く理由から説明したいと思います

自分のある友達が‘ウツキー君’の書いた
小説を読んでくれて

こう感想を言ってくれたのです！

「全部まとめれば？」と

まあ正直【ガクツ】ときましたが・・・

丁度最近、手直しなどをしようかと思っていたので

「それも良いか」

というふうになり・・・

この度、シリーズを一本化（合併）することにしました！

ストーリーには大きなズレが

生じることはありませんが手直しは

「ちよくちよく」します

一本化が無事に終われば

他の物は消すつもりですので・・・

なにかともあれ
これからよろしくお願いします！

ひぐらしのなく頃に輝

ひぐらしのなく頃に・輝

~~~~~原作~~~~~

【ひぐらしのなく頃に】

【ひぐらしのなく頃に・解】

「ジャンル」

推理・ミステリー・ホラー

<オリジナルキャラクター>

あり

ウツキ君からの小説説明

この小説は『ひぐらしのなく頃に』と  
『ひぐらしのなく頃に・解』を基盤、土台とした物語です  
ストーリー

では、『ひぐらしのなく頃に - 輝』スタート！

## 【輝】登場人物

・前原圭一（まえばらけいいち）

雛見沢分校中学二年生

昭和58年5月頃に雛見沢に越してくる男の子

・竜宮レナ（りゅうぐうれな）

雛見沢分校中学二年生

本名は竜宮礼奈

昭和57年に雛見沢に越してきた女の子

しかし、小学校に上がるまでは雛見沢に住んでいた

・園崎魅音（そのざきみおん）

雛見沢分校中学三年生

雛見沢御三家の園崎家次期当主の女の子

・古手梨花（ふるでりか）

雛見沢分校小学五年生

雛見沢御三家の古手家最後の生き残りで現当主

オヤシロ様の生まれ変わりとも言われている女の子

・北条沙都子（ほうじょうさとこ）

雛見沢分校小学五年生

ダム戦争以来村八分にされている家の女の子

・園崎詩音（そのざきしおん）

聖ルチーア学院中学三年生

園崎魅音の双子の妹にあたる女の子

たびたび学院を脱走している



世界によって変わるが、雛見沢分校にいる事もある

・北条悟史（ほうじょうさとし）

雛見沢分校中学三年生

北条沙都子の実の兄

四年目のオヤシロ様の祟りで失踪してしまう男の子

・羽入（はにゅう）

オヤシロ様

雛見沢の守り神

ある世界では古手羽入と名乗り実体化し皆の前に現れる

-----  
この小説のオリジナルキャラクター

・大友隆（おおともりゅう）

雛見沢分校中学二年生

昭和57年10月に雛見沢に越してきた男の子

父の仕事の関係で北は東北、南は九州まで転校したことがある

今は落ち着くために雛見沢にある別荘にひとりで住んでいる

持ち前の観察力と推理力で警視庁に勤務する母（警部）を

幾度と無く助けているため警視庁の第一課から絶大な信頼を得ている

・大友洸太（おおともこうた）

雛見沢分校小学六年生

ある世界で雛見沢分校に転校してくる男の子

大友隆の実の弟で兄の手伝いを進んでやる

兄と家の別荘に住み始める

## 【輝】始まり

・・・これが何回目かしらね  
覚えてる？

・  
・  
・

うつん私も覚えてないわ  
この前の世界・・・あの世界は私も納得がいく  
あそこまで頑張つて  
未来まであと一歩届かなかったのだから

・  
・  
・

え？なぜまた期待するのかつて？

・・・私は教えてもらった

最後まであきらめないで あきらめないで最後の最後まで  
私がみんなを信じて

みんながみんなを信じたときに奇跡が起こることを

さあ行きましょう

昭和58年6月の運命を打ち破るために

新しい雛見沢へ

【輝】これまでに無い新しい雛三沢

梨花 side

今は昭和57年10月

また新しい歯車が回りだしたようだ

此処は学校

そう雛見沢にひとつしかない雛見沢分校

岡村「今日転校生が来るんだって」

富田「へえ」

沙都子「なんですって!？」

へえこの世界の沙都子は少し立ち直りが早い  
のね  
ってトラップの準備が早い

・・・誰だろう？圭一にしては早すぎるし

魅音「へえゝ興味あるなあゝねえどんな奴？」

岡村「はあい

たぶん中学生くらいだと」

レナ「ねえねえその子があいいの？かあいいの？」

岡村「わかりません」

魅音「よしその子を我が部活に入部させよう!!」

はあ相変わらず自分勝手に物事を決める女ね  
でも・・・こんな世界ははじめてね

隆 side

オレは今日からこの辺鄙なところで勉強をする  
全学年合わせてークラスしかないらしい

オレの経験上人数が少なければ少ないほど個性が強い奴が多い

知恵「さあ大友君校長先生が鐘を鳴らしたらHRです

そしたら、先生と一緒に教室に行きましょう」

カランカラン・カランカラン

テクテクテクテク

教室のドアに変な物が挟まっていた

隆「黒板消し？」

さらにドアノブには画鋏が・・・

念のためドアの開いている隙間から教室内を覗く  
なんだろう?・・・墨汁?

教室の床には墨汁が溢してある

・・・三重トラップ?

隆「先生危ないですよ」

知恵「えっ!？」

思わず手を引つ込める先生  
気が付かないのかよ

隆「あ、いや画鋏が」

知恵「全く誰ですか!こんな物騒な事をしたのは!」

隆「せ」

ガラガラー（ドアを開ける音）

ポトン（黒板消しが落ち先生の頭に当たる音）

ツル（先生がすべる音）

ドッシーン!!!!!!!!!!（・・・）

だから言ったの

知恵「だれ〜です〜か〜」

こんな過激な悪戯をしたのは!」

クラスメート全員が一人を指している

・・・あいつか

沙都子「あ、あの・・・わたくしですわ」

知恵「北条さん何か言うことは?」

先生恐れ〜

これは怒らしちゃまずいなあ

沙都子「ごっごめんなさいですわ」

1時間目は沙都子の説教で終わった

カランカラン・カランカラン

隆「東京から来ました大友隆です

これからよろしく」

パチパチパチパチ・・・

何度も言ってきた台詞だ

言ってる自分が聞き飽きた

知恵「じゃあ大友君はその空いている席に座ってください

では委員長この時間は大友君への質問コーナーとしましょう」

魅音「はい」

ガラガラー

魅音「んじゃ私の自己紹介からね

えーっと名前は園崎魅音

魅音って呼んで

あとは・・・学年はひとつ上だね

よろしく！次」

レナ「えっあっうんーっと

竜宮レナ

学年は同じだよ！だよ  
よろしくね」

梨花「みい

古手梨花なのです

古手神社の巫女さんをやっていますです  
よろしくなのですよ  
にぱー」

沙都子「わたくしは北条沙都子ですわ

さっきのはト・ラ・ッ・プですてよ  
よろしくですわ」

という感じのみんなの自己紹介がしばらく続き終わった  
この人数だとこの時間で顔と名前は覚えれそうだな

魅音「それじゃあ質問コーナー行ってみよー」

正直言つてベタな質問が多かった  
でもこいつ等だけは違った

魅音「隆ちゃんはどうーゆータイプが好きい？」

梨花「みい隆はいままで何人とお付き合いしましたですか？」

沙都子「それを言うなら違いますわ

何人に騙されましたかーですわ」



レナ「それはちょっとかわいそうじゃないかなかな？」

カランカラン・カランカラン

隆「助かった」

思わず出たオレの本音だった・・・

それからのはあとの時間は授業だった

しかし上級生のオレ達三人はほとんど自習状態

わからない事は自分達で解決しないとダメだった・・・

とは言ってもオレは高１レベルの問題なら（数学を除いて）

出来るから困らなかった

だから魅音やレナに教えていた

というより教えていたら昼食の時間になった

そこでビックリすることがあった

まだ女子だけのグループに呼ばれるのはわかる

まあ上級生がその中に二人いる事だし

男子にとって自分より上の学年の男子は怖いからな

で、ビックリしたことは俺も含めてお互いの弁当から

好きなものをとって食べていいらしい

普通年頃の女子って嫌がらないのか？

不思議だった・・・

・  
・  
・

やっと学校も終わり放課後になった

から帰る準備をしていたら魅音に呼び止められた

魅音「ねえ隆ちゃんさあ

うちの部活に入らない？」

隆「何をやる部活なんだ？」

少し変わった奴らのすることだ  
何をするのか恐い

魅音「んーつとね

変化していく社会に対応するためにどんな逆境にも負けない  
大人になるための部活！！」

えーつと何が言いたいんだ？

レナ「だからね負けたら罰ゲームがあるんだだよ」

沙都子「罰ゲームは恐ろしくてーでしてよ」

だからいったい何をやるんだ？

梨花「つまりみんなで楽しくゲームをしようという部活なのです」

梨花だけがまともな返答をしてくれた  
はぁー良かった

隆「ゲーム部ってことだよね？

いいよ入るよその部活」

魅音「言っただね隆ちゃん

男に「一言は無いよ?」

隆「無いよ」

魅音「これ聞いてやっぱやめるとかも無しだからね」

隆「いいよ」

魅音「えーっと」

会則第一条

遊びだからなんていう

いい加減なプレイは許さない!

会則第二条

勝つためにはありとあらゆる努力を  
することが義務付けられている

あとは、

なっなんか大変そーだな

隆「わかったつまり簡潔に言っと

一位を目指して本気でやれってことでしょ?」

梨花「そうゆうことなのですよ」

沙都子「で、魅音さん今日の罰ゲームは何でして?」

魅音「そーだね

荷物持ちなんてどお?」

へえ意外と普通の罰ゲームだな

魅音「でもそれじゃつまんないから・・・

ジャーン！！メイド服を着て荷物持ちなんてどうかな！？」

前言撤回やつば変だ

梨花「勝てばいいのですよにばー」

ルールは簡単

ジジ抜きを五回やって一番多く勝った人の鞆をビリに  
メイド姿で持たせるらしい

・ ・ ・

一回戦

魅音「これであーがりー！！」

沙都子「なっなんでですの」

二回戦

沙都子「をーほっほっほっほー！！」

魅音「ガク」

三回戦

梨花「あがりなのです」

レナ「はう」

#### 四回戦

レナ「レナはこれであがりだよ」

魅音「トホホ」

#### 五回戦

隆「はいあーがり」

梨花「みい」

#### 結果発表

魅音 一勝二敗

レナ 一勝一敗

沙都子 一勝一敗

梨花 二勝一敗

隆 一勝〇敗

魅音「えっー私!？」

梨花「早く着替えてくるのですよ」

・  
・  
・

今日は楽しかった色々あったけど

こんな日々が続けばいいなあ  
とオレは思った

## 【輝】私の記憶

隆が来てからいろんな事が分かった  
そして色々なことが変わった

今の私には前の世界の記憶は少ししか残っていないけれど・・・

きっと隆がいるだけで今までの世界と変わる

だって未来はちよつとした事だけで未来が大きく変わるのだから  
いままでこの昭和58年6月を巡るゲームで登場してこなかった人  
物が

この世界では出てきているのだから

言い方は悪いのだけれど

この隆という駒はとても心強い

なぜなら隆の呼びかけで警視庁まで動かせるのだから

今は昭和58年の5月の下旬

明日は圭一が学校に来る日

この世界の未来は開けるのだろうか・・・

【輝】引っ越して来た前原圭一

俺は前原圭一

5日前この雛見沢に引っ越してきた

昨日のうちに今日から行く雛見沢分校に下見に行った

ボロくて小さい所だけど結構気に入ったぜ

それにもうそろそろ迎えに来てくれる奴がいる

ピンポーン

ほら来た

圭一「いつてきまーす」

圭一の母「いつてらっしやい」

ガチャ

ボタン

レナ「おはよう！圭一くん」

圭一「おはようえーっと」

レナ「レナだよレナ！ちゃんと覚えてね」

圭一「あゝごめん」

レナ「ほら魅いちゃん達待ってるから

早く行こーね」



圭「あっうん」

しばらく歩いた

正直言つて女の子と二人っきりで登校なんて

多分初めてだ・・・

恥ずかしい・・・

何話そう・・・

COOLになれ！前原圭ー！！

・  
・  
・

レナ「あつ 魅いちゃ〜ん！隆く〜ん！」

魅音&隆「おはよう！レナ

でそっちが前原圭ー？」

見事にハモツた二人誰なんだ？

何で俺の名前を・・・？

レナ「あはははは

二人とも仲良いね

あ、圭ーくん

こっちが魅いちゃんで

こっちが隆くんだよだよ」

隆「レナ誤解を招くようなことは言つなよ

オレは大友隆よろしく」

魅音「えーっと

私園崎魅音よろしく」

レナ「はい次は圭一くんの番だよ」

梨花 side

彼が来た

そう前原圭一が

きつとこの世界では彼が疑心暗鬼に囚われるだろう  
なぜって？

確率の問題よ

だいたい七回に一回

前にあつたような世界になる  
きつと・・・

今は授業中だ

それで俺は今レナに数学を教えている  
隣では魅音が隆に社会を教わってる

圭一「レナ！だからそこ違うって」

レナ「えーどうして」

圭一「だ・か・ら

これはこうでこうしてこうやるんだって!」

レナ「へえ

そーなんだ

圭「くんって勉強できるんだね」

圭「いやお前らが出来な過ぎるんだよ

それにしても教えてる方が自信なくなるよ  
自分の理解の浅さにさあ」

魅音「人に教えるって普通の三倍は

理解してないといけないって言うしね  
圭ちゃんも大変だね」

隆「ははは

みーおーんまず自分の心配をしろよ」

ふと疑問に思った

なんで隆だけズバ抜けて  
勉強が出来るんだろ?と

圭「なあ隆

何でお前だけ

ズバ抜けて勉強できるんだ?」

隆「何でって

半年前まで東京にいたからさ」

圭「へえだからか」

納得納得

隆「実はレナも転校生だったんだよ」

それは意外

レナ「うん・・・」

レナはね一年前茨城から引越して来たんだよ」

魅音「そーいやあさ来月は綿流しのお祭りだね」

隆「ワタナガシ？」

魅音「そう綿流しのお祭り

すっごく楽しいんだから」

圭「へえ何やるんだそのお祭り」

知恵「前原君！！今は授業中ですよ！」

レナ「また今度ね」

その綿流しに関係する事は一ヶ月後に  
俺は知ることになる

【輝】晴れる疑心暗鬼（前編）

俺が雛見沢に来て一ヶ月が経った

今日は珍しく部活が無かった

今はレナと一緒に宝探しに行く途中だ

レナ「今日は久しぶりだから」

何があるかな？何があるかな？」

どうやらレナは上機嫌なようだ

厄介な場所じゃないトコだといいな

ははははは・・・

レナはちよつと歩くって言うてたけど  
だいぶ歩いたな

圭「なあレナまだ歩くのかよ」

レナ「ううん

ほらあそこ」

つてここの事？

圭「レナの用はこのゴミの山かよ！？」

レナ「ゴミじゃないよう

レナにとっては宝の山だもあんな  
わあ新しい山だ」

ワクワクワクワク」

はぁこれが魅音達が言うかぁいいモードなのか？？

圭「ってちょっと待てよ」

ズル

圭「わあああ」

ズッテン

圭「イタタタタ」

レナ「いいよ圭くんは」

そこで待って」

と俺に告げ

ひょいひょいレナは行ってしまった

どーしようか・・・

寝て待とうか？

・  
・  
・

カナカナカナカナカナ・・・

ザッザザ

足音？

圭「わっ!？」

振り向くとそこにはカメラを持った  
男の人が立っていた

富竹「わぁビックリした

驚かすつもりは無かったんだ」

ホントかよ・・・

富竹「君は雛見沢の人かい？」

急だな話の流れが

圭「はぁはぁ」

富竹「僕は富竹

フリーのカメラマンさ

この雛見沢にはたまに来るんだ」

俺はこのマイペース男に

少し腹が立った

圭「写真ってのは

被写体に断ってから

撮るのが礼儀ってもんじゃないんすかねえ？」

富竹「あははゴメンゴメン

メインは野鳥の撮影だね

今まで断った例が無いんだよ  
あはははは・・・」

俺はムツとした

誰だってなるよな普通

遠くから声が聞こえた

レナ「圭くん

待たせてゴメンね」

もう終わりにするから」

富竹「おや連れがいたのかい

彼女はあるなところで何をしてるんだい？」

聞きたいのはこっちだよ

圭「さあね

昔殺してバラバラにした

死体でも確認してるんじゃないですか？」

腹が立つからちよつと

からかったつもりだった

すると富竹と名乗った

男の顔つきが急にまじめになり

こう呟いた

富竹「・・・嫌な事件だったね

腕がまだ見つかってないんだろ？」



えっ・・・

なんのこと・・・

するとまた遠くから声がした

レナ「圭一くん

お待たせ」

富竹「じゃあそろそろ帰ろうかな

驚かせて済まなかったね圭一君」

カナカナカナカナカナカナ

レナ「圭一くん待ったかなかな？」

無反応だった俺にレナがもう一度  
声をかけてくれた

レナ「圭一くん？」

俺「あつんでどうだったんだ？

掘り出し物は見つかったか？」

そう言うとなレナは急に喜び

レナ「うん！！

聞いて聞いて」

あのね、あつたの！

ケンタくん人形！」

圭一「ケンタ君人形？」

まさか

圭一「つてあれか？」

ケンタクン・フライド・チキンに置いてある  
あの等身大人形の！？」

レナ「そう！

ケンタクン！！

はうゝかぁいいようゝ

お持ち帰りしたいいゝ」

圭一「あれはゴミだろ？」

お持ち帰りしたかったらしてもいいんだぜ？」

すると急に笑顔が消え

レナ「ケンタクン・・・

ゴミの山の下敷きになってるの  
簡単には掘り出せないよ」

そうだったのか

圭一「だったら明日手伝ってやるよ

いつも世話してくれてる

恩返しってことでさ」

すると急に元気になり

レナ「ありがとう」

圭「くんが手伝ってくれる」

ケンタくんをお持ち帰りできるう」

はう」はう」はう」

ここでさりげなく聞いてみる事にした  
さっき疑問に思ってた事を

圭「なあレナ」

昔ここでなんかあったのか？」

レナ「ダムの記事をやっていたんだって

詳しくは知らないけど」

普通に返してくれた  
正直ほっとしてる

圭「ダムの工事？」

たとえばさあその工事中になんかあったとか  
事故とか」

レナ「知らない」

随分さっぱりとしていた  
そつまるで触れられたくないみたいに

圭「え」

レナ「レナも転校生だったから

だからね昔のこととか  
よく知らないの  
ごめんね」

圭「そっぴゃあそうだったな  
じゃまた明日な」

レナ「うんまた明日学校でね」

-----

翌日の放課後

カランカライン・カランカライン

魅音「さてと今日の部活は  
難しいのは止めにし  
て  
ジジ抜きでいこー」

圭「余裕だぜ」

魅音「罰ゲームは一位がビリに1個命令でどっ」

全員「賛成ー！！」

魅音がカードを切り  
一枚抜いて皆に配る

なんかすげえ傷ついてんなあ

圭一「もしかして皆にはこのカードの  
傷で今伏せたカードが分かってるとか（笑）」

隆「あはははは」

嘘！！

圭一「ちょちょつと待て！！  
そんなんありかよ！！」

沙都子「会則第二条

勝つためにはありとあらゆる努力を  
することが義務付けられている  
ですわ」

レナ「いくつかのカードは特徴的だから  
圭一くんもすぐに覚えられるよ」

圭一「じょ上等だぜ！！  
この程度でハンデになると思うなよ！！」

魅音「くつくつくく分かるよ」  
圭ちゃんのカード右から言うよ  
3・4・9・J・Q」

圭一「グエー」

梨花「ちなみにジジはダイヤのJなのです」

圭一「うわぁ！！！」

自分の手札をぐちゃぐちゃにする俺  
これで誤魔化せたか？

隆「意味無いよそれ

だって傷で覚えてるんだからさあ」

沙都子「これで上がりですわ」

圭一「ギョエー」

おっ鬼だこいつらは鬼だ・・・  
はっ

圭一「レナは鬼じゃないよな？」

レナ「ゴメンね圭一くん  
こっちがハートの3だよね  
はいレナもあがり」

圭一「グワァー」

そして九連敗・・・  
十戦目

レナ「やっぱりさあキレイなカードでやらないと  
圭一くん不公平だよ」

魅音「いいのいいの

圭ちゃんも男だし

このぐらいの逆境は跳ね返さないかね」

おおんのれえ 魅音！！

すると梨花ちゃんが寄ってきて  
俺の頭を撫で撫でしてくれた

梨花「ふあいとおーです」

梨花ちゃんはいいい子だよなあ

隆が小声で助言してくれた

隆「類似品を作れば良いしょ？」

あつなあるほど

魅音「ほおら圭ちゃん

隠さない隠さない」

俺は手をカードから離れた

魅音「たしかこれがダイヤの2だったよね」

引っかけたな魅音

魅音「あれ？」

良い反応良い反応

レナ「あ魅いちゃんがカードを間違えるなんて  
珍しいね」

魅音「ち違う！圭ちゃん！まさか！」

不敵に笑う俺

圭「かはははは

引つかかったな園崎魅音！」

沙都子「ダイヤの2を偽装したと言ったのですの？  
味な真似をしますですわね」

梨花「でも隆に教えてもらいましたですよ」

魅音「そーなの？隆ちゃん

ルール違反はキツイお仕置きをしなくちゃね」

隆「あれ？み？お？ん

助言をしてはいけないなんてオレは一回たりとも  
聞いてないんだけどなあ？」

レナ「うんレナも聞いたことないよ？」

魅音「えっ？あそつそーだっけ？あはははは」

誤魔化しやがったな

沙都子「とは言っても



もう手遅れですわねえ」

圭一「まあビリは確定だけど楽しかったから  
良いかなあなんて・・・  
うわぁ罰ゲームだぁ!!」

-----

今は三人で下校してる  
パンダになった俺と魅音と隆の三人で  
レナは先に帰るって行ってひとりで帰っちゃった  
きつとケンタくん人形のためだろう

昨日疑問に思ったこと  
魅音に聞いてみよう

圭一「あつあのさ魅音」

魅音「ん何？」

圭一「ダム現場で昔なんかあったんだろ？」

魅音「あつたよ

昔役人どもが一方的に  
いきなりダム造るって  
立ち退きを要求してきて」

圭一「一方的に？」

魅音「だから戦ったんだよ

村の皆で

戦わなければ今頃

村はダムの中に沈んでいたんだ」

圭「よく勝てたな

相手は国だろ？」

魅音「村長や村の有力者達がね

いろんな政治家に根回しをしたんだよ

そうしているうちに計画は撤回されたんだよ

私達の完全勝利だった」

圭「ふーん

暴力沙汰とかにはならなかったのか？

傷害事件とか殺し」

魅音「無かった

じゃあまた明日ね

行こ隆ちゃん」

隆「ああ

じゃあな圭」

魅音「あっそうだ

それ家に帰るまで

消しちゃダメだからね」

圭「分かってるよ

消さねえよ！」

カナカナカナカナカナカナ・  
・  
・

【輝】晴れる疑心暗鬼（中編其の一）

俺は約束通り

レナがいるはずのダム工事現場へ向かった

やっぱりいた

レナ「よいつしょよいつしょ

はあゝ」

声をかけるか

圭「おいレナ！！

性が出ますな」

レナ「あつ圭くん

どうしたの？こんなところへ？」

あつ良い事思いついた

敬礼して

圭「事故発生 of 緊急通報を受け参上しました

負傷者は何処でありますか？」

レナ「ふえ？事故つて？」

圭「ケンタくん人形がゴミ山に

生き埋めになっているとの通報でしたが」

レナ「なあんだビックリした〜」

圭一「んで何処だよ

ケンタくんは？」

レナ「ごめんここだよ

この隙間から見える？」

圭一「こりやまさに生き埋めだな

本気でやるなら斧とか鋸とかいるなあ」

レナ「あっちよつと待っててね」

と言うとどつかへ行ってしまった

ふらーっと辺りを見渡す

圭一「あつ」

週刊雑誌があつた

パラパラっとめくつた

圭一「あつた」

俺が目にしたのは雛見沢村バラバラ殺人事件  
があつたという内容の記事  
皆は否定したけど・・・

圭一「やっぱりあつたんだ」

カナカナカナカナカナ

バン

その音に俺の心臓は飛び上がった

後ろを振り向くそこには

鉦を持ったレナが立っていた

俺は絶叫しその場に倒れた

レナ「だっ大丈夫かなかな？」

圭「いやビビッた」

まじで

レナ「斧とかがあると便利って

言っただじゃない？それで持ってきたの」

圭「強えーの持ってきてくれたけど

もうすぐ陽が落ちるから

続きはまた明日な」

レナはそれを聞いてしょんぼりしてしまった  
だから励ましの言葉を言う

圭「何しょんぼりしてんだよ

明日にはケンタクさんを掘り出せるんだぜ」

レナ「そうだよね  
あははは」

-----

翌日

魅音「だいぶ前に言ったじゃん

綿流しのお祭り

梨花ちゃんはそのお祭りの  
実行委員さんのねっ」

梨花「はいです」

隆「ふーん

で綿流しって何をやるんだ？」

魅音「傷んだお布団とかにね

いままでご苦労様って感謝して  
供養しながら沢に流すお祭り」

圭一「なんか退屈そうなお祭りだな」

おもわず本音を漏らす俺

すると魅音が燃えた

魅音「退屈どころかー

今年もやるぜー！！」

一息置いて

魅音「綿流し祭大部活大会!!」

圭「何やんの?」

沙都子「日頃の部活の成果をご披露するのでございますわ  
をーほっほっほっほー!!」

梨花「つまり露天巡りをしながら部活動をするのです」

――――  
帰り道

カシャ

あつ富竹さんだ

圭「こんにちは」

富竹さんもちに気づいたみたいだ

富竹「やあ圭一君また会ったね」

圭「どーも」

魅音「いい写真撮れてますかあ?」



富竹「まっそこそこにね

しかし圭一君も隆君も隅に置けないね  
二人とも彼女がいて羨ましいな」

俺と隆と魅音は笑いながら否定

レナは赤くなつて爆発した

魅音「おじさま今年は綿流しまで滞在ですか？」

富竹「うんお祭りを一通り撮影したら

また東京に帰るよ」

レナ「早く作品が賞を獲れるといいですね」

おいおい

そんなぶっちゃけたこと言つか普通

富竹「あっははははは

まいったなあ

じゃお祭りでまた会おうね」

隆「さようなら」

圭一「みんなは富竹さんのこと知ってるんだ」

魅音「うん年に何回か来てるんだ」

レナ「季節の風景や野鳥を撮ってるんだってね」

隆「まあホントのところは鷹野さんに会いに来てる

ただだとオレは思っけどね」

魅音「それあるかも

あははははは」

-----

綿流し当日

それから数日経ち綿流しの当日がやってきた

確か集合場所ってここら辺だったよな

魅音「おーい圭ちゃん

こっちこっち」

圭「おう今行く！

よう魅音にレナに隆に沙都子

おっー梨花ちゃんすっごく似合ってるぜ」

魅音「奉納演舞は祭りの最後だからそれまでは

思いっきり楽しむぞ！」

全員「おー！！」

大石「おんやあ今年も元気なことだ」

魅音「警備ですか大石さん」

やけに冷たいなあ魅音のやつ

魅音「レナに圭ちゃん！梨花ちゃんと沙都子連れて  
先に行つといて」

圭「ああ」

なんで隆だけ・・・？

魅音 side

大石「今年は二名ほど多いようですが」

隆「オレは大友隆です

去年の秋に転校してきました

警察の方ですか？」

警察にでもなりたいのかなあ隆ちゃん

大石「あつあなた

もしかしてあの警視庁の大友さんの息子さん？」

えっどういう意味？

隆「はい一応」

大石「いやゝ東京では結構な活躍をしたそうじゃないですか  
こっちでも頼りにしてますよゝ」

頼りつていままで隆ちゃん

何やってたんだろう？

そっいえば前のこと何も知らなかったなあ

大石「そっいえば今やっている捜査

隆君はご存知ですか？」

隆「はい一応

母から聞いてますよ

随分と苦労されてるみたいですね」

知ってたの！？

オヤシ口様の祟り

通称雛見沢連続怪死事件の事！？

大石「じゃあこっちでも捜査の協力

頼んじやってもいいですかね？」

隆「かまいませんよ」

魅音「隆ちゃん！行こ！」

私は隆ちゃんの手を引っ張って

みんなの所へ向かった

隆「それじゃ」

私は大石が見えなくなったところで  
足を止めた

魅音「ねえ知ってたんでしょ？

・・・オヤシ口様の祟り」

隆「・・・うん知ってた」

魅音「なんで知ってたこと

教えてくれなかったのさ！」

なぜか声を張り上げる私

隆「だってしゃべりたく無さそうにしてたからさ

逆に言わない方が良くないかなって思ってた

それで気を悪くしたならごめん・・・」

そっか

なんでそんな思いやり

気付けなかったんだろう・・・

あやまらなくちゃ

魅音「わ私こそゴメン・・・

じゃあさ一つだけ聞いていい？」

隆「いいよ別に」

魅音「前・・・

東京で何やってたの？」

隆「うゝん何って言われてもなあゝ

あえて言うなら探偵？

でも母さんの手伝いでもあるかな」

魅音「どういう意味？」

隆「うゝん簡単に言えば

母さんって警部なんだけど

その母さんが解けなかった事件・・・

まあ密室殺人とか？世間一般で言う不可能犯罪  
ってやつを解いたってことかなあ」

魅音「へえなんか推理小説みたいだね」

って言ったらあわてて

隆「別に潜入捜査で来たんじゃないからね！

それに隠してた訳でもないから」

魅音「わかったわかった

そんじゃ皆のところへ行きますか」

それからしばらく祭りを楽しんだ

圭一 side

俺は今日一日楽しんだ

梨花ちゃんがやっていた

奉納演舞も無事終わり

この祭り最後の綿流しをするところだ

圭一「綿流しだな本当に」

レナ「体に付いてた悪いものを

綿が吸い取ってくれて

その綿を沢に捨てておしまい」

綿流しをやり辺りを見渡すと

いつの間にかレナがいなくなってた・・・

あれ？レナのやつ何処へ消えたんだ？

キヨロキヨロ見渡す俺

あつ富竹さんだ

圭一「富竹さん」

気付いたようだ

富竹「やあ圭一君

皆は？」

圭一「逸れちゃったみたいで」

鷹野「どうだった？圭一君

お祭りは楽しめた？」

だれだっけ？

圭一「まあ」

鷹野「そう・・・

これであなたも雛見沢の人間になれたんじゃないかしら？」

正直に答える

圭一「どうなんでしょうね

まだ俺の知らないこといっぱいあるみたいですし……」

富竹「雛見沢のことですかい？」

圭一「例えばダム工事のこととか……

雛見沢が水没するとかで大事件だったんですよね？」

すると富竹さんは答えてくれた

富竹「……ダムの計画が始まったのは七、八年くらい

前だったかな

この雛見沢からずっと上流くらいまでが沈むことになったらしい」

そんな大規模な

富竹「当然反対運動が起こった

裁判にもなったし

それに絡む不祥事や汚職も見つかった

ややこしい事になっているうちに

計画は廃止になった……」

話が途絶えたところで

あれを聞いてみることにした



圭一「あのくバラバラ殺人ってありましたよね？」

富竹「あつたよ

今からちょうど四年前の今頃だったかな  
あれもたしか綿流しの日だったね」

急に話しに入ってきた人がいた

鷹野「お年寄り達はオヤシロ様の祟りだつて  
疑わなかったみたいね」

ん？

富竹「雛見沢を水没させようとする  
ダム工事を守り神さまが罰をあたえた  
って事なんだろうけど」

鷹野「その後ね毎年起こるのよ」

圭一「起こるって何が？」

富竹「毎年綿流しになると  
誰かが死ぬんだ」

圭一「えっ毎年！？」

富竹「うん  
バラバラ殺人のあった翌年の綿流しの日  
雛見沢の住人でありながら

ダム誘致派だった男が旅行先で  
崖下の濁流に転落して死亡した  
奥さんは死体もあがっていない」

鷹野「さらに翌年の綿流しの日に

今度は神社の神主が原因不明の奇病で急死したの  
奥さんはその晩のうちに沼に入水自殺」

富竹「さらに翌年

これも綿流しの晩  
今度は近所の主婦が撲殺されていた」

疑問に思った

圭「主婦？」

鷹野「被害者の一家ってその二年前に転落死した  
ダム誘致派の弟家族なの」

あ然とする俺

富竹「そして五年目の綿流しがつまり・・・」

鷹野「今日なのよ」

思わず息を呑む俺

それからしばらくして  
部活メンバーが迎えに来て  
家に帰った・・・



【輝】晴れる疑心暗鬼（中編其の二）

昨日富竹さんから聞いた

話はシヨックだった

この雛見沢で起こった連続怪死事件

でもそれは俺にとって

何も関係のない話だと思っていた

そういえば隆は連続怪死事件のこと

知っているのだろうか・・・

時間は変わり今は部活中だ

魅音「犯人は梨花ちゃん

凶器は鋏

犯行現場は祭具殿！！」

隆「惜しいな魅音

犯人は当たってるんだけどな

凶器から間違ってるよ」

魅音「じゃあ凶器は？」

隆「毒物」

魅音「じゃあじゃあ犯行現場は？」

隆「医務室」

隆が言い終わるとレナが

推理ゲームのカードをめくった

レナ「本当だ〜」

「すごいよ隆くん」

梨花「毒物でじわりじわりがいいのです〜」

梨花ちゃん恐えこと言うなあ

魅音「流石名探偵だね〜」

いくら私でも本物の探偵君には勝てないかあ」

沙都子「本物の探偵ってどういう意味ですか？」

すると魅音は昨日知った経緯を  
教えてくれた

隆「あはははは

別に隠してたわけじゃないよ」

圭「へえ隆ってすごいんだな

ちよつとトイレ!」

魅音「ゆっくりウ〇チしておいで〜」

レナ「も〜魅いちゃん下品!」

ガラガラー

廊下へ出ると先生に呼ばれた

知恵「前原君」

お客様が来てますよ

昇降口へ行ってください」

先生に言われるがままに行った  
俺に客なんて珍しいな

すると昨日祭りで見かけた  
おじさんが待っていた  
俺を見つけると声をかけてきた

大石「前原さんですか

前原圭一さん？」

圭一「そうですね・・・  
どちら様ですか？」

俺が聞くとポケットから  
警察手帳を出して

大石「私の車はエアコンが効いてますから  
そっちでお話しましょう」

と言い刑事さんは車内へ行った  
俺もついて行った

圭一「で俺に何の用ですか？」

大石「この男性のことで

「ご存知の事があつたら教えてください」

一枚の写真を見せてもらった

圭一「これ・・・富竹さん？」

大石「ではこの女性は？」

もう一枚写真を見せてもらった

圭一「えーっと名前はわかりませんが

タベ富竹さんと一緒にいた女の人です」

俺が答え終わるとノックの音が聞こえた

大石「隆君じゃありませんか

家に行ってもいなかったんで

どうしようかと思つてましたよ」

するとドアが開き見慣れえた顔の人が入ってきた

隆「圭一その人は鷹野さんだよ

大石さん何か手伝いましょうか？」

大石「はいお願いします

じゃあ質問に戻ります

この二人に最後に会ったのはいつですか？」

圭一「えーっと昨日綿流しの晩

二人とお話をしました」

大石「なにか気になることとか  
ありませんでしたか？

何でも結構です  
話してください」

圭一「なんかあったんですか？」

隆「昨日綿流しの晩に死んだんだよ」

刑事さんが驚いている

大石「それ誰に聞いたんです！？」

内密にやっている捜査なんですよ！？」

隆「魅音です」

大石「やっぱり園崎家か」

隆「それは早いと思いますよ大石さん

あなたは園崎家の情報収集能力を過小評価しています」

大石「そうですね」

話を戻します

前原さんあなたは綿流しの夜に  
殺される意味わかりますか？」

意味って・・・

圭一「まさかオヤシロ様の祟り？」



「いったい何があつたんですか？」

大石「第一発見者は祭りの警備を終えて

帰宅中のうちの刑事でしてね

時刻はえーっと

二十四時五分前

場所は街へ出る道路がちょうど

舗装道路に変わるところ

街灯がほとんど無い道です

その暗闇のなかで路肩に倒れている

富竹さんを発見しましてね

地面いっぱい血と嘔吐物が広がっていました

検死の結果自分の爪で喉をガリガリと・・・

そして傷つけてはいけない

大切な血管にまで爪がとどき・・・

薬物を疑いましたがそういう類いの物は

検出できませんでした

ただ体にいくつもの外傷が見つかりましてね

何者かに暴行を受けた可能性があるので

それも複数犯の可能性が・・・」

隆「複数犯ですか・・・」

隆はグーを作り

その上に顎をのせ考えている

大石「死亡推定時刻は

二十一時から二十三時の間のようです

つまり前原さんとわかれてすぐに」

圭一「女の・・・鷹野さんはどうなんです？」

大石「行方不明です

事件に巻き込まれた

可能性が極めて高い

このままでは富竹ジロウさんは

オヤシロ様の祟りで死んだことに

なっけてしまいます

綿流しの晩

神聖な儀式の時

無神経にカメラで撮っていた

からオヤシロ様の怒りに触れた

そついう事になっけてしまいます」

圭一「そんな事で！？」

だいたい罰とか祟りとかで

人が死ぬなんて・・・」

大石「そついう事なんですよ

前原さん

祟りを信じていない

雛見沢の方の協力が必要なんです

なんでも結構です

不確かな物でかまいませんから

ああこれ私の電話番号です」

とつうて紙をもらつた

大石「今日ここで話したことは全て内緒です

特に園崎さん達には絶対に知られないように

してください」

え？

圭一「園崎って魅音の事か！？  
なんで？」

隆「大石さんはこの連続怪死事件の黒幕に  
園崎家に関わってると思ってるからさ  
でも大石さん先入観は間違った方向に向きやすいですよ  
そこるところ注意してくださいね」

大石「わかりました」

隆「あと鷹野さんの死体見つかりましたら  
教えてください」

大石「前原さん  
信じていい者は  
そこに居る隆君だけですよ」

隆「じゃあ僕は友達が無罪であることでも  
証明しますかねえ」

と言つて俺たちは車を降りた  
余程考えてる顔をしていたのだろうか？  
隆が声をかけてくれた

隆「大石さんはああ言っただけど  
オレは魅音を信じ続けようと思うよ」

そうかそうだな

圭一「サンキュ」

けど俺は帰ってから悩み続けた

-----

結局俺は一睡も出来なかった

きつと隆も同じだろう

目の周りに隈を作っている

授業は寝てたし昼食も寝ながらだった

魅音はバイトがあるとかで帰ってしまった  
と言うことで部活もなし

なぜだろういままで気にとめていなかった  
ロッカーに目がいった

・・・悟史？

誰だそれ？

圭一「なあレナやっぱりこのクラスからも

転校しちゃった生徒っているのか？」

レナ「うんいるよ時々だけど・・・」

圭一「悟史って奴も転校して行っただのか？」

レナ「ごめんよく知らないの

レナの転校と入れ替わりだったから

だからあんまりお話したこと無いの」

俺はなんか妙な違和感を感じ取っていた

今はレナと二人で下校中だ

隆とは途中で別れるから

圭「なあレナ

皆は俺に嘘や隠し事とか  
してないよな？」

レナ「してないよ全然」

圭「・・・嘘だろ」

さっきより小さな声でレナは言った

レナ「どういう意味だろ？圭くん」

圭「してるよな

俺に・・・隠し事を」

するとレナは俺が思ってもない  
反応を見せた

レナ「圭くんこそ

レナ達に嘘や隠し事してないかな」

えっ？

レナ「してないとは言わせないよ？」

圭一「してないよ

嘘も隠し事も」

レナ「ウソだよ」

圭一「嘘じゃ無いって！」

レナ「ウソだ！！！！！！」

後ろの木からいつせいに  
小鳥達が飛び立った

レナ「圭一くんにウソや隠し事があるように

レナ達にだってあるんだよ」

そう言い終わって

いつもの人懐っこい笑顔が見えた

レナ「行こだいぶ涼しくなってきたよ」

-----

家に帰ってから大石さんから電話があつた

内容は起こるオヤシロ様の祟りのことだった

実は毎年一人が死んで一人が行方不明になるらしいのだ

最初の年はダム現場の監督が死に犯人の一人が行方不明に

翌年はダム誘致派の男が死に妻が行方不明に

その翌年は神社の神主が死に妻が行方不明に

その次の年は近所の主婦が死にその子供が行方不明になっている  
しかも行方不明になった子供の名が

『悟史』

やっぱりレナ達は信じられない

そう思った・・・

【輝】晴れる疑心暗鬼（中編其三）

翌日俺は学校をサボった

俺はレナや魅音の顔を見るのが恐かったのだ

昼ごろ家の電話が鳴った

圭一「もしもし？」

大石「大石です」

前原さんですか？

今日は学校じゃなかったのですか？」

圭一「いえちよつと具合が悪くて」

大石「今話せますか？」

圭一「はい大丈夫です」

大石「昨日電話したあと

前原さんとよく遊ぶお友達グループを

少し調べさせてもらいました・・・

一年目の被害者は現場監督だったのですが

事件の数週間前に園崎魅音さんと取っ組み合いを  
しているんですよ」

魅音ならありえなくもないかもな  
たぶん・・・



大石『二年目の事件で誘致派の夫婦が

事故にあいましたよね

現場にはお嬢さんも一緒にいたんです  
それが北条沙都子さんなんです』

えっ！？沙都子が・・・

大石『三年目は神主の夫婦が

亡くなっていますよね

そのお嬢さんが古手梨花さんです』

梨花ちゃん？が・・・

大石『四年目に亡くなった主婦は

北条沙都子さんの義理の叔母です  
当時沙都子さんはご両親を失って  
預けられていたんです

ちなみにその年に失踪した

北条悟史さんは沙都子さんの

実の兄にあたります』

俺は言葉を失った

それをかまうことなく

大石さんは言った

大石『連続怪死事件の被害者は

なぜかあなたのお友達グループに  
全てつながります』

圭一「そうだレナは違いますよね？

だつて去年茨城から来たんだから」

大石『実は調べてみたら

竜宮さんは引越す少し前に  
学校で謹慎処分を受けているんですよ』

へ？レナが？

大石『何でも学校中のガラスを  
割って回ったんだとか』

圭一「・・・レナが・・・ですか？」

大石『その後

精神科へ通院し  
投薬とカウンセリングを  
受けています』

圭一「神経科って」

大石『その医師のカルテにレナさんの

会話内容が記載されているんですがね

そこに出てくるんですよ

オヤシロ様って単語がね

それが夜な夜な枕元に立って

自分を見下ろすんだって

その後しばらくして雛見沢に

引越されたんです』

圭一「なんでよそ者のレナが

知ってるんです？  
オヤシロ様を」

大石『レナさんはよそ者なんかじゃないですよ  
住民票でわかったんですが  
竜宮一家はもともと雛見沢の住民です  
レナさんがちょうど小学校へあがるときに  
茨城へ引越したんです』

圭一「じゃあ富竹さんは？  
どうなんですか？  
誰と接点が？」

大石『全員ですよ  
お忘れですか？前原さん  
なぜか被害者は全員あなたのお友達に  
接点があるんです』

圭一「じゃあ隆は？隆はどうなんです？」

大石『彼は人を二回傷つけています  
しかも一回は弟です』

圭一「えっ!？」

大石『安心してください  
弟を拳銃で撃った時は助けるために撃ったんです』

????

圭一「どういう意味ですか？」

大石『弟がある事件で人質になった時のことです

隆君はとっさの判断で

弟の足を撃ちました

人質をとって逃げようとする時に

人質が走れないと

それって結構困るんですよ

犯人にとっては・・・

という事で犯人は

隆君の弟を置いて逃走

間のなく犯人は捕まりました

弟は銃弾で受けたかすり傷

だけで無事保護されたようです

使った拳銃はコルトM1917です』

圭一「もう一回の方は？」

大石『七億円強盗殺人って覚えてますか？』

俺はいきなり話を振られ

反応が鈍かった

圭一「あつとえーつと

はい覚えてます」

大石『あれ実はほとんど隆君一人で

片付けちゃってるんですよ』

え！？

その事件は一時期  
そればかりニュースでやっていた

大石『まあ詳しいところは言えませんが

あの事件組織による計画的な犯行だったんです

それでSAPと協力して解決したんです

その時に相手に真剣で傷つけたんです

まああれは正当防衛だったんでしょがね』

圭一「なんで・・・俺に話すんですか？」

大石『前原さん・・・

危ないのはあなたなんですよ』

ピンポン

ドアを開けた

そこには

魅音「具合はどう？」

圭一「あっああ」

レナ「元気そうで良かった」

心配してたんだよ」

圭一「悪かったな」

魅音「まだ本調子じゃないみたいだねえ」

良かった魅音もレナも普通じゃん

圭一「そっそうか？」

レナ「これ魅いちゃんのお婆ちゃんが  
作ってくれたお萩だよ」

圭一「さサンキュ」

レナ「その中にね一つだけ

レナが作ったのがあるんだよ

圭一くんに見つけられるかな？」

魅音「これ部活を欠席した

圭ちゃんの宿題！

お萩にアルファベットが

付いてるから

明日回答すること」

圭一「お前らお見舞いなのか

部活なのか

どっちかにしろ！」

魅音「おゝ元気になったね？」

これなら明日は大丈夫そうだね」

レナ「魅いちゃんもう行こう

あんまり騒いだら悪いよ」

魅音「そうだね

あっそうそう圭ちゃん」

圭「なんだよ」

空気が急に冷たく

そして重くなった・・・

魅音「明日学校休んじや嫌だよ」

と言に残し帰って行った

居間に戻った

確か宿題とかって言ってたよな  
どれから食べよう

・  
・  
・

A・B・C・Dと食べた

どれも変わらなく美味しかった

圭「最後の一個か・・・」

俺は眩き景気付けに一口で食べた  
何か異物が入っていた

・・・針？

きつと昔の関係なら

笑って誤魔化せただろう

しかし今は違う

俺はいつ殺されてもおかしくないのだ

俺はブルブルと振るえながら

布団へ潜った

潜って考えた

俺はどう自分の身を守るか

そして俺は答えを出した

なるべく魅音やレナ達と居ないこと

学校に金属バットがあるはずだ

それを護身用に使う

針のことは隆や大石さんに伝えるべきだろうか

それはタイミングを見計らっていう事にする

よし今日はもう寝よう

明日からの戦いに向けて・・・

翌日

俺は朝一番に学校へ行った

そう金属バットを手に入れるためだ

そして素振りをしておけば

尚良い

俺は今素振りをしている



すると魅音とレナと隆がやってきた

魅音「あつ圭ちゃん！

先に行つたつて言われて

ビックリしてたけど

何やつてるわけ？」

圭「見てわかんねーのかよ

素振りだよ！

甲子園だよ！」

レナ「甲子園？」

魅音「まあ頑張つて」

と言うと二人は逃げるように  
去つていった

隆「護身用か？」

圭「ああ」

隆「なんかあつたのか？」

圭「ああ」

隆「もうそろ時間だから  
行こうよ」

圭「ああ」

学校も終わり

俺は一人で帰っていた

俺の五感は今マックスに使っている

絶対誰かが後ろに居るのだ

尾行しているのだ俺のことを

圭一「なんか用かよ!？」

俺は振り向きながら言った

そこにはレナが居た

レナ「別に・・・」

圭一「部活はどうしたんだよ？」

レナ「だって圭一くんのこと

心配で・・・」

圭一「もうついて来るなよ」

レナ「きつ聞いても良い？」

はあ？何を

レナ「なんでバットまで同じなの？」

何言ってるんだ？

レナ「だからなんでバットまで同じなのかな?」って

圭「何言ってるんだか  
全然わかんねーよ!」

レナ「だからどうしてバットまで  
悟史くんと同じなのかな?」って

悟史「って・・・」

圭「ちょっと借りたんだよ」

レナ「そんなことじゃないの!」

ええ?

レナ「悟史くんの時となんで  
どうしてどうして  
そんなにまで同じなの!」?

何が同じって?

レナ「なんでこんなにも  
同じ行動をとるの?  
やっぱり圭くんも  
悟史くんみたいに  
悟史くんみたいに・・・」

圭「だからなんだよ!」?

またこの間みたいに空気が  
冷たく重くなった

レナ「転校しちゃうのかな？

でm」

カナカナカナカナカナナ・・・

家に帰ったら

手紙が置いてあった

内容は東京に行くから

今日は帰れないそうだ・・・

どうしよう

その時電話が鳴った

圭一「もしもし？」

隆『圭一？オレだけどさ』

しばらく他愛もない会話が進んだ

圭一「あのさ」

そして俺は今親が居なく

困っていることを伝えた

隆『んじや家来いよ』

俺は学校の道具とバットを持って  
制服のまま急いで家を出た



【輝】晴れる疑心暗鬼（後編）

いままであったことや

大石さんに教えてもらったこと

今俺が考えてる事を

隆に話した

隆「という事は

圭一は魅音たちに

脅迫されていて

容疑者は村人だって

考えてるんだね？」

俺は頷き肯定した

隆「わかったよ

でもね圭一

圭一にも知られたくない事

あるんじゃない？」

それと同じで

オレもあまり知られたくない

過去を持つているんだよ

まあ圭一には知られちゃったけど

だからさ魅音やレナは知られたくなくて

黙ってたんじゃないかな？」

梨花や沙都子は

昔の嫌な事を思い出したくないからじゃない？」

教えないといけないものと

教えなくても良いものがあるからね」

そして今日は

俺は隆の家に泊まった

・  
・  
・

翌日隆は魅音たちと行くから

俺は一人登校し

素振りをやっていた

しばらくして三人がやってきた

魅音「圭ちゃん！

おはよ〜」

圭「ああ」

魅音「圭ちゃんって

野球好きだったっけ？」

圭「ほっとけ」

魅音「・・・やめてよ

素振り！」

俺は素振りをやめた

圭「なんか用かよ？」

魅音「やめてよ素振り」

圭一「やめてるだろ」

レナ「そうじゃなくてね

明日からしないで素振り」

圭一「なんでだよ？

誰にも迷惑かけてないだろ！？」

つて言ったらレナの奴は  
校舎に入ってた

魅音「そのバット人のだよ？」

圭一「転校して行った奴の

忘れ物だろ！？」

・・・変わってるよな

兄貴は転校して

妹は転校しなかったんだろ？」

魅音「知ってたの？」

圭一「去年鬼隠しにあったんだろ？

悟史もやってたんだってな

素振り

それも失踪の直前に

これってさ祟りに遭う

前兆なのか？」

魅音「とにかく皆恐がってるんだよ！



悟史のマネならもうしないで！」

圭「俺は自分で考えてやってるまでだ

悟史のことは何も知らなかった

皆が隠していたからな

話すべきことなのに

ダム工事でなんか遭ったのか？って

聞いたよな

お前はなかったと言った

お前は嘘をついた

教えなくてはならないことを隠した

だからお前は仲間じゃない！！」

隆 side

魅音が泣いてる

確かに魅音にも悪い部分はあった

けど圭一も言い方って物があると思う

圭一「そうだ

見舞いのお萩うまかったぜ

血が出るくらいにな

針仕組んだのはどっちだ？

魅音か？！レナか？！」

魅音「・・・私」

隆「針い！？」

オレはビツクリした  
そんなの聞いてないぞ

隆「魅音・・・

針は悪ふざけの

度を越えてるよ

連続怪死事件・・・

隠していたい気持ちも

分からなくもないけど・・・

魅音謝りなよ」

魅音は頷き

魅音「ごめんね圭ちゃん

もう隠し事とか絶対にしないから

それにお萩のことごめん」

隆「な？許してやれよ

圭「

圭「ああ

もうそろ授業だろ？

行こうぜ」

そのときオレは

いままで漠然としていた

疑問が形になっていく

そんな感覚になっていた・・・

帰り道

圭一もレナも先に帰ってしまった  
今は魅音と二人だ

隆「オレが思うに

圭一は精神的に辛くって

誰も信じれないんだと思う

だからさ

なるべく普段しない行動は

あまり取らないでほしいかな」

魅音「うん・・・

分かった

今朝はありがとうね

じゃねー」

そして家に着いて

少し経ったところ

レナから電話がかかってきた

内容は圭一が倒れたから

圭一の家へ来てほしい

ということだった

オレは急いで圭一の家へ向かった

オレが着いた時には

圭一は目が覚めていた

隆「何処か痛むのか？」

圭一「頭が・・・」

相当痛いんだろう  
かなり顔が歪んでいる

レナ「横になっていた方が  
良いと思うよ」

隆「後で事情は聞くからさ  
今は寝てなよ」

するとチャイムが鳴り  
人が階段を上がってくる  
物音がした  
それは魅音だった

魅音「あれえ？元気そうじゃん  
心配して損したかな？」

よしよし  
普段通り普段通り

魅音「レナ監督には  
連絡した？」

レナ「うんしたよ  
そしたらすぐ来るって」

圭「監督ってなんだよ」

魅音「監督は監督だよ」

圭一「だから監督って誰だよ!？」

レナ「監督さんだよ」

圭一「だから監督って誰なんだよ!？」

隆「野球の監督だよ

その人が医者もやってるんだよ」

圭一「そう・・・なのか」

危ない危ない

圭一が暴走する

一歩手前だったな

魅音「そつだ監督が来る前に

済ませておくかな

罰ゲーム」

圭一「罰ゲーム?」

レナ「お萩の罰ゲーム」

レナはそう言い

圭一を羽交い絞めにした

魅音はマッキーをもって

圭一に近づいていく

圭一「何のマネだよ?!」

ん? 圭一の様子が  
明らかにおかしい  
まるでこの世の物ではない  
何かを見るみたいに

あっ

分かったぞ

圭一はあのマツキーが  
他の何か恐ろしいものに  
見えているんだ

圭一は今

疑心暗鬼に陥っている  
オレは力の限り叫んだ

隆「魅音ストップ!」

魅音はキョトンとしている

隆「魅音そのマツキー

貸して」

魅音はいいよと言いい  
オレに投げて渡した  
そしてオレは  
なるべく落ち着いた  
口調で圭一に  
話しかけた

隆「圭一

オレの持っている物  
何に見える？」

魅音とレナは

キョトンとしている

圭一「注射器だろ？」

富竹さんに打った薬

そうなんだろう！？」

隆「よく見るよ圭一

これは何だ？」

すると圭一はオレの持った物を

睨みつけ

しばらくして

圭一「マツキー？」

隆「そうだよ圭一

マツキーだろ？」

圭一「なんでマツキーが

注射器なんかに見えたんだ？」

隆「圭一は先入観にしてやられたのさ

お前は殺されると思っていただろ？」

だから見えないものが

見えたんだよ」

圭一は黙っている

隆「気づいたか？」

圭一「ありがとな隆

きつとお前が居なかったら

俺はこの二人を殺してたと思う」

よかった気づいてくれた

隆「おめでとう圭一

これでお前は疑心暗鬼という物に  
勝ったぞ」

ポケーっとしている二人を  
置いというてオレたちは抱き合った

・  
・  
・

それからしばらくして

監督が来た

圭一の頭の傷は打撲程度で  
済んだらしい

魅音とレナには

圭一がああなつた経緯を伝えた  
二人ともビックリしていた

まあ結果オーライで



『めでたしめでたし』かな？

## 【輝】安堵感

私は安堵した

そして次の恐怖と対峙している

しかし慣れないものね

何度やっても

失意のまま死んで逝くってものは

今私は殺されている

真っ最中なのだ

そして私は死ぬ直前で

全ての謎を思い出した・・・

そうだったのね

鷹野が犯人だったのね

-----

さっきの世界で

隆の活躍は凄かったと私は思う

圭一が疑心暗鬼にかかった世界で

疑心暗鬼を解けた世界は

今までに無かった

次の世界では

昭和58年6月を巡る

ゲームに彼だけには

参加してもらおうかしら・・・



## 【輝】あれから

あの世界からいくつもの世界を渡った  
そうあなた達も知っている  
あの世界

あれからも何度も私は死に  
そして生き返った  
別の世界に

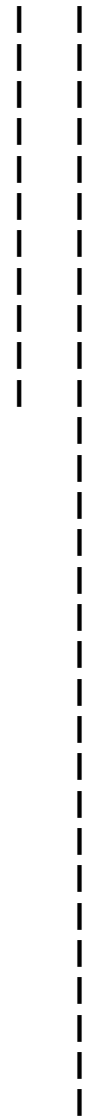
次の世界では私のいや・・・  
皆の救世主となるものが現れるのだろうか？  
出来るものならあの人に来てくれたら

ああ私は運命と戦うようになってから  
とても時間が長く感じる  
神頼みなんて普段しないのだけれど・・・  
どうしても神様に頼みたくなる

・・・ダメだったわ  
いつも『あうあう』言ってる  
シュークリーム大好き神様なら

あうあう僕はそんなに頼りないのですか？  
ええ傍観しているだけなら  
今までと変わらないじゃない  
私のいる前と

そう・・・  
ですね・・・



昭和58年6月

またこの季節がやってきた  
今までの世界で学んだことは  
運命は打ち破れると言うこと  
ただそのためには皆の気持ち  
一つにならなくてはならない  
だから僕は傍観者であることを止める  
僕は僕にそう誓った

【輝】対決（前編）

魅音「起立！！礼」

全員「あはようございます」

魅音「着席！！」

今日は昭和58年6月10日なのです

知恵「今日は皆さんに新しいお友達を  
ご紹介します

転校生の古手羽入さんです」

あうあう呼ばれましたのです

羽入「古手羽入なのです

どうかよろしにゆ

よろしきお願いしみますのです」

恥ずかしいのです

洸太「梨花と同じ苗字だな」

梨花「みいボクの遠縁の女の子なのです」

沙都子「私もビックリしてますのよ  
梨花に親戚が居たなんて」

魅音「私も驚いたよ」

レナ「はう」

かぁいいよ

おんっもちかえりい」

僕はいつの間にか

お持ち帰りされてしまったのです

知恵「竜宮さん！！いきなり

転校生をお持ち帰りしてはいけません！！」

カランカラン・カランカラン

梨花 s i d e

今は休み時間

魅音「んじゃ！

彼女の本質に迫る

ディープな質問にズバリ行ってみよう！」

魅音のやりたがりそうな事ね

岡村「ああのゝえーっと

好きな食べ物は何ですか？」

羽入「甘いお菓子はみんな大好きなのです

一番好きなのはシュークリームなのです」

富田「あつあの豆腐は好きですか？」

羽入「はい好きなのです

あとおからや厚揚げも好きなのです」

富田「それじゃあ今度持つてきますね」

魅音「さあゝ次の質問は誰かな？」

無いなら私下着の色とか聞いちゃうよ」

羽入「あうあうゝ」

バシッ

隆の手刀が魅音の頭に直撃した

隆「それはかわいそうじゃないかな

魅音だつて聞かれちゃ嫌だろ？」

すると突然かぁいいいモードに入つた

レナが暴走した

魅音「こらそこ脈絡の無い行動をとらなゝい」

-----

鈴木「へえ梨花ちゃんのお家に住んでるんだ」



富田「好きな科目は？」

不審な目で羽入を見ている  
二人が居た  
そして耳打ちをして分かれた

レナ「なんだか嬉しいね」

圭「お持ち帰りメニューが増えたからか？」

レナ「あつはは

それもあるけど  
あの子たまに見かけてた  
気がするの」

レナは気が付いて居たんだ

レナ「羽入ちゃんはすぐそばで  
私達が遊んでいるのを  
ずっと見ていた気がするの  
でも見ているだけで  
なかなか仲間に入れなくて  
だからね  
今は仲間になれて良かったなって  
そう思うの」

梨花「レナは本当に優しい人なのです」

レナの顔には？マークが飛んでいる

梨花「ボクからお願いがあるのです

どうか羽入と仲良くしてほしいのです」

圭「当たり前だろ？」

レナ「うん」

二人の言葉を聞いて  
私も笑顔になった

レナ「という訳で」

レナはまた暴走した

-----

カランカラン・カランカラン

魅音「ただいまより

本日の部活を開始する」

ガラガラガラー

レナ「あれ？羽入ちゃん！」

魅音「どうしたの？

なんか忘れ物？」

羽入「そのあうあうあう

り梨花あ」

梨花「ボクは何も言いませんです

羽入がそうしたいのなら

自分のお口で言うといいのです」

羽入「ばば僕も部活に

混ぜてもらいたいです!!」

私以外全員が同じ反応を見せた

全員「えっー!?!」

梨花「よく言えましたのです

パチパチパチ」

魅音「こりゃ飛んだ命知らずが居たもんだよ」

圭「たしかに」

羽入「覚悟の上なのです

これまでの僕は負けるのが嫌で

全ての勝負から逃げ出していたのです

逃げることは負けることにすら劣ること

負ける痛みに挫けず戦い続けなければ

勝つことは出来ないと・・・

僕の好きな人たちが教えてくれたのです」

・・・  
羽入あなた

魅音「よし良いだろう」

それじゃあ今日は入部試験  
トランプのジジ抜きで  
いざ勝負！

言つとくけどこのトランプは  
使い古しでね

みんな裏についた傷を  
覚えてるから

どれがどのカードか  
だいたい分かるんだ

新人にはちよつと

ハードルの高いゲームだよ」

羽入「はっはいなのです！」

・  
・  
・

結果から言つと圭一が負けた

それは隆が羽入に助言をしたからでもあり

魅音が圭一の手札をばらしたからでもあった

-----  
-----  
-----

圭一「やっぱり何度着ても

恥ずかしいもんは恥ずかしいぜ」

魅音「文句を言わずにキリキリ歩く！」

羽入「圭一とってもお似合いなのです」

圭「見てろ！明日こそお前に着せてやっからな！」

隆「ははっ無理だって圭一なら」

羽入「僕もいつぺんくらいなら着てみたいのです」

洸太「軽くあしらわれてるし」

とうとう圭一が怒ってしまった

圭一「ムカー！！」

梨花「羽入もしっかり

仲間に溶け込めたのです」

圭一「そうだな今日転校してきたばかりなのに  
ずっと前から一緒に居た気がするよ」

梨花「そうなのです

ずっとボク達のそばに居ましたのですよ」

洸太「へ？」

梨花「にぱ」

すると悲鳴が聞こえてきた

魅音「大丈夫？」

沙都子「羽入さんが落っこっちゃったのですの」

魅音「行ってみよう」

隆「ああ」

皆で崖を下っていった

圭一「羽入っ！」

そこには富竹と鷹野が居た

圭一「富竹さんに鷹野さん！」

富竹「やあ

圭一君またゲームに負けたのかい？」

圭一「あ！俺の事はどうでもいいです

羽入は？」

鷹野「大丈夫

ちよつと目を回しているだけよ」

富竹「ビックリしたよ

急に崖から女の子が落ちてきたからね」

羽入「あうっ」

目覚めたのね

皆に安堵の空気が流れた

魅音「羽入」

レナ「大丈夫？」

羽入「面目ないのです」

鷹野と富竹を見て驚いている

梨花「心配ないですよ羽入

そちらは富竹と鷹野

怪しい人ではないのです」

鷹野「あなたが新しい転校生

羽入ちゃんね？

ここ最近転校生が多いわね」

今は夜中

少し肌寒いけど外にいる

梨花「信じられないわ

鷹野が全ての黒幕だったなんて」

羽入「僕も鷹野の顔を見るまで

何もかも忘れていたのです

でも間違いないのです

梨花を殺そうとしているのは

鷹野と山狗達なのです」

洸太「何それ？」

！？

梨花「どうしてここにいるの?!」

隆「いやぁ好奇心ってやつ」

草陰から隆も出てきた

隆「じゃあ聞いてくれるかい？」

羽入「何をなのですか？」

隆&洸太「君は何者なんだい？」

梨花「何のことだか

さっぱりなのですよ」

子供の口調に直した

ただど彼らの言っていることは  
さっぱり分からない

隆「単刀直入に聞くよ

羽入・・・

君は誰？」

羽入「僕は僕なのですよ」



隆「住民票は？」

羽入「????」

洸太「いままでの君のデータが

一つも無いんだ」

隆「つまり羽入はこの世界に

存在していなかった事になるってわけ」

私が言えた事は一言だった

梨花「どういう意味なのですか？」

隆「簡単に言くと梨花に親戚なんていない

だから遠縁の女の子って言うていたけど

それは違う」

洸太「沙都子が親戚がいたことにビックリしていた

だけどそれは不自然なことになる」

隆「あの後羽入は富田や岡村達に聞かれたよな

何処に住んでいるか？って

羽入は梨花の家って答えた

そしたら沙都子には自分の素性は話すんじゃないかな」

洸太「これは推理に過ぎないんだけど

羽入は今日の朝突然

何処からか湧き出てきた存在ってなるんだ」

私達は今まであつたすべての事を話した  
何度も死んだことなども

しばらくは納得出来ずにいた様だった  
がとりあえず信じてもらえた

隆「じゃあ梨花と羽入に話してもらったから

次はオレがここににいる理由を聞いてもらうよ」

洸太「等価交換ってことでね」

隆「オレはある事件で関わった組織に命を狙われている

だから護身用に

ホラッ」

手の平に収まるくらいの拳銃を見せてくれた  
そして隆はこう呟いた

隆「呪われた拳銃・・・

デリンジャー」

【輝】対決（中編其の一）

私は素に戻って聞いた

梨花「デリンジャーって何」

隆「リンカーン大統領暗殺に使われた拳銃  
まあ隠し持ちしやすいから  
オレは持つてるんだけどね」

隆は真面目な顔になり私達に聞いた

隆「これを聞けば本当に命を狙われる  
ことになりかねないよ  
それでも聞ukai?」

私と羽入は頷いた

隆「わかったじゃあ君達に関係のありそうな  
事だけ教えよう  
オレと洸が追いかけている  
組織いや部隊と言った方が良いのかな?  
その名前が」

洸太「地獄犬だよ」

私は息を呑んだ  
なんとなくわかってしまった

羽入「あうあう」

羽入もそうなのだろう  
気づいてしまったのだろう

隆「山狗は諜報や情報収集を専門にしている  
その上の番犬は戦闘・戦術専門  
地獄犬は」

心地の悪い風がサァーっと吹いた

隆「暗殺専門」

洸太「さっき命を狙われているって

兄貴が言っただけ俺は狙われてないと思  
うんだよな

狙われてたらもう死んでると思うよ」

隆「はいはい」

私はふあゝっと欠伸をした

羽入「いいですかこの事は秘密なのです  
皆に知られてはいけないのです」

隆「分かったけどさ園崎家にある  
武器くらいほしいよな」

梨花「武器？」

隆「ああ調べただけど

武器庫にはVz・61スコピオンや

StG44とかM16A1

AK-47があるんだ」

よくそこまで調べたわね

羽入「今日はもう遅いのです

もう寝ますですよ」

私達は別れた

-----

梨花「緊急マニュアル34号」

今は入江に相談があると言って

放課後の学校の保健室にいる

入江「ええ

物騒な話なので今までお話するのを

躊躇っていたのですが・・・

万が一女王感染者つまりあなたが急死された時に

緊急マニュアル第34号というものを適用されます」

梨花「それが適用されるとどうなるの？」

入江「村人の集団錯乱が発生する前に

全員を処分するというとても恐ろしい対応です

雛見沢は閉鎖され

毒ガスか何かで住民を皆殺しにするというものです」

私は絶句した

梨花「知らなかったわ

もう一つ教えて

もしそうなった場合

鷹野三四に何か得をするという事はある？」

入江「えっ？」

梨花「何らかの理由で私を殺そうとする理由は無い？」

入江「っ？！考えられません

雛見沢症候群の研究は三年後に打ち切られる予定です

鷹野さんとしてはそれまでに

なんとしても病気の真相を

解き明かしたいと願っているはずで

そのためにも」

梨花「でもどうせ打ち切られる研究なら

盛大にテーブルをひっくり返してしまう

という考え方はありえないかしら」

入江「うつ・・・鷹野さんなら確かに

いやしかしいくらなんでも」

私は入江に礼を言い

保健室を出た

するとそこには心配顔の  
皆の姿があつた

沙都子「梨花！」

圭一「監督に相談つて体調でも  
悪いのか？」

私は考えてあつた嘘を話した

梨花「何でもないですよ

漫画の相談をしていたのです」

全員「漫画？」

梨花「実は今

漫画を描いているのですよ  
でもネタに困つたので  
入江に相談していたのです」

沙都子「梨花が漫画だなんて

ちつとも知りませんでしたわ」

隆と洸太はもう嘘だと言う事を  
気づいているみたいだ

魅音「もし良かったら

私達も相談にのるよ  
ねっ隆ちゃん」

隆「ああ」

隆はまだ釈然としないみたいだった

梨花「ぜひよろしくなのです」

皆で教室へ移動した

今私が置かれている状況と  
同じ漫画の説明をした

圭「なるほど」

女王感染者が死ぬと村が滅亡してしまうのか」

レナ「裏には東京っていう

秘密結社がいるんだね」

梨花「困っているのは悪役の設定

つまり女王感染者を殺して

その悪役がどんな得をするのか

それが決まらないと

お話の筋が通らないのです」

魅音「そんなの全然簡単じゃん」

隆「そうだね」

魅音「村が壊滅することで

得をする奴がいればいいんだよ」



洸太「責任をとることになる人が出てくる  
それを望む対抗勢力がいれば良いんだ」

魅音「そういう事」

隆「派閥争いとかね」

梨花「どういうことなのですか？」

魅音「東京の中にAという派閥とBという派閥があるとする  
村が壊滅するなんて不祥事が起きたら  
Aの派閥は責任を問われて勢力を失う  
それを狙ってBの派閥がその悪役に女王感染者を  
殺すように働きかける  
どうだい？これでキレイに筋が通るだろ？」

圭一「なるほどなあ」

梨花「それじゃあ  
その陰謀に立ち向かう女の子は  
どう戦えば良いのですか？」

隆「そうだな

地理に強い仲間と

接近戦に強い奴

狙撃などの遠距離戦に長けている者

トラップが使える奴

そして出来れば情報収集・管理・処理が  
出来る奴がいれば大丈夫だな」

洸太「この部活メンバーがいれば

大丈夫だよ

地理は圭一以外大丈夫だし

接近戦は沙都子と梨花以外大丈夫そうだし

狙撃ならここに650ヤード先の物を正確に撃てる奴もいるし

トラップは沙都子の専門だろ

情報に関しては俺が出来るしさ」

隆「という訳で本当のこと話したら？」

魅音「本当のことって？」

洸太「漫画の話じゃないってことさ」

圭一「漫画の話じゃない？！」

レナ「そんなことってあるの？」

隆「現実には小説よりも奇なりって事さ」

洸太「手伝ってくれるかい？」

魅音「もちろん！」

圭一「でも本当の話なんだろうな

たちの悪い冗談だったら起こるぜ」

ここでやっと羽入が口を開いた

羽入「嘘じゃないのです！」

梨花「皆を巻き込んでしまつて

申し訳ないと思つていますです」

沙都子「何も言つてもらえない方が

申し訳ないですわよ

ねっ圭一さん！」

圭一「えっおおっ!!」

沙都子の言う通りだぜ

ちつとばかり話が大きすぎて面食らつちまつたが  
皆内心では面白くなつてきてたと思つてゐるだろ？

沙都子!!

お前もこういうのを待つてたんじゃねえのか  
思ふ存分手加減なしでトラップの腕を振るえるチャンスだよ！」

口先の魔術師・・・

降臨したわね

沙都子「をーほっほっほっほ!!」

その通りですわ

普段仕掛けてゐるのはほんの子供だまし

難見沢の地理を知り尽くした本気モードのトラップは  
軍隊でも通用しましてよ！」

圭一「レナ!!」

お前だつていざとなつたら容赦なく  
物騒な真似が出来るだろ」

レナ「そんなこと無いよ」

圭一「普段はおっとりしてるけど

ここ一番では絶対屈しない強さを持っているからな」

レナ「圭一くんこそ

どんなに絶望的な時だろうと  
負けない強さを持つてるよ」

羽入「圭一が紅く燃える炎なら

レナは蒼く燃える炎なのです」

圭一「そういう羽入！！

お前も転校してきたばかりなのに  
俺達のことを良く見抜いてるじゃねーか」

羽入は褒められ爆発した

魅音「流石圭ちゃん

あつという間に雰囲気を変えちゃったね」

圭一「おう！こいつは俺達の祭りだ

一丁馬鹿でさえ花火を打ち上げてやろうじゃねえか」

全員「おー！！」

うれしい

まさか皆に信じてもらえるなんて

皆成長しているのですよ

過去より現在

現在より未来へと

-----

場所を移して魅音の部屋

魅音「状況を整理しよう

梨花ちゃん沙都子羽入はしばらくの間  
ここに身を隠す」

梨花「その間は赤坂に留守を頼むのです  
夜も電気をつけてくれるのです」

圭「でも一人で大丈夫なのか？」

隆「いくら公安部の奴でも危ないんじゃない」

羽入「大丈夫赤坂はとっても頼もしい人なのですよ」

魅音「赤坂さんはどちらかと言うと

緊急時の防御役

むしろ今大事なのは富竹さんと洸ちゃんの方だね  
二人が証拠を見つけてくれなくちゃ  
敵の悪事を暴くことが出来ないんだから」

羽入「富竹は興宮のどこかに隠れて

信頼できるお友達に調査してもらっているのです」

洸太「俺は警視庁にいる母さんと秘密の友達に

調査してもらってる

俺でも出来るんだけど

今はここにいて戦う事にするよ」

梨花「鷹野の悪事が見つかれば山狗より強い

番犬が動いてくれるはずなのです」

圭「敵に揺さぶりをかけられねえかな」

## 【輝】対決（中編其の二）

洸太「出来るよ」

全員「えっ？」

洸太「デマを流せば良いんだよ」

魅音「どういう？」

洸太「梨花が死んだってね」

圭一「そんな事できるのかよ？」

洸太「出来るよ」

情報戦は俺の得意戦術だからね」

今のところ全てうまく行っている  
皆に話す前に入江や富竹赤坂に話しておいて  
正解だったと思う

魅音「んじゃこの作戦をこの時から

48時間作戦と呼ぶ！！」

-----

時は流れて二日後の  
綿流しの祭り当日

現在午前4時  
作戦開始

入江診療所地下

『小此木「いつたいたいどうなってるんだ?!  
正確に情報を伝えんか!」

隊員A「目標宅の状況を伝えろ」

小此木「興宮署にはだれもいないのか?」

ガチャ

小此木「お休みのところ申し訳ありませんね」

鷹野「状況は?!」

小此木「午前4時15分  
警視庁で身元不明死体が目標であるとの  
情報が入りました」

鷹野「そんな訳ないでしょ?!  
梨花は風邪で寝込んでいるのよ?!」

小此木「しかも報告によれば  
死後48時間以上経過しているとか」

鷹野「そんな事ありえない  
だったら村人はどうなの?



誰か発症した？」

小此木「その様子はありません」

鷹野「おかしいじゃない！

早ければ36時間の段階で末期症状が出ているはずよー！」

小此木「しかし警視庁に配備されている諜報員によると  
かなり確実性の高い情報だと」

鷹野「ふざけないで！

そもそもどうして梨花が東京にいるのよ！  
古手梨花の監視は？」

隊員B「変化ありません」

小此木「監視体制は厳重です  
中にいた事は入江所長が確認済みです」

鷹野「ならどういうことよ！」

小此木「分かりません」

隊員C「東京の野村様からお電話が  
入っています」

鷹野「もう嗅ぎつけたの？  
すぐ死体を調べなさい」

ボタン

小此木「目標が家にいるのか?!」

隊員D「家に誰がいることは間違いありません」

小此木「馬鹿やろう! 目標かどうか

分からなかったら意味ねえだろうが!

クソツ! 許可さえあれば突入できるのに」

隊員E「隊長! 今日祭りの日です

突入は今夜の深夜まで不可能だと」

小此木「上手いタイミングだな

いや・・・上手過ぎねえか」

隊員E「まさか」

小此木「これは敵からの宣戦布告だ

こちらが動く前に先手をとられたんだ

相手は何者だ?

戦略も上手いし情報戦にも長けている

ハッ!? 雲雀を集める! 大至急だ!」』

全員「あっはっはっは」

魅音「いやゝ笑えるね

傑作だこりゃ」

状況を説明しよう

発信機と盗聴器を小此木に付けておいたのだ

圭「相手は何者だ？だつてさ」

隆「ホントだよね」

『小此木「東京の烏に連絡をとれ

こつちの情報が漏れてるぞ」』

-----

入江side

今現在午前9時を回ったところ

富竹さんが運ばれてきた

私は赤坂さんとの約束を思い出した  
電話をしなくては

私は電話をかけて車で

魅音さんの家まで飛ばした

しかし山狗に追われている

パン

タイヤを狙撃され

パンク崖へ車ごと落ちたのだつた

今捕まるわけには行かない

今はまだ・・・

――  
――  
詩音 side

私は久しぶりの帰郷の最中です

葛西「詩音さんご機嫌ですね」

詩音「だって一年に一度のお祭りですよ  
お姉えをどうおちよくろうか  
楽しみじゃないですか」

葛西「はあそうですか」

目の前に人が立っていた  
あれは監督ですね

詩音「監督！

まさかあれ監督の車ですか？」

入江「し詩音さん」

葛西「大丈夫ですか？  
すぐに病院に」

入江「診療所は困ります  
園崎家に行かないと」

どうして？

入江「うっ」

詩音「監督！」

葛西「詩音さん

訳ありのようです

入江先生の車に弾痕が」

マジ？

詩音「ひとまず本家に連れて行こう」

私達は監督を連れ  
本家へと急いだ

魅音 side

レナ「魅いちゃん車が入ってきたよ」

魅音「これは葛西さんの車だね

たぶん詩音でしょ

今日の祭りに合わせて遊びに来たってところでしょうね  
まったく空気読めない奴」

レナ「あれ？」

沙都子「監督！」

私達中学生組は外へ向かった

魅音「監督！」

入江「すみません

富竹さんが山狗に捕まりました

私は奴らに追われて事故に」

隆「追っ手は？」

詩音「尾行は無かった」

後ろから車の音が聞こえた

魅音「つけられてんじゃん！

詩音の馬鹿！」

詩音「つけられてないもん！

お姉えの馬鹿！」

葛西「とにかく中へ」

梨花 side

『小此木「こちら鳳1

標的を発見

その友人も確認」』

沙都子「ばれちゃいましたわよ？」

梨花「大丈夫なのですよ  
にぱー」

鶯部隊は園崎家へ突入した

隊員F「いたぞ！」

ウワァ

隊員G「注意しろ！辺りはトラップだらけだ」

魅音 s i d e

レナ「大丈夫かな？」

葛西「簡単に破られないでしょうが荒事に慣れている連中のようです  
過信しない方が良いでしょう」

隆「奥へ行こう」

圭「そうだな」

詩音「ああはいはい  
私は事情の分からないまま  
いきなりクライマックスですよ」

ほっとく事にしよう

鶯部隊は扉の前で立ち往生していた

隊員F「鶯1より鳳1

敵は防空壕のような所へ逃げ込んだ

扉は鋼鉄で突破できない」

小此木『鳳1了解

この園崎家って奴はとんでもない金持ちだな

敷地は広すぎて包囲は不可能だ

花火と同時に爆弾を使え』

隊員F「了解」

魅音side

梨花「皆大丈夫ですか？」

羽入「あうあうあう」

これで見た感じでは

敵は三十人くらいいますです」

圭「げっそんなにいるのかよ?!」

と腰を抜かしている圭ちゃん

隆「へえなめられてるね」



と余裕の態度の隆ちゃん

魅音「ちよつと変えるよ」

私は防犯カメラの映像を変えた

魅音「連中立ち往生してるよ」

一気に辺りが暗くなり

映像も途絶えた

隆「やられたな」

葛西「そうですね

地下の弱点を突かれましたね」

魅音「けどあの扉は爆弾でも使わない限り  
破れないよ」

洸太「なら破られるな」

えっ？

隆「そうだな

入江先生

花火は何時に打ち上げられるんですか？」

入江「午前10時です」

一瞬にして隆の顔つきが変わった

隆「葛西さん！」

武器庫へ案内してください！」

葛西「分かりました」

隆「魅音」

私は突然自分の名前を呼ばれ  
驚いた

魅音「なっなに？」

隆「あとはよろしく」

私は何かを感じ取っていた  
けど何か分からない  
でもプラスではない何かを

相当変な顔でもしていたのだろうか  
隆ちゃんに笑われた

隆「魅音浮気してたられるタイプだな」

魅音「何よそれ」

洸太「兄貴

はいこれ」

隆「あつ忘れてた  
サンキュ」

レナ「それ何かな？かな？」

圭一「刀だな」

隆「ああこれは家宝の雷切だ  
どれだけ貴重な物かは今度話してやるよ  
んじゃ葛西さん行きましよう」

葛西「魅音さん  
武器庫の力ギを！」

葛西さんと隆ちゃんと別れ  
私達は古井戸へ隠れた

上で銃撃戦が行なわれてる  
耳を劈くような音が鳴り響いている

不意に音が止んだ  
上から声がした  
聞きなれてる声だった

隆「ゴメン魅音！  
うるさかった？」

葛西「早く上がってきてください」

私達は急いで上へ上がった

葛西「まだ外には連中がいると思うのでしばらく  
ここで待っていてください」

魅音「私は戦うよ

いいでしょ？

銃だって使えるし」

詩音「私もやりますよ」

隆ちゃんが肩を竦めた

隆「分かってねえなこの双子は

せつかく女の子らしくさせてあげようってのに」

圭「だったら俺が行く！」

隆「いや論外」

圭「どうして」

隆「AK-47の扱い方説明する時間無いから」

洸太「俺は使えるよ」

隆「遠慮しとく

母さんにまた怒られる」

はははっと笑って

葛西さんを連れ外に出て行った



## 【輝】対決（中編其の三）

隆 side

オレは雷切を帯刀し

ポケットにはデリンジャー

手にはAK-47

SVD-137を肩に背負う

といういかにも戦いますよ的な

姿で外に出て行った

今は銃撃戦の最中

葛西さんは散弾銃を使っている

楽だよな

楽しみは半減するけど

オレは相手の銃に正確に当てていく

敵は一人また一人と逃げていった

とうとう門の所まで来た時

こっちに突っ込んできた者がいた

赤坂「赤坂衛です

梨花ちゃんは？」

隆「葛西さん！

案内してあげてください」

オレはそう叫びながら

軽トラックのフロントガラスに

銃弾を撃ち込んだ

梨花 side

隆と葛西が出て行つて

少し経った頃

声が聞こえてきた

赤坂「梨花ちゃん！

大丈夫かい？」

隣には葛西もいた

梨花「赤坂も無事だったのですね」

洸太「兄貴は？」

葛西「一人で戦っていると思います」

詩音「何で置いてきたんですか？！」

葛西「すみません

とりあえず行きましょう」

門のところでは隆が退屈そうに  
待っていた

隆「やっと来た」

レナ「良かった無事だっただね」

皆で作戦を練り  
二手に分かれた

羽入「反撃開始するのです」

全員「おー」

-----

小此木「まだ目標は見つからんのか？」

隊員H「発信機の電波は確認できません」

小此木「いつまで隠れているつもりなんだ  
うちのお姫様はどうした？」

隊員I「尋問中です」

小此木「逢引かよ

まあそれが手っ取り早いだろうがな」

隊員H「東京の野村様から連絡です  
隊長にです」

小此木「俺に何のようだ？」

・  
・



隊員」「目標山中にて発見しました」

小此木「分かった」

鷹野「全勢力を集めなさい」

小此木「人目につかない山中となれば

こつちも全力投入出来ますよ

奴らは自分の首を絞めたもんです」

山狗の隊員達の前まで歩いた

鷹野「今回は私も前線で指揮をとります」

小此木「こいつをしくじればこちらは詰まれて王手だ

全班で包囲抹殺しろ！」

隊員達「はっ」

小此木「山狗の総力戦だ

敵を絶対興宮へ行かせるな！」

-----

隆side

魅音『軽5台

大型1台

狙撃準備は？』

隆「OKだ」

魅音『発射！』

その合図と同時に

全ての車の右タイヤを狙撃した

車が止まったのを見て自分の位置へ向かった

魅音『ナイス！隆ちゃん』

隆「当たり前だ

500ヤードくらいしか離れてなかったんだから」

魅音side

魅音「ナイス！隆ちゃん」

隆『当たり前だ

500ヤードくらいしか離れてなかったんだから』

沙都子「何人の方が無事に

この山を下りられますでしょうかしら」

魅音「わが部を相手にどれだけやれるか  
お手並み拝見と行こうか」

一方山狗は戦闘を始める前から  
士気が下がっていた

隊員K「敵にはどんな凄腕スナイパーがいるんだよ」

隊員L「番犬にもいないな」

鷹野「戦闘準備！」

隊員M「はあ」

小此木「全隊進撃開始」

山を包囲するように侵攻を展開していった

落とし穴のトラップは

ただの落とし穴ではなく

落とし穴の底にM18A1クレイモアを置いている

そのほかにも丸太落としトラップ

足掛けトラップなど

山狗は沙都子の

色々なトラップの餌食となっている

隊員N「こちら雲雀7トラップですトラップが・・・」

隊員O「雲雀16ワイヤーに絡まって脱出出来ない」

隊員P「こちら白鷺11攻撃を受けました

あんなの当たり所が悪かったら死んでるぞ」

沙都子『こちらの戦果は7人ですわ』

魅音『流石沙都子その調子で頼むよ』

洸太『こっちは5人を戦闘不能にした』

すごいなあ洸ちゃん

レナ『レナと圭くんペアは6人だよ』

隆『今12人と相手してる正確に狙えない

殺っちゃうかもしれない

部長！許可を』

魅音『どうか死なないで』

それが私の願いだった

隆『了解』

連絡が途絶えた

圭一『攻撃許可を』

魅音『おけー』

レナ『戦果3人プラスだよだよ』

梨花『今戦果は21人なのです』

羽入「凄い凄いなのです

あうあう」

沙都子「2人追加ですわ」

洸太「こつちも2人」

羽入「25人なのです

あああう」

10分後

レナと圭一が戻って来た

その5分後

沙都子が戻った

沙都子「敵の無線持って来ましたわ」

そこで連絡が入った

洸太「兄貴発見

その近くに負傷兵及び死体も見つけた

兄貴の怪我の具合g」

隆「大丈夫

無線壊れちゃってさ」

洸太「兄貴12人

今から戻るから」

魅音「わかった

気をつけてね」

圭一「その無線使えねえかな」

沙都子「私は使えない物は持って来ませんわよ

羽入さんこれで敵を心理的に追い込みますわよ」

心理的攻撃の作戦を立て  
スイッチを入れた

羽入「ふははははは

人の身に過ぎた事を知らない

愚かなる人間どもよ

壊すことは許されない

聖地を踏み荒らす罪を知るが良い

ふはははははは」

圭一「ひい助けてくれえ」  
クギヤアアアア」

羽入「哀れな鶯が一羽

人の世に別れを告げたか

ふはははははは」

隊員Q「た隊長」

圭一「鬼だ！鬼が来る！

俺は知ってるぞ

これは鬼隠しだ

俺達は皆この山で消されちまうんだああ  
」

小此木『馬鹿なこと言うな！

しっかりしろ！』

圭一「@p:. . ; @、pぎい！！！」

一方山狗残り少なくなったメンバーは

隊員R「い嫌だ！

山の神様ごめんなさうい！！」

と逃げた

小此木「クソッ

心理戦まで仕掛けてくるとは

敵はいつたい何者だ？」

レナ「はう」

羽入ちゃんすごい

ホントの神様みたいだったよお」

羽入「あう」

魅音「あのドスは並みの人間じゃ無理だよ」

凄かったわ」

梨花「にぱー」

羽入「それを言ったら圭一も凄いのです  
鶏の首を絞めたような  
声を出していたのです」

圭一「いや

たははははは」

沙都子「をーほっほっほっほ

そんなの圭一さんには朝飯前でしてよ  
何しろわが部での通り名は  
□先の魔術師ですもの」

魅音「さーって

これで相手さんも  
かなりのダメージだろう  
次はどう出るかな」

山狗は鷹野と小此木を入れ  
6人にまで減っていた

鷹野「小此木

どうなってるの  
状況報告もしないで」

小此木「あなたまでお出ましですか  
すみませんね

こんな山の中じゃ



お茶の一つも出せやしませんで」

鷹野「ふざけないで！

戦況は？」

小此木「鷺は全滅ですかね

白鷺も雲雀も壊滅的状况ですかね  
誰が残っているのかも」

鷹野「無線機は？」

小此木「それが担いでいた奴が

ビビって逃げちゃいまして

作戦は失敗です

敵指揮官と戦力を過小評価した  
つけが回ってきたんでしょ  
うないやいや完敗です」

鷹野「この負け犬が！」

『聞こえる？

私は鷹野三等陸佐

あんた達の最高指揮官よ

聞きなさい

鬼もいないし神様もないわ

もしいるなら戦いなさい

神などその座から引きずりおろしてやるのよ！

雲雀と白鷺と鷺は合流して戦力を立て直しなさい

鳳はこつちと合流』

隊員S「隊長緊急事態です

診療所地下が攻撃を受けた模様です」

小此木「何?!」

隊員S「情報を確認しようとしたが無線に応じません」

小此木「クツやられたな

まんまとはまったな

東京の郭公に伝えたのか」

隊員S「まだです」

小此木「連絡しろ

富竹は奪還され脱出

村境を封鎖しているが

たぶん阻止は無理だろう

今後の事を考えた方が良さだろうな」

優勢の部活メンバーは

詩音『お姉こっちは成功しました』

魅音「そう良かった」

詩音『そっちは大丈夫なんですか?』

魅音「うん隆ちゃん以外は怪我人いないよ  
多分かなりの傷つぽいけど

それじゃまた後で」

詩音『ちよつと待って

ちようど今赤坂さんと富竹さんが  
村を出たところなの  
だからもう少しだけ頑張ってお姉』

魅音「うん

こっちは任せて詩音！  
じゃあね」

圭「どうだった？成功だった」

魅音は頷いた

レナ「良かったね」

洸太「ただいま  
向こうは成功だった？」

魅音「隆ちゃんは？」

洸太「おいおい俺差し置いて兄貴かよ  
大丈夫のんびり来るってさ  
俺に雷切を預けたって事は  
何か起こるって事だと思っから  
気を抜かない方が身のためだよ」

【輝】対決（後編）

小此木「もういいお前らは  
車両で待機してろ」

隊員「はっ」

鷹野「何をしてるの！  
奴らは目の前なのよ！  
小此木！私に逆らう気なの？」

小此木「とんでもない」

鷹野「あついたわ梨花よ！  
小此木！捕らえなさい！  
何をしてるの！早く捕まえなさい！」

小此木「ちいとだまつとれや！！  
山狗の小此木だ  
お前らのリーダーに敬意を表する  
名前を聞かせてくれ」

魅音は一步前に出た

魅音「部長・園崎魅音」

小此木「この戦いはお前らの勝ちだ  
富竹は封鎖線を突破  
鎮圧部隊がやってくるのも

時間の問題だ」

鷹野「小此木！！」

小此木「たいしたもんだよ

あんた

鍛えようによっちゃ

デルタフォースにでも

何処でも最高の人材になれるだろう」

魅音「あははははは」

魅音は笑った

魅音「なんだって？デルタフォース？

くっだらないねえ

私がやりたいのはたった一つ

難見沢分校のわが部の部長だけさ！

口先の魔術師前原圭一！

かぁいいモードの竜宮レナ！

トラップ使いの沙都子に

狸の梨花ちゃん！

情報操作センス抜群の洸太！

期待の新人古手羽入！

そしてここにはいないけど

エース大友隆！！

これだけそろっていりゃ

世界の何処だろうと退屈しないね！」

小此木は笑った

鷹野「小此木！何やってんの？！

その女は敵のリーダーよ

倒しなさい！」

小此木「まあ勝負はついているんだが

お姫様の命令なんぞでな」

と小此木は魅音に拳銃を向けた

ヘリコプターからマイクで

入江機関の全権限を凍結する

という趣旨の話の放送がされた

小此木は銃を懐にしまい

踵を返した

鷹野「まだよ！

まだ終わってないわ！！」

沙都子が崩れるようにして

座った

沙都子「これで終わりですか？」

梨花「ボクにも分かりませんのです

初めてのことなので」

赤坂「梨花ちゃん！！

無事で良かった」

梨花「赤坂？赤坂！！」

梨花は赤坂へ飛び込んでいった

梨花「赤坂赤坂赤坂赤坂・・・  
無事で良かったのです」

赤坂「入江先生の誘導で  
診療所も彼らが制圧したそうだよ」

レナ「監督も無事だっただね」

魅音「良かった」

赤坂「山狗の隊員達も続々と  
投降に応じている

一緒にいた少年も保護されたそうだよ」

洸太「兄貴の事か？

ちよつと待って羽入は？」

レナ「さっきまでいたよね？」

-----

鷹野の怒鳴り声が響いていた

鷹野「どういう事なの？

状況がさっぱり分からないわよ」

小此木「手詰まりってやつですんで

番犬が到着したんですよ」

鷹野「どうして応戦しないの？」

小此木「ご冗談を

山狗は所詮諜報部隊

対して番犬は本物の戦闘部隊ですぜ  
端から勝ち目なんてありませんよ」

鷹野「だいたいどうして番犬が来るのよ?!」

小此木「富竹さんが診療所から逃走

東京に連絡したんでしょう」

鷹野「そんなの聞いてないわ

いつよ!どうなってるの?!小此木!」

その時無線がなった

隊員U「隊長!聞こえますか?」

小此木「小此木だ!どうした」

隊員U「郭公から最終連絡です

後片付けを実行せよと」

小此木「了解した」



隊員U「尚指揮者を番犬が包囲中  
投降を勧告していますが」

小此木「了解投降を許可する

武装を解除し以後は番犬の指示に従え」

隊員U「了解」

鷹野「まだよ

何とかして東京の野村さんと  
連絡をとるのよ

梨花は生きていたのよ！

終末作戦は決行可能だわ！」

小此木「三佐このゲームはうちの負けです

往生際の悪さはお互いの得になりません」

鷹野「何を言うの？小此木」

小此木「あなたの役割はもうおしまいです

とは言ってもまだ一つだけ残ってますがね」

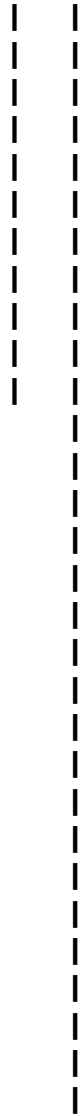
懷から拳銃を取り出し

こう言った

小此木「自決用ってやつですよ」

そう言っつて拳銃を渡し去っていった

そして雨が降ってきた



羽入「人の子よ

お前は人の世に何を求めた」

鷹野「私は私はただ生きて良いよって

人として生きていて良いよって

誰かに認めてもらいたかっただけなのよ

なのに・・・なのに・・・なんでかな

これが私の罪に対する報いなのね」

と言い渡された拳銃を眺めた

羽入「我は人にあらず

人を超える存在にして

人の罪を許す存在

人の罪は人には許せぬ

我こそは人を許そう

そなたを許そう」

鷹野「もう無理」

梨花「羽入!!」

そしてもう一人の人影を見つけ  
絶句した

梨花「たっ 鷹野」

鷹野「最後の最後で報われる事もある物ねえ

魅音ちゃんお友達を撃たれたく無かったら  
一歩前にいらっしやい」

魅音 side

私は殺される

そう直感した

でも誰かが死ぬより

私が死んだほうが良い

私は一歩前に出た

鷹野「あなたのお陰で滅茶苦茶よ

どうせ私は許されない

でもこのままではあまりにも悔しい

だからねせめてお返しをさせて」

圭「くっやケクソかよ!？」

鷹野「その通りよ

弾も一発しかないもの

でも一発あればねえ」

洸太「なんだか鷹野さんらしくないんじゃない?」

そう言いながら

雷切の柄に手をかけた

鷹野「誰も動いちゃだめよ

焦って撃つと誰にあたるか

分かんなくなっちゃうもんね」

その言葉で決心がついた

魅音「皆私の後ろに隠れてて」

鷹野「勇敢ね誰かが撃たれるくらいなら

自分が撃たれようとする自己犠牲？」

魅音「ああその代わり

絶対に私にあてな

私以外の仲間にあててみる！

あんたを死ぬより怖い目に合わせてやる！」

鷹野「おゝ怖い」

魅音「皆動くんじゃないよ」

銃口の延長上が私の眉間になった

ああもう死ぬんだ

本気でそう思った

洸太「チェックメイト・・・だね」

バン

私は目を閉じ

最期を覚悟した

うっ！

誰かのうめき声が聞こえた

鷹野だった

鷹野「誰?!」

草陰でガサゴソして  
落ち着かない足取りで人影が見えた

魅音「隆!!」

私は隆に駆け寄った

魅音「大丈夫?」

隆「正直言って目のやり場に困る」

魅音「何が?」

隆「服が体に引っ付いた」

パタン

隆が私の膝の上で倒れた

魅音「隆!!!!」

他のメンバーもこつちへ来た  
冴ちゃんが脈拍をとっている

冴太「命に別状はなさそうだけど  
輸血は明らかにしたほうが良いね」

圭一「俺が担いで行く」

冴太「ちよつと待って応急処置くらい  
してからでも」

圭一「ああ」

それから隆が目覚めたのは  
明後日のことだった

## 【輝】 答え

この世界に敗者は要らない

誰も欠けることなく未来へたどり着きたい

それが古手梨花が奇跡を求め追いかけた理由

1000年の旅の最後にたどり着いた答え

どう？私の答え最高じゃないかしら

確かにこの答えに正解も不正解もないのだけれど

私はこの答えに満足よ

何？時間がかかり過ぎだって？

それはそうね

あなたの言う通りよ

遠回りをしすぎたのだけれど

そついう事もきつと大切なんだと私は思う

私は素晴らしい仲間達と未来へ行く事にするわ

ひぐらしのなく頃に華

ひぐらしのなく頃に - 華

~~~~~ 原作 ~~~~~

【ひぐらしのなく頃に - 礼】

「ジャンル」

恋愛

<オリジナルキャラクター>

あり

ウツキ 君からの小説説明

この小説は『ひぐらしのなく頃に - 礼』を
元にして、アレンジを加えたものです
この作品は恋愛色が強い(?)ので

ひぐらしのキャラが好きな人には

イマイチと思う方もいるかと思えます

そういう方は読まない方が良いと・・・

では『ひぐらしのなく頃に - 華』スタート！

【華】日の出

あの戦いが終わって
夏休みに入った

そうだあの後

隆は二日後に目が覚めた

撃ち抜かれた右肩はたまに
痛むらしいがだいぶ良くなったらしい
とは言っても字を書く以外は
左を使っているが・・・

鷹野が持っていた拳銃を撃った銃はデリンジャーだったらしい
S V D - 1 3 7 も A K - 4 7 も弾切れで
一か八か狙いを定めにくいデリンジャーで撃ったとか

時は昭和58年7～8月の出来事

あの惨劇から逃れ掴み取った世界での出来事

そして楽しい世界での出来事

【華】モテモテ海パン事件

もう・・・朝か

俺は外の明るさで
そう判断した

でも今日は休日だし
俺は再び目を閉じた

ってもう朝かよ！

そうだった今日は
部活メンバーでプールに遊びに行く約束だったのだ

現地集合で集合時間が10時だったのだ
それで俺が起きた時間は9時20分
俺は全力で自転車のペダルを踏み込んだ

しばらくとばして走り
街まで来た

隆がのんびり歩いている

圭「よう隆！

遅刻するぞ！」

隆「お前何時に起きた？」

俺は9時過ぎと答えた

隆「お前のことだから
持ち物確認してねえんだろ？
忘れ物あったりして」

俺はその言葉に不安を覚え
持ち物を確認した

圭「うわあああ！！！！
海パン忘れた！！！！」

隆「あちゃゝ
やっちまったな」

隆は乾いた笑い声をあげていた

圭「なあ男の頼みだ
海パンを貸してくれ！！」

隆「残念でした
俺は泳がねえよ

入江先生にストップかけられてるから」

なあああに〜〜〜！！！！

するとそこに
おもちゃ屋の店長が
話に入ってきた
どうやら店の前で騒いでいたらしい

店長「そーかい

プールに行くのに海パンを忘れたのかい
それは難儀だ」

圭一「魅音のおじさん

海パン売ってませんか？」

店長「前原君は実に運が良い」

そういつて

海パンを持ち上げた

店長「どうだい？

新品だよ

よかつたら前原君にプレゼントしよう」

おおおおお！！！！

圭一「海パンだあ

柄がなんか変だけど

この際どうでもいい」

店長「この海パン

ただの海パンじゃないんだ

モテモテの海パンと言う

魔法の海パンでね」

隆「嘘くせ」

圭一「一石二鳥！！！！」

3時間穿けば

うおおお

店長「だよな」

あつ今朝ね

???

店長「白鳥の海パンだったかな？」

店長は選択肢のない

店長「白鳥の海パンか」

「もうどっちかしかないね」

圭一「もちろん

モテモテの海パンで」

店長「ああそうだ

君の体にモテモテの魔法がかかる

までの3時間なんだけど

どうやら試練があるらしい

その海パンにはモテない男達の怨念もあるらしいんだ！

君の穿いてる海パンを脱がそうとしてくるそうだ

まあ頑張ってくれ

名前ちゃんと書いてね」

と言い店長はマツキーを俺に渡し

店の奥へと消えていった

マツキーで自分の名前を書こうとしたとき

隆「何？この説明書？

へえ書かれている人の名前の人が

穿いてる人を好きになってくれるのか」

なんだって？

隆「やっぱ胡散臭いな

圭一名前書かなくていいだろ？」

圭一「でも可能性に賭けてみたいっていうか」

隆「そう」

隆は俺の持つてる

海パンを取り上げて
名前を書き始めた

隆「これで良いでしょ？」

名前の入った海パンを
俺に見せてきた

圭「なっなんでそうなるんだよ!!」

隆「あれ？ちがうの？」

オレぜってーそうだと思ったんだけど
まっ良いか

どうせありえないし」

俺らはまだ知らなかった
この海パンの恐ろしさを・・・

その後俺は全力でプールまで
自転車をとばし
隆は走って追いかけてきた

俺は集合時間3分前に着いた

圭「あはははは

前原圭一只今参上！」

梨花「圭一待ちましたのですよ」

羽入「あうあう」

沙都子「まあギリギリセーフ
ってところですね」

洸太「危なかったな」

魅音「残念遅刻してたら

スペシャルな罰ゲームを用意してたんだけどね」

白鳥の海パンなんて
穿かされてたまっかよ

圭「込み合う前に

おもつきり遊ぼうぜ！」

全員「おー！」

そして俺らはまず最初に
ウォーターライダーをしに
並んでいた

しかし

たまらあゝん

レナの水着はちよっぴり大胆なビキニタイプ
さすがにちよっつとばかり恥ずかしそうにしてるが
それがまた良い！！
赤らめたレナの表情にはグッとくるものがあるぜ！

そして魅音の水着はチャイナドレスみたいな変わった水着だあゝ

ちらちらと見える内腿が露出しているより100倍萌える
何よりも二つのたゆんたゆんする巨大なメロンは反則だぁー!!!

さらに沙都子はその年で早くも傲慢な未来を予想させるラインは侮
りがたし

そのくせ幼さを感じさせる水着とのギャップが凄まじい!!

その道の属性の連中だったら

この組み合わせは極めて危険ん!!

次は羽入!!

小学生とは考えられないバディーだぁー

誰かさんの言葉を引用すると

はうううううーお持ち帰りいいいい!!!

極めつけは梨花ちゃんだー!!

まだまだ未熟な青い果実を思わせるラインなのに
大胆なビキニスタイルとは恐れ入るぜ!

そして大事なのは紐!

その紐男なら一度は引っ張ってみたいと思う!

あぁー引っ張りたい引っ張りたい

梨花「圭ーがいやらしい想像をしてるのです」

羽入「あうあうあう妄想なのですよ」

梨花「そんな不潔な圭ーには

先を譲るのですよ」

洸太が俺を蹴り飛ばし

俺はウォーターライダーの中へと

吸い込まれていった

うわあああ!!!!!!

ザッバーン!!

俺が下に付いているプールに落ちた頃
放送で魅音が呼ばれ

しばらくして戻ってきた

その後俺だけ除け者にされ

部活会議を行なわれた

そして俺に魅音が

話しかけてきた

魅音「魔法の海パン

3時間穿き続けると死んじゃうんだって」

えっー?!

なるほどこれがモテない男達の怨念か

最早かかってしまったんだな

圭一「そんなにこの魔法の海パンを脱がしたかったら

実力がかかってきやがれてんだ

じゃあな!!」

俺は宣戦布告をし

プールに飛び込んだ

それから3時間後・・・

レナ「圭一くん

レナねレナね

圭一くんの事

だあいすきだよ」

プールサイドで俺達の追いかけてこを
ボーっと眺めていた隆が一言呟いた

隆「・・・マジで？」

【華】恋愛勾玉紛失騒動

海パン事件から約1週間が経った

そんな長閑になった雛三沢の朝

開かずの祭具殿で少女の騒ぐ声が聞こえてきた

羽入「梨花！梨花！梨花！」

大変なのです！一大事なのですう！」

梨花「何？羽入こんな所で・・・」

羽入「あうあう

これを見るのです！」

と指を指した先には
1つの香炉があった

梨花「あら？この香炉足が欠けてるわね」

羽入「この香炉は梨花のご先祖様が

ある物を封印した時に

お供えしたもののなのです

これが壊れたと言うことは

封印が解けてしまったという事なのです」

梨花「それって凄くまずい事なの？」

封印が解かれたら

何が起こるのかも分からない梨花はそう聞いた

羽入「この巻き物に書いてあるのです

イラスト付きなのですよ」

そう言い香炉の横に置いてある巻き物を指した
そして梨花はその巻き物を手に取り読み始めた

梨花「・・・門外不出のフワラズの勾玉は

鬼神の残したる地獄の至宝で

人里に現れることならば

鬼達は人々に取り憑き

阿鼻叫喚の地獄絵図となるものなり」

梨花はこの記述に心当たりがあつた

梨花「！！ということとは

末期症状の集団発生ということなの！？」

その言葉には答えず

勾玉の封印された理由を超簡単に説明し始めた

羽入「正しく使えば素晴らしい力があるのですが

あまりにも危険なので

梨花のご先祖様が

遠いお空の向こうに封印したのです」

と言って天井を見上げた

それに釣られて梨花も上を見上げた

梨花「空の向こう・・・ってことは

封印が解けたら

村の何処かへ落下してくるって訳？」

羽入「はううゝ誰かが拾ってしまつたら

大変なことになるのですう」

かなり自分の世界に入り込んでしまった羽入が

「あああう」と言い続けていた

梨花「大変なこと・・・」

羽入「あううゝ」

それから数時間が経つた大友家の前

洸太「兄貴、本当にもう動いても大丈夫なのかよ？」

隆「大丈夫だつて大丈夫

自分の体の事は一番自分が分かるんだから

そのオレがOK出したんだからな？」

それが1番怪しい診断だな

隆「それにしても良い天気だな」

そうなのだ

実はここ2・3日は

雨がちな天気が続いていたのだが

今日になって久しぶりに日が昇っていたのである

その時だった

天から洸太の方に何かが輝きながら落ちてきた

隆「おい洸！上」

隆のその言葉に沿って

上を見上げた洸太は

降ってきた『未確認落下物』を飲み込んでしまった

洸太「！？・・・こほっこほっ」

隆「大丈夫か？」

咳き込みながら

洸太「こほっ・・・多分な」

と言ったが咳は止まらなさそうだったので
隆が洸太を家へ連れ帰った・・・

また時間は流れて翌日の学校

洸太「こほっこほっ・・・」

沙都子「大丈夫ですか？」

梨花「風邪なのですか？」

その問いに隆は

「違うと思うんだけど実は・・・」と言葉を濁らした

魅音「実は？」

隆「空から何か降ってきたんだ

それを飲み込んでからずっとこの調子でよ
だから原因はそれじゃないかなって」

圭一「診療所に行ったのかよ？」

洸太「まだ行っていない」

レナ「大丈夫かな？かな？」

ついでに言うとなレナは『海パン事件』から
圭一にベツタリくっ付いてしまっている
等々そこではまだ会話が続けられていた
一方の梨花と羽入は・・・

羽入「洸太の体の中に白の勾玉があるのです」

梨花「どうやって取り出すのよ！？」

口調からも分かる通り

梨花は半キレ気味である

羽入「紅白の勾玉を揃え

古手神社の境内で排除の

おまじないをすればちゃんと解けますです」

梨花「なら簡単ね

放課後に洸太を神社に呼んで

・・・はい終わり」

しかし羽入はそれを否定した

羽入「しかし紅の勾玉も一緒じゃなくては

取り出すことができないのです

このままでは洸太は

紅の勾玉を拾った人に

一生付き纏われてしまうのです」

梨花の怒りはピークに達した

梨花「あんた！！何だって

こんなアイテムを作ったのよ!？」

その声は教室中に響いてしまった

沙都子「二人で何をジタバタしているのか

分かりませんが何か知っていますのね？

・・・梨花？」

そして洸太が早引きしてから

いつもの部活メンバーが集まり

フワラズの勾玉の説明をした

隆「なるほどねえ」

圭「紅を持った人が

白を持ってる人を好きになるのかあ」

梨花「はいです

洸太はその白を飲み込んでしまいました

紅を誰かが拾えば

その人が洸太にメロメロなのです」

沙都子「規制事実になる前に

阻止しなくては・・・ですわよ」

そこで魅音が

魅音「今日の部活のメニュー決定！

誰が紅の勾玉を手に入れれるか

罰ゲームは1位の言うことを聞く

で、どう？」

みんなは口々に「賛成！」や「異議なし！」と叫んだ

魅音「それじゃあ！今から

今日の午後6時までの時間で探し出すこと

その時間内に

ここ雛三沢分校に集合！

準備は良い？いくよ！

よーい・・・スタートー！！」

魅音の掛け声で一斉に学校を飛び出した

・・・と思ったら2つの影が残っていた

女子組は魅音の「スタートー！！」という言葉と同時に
出て行ってしまったが

隆と圭一は残っていたのである・・・

というよりは圭一は隆に止められて
外に出るにも出られなかったただけなのだが

圭一「何だよ？隆

俺は1位を獲るんだあ！」

と燃えている圭一に

冷静に事の成り行きを見ていた隆が
一言だけ言った

隆「オレさ今気付いたんだけど

紅の勾玉を手に入れた瞬間に

洸に恋するって事だろ？

それってマズインじゃない？」

それは一理も二理あるので

圭一「ううゝ確かに」

となった

隆「だろ？だからさ

ここは皆のことを待ってみよーぜ」

圭一「それもそうだな」

それから約3時間後の6時ほんのちよつと前
魅音、レナ、沙都子の3人が戻ってきた

その後、数分後・・・

羽入「大変なのです！

大変な事になってしまったのです！」

と慌てて入ってきた

圭「どーしたんだ？羽入

勾玉が見つかったのか？」

羽入「見つかりましたのです！でも・・・」

魅音「でも？」

羽入「その・・・あうあう」

そんな感じで羽入が

出だせなかった時に梨花が戻ってきた

しかも洸太も一緒に

レナ「勾玉は見つかったのかな？かな？」

すこし様子が変な梨花に代わって

さっきまで中々言い出せなかった羽入が口を開いた

羽入「実は・・・

紅の勾玉を見つけたのは良いのですが

梨花がそれを持った瞬間から

暴走し始めたのです！

梨花に勾玉を持って境内に行くように

と言つても聞かなかつたので
僕は怒つたのです
そしたら・・・」

洸太「そしたら梨花が

その勾玉を飲んでしまつて
このような状態になつた
つて事だろ？兄貴」

と洸太に突然、話を振られたのにも関わらず
隆は「まあそゆこと」と直ぐに反応した
すると沙都子が

沙都子「何がともあれ紅白2つの勾玉は揃いましたわ
これで解除できますわよね？羽入さん」

羽入は涙目になりながら

羽入「無理なのです

実は解除のおまじないが出来るのは
梨花だけなのです

でも・・・今の梨花は絶対に
言つことを聞いてくれないのですよあうあう」

すると最後に沙都子が極めつけに

沙都子「まあ梨花がそれで良いのなら
良いんじゃないありませんの？」

と言つた事により無事（？）解決した

そして梨花と洸太を残し
皆はさっさと帰っていった

・ ・ ・ ・ ・

洸太「・・・俺の意見は？」

梨花「今日は一緒に寝ましようなのです」

洸太「ダメだろそれは」

梨花「あら？私の言うことが

聞けないと言うのかしら？」

洸太「・・・はあ」

このあとどうなったかは
当事者の2人以外は誰も知らない・・・

高校生探偵・大友隆の事件簿

高校生探偵・大友隆の事件簿

~~~~~原作~~~~~

【オリジナルストーリー】

「ジャンル」

推理・ミステリー

<オリジナルキャラクター>

あり

ウツキー君からの小説説明

この小説は『ひぐらしのなく頃に・輝』と  
『ひぐらしのなく頃に・華』の時から約3年の月日が流れています  
オリキャラの大友隆が主人公です

では、『高校生探偵・大友隆の事件簿』スタート！

## 【事件簿】登場人物

メインキャラクター

・大友隆 （おおともりゅう）

興宮高校一年生

持ち前の洞察力と推理力で長野県警に勤務する母（警視）を幾度と無く助けているため同県警の第一課や以前母勤めていた警視庁の方から絶大な信頼を得ているかなりの腕利きスナイパーでもある

サブキャラクター

兄弟・友達

・大友洸太 （おおともこうた）

離見沢分校中学二年生

大友隆の実の弟で兄の手伝いを進んでやる（捜査関係のみ）  
情報収集・処理・管理・操作に優れている  
兄ほどではないが推理力は高い様子

・前原圭一 （まえばらけいいち）

興宮高校一年生

ある運命と一緒に打ち破った仲間  
竜宮レナとは事件で恋仲になった  
あだ名は口先の魔術師かなりのエロ

・竜宮レナ （りゅうぐうれな）

興宮高校一年生

ある運命と一緒に打ち破った仲間  
かぁいい物を見つけると止まらなくなる

・園崎魅音（そのざきみおん）

興宮高校二年生

ある運命と一緒に打ち破った仲間  
興宮高校ゲーム部の部長

だが隆が事件でいない時はそっちについて行く

・古手梨花（ふるでりか）

雛見沢分校中学一年生

ある運命と一緒に打ち破った仲間  
とある勾玉のせいで洸太を好きになってしまう  
現在は羽入と暮らしている

・北条沙都子（ほうじょうさとこ）

雛見沢分校中学一年生

ある運命と一緒に打ち破った仲間  
兄が帰ってきてからは一緒に住んでいる

・園崎詩音（そのざきしおん）

興宮高校二年生

ある運命と一緒に打ち破った仲間  
スタンガンを常備している

魅音の双子の妹で悟史とは恋仲である

・北条悟史（ほうじょうさとし）

興宮高校二年生

一時期行方不明になっていたが見つかった  
戻って来てからは妹の沙都子と同居している

・古手羽入（ふるではにゆう）

雛見沢分校中学一年生

ある運命と一緒に打ち破った仲間

今は普通の女の子として生活している

シュークリームが大好物

母親・刑事

・大友亜希子（おおともあきこ）

長野県警察本部捜査第一課階級警視

去年まで警視庁の警部だった

腕利きの警察官だが息子に救われることも珍しくない

夫とは別居中とはいっても仲はとても良好

ついでに言うとノンキャリア

・大和敢助（やまと かんすけ）

長野県警察本部捜査第一課階級警部

隻眼と杖についている

口調が乱暴で物騒なニュアンスの言葉を

あえて使う事を好む

隆を邪魔扱いする事が多い

・上原由衣（うえはらゆい）

長野県警察本部捜査第一課階級巡查部長

大和敢助の幼馴染と一緒に組むことが多い

しかし大和警部とは違い

隆の事は協力者だと言い快く思っている

・熊谷 勝也（くまがい かつや）

長野県警察興宮署階級警部補

大石が退職してから他の刑事と組んでいる  
隆が呼べない時は洸太を頼っている

探偵・怪盗

・工藤新一（くどうしんいち）

帝丹高校一年生

父親が推理小説家

母親が元女優に持っている

で東の高校生探偵

・服部平次（はっとりへいじ）

改方学園一年生

父親を大阪県警本部長に持つ

で西の高校生探偵

・黒羽快斗（くろばかいと）

江古田高校一年生

世間を騒がせている怪盗キッド

様々な異名で呼ばれている

## 【事件簿】救援要請

昨日もオレは母親である長野県警の警視さんに捜査協力を求められ事件解決に貢献した

現場の警部さんはとても嫌な顔をしていたが・・・

ついでに言っとくけどオレの身分はまだ高校生

最近とは言っても高校生になってから特に事件三昧の日課になっている

ひどい時は学校にいる時にも連絡が入る

ピンポンパンポーン

校内アナウンス『1年D組の大友！

母さんからの電話だ

大至急職員室まで来い』

ピンポンパンポーン

ほら今日もまた来た

大至急って事は誘拐か？それとも・・・

まあいつか

あつそくだ魅音に今日も部活出れないって言つとかなくちやまた怒るだらうなあ魅音の奴

オレは帰る準備をしクラスの皆に行つて来るからと告げ

すぐに二階に上がり2・Bの教室に入り

魅音に今日も部活に出られそうにない事を言い

職員室に行き電話を取った

隆「もしもし？」

亜希子『隆？あのさ悪いんだけど今日も来てくれない？』

隆「内容は？」

亜希子『誘拐よ！誘拐』

そして母さんは事件の内容を説明してくれた

隆「今から行くよ

その誘拐された女の子の両親  
ちゃんと見張つといて」

オレは電話を置き

学校の外にとめておいた

250？のバイクに乗り事件のあった  
鹿骨市へと向かった

オレは急いで被害者宅へ向かった

だいたい事件の流れはこうだ

昨日の夜ごろから行方不明になった女の子は5才で市内の保育園に入っていて

その女の子の家は貧しく父は先月会社をクビになったらしい母は今月からあまり大きいとは言えない福祉に関係する会社に勤めている

借金はかなりあるらしく住んでいるマンションのお金も数ヶ月滞納している

両親から警察に通報があったのは今朝で犯人から電話があった



内容は『娘は預かった今日の18時までに300万用意しろ』だったそうだ

両親はそんなお金用意出来ないのだから今母親が勤めている会社に借りた最初は会社側もOKを出してくれなかったらしいが宣伝費という考えでOKを出してもらえた

問題はここからだった身代金の受け渡しでトラブルが発生したらしいのだ

誘拐された女の子の母親が身代金を渡しに行つたのだがなんとお金が無くなっていたのだった

被害者宅に着いてからまずオレは誘拐された両親と話をした

そりゃ警察の捜査に高校生が入ってるんだからクエスチョンマークが出るだろう

そう思つてオレから話しかけたんだ

そしたら女の子の母親から「娘を助けてくださいっ!!」なぐんて言われたからな結構驚いたんだ

たぶん県警の『警視』さんがなにかしる言つておいたんだろうけど・

とにかくオレはオレなりの方法で捜査を始めたんだ

まあ大体の犯人の見当は最初からついてたんだけどな

それに当てはめて行つたらお金が何処に消えたか予想がついた

隆「やっぱり此処か？」

ゴソゴソ音を立てながらオレはあるバッグの中身をあさつた

・  
・  
・

やっぱり・・・あつた

どう考えてもこれで言い逃れは出来ないな

オレは自分の推理を披露し犯人を追いつめていった

## 【事件簿】情報

事件も無事解決しオレはバイクで興宮高校に向かった  
まだ時間的に部活やってそうな時間帯だしな  
すると不意に聞き慣れた声が聞こえた

魅音「おゝい隆ちゃん!!」

ストップ!ストップ!

そんな勝手なこと言いながらバイクの前にひょっこり出てきやがった  
絶対危ないって!!オレは急ブレーキをしながら魅音を辛うじて避  
けた

オレも危なかったから少しキレ気味になる

隆「おいこら!魅音!危ねえじゃねーか

お前命いくつあっても足りねえぞ?!」

魅音「たははー

ごめんごめん」

ホントにそう思ってるのか結構いやかなり怪しい

隆「で?オレに何か用?」

とかなんとか言ってるが魅音の言うことだ  
バイクに乗って帰りたいだけなのだ

魅音「あのさ私も乗せてって」

手を合わせて言っている  
ほらやっぱり

オレは了承し魅音を後ろに乗せて雛見沢に帰った

-----

魅音「じゃあねー」

隆「んじゃまた明日」

結局オレは園崎家まで魅音を送り  
それから家へ帰った

まだ母さんは帰ってきてなかったが洸はもう帰ってきていた  
今日も洸はあの組織の事を調べている

あの組織とは昔で言う『地獄犬』の事である  
説明しよう

でも少し前置きをしてから

2年前オレ達は古手梨花の運命を打ち破るためにある組織と戦った  
ある組織とは『東京』もっと詳しく説明すると東京という組織の中  
の『山狗』という部隊と戦った

結果はオレらの勝利で終わった

その後東京という組織は壊滅したらしい（洸から聞いた情報である）  
しかし問題が発生した

洸が収集した情報によると東京は壊滅したというよりは吸収合併さ  
れたらしいのだ

その大きくなった世界規模の組織の名が『Black Wolf』  
組織の中にも部隊がある

諜報や情報収集を中心として行動する部隊

それを監視やサポートする部隊

薬（これはまだ正確な情報はつかめていない）を研究・開発する部隊  
戦闘や戦術などを訓練された部隊

そして最後にオレが中1の時から探している暗殺部隊  
これらの事を調べるのに3年ほど時間がかかった  
そして久しぶりに今日新しい情報が手に入った

洸太「よお兄貴もう帰ってきてたのか」

隆「ああ今日も学校の途中で母さんに呼ばれてさ  
大変だったんだよ」

洸太「ははは

それは御愁傷様でした

新しい『Black Wolf』の情報  
手に入ったよ知りたいでしょ？」

隆「ああ」

内心は興味津々なのだ

洸太「それは組織の主要人物には

特別な名前が与えられるらしい」

隆「特別な名前？」

コードネームみたいな？」

洸太「そう日本で活動している主要人物は13人」

洸はそう言った後に付け加えた

洸太「確認出来る範囲ではね」

## 【事件簿】コードネーム

隆「それで？その名前には

どういう関係で繋がれてるの？」

オレは身を乗り出しながら言った

洸太「いやまだ俺は分からないでも一応教えとく

えーっとコルン・ジン・ピスコ・キャンティー・テキーラ・  
キルシュヴァッサー

ライ・シェリー・ウォッカ・キール・カルバドス・グラッパ・  
アイリッシュだって

何の接点があるんだろうな？」

オレは解った

隆「それ多分全部お酒の名前じゃない？」

オレ知ってるのはジンとウォッカとテキーラとシェリーしか  
知らないけど全部お酒の名前だからさ

一応他のキルシュヴァッサーとかも調べてよ」

洸は分かったと言いまた調べ始めた

3分も経たないうちに満足そうな顔を浮かべた

洸太「ビンゴ！

兄貴の言う通り全て酒の名前だった」

やっぱりな・・・

でもなんで酒の名前がコードネームなんだ？

別に他でもいいだろうに  
例えば・・・色とか？

隆「洸！そいつらの詳細なデータ教えてくれるか？  
例えば・・・普段どんな任務に付いているかとか」

洸太「あつたよ・・・ああでもあまり詳しくは載ってないな  
スナイパーは2人限界は600ヤード  
あとは闇取引や薬の研究だつてよ」

隆「ふーん  
サンキュ」

洸太「でもなんで酒なんだろうな  
コードネームとやらが」

隆「はつきりとは言えないけど  
もしかしたらその組織が作っている妙薬に  
関係があるのかもな」

洸太「どういう意味？  
酒の成分とかって意味？」

オレはしばらく悩んでこう言った  
隆「いやまだ解らないけど・・・  
その可能性は高いと思う」

すると洸は少し無理に明るくなって  
こう話し始めた



洸太「でもさ組織のスナイパーって600が限界なんだろう？  
なら大丈夫じゃん」

そこまで言って一呼吸置いてこう言った

洸太「だって兄貴は670ヤードは確実にいけるし」

オレはふと考えた

オレ達が今追っている組織は世界規模  
ならICPOが組織を狙っているんじゃないか？

隆「なあたしかアメリカにも組織っているよな？」

洸は少し戸惑ってから

洸太「いるよ」

って答えた

そうだよなだったらアメリカだったら

FBIとかCIAとかが動くんじゃないか？普通・・・  
うーんどうもそこら辺を調べないとダメみたいだな

隆「洸あのさあ悪いんだけど

ICPOやFBI・CIAの動きも調べておいてくれねえかな  
？」

洸は快く受け入れてくれた

隆「んじゃオレ飯でも作ってくるわ  
洗は何食べたい？」

洸太「うゝん

カレーかラーメン」

オレは冷蔵庫の中を覗いた

隆「あゝカレーなら出来るよ」

洸太「んじゃそれで良い」

隆「ちよつと待ってるよ」

## 【事件簿】予告状

その会話が終わってちょうどに電話が鳴った

隆「もしもし？」

亜希子『もしもし？隆？』

ハハハ・・・

また母さんかよ・・・

隆「何？」

亜希子『怪盗1412号って知ってる？』

隆「なんだ？いきなり」

オレは隣で聞き耳を立てている洸に  
ジェスチャーで調べて  
と頼んだ

亜希子『その怪盗1412号から警視庁と県警それに美術館に犯行  
予告みたいなの』

手紙が来たのよ』

隆「へえどんな？」

亜希子『それがなんか暗号みたいなのよ』

隆「内容は？」

亜希子『えーっとね

男が変貌し銀の弾丸に撃ち破られる時

P o s e i d o n の 雫 と 呼 ば れ る

a q u a c r y s t a l を 頂 き に 我 は 参 上 す る

だつて』

うわぁ気障な奴だな

隆「でも何を盗るかはわかってるじゃん」

亜希子『でもいつか解らないじゃない』

その時洸がメモで怪盗1412号の情報をくれた  
ああなるほど簡単過ぎるじゃんこんなの

隆「大丈夫だよ母さん

その暗号もう解けたから」

亜希子『えっ?!もう!?!』

隆「どうでもいいけどさ

そんなの二課に任せとけば良いじゃん」

亜希子『でも警視庁の中森君が手伝ってほしって言ったから』

隆「ああそう」

二課の警部さんね

亜希子『でも説明してほしいとか  
で来てって言われてるわよ』

隆「明日学校遅刻で行くわ  
朝早く県警本部行くから」

亜希子『分かったわ』

電話を終えた

隆「助かったぜ洸」

洸太「怪盗1412号はICPOが付けた  
犯罪者のナンバーで今は怪盗キッドって呼ばれていて  
でもここ数年動いてなかったみたいだね  
怪盗キッドの名付け親は有名な推理小説家の工藤優作」

へえ新一の親父さんかあ

隆「新一は新聞によく載るよな  
探偵が顔で売れてどうするんだって  
尾行とか絶対ばれるだろ？」

洸太「自分で自分の首を絞めてるね  
まあそれは置いて  
キッドの特徴は  
必ず出す予告状は西洋風な謎が含まさっている事  
盗むのは宝石のみで持ち主へ返却する事  
あとわざわざ目立つ白い服で空を飛び回る事

そして神出鬼没な事くらいかな」

カレーを食べ今日は早めに寝た

-----

翌日オレは県警本部の二課へ出向いていた  
オレが行ったら来るなり「説明しろ！」だった

中森「どういう意味だね

隆君?!」

オレは予告状の説明を始めた

隆「まず最初に予告状にある

P o s e i d o n の雫と呼ばれる

a q u a c r y s t a l を頂きに我は参上する

それはそのまんまの意味です

鹿骨近代美術館にある

アクアクリスタルを盗み出すということ」

二課の刑事さん達と中森警部は

納得している様子

隆「問題になっているのは

男が変貌し銀の弾丸に撃ち破られる時

つていうところです

怪盗1412号通称怪盗キッドは

西洋風のなぞなぞを好みます

つまり『男が変貌し』これは狼男のことです  
狼男でいられる時間帯は満月の晩  
だから明々後日が犯行の行なわれる日です」

刑事達「おお」

隆「当日は僕も行きますが  
頑張ってください」

オレはそれからもしばらく県警に残り  
帰りのホームルームの時間に合わせて帰った  
久しぶりに部活に出たから意外と楽しめた  
そして早くもキッドとの対決の日が来た

【事件簿】怪盗KID

オレ達中高部活メンバーは久しぶりに顔を揃えた  
魅音は皆で賭けをしようと言いはじめ

負けたら罰ゲームルールということで始めた  
はあゝいい加減大人しく居れないものかねえ  
キッドを一目見ようと野次馬が集まってきた  
100人200人くらいだろう

オレはその場から抜け出し美術館の屋上へと向かった  
本当は洸も連れて行きたかったのだが  
梨花と仲良く話していたのであきらめた

満月を見たすると満月を背に何かが飛んできた  
・・・怪盗キッドだな  
オレは屋上へ行く足を速めた

オレは今館内に居る  
外が騒がしくなってきた

キッド「Ladies and Gentlemen!  
皆さん今宵のショーを楽しんでくださいませ」

やっぱし気障だな

-----  
-----  
今頃警視庁からわざわざ来た中森警部はきつと  
苛立って無線に大声で怒鳴り散らしてるだろな



あの警部さんちよつと単純過ぎるもんな

その時屋上のドアが開いた

隆「待ってたよ

怪盗キッドさん？」

キッド「おつとあなたは

ここ周辺で活躍されてる高校生探偵ではないですか？」

隆「とりあえずその宝石渡しな

まあどうせ返すんでしょうけどね」

キッドはオレになにやら銃を向けた

オレも銃を向け返した

そうあの時も使ったデリンジャーを

キッド「物騒な物を持っていらっしゃるのですね

所詮高校生の探偵君？」

キッドはなかなかポーカーフェイスを崩さない

そっちがその気ならこっちだって

隆「あんたも所詮高校生なんじゃないのかい？

江古田高校1年の黒羽快斗」

キッドであろう者が凄い顔だ

隆「快斗とオレは話がしたい」

キッド「さあね」

逃げて走ったな

隆「んじゃキッドでも良い

お前の探している宝石は『パンドラ』って言うんだろ?！」

またキッドの顔が崩れている

隆「さあて王手だぜ?

どうする? 天下の大泥棒さん」

キッドは小さく笑いこう言った

キッド「降参だ名探偵」

隆「キッド・・・いや快斗

オレと組まないか?」

キッド「???」

どういう意味?」

さすがにIQ400でもそれだけじゃ無理か

隆「快斗も狙ってるんだろ?

『Black Wolf』って言う組織の事を」

キッド「!? どうしてそれを?」

隆「オレも追ってるのさ『Black Wolf』をね

そついやあさ初代怪盗キッドは黒羽盗一さんなんだね  
そこまで解ればもう簡単さ」

キッド「詳しい話はまた今度

宝石は返しておいてください」

オレに宝石を投げてよこした

「キッド~~~~~!!!」という怒鳴り声の方を見て  
キッドの方を見るとすでに消えていなくなっていた

隆「まあまあ宝石は取り戻したのに」

中森警部かなり怒ってたな

後から聞いた話なんだけど  
魅音達がやってた賭けだれも当たらなくて  
チャラになったんだってよ

## 【事件簿】再会

オレは快斗に『化け物の集まる日にグレーな場所で』と約束した  
答えを言ったら10月31日の15時にポアロで会おうって事なん  
だけど分かるかなあ

あいつ推理小説は絶対読まなそうだもんな

今日は朝早くから東京に来て警視庁に行ったり

東の探偵に会ったりしようと思ってたのに魅音が付いて来るんだも  
んな

まあ勝手に玩具屋に行ってるからまだマシだけど・・・

さあて約束の時間まで5・4・3・2・1・0

やっぱり来なかった

その時ドアの開く音が聞こえた

快斗「よおセーフか？」

隆「いやアウト！」

それより分かったんだな」

快斗「IQ400なめんなよ」

隆「そろそろ本題に入ろうか？」

そしてオレ達は本題へ入った

まず同盟を結ぶとして情報をお互いに交換し合う

双方から手を結ぶ条件を出し合った

快斗「じゃあな盗みに行く時は招待状

特別に送ってやるよ」

はいはい

よし出て行つたな

さてと新一にでも会いに行くかな

っていうか店の前に居るし

隆「よっ久しぶり新一」

新一「???あつ隆!

なんでお前が居るんだ?」

隆「ああ用事があつてな」

新一「警視庁か?」

隆「半分正解」

新一「もう半分は?」

隆「それを教えない代わりに

好奇心旺盛な東の探偵に一つだけ忠告いや警告だ

世の中には謎のままにしておいた方がいいこともある  
深く掘りすぎると破滅に向かうだけつてな

See you soon」

あとは東京駅で魅音を待つて帰るか  
いやでも集合時間まで結構あるし

オレはかなり時間的には早かったが東京駅に向かった

ってあれ？目暮警部？

隆「目暮警部！どこかしたんですか？」

目暮「おー久しぶりだね隆君

実は事件が起きていてな」

隆「久しぶりに手伝いましょうか？」

目暮「銀行強盗だから今日は君の出る幕は無いよ」

若干悲しげな顔をしていた  
しかしオレは構わず聞いた

隆「犯人は何人で何を武器にしてるんですか？」

高木「犯人は3人武器は拳銃なんだよ」

「こら高木君」と注意する目暮警部

隆「この犯人逮捕は警察という組織では  
難しいので僕やります」

念のため高木から拳銃を貰い  
米花銀行東都駅前店へと入っていった

パンツパンツパンツ

オレは3発で犯人が持っていた拳銃を全て壊し  
犯人3人を店外へ追い出した  
そこを警部達が捕まえてくれて即事件解決  
怪我人も出なく無事終わった

事件が解決したあとに新一と蘭が現場に来た

隆「もう終わった」

蘭「早っ！大友君久しぶり！  
半年ぶりくらいだっけ？」

オレは少し肩を竦ませ

隆「さあ？忘れた

そういや新一の管轄だったな東京  
まあたまにはこっちにも来いよ

See you again」

オレはその後魅音を見つけ  
さっさと帰った

【事件簿】学校占拠事件（前編）

今日はもう11月の半ば

だいぶ外の空気も冷たくなり初雪がそろそろ降りそうな時期

今日という日はオレの中で大きな分岐点となる事件が起こった

元はと言えばヤクザの争いが原因となつて起こった事件

そう興宮高校が占拠された理由は園崎組と県内で敵対している

山口組と蔵谷組が手を結び園崎組を倒す最終手段として行なった手段だった

園崎組は県の北と西で活動していて山口組は東で蔵谷組は南といった感じで動いているらしい

まあだから魅音と詩音を人質にとり勢力を無くすもしくは減らすそういう作戦だった

事件が起こった時オレは学校に居た

圭「よお隆！魅音とはどうなった？」

どうもなつてねえ

レナ「はうゝ圭くん

知ってるの？知ってるの？」

おいおい知ってるも何も

何も無いし・・・

小泉「また東の高校生探偵

新聞に載ってるよ」

なんか他の女子とかも



キヤーキヤー騒いでいる

小泉「どうするの？」

信濃の名探偵は？」

隆「どうもこうもねえよ

新一は後先を考えず目立ちたいだけなんだから」

うつクラスの視線が痛い

隆「あゝいやオレの方が事件解決件数は多いけど

（そりゃそうだよな中1からやってるんだから）

ああでもアイツの凄いところは犯人にも優しいところかな」

ふうなんとか串刺しにされずに済んだ

斉藤「でも何で大友君は載らないの？」

隆「警察に口止めしてあるから」

小野「どうして？」

隆「あのなあ探偵が顔で有名になったら

ダメだろ？普通」

黒井「工藤君と友達なんだよね？」

じゃあ西の高校生探偵の服部平次くんは？」

なんでここで平次が出て来るんだよ

隆「平次？知ってるよ

去年事件で知り合ったからな」

「へえ〜」と全体から声が出た

圭一「類は友を呼ぶってな」

二年の教室の方でガラスが割れる音と  
女子生徒の悲鳴が聞こえた

レナ「どうしたんだろ？だろ？」

隆「さあな

誰かがガラス割ったんだろ？」

二年の教室の方で怒鳴り声がした

男1「この高校は俺達が占拠した！！」

オレのその予想は木端微塵に砕け散った  
そして校内放送がなった

男2『たつた今学校を占拠した

殺されなくなったら無駄な抵抗をするな』

どうしたらいい・・・どうしたら・・・

今オレが使える武器は・・・

ポケットの中に手をつっ込んだ

デリンジャーに内ポケットにはワルサーPPK

弾は合計11発

どうする・・・

遠くで魅音の声が聞こえる

くっそ〜どうすれば

とりあえず行くか

隆「オレ行ってくる」

圭「よし！オレも行くぞ

皆！俺達興宮高校スピリッツを  
見せ付けてやるぞ！！」

男子が燃えてしまった

隆「おい圭！

お前にはやることが残ってる  
だから残れ

ついでに言うとお前らもだ！！」

圭「ちよっ！！何言っただよ！！？

そんなに俺達がたよ」

隆「レナを見る」

オレの言った通りに圭一はレナを見た

隆「お前は自分のjewelを守れ  
んじや行つて来るから」

オレは二年の教室へ向かった



【事件簿】学校占拠事件（後編）

二年の教室へ先に行こうと思ったが  
まず職員室を奪還することにした

職員室の前には2人犯人グループの一味が立っていた

オレは向こうからは死角となって見えない場所から2人を射撃した  
もちろんサイレンサーを装着して

2人の両腕に撃ったから残りはあと7発  
突入するべきか・・・

いや今渋っていても仕方が無い  
行くしかない

オレは職員室のドアを乱暴に開いた

男3「?!誰だ!?!」

隆「ここの生徒だ」

男4「ほおなかなかやるじゃないか  
でも」

その男は銃口をオレに向けた

男4「今のお前は袋の鼠だ」

他2人の男もオレに銃を構えている  
その内1人はM16A1を構えている

先生達は・・・大丈夫だ

眠らされてるだけだ

オレはワルサー P P K 右側の男の両腕を  
デリンジャーは左の男の両腕を撃った一瞬でね  
これで残りは3発しかもデリンジャーはもう使えない

隆「王手だ」

男は笑い先生達が眠らされている方に  
M 1 6 A 1 を構えた

男5「逆王手だ」

隆「残念だったな

オレは警察じゃない

そんな脅し通用しねえよ」

男は威嚇で天井に向かって撃った

オレは犯人が撃った瞬間に M 1 6 A 1 の引き金を狙って撃った

隆「あんたの負けだ

さあ吐け」

オレは M 1 6 A 1 を蹴り飛ばし犯人にワルサー P P K を突きつけ  
尋問に入った

男は簡単に吐いた

この計画は山口組と蔵谷組が作った事や

この計画には何人参加しているだとか

だいたい吐かせ終わりオレは気絶させ先生を起こした

警察への通報は任しオレは魅音と詩音が捕まっているであろう  
2 - B の教室へ向かった

教室からは犯人の声が聞こえてくる  
オレは2 - B の教室に踏み込んだ

隆「この犯行は山口組と蔵谷組の犯行なんだろう？」

魅音と詩音がビクツと体を反応させた

隆「他の仲間は皆は大人しくお縄を待つてるぜ？  
さあどうする？」

1 人は拳銃を捨て詩音を離した  
もう1人は

男6「はっはっはっは  
残念だったな俺は諦めが悪いんだ！！」

銃口をオレの眉間に向けた

隆「詩音！」

オレがそう叫んだと同時にその男が倒れた  
そう詩音の手にはスタンガンがあった

魅音「いやぁビックリしたわ」

私の合気道が全然きかなくてさ  
ホントどうしようかと思ってたんだよねえ」

詩音「でも許せませんね

山口と蔵谷の連中!!」

悟史「まあ無事で良かったよ」

圭一とレナが走ってきた

圭一「大丈夫だったか？」

オレは「ああ」とだけ答えておいた

レナ「あのねあのね隆くん

カツコよかったんだよ」

『魅音はオレが守るんだ!』って

ね〜圭一くん!」

隆「一言も発してねえ!!」

皆は笑っていた

とりあえず負傷者は犯人グループだけで

皆は無事警察に保護され

犯人グループは逮捕・起訴された

翌日園崎組が山口組と蔵谷組を攻撃したのは

また次の話・・・



【事件簿】園崎家

興宮高校占拠事件を解決させ

自宅に帰ってまもなく電話が鳴った

魅音からだった・・・いや正確に言つと園崎家からだった

茜『今日学校でドンパチやったんだって？

私も驚いたよ

それで犯人は山口組と蔵谷組なんだって？

鬼婆さまが隆君と話がしたいそうだから

出来れば今から家に来てくれるかな？』

一応は選択権をくれている様だが・・・

声に威圧感が有り過ぎで一つしか答えは出せなさそうだ

隆「分かりました

今から向かいます」

茜『ああ助かるよとても

今日も家の娘ら助けてくれたんだってねえ

ありがとうよ』

隆「はい僕という存在が無くならない限り

守ってあげてもいいですよ？」

茜『あっはっはっは

プロポーズかい？それなら魅音に言ってあげな  
きつと顔を真っ赤にして喜ぶよ』

ハハハ・・・まさか

隆「それじゃまたあとで」

オレは電話を切り

急いで園崎本家へ向かった

着いたら魅音と詩音が出向かいをしてくれた

魅音の顔をさりげなく見るとかなり赤い

多分さっきの会話を聞いてたか茜さんから聞いたんだろう

詩音「隆ちゃんホントですか？」

お姉えのコト守るって言ったのは」

コイツだったか犯人は・・・

隆「It's a secret

I can't tell you」

詩音「はあ？どどういう意味ですか」

隆「英語を勉強しろ」

ここで魅音がやつと口を開いた

魅音「secretって秘密って意味でしょ？」

隆「正解」

詩音がある部屋の前で立ち止まった

詩音「ここに園崎家の重役達が集まっています

もちろん園崎組の幹部達もです

さあ行ってください私はこの部屋には入れませんから」

おいおいオレと話がしたいのは魅音の祖母さんだけじゃないのかよ？

ハハハ・・・弱ったなあ

まあここで立ち止まっていてもしやあない・・・入るかあ

オレは「失礼します」と言っただけで部屋に入つた  
するとそこには25人くらい人が座っていた

お魍「よあ来てくれた

そこに座りいな」

オレは言われた通りのところに座った

隆「きつと今日の事件の事だと思ひますが

なぜ僕をこの様な場所に呼んだのですか？」

茜「隆君あんに話がある」

そりや分かつてるよ

お魍「本当に山口組と蔵谷組が

絡んでおったんかいのお」

隆「ええ犯人グループの1人にこれ突きつけて」

オレは「これ」と言つて

ワルサーPPKを取り出して話を続けた

隆「尋問したらペラペラ話してくれましたよ」

多分園崎組の幹部と思われる連中が騒ぎ出した

「なんちゅう奴らじゃ！！」とか「仁義に外れてる！！」だとか  
怒鳴り散らし始めた

お廻「静かにせんかい！！」

ピタツと空気が凍りついた

お廻「そらあ許せん連中だ

翌日園崎組総動員をかけんさい

一気に捻り潰すんじやい」

やれやれ園崎家・園崎組が燃え上がっちゃったぜ・・・

【事件簿】園崎組

オレは出来るだけ被害の少ない作戦を  
ほんの数秒で導き出した

隆「あなた達がやるのはせめて蔵谷組にしてください」

幹部A「何でじゃい！！？ガキは引っこんどれ！！」

その言葉にカチンときた  
しかし冷静に

隆「今は僕が話しているんです

仁義だとかの前にマナーくらい守るべきだと思いますよ」

幹部B「このおガキ！！！」

幹部A「黙って言わせておけば！！！」

お勉強さんは・・・じっと見ている  
なるほど観戦ってわけね

オレはワルサーPPKの安全装置を外し幹部Aに向かって構えた  
その幹部も他の幹部もたじろいだ

隆「別に貴方を怪我させたり殺したい訳じゃない

でもそれで他の人を救えるのであればオレは容赦しない」

するとここで葛西さんが口を開いた

葛西「隆さんにはあなた方がどうやっても敵いません」

ここは隆さんの意見を聞くべきだと私は思います」

葛西さんの言葉で園崎組の幹部達は

それ以上うるさくなくなった

オレはその様子を見て拳銃をしまった

隆「山口組と蔵谷組ではどう見たって山口組の方が力が強いです

なので山口組は僕達側の長野県警に任せてください

もちろん園崎組がとても強いのは知っています

しかし城を攻める時は敵の3倍もの戦力が必要です

それと同じで今あなた達は攻める側です

なるべく被害を抑えるには山口組は警察が

蔵谷組はあなた方園崎組がやった方が良いのです

どうですか？これでああなた方に不利なことは無いはずですが」

オレはこの頭首であるお魎さんに問いかけた

お魎「それで決まりにするかのお」

これで幹部達も完全に黙った

オレの完全勝利ってところかな

話が一通り決着がついたところで魅音が

人を帰し残ったのは5人

その顔ぶれはオレ・魅音・お魎さん・茜さん・魅音のお父さん

話は茜さんから始まった

茜「単刀直入に聞くよ

あんたは魅音の事は好きかい？」

隆「What do you mean？」

茜「こっちはふざけてなんか無いよ

真面目に話を聞いてんだ！

男なら男らしくはつきりしな！」

オレは肩を竦めて言った

隆「大好きですよ

Comradeとしてね」

お魎「そんなこたあ聞いておらん

魅音の事を一生大切に出来るかと

聞いておるんじゃない」

隆「答えましょう

はつきり言って分かりません

なぜなら僕にはやらなくてはならない事があります

そう人類のためにもね

それを達成できるのであれば

公共の利益の為に僕は喜んで死を受け入れます」

茜「それくらいの覚悟があるんだったら

こっちはOKさ」

園崎（父）「そのやらなければならぬ事を

教えてもらいたいがね」

隆「It's a my top secret」

そう答えて「いや」と付け加えた

隆「世界中にいる人類の秘密です

たとえ自分が魅音が好きで

最終的に家族になっても

それだけは教えられません」

お廻「そんぐらい堅いもの背負って生きていく

男と孫がくつついてくれりゃ

わしゃ文句は無いね

園崎家に永年栄光あり」

なんだか大変な事になってしまったと思っただ

このままだとオレが婿入りしそうな感じ?・・・だよな



【事件簿】長野県警（前編）

オレは家に帰ってから県警本部に今すぐ話さなくてはいけない事があると言つて

それは今日起こった興宮高校占拠事件にも関係していると話し今から向かうから出来れば一課の主力メンバー（オレと関わりの深い人物）

を残しておいてくれませんか？

と強く要望し急いで県警本部に向かった

そこには母である大友亜希子をはじめとする

一課の主力（オレと関わりの深い人物）が待っていた

面子は警部の大和勘助・警部補の熊谷勝也・巡査部長の上原由衣だった

オレはまず最初に今日の学校占拠事件が起こった理由から話を始めたそれはもう知っている様子で大して驚いてもいなかった

しかし園崎組と山口組・蔵谷組が明日争うと言ったら皆の顔に焦りが始めた

なんと言つても園崎組はここら辺で1番山口組と蔵谷組も2番3番とベスト3が争うと言っているから無理も無い

隆「でも大丈夫園崎はオレが説得して蔵谷だけにするって言つてたし

あくだけど山口はオレら警察側の人間に任せろってさ」

大和「なんだつて？！あの婆さん勝手な事ぬかしやがつて」

上原「勘ちゃん！また口が悪いよ」

あゝあ幼馴染のケンカが始まる前になんとかしないとな

隆「いや実はそう言ったのオレなんだ」

カリカリしている警部さんは「何?!」と少しキレ気味だ

隆「でも裏のトップ3が一気にぶつかるよりは

まだマシでしょ?」

熊谷さんは納得してくれたみたいだ  
母さん・・・も納得している様子だ

隆「だからさ出来れば大和警部に機動隊かSATの準備

しておいてもらいたいんだけど

あと母さんと熊谷さんそれに上原さんはオレと山口組に乗り込  
む」

母さんは「あんたはまだ刑事じゃないでしょ?!」言ってきた  
上原さんも同意した

隆「まだでしょ?オレ一カ月後にでも

いや今日からでもなれる自信がある」

亜希子「まだ高校も卒業して無いでしょが!」

オレは母さんを納得させる奥の手を使うことにした  
そしてサブバッグから紙を一枚出し見せた

亜希子「何これ?」

そうだろう普通の日本人が見ても分からないだろう

説明しようオレはアメリカにある大学の卒業認定書を見せていたのだから当たり前だが文は英語である

もちろん本当に行っていた訳ではない

洸に少し（情報操作を）手伝ってもらい通信制で1年間やっていたのだった

4年間じゃ無かったのは飛び級制度を使ったからである

隆「アメリカの大学の卒業証書

たしかキャリア試験今年の冬にもあったよね

あれの最低レベルが大学卒業だったはず」

亜希子「隆あんた何時の間に・・・」

オレはいつも以上に

流暢な英語（警察の隠語だが）でこう言った

隆「Need not to know」

【事件簿】長野県警（後編）

母さんはオレの答えに戸惑いながらも  
こう反論をしてきた

亜希子「それ・・・答えになってないわ」

隆「I'm sorry  
I can't tell you」

亜希子「私でも？」

隆「世の中には知らなくて良いものもあるんだよ」

オレの上からの態度が気に食わなかったのか  
大和警部が尋問めいた事をし始めた  
オレは全てに「企業秘密です」と答えた  
しばらく続いたが諦めたのか尋問が終わった

隆「明日の12時に山口組を根っこから潰します

園崎組が蔵谷組を攻撃するのは10時と云うことで良いですよ  
ね」

もう皆反論はしなかった

隆「じゃあ10時に僕はここに来ます

それまでに済まさなければならぬ用事を片付けておきたいので  
あと機動隊の準備は今日中に言っというて明日すぐに  
動けるようにしてもらえたら幸いです」

大和「よし！俺が腐った連中を血祭りにあげてやる」

おいおい警察がそんな事言っただけだよ

上原「勘ちゃん！また口が悪いよ」

熊谷「洸太くんも明日来るのかい？」

たぶん来ないと思うけどなあ

あいつの性格上

隆「さあね？来ないんじゃないですか？」

まあ来ると言っただけで母さんに猛反対をくらうだろうからな  
勝率が無い戦いはしないからな洸は

亜希子「本当でしょうね？」

ああたぶんな

亜希子「でもどうやってアメリカの大学を卒業出来たのよ？」

なんで話が戻るんだよ・・・

まあ問題が無い程度に教えておくか

隆「通信制ってあるだろ？それで」

上原「へえそんなに学力高かったんだ」

熊谷「しかもアメリカだから英語だよな

大変だったんじゃない」

いやそれほど難しくは無かったんだよなそれが・・・

補足説明で隆は語学が得意で英語はペラペラなのである

隆「まあ日本のよりはね」

あと母さんに確認を取っておかないといけない事があったんだ

隆「あとキャリア試験受けても良いよね？」

オレは有無を言わせない口調で聞いた

亜希子「でも高校くらいは・・・」

隆「別に良いじゃんアメリカの有名大学卒業してるんだから

それに昔言ったよね

自分の人生は自分で決めろってさ」

よし黙り込んだな

亜希子「分かったわ

でもそれって私の部下になるって事なのよねえ

そこまで理解してるのかしら」

隆「それも別に構わない

すぐに母さんなんて追い越してやつからよ」

てかノンキャリア組なのになんでこんなスピード出世出来るんだよ？

そこが不思議でたまらねえよな

オレは大和警部に機動隊出動要請を忘れないことを強く言い  
すぐに家へ戻った

帰宅後は明日のためにいつもより  
だいぶ早く布団にもぐった

そして明日に日付が変わった・・・

## 【事件簿】蔵谷組

今は朝の6時半頃

オレは朝の5時半に起きた

理由は簡単で今日が山口組と蔵谷組を潰す日だからである  
その為の準備があつたから早く起きたのである

オレは部屋の中に隠してあるAK-47を手にとった

隆「久しぶりだなあ」

思わず本音が口から出た

確かにその通りなのである

AK-47を最後に使つたのは2年前だつたのだ

いつも持ち歩いているものはデリンジャーとワルサーPPK  
ついでに家宝の雷切も久々に手にした

家宝である雷切は毎日和室にあるので目に入ってくるのだが  
触るのはAK-47と同様2年ぶりなのだ

今日の狩りには2年前の戦友（武器）と行くことに決めていた  
となると外せないのがSVD-137

これは狙撃用の銃だ

今日の作戦に欠かせないのがこの銃だつた

9時に蔵谷組の頭（かしら）を700ヤード離れた場所から  
狙撃する予定だからである

もちろん園崎組にも警察にも秘密で

ボスがやられる事によって与えられるダメージは相当大きい  
殺しはしないがしばらく動けない怪我をさせる事が目的だ

今日は金曜日と言つわけで普通だつたら学校があるはずなのだが  
昨日あつた学校占拠事件のお陰で臨時休校となつていた



オレは早めに朝飯を済ませ

とあるビルの屋上に向かっていた

もちろん蔵谷組のアジトがばっちり見える位置に

そこに着いた頃には8時半になっていた

今持っている武器はデリンジャーとSVD・137のみ

AK・47とワルサーPKはバイクと一緒に隠してある

しつかり狙いを定めてからじゃないといくらオレでも700ヤードはちよつと辛い

頭（かしら）は確かあの事務イスに座るんだったよな

とか考えていたら9時少し前になり

そして蔵谷組の頭（かしら）も出てきた

オレが引き金を引く時間まで刻一刻と迫ってきている

あと5分・・・4分・・・3分・・・

2分・・・1分・・・

5・4・3・2・1・・・

パシユン・パシユン・パシユン

3発とも当たった

右肩に1発と背中にも2発

両脇にいた者は戸惑いを隠せていないが

こっち側を見渡している

肉眼じゃ見えないって・・・

「敵に背を向けてはダメですよ」

と無性に言いたくなった

とりあえずこれで園崎組の勝率もグリーンと上がった事だし  
オレはオレが決めた集合同所へ行きますか

ちゃんと機動隊いつでも動けるようになってるかなあ

今回はオレが先頭に立って指揮をとる予定だから

なるだけこちら側に負傷者が出ないような行動をとらないとな

オレは少し急ぎ気味で集合同所となっている

県警本部までバイクをとばした

## 【事件簿】山口組

オレは少々急ぎながら

昨日待ち合わせ場所と言っておいた

長野警察本部に向かっていた

あとから振り返ったらきつとこの時から・・・

いや本当はもつと昔からだろうか・・・

多分そうだろう中1の時からだったんだ・・・

オレの運命の齒車は少しずつそして確実に噛み合わなくなっていったのは・・・

その結果は今のオレには解らない・・・

未来のオレのみがその答えを知っていたのだった・・・

今オレがいる場所は長野警察本部

昨日オレが指定した今日の作戦の待ち合わせ場所に来ていた

どうやら昨日大和警部に頼んであった

機動隊出動要請はちゃんとしておいてくれていた

あとでキチンとお礼言つとかなくちゃな

今回の山口組殲滅作戦の表向きのリーダーは大友亜希子警視指揮を執るのは本部で待機の大和勘助警部で

今回の作戦はまずは気付かれない様にしながら

山口組の根城になっている建物を包囲して

時間になりリーダーの大友亜希子警視の合図で一斉に突入そして逮捕という流れでいく予定になっている

亜希子「さあ機動隊の皆が包囲し終わったわ

あとは時間前に私達が着いて

時間になったたら私の合図で逮捕しに行くだけ

早く現場に行くわよ！」

隆「了解」

オレはそう返事をしバイクに乗せて置いていた  
武器をパトカーの中に置き  
そしてオレも乗り込んだ

もう少しで目的地に着く頃  
パトカーの無線が鳴った

内容は蔵谷組は壊滅したというものだった  
この連絡はもちろん県警本部からだったのだが  
それには流れがあった

蔵谷組壊滅 園崎組 園崎本家（魅音） 洸太 県警本部  
という流れだった  
この連絡により現場の士気も高まった

・  
・  
・

今はA・B・Cとエリア分けされた所のAを突破しBをなんとか通  
り抜け  
オレは1人でこのボスが居るであろうCエリアに入った

組長「警察か?！」

隆「似て異なる者」

・・・今はね

組長「この愚か者を捕らえろ!!」

部下の数人がオレを取り囲み襲ってきた

頬を鉄パイプが掠めた

このままじゃマズイそう思った

オレはその考えをすぐに実行に移した

今オレを襲ってきている連中の動きが止まった

それはそうだろういきなり入ってきた高校生が刀を抜いたんだから

オレはそれでも次々とくる奴らを刀背打ちで

どんどん気絶させていき残るのはこの部屋でオレと組長だけとなった

組長「おおお前は一体何者なんだ?!」

隆「Je suis d?sol?

Je ne peux pas l'enseigner」

フランス語で言った

そして今度は口の前で人差し指を立てドイツ語で言った

隆「Es ist, weil ich ein Geheimnis bin」

組長「なめんじゃねえ!!!!

クソガキがあ!!!!」

とうとう怒ってしまったらしく

懷から出したトカレフTT-33でオレに発砲してきた

オレも負けじとワルサーPPKで対抗していた

するとそこへ機動隊を引き連れ母さんが入ってきた  
組長は降参し一連の事件に幕を下ろした

そして月日は流れ

キャリア試験の当日となった

## 【事件簿】新たな道

オレはキャリア試験を受け

当然の事ながら結果は合格だった

もちろん学校の試験よりは難しかったが・・・

今は学校も辞めてあと2週間はフリーだ

なので余計母さんに呼ばれるのだった

そんな日常も別に特別な訳でも無かった

今までも休日にはオレの用事をお構いなく呼び出されてたからな

あつそうだBlack Wolfの新しい情報が入ってきた

組織の科学者にパイカルという新しいコードネームを持った奴が入ってきたこと

それとどうやらパソコンのプロやエキスパート達を集め始めたこと  
あともう一つがBlack Wolfが開発していた薬の名前が「APT X 4 8 6 9」ということ

それが組織の中では「出来損ないの名探偵」と呼ばれていること  
以上がオレに入ってきた新たな情報だ

とある日の事件を解決しバイクで帰路についていた時

泣きながら歩いている女の子を見つけた

女の子と言ってもオレと同じくらいの人だ

オレは声をかけ近くのベンチに座り話を聞いた

そしたら彼女は今のオレにとっては興味深い言葉を発した

彼女「私・・・実は学校に行ってなくて研究をしてるのよ」

・・・研究？

隆「へえ実はオレも辞めたんだ」

彼女は驚いてこっちを見ていた  
その瞳はとても蒼く澄んでいた

彼女「不良には見えないけど？」

隆「うん実はその逆で今は探偵やっていて

2週間後には県警本部の警部補になるんだ」

彼女「警部補？キャリア試験でも受けたと言うの？

あなたまだ高校生くらいよね？」

隆「君もだろ？」

彼女「ええでも小さい時にアメリカの大学を卒業してるから」

英才教育ってやつか・・・

隆「ふゝんオレもこの間卒業したよ

通信教育ってやつで1年で卒業出来たんだ」

彼女「凄いのねあなた」

隆「で？研究って何やってるの？」

彼女「薬よ両親の研究を引き継いだの」

引き継いだって事は両親が止めたか出来なくなった



最悪のケース亡くなったという事だな

薬かあ今その言葉を聞いたらBlack Wolfが開発している  
「APTX4869しか頭に浮かんでこねえな」

オレは無意識のうちにそう呟いていた

彼女はオレの顔を覗きこんで

「どうして・・・知ってるの？」と言った

いや少なくともオレにはそう聞こえた

隆「お前もしかして？」

彼女はオレの胸倉を掴みそうな勢いで言った

彼女「あなた組織の事知ってるのね？！

命が惜しかったらそれ以上探すのは止めなさい！」

隆「お前本当は苦しんでキツイんだろ？

なら助けてやるよ」

彼女「死ぬわよ絶対」

隆「そうか？残念だったな

それぐらいの覚悟はもう中1の時から出来てっから」

サァーと風が吹いた

【事件簿】道標

彼女「どうして？」

あなた死ぬのが恐くないの？」

隆「オレの話を聞いてくれないか？」

彼女はコクンと頷いた

隆「組織があるって気付いたのはオレが中1の時だった  
7億円強盗殺人事件って覚えてる？」

彼女「ええそれは確か組織が裏で動いてた筈だから」

隆「実はあれ解決したのオレだったんだ

それで裏にデカイ組織が居るんじゃないかってね

オレはそう推理したんだ

あとはその推理の確信を得るために色々な情報を集めて  
今の状況になった

それと聞きたいんだけど今の組織の日本の支部って

『東京』って呼ばれていたよね？」

彼女「ええ良くそこまで調べたわね」

隆「雖見沢で山狗部隊が暴走したのは覚えてる？」

彼女「噂では聞いてるわ

確か小中学生にやられたんだってね

・・・ってまさか！？」

オレは頷き話を続けた

隆「そうオレらだよそれを止めたのは

まあこっちの被害はオレだけ

そっちの被害は死者数名負傷者多数

・・・そっち側の人を殺したのはオレなんだ

悪いとは思ってるよ・・・もちろん

でも立ち止まっただけでもダメなんだよ」

そこまで言って彼女が口を開いた

彼女「でも仕方なかったんじゃない？

そうしないと殺されていた訳だし

あなたは『白』よ

私とは違って」

隆「いやオレはただの偽善者だよ

だからオレは『黒色』や『灰色』の人間でしかない

人殺しだと言われればオレはそれを受け入れるさ

だけど困っている奴が目の前にいるんだっいたら助ける

人が人を助けるのに論理的思考は存在しないから

だから待つてろいつか絶対助けに行つてやるから」

オレは名前も知らない彼女と指きりをし

確実に新たな未来に向かって歩みだしていた

この身を滅ぼす道標を見て・・・



**B l a c k   W o l f   v s   M y   C o m r a d e**

B l a c k   W o l f   v s   M y   C o m r a d e

~~~~~原作~~~~~

【名探偵コナン】

「ジャンル」

推理・戦闘

<オリジナルキャラクター>

あり

ウツキー君からの小説説明

この小説は『名探偵コナン』を原作とした
二次創作で、因縁の『黒の組織』とのバトルが入ってきます
『黒の組織 対 コナン&その仲間たち』勝負の行方は？

では、『Black Wolf vs My Comrade』スタート！

【Black】登場人物

主人公

江戸川コナン（えどがわこなん）

帝丹小学校4年生

本名は工藤新一でAPTX4869を飲まされ幼児化した姿

元は東の高校生探偵で「平成のシャーロック・ホームズ」の異名を持つ

名探偵で黒の組織ことBlack Wolfと言う闇の組織を追っている

体が縮んでから3年の月日が経った

同志

灰原哀（はいばらあい）

帝丹小学校4年生

本名は宮野志保で江戸川コナン（工藤新一）と同じくAPTX4869を服用し幼児化した姿

元黒の組織（Black Wolf）のメンバーで科学者

組織ではコードネームまでもらっていた

その時貰っていたコードネームはシェリー

服部平次（はっとりへいじ）

東都大学2年生

工藤新一と江戸川コナンが同一人物であることを知る数少ない人物

高校までは大阪にいたが大学は上京し東都大学に通っている

幼馴染の和葉は米花大学へ通っている

府警の警官顔負けの剣道の実力者

大友隆 （おおともりゅう）

長野県警察本部捜査第一課階級警視正

本来は工藤新一と同じ年で高校を中退して刑事になった階級は高いのに現場によく足を運ぶ

凶悪犯罪や迷宮入り事件などを多く解決したことが類を見ないスピード出世の原因だと思われる

彼も工藤新一と江戸川コナンが同一人物であることを知っていてFBIの赤井秀一と並ぶもしくはそれ以上の凄腕スナイパー

黒羽快斗 （くろばかいと）

東都大学2年生

服部平次とは同級生で仲が良い

実は世間を騒がせている月下の魔術師の異名を持つ怪盗キッドである工藤新一と江戸川コナンが怪盗キッドで会った時に同一人物であることを知った

黒の組織（Black Wolf）を追ってパンドラと言う宝石を狙っている

大友洸太 （おおともこうた）

興宮高校3年生

大友隆の実の弟で情報収集・処理・管理・操作の天才で自称世界一の情報屋

兄が中1から追っている黒の組織（Black Wolf）の捜査や普通の事件の捜査など

色々な情報を掴むことの出来る存在

工藤新一と江戸川コナンが同一人物であると薄々気付いている

FBI・CIA・ICPO

ジェームス・ブラック（じえーむす・ぶらっく）

- ・FBIの今回の作戦のボス

赤井秀一（あかいしゅういち）

- ・FBIのsilver bullet

ジョディー・スターリング（じょでぃー・すたーりんぐ）

- ・FBIの隊員で重度のゲーマー

アンドレ・キャメル（あんどれ・きゃめる）

- ・FBIの隊員で筋トレマニア

本堂瑛海（ほんどうひでみ）

- ・CAIのNOC（水無怜奈）として黒の組織（BI

ack Wolf）に潜入捜査をしている

本堂瑛祐（ほんどうえいすけ）

- ・CIAの新米捜査官

黒羽盗一（くろばとういち）

- ・初代キッドで本当は死んでいなくICPOの人間だ

った

【Black】プロローグ

俺の名前は江戸川コナン

本名は工藤新一で20歳なんだけど

3年前黒服の男「ウオッカ」がしていた怪しげな取引現場を見ていて
背後から来たその男の仲間「ジン」に殴られ

APTX4869という薬を飲まされ体が縮んでしまった

俺はこの出来事から黒の組織（Black Wolf）を追い始め
てから

もう3年という歳月が経ってしまった

俺はそれで姿を隠し組織を追うため江戸川コナンと名乗り

毛利探偵事務所に居候として住まわせてもらっている

俺の正体を知っているのは数少ない

あがさひろし 阿笠博士、はいばちあい 灰原哀、はっとりへいじ 服部平次、くどつゆみく 工藤優作、くどつゆみ 工藤有希子、ほんどうえいすけ 本堂瑛助、
くろはかいと 黒羽快斗、おおともりゅう 大友隆

そしてベルモットことシャロン・ヴィンヤードの9人だけだ

今日も組織を追いながら小学4年生としての生活をしていた時に
ある人物から組織に関する情報が入った

【Black】情報

キンコーンカーンコーン

コナン「ふぁゝあ」

俺は授業終了の鐘と同時にあくびをした
ったく小学生の授業なんか聞かなくても解るってゝの
次の授業は・・・

元太「今日の給食はカレーだ!!」

そうか次は給食か

哀「あら江戸川君

今日もお眠りしてたのかしら？」

コナン「うつせーよ

そういうお前はどーなんだよ灰原」

哀「私はちゃんと起きてたわよ」

横から歩美ちゃんが出てきた

歩美「授業は聞いてなかったみたいだねゝ哀ちゃん」

コナン「ハハハやっぱりな」

歩美「それで何を読んでいたの？表紙が英語で分からなかったんだ

けど」

哀「薬学に関する本よ

歩美ちゃんも読んでみる？興味深いわよ」

まず読めねえって

その時だった携帯電話の着信音が鳴った

平次『よおー工藤！

元気にしとったかいな』

コナン「切るぞ」

平次『そんなつれない事言っちなや』

コナン「今学校なんだよ

あれほど電話かけるなって言っただじゃねえか
切るぜじゃーな」

哀「上京してきた大学生探偵さん？」

コナン「ああ」

また電話が鳴った

今度は・・・隆からだ

コナン「もしもし」

隆『ご機嫌斜め？

これで機嫌直せよ』

隆は俺の声だけで見抜けるらしい

コナン「学校にいる時に電話するなよ」

隆『Black Wolf絡みでもか?』

おいおいまさかアジトが分かったとか
言うんじゃないだろうな

隆『組織の暗殺標的リストから

宮野志保が今日付けで外れたよ』

コナン「・・・マジか?」

隆『あつそれと日本支部の位置が信越・北陸地方にある事が分かった

その事FBIのお友達に言つていてね

オレはICPOの人に言っておくから』

コナン「お前そろそろ灰原に会ったらどうなんだよ」

隆『そーだな考えとく

じゃあな』

今の会話にもあつたように隆は灰原とまだ一度も会ったことが無い
というか会おうとしない

俺の正体が隆にバレタのが小2の時

それから2年も経っているのにも関わらず

灰原に全く会おうとしないのだ

哀「それで誰からだったの？長野県警のお友達？」

俺は辺りを見て誰も聞いていないことを確認し
内容を話し始めた

コナン「ああ組織の日本支部の位置が信越・北陸地方だつてよ」

哀「そうだったの・・・」

コナン「あとな良い知らせがある」

灰原は「何それ」と明らかに顔に出している

コナン「組織の暗殺標的リストから今日付けで

宮野志保が外されたつてよ」

哀「?!それ本当なの?!」

俺はポーカーフェイスの崩れた灰原の勢いに負けながらも

「嘘言つてどうすんだよ」と答えた

灰原は尚変なことを呟いている

俺がギリギリ聞き取れたのは「だったらあの人は」という意味不明
な言葉だった

【Black】盗聴

俺はいつもの灰原とはかけ離れている
そんな灰原に俺は疑問に思った

コナン「灰原？おーい灰原？」

顔を下から覗き込んだ

やっと気付いたようで「何よ？」といつも通りの灰原が聞いてきた

コナン「お前何回呼んでも聞こえてなかったみたいだったから」

哀「そう」

と答えてからしばらくの間黙って

哀「・・・後で携帯電話貸して」

はい？

コナン「オメエも持ってるじゃねーか」

哀「貸して」

コナン「何でだよ？」

哀「貸して」

コナン「理由は？」

永遠と続きそうな会話に終止符を打ったのは光彦だった

光彦「コナン君！灰原さ〜ん！お二人も給食当番なんですから
手伝ってください〜い！」

哀「貸しなさい」

今度は上から目線かよ

コナン「ったく・・・どっちだ？」

新一用か？それともコナン用？」

哀「さつき使ってた方」

俺は新一用のケータイを渡した
付け足しで言う盗聴器を付けて

コナン「ぜってーいじるんじゃないぞ」

哀「ええ約束するわ工藤君」

向こう側から声がした

歩美「こら〜コナン君！哀ちゃん！

いつまでも仲良くしないで手伝って〜」

灰原は「心外だわ」と言った

「バ〜口オ誰が仲良くしてんだよ」と灰原には聞こえないように
心の中で言った

哀「江戸川君なにか言った？」

コイツ俺の心の声まで聞こえるのか？

元太「サボってねーで手伝えよ！」

俺は洪々給食当番をやリ

給食も食べ終えて昼休みとなった

灰原は何も言わず教室を出て行つた

歩美「哀ちゃんなんだか様子がおかしくない？」

光彦「ええ確かに給食時間の少し前から変でしたね」

元太「コナンが何か言ったんじゃないの？」

歩美「そうなの？コナン君」

コナン「俺は特に何も」

言ってきたのは灰原の方だし

光彦「特にという事は何か話したんですね？」

鋭くなったなあ光彦のやつ

コナン「いや灰原がケータイ貸せって言うてきたから
貸してやつただけだぜ？」

歩美「じゃあきつと哀ちゃん困ってるんだよ

哀ちゃんを探して相談にのってあげようよ」

光彦「賛成です」

元太「それじゃあ少年探偵団出発！！」

歩美＆光彦「おー！！」

3人は勢いよく教室から出て行った

さてと俺は盗聴器から聞こえてくる音にでも集中してますか

く盗聴器から聞こえてくる音く

コール音が3回鳴り声が聞こえてきた

哀「もしもし？私よ分かるかしら」

相手側の声は・・・聞こえなかった

哀「灰原哀よ今はね」

誰と話してやがるんだ？

哀「あなたにはこう言った方が良いのかしら？
シェリーと」

シェリー？

哀「そういえばあなたには本名も教えていたわね
私は貴方の本名は知らなかったけど」

アイツの本名は宮野志保だよな

哀「あなたもう其処にいる必要は無いんだから
さっさと出てきなさい」

其処って電話の相手は何処にいるんだ？

哀「クスッあなたも同じね工藤君と
探偵は皆そうなのかしら？」

俺と・・・同じ？

哀「そうね今は警察だったわね」

元探偵で今は警察？話し相手が？

哀「リストから私を外したのあなたなんですよ？
ありがとう」

リストって暗殺標的リストの事か？

哀「弟？もしかしてナポレオンだったの？」

ナポレオン・・・？

哀「分かったわ
あなたも気をつけてね
スピリタス」

【Black】秘密

スピリタス・・・？

って確か！！

俺の頭に稲妻が走った

スピリタスは世界最強の『酒』

ナポレオンも確か『ブランデー』

って事はまさか灰原は奴らの仲間と話してたという事か？！

でも灰原は「リストから私を外したのあなたなんでしょ？ありがとう」

って珍しく素直になって言うていたから本当は灰原の仲間？

全く解んねえな推理したい気もするけど・・・組織関係だからなあ

難しいんだよな・・・しゃーない灰原に直接聞くのが手っ取り早いから

すると歩美達が灰原を連れて教室に戻ってきた

歩美「コナン君！哀ちゃん電話してたんだって」

ハハハ・・・もう知ってるよ

元太「コナンは多分悪くねえって言うてたぜ」

光彦「灰原さんところで誰と話していたんですか？」

コードネーム・スピリタスっていう奴だよ

哀「そうね・・・一般諸国民にも分かりやすく言つと

・・・初恋の人ね」

歩美「はっ初恋い?!」

光彦「灰原さんの初恋の人ですか?」

元太「どんな奴だよ?教えろよ」

灰原の初恋の人?想像つかねえ

・・・でもこれで『スピリタス』と『ナポレオン』は組織の人間でも仲間になってくれる可能性が出てきた

哀「そうね・・・江戸川君に少し似てるかもしれないわねでも」

で何でこつちを見る?

哀「確実に江戸川君より行動力・推理力
どれをとっても上ね」

へえゝってどんな奴だよ

歩美「へえゝ歩美その人に会ってみたい」

光彦「僕もです!」

元太「俺も」

コナン「ぜひ拝見したいものだな」

歩美「あゝコナン君嫉妬してる」

何故か落ち込む歩美

光彦「そうなんですかコナン君」

俺がいつ誰に嫉妬したってんだよ

コナン「バーロオ俺が何で嫉妬しなきゃなんねーんだよ?」

元太「お前灰原のこと好きなんじゃねーのか?」

コナン「へ?俺が?」

俺が灰原のことが好きだって?
いや無い無い

コナン「絶対無いな・・・それ」

歩美「なーんだ良かった」

突然元気になった

話は灰原の初恋の人の話にそれていった

そんな感じで昼休みは過ぎ

退屈な授業も終わり

いつも通り5人で下校し

途中で歩美・光彦・元太と別れ

灰原と二人になった

最初に口を開いたのは俺だった

コナン「あのさ灰原

俺に隠してる事とか無いか？」

哀「ええもちろんあるわよ」

隠さなかったんだな

コナン「組織関係でもか」

哀「a secret makes a woman woman
って

誰かさんも言ってたでしょう？」

ベルモットの事だな

哀「携帯電話どうも」

と言って俺に渡してきた

哀「私が電話で話していた内容は

Thing that you do not have
relation」

「あなたには関係の無い事よ」だと？

その時新一用のケータイが揺れた

【Black】仲間

俺は揺れたケータイを見た

それは本日二度目となる隆からだった

コナン「もしもし？」

隆『よお新一』

コナン「なんか用かよ」

まあ隆が用件無しに連絡をかけてくる事は
今まで一度も無かったのだが

隆『まだFBIには連絡してないんだろ？

追加情報プレゼント』

コナン「何?!」

隆『なぜ最近組織が動かないか解るか?』

いやわかんねえ

隆『それはだなボスが渡米してるからだよ』

渡米ね

隆『んじゃ今から日本で活動している

又はしていた上級階級の構成員の名簿送るから

それもFBIに提出しとけよ
あとオレが解ってる情報も混ぜとくから
じゃあな』

そこで電話は途絶えた

哀「誰から？また長野の彼？」

コナン「ああ」

隆からのメールが届いたので会話は止まった
以下が隆から届いたメールの内容だ

↓メールの内容↓

Black Wolf（日本支部）

ベルモット（あの方のお気に入りで女幹部のシャロン・ヴィンヤード）

ジン（日本のリーダー格の幹部）

ウォッカ（ジンの部下）

キルシュヴァッサー（ジンの部下）

キャンティ（狙撃手600ヤードが限界）

コロン（狙撃手600ヤードが限界）

マティーニ（狙撃手700ヤードが限界）

ナポレオン（情報のプロ）

スピリタス（警察関係者）

パイカル（科学者でシェリーの研究を継いでるらしい）

グランプ（システムエンジニア）

コニヤック（野党大物政治家）

ライ（FBIの赤井秀一）

バーボン（沖矢昂に変装していた赤井秀一）

キール（CIAのNOC水無怜奈こと本堂瑛海）

シェリー（科学者の宮野志保で現在逃亡中）

カミュ（異動先アメリカ）

レミーマルタン（異動先アメリカ）

ヘネシー（異動先ドイツ）

マーテル（異動先ロシア）

オタール（異動先フランス）

スコッチ（異動先イギリス）

アイリッシュ（死亡）

ピスコ（死亡）

カルバドス（死亡）

テキーラ（死亡）

だから戦闘に関わりそうな人物は10人くらいだと思う
それもFBIに伝えという

だった

灰原が電話していた相手と思われる

『スピリタス』というコードネームも入っていた

そいつの弟と思われる人物

『ナポレオン』も一緒に・・・

コナン「なあ灰原

スピリタスって誰だ？」

灰原はカツと目を見開いてから
呟くように言った

哀「やっぱり聞いてたのね」

コナン「ああ」

そう答えた

哀「スピリタスが言ってたわ

『新一がお前の事を心配して盗聴器でも付けてるんじゃないか
だからノイズがかかって聞き取り難い
けど新一を責めんなよ』ってね
大丈夫よ彼とナポレオンは・・・
私の仲間だから」

【Black】真実

・・・新一？

コナン「おい灰原！スピリタスは俺の事を
本当に新一って呼んでいたのか？」

哀「えっ？ええそうよ」

ってことはスピリタスは俺の事を知っている可能性が高い

コナン「灰原！スピリタスとは何時知り合った？」

哀「・・・えーっと確か私が岐阜の研究所を抜け出して

長野の方へ歩いてた時だから・・・

・・・4年前かしら」

絡まっていた糸はピンと張った糸に戻った

コナン「そっかスピリタスはいいつか

そういえば弟もいたよな」

スピリタスは警察関係者で

弟のナポレオンは情報関係の能力に優れている
そしたらやっぱり

俺はさっき電話してきた奴に
今度は俺からし直した

隆『もしもし?』

コナン「俺だけど・・・

単刀直入に聞く」

俺は言う心構えにする為に
ひと呼吸置いた

隆『ごめん黙ってた』

拍子抜けだった

隆『どうした?』

コナン「よく解ったな」

隆『もうそろ連絡がくると思ってたから』

コナン「お前は俺達の仲間なんだろう?」

隆『そのつもり』

コナン「で?その事を知ってる奴はいるのか?」

隆『えーっと洸と快斗それから志保だけ』

快斗?って東都大学で服部のクラスメートの?

コナン「東都大の?」

隆『そう』

コナン「ってなんでそいつが知ってたんだよ？」

隆『えっ？知らないの？』

知らないって・・・何が

隆『快斗が怪盗キッドやってる事』

コナン「なんだって?!」

隆『アイツも組織の事追っててよ

快斗の父さん有名なマジシャンの黒羽盗一なんだって

それでだいぶ昔に事故で死んだだろ？

その原因を探してキッドを引き継いだんだってさ

でも盗一さんは本当は死んでなくて

I C P Oの人になっていたんだ・・・

その事も話してなくて悪かったな』

そつえば隆はコードネームまでもらってるんだから

日本の支部の位置くらい知ってるんじゃないのか？

コナン「おい隆！オメーもしかして奴らのアジトの場所

知ってんじゃないか？」

ちよつと間があいた

隆『・・・ああ知ってる

でも教えるのはもう少し先にしてくれないか？』

コナン「なんで教えてくれねえんだよ?!」

隆『今組織の中で動きがあるから』

コナン「どういう意味だ?」

隆『今ベルモットとオレと洗で組もつって話になってる
頼む!だから今は言っちゃダメなんだ』

...

コナン「わーったよ」

隆『サンキュ

また今度電話する
じゃーな』

話し込んでいたらもう博士の家の前まで来ていたらしい

哀「で?誰だか解ったの?工藤君」

コナン「ああでもお前も知ってたんだろ?

隆がスピリタスだって事」

哀「そうね長野県警で私に会いたがらない人なんて
他にいないじゃない?」

それもそうだな

コナン「じゃーな」

俺は毛利探偵事務所に帰ってすぐにFBIのジョーディ先生に
今日解った事などを報告し

波乱だった今日という日の幕を降ろした・・・

【Black】怪盗

波乱に満ちたあの日から1週間が過ぎた

蘭「コナン君！朝ご飯できたわよ」

コナン「今行くよ」

部屋から出たら珍しくおっちゃんが起きていて
紙を見て唸っていた

コナン「どうしたの？おじさん」

小五郎「キッドからの予告状が届いたのを

FAXで送ってもらったのは良いが・・・
さっぱり分かん

そう言った時に部屋でケータイが鳴った
隆からメールだった

「メールの内容」

怪盗キッドは今長野の鹿骨市でやっている
宝石展示会に出展されている
ルビーを盗み出す予定

決行の日は3日後の5月4日
時間帯は21時過ぎと思われる

盗み出した後飛んでいる途中に
組織のスナイパーが約300ヤード離れたビルから
狙撃する予定になっている

オレはそのビル（岩鬼不動産）からさらに700～800ヤード
離れたビルの屋上でスナイパーを狙撃する

岩鬼不動産のビルには警察官を踏み込ませる予定

だから新一には隣の園崎銀行の屋上で待機して
逮捕に協力してもらいたい

というものだった

返信は「了解」とだけ送っておいた

蘭「コナン君それでキッドの予告状の内容
もう解けたかな？」

コナン「まだ僕は解けてなかったんだけど

長野県警の大友警視正から

3日後の5月4日の午後9時頃

鹿骨市でやっている

宝石展示会にある

ルビーを盗みに来るって

今メールで着たんだ」

蘭「へえ隆君謎解くの早いわね

でも5月4日かあ

新一とコナン君の誕生日だね」

そうか・・・もうそんな時期なんだ
・・・コトン

コナン「あれ？今物音しなかった？」

ピンポーン

蘭「はーい今行きます」

ドアの開く音が聞こえたら
でけえ声が聞こえた

平次「よおークド」

オイオイいい加減やめてくれよ

和葉「へーじ？あんた何言っとなねん

コナン君は工藤君ちゃうやん！！」

ハハハ・・・本当は工藤だけだな

快斗「おじゃまします」

青子「バ快斗！靴揃えて！」

蘭「さあ中に入って」

ドタバタ入ってきた

平次「男は男同士！女は女同士！

お話しよか」

と言い俺は部屋に拉致された

コナン「なんだよいきなり着やがって

いつもアポなしで来るなって言ってるじゃねーか」

すると服部は真面目な顔になって

平次「話がある」

と言った

コナン「言いたいののは快斗の事だろ？

知ってるぜ

快斗「怪盗キッドだって」

平次「なに〜？！」

コナン「隆から全部」

平次「なに〜！？」

快斗「それ教えたって隆が1週間前に言ってた」

平次「ちゅうことは・・・」

知らんかったの俺だけかいな」

そついう事になるな

平次「ちっさい姉ちゃんも

知ってたんかいな？」

快斗「もちろん」

服部が暴走した・・・

【Black】標的

しばらくして服部が落ち着いた

コナン「なあ黒羽

お前3日後の5月4日に
ルビー盗りに行くよな？」

快斗「ああ行くよ

それが？」

その様子だと自分が狙撃される事
まだ知らされて無いみたいだな

コナン「これ見ろよ」

と言ってさつき隆からきた
メールを二人に見せた

快斗「・・・マジかよ？」

快斗はという反応

服部は別の場所に目をつけた

平次「へえ凄いやつちゃん」隆は

700～800ヤードってゆうたら

大体630～730メートルっちゅう事やろ

そんな遠くの標的狙うっちゅうのは
かなり大変なことちゃうか？」

コナン「確かに・・・」

快斗「言われてみれば・・・」

確か・・・赤井さんは700ヤードだったよな？

って事はそれより遠くから狙撃するという事だろ

俺は念のため本当にそんな場所から狙撃が可能なのか

確かめるために電話をかけた

隆『もしもし？』

コナン「お前700～800ヤードって本当に出来んのか？」

隆『オレの事疑ってんな？』

大丈夫！今組織の中で・・・

と言っても日本支部の中だけだけど

オレが一番上手いから

ついでに言おうか？

オレ800ヤード、ジン700ヤード、マティーン700ヤード

キャンティ600ヤード、コルン600ヤード、ナポレオン

500ヤード

まあ狙撃が出来る奴はこのぐらいかな？

伊達にスピリタスって言う世界最強の酒の名前を

もらってる訳じゃないからな』

ここで傍で聞き耳を立てていた

服部がオレのケータイを奪ってきた

平次「おい！どうゆうこっちゃ？！」

スピリタスってまさか奴らのコードネームちゃうやろっな！
？」

隆『そうだよ

ってオイ！新一！

平次に話してなかったのかよ？！』

その通り・・・

隆『やべジンが来たから切るぜ

じゃあな』

逃げやがったな

平次「ちゃんと説明してもらおうかのお

工藤く！」

コナン「わーった話すから

落ち着け」

今の状況を俺と黒羽で交互に説明し

何とか服部を納得までさせる事が出来た

快斗「それで話を戻すけど・・・

組織の次の標的が俺ってことなんだよな？」

コナン「ああそうだと思うぜ

黒羽は何も気にする事は無い」

平次「せやせや組織のスナイパーは

俺らが捕まえてやるさかい

黒羽は銃弾をちゃんとよければ良いんや」

ケータイの着信音が鳴った

その音の発信源は・・・黒羽のケータイからだった

「メールの内容」

3日後の逃走ルートの事で

いつもより空高く飛んで逃げてくれねえか？

理由は聞かないでほしい

あとはオレ達に任せろ！！

D o y o u r b e s t .

その後少し時間を置いてから

また誰かのケータイの音が鳴り響いた

【Black】狙撃

それは俺のケータイから鳴っていた
着信音は‘青い青いこの地球に’だった
って事は隆からだな

くメールの内容く

怪盗キッド狙撃作戦の全貌が解った

キャンティーとコルンは岩鬼不動産ビル屋上から
マティーニはその向かえにある駐車場の屋上から狙撃

新一と平次は岩鬼不動産のビルの隣の
園崎銀行の屋上で待機

銃声が聞こえたらサッカーボールでも蹴っ飛ばせ
そこでキャンティーとコルンを逮捕してくれ

そのビルには一課の主力を張り込ませておく

マティーニはオレとベルモットで何とかするから

Good Luck .

コナン「どうやらベルモットも仲間になった
みたいだな」

服部も黒羽も驚いている

コナン「アイツ本当によく分からねー奴なんだよな

組織を平気に裏切ったり

俺を助けたりってさっぱり分からない

でも・・・ベルモットなら信じてみる価値はある」

トントンとノックの音が聞こえた

蘭「入るわよ」

と言って入ってきた

和葉ちゃんと青子ちゃんも一緒に

蘭「3日後の5月4日にね

皆で鹿骨市でやってる

宝石の展示会行かない？」

そんなこつたろうと思ってたぜ・・・

コナン「うーん・・・そうだね！

平次兄ちゃんと快斗兄ちゃんも行こう！」

二人も当然のごとく了承した

和葉「よし決まりやね」

青子「けど何処に泊まる？」

すると服部が

平次「それじゃ隆ン家にしようや」

皆すぐにOKを出した

青子を抜いて

青子「その隆って誰なの？」

快斗「そっか青子は知らないんだっ たよな

大丈夫お前以外皆の友達だし」

その後

服部が隆に連絡を取り

泊まる事が決定した

・
・
・

今は3日後の5月4日

快斗は怪盗キッドとして計画通り

宝石展示会にあった狙いの宝石を盗み出していた

もちろんコナンと平次は待機場所にいる

展示会の方から怪盗キッドが飛んできた

その姿は徐々に大きくなっている

パシュン・パシュン

銃声が二発なった

キッドいや快斗は・・・

無事だった

銃弾が当たったのはダミーだったらしい

快斗が今どこにいるのかは不明だが
多分無事なんだろう

平次「工藤！」

コナン「ああ」

俺はキック力増強シューズのダイヤルを
MAXにしサッカーボールをベルトから出し
おもっきりキャンティーの顔面目掛けて蹴り飛ばした

コナン「いつけー！！！」

服部はすでに隣の屋上に飛び移っている

ボールがキャンティーに当たったことを確認し
地面に着地した

屋上のドアが乱暴に開けられる音が聞こえた

蘭「新一！！」

コナン「蘭？！」

蘭「やっぱり・・・

あなたが新一だったのね」

コナン「ここは危ない！！

来るな！！」

蘭「嫌よ・・・新一

もう絶対何処にも行かせないんだから」

銃声が聞こえた

と言うよりはそんな気がした

コナン「危ない！！蘭！！」

蘭を庇い

肩に衝撃を受けた

コナン「ウッ」

次に腹部にもその痛みがきた
その後俺の意識は遠のいていった

【Black】失敗

スピリタス・隆side

時は少し遡る

スピリタス「キャンティーそれにコルン

準備は良いか？」

キャンティー「アタイはOKよ」

コルン「俺もだ」

スピリタス「マティーニはどうだ？」

マティーニ「私も」

状況を確認し自分も準備を整えた

ジン「ベルモットはどうした？」

スピリタス「オレの隣」

ベルモット「何か用かしら？」

ジン「ふん・・・なんでも無い」

ここで無線を切り

ベルモットにマティーニの場所に行くように

ジェスチャーで指示した

ベルモット「私の大事な大事なシルバーブレード
殺されないようにしなさいよ」

スピリタス「ああ絶対生かしてやるよ」

無線の電源を入れた

スピリタス「キャンティー、コルン、マティーニ

3人でタイミングを取り合い

そのタイミングで狙撃を許可する」

3人からはそれぞれ「了解」と返事が返ってきた

オレはスコープで状況を見ていた

まずマティーニ特に変わった様子は見られない

次キャンティーはイライラしているらしい

まあ彼女らしいちゃ彼女らしい

次にコルン彼は冷静にスコープを覗いて

ターゲットが来るのを待っている

そして次に新一と平次を見た

彼らもしっかり待機しているっぽい

そして今度は警察用の無線で

隆「銃声が聞こえたら屋上へ突入しろ！

拳銃の用意を忘れるな」

ちゃんと部下からは「了解」ときた

その部下とは大友警視、大和警部、熊谷警部補、上原警部補の4人だ

コロン『獲物・・・見えてきた』

オレもキッドを見るためスコープを覗く

けどオレの距離だったら

1000ヤード以上離れている

キャンティ『撃つよ3・・・2・・・1・・・』

無線からは銃声が聞こえた

快斗は大丈夫なはずだ

途中でダミーと摩り替わってる予定になっていた

キャンティとコロン側を見た

平次はすでに隣のビルにいる

新一はボールを蹴り終わったあとつぱい

キャンティは気絶してるな

コロンは珍しく心配している様子

新一の方をもう一度見た時

屋上に蘭の姿があった

隆「やべえ」

少し時間をあけコナンが倒れた

・・・マティーンだな

オレはマティーンを見た

やはり新一の方に構えてる

今度はオレがマティーニに向けて狙撃した

マティーニはその弾丸に気付くことなく倒れた

ベルモットに連絡をした

スピリタス「ベルモット、マティーニの遺体処理任せた」

ベルモット『了解』

次はジン

スピリタス「警察が動き出した・・・

コルンは分らないがキャンティーは拘束されたと思われる

作戦を中止する」

ジン『わかった直ちに構成員を戻せ』

スピリタス「了解」

最後はコルン

スピリタス「そっちの状況は？」

コルン『キャンティーが気絶

今は・・・警察と睨み合い』

スピリタス「お前だけでも良い

早く脱出しろ」

コルンからの返事は返ってこなかった

その時ケータイが鳴った

平次『工藤が工藤が撃たれた！』

隆「知ってる

新一を園崎総合病院に運んでくれ」

平次『わかった』

・・・掛け持ちしていた2つの作戦は
どちらも『失敗』に終わった

【Black】発覚

オレは組織のアジトに立ち寄り

『ある物』を盗り病院へ向かった

ここは新一いや今はコナンが眠っている病室だ

ついさつき手術室から出てきたばかりなので面会は

・・・というよりは部屋へ入る事を禁止されてる

そんな中オレはコナンが眠っている病室へ忍び込んだ
ある人物を連れて

隆「ふう進入成功

志保これ使っても大丈夫だよな？」

と『ある物』を出した

哀「APTX4869の塗り薬？」

ええ私は試してみた事無いから分からないけど
組織では使ってるんでしょう？」

オレは軽く頷いた

哀「なら大丈夫なんじゃない？」

まず彼女が来ている経緯を説明しよう

新一が撃たれたのを見てとりあえず連絡

そしたら阿笠博士の車で来ると言ったのだった

そして本当に来たのであった

哀「とりあえず遠山さんと中森さんは眠らせたんだけど

蘭さんが・・・

今は服部君と黒羽君が足止めしてるはずだけど」

隆「ちゃっちゃんと塗らないとな」

オレは新一がマティーニに撃たれた

腹部と左肩にA P T X 4 8 6 9 の塗り薬を塗った

哀「さあ終わつたなら早くここを出しましょう

工藤君・・・今回はあなたを小さくした

A P T X 4 8 6 9 に助けられたわね」

と言ったその時だった

蘭「あなただったのね

新一を・・・引き離したのは」

隆「平次たちはどうした？」

蘭「寝かせてきたわよ

だって・・・だって

新一の所に行くの・・・邪魔するんだから」

まずい・・・完全に疑心暗鬼に囚われてる

「なんとか納得させないとな」と思っていた時だった

哀「・・・そうよ

私が彼とあなたを引き裂いたのよ」

おいおい余計に酷くしてどうすんだよ？！

蘭「新一を・・・返して！！」

オレは一瞬にして黒のオーラを身にまとった

スピリタス「お前死にたいのか？」

蘭は一瞬戸惑っていたが

蘭「ええ！新一のためなら

命だって賭けられるわ！！」

スピリタス「それで？今回助けられたのはどっちだよ？！

お前はかすり傷一つ無いそれと比べてコナンは重体だぞ」

蘭は「だけど・・・」と続けようとする

スピリタス「お前は足手まといに過ぎねーんだよ

実際問題お前が居なかったら

誰も怪我もせずに無事

組織のスナイパー3人も逮捕出来たはずだったのによ」

それでも蘭は「でも・・・」と続けたがる

スピリタス「一部の人間は好きな人の為なら

命を賭けられると言ったら感動するだろう

けどお前が居たら逆に新一を危険にさらすだけなんだ

よ！」

蘭は・・・押し黙った

スピリタス「オレから見た今のお前は『偽善者』に過ぎない

ある奴はお前の事をANGELと呼んでいた

だけど今は好きな奴を危険にさらすHELL ANG

ELだ・・・」

と言って内ポケットからワルサーPPKを取り出し続けた

スピリタス「それでも来るって言うならオレがお前を殺す

犠牲者は別に増やしたい訳じゃないからね」

そこで今まで纏っていた黒のオーラを脱ぎ捨てた

隆「だから蘭は来るな

それは新一も望んでる事だと思うから」

蘭は静かに頷いた・・・

【Black】記憶

部屋の中で小さく「うつ」と声が漏れた
3人が一斉にベッドを見た

哀「工藤君？」

隆「もう痛くないだろ？」

するとコナンは上半身を起こした

コナン「ああ・・・ってあれ？もう痛くねえぞ

・・・なんで？」

いままで病室の入り口付近に居た蘭が飛んできた

蘭「新一！ごめんね・・・ごめんね」

コナン「悪いな・・・蘭

お前には迷惑かけっぱなしだな

お休み・・・蘭姉ちゃん」

パシュと音がして蘭は崩れるように眠りに落ちた

コナン「・・・で？どんなマジックで俺の傷を治したんだ？」

隆「あゝそれ？APTX4869の塗り薬」

コナン「APTX4869?!」

哀「ええでも大丈夫よ

試作品の飲み薬とは違って副作用は無いから」

新一はしばらく黙って

コナン「・・・蘭に正体バレちゃったな」

隆「それなら心配ない

あれだけ釘を刺しておいたから
な？志保？」

哀「ええ・・・多分」

灰原は微妙な反応を示した

コナン「本当に大丈夫なんだろうな？」

隆はもう一つの『ある物』を取り出した

隆「これは組織が開発した薬だ

この錠剤を飲ませれば飲んだ時間から

約12時間前の記憶から起きるまでの記憶が無くなる
優れたものだぜ？どうする？飲ませようか？」

隆は嬉しそうに聞く

哀「そうね組織の薬というのは気に食わないけど

彼女を危険にさらさない為に使うのであれば賛成よ」

隆は目で新一に同意を求める

コナン「・・・わーっ たよ

俺も賛成する・・・

蘭を危険な目に遭わせたかねーからな」

満場一致で同意をもらった隆はすぐに
その薬を眠っている蘭に飲ませた

コナン「ところでどうして灰原がここにいるんだ？」

隆「まあまあ細かいところは気にしない気にしない」

新一は「そういえば」と話題を変えた

コナン「組織のスナイパー達はどうなった？」

すると隆は声のトーンを落として話し始めた

隆「結論から言えば作戦失敗

1人しか逮捕出来なかったからな」

コナン「誰だよ？逮捕された奴って」

隆「キャンティーだよキャンティー

あいつだけはお前のナイスシュートでお縄になったよ
あのシュートは完璧だったぜ？」

新一は「あとの2人は？」と続けて聞いた

隆「コルンはギリギリ逃げ延びた
そしてマティーニは」

隆はここで間を取った

新一は聞き逃さないようにか興味からか
身を前かがみにして聞いていた

隆「オレが撃った」

新一の顔はどんどん青ざめていった

コナン「おいおいそれってまさか・・・

殺しちまったって事か？」

隆「ああでも大丈夫ベルモットに処理任せてあつから」

いや・・・新一が気にしているのは

そこじゃ無いような気がするんだが・・・

コナン「・・・その様子じゃあ

お前何人も殺った経験あるな」

隆「あああるよ

って言うか気付いてなかったのかよ？

そうしないと組織の中で地位は上がらないんだぜ？

スピリタスって言う人物はな」

そこまで言うともた黒のオーラを纏った

スピリタス「日本で唯一ジンと同等、対等な関係にある奴なんだぜ？

ベルモットもジンよりは少し格が下だからな

・・・今の話は忘れるよ」

と言ひ灰原が付けていた腕時計型麻醉銃の針を

コナンに撃ち込み

蘭にも飲ませた薬を飲ませた

【Black】組織

スピリタス・隆side

場所は長野県にある

Black Wolf 通称黒の組織の日本のアジト
日本支部の上層部達は最上階の8階で会議を開いていた
その顔ぶれはジン、ウォッカ、キルシュヴァッサー
ベルモット、パイカル、グラッパ、コニャック
バーボン、キール、ナポレオンそしてスピリタスであった
するとジンが話し始めた

ジン「今回の作戦は失敗した

キャンティーは警察に捕まったと聞いているが
マティーニはどうした？」

誰もその言葉には反応しなかった

ジン「おい！スピリタス

今回はお前に任せてあったがどうなってる？」

オレは肩を竦めて言った

スピリタス「さあ？I don't know.

知らないよマティーニの居場所なんて・・・
コルン何か知ってつか？」

もちろん知ってる訳がないのだが・・・

コルン「俺スピリタスの命令で逃げた・・・
・・・だから何も知らない」

スピリタス「そうかあ

ベルモットはオレと共に行動してたからなあ
分かる訳ねえし

どうするジン？手詰まりだぜ？」

ジン「ナポレオン！お前の情報収集能力で調べろ」

ナポレオン「了解」

と言に残しさつさと部屋を退室してしまった

ジン「今回の責任は指揮を執っていたスピリタスにもあるが
狙撃に失敗した3人にもある

いや3人の方が重いだろう・・・コルン！
地下3階にある射撃場で一からやり直せ」

スピリタス「それじゃそれぞれの任務に戻るか」

オレの発言で会議は終わり

ある者は7階の自室へある者は地下の研究所へ向かった

ジン「スピリタス俺はお前を信頼してるつもりだが
本当に何も心当たりが無いんだな？」

スピリタス「へ？マティーニの事？

ああオレは何も知らないぜ

それにしても痛いところ突かれたよな

スナイパーの弱点、背後

「たたく部下があんな所に居るなんて知らなかった

あれにはマジで驚いた

」んじゃオレは7階で少し休むから」

オレは会議室に残っていたジンにそう言い残し
さっさと7階にある部屋に入った

しばらく寛いでいるとノックの音が聞こえた

スピリタス「誰？」

部屋の外からは「私よ私」と声が聞こえた

スピリタス「どうぞ」

入室を許可すると部屋に入ってきた

ベルモット「あなたさっきの演技上手かったわよ

俳優に向いてるかもね顔も良いし」

スピリタス「おいおい冗談は止せよ」

ベルモット「別に冗談のつもりは無いわ

・・・ところで彼は大丈夫だったの？」

オレは「ああ」と答え

一口コ・ヒーを飲んでから

スピリタス「APTX4869の塗り薬を使ったからな」

ベルモット「そう・・・」

私の方の事は聞かないのね」

スピリタス「え？ああ信じてっからな

志保と弟の次に」

ベルモット「あらあら私あなたに話してない事もあるのよ？

それに雛見沢のお友達や探偵のお友達は？」

スピリタス「大切だし信じてるさ・・・もちろん

けど今必要な力はあるあなたにあるからな」

オレは「んじゃ新一も心配だし病院に行つて来るから」

と行き先を告げ

愛車となっている黒のボクスターに乗り

園崎総合病院に向かった

もうすでに外は明るくなつてきていた

【Black】病院

俺は「おゝい工藤！工藤！起きろゝもう朝やでゝ」と言う服部の声で目覚めた

コナン「ったくあんだよ？こんな朝っぱらから」

寝起きという事も手伝ってか

いつもよりかなり投げやりな言い方になっていた
上半身を起こしながらふと疑問に思った事があった

コナン「ここ何処だ？」

平次「病院に決まってるやんけ」

快斗「工藤昨日の晩に撃たれたろ？覚えてないのか？」

俺は「うゝん」としばらく考えてから

コナン「覚えてない」

と言い自分の体に痛みと撃たれた跡が無い事を確認した

コナン「おいおい寝ぼけた事言ってるじゃねーよ

第一俺は何処も痛くねーし

銃で撃たれた跡もねーよ」

隆「当たり前だろ？APTX4869の塗り薬を

新一が寝てる間に俺が塗ってやったんだから」

A P T X 4 8 6 9 っ て . . .

すると灰原の声が何処からか聞こえてきた

哀「大丈夫よ工藤君

塗り薬には錠剤やカプセルと違って

副作用は何も無いから」

と言いながら俺の見える位置まで来た

って言うか . . . おいおい灰原までいるのかよ

平次「なあ工藤く治ったんやから

病院でようや退屈で死にそうやわ」

「それもそうだな」と黒羽と隆は同意し

医者と交渉してくると言って出て行ってしまった

始めのうちは医者も「ダメだ」の一点張りだったらしいが
隆の人脈だか交渉術だかで退院の許可が出た

和葉「もう痛み取れたんだってなあ

良かったやんコナン君」

青子「ホント子供の回復力ってスゴいだね」

コナン「心配かけてごめんね」

と小4の子供らしく言った

隆「どうする？オレの愛車ボクスターで家まで行くか

阿笠さんのビートルで行くか」

その問いかけに対して快斗が

快斗「じいさんはハーレムって事で」

の一言で分かれ隆ン家に向かう事になった

車内では俺が覚えていない昨日の出来事を聞いていた

コナン「へえキャンティーは逮捕、コルンは逃走

それでマティーニは行方不明か」

快斗「そろそろ奴らの居場所

教えてくれねえか？」

隆は「その時が来たら話すからまあ今は待つとけ」と言われた

平次「どないすんねん

そう長くは待てんで」

隆は呆れ顔で

隆「つたくあのな」

お前らだつて知ってるだろ？

組織やジンがどれだけ強いかって事ぐらい

死にたくなきゃもう少し待て

ICPOやFBIそれにCIAにはアジトの見取り図は

すでに渡しているからよ

後はその3大組織が練った案に

オレら名刑事と名探偵2人それに大怪盗の計4人が
アイデアを出し合って補足すれば
負傷者や犠牲者が格段と減るだろ？

それに逮捕出来る確率も上がるはずだぜ」

とミラー越しに笑っていた

最後に「別に殺してもオレは構わないんだけどね」と
隆が呟いていたのは聞き取れた

【Black】境内

隆の家に着いてからは個人好きなことをやっていた

とは言っても実際は退屈なだけだった・・・服部以外

服部は隆ン家の家宝『雷切』に興味津々で

今は何を言っても聞こえなさそうな雰囲気だ

そこで皆の様子を見ていた洸太がある提案をしてきた

洸太「あのさ暇だったら雛見沢の案内しようか？」

結構自然豊かで良い場所だから」

という訳で反対する理由も無く

皆は外に出て行った

少し歩き神社の境内に来た

洸太「ここが多分雛見沢で一番見晴らしの良い場所かな」

と軽く説明を入れた時に後ろから誰かの足音が聞こえてきた

・・・高校生くらいだろうか？巫女姿の2人組みが来た

隆「よお梨花に羽入

久しぶりだな」

羽入と呼ばれた方が

羽入「あああ他の皆とはいつも会っていますのですよ

隆が仕事で忙しいからなのです」

と言い梨花と呼ばれた方が

梨花「洸太と隆のお友達なのですか？」

洸太「まあそんな感じ」

そこで隆が2人の説明をし始めた

隆「右の子が古手梨花そして左の子が古手羽入

2人とも古手神社の巫女をやってる

ついでに言つと興宮高校の2年生で御三家の古手家主」

皆一斉に「御三家？」と聞き返した

隆「ああ雛見沢には御三家と言って力の強い家があるんだ

その中で一番強いのが園崎家、次に強いのが公由家そして最後が古手家

まあこんな感じ」

俺は説明を聞いていて何か昔みたいだなと思った

羽入「こんなに集まったなら

久々に部活をするのも良いのですよ」

洸太「何処で？」

梨花「もう廃校になってしまいましたが

雛見沢分校がまだ残ってるのですよ」

隆「オレ皆の電話番号知らないんだけど」

梨花「行けば良いですよ」

隆と洸太は声を合わせて「面倒」と答えた

羽入「ならオヤシロ様レーダーで交信するのです」

と訳の分からない事を言っで髪を立てていた

隆「えーつとオヤシロ様って言うのは雛見沢の守り神ね
（本当は羽入がオヤシロ様なんだけど・・・）」

羽入「今日は調子が悪いみたいなのです」

そういう時はシュークリームを食べるのです」

梨花「キムチを食べるのです」

と梨花がキムチを食べたところ羽入が「辛いのでひゅ〜」と泣きわめいていた

洸太「大丈夫ただ感覚がリンクしてるだけだから」

と非現実的で良く理解の出来ない説明をしてくれた

隆「まあどうでも良いからさ」

呼ぶんだったら梨花ン家の電話使えよ」

と隆の一声で巫女さん達は電話をしに行ってしまった

蘭「・・・なんだっただんたろうね」

和葉「なんか不思議な所やね」

とかで女子大生達は盛り上がっていた

隆「これからも非現実的な事が起こっても

あまり気にしなくて良いから」

と俺らに言ってきた

【Black】部活（前書き）

く ひぐらしメンバーを軽く紹介く

・園崎魅音 （そのざきみおん）

鹿骨大学3年生

雛見沢御三家の園崎家次期当主

・園崎詩音 （そのざきしおん）

鹿骨大学3年生

園崎魅音の双子の妹

・北条悟史 （ほうじょうさとし）

鹿骨大学3年生

この作品の中では園崎詩音とは恋仲である

・前原圭一 （まえばらけいち）

鹿骨大学2年生

口がとても上手い奴

・竜宮レナ （りゅうぐうれな）

鹿骨大学2年生

この作品の中では前原圭一とは恋仲である

・北条沙都子 （ほうじょうさとこ）

興宮高校2年生

北条悟史の実の妹

・古手梨花 （ふるでりか）

興宮高校2年生

雛見沢御三家の古手家当主

・古手羽入 (ふるではにゅう)

興宮高校2年生

本当はオヤシロ様という神様

ひぐらしのメイツも無事に進学しているようです(笑)

【Black】部活

俺達は旧雛見沢分校に来ていた

コナン「おい隆これから何やんだ？」

と聞いても毎回「部活」の一点張り
しばらく待っていると男女各数人ずつ入ってきた

隆「よお久しぶり皆！」

その言葉に入ってきた人々は反応して
久しぶりの原因は隆にあるといった趣旨の言葉が返ってきていた
隆は「ハハハ」と枯れた笑いを入れて
人物の紹介を始めた

隆「右から順番に紹介するから

園崎魅音、詩音、北条悟史、沙都子、竜宮レナ、前原圭一
そしてさつき神社の境内であつた古手梨花と羽入」

と一通り向こう側の人の紹介を終え
次は俺らの紹介をし始めた

隆「んで次はこっちの右から説明

毛利蘭で新一の幼馴染、遠山和葉で平次の幼馴染
次は中森青子でここにいる快斗の幼馴染
それで平次に快斗、コナンと哀」

すると魅音と言う人が俺に話しかけてきた

魅音「へえこの子コナンって言うんだ」

なんか面白いって言うか珍しいって言うか」

そこには触れないでくれって・・・

魅音「変な名前だね」

ってオイ!!

コナン「僕の親がコナン・ドイルの大ファンだね」

と昔した嘘の話を始めた

一応は納得してくれたようだ

詩音「じゃあお姉早速始めるんですか？」

圭「やるなら何時でもいいぜ!!」

沙都子「をーっほっほっほ！」

久しぶりの部活は楽しみですわね」

などと俺らは今から何をするのか分からない状況で

そんな事言われても理解出来ない「文」が次々と飛び出していた

洸太「それじゃ来客も来てる事だし

トラップにしない？」

という訳で部活とはゲームをする部活だった様で・・・

悟史「罰ゲームって昔みたいにあるんだよね？」

魅音「当ったり前じゃん！」

今日はジジ抜きにしよう！」

レナ「どんな罰ゲームなのかな？かな？」

魅音が取り出したのは正真正銘の『メイド服』

しかもサイズはSS-XOまである

当然の如く俺や灰原などこっち側の人間は引いていた

魅音「ルールは簡単！5回やって一番優勝回数が多い人が勝ち

ビリが多い人が負けでこれを着て村一周散歩する」

そして誰がなんと言おうと『部活』が始まったのであった

探偵のオレと服部とIQ400の怪盗さんはカードの傷を

瞬時に覚えたからまだ一度もビリにはなっていなかった

というよりは黒羽の場合はマジックでカードを隠したりするから

とりあえず今のところ全勝している

当然の事だが雛見沢の部活メンバーは誰もビリになっていなかった

今まで4回やり

優勝回数が一番多いのは黒羽で4回

ビリ経験者は蘭と和葉ちゃん、青子ちゃんそれと灰原の4人で

皆仲良く1回ずつだった

そして最後の勝負に負けたのはなんと・・・

・・・灰原だった

【Black】失態

哀「もしかして・・・私？」

という事になるな

・・・灰原のメイド姿って想像つかねえな

魅音「サイズはSSかなあ？」

とメイド服を持って灰原に近づいていく

哀「私そんなの嫌よ」

と後ろに後ずさり

蘭が「哀ちゃんのメイド姿きつと可愛いよ」

と言った事で

レナ「はっうゝかぁいいのお持ち帰りいゝ！！」

などと妙なエンジンがかかってしまい

女連中に灰原は教室の外へと連行されていった

平次「なあ工藤これからどないする？」

あのちっさいねーちゃんかわいそ過ぎるで」

コナン「灰原があれ着てどーなるかって事か？」

そりゃーもちろん」

「笑える」と言おうと思ったのが

快斗「『可愛いと思う』・・・だろ？探偵君」

黒羽のヤローわざわざ俺の声使っちなよな

隆「でもアレ着てる姿なんか想像つかねえよな
いつも白衣だったしな」

圭「隆なんで小学生が白衣着てんだよ？」

隆は明らかにヤバイ顔して

隆「あっえーつと・・・あれだあれ！
なんつーんだっけ？」

洸太「コスプレ」

隆「あゝそれぞれ

（ヤバイなこれ知ったら志保になんと言われる事やら）

まずいな灰原の奴ぜってーこの事知ったら怒るだろうな
何要求してくんだろ？フサエブランドの何かだな
・・・高いぞきつと

魅音「出来たよ」

と言って入ってきた

蘭「どう？結構似合ってるわよね？」

黒羽と前原以外の男達は
「似合ってない」

青子「えゝ似合ってるよね快斗！」

詩音「レディーに似合っていないは禁句ですよ」

沙都子「そうですわよー！」

青子「で快斗はどう思う？」

の問いに対して「似合ってる」
と言ったから服部が小声で言ってきた

平次「あいつロリコンやなロリコン」

コナン「ああそれも極度のな」

和葉「他の皆はどう思う？」

やっぱり黒羽と前原以外

「似合ってない」と即答した
室内の温度が零度を下回った・・・

隆「あついや似合って無いけど
可愛いとは思っよ」

なんとか誤魔化そうとしている様子

レナ「かぁいってどのくらいかな？かな？」

隆「これぐらい」

と言つて両手で表した

梨花「とても分かりにくいのですよ」

羽入「もつと分かりやすく

言葉にして言うのです」

その時ケータイの着信音が鳴った

隆「もしもし？・・・え？うん

・・・了解」

魅音「誰から？」

隆「事件つてところかな？

じゃ行こうぜ」

と俺もついて行こうとしたら

誰かに腕を引つ張られた

蘭「コナン君は行かなくて良いの」

コナン「でも行きたいんだもん」

隆「早く行くぞコナン」

どうやら助け舟を出してくれたようだ

コナン「ほら良いって言ってるし」

蘭「じゃあ私もついて行くわ」

隆「ダメ」

和葉「私も行きたい！」

隆「あのな、オレはサポートキャラとして

平次とコナンを特別に連れて行くの

お前らじゃ勤まらないだろ？

こっちにいる哀ならともかくさあ」

つて事は薬物に関係してる事件ってことが
それとも・・・まさか？！

隆「という事でコイツら連れて行くから」

隆は有無を言わせない態度で

俺らを車に乗せこんだ

哀「私の服は？」

隆「あ・・・忘れてた」

哀「バカ」

【Black】密会

結局灰原の服を取りに行ってから
目的地に向かった

コナン「なあそろそろ教えてくれよ

何処に向かってんだ？」

哀「そうね私を引っ張ってきたんだから
はつきり言ってほしいわ」

服部も黒羽も「教えろ」と言っただ

隆「聞いて驚くなよ？
シャロンの居る場所」

・・・今何て言っただ？

隆「コードネームで言つとベルモット」

灰原が尋常でない震えをし始めた

隆「大丈夫だつて今日はベルモットとして
じゃなくてシャロン・ヴィンヤードとして
会う約束になってんだからさ

・・・ついでに志保の母さんの事
聞けるかも知れないし
選択権は各個人に委ねるよ」

俺と服部、黒羽は「もちろん行く」と答えた

隆「志保はどうする？行かないって選択m」

哀「行くわ・・・逃げてばかりじゃ勝てないもの」

灰原は隆の言葉を遮る様にして答えた

哀「それに」

何故かここで言葉を止めた

哀「守ってくれるんでしょ？工藤君」

コナン「へ？・・・ああ」

隆「だから大丈夫だつて

今日会つのはベルモットじゃないんだから」

隆は「アハハ・・・」と力なく笑っていた

快斗「それより監視とかされてないんだろっな

こっち人数多すぎるし・・・」

洸太「大丈夫こう見えても兄貴は

ボスのお気に入り第2号なんだしさ」

隆「ついでに変装してくるだろうから

アイツが目立つ事もないだろうしね」

疑問に思った事があった

しばらくは街に向かって走っていたが

今は逆にどんだん田舎道に進んでいるようだった

コナン「で？この車は何処に向かってんだ？」

隆「ん？近道」

快斗「喫茶店にでも行くのか？」

その答えは「・・・いや違うカラオケBOX」だった

平次「カラオケやと?!」

隆は平然としてこう言った

隆「外に声が漏れにくいし良いんじゃないかなあ

ってなんとなく思ったから」

哀「はあもう少し空気を読んでもらいたいものね」

隆「悪かったな・・・」

あつ前に見えてきたろ？

あそこのカラオケBOXの556号室で

もう待ってるはずだから」

そして徐々に車のスピードを落とし

駐車場に停めて皆は車内から出た

隆の後を追うようにして556号室に入っていった

隆「約束の2分前に到着

少し待ったか？シャロン」

シャロンと呼ばれた男は顔を手で引っ張り

上手く作られた仮面を剥ぎ取った

そこに現れた顔は紛れもなくシャロン・ヴィンヤードだった

シャロン「ええ5分くらい」

灰原はじつとシャロンの顔を睨みつけるようにして見ていた

シャロン「大丈夫よ志保ちゃん

私・・・本当はあなたの叔母なんだから」

突然始まった告白に場の空気が一気に変わった

この状況に一番驚いていたのは灰原だった

【Black】告白

しばらく沈黙が続いていたが誰かが口を開いた
それは灰原だった

哀「・・・どうゆう事？」

シャロン「貴女の母エレナは私の姉だったのよ」

そしてシャロンの告白が始まった

シャロン「昔私と姉はとても仲が良かったのよ

そう貴女と姉の明美くらいね

というより貴女と境遇が似ているのよ・・・あまりにもね
姉はとても薬学にとっても秀でていたの

・・・そしてそれに目をつけた組織が『是非うちの薬品
会社に入ってほしい』と言われ

組織に入ったのが20年いえ25年以上前の話ね

そして連絡がしばらく途絶えたのよ

連絡が出来るようになった時には姉は結婚してたわ

宮野厚司という組織の科学者とね

また少し時間が経って貴女の姉・・・宮野明美が生まれ

たわ

その頃よ私が組織に入った時期は・・・

そしてまた数年が経ち貴女を生んだ後に研究で事故を起
こし亡くなった

・・・と私は聞かされていたのよ

だけど本当は違った理由まではよく分からなかったけど
組織に殺されてたの・・・

私が聞いた姉の最後の言葉は『明美と志保を頼んだわ』
だった

それを聞いていた時はその言葉を姉の遺言だなんて気づ
かなかったわ」

ここまで話しシャロンは置いてあつた水を一口含み
また続きを話し始めた

シャロン「姉が死んだ原因・・・何だか解る？」

出来損ないの名探偵 APTX4869よ

・・・皮肉よね自分が作つていた薬で殺されるなんて
しかもその後は自分の娘に研究を続けさせられてたのだ
から」

場の空気は重くなる一方だった
しかしシャロンは続けた

シャロン「私はある時姉が事故で死んだんじゃないと知つたのよ
だから組織に復讐するつもりでいたのよ
それで黒の大砲を打ち破れる銀の弾丸を探してたの
そして見つけたのが・・・」

ここまで目を瞑つて話を聞いていた
灰原が口を開いた

哀「工藤君ね」

シャロン「ええでもその前に大友兄弟に目をつけた
けどその兄は銀の弾丸になる素質は十分にあつた
けどそうなる前に組織へ入って来てしまった

弟は銀の弾丸になるには少し力不足だった
そして次に目をつけたのは赤井秀一

灰原のほうを向いて「明美ちゃんの彼氏よ」と言った
しかし灰原は何も反応を見せなかった
そしてシャロンは続けた

シャロン「彼は完璧だったけど何かが足りなかった気がしたの

それは今でも分からないけど

そして新一君に会った・・・そうね貴方が高校1年生で
ニューヨークに来ていた時よ

覚えているかしら？貴方がある老人を助けた事を」

コナンは「うん」と唸ってから

「もしかして？」と何かを閃いた様に飛び上がった

シャロン「そうあの老人は私よ

そしてその時直感が私にこう言ったの

『彼が運命の silver bullet だ』ってね」

彼女が今日初めて見せた笑顔だった

【Black】協定

哀「それで？どうする訳？」

そこで隆が答えた

隆「2日後の定期会議に連れて行く」

コナン「定期会議？」

隆「ああ実はFBIの赤井秀一とCIAの本堂姉弟

そしてICPOの黒羽盗一で月に1回話し合ってるんだ」

洸太を除いて皆驚きの表情を浮かべていた

隆「そこでベルモットであるシャロンはオレらの仲間だって事を言えれば良い訳だ」

哀「私はまだベルモットを信用した訳じゃないのよ」

と冷たく言い放った

隆「何故あの時シャロンが志保を襲ったか教えてやろうか？
それは守るために殺そうとしたんだよ」

平次「どうゆう意味や？それ」

隆「裏切り者のシェリーである宮野志保を殺す事で
小学1年生である灰原哀を守ろうとしたんだよ」

快斗「ならどうして途中でやめたんだ？」

逆に中途半端だったら危なくねえか？」

隆「それはきつと新一を試したかったんじゃないか？

そうなんだろう？ シャロン」

シャロンは肩を竦めて言った

シャロン「ええそうよ

まったく・・・心の中まで読み取るのは何の能力かしら？
プライバシーの侵害よ」

隆「オレに秘密主義は無意味だからね」

ニカツと笑っていた

隆「志保シャロンを信用できる様になった？」

哀「正直まだよ・・・

でも皆が信用できるんだったら
OKって事にしておくわ」

洸太「責任回避」

ボソツと言った

それを良く聞き取れなかった灰原は聞き返した

洸太「決定を他の人に押し付けて

失敗した時の心理的逃げ道をつくってるって言ったの

俺の言いたい意味分かる？」

灰原はフツと笑った

哀「ええ理解したわ

私は逃げるつもりは無いから・・・
協定を結びましょ？ベルモット」

シャロン「ええ私をシャロンと呼んでもらえる事を心待ちにしてるわ」

その時3人のケータイが鳴った

隆「げっジンからだ

本部に集合だつてさ

あと6時間後までこの一室借りてるから
遊んで待つてて」

と言つて隆とシャロン、洸太の3人が出て行つた

平次「なんとかケリつきそうに

なつてきよつたなあ工藤」

快斗「ホントやつとゴールが見えてきたつて感じ」

哀「精々奴らを甘く見て痛い目に遭わないことね」

おい灰原もつと空気読めつて

哀「何か言つた工藤君？」

・・・何も言ってねえよ

コナン「よし！せっかくだから歌って待ってるとするか」

皆が耳を塞いで大変になった事は言うまでも無い

コナン「今回は結構自信あつたんだよね」

平次「何処がや！ボケエ！！！」

点数見てみ」

コナン「へえ点数なんか出るんだ」

結果はなんと23点

ついでに皆の最高点を言うと

灰原89点、服部78点、黒羽81点だった

コナン「俺ってやつぱ音痴？」

全員が速攻で頷いたのは言うまでも無い・・・

【Black】内部

スピリタス・隆side

オレは皆と別れ本部へ行った

スピリタス「何か用か？ジン」

ってか用も無しに呼びはしねえだろうけどな

ジン「ああ2週間後に俺は渡米しなくてはならなくなった

そこでボスから直々にスピリタス

お前に日本を託せと言われた」

ああなるほどジンがボスに呼ばれて

その間オレが日本支部のリーダーをやれって訳ね

スピリタス「了解・・・んでそれだけ？」

ジン「お前はな・・・ベルモットお前は付いて来い

ボスからの命令だ

それからナポレオンお前は日本にいる

FBIの動きを調べてくれ」

ジンがそこまで言い終わった時

今まで4人しか居なかった空間に1人入ってきた

ウォツカ「兄貴！会議の準備できやした」

スピリタス「会議？」

ジン「ああ組織内部で不審な動きがあるらしいからな」

ドキッと一気に心臓が飛び上がりそうになった

焦るな・・・ポーカーフェイス、ポーカーフェイス

スピリタス「内部かぁ・・・誰？」

ジン「キールの野郎だ」

やっべ・・・マジかよ

スピリタス「そうか・・・じゃあオレが見張つとくよ

どうせ下っ端の連中を見張りに付けてるんだろ？

それだったらオレの方が技量はあるし・・・」

とそこまで言つてベルモットとナポレオンの方を見た

もちろん同意を求める意味でだ

2人とも理解してくれたのか「それが良い」と口を合わせてくれた

スピリタス「それに会議めんどくさいし・・・」

ジンはオレの言葉に呆れていたみたいだが

会議は開かない事になった

それから暫く話し

ジンとウォツカは部屋から出て行った

隆「マズイ事になってきたな

ジンに気づかれるのも時間の問題だな」

洸太「瑛海さん連れてくるよ」

隆「ああよろしく」

そして洸太は出て行った

隆「どうする？定期会議の2日
なんか待ってられないぞ」

シャロン「じゃあ今晚にでもすれば？

その・・・定期会議とやらを」

オレは少し考えて

隆「分かった赤井さんに連絡とってみる」

と言って赤井さんにメールで了承を取った

隆「OKだつて

それとシャロンの事も少し書いておいたから
なんとかかなると思う」

シャロン「分かったわ」

そして洸太が本堂瑛海を連れて
部屋に戻ってきた

オレは定期会議が今晚に変更になった事

これからはベルモットであるシャロンも仲間になった事などを話し一応は納得させた

瑛海「それで何時に集合？」

隆「それはいつも通りの時間にいつもの場所で

でもジンに瑛海さん疑われてるからオレの車に乗って」

瑛海「じゃ私忙しいからまた後で」

洸太「俺は？」

オレは「お前もオレの車に乗れ」と言っ

隆「んじゃカラオケに戻るから」

と言に残し日本支部の本部を出た

【Black】会議

俺がしょぼくれているといつの間にか隆が俺の前にいた

隆「どーした？」

コナン「どーした？・・・じゃねーよ

・・・んでどうだった？」

すると隆はジンがアメリカに行く事や

それにベルモットがついて行く事

そして本堂瑛海がジンに疑われている事などを話した

平次「なあそれってヤバいんとちゃうか？」

しかし隆は平静を保って言った

隆「ああ・・・まあね

でも定期会議で突入の日を早めてもらうつもりだし

瑛海さんはオレが監視する事になったし

きつと大丈夫なんじゃない？」

俺は呆れて言った

コナン「おいおい随分適当じゃねーか

相手はジンなんだろう？

お前のこと疑うかもしれないじゃんかよ

その話を聞いていると自分から監視するって言ったみたいだ

しよ」

隆「だから大丈夫だってオレって組織の中では
信用されてんだから」

快斗と洸太以外はジト目で隆を見つめてた
そこで立場の無くなった隆に快斗が助け舟を出した

快斗「大丈夫だってみんな信じ合おう？ね？

それにこう見えても自称・ボスのお気に入り！
おまけにジン日本支部長の信頼も厚い！！
どう？これで」

哀「まあ良いわ

それで？私もその定期会議に
出してもらえるのかしら？」

隆「ああOK

てか皆連れて行く予定だったし」

とここで今までの重苦しい雰囲気を変え
新しい話題に変えた

隆「そういえば新一何点だった？」

しかもニヤニヤしながら聞いてきた

コナン「……………にじゅうさんてん」

隆「え？もう一度

大きな声でどうぞ」

俺はあきらめぶつきらばうに

「23点」と答えた

隆「マジ？そんなに酷かったんだ

新一の音痴」

コナン「っだあゝ！！音痴って言うな！！」

後で聞いた話だが俺の声は

カラオケボックスの廊下まで響いてたらしい
防音完璧な部屋だったはずなのにな・・・

哀「それより行かなくて良いの？

会議する秘密の場所に」

洸太「そろそろ行こうぜ兄貴」

隆は「ああ」と答え

カウンターで会計を済まし

隆の愛車となっている黒のボクスターに乗り込んだ
その後に俺らも続いた

乗って40分くらい経っただろうか？

そのぐらい時間が経ってから車が止まり
ある駐車場に停めた

隆「これからFBIの赤井秀一さん

CIAの本堂瑛海さん、本堂瑛祐君

ICPOの黒羽盗一さん、そしてシャロンと会うけど

実はさつき赤井さんからきた返信で

大体計画が出来上がったって言ってるんだ

んでオレらが今からする会議の内容は

FBI、CIA、ICPOが練った案をより完璧にすることが
オレらの仕事

お分かり頂けたかな？」

他の皆からは「分かった」と聞けた
もちろん俺も言った

「じゃあ行くか」と言って
俺達は建物の中に入っていった

【Black】作戦

俺らは建物に入り地下へ行った
すると派手な物音がした

続いて「痛った〜！」と声が聞こえた

隆「この部屋だから

入っていいよ」

俺達は「失礼します」と言ってから

次々に部屋に入っていた

そこには屍餅をついている

本堂瑛祐とそれを心配顔で見つめる本堂瑛海

呆れ顔でその成り行きを眺めている赤井秀一

そしてこっちに向かって歩いて来ている黒羽盗一がいた

黒羽「やあ久しぶりだな快斗」

そこから親子水入らずの時間が始まるのかと

思いきや隆が「それは後でやってくれませんか」と言っで遮った

集合時間より少し早かったらしく

少し時間が経ってからシャロンが来た

隆「んじゃ皆集まった事だし

始めるとするか」

と言っで定期会議は始まった

隆からまず話し始めた

内容はこうだ

コードネーム・ベルモットであるシャロン・ヴィンヤードがこれから俺達の仲間になった事

ジンが2週間後にアメリカに渡米する事

シャロンもジンの渡米について行く事

それに応じて日本の支部のリーダーになるのが

コードネーム・スピリタスである自分である事

そして支部長になる事を推薦したのはジンであって

それに同意したのが今アメリカにいるボスである事

つまりこれから日本支部を壊滅させるのは容易になるが

高等幹部であるジンを倒すことはこれから益々難しくなる事を

言って日本支部壊滅作戦の決行日を早める事などを主張した

もちろん赤井さんはそれに同意した

きつと明美さんの仇を討ちたいのだろう

しかし反対したのはCIAである2人本堂姉弟

ICPOに所属している黒羽盗一さんは考えている様子だ

赤井さんは同意を求めるため俺に話を振ってきた

赤井「ボウヤはどうするのが得策だと思う？」

俺は逆に質問した

コナン「FBIとCIAとICPOである程度の作戦を

すでに作ってあるんでしょ？」

赤井「ああ」

コナン「それに僕らは何か良い案があつたら

工夫を施すのが役目だから

その件については何も言わないよ

・・・だけど僕個人としてはジンを倒したい

明美さんが亡くなったのは僕にも責任があるから」

そうあと少しでも早く現場に駆けつけれたら

明美さんは殺されずに済んだかもしれないのだった

隆「まあオレは早めた方が良いと思う

あつそうだ！3大組織が練った作戦見せて」

作戦は図になっていた

| | |
|-----------------|--------------------|
| 屋上 - ヘリポート | 担当 - CIA（腕利き） |
| 8階 - 会議室 | 担当 - FBI |
| 7階 - 幹部の自室 | 担当 - スピリタス、ベルモット、 |
| FBI（腕利き） | |
| 6階 - 下っ端の部屋 | 担当 - ICPO |
| 5階 - 下っ端の部屋 | 担当 - 機動隊 |
| 4階 - 武器庫 | 担当 - ICPO（腕利き） |
| 3階 - 下っ端の部屋 | 担当 - SAT |
| 2階 - 金庫 | 担当 - CIA |
| 1階 - 見張りが数人 | 担当 - 長野県警（腕利き） |
| 地下1階 - 実験室 | 担当 - 俺ら（コナン、灰原、黒羽、 |
| 服部）、ICPO | |
| 地下2階 - コンピューター室 | 担当 - ナポレオン、FBI |
| 地下3階 - 射撃・狙撃練習場 | 担当 - FBI |

【Black】犠牲

俺はさっき見た図を見てこう言った

コナン「作戦じゃなくて

これは担当区域を決めただけじゃねーか！」

平次「ナイス突っ込みや！」

・・・ってどうゆう事じゃいー！」

隆「まあまあ落ち着けよ」

と言って宥める

隆「オレ的には地下に人はいないと思う」

赤井さんや俺を含めたその場にいる
全員から疑惑の目が向けられた
しかしそれを全く気にせずに続けた

隆「実は組織の日本支部の近くに

・・・というよりは隣に

かなり大きな川が流れてるんだ

しかもその上流にはダムがある

その放水の時にポンプが何かで地下に水を流し込む
そしたら地下に攻め込む必要が無くなって

人員を地上にまわせるんじゃないか？」

その言葉に皆が「なるほどな」という顔で聞いていた

でも疑問が出てきた

コナン「それじゃあ地下にいる奴ら

溺れて死んじまうじゃねーかよ

それにもう1つコンピュータ室に

組織のデータは集まってるんだろ？

それだったら大事なデータまで

無くなっちまうじゃねーかよ」

その言葉に洸太が答えた

洸太「まあ地下にいる奴らは溺死するだろうな

でも人員的には地下にいる人数は少ないから

被害は最小限に出来ると俺は思うぜ

それにデータだったら日本にある組織のデータだったら

すでにバックアップ済みで俺が持つてる」

次は灰原が血相を変えて言った

哀「それじゃあAPTX4869のデータも?！」

隆「いやそれは残念だけど・・・

それはもう本部にあるから

いくら洸でも本部にあるデータは無理だ」

俺はその言葉に思ったより落胆しなかった

その後に隆が悲しげな表情で言った

隆「この戦いで間違いなく犠牲が出る

それは・・・」

と言って俺と灰原の目を見て続けた

隆「工藤新一と宮野志保だ」

きっぱりと言った

しかし何故か俺は納得してしまった

隆「でも江戸川コナンと灰原哀は大丈夫だと思う

それでも工藤新一と宮野志保に

こだわるのであれば今回の作戦は白紙に戻すよ」

その言葉に灰原は

哀「私は構わない・・・

解毒剤が出来ても戻る気は無かったから

でも工藤君はダメよ

彼女が待っているんだから」

と言ったが俺は

「灰原が良いなら俺も良い」と言ってこの話を終わらせた

洸太「工藤新一の死はかつこよくしてやるよ

どんなのが良い？」

とか言ってその場の雰囲気をもてなした

隆「シャロンには悪いんだけど

日本支部壊滅させたら本部に戻って

NOCやってくれない？」

その言葉にシャロンは

「せめての罪滅ぼし・・・それぐらいやるわ」と言っ
て了承した

隆は白い紙を取り出し

隆「もう一度作戦を練り直すか」

と言っ
て話し合いを進めた

【Black】確定

新しく練り直した案はこうなった

屋上 - ヘリポート

担当 - CIA（腕利き）

8階 - 会議室

担当 - FBI

7階 - 幹部の自室

担当 - スピリタス、ベルモット、

FBI（腕利き）

6階 - 下っ端の部屋

担当 - ICPO、FBI

5階 - 下っ端の部屋

担当 - 機動隊、俺ら（コナン、黒

羽、服部）

4階 - 武器庫

担当 - ICPO（腕利き）

3階 - 下っ端の部屋

担当 - SAT、ICPO

2階 - 金庫

担当 - CIA、FBI

1階 - 見張りが数人

担当 - 長野県警（腕利き）

地下1階 - 実験室

担当 - 水攻め

地下2階 - コンピュータ室

担当 - 水攻め

地下3階 - 射撃・狙撃練習場

担当 - 水攻め

外で戦況確認が灰原とコードネーム・ナポレオンである泷太
その他のFBI、CIA、ICPOの方々

隆とシャロンはスピリタスとベルモットとして元からいて
作戦が始まったのと同時に

内部で騒ぎを起こす事になった

下から攻める部隊はその階を制圧出来次第、上の階に行き
逆になら攻める部隊は下に行き

最終的には7階で集まる事になった

コナン「よし！これで良いんじゃないか」

作戦が決まったところで俺が言った

快斗「そーだな

って言うかお前の正体

ばれちまったんじゃないか」

ハハハ・・・忘れてた

ま、良つか今更誤魔化せないだろうしな

隆「赤井さんFBIはどのくらい準備に時間がかかる？」

赤井「2・3日だな」

本堂「私達も2・3日くらいね」

聞かれる前に瑛海さんが言った
それに続いて快斗の父さんが

黒羽「2日間は欲しいな」

隆はそれを聞いてから

隆「じゃあ作戦を予定より早めて

5日後の5月10日って事で

あと戦闘に参加する組織の幹部は10人くらいだけど
下っ端はかなり居ると思うから

ちゃんと人数的にも防具的にも準備しといて

それじゃあ・・・解散!!」

という訳で本日の会議はお開きとなった
そして俺らは帰路についていた

隆「もう7年くらい経つのかぁ」

と呟いた

快斗「何が？」

隆「ん？オレが組織の存在に気づいてから

・・・とは言ってもその時は『東京』って言う
日本で独立していた組織だったんだけどさ」

何となくその言葉を俺は聞き流した

あ、そういえば！みたいな感じで隆が俺達に聞いてきた

隆「彼女達どうする？」

彼女達とは蘭や和葉ちゃん、青子ちゃんの事を言っているのだろう

平次「それは理由でも付けて返すしか無いやろ」

快斗「そうだな」

俺もそれに同意し

どうやってこの状況から離れさせるかを考えた

洸太「滋賀にでも行かせたら？」

無理に返そうとすれば逆に怪しまれるだろ？」

平次「せやな」

と言って俺達もそれに同意した

【Black】準備

時間なんて過ぎる時はあっという間だ
あの定期会議から4日経ち今は5月9日だ

蘭「じゃあ行ってくるね」

と女3人組みは疑いもせずに琵琶湖に向かった
2泊3日の旅行だと言ってたから明日は帰って来ないだろう

隆「じゃあ新一はこれでも持つ？」

と言つて物置部屋から出したのは

『FNブローニングM1910』だった

隆「これの最大装着弾数は7発だから」

俺の有無を言わずに投げてよこした

隆「んーと快斗はこれなんてどう？」

と言つて取り出したのは

『SIG SAUER P230』

隆「いつも警察に追われてる身としては

警察の拳銃も使ってみたくない？

そして平次は拳銃似合わなさそうだから

『雷切』貸してやるよ」

コナン「お前どんだけ拳銃持ってたんだよ？」

隆は平然として

隆「いや拳銃だけじゃないよ

AK-47とか他の種類も持ってるから

あ、ついでに言うとおれはワルサーPPKとデリンジャー

それにAK-47持って行く」

洸太「そろそろ行こうぜ兄貴」

隆は「じゃ出かけてくる」と言って出て行った

スピリタス・隆side

オレはボクスターで組織に行った

ジン「今日の会議はちゃんと出てもらっぞ」

スピリタス「ああ分かってる」

と言って席についた

ジン「実はFBIが俺らの居場所を探っているらしい
なるべく他の場所に移った方が良いと思う」

ベルモット「あら貴方にしては随分と弱気な発言ね」

ジンはその言葉を聞き流した

ジン「今回はスピリタスに判断を任せる

俺は約1週間後には居ねえからな

支部長としての最初の仕事だ」

スピリタス「じゃあ日本支部の本部に全勢力を集結させよう

もちろん研究者や下っ端達もだ

ナポレオン！全ての基地に今すぐ連絡して

今日中にここに集まる事を伝えて

あとそれと此処にある以外の組織のデータを
全てお前が作った『^{ナイト}闇の男爵^{バロン}』で抹消して」

ジン「フツ・・・お前ならそうすると思った」

ある人物が首を突っ込んできた

ウォッカ「兄貴これで会議は終わりですかい？」

ジンが「ああ」と答えたのと同時に

全員が席を立った

もちろんオレも席を立ち4階に向かった

4階には武器庫がある

拳銃は組織に所属している全員が最低1丁は所持している

しかし、幹部以外は・・・コードネームを貰っていない奴以外は
最大装着弾数以上の弾は持っていない

隆「どうやって運ばうかなあ」

ふと窓から大きなトラックが見えた

オレはそれを使おうと思った

今オレが考えていた計画はこうだ

組織が持っている弾を全て盗り戦闘で不利にさせる事

その後オレは計画を実行し

終わった頃には既に5月10日を迎えていた

【Black】決戦

スピリタス・隆side

今、現在の時刻は午前2時

昨日の11:56に全国から組織の人間が此处に集合した

作戦決行時刻は午前4時

オレとシャロンは内部から崩し

赤井さんと本堂さんはそれぞれFBI、CIAとして外部から崩す
つまり今、組織の幹部構成員として此处に居るのは9人
その内オレとシャロンを抜いて7人

しかし下っ端や研究員などの普通構成員を合わせると
かなりの数になる

そんな事を考えていると4時になった

隆「ひと暴れするか」

新一・コナンside

建物の外で時間が刻一刻と過ぎるのを待っている

ジヨディー「Let's go!!」

と言ったのと同時に建物の中へ突入して行った

1階は長野県警の刑事部の担当区域のため

俺達は次々と階段を上って行つた
かなり騒々しい音がしている
ヘリコプターの音や銃撃戦の音
人のうめき声なども聞こえた
そしてようやく俺達の担当区域である5階にたどり着いた

機動隊がいたお蔭でもあるが

5階での戦闘は想像よりもかなり時間がかかったが終わった

しかし俺も黒羽もまだ拳銃を使っていない

まあ黒羽はトランプ銃は使っていたが・・・

服部は刀背打ちで敵を気絶させるだけに留めている

「今のところまあまあ順調だな」そう思い

6階へと向かった

階段を上っている最中に無線で連絡が入った

哀『工藤君

聞こえる?』

コナン「ああ聞こえてるぜ」

哀『当初予想していた構成員の数と

今戦つてる構成員の数が全く合わないの

これってどう思う?』

俺は普通に「計算ミス」だと言った

哀『でもFBIの赤井秀一が計算したのよ?

彼がこんなにもミスするかしら?』

コナン「なあ灰原

それって何人くらいずれてるんだ？」

哀『そうね』

・・・100人〜130人くらいね』

確かにそれはおかしい

コナン「それって少ないんじゃないって

多いって事か？」

無線からは「ええ」という声が返ってきた

コナン「分かった」

哀『あ、だけど地下に居る人数は分からないから

多分だけでもとずれてると思うわ

あと工藤君気をつけなさいよ』

俺は「わーってるよ」と言い無線を切った
隣で聞いていた服部が聞いてきた

平次「なんやって

ちっこいねーちゃんからやる？」

コナン「ああ予測していた構成員の数と

実際にいる構成員の数が3ヶタで合わないらしい

しかも少ない誤算なら嬉しいんだけど・・・

どうやら多いらしい」

服部は3ヶタずれていた事に驚いていたが

黒羽は前向きだった

快斗「んな事で立ち止まってちゃダメだろ？」

それより今、前にいる敵を倒して行こうぜ

自信の無い名探偵は見たくねーからよ」

そして俺達は6階へ踏み込んだ

【Black】血戦

俺達3人が6階に足を踏み入れた時には
地獄と化していた

平次「うわっ！これじゃあまるで

地獄絵図みてるみたいやないか」

銃弾に倒れている人が敵味方関係無く
折り重なって倒れていたのであった
しかし銃撃戦はまだ行われていて
血があちこちに飛び散っている

機動隊の赤坂さんが話しかけてきた

赤坂「この階は僕たちに任せて

君達は下n」

赤坂さんが話し終わる前に服部が遮った

平次「お言葉に甘えて

この階は任せて俺らは上に行こか

なあ工藤！

はようせーや黒羽

赤坂はんの氣い変わらんうちに行くで」

と言って俺達はジンやウォツカ達、組織の幹部がいる
7階の扉の所まで来た
そこでまた無線で灰原から連絡が来た

哀『もしもし工藤君？

まだ生きてるかしら？』

コナン「勝手に殺すなよな」

灰原はフツと笑って話し始めた

哀『貴方にお知らせよ

5階から下は制圧出来たそうよ

6階はこちら側が優勢で8階は劣勢

屋上は制圧出来たみたいよ』

コナン「7階はどうなってる？」

哀『分からないわ

7階からは一度も連絡が入って無いから

ところで貴方達今何処にいるのかしら？』

服部が割り込んできて

平次「その7階や

とは言ってもまだ扉の前やけどな」

灰原は血相を変えて

入る事を止めると言ってきたが

コナン「じゃあ切るぞ」

と言って無線の電源をOFFにした

快斗が扉を開けた時だった

キルシュヴァッサー「待ってたぜ子鼠さん達」

目の前黒尽くめの男が立っていた

その男は俺達に拳銃を向けた

それに対して俺達もそれぞれの武器を構えた
前方から聞きなれた声が聞こえてきた

スピリタス「キル！チェックメイトだ」

そう言ったのとほぼ同時に黒羽が撃たれた

平次「黒羽あ！！」

服部が斬りかかった時また拳銃が火を噴いた

それと同時に服部も撃たれた

幸いどちらも急所は外れているみたいだ

俺は自分の持っていた拳銃を敵の眉間に定めた

しかしまだ撃ってないのに

敵は眉間から血を噴き出しながら倒れた

コナン「へ？」

俺が間抜けな声をあげると前方から銃弾が放たれた

その銃弾は俺の持っていた拳銃を弾き飛ばし

俺の手を痺れさせた

コナン「何考えてんだ！？」

スピリタス「お前らはまだ早い
もうこれ以上来んな」

コナン「・・・オメエ何言つてやがる
これは俺の事件だ！」

スピリタス「これ以上来たらお前は確実に死ぬ
・・・止めておけ」

それはオメエも一緒じゃねーか

コナン「バーロオそれはオメエもだろ！！
お前こそ１人で行ったら危ねえじゃねーか！！」

スピリタス「この組織を確実に壊滅させることが出来るならば
公共の利益の為にオレは喜んで死を受け入れようって
な」

その場の雰囲気が変わった

隆「オレは別に犠牲者を
増やしたい訳じゃ無いからな」

そう言つて拳銃の引き金を引いた

【Black】終決

スピリタス・隆side

オレは引き金を引いた

コナン「うっ！」

新一の顔が歪んだ

スピリタス「大丈夫アキレス腱を切っただけだから

あとは無線で洩や志保に連絡して

救助されるのを大人しく待ってるよ

もし、誰か来たら快斗の持つてる拳銃を使え

See you again」

なんか久しぶりに英語使った気がするな

そんな場違いな事を考えながら廊下を早歩きで進んでいった

両脇にはFBIの隊員が血まみれになって倒れていた

パラパラと「Help me」と聞こえてくるが今は無視し進んだ
すると途中でベルモットに会った

スピリタス「戦果は？」

ベルモット「コニヤックだけよ

貴方は？」

スピリタス「キルだけ・・・

そっぴゃパイカルとグラッパは地下にいたよな」

シャロン・・・いや今はベルモットだな

ベルモットは「ええ」と答えた

と言う事はあとコードネーム付きは3人だな

隆「・・・シャロンあとは任せて

ベルモットとしてアメリカに行ってくれ」

彼女は「分かったわ」とだけ言い

その場から離れていった

それから歩き

気づけばジンの部屋の前まで来ていた

普段ならノックしてから入るが

今回はいきなりドアを開けた

オレはドアを開けた瞬間

『ああこの空間は殺気で充満してるな』と感じた

それもその筈

何故なら今はジンと赤井が対峙していたからだった

ふと気配を隣から感じた

その正体はウォッカだった

拳銃を持つてはいるが構えていなかった

ウォッカ「スピリタスですかい

ジンの兄貴は手を出すなと言った

だから手を出しては駄目ですぜ」

まあ元から出す気は無いけどさ

それからはウォッカも黙り込んだ

あれから何分経ったんだろう

もしかしたら何秒も経ってないかもしれない
けど今のオレにはかなり時間が経っている気がした

『バン！！』

と突然どちらからも銃弾が発射された
のと同時に2人が地面に倒れた

ジン「ス・ピリ・・タ・・・ス」

何故かオレが呼ばれた
念のためワルサーPPKを用意し近づいた

スピリタス「何か用？」

ジンは左手に持っていた

愛用のベレッタM1934をオレに渡してきた
オレがその行為にクエスチョンマークを浮かべていると

ウォッカ「きつと兄貴は『託す』と言いたいんですぜ
そうですね兄貴」

『そうだったんだあ敵ながら良い奴だな』とか思っている
上から爆発音と大きな揺れを感じた

ウォッカ「兄貴の心臓が止まったら

この建物にあるいくつものプラスチック爆弾が
爆発する仕組みになっていやした」

隆「マジ？」

ウォッカ「死ぬ前に兄貴の仇をとらねえと」

そう言つて赤井さんの方に近づいた

オレは躊躇いもなくウォッカに向けて

ついさつき形見として貰ったベレッタで撃った

その瞬間上から落ちてきた瓦礫によって頭を打ち
オレの意識は深い海に落ちていった

【Black】代償

この勝利の代償はあまりにも大きかった

犠牲者の数はこつち側と組織側合わせて3ケタに達していた

怪我人はこの作戦に参加した人ほとんど全てにあたる

犠牲者の中にも突然爆発して遺体すら出てこなかった人もいた

それは赤井秀一さんとジンそれにスピリタスであった大友隆の3人だ

隆の母さん・・・大友警視から聞いた話だが

隆は警察の潜入捜査をしていてその内容が今回の事件だった

つまり隆の死は殉職となる訳だ

大友警視は潜入捜査していた事は知っていたが

この組織を彼が中学生の時から追っていた事はその時その場にいた隆の弟の洸太に知らされて大層驚いていた

しかも潜入捜査は警察で極秘でと言われる前からやっていた事も洸太は言った

更に洸太は自分の事についても言った

洸太「実は俺もコードネーム・ナポレオンとして

組織の内部で潜入捜査してたんだ

俺の得意な情報分野で

今まで母さんに黙ってて悪かったな」

と赤裸々に話していた

その3日後に工藤新一が死んだ

きっと洸太が情報操作やわざと情報流失をさせたりして

マスコミに行くように仕向けたんだろう

ある新聞社の記事は下記の内容だった

『世界的有名な推理小説家、工藤優作と

伝説となった幻の女優、藤峰有希子の間に生まれた

工藤新一（20）死去

彼は高校1年後期から2年前期までの間

高校生探偵として活躍し『平成のホームズ』や『日本警察の救世主』などと呼ばれ

数々の難事件、迷宮入り事件を解決してきた

しかしここ数年表舞台にパタリと出てこなかった

理由はつい先日起きた『謎の黒い巨大組織崩壊事件』に関わっていたからである

彼は密かに裏で活躍しそして組織の建物崩壊に巻き込まれ亡くなったのである

心から冥福をお祈りいたします』

という感じだった

そして5月15日に大友隆の葬儀が行われた

とは言っても遺体が無い不自然な葬儀だったが

それには多くの参列者が来た

警察関係者やFBI、CIA、ICPOの方々

何故か野球関係者の人も多くいた

これはあとから聞いた話だが隆の父親はプロ野球の人らしい

まあ俺は野球を見ないから分からないが日本では有名な選手だそうだ
もちろん難見沢の友達やその他諸々の人たちも参列していた

翌日は工藤新一の葬儀だった

俺や俺の正体を知っている奴らは

『工藤新一とのお別れ会』みたいに思っていたが・・・

蘭には本当に悪いと思ってる

待っててくれと押し付けて束縛しただけだったから

こうして色んな人に色んな形で傷をつけて

俺の今までの人生の中で一番大きな事件に幕を閉じた

【Black】エピソード

ベルモット・シャロンside

これでシルバードレッドが居る日本にはしばらくは平穏な日常が戻るわね

私がスピリタス・・・いえ大友隆警視監のお葬式に出たことは全くクールガイは気付かなかったみたいね

私はそれに貴方のお葬式にもちゃんと出たのよ？

とは言っても江戸川コナンとして生きてるけどね

まあ志保ちゃんはずいぶんくれたみたいだったけど・・・

また何処かで会いましょう？

私の愛しのシルバードレッド君

コナンside

俺は隆の最後に会ったときに

印象に残っているのは黒い髪の毛が

茶色い瞳に凄くマッチしていた事かな

何で1人で無茶したんだよ

・・・バーバオ

哀side

貴方からの最期の電話・・・他に話す事無かったの？

英語でeyeにして灰原瞳はいばらひとみにすれば可愛かったのに

って意味不明じゃない！それに最後のこの言葉

When you have eliminated the impossible

whatever remains, however impro-
bable, must be the truth.
貴方もホームズファンだったの？

平次 side

んじゃ一言だけ

はよー戻ってこんかい！！！！

快斗 side

俺さ初めて会ったときに

直感でコイツとは気が合うなあと思ったんだ

・・・ああ今回だけは

紅子の言葉ちゃんと聞いとけば良かったのかなあ？

洸太 side

兄貴また何かあったら頼ってくれよ

隆 side

馬鹿か！

自称・迷宮無しの名探偵さんよお

オレの最期の謎掛けちゃんと解いてくれよ

・・・じゃーな皆

また何処かで会える日を楽しみに待ってるぜ！！

a f t e r t i m e

a f t e r t i m e

~~~~~原作~~~~~

【名探偵コナン】

「ジャンル」

推理・ミステリー

<オリジナルキャラクター>

あり

ウツキ君からの小説説明

この小説は前作の『Black Wolf vs My Comrade』から

2年が経ったある日、帝丹小学校に帰国子女が2人転校してきた

その2人の正体とは・・・?!

では、『after time』スタートです!

## 【A T】登場人物

江戸川コナン（えどがわこなん）

帝丹小学校6年生

黒の組織（Black Wolf）を確実に壊滅させるかA P T X 4 8 6 9のデータを優先させるかで確実に破滅させるを選び生涯江戸川コナンとなって生きすることを決めた

今では「小学生名探偵」と呼ばれていて組織の日本支部が潰れてからは工藤邸に住んでいる

小嶋元太（こじまげんた）

帝丹小学校6年生

少年探偵団の団長で大好物は鰻重でいつも考えている  
勉強はとことん苦手でいつも赤点らしい

円谷光彦（つぶらやみつひこ）

帝丹小学校6年生

少年探偵団の一員で年を誤魔化している者達を除けば  
学業は学年トップである

吉田歩美（よしだあゆみ）

帝丹小学校6年生

少年探偵団の一員で性格は明るく前向きで  
活発な女の子

灰原哀（はいばらあい）

帝丹小学校6年生

元Black Wolfの科学者で当時のコードネームはシェリー

本当の名は宮野志保である

今は江戸川コナン小学生探偵の良き相棒

江戸川「スコット」隆起（えどがわ「すこつと」りゅうき）

帝丹小学校6年生

1学期が始まるのと同時に転校してきた謎の少年

彼曰く様々な世界の国に行った経験があるマジックも出来るらしい  
日本語を含め英語・ドイツ語・フランス語・ロシア語を話せる  
授業中は中国語を勉強していて全く聞いていない

江戸川「イレエネ」皐月（えどがわ「いれーね」さつき）

帝丹小学校6年生

隆起の双子の姉で弟同様1学期が始まるのと同時に転校してきた  
弟も語学に優れているがそれ以上に優れている様子  
隆起のストッパー役でもある

## 【AT】File・0

国際犯罪組織Black Wolfの日本支部を壊滅に追い込んで早くも2年が経っていた工藤新一、いや江戸川コナンは人生二度目の小学校6年生を迎えていた

しかしBlack Wolfが完全に壊滅させた訳ではなくあくまでも日本支部が無くなったというだけの段階だだが以前より平和で過ごしやすい環境になっている世界での出来事・

そんな中コナンにある転機が訪れる

それはBlack Wolf、黒の組織関係の事だった

果たしてそれが吉と出るか凶と出るか

・ ・ ・

【AT】File・1

今日から人生二度目の小6クラスはC組だった  
クラスメートには少年探偵団の皆もいた  
そして朝からクラス全体で持ちきりの話題があった

歩美「今日転校生が来るって知ってた？」

光彦「はい！知ってましたよ

このクラスに2人も来るんでしたよね？」

元太「教室に入った時からそんな様なこと言ってたからな」

何で転校生如きでそんなに大騒ぎするんだか・・・

コナン「で？その転校生の何処が珍しいんだ？」

光彦「よく聞いてくれました！

実は今日転校してくるお2人はなんと帰国子女らしいんです  
！」

へえ帰国子女ね

だから皆が興味があるって訳か

キーンコーンカーンコーン

担任「よく聞いてくれ

今日から帝丹小学校に来る事になった  
江戸川ちゃんと江戸川さんだ！入ってくれ」

皐月「スイスから日本に帰って来ました江戸川皐月と隆起ですよろしく願います」

隆起「オレの自己紹介まで勝手に取るな！」

江戸川「俺とかぶってるし・・・  
てか・・・もしかして双子か？  
いやでもそんなに似てないような気もするんだけど

女子1「かつこいい！」

男子1「かわいい〜」

さあな中身はどうかナイツみたいな奴もいるし・・・

哀「江戸川君何か言った？」

コナン「いえ何も・・・」

おいおい・・・なんでコイツには  
俺の心の声が聞こえるんだよ？

担任「一番後ろに席が二つ空いてるだろ？そこに座ってくれ」

って事は灰原と俺の後ろか  
ちよつと待てい！！

どーしていつつも灰原の隣なんだ？

隆起&皐月「はい」

綺麗にハモツた声が教室に響いた

キンコーンカーンコーン

〈放課後〉

今は放課後やつと面倒な授業が終わって  
皆の顔もイキイキしている時間だ

歩美「ねえねえお家はどこにあるの？」

また転校生にアタックしてる・・・

皐月「米花町二丁目56よ」

光彦「という事は新しくできた町営住宅ですね」

ポンと手を打って言った

元太「今日行っても良いか？」

皐月「ええもちろんOKよ」

隆起「姉貴いオレの意志・意見は？」

哀「どうやら反映されなさそうね」

コナン「ああ完全に姉に負けてるよな」



隆起はガクツとうなだれて

隆起「じゃあさっさと帰って人が来れる状態にしようぜ」

と言った

姉の皐月もそれに同意した

皐月「そうねじゃあまた後でね」

歩美「あつちよつと待って！途中まで一緒に帰ろうよ」

それは迷惑なんじゃないか？

まだ部屋も片付いて無いみたいだし・・・

皐月「そうね一緒に帰りましょ」

そんな簡単にOK出して良いのかよ？

隆起「じゃあ先に帰って待ってるから」

と言って何かのカウントを始めた

隆起「3・2・1【パチン】」

指が鳴ったのと同時にさっきまで隆起の姿があった場所には何も残っていなかった

光彦「あれ？隆起君何処行っただんですか？」

皐月「えーっと家かな？」

脱出マジックと同じで違いは密室かそうでないかって隆ちゃん言ってたよ」

歩美「へえ隆起君マジックも出来るんだあまるでキッドみたいで力ツコイイね」

キッドかあ懐かしいな黒羽元気にやってんのかな  
服部からは連絡くるけどアイツからは全然こねえからな

皋月「じゃ帰ろうか」

そう言ったのを合図に  
皆は学校から出た

## 【AT】File・2

あと少しで分かれ道という所まで来た

女性「キャー!!」

少し前から悲鳴が聞こえてきた

コナン「どうかしたんですか？」

女性「人が・・・血が・・・」

と動揺しているのか

全く言葉になっていない状況だった

探偵団「!？」

コナン「光彦は警察に連絡!歩美は救急車を呼んで!」

皋月「ちよつと隆ちゃんに連絡する!」

コナン「しなくて良い!」

しかし連絡をもうしていたらしく

その後しばらくして隆起が走って来た

隆起「おいおい帰国直後事件かよ」

皋月「あまり派手に動き回らないでね見ている方は心配するんだか

ら」

隆起「大丈夫！だってオレだし」

そう言つて隆起は遺体の周辺を調べ始めた

コナン「おい！隆起！あまり遺体をいじるな」

隆起「いじつてねえし調べてるんだし……てかコナンも調べてんじゃない？」

コナン「おめえはまだ子供だろ？」

しかも探偵じゃねえし……」

哀「貴方も十分子供でしょうが」

まったく言わんばかりに灰原は言った

その時遺体を調べていた隆起が何かを見つけた

隆起「ケータイか……あれ？」

ってか操作中だしつて……あオレ犯人の名前分かった！！」

探偵団の3人は純粹に驚いていた

しかし俺と灰原は子供が解けた事にとっても驚いていた

コナン「まさか！」

隆起「そのまさかだよ犯人の名前は松本弘則まつもとひろのり」

理由はケータイに「.i、7、gn9、jx」と打ち残していたからこれを普通にとすると

まつ、も、と、ひろ、のりになるって訳さ

ついでに言うとかで漢字が解ったかと言うとそれはアドレス帳に載っていたから」

コナン「だったら『』は何なんだ？」

何でも無いような素振り<sup>そぶり</sup>を見せて勝手に推理を展開した

隆起「えーっとそれは単に2周目に入るって事だよ

例えば『』って打ちたい時は

英語にしてたら『g』に戻って2周目に入るからそれで区別を付けたかっただけさ」

・・・すげえ

これが今の俺の感想

小学生のガキが探偵でしかも本来22才の俺より早く容疑者を見つけたとは・・・

哀「名探偵さんも形無しね」

と小声で言ってきた

コナン「うつせーよ」

さつき光彦が呼んだ  
警察が現場に駆けつけた

それは高木警部補夫婦（渉と美和子）だった

渉「いや、コナン君じゃないか君もよく事件に遭うね」

コナン「偶然だよ偶然」

あはは・・・と誤魔化し笑った

美和子「そうだコナン君犯人の目星ついたかな？」

どーせ私達が来る前に調べてたんでしょ」

コナン「ああそれは」

その言葉を遮るようにして口を挟んだ

隆起「被害者の会社の上司である松本弘則です」

渉「誰だいこの子は？」

始めてみる顔に驚いて夫の方が聞いた

皐月「今日から帝丹小学校に通っている江戸川皐月と弟の隆起です」

美和子「へえコナン君と同じ苗字ね

もしかして生き別れた兄弟だったりね」

あはは・・・絶対ねえな

隆起「世間話はそれくらいにして早く容疑者の松本弘則を

任意で連れてきて下さいよ刑事さん」

隆起は呆れ顔で言った

【AT】File・3

隆起が挙げた容疑者は警官に任意同行を求められると

その場でペラペラと自供し始め結局、警視庁に連行されて行った

美和子「という訳だからもう帰って良いわよ」

渉「いつもありがとねコナン君」

コナン「いや今日は僕じゃなくて

隆起が事件解決したんだよ」

俺の発言に驚きを隠せない人物がいた

渉「え！？そうだったの？

僕はてつきり君がした推理を

その子が勝手に言ってるだけかと思ってたんだけど・・・」

その言葉にムツときて

ジト目で高木警部補（夫）を睨んで

隆が言った

隆起「オレは人の手柄を横取りなんかしないって」

美和子「そうじゃありがと隆起君」

これ以上は時間の無駄かと思ったのか

すぐにお礼を言い

そして帰って行った



歩美「すっごくいい！隆起君！コナン君みたい！」

歩美は憧れの目で言ってる

光彦「ええ是非とも少年探偵団に入ってもらいたいです！」

ねえ元太君！」

元太「おうよ！今から隆起を

少年探偵団への入団を許可する！」

哀「江戸川さんは？」

と俺が疑問に思っていた事を聞いた

元太「もちろん可愛いからOKだ！」

なんだその理由・・・

皋月「じゃ入っちゃおうかな？隆ちゃんも一緒に入るよね？」

隆起「悪いけどオレはパス」

歩美「どうして？」

隆起「探偵は随分昔に辞めたから」

おいおい随分昔ってまだ小学校6年じゃねーかよ？

皋月「でも一緒に遊ぶくらい良いでしょ？」

といかにもお姉さんらしく説得してる

光彦「じゃあ灰原さんと同じ身分でいきましょう

正式なメンバーではないけど

捜査協力してくれるって感じで」

隆起「それならOK」

顔には出ていなかったが

渋々って感じで言った

そして話を変えるようにして

皋月が口を挟んだ

皋月「じゃあどうする？」

今日はだいぶ遅くなったから家に来るのまた今度にしようか

？」

歩美「そうだね…じゃあまた今度お邪魔するね」

そして3：4となって分かれ帰った

コナン「それにしてもすげえな

俺より先に事件解いちまうなんてよ」

本心でそう思ったが

気になる点はかなりあった

隆起「世の中は広いからね」

別にコナンだけが特別じゃないって事さ」

ほら・・・こういう何気ない会話とかも

哀「確かに鼻を伸ばしてる誰かさんには良い薬になるかもね」

コナン「はあ？どういう意味だ？」

少し灰原の発言がしやくに障り

ちよつと・・・いや、かなり投げやりに言った

哀「言葉通りの意味よ」

今の発言にもイラツときたが我慢しとく

その後も他愛の無い会話をして

分かれ道で2：2に別れ帰った

灰原と2人になったところで

気になっていた事をポツリと漏らした

コナン「アイツ普通じゃないよな」

## 【AT】File・4

哀「ええ確かにそうね

一般の日本人からは外れてるわね

姉の方は金髪っぽいし瞳が灰色

弟の方は私の髪の毛の色に似ていて瞳は朱や紅の種類」

コナン「まあそれはハーフの血が混ざってるからだろうけど

俺が言いたいのはそうじゃなくて」

哀「ついでに着ている服は姉が白いパーカーにジーンズ

弟が異なっているのはパーカーの色が黒という点だけよ

まあ靴までは見てなかったけど

パーカーはCOMME C A D U M O D Eだったわよ」

そんな所まで見てたのか

さすが俺の相棒

哀「ほら貴方の家の前よ

今日は昨日出た推理小説の続きを

読むんじゃない？」

コナン「あっそうだった

そんじゃまた後で」

その後、家に帰ってから小説を読み耽り

博士ん家で晩飯を済ませ家に戻り寝た

翌日

今年も新しくクラス替えがあったので  
クラスの中での親交会の最中だ

担任「それじゃあ3時間目を使つて

まず自己紹介をしてもらおう

廊下側の一番前から言つてつてくれ」

という訳で皆が皆ありきたりな自己紹介をし始めた  
まず名前、住んでる所、家族構成、好きな食べ物e t c . . .  
つまり面白くない退屈な時間だった

少年探偵団は帝丹小学校では

知らない人がいない位に知名度が上がっている  
お隣の米花小学校にも知れ渡っているのだ  
つまり俺らの顔は皆知っている訳だ

担任「次！江戸川！

．．．じゃあ誰だか分かんねえな

江戸川コナン！」

俺は軽く自己紹介をして

次の人物に移った

担任「次！江戸川隆起」

後ろで立つ気配がした

隆起「名前は江戸川スコット隆起で

前まで住んでた所はスイスで  
得意な事は・・・射撃かな？

家族構成は今は皐月と2人暮らし  
これから1年間よろしく」

と隆起が自己紹介をし終えたのと同時に

彼の姉である皐月が話し始めた

その後もクラスメイトの自己紹介だけで丸々1時間使った  
次の時間はゲームをして楽しんだ

とは言っても俺と灰原は眺めていただけだったが・・・

今日は6時間授業でとにかく長かった

俺は気になる事があっていつもよりは早く感じられたが  
まあそんなこんなで学校が終わり帰路についていた

く下校途中く

突然歩美が話し始めた

歩美「ねえ皐月ちゃんにもあるの？

ミドルネーム」

元太「なあその・・・なんとかネームって何だ？」

と常識力の無い発言に呆れて

光彦がミドルネームについて説明を始めた  
が、ほっっておいて歩美が聞き返した

皐月「ええあるわ

イレ－ネって言うの」

と答えた

隆起「話は変わるけど

今日家来る？」

もちろん皆の反応は決まっていた

3人声を合わせて『行く！！』だった

## 【AT】File・5

そのまま直行で隆起と皐月の家にやってきた  
玄関にカバンを並べて

探偵団「お邪魔します！」

と言つて部屋に入つていった

それに続き俺も入つていった  
まずはリビングを見た  
特に変わつてゐる所は無く別に普通だった

隆起「何か出すからちよつと待つてて  
出来たら呼ぶから」

と言ひ残しキッチンに行つてしまった

皐月「それじゃあ待つてゐる間に  
部屋を案内するからついてきて」

と皐月の先導で部屋を回り始めた

皐月「ここがトイレでそこがバスルーム  
それで左右に扉があるでしょう？」

その右側が私の部屋で左側が隆ちゃんの部屋よ」

そこで歩美ちゃんが部屋に入りたいと言ひ出した  
その言葉に皐月は「良いわよ別に」と言ひ許可した



皋月「あ、でも歩美ちゃんと哀ちゃんだけよ？」

男の子は隆ちゃんの部屋に勝手に入って良いから」

と言つて灰原と歩美を連れて

サッサと自分の部屋に入つていつてしまった

仕方無く俺達男3人組は

隆起の部屋へ足を踏み入れた

そこで見たものとは

壁が本棚で隠れてしまつてゐる部屋だった

光彦と元太はかなり驚いていたが

工藤家はこれの何百倍というスケールで

この様な書斎があるから

俺はそこまで驚かなかった

俺はそこよりも本の種類に興味を持った

まず数力国語の辞書がそれぞれ2・3冊ずつ

そして数力国の憲法や法律に関する本

アメリカについては州の条例まである

隣の棚は行動心理学や犯罪心理学、集団行動心理学などの

心理学に関する本がずらりと並べられてる

それまた隣は色々な種類の本が並べられてるその中には

『世界のお酒百科』なんて物も置かれていた

漠然と本を眺めていると突然光彦が口を開いた

光彦「妙ですねこの部屋は」

元太「本の量がか？それは確かに多いと思うけどよ」

光彦「いえ・・・確かに本の量は多いですが違います

僕が言いたいのはそこじゃありません

まず学生が自分の部屋に必ず置くものは何ですか？」

その問いに元太は迷わず「夜食！」と答えた

ジト目で元太の事を見ながら

自分の推理を続け話し始めた

光彦「正解は学習机です

この部屋にはそれがありません

更に可笑しな点があります

それはベッドです

まあ敷き布団でも良いんですが

生憎この部屋にはそれを仕舞う場所が無いのです」

そう言われてみれば確かにクローゼットはあるが

タンスや押し入れは無かった

元太「そんじゃあ必需品がねえ理由を聞きに行こうか？」

コナン「いや何か理由があるかも知んねえから

本人に直接聞かねえで皐月に聞いてみようぜ」

という訳で隣の部屋をノックした

【A T】File・6

時間はほんの少し遡り男女で別れた所

歩美「あ、お化粧道具がたくさんある」

歩美は「たくさんある」と言っているが  
小学生としてはという意味である

哀「江戸川さんってハーフよね？」

皐月「ええそうよ私はドイツと日本の血が混ざってるの  
ひよつとして哀ちゃんもそうなんじゃない？」

哀「私もそうよ

まあ私の場合はイギリスと日本だけど」

話題になかなか入れない歩美ちゃんが  
話を変えるように割り込んできた

歩美「ねえねえ

このベッド広いね」

この後起こる爆弾発言は  
誰にも予測がつかなかった

皐月「そうでもないよ？

隆ちゃんと2人で寝てるから」

歩美「えゝ!??」

歩美ちゃんは

「ビックリ仰天銀河の外までサヨナラ」  
という感じで驚いていた

しかし言った本人は平然としていた  
動揺しながらも歩美ちゃんは質問をした

歩美「そそそれって・・・  
いつから？」

皐月「えーっと2年前かしら？」

確かきつかけは・・・そうよ!  
ホテルに泊まった時からよ」

歩美「ホ、ホテル?!」

歩美ちゃんはリアルに  
想像してしまっただけ  
思考回路がオーバーヒートし目を回してしまった

そんな精神状態が危うい中ノックが聞こえた

皐月「何？」

ドア越しにコナンの声が聞こえた

コナン「ちょっと聞きてゝ事があんだけど」

それに対して皐月は

皐月「入ってきて良いわよ」

と言った

そしてコナン、元太、光彦が  
部屋に入ってきた

そしたらいきなり質問をし始めた

光彦「いきなりですが質問をします

まず最初に隆起君の部屋もそうですが

なぜこの家には勉強机という物が無いんですか？

それともう一つあります

なぜ隆起君の部屋には寝具が無いんですか？」

その質問に皐月は嫌な顔をせずに答えた

皐月「えーっと一つ目の答えは

勉強しなくても解けるからで

二つ目の答えは2人とも此処で寝るから」

と言って今、歩美ちゃんが寝ているベッドを指差した

そこで渦中の隆起が部屋に入ってきた

その瞬間に元太と光彦から質問責めにあつた

最初は今のこの状況が

良く理解出来ていなかったみたいだったが

2人の話が進むにつれて

だいたい把握したらしかった

隆起は大きく溜め息を吐くと皐月を

ジト目で見ながら弁解を始めた

隆起「まずホテルに泊まった時は

家族旅行に行ったから

そこで添い寝したのはベッドが3つしか無かったから

最後に今も一緒に寝てるのは

親が死んでから添い寝が習慣になっちまったから」

その説明で『親が死んだ』という言葉が

出てきてから雰囲気が暗くなってしまった

その空気を嫌う様に隆起が言葉を発した

隆起「ま、それは良いからリビングに来いよおやつと飲み物用意してっから」

その言葉につられて俺達は部屋を出た

## 【AT】File・7

その暗い空気から一転

明るい雰囲気へと変わる一声があった

元太「おお！！クッキーだ！」

と既に2枚目を食べている

その様子を見て皆もお菓子を口に運び始めた

俺はテーブルに置いてあった

飲み物を眺めていた

コーヒー、コーラ、ファンタオレンジがあった

あとコップとカップそれにミルクと砂糖もあった

もちろん俺と灰原はブラックで飲んでいたけど・・・

隆起「あっそうだ

悪いけどコナン

冷蔵庫に冷えたチョコレートあるから

もってきてくれない？」

と言われ渋々向かった先で

疑わざるを得ない物を見つけてしまった

それは『Aquavit』だった

-----

くアクアビットとはく

ジャガイモを主原料とした蒸留酒で  
デンマーク・スウェーデン・ノルウェー・ドイツで  
製造されているお酒である  
それにウォッカ同様に「生命の水」という意味を持っている

-----

俺の『探偵の勘』がコイツらは怪しいと告げた  
そしてもしかしたら・・・

日本以外から来た黒の奴らかもしれない  
とも感じた

リビングからは「チョコ見つかつた？」と

間延びしている隆起の声が聞こえてきた

俺は「ああ今行く」と言つて

とりあえず思考するのをやめてチョコを取り出し  
皆がいるリビングへと戻つた

元太「おお〜キットカットじゃんかよ」

光彦「そういえば最近キッドのライバルが

出現しましたよね」

とキットカットから怪盗キッドの話に変わっていった

歩美「そうそう

あれって全部キッドのパクリだよな」

皐月「私も知ってるわ

何て言う怪盗だったけ？」



そこでまたあの男が口を出した

隆起「怪盗ファントム

怪盗キッドに酷似している点も多いが

真逆な点もある

まずキッドは白だけど

ファントムは黒

そして似ている点は

キッドがトランプ銃に対して

ファントムは拳銃

あとはどっちとも予告状を出す事

狙うのはビックジュエルのみて所かな」

とここまで話して歩美が口を開いた

歩美「へえ良くそんなに詳しい事まで知ってるんだね

まだ駆け出し中の怪盗さんなのに」

隆起「あついや・・・

仕事柄知ってるんだよ

アハハ・・・」

元太「え？オメエー仕事してんのか？」

今度は元太が口を挟む

隆起「いや・・・

父さんが昔ICPOで

働いていた事があったから

な？姉貴」

いきなり話を振られた皐月は驚いていたがすぐに反応した

皐月「え？ええ」

とそこで誰かのケータイが鳴ったそれは・・・俺のだった

コナン「もしもし？高木刑事？

なにかあったの？」

渉『ああ実はね

怪盗ファントムから警視庁宛に予告状が届いてねそれが2課だけじゃ解けなくて

1課も巻き込まれて大変なんだよメールで送るから解いてくれないかな？」

コナン「高木刑事の頼みなら良いよ」

渉『ありがとうコナン君

じゃあ今から送るね』

## 【AT】File・8

「予告状の内容」

4分の1〃91・25

この日の幕が上がったのと同時に

我はNeptuneの涙を頂きに参上する

怪盗ファントム

-----

俺がケータイの画面を見ていると  
いつの間にか近くに顔がたくさんあった

光彦「問題は91・25ですね」

歩美「4分の1？」

元太「さっぱりだな」

とこっちの3人は口々に言っている

皋月「91・25×4〃365」

哀「という事は1年の4分の1ね」

隆起「あぁって事は春分の日だな」

とこつちの3人は別格らしい

歩美「すっごくいい!!」

もう解けちゃったね私達」

元太「やっぱ警察より

少年探偵団の方が頭良いんじゃないの!」

光彦「ですよね」

いや・・・解いたのオメエーらじゃねえから

コナン「いやでもまだ何か引つかかるんだよな

まだ見落としている様な何かが」

その時!!

頭の中で稲妻が走るような感覚があつた

コナン「解つたぞ!

隠されたの謎の正体が」

光彦「嫌ですね」コナン君

もう謎は解けたじゃないですか」

と勝ち誇った顔で言ってきた

コナン「バー口オ!

あのままだったらな

警備が万全じゃない時に

既に盗られるはめになつてたぞ

あれにはまだ続きがあんだよ

『この日の幕が上がったのと同時に』

つてのは春分の日の0時じゃなくて

その前日の21時つて事だ

理由は日付変更線が幕だからな」

と説明すると皆が納得した

隆起「つて事は丁度1週間後だな

行くのかい？探偵君達」

歩美「それは」

光彦「もちろん」

元太「行こうぜ！！」

と3人で相当盛り上がっていた

空気の読めない奴が1人・・・いや2人いた

哀「私はパス」

隆起「オレも」

子供達からは「なんだよノリ悪いな」とか  
「なんでですか？！」とか言われている

哀「私その日用事があるのよ

ごめんなさいね」

いや・・・100%嘘だろ！！

隆起「その日は工藤優作の小説の発売日なんだよ

だから並んどかないとなあゝって

という訳で来週は頑張って怪盗ファントム逮捕しろよ」

へえコイツ父さんのファンなんだ

そういえば部屋の本棚にも父さんの作品あったかもな

と思いながらクッキーを食べようとして

手を伸ばしたらすでに何も残っていなかった

元太「もうお菓子も無くなっちゃったし」

光彦「結構長い時間お邪魔したので」

歩美「帰ろっか」

その言葉には俺も灰原も同意し

今日はお開きになった

その後歩美達とも途中で別れ

灰原と2人になった

コナン「なあ灰原

やっぱりアイツら変だ」

哀「変つてどこら辺が？

皐月ちゃんはおちよつと天然入ってるけど

とても良い子よ？」

コナン「うーん皐月はそうかも知んねーけど

少なくとも隆起は普通じゃない

部屋には『世界のお酒百科』があつたり

冷蔵庫には『Aquavit』があつたりするんだぜ？」

そこまで言ったら灰原はやつと話に食いついてきた

哀「それってまさか奴らの仲間？」

コナン「さあな？まだそこまではわからねえ

けど何かあつてもゼツテ守つてやつから安心しろ

それと・・・逃げんなよ灰原」

その言葉に「分かつてるわよ」と言い

「晩、何が良い？」と続けた

俺は「何でもOK！また後で」と言つて別れた

そして時は流れ1週間が過ぎた

## 【AT】File・9

とうとう隆起の疑惑から1週間が経ち  
怪盗ファントムの予告状の日になった  
今の時刻は午後8時45分  
怪盗ファントムの予告時刻まであと15分

中森「おお君は確か

小学生探偵兼キッドキラーの毛利んトコのがきか」

いやもうおっちゃんの所には居候してねえよ・・・

コナン「アハハ・・・いやだな中森警部

僕は今新一兄ちゃんの家居候してるんだよ」

中森「ああそうだったな」

とバツの悪い返事が返ってきた

中森「良いか？

絶対に捜査の邪魔だけはせんでくれ！」

コナン「解ってますよ警部さん」

そう言つて中森警部と別れ  
少年探偵団のメンバーととりあえず合流した

光彦「良いですか？コナン君  
いつも・・・というよりは毎回言ってますが



抜け駆けだけは禁止ですよ」

と3人に問い詰められた俺は  
渋々有無を言わず了承させられた  
その時に中森警部の声が現場に響き渡った

中森 「怪盗ファントムだ!!」

全捜査官は宝石を取り囲め!!」

という掛け声で全捜査員が動き出した

歩美「私たちも行くよ!」

こっちは歩美の声で動き出した

まあ俺は逃走用ルートであろうビルの屋上に先回りしていたが

バッチからは怒鳴り声が聞こえてきた

光彦『コナン君!! 何処行っただんですか?!』

元太『また抜け駆けしてんじゃないかよ!』

俺は咄嗟に思いついた嘘を言った

コナン「悪い悪い人が多すぎて前に進めねーんだ  
悪いが後は頼んだぞ」

バッチからは「了解」の一言が聞こえた  
そして俺はいつの日にかやった  
打ち上げ花火の準備をした

準備が終わったのと同時にバッチから連絡が入った

光彦「駄目です！！盗まりました」

それが聞こえたのとほぼ同時に

漆黒の天使が1羽屋上に舞い降りた

ファントム「ああこれも違ったな

オイ！そこに居る探偵君

この宝石警部さんに返してくれねーか？」

と言って宝石を地面に置いた

チツ・・・ばれてたか

コナン「よお怪盗ファントム

もしかしてお前の獲物もパンドラか？」

漆黒の怪盗は顔を崩さずに言った

ファントム「ほお良く知ってるな

そっぴいやお前キッドキラーだったな

何ならファントムキラーにもなるかい？」

コナン「そうだな・・・今ここになってやる」

と言って素早く麻酔針を撃った

しかしそれを読んでいた様にかわした

俺は軽く舌打ちをしながらキック力増強シューズのダイヤルを回した  
そしてベルトからボールを出し思いっきり蹴り飛ばした

バン！！！！

銃声が鳴りボールは空気が抜けて落ちていた

ファントム「悪いな探偵君

もう君と遊んでいる時間が無いんだ  
また今度・・・違う場所で」

パチン！！

と指を鳴らした時には

ありえない程の数の鳥が

ファントムを覆い隠し鳥が四方八方に飛び散った時には  
黒い影は何処にも残っていなかった・・・

【AT】File・10

あの拳銃・・・

一瞬でしかも暗闇で見たから絶対ではないけど

・・・きつとあればベレッタM1934

今は亡きジンの愛用の拳銃と同じだ

怪盗ファントムとの勝負は引き分けだったが

お陰で手がかりを見つける事が出来た

そんな事に頭を使っていると中森警部と捜査員達  
それに少年探偵団も屋上に来た

その後3人からはみつちり怒られたが  
とりあえずそれは終わり中森警部からは一応礼を言われこの日は終  
わった

しかしその翌日にまた事件？が起こった  
それは・・・

光彦「コナン君！！何回言ったら分かるんですか？！

また抜け駆けして功績を独り占めにして」

歩美「そうだよコナン君

今度やったら絶交だからね！！」

元太「そうだぞコナン！

次やったら少年探偵団から追放するぞ

この意見に賛成する奴は拳手しろ！！」

と言って元太と光彦そして歩美が手を挙げた  
そもそも何故こうなったかと言うと

また俺が（もちろん1人で）新聞に載ったからだった

光彦「あれ？他の皆さんは賛成しないんですか？」

といかにも同意を求める口調で言った

哀「彼の自分勝手な行動は今すぐ止めるべきだと  
私も思っわ」

皋月「でもコナン君がいなくちゃ機能しないんじゃないの？  
この探偵団は」

と言った事で3人は黙った

隆起「まあ命が無くなる前に  
探偵を辞めるのも人生にとっては  
良い選択肢かもよ？」

とさり気無く3人を追い込んでいる  
元太はとりあえず「追放はしないでやる」と言って終結した

一難去ってまた一難またもや事件が起こった  
俺のケータイが鳴った

コナン「もしもし？」

快斗『よ！コナン』

コナン「なんだ快斗か  
んで？何か用」

キッド『ええ名探偵を私の最後のショーに  
ご招待したいと思ってますので』

つて事はまさか？！

コナン「オイ！つて事は・・・  
例のパンドラ見たのか？！」

快斗『ああそうだよ

それじゃあまた今度』

ケータイを閉じた時  
灰原が話しかけてきた

哀「今の黒羽君？」

コナン「ああ」

哀「その顔はキッドも終わるみたいね」

そこで俺らの話に耳を傾けていた奴等が  
話に積極的に入ってきた

光彦「キッド辞めちゃうんですか？」

歩美「そうなの？コナン君！！」

元太「マジかよ」

と1週間前の噂の男(?)がボソツと呟いた

隆起「それじゃファントムも潮時だな」

皆は気が付いていなかったみたいだが

コナンの耳にはちゃんと届いていた

・  
・  
・

時間は流れ放課後

歩美「今日はどうしようか?」

元太「久しぶりに博士ん家に行こうぜ」

光彦「僕は賛成です

他の皆さんはどうです?」

コナンと灰原はOKした

しかし皐月と隆起は渋っていた

理由は博士とは面識が無く行きにくいという事だった

そこで歩美がフォローに出た

歩美「大丈夫だよ

博士は優しいし哀ちゃんの家でもあるんだから」

と言う事で博士ん家に行く事が決定された





【AT】File・11

探偵団「おつ邪魔しまゝす!!」

博士「おお随分と久しぶりじゃな

おや？後ろにいるのが転校生の

皐月君に隆起君じゃな？」

2人は声を合わせて「はじめまして」と言った

容姿はあまり似ていないけど

確かに双子なのかもしれない

歩美「ねえ博士

この2人にも探偵団バッチ作ってくれない？」

博士はニヤニヤしながらこう言った

博士「実はのおそう言うと思って

もう2つ作っておいたんじゃないよ」

と言つて博士は2人にバッチを渡した

哀「お菓子出したから

皆もう来ても良いわよ」

いつの間にか家に上がっていた

灰原の一言でリビングに向かった

しばらくして何故か名前の話になった

光彦「歩美ちゃんって良い名前ですよね  
何か人生の歩みが美しいみたいで」

コナン「そういうお前だって良い名前じゃねーか  
彦星が光るみてーだよ」

そこで言うてはならない  
2人の名前が出てしまった

歩美「でもコナン君と哀ちゃんは  
ちよつと変わってるよね」

元太「そうだよな  
だって俺もそう思ったんだぜ」

皋月「せめて哀じゃなくて  
他の漢字にすれば良かったんじゃない？」

と言ったら  
身を乗り出して光彦は話し始めた

光彦「同感です！

例えば一文字でしたら愛とか藍で  
二文字でしたら亜衣とか色々あったでしょうにね」

語尾を同意を求める形にして言葉を切った

しかし光彦の考えに反して  
意見の声が上がった

隆起「いやオレだったら英語のeyeで瞳  
これで『あい』って読ませるけどな」

灰原がその言葉を聞いた途端に  
体をビクンと反応させた

しかし子供達と博士はそれに気付かず  
隆起の発想を褒め称えていた  
コナンだけはちゃんと気付いていた

コナン「どうかしたか灰原？」

哀「さっきの台詞

私昔にも聞いたことがあるのよ

・・・それ言ったの誰だか分かる？」

俺は「いいやさっぱり」と答えた

哀「それはね・・・

あの日あの戦いで死んだ隆なの」

俺は言葉を失った

というよりは灰原に

どう言葉を掛ければ良いか分からなかった

哀「あ、気にしないで頂戴

ほんの少し思い出しただけだから」

とは言ってるが

内心は決して穏やかでは無いだろう

しかしどんな時でも時間は過ぎていくもので  
あつという間に解散の時刻になり解散となった

皆が帰った後しばらくは灰原を

1人にした方が良いと思い俺は家に戻った

暇だったから小説を呼んでいると

ふと気が付いた事があつた

それが気になり俺はある人物に電話をした  
何回かコールした後電話の相手は出た

快斗『あゝもしもし？コナン？』

コナン「快斗・・・単刀直入に聞くけど

お前怪盗ファントムと付き合いあるだろ？

ついでにファントムの正体も知ってるだろ？」

暫しの沈黙が流れた

【AT】File・12

そして電話口から溜め息が微かに聞こえた

キッド『参ったぜ名探偵？』

明日に私の黒き友人を連れ

貴方の元へ行きますので正体を暴くのは明晩で』

コナン「ああ待つてる」

そう言つて明日を待ちながら寝に入つた

そして翌日

今日は土曜で学校は休みだつた

俺は昼まで寝坊し

夕方まで公園でサッカーをして遊び

今は家で灰原と2人で

キッドとファントムが来るのを呑気に待っている

その時！煙と同時に2つの影が出てきた

キッド「こんばんは名探偵？」

哀「早く自己紹介が終わつたら

ご飯くらいご馳走してあげても良いわよ？

まあ今晚は魚だけだ」

快斗「ささささ魚?!」

勘弁してよー哀ちゃん」

怪盗キッドがナイスリアクションな快斗に戻った瞬間だった

哀「今から持つて来るわよ」

と脅しをかける灰原と快斗の駆け引きは  
永遠に続きそうだったから途中で止めに入り  
今日来た目的に移った

コナン「早速だけど怪盗ファントムの正体は

・・・一体誰なんだ?」

ファントム「私は」

と言ってマントなどの一瞬で脱ぎ赤のパーカーを着た青年が現れた  
驚くことにこの青年はある人物にそっくりだったのだ

コナン「へ?隆起が大きくなった?」

そう顔や髪の毛の色が同じだったのだ  
ただ唯一違ったのは瞳の色だった

隆起が赤系に対して今現れた青年は茶色だった

快斗「コイツの名前は」

そこまで言つて次は青年が答えた

隆之介「オレの名前は伊達隆之介

それともう2つ裏の名前がある」

2つ？怪盗ファントムだけじゃねーって言うのか？

隆之介「1つは怪盗ファントム

そしてもう1つは・・・アクアビット」

オイオイそれって・・・まさか？！

隆之介「そうオレはBlack Wolf・・・

通称黒の組織アメリカ支部の幹部」

コナン「オイ快斗！

本当にコイツが奴らの仲間なのか？」

快斗「まあまあ話しは最後まで聞けって」

と言って話の軌道修正をした

隆之介「オレは簡単に言うとなFBIのスパイ

つまり君達の仲間だよ」

哀「それなら何故泥棒何てしてるのかしら？」

と尤もな質問をした

隆之介「怪盗キッドの目的と正体を知ったから

そしたら1人より2人の方が効率が良いだろ？  
だから別行動で手伝っていたんだよ」

コナン「なるほど」

その回答も尤もだった

哀「組織は？今組織はどうなってるの？！」

と灰原が今一番

気になっているであろう事を聞いた

隆之介「まず組織の支部は今全世界に4つある

それはアメリカ・ロシア・フランス・ドイツ

そして本部はイギリスのロンドンにある

今組織は少しずつ衰退していつている

日本支部は君達の活躍によって

スイス支部はあるキレ者によってね

良い情報はまだある

FBIはイギリス本部以外の支部の場所をすでに把握して

いる」

そこまで聞いて

少しは安堵した灰原の顔が見えた

隆之介「悪いオレもう時間だから帰るな？

それと今度のマジックショーは

キッドとファントムの連名で出すから

楽しみにしとけよ」

と言って今度は普通に玄関から出て行った

快斗「それじゃまた今度」



と言って快斗は白いマントを身に纏った

キッド「月下の名の下で」

そしてこっちはいつの間にか開けた窓から飛んでいった

## 【AT】File・13

そして翌日の日曜日

警視庁では蜂の巣を突付いた様な

大変な騒ぎが起こっていた

その中心は2課だが

その周りの1課や3課までもが巻き添えを食らっている

その内容とは・・・

中森「なんだとおお!!!」

キッドが引退宣言?!

おまけにファントムもか!?!」

そう昨日工藤邸で話していた事で

本当に予告状をキッドとファントムの連名で

警視庁に送ったのだった

内容は下記の通りである

く予告状く

今は亡き名探偵の日を

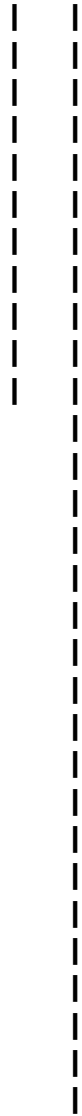
私共の最期の日とする事にしました

最期のShowをご覧になられた皆様には

不老不死の粉を頭上に振り撒く事を

お約束いたします

怪盗キッド&怪盗ファントム



これが中森警部には1つしか解る事が無かったのだ  
それはキッドとファントムの最後の犯行という事  
後は分からない事だらけ

まず名探偵とは誰の事を表しているのか  
そして何を盗るのか

部下が情報を集めるために2課だけでなく  
1課や3課まで走り回ったから  
今、警視庁内は騒がしいのである

そんな時に1課の警部が2課を訪れた

目暮「中森君!!」

中森「・・・なんだ

目暮か?

今わしは忙しいんだ

構ってる暇は無い!!」

と言ってクルリと背を向けた

目暮「いや聞いてもらおう

実は名探偵が分かったんだ」

中森「何!？」

向きを戻して聞いた

目暮「それは2年前の大きな事件で活躍し

短い人生に幕を閉じた・・・

工藤新一君だよ」

中森警部は「そんな探偵もいたな」と言った

目暮「その工藤君の誕生日が5月4日なのだよ  
つまり犯行日は」

中森「5月4日と言いたいんだな」

いつの間にか現れた人物が口を挟んだ

渉「しかし何を盗むか分からないじゃないですか?」

美和子「そうよね」

暫しの沈黙が流れた・・・

すると誰かが「あ!!」と沈黙を破った

美和子「コナン君なら何か分かるかも」

そう言ってケータイを取り出し  
徐にボタンを押し始めた

何回かコール音がして相手が出た

コナン『もしもし?』

美和子「あ、コナン君

ちよつと」

コナン『何?もしかしてまた事件?』

美和子「うゝんまあそうと言えばそうね

コナン君キッドとファントムから予告状が届いたんだけど  
良く分からない点があるの

ちよつとだけ君の頭脳を貸してくれないかしら?」

コナンが「良いよ」と答えた瞬間から

今現在警察が解っている事(予告状を含む)

それと反対に解らない事を話した

コナン「キッドとファントムが狙っている宝石はパンドラだよ

そしてパンドラを盗んだら粉々にするって言う意味だよ」

そしてコナンは電話の切り際に

「また何かあったら電話して」と言った

いままでの会話を拡張して聞いていた中森警部が動き出した

中森「パンドラという宝石を

今何処にあるか探し出せ!」

・

・

そして5月4日・・・

怪盗キッドと怪盗ファントムのラストマジックショーの日だ

快斗「これでキッドも終わりだなあ」

と懐かしむ様に呟いた

するともう1人の方がそれに対して答えた

隆之介「ま、良かったじゃん

愛しのサファイアに嘘を吐く必要が無くなったんだから」

快斗「ああそうだな」

既にお気付きの方もいらっしやるだろうが  
サファイアとは「青子」の事である

快斗「さて最後の大舞台

派手にやってやるか！」

隆之介「おう」

そして2人は

白と黒の衣装に身を包み闇に消え去って行った

そして最後のショーが始まる合図が  
何処からともなく聞こえてきた

キッド「Ladies and Gentlemen!」

ファントム「さあ今宵のショーの幕開けだぜ」

【AT】File・14

結果から言うと今世紀最高のショーは無事大成功に終わった

そしてキッドの目的である

パンドラを完璧に破壊する事も出来た

最後の仕事を終えた怪盗2人はある家の屋上に舞い降りた

その中ではパーティーが行われていた・・・

歩美「コナン君！お誕生日おめでとう」

光彦「おめでとうございますコナン君」

と祝福の言葉が聞こえてきた  
しかし常識外れも居たみたいで  
既にご馳走を頬張っている者もいる

皋月「ごめんねコナン君

折角の誕生日なのに

隆ちゃん先に行っててって言ったから

あ、でもちよつと遅れてでも来るみたいだから」

コナン「ああ構わないよ」

そう言った時チャイムが鳴った



哀「噂をすれば来たわね」

玄関のドアが開き  
声が聞こえた

隆起「悪い遅れた」

すると光彦が司会者気取りで  
進行をし始めた

光彦「それじゃこれから1人ずつ  
コナン君にプレゼントを渡します  
まずは歩美ちゃんから」

そして1人1人プレゼントを渡した  
最後は遅れてきた隆起で締める事になった

すると隆起はカウントを始め  
『ZERO』と言ったのと同時にコナンの手には  
ラベンダーが握られていた

隆起「Après cecidans le toit

(この後、屋上で)【フランス語】

Eine Vision wartet

(幻影が待ってるよ)【ドイツ語】

No, aveva meglio di così un

...

anima passata?

(いや・・・)

亡霊と言ったほうが良いのかな？）【イタリア語】」

こうして最後はマジックが決まり  
コナンだけでなく皆が満足して帰った

歩美「バイバイ」コナン君  
今日は楽しかったね」

コナン「ああ！！また明日な」

隆起「じゃーな」

その後コナンは誘われた通り屋上に行き  
1人『信じられない』と呟く事になったのだ

コナン「なあ本当にお前・・・

性質の悪い冗談か何かだろ？

きつと快斗が悪戯してんだろ？！

・・・答えるよ！」

?「When you have eliminated the  
impossible  
whatever remains, however im  
probable, must be the truth.

(完全にはありえないことを取り除けば

残ったものはいかにありそうにないことでも

真実に間違いないということだよ)」

そう言って陰の如く闇に消えていった

そしてコナンは翌日どうすれば一番良い方法なのかを  
自分の全神経、全細胞をフル稼働させ悩んでいた

そのまま午前の授業も終わってしまい

給食もほとんど手をつけずに終わってしまった

しかし残りはいなかった（元太のお陰である）

そしてコナンが

心ここに在らずの時に

事件は起こってしまった

・・・バキューン！！

【AT】File・15

時間は少し遡りコナンが頭を悩ませて居る頃  
既に第1の事件が起きていたのである

それは給食時間が終わり皆が皿や器などを  
片付けている時間

この時間だったら皆が動いているから

1人や2人廊下に出て行っても気付かれないのだ

今はその誘拐されやすい時間

哀 side

隆起「ちよつと哀」

哀「へ？」

私は驚いて間抜けな声しか出なかった

それもその筈

男子からは『灰原』か『灰原さん』としか呼ばれないのだ  
隆起も例外じゃない・・・と言いたい所だが

隆起の場合はまだ名前すら呼んだ事が無かった

話はコナンと歩美、皐月の次に多く話してはいたが・・・

隆起「どした？変な声出して」

と言ってクスクス笑っている

哀「貴方の性よ

男の子は私のこと『哀』なんて呼ばないもの  
驚くに決まってるでしょ？」

隆起「んじゃもつと驚かしてやるから」

そう言つて私の手を引つ張つた

哀「ちよつと何？」

隆起「何つて・・・言つたら意味ねえだろ

それに今ここで言つたらここにいる奴ら迷惑になるよ  
だから場所移動すんぞ」

そう言つて有無を言わせぬ瞳で見つめてきた

哀「言つとくけど私

ちよつとやさつとの事じゃ驚かないわよ？」

しかし彼は自信満々の態度でこう言つた

隆起「おう死ぬくらい驚かせてやるよ」

手を拘束されたまま連行された

そして着いたところは屋上

帝丹小学校の屋上は心地良い感じで風が吹いていた

私は少し挑発気味の口調で言つた

哀「私をこんな場所に連れてきて何するつもり？  
マジック？それとも私をここから落とす？」

隆起「いや」

そう言った時さっきまで心地の良かった風が  
急に冷たく速くなった

隆起「タネ明かし」

そう聞こえた

哀「タネ明かし？何のよ？」

隆起はその問いには答えずに話し始めた

隆起「むかしむかしある所に悪い人の集まるところがありました」

よくある読み聞かせみたいな感じで始まった

隆起「そこは日本にもありました

しかし日本の集まる場所は

ラングレーやフーヴァーの手によって消されてしまいました」

ラングレーとフーヴァーとは人の名前だろうか  
そう思いとりあえず昔話に付き合っていた

隆起「その戦いでは多くの死傷者が出ました

死亡者の中にはとてもとても優秀な人が2人も混ざっている

した

しかし彼らのお陰でその場所を消せたのです  
そして悪い人達は全員捕まったり死んだりしてしまいました」

私はこの話の後が解った気がした

何故なら日本にある黒の組織を壊滅させた時とあまりにも  
状況が似すぎているからだ

・・・でも大丈夫

だって奴らは死んだのだから

そう思い必死にポーカーフェイスを保った

隆起「けれどそれは間違えだったのです」

え？

隆起「悪魔はまだ残っていたのです

ほんの一握りの小さな小さな悪魔が

その悪魔は2年という歳月を有効に使い

大きくそして強くなったのです

そして貴方の目の前に居るのが・・・」

そう言っただけと同じオーラを纏った

悪魔が私の目の前に立っていた

悪魔「会いたかったぜ？・・・シェリー」

・・・カチャリ

という音が鳴って銃口が私の方に向けられ

バキューン！！！！

死を覚悟し目を瞑った



【AT】File・16

・・・ほ・・・しほ

ん？誰かが私を呼んでる？

ああ私・・・殺されたのね・・・拳銃で

死んだって事は地獄よねきつと・・・

でも誰かしら？まさか？！お姉ちゃん？いや・・・

・・・でも地獄で私の名前を呼ぶ人なんか・・・いないわよね

私はゆっくりと目を開き

今の状況を把握しようとした

すると私は思ってもみない光景を目の当たりにした

そこには辺り一面に真っ白い花で囲まれていた

その絶景に見とれていたらまた声がした

今度ははつきりと・・・

？「おい？志保？生きてるか？」

な？ビックリしただろ！？」

え？・・・隆？

哀「隆？私・・・死んだのよね？」

？「やっぱり？そう思う？  
なら大成功だな」

とても嬉々とした弾んだ声が聞こえた

哀「え？死んでないの・・・私」

？「おうピンピンだぜ？」

え？でもだつて・・・死の淵から這い上がってきた  
あの真つ黒い悪魔がジンの拳銃で・・・  
撃つたのよ？私の事を

？「だからまだ死んでねーって

オレが志保ん事

殺すわけ無いじゃん

だから目ちゃんと開けよ」

私は頭にクエスチョンマークを幾つも浮かべながら  
もう一度、目を閉じてから開いた

哀「あれ？」

そこには白い花で埋め尽くされている  
帝丹小学校の屋上があった

隆起「よ！目覚めたかよ」

拳銃からも白い花が飛び出ている

確かこの花の花言葉は・・・『再会』だった気がする

哀「隆・・・貴方まさか・・・あの薬を飲んだの？」

あの薬とはA P T X 4 8 6 9 カプセルである

隆起「ああ助かったぜ

お前の作った『出来損ないの名探偵』のお陰でな  
開発責任者として聞いてほしい事があんだ」

私は頷いた

隆起「実はあれは成長過程の人間が飲めば幼児化するんだ

しかし成長過程も前半だったら死んで

半ばだったら脳に影響が出る

つまり丁度後半だったオレら4人が生き残ったってな訳だ」

彼は「どう？これがタネ明かし結構スリルあったろ？」と言って笑った

哀「ええとても・・・

それじゃあ伊達隆之介も貴方？」

隆起「もちろん！怪盗ファントムに答えがあったろ？」

そう言われてその名を考えた

確かにファントムとは『幻影』や『亡霊』を示す

まあヒントはあった

哀「それで？工藤君には言ったの？」

隆起「昨日の誕生日プレゼントとしてな

けど中々信じてくれなくてよ

悪いけど新一と皐月ここに呼んで」

私は驚いた

哀「今から？」

確かに今は昼休みだが

大分時間が経ったのであと1・2分でチャイムが鳴るのだ

隆起「おう」

そして私は工藤君に電話をし今すぐ屋上に来るよう言い  
ついでに皐月も連れて来るように指示をした

そしてチャイムが鳴るのと同時に屋上の扉が開いた

コナン「・・・信じてやるよ

オメエの事」

隆起「さんきゅ」

【AT】File・17

コナンスide

その後ちよつと空白の時間が流れた

皐月「あ、まだ本当の私の自己紹介してなかったわね？

私の名前は最上五月で東北出身よ

実年齢は志保ちゃんと同じ」

「へえ」と俺と灰原は口を揃え言った  
そこで俺はある事を思い出してしまい  
ある衝撃の事実を知ってしまった

コナン「ってお前ら一緒に寝てたよな？」

隆はあたふたしながら

隆起「なっ！？たまたまだって・・・

ほら今の家狭いし・・・オレの部屋も本だらけだし」

おいおい・・・そんな事で動揺し過ぎだつて  
ただからかっただけなのによ・・・

哀「貴方本当に・・・」

隆起「いやマジ！何もやってねーって！  
髪の毛の1本も触れてねえ！！」

と本気で否定している隆が可哀想に思ったのか  
五月が証人として話しに入ってきた

皐月「大丈夫よ？隆とはどれだけ近づいても  
何もしてこないから」

隆は「ほら言つたろ」と勝ち誇った表情をしていた

皐月「まあでも女としては不満かもね？」

哀「そうね」

俺と隆はズルツとこけた

隆起「もう止めるよ・・・その話

本題からかなり脱線してっだろ？」

そう言つて隆はこの変にエロい空気を嫌うようにして  
1つわざとらしく咳をした

隆起「単刀直入に聞く」

一呼吸おいて

隆起「オレとアメリカ来ない？」

俺と灰原は一瞬

クエスチョンマークが頭の中を駆け回りまくった

哀「どうして？」

隆起「まず今ある組織の拠点が

日本とスイスが潰れたから5つ

で、来年にでもアメリカ潰そうかなって

ただそれだけ・・・

選択権はもちろんあるよ？

特に志保の場合はこのまま平和でいる方が良いと思ってる筈

だしね

それに勝手に行って事件解決したら

何か言われそうだもんな新一に」

俺は深く考える事も無く

コナン「俺は行くぜ」

と答えた

隆起「新一ならそう言うと思ったぜ

それじゃ3年間は日本の土を踏めないと思うから

覚悟しとけよ？

志保も行くんでしょ？相棒として」

哀「ええ」

隆起「じゃ今回はスパイとして行かないで

コードネーム無しでやってみようかな？」

隆よ・・・お前にとって

組織壊滅はゲームか何かか？

と問いかけたくなる発言だった

隆起「どうする？これから行く？

それとも先に延ばす？

今から行くんだったらイギリス本部も行く

まあその前にフリーメーソンも調べないといけないけど

・・・それよりコンタクト外していい？

目乾いちまってさ」

なるほど・・・

カラコンで誤魔化し茶髪で誤魔化し

色々やってんなコイツ

皐月「私は行くわよ

語学専門のFBI捜査官なんですからね

そうそう隆ちゃんは特殊特別捜査官

きつと志保ちゃんも来るんだったら科学捜査官って所かしら？

工藤君は隆ちゃんと同じねきつと」

隆起「それで・・・

明後日行く？それとも6年終わってから？」

俺と灰原は顔を見合わせ

「「明後日」」と答えた



今日中に転校届けを出すなど忙しくなる予定となっていたので  
学校は4人そろって早引きした

コナン「荷物どうしようか・・・」

哀「必要な物しか持って行かない事ね

まあ私は研究に必要な物があるから多くなるだろうけど」

そうとう多くなる事が予想される

そこで思ってもみなかった事実を発せられた  
・・・隆によって

隆起「あ、言っとくけどアメリカにいるの精々1・2週間だから  
荷物はイギリスのロンドンに送るから」

コナン「アメリカは？」

隆起「ああアメリカはね

もうFBIが何回か攻撃してんだ  
だからオレらは増援組ってなわけ」

そこで疑問が生まれた

コナン「それならわざわざ俺らが  
行かなくても良いんじゃないか？」

隆起「・・・そうだな赤井秀一が居りゃあな」

オレと灰原の頭上にはクエスチョンマークが飛んでいた

隆起「つまりだな今のFBIには頭がずば抜けてキレる奴がいないって事」

皐月「FBIは隆ちゃんと工藤君の頭脳を欲してるのよもちろん志保ちゃんのも」

ああ・・・なるほど

哀「転校届けやパスポートはどうするの？

私達は海外に行けないのよ？」

隆起はニヤツと笑みを浮かべた

隆起「情報のプロに頼んで

既に準備は整ってある」

哀「弟君ね？」

隆起「まあな

・・・あ、そうだ！」

と思い出したように声を上げた

隆起「オレらの関係従兄弟になってるから」

コナン「あ、そう」

俺は何か重要な事でも言うのかと  
身構えていたが一気に気が抜けた

隆起「なんや連れないのお」

と服部の声色を真似て言った

コナン「お前も出来んのかそれ」

隆起「まあな・・・それよりさ

オレの日本に置いていく物って  
工藤邸に置いてって良いか？」

俺は少し考えてから「まあ良いぜ」と答えた

皋月「それよりさ

あの子達になんて言う？  
きつと悲しむわよ？」

あの子達とは元太、光彦、歩美の事である

哀「ある程度ホントの事を話し

全ては語らずで良いんじゃない？

さすがに全部を話す訳にはいかないじゃない」

コナン「俺もそれに同意するな」

隆起「言っとくけどイギリスでの戦闘は

此間以上に壮絶な戦いになる筈だから

命の保障はまったく無いよ

・・・って言っても来るんだろ？」

コナン「ああ」

皐月と灰原が顔を見合わせ  
肩を竦めながら微笑した

隆起「んじゃさつさと荷物纏めて送るか」

そう言ったのをきっかけに皆の手の動きが早まり

・ ・ ・

2時間後

コナン「ふう・・・やっと終わったな

コーヒーでも飲むか？」

哀「ええ」

隆起「おう」

皐月「あ、ミルクと砂糖も持ってきて

私ブラック無理だから」

その後は夕食を皆で食べ  
各自の家へ戻り朝を迎えた

翌日

俺達4人は最後の登校もいつも通り途中で合流し最終的には後の3人と一緒に登校したしかし俺達一行はいつもの雰囲気とは少し変わった様子で学校に着いた

そしていつも通り朝のホームルームが始まった

担任「まず皆に残念なお知らせがある」

という始まり方で先生が話し始めた

担任「今日一杯で4人が転校することになった」

クラスはザワザワし始めた

先生は「静かに」とクラスを鎮めてからもう一度話し始めた

担任「その4人は

江戸川3人組と灰原だ」

おいおい江戸川3人組ってなんだよ・・・

クラスからは「ええゝ!!」という声があがった特にこの3人から

光彦「行っちゃうんですか?!」

歩美「ホントに?」

元太「マジかよ?

隆起と皐月なんて此間来たばっかじゃんかよ」

そこで先生に止められ話が再開された

担任「4人は明日日本を発つそうだから

学校で会えるのは今日で最後

だからお別れ会をしようと思う

異議はあるか?」

皆は異議無しと唱えた

そして午前は普通通り授業をし

午後からはゲーム大会と質問をする

といったスケジュールになった

・  
・  
・

そして今は昼休みまで終えて

午後の授業のチャイムが鳴って始まった頃

光彦が司会で『お別れ会』がスタートした

ゲーム大会では謎解きが出たが内容は簡単過ぎて

特に3人は(俺と灰原、隆)ヒマだった

俺達は待つてはいないが皆は待ちに待っていた

質問コーナーに入った

生徒A「君達は何処へ行くのですか？」

皐月「アメリカよ」

まあ最初に行くのはだけどな

元太「いつか日本に帰って来れるんだろ？」

コナン「まあ高校生になったら

また転校してくるさ」

皐月「帝丹高校にね」

俺と皐月の発言でパツと空気は盛り上がったのだが

いまいち空気の読めない・・・というか

現実を見据え過ぎているというかの発言で盛りが下がった

哀&隆起「江戸川君（コナン）が事件で

殺人犯に殺されなかったらね（な）」

という風に見事に怖い言葉をハモラせた

歩美が「コナン君ならありえるかも」と

言った事である程度は混ぜ返せたが・・・

もっと混ぜ返せる出来事が起きた

・・・いや起こしてくれた

マリア「隆起君と灰原さんって仲ええんやね

・・・もしかして付きあつとるとか？」

と言ったものだから

皆は好奇心旺盛な目で隆と灰原を見ていた

中には「チューしちゃった？」と聞く奴までいた

それには流石の灰原も慌てていたが

隆は以外にも冷静だった

隆起「あゝ俺達は従兄弟だから

思考回路が似てるのはある程度しょうがないだろ」

そう言つて難なく切り抜けやがった

まあこんな感じで最後の授業も終わり

明日に備えて4人は俺ん家で寝た・・・もちろん別室で

翌日は朝一で成田国際空港に行った



俺達は出国のために国際線の多い成田国際空港に来ていた

あと少しでパスポートを見せる所まで来てしまった

俺は思わず本音を漏らした

コナン「なあ本当に大丈夫なのかよ？このパスポート

もしばれたらヤベーぞ？マジで・・・」

しかし隆は軽い口調である意味ヤバく

今の俺にとっちゃ不安が取り除かれることを言ってくれた

隆起「大丈夫に決まってるんだろ？

洸の手に掛かれればアメリカの予算だって自分の物に出来るんだから」

哀「でもそればれるんじゃないの？

さすがにあの子でも無理でしょう」

と現実を見て答えている灰原

俺もその意見に一票

隆起「いやアイツの場合は

ばれても証拠を完全に抹消するから

立証されて起訴されることは無いからな」

おいおい何洒落にならねー事言ってるんだよ！

と心の中で突っ込みを入れる

そんなこんなで、たまたましている内に  
搭乗口まで来てしまった

？「コナンくん！！」

誰かが俺の名前を呼ぶ声がした  
パツと俺はその声の持ち主を探した

コナン「ら、蘭姉ちゃん？！」

そうそれは紛れもなく蘭だった  
後ろにはその他諸々がついて来ている  
その中には少年探偵団3人組も入ってる  
どうやら学校をサボって来てくれたみたいだ

平次「よお工藤！！」

・・・あの馬鹿

和葉「へーじ？何ゆうてんの？」

この子は工藤君やのーてコナン君やろ？」

服部は『また』くだらない言い訳をしていた

俺達4人はそれを無視し他に来てくれた奴らに  
別れの言葉や何なりをして搭乗ゲートをくぐった  
そのとき服部が大声で

「絶対に生きて帰ってこいよーまた大阪を案内してやるさかい！！」  
と空港全体に聞こえる声で言った

俺達4人は苦笑いして飛行機に乗り込んだ

哀「服部君どうにかならないのかしら？」

「ならないな」と思ったのは4人とも同じ考えであった

・  
・  
・

そして何事も無く太平洋の上空を飛んでいた頃  
疫病神の魔力が発揮された

何と事件が起こったのである

しかもテロリストによるハイジャック

乗客・乗員は絶望した4人を抜いては・・・

コナン「どうする・・・隆」

すると隆は笑った

隆起「こんなこともあるのかと」

そう言つて懷から拳銃を二丁取り出した

普通ハイジャックなんて予想しないから・・・

隆起「こつち使つて

オレのはこつち」

そして俺と隆は手際良く作戦を立て実行に移した

まず見張り役のテロリストを全員気絶させ

乗員・乗客を下の階に降ろす

その後は隆が敵の声を出し他の奴らもコックピットから誘き寄せ気絶又は拘束するそんな感じで事件は解決しかし操縦士が2人とも殺されてしまったため変わりに俺と隆が操縦席に座り窮地を切り抜けた

シアトルに到着後は地元の警察官にこつてり叱られたが罰は受けなくて良いそうだ

皐月「これからよ？隆ちゃんに工藤君

本当の決戦は・・・」

そうだ・・・これからのんだ  
最後の戦いは

a f t e r   s t o r y

a f t e r   s t o r y

~~~~~原作~~~~~

【名探偵コナン】

【金田一少年の事件簿】

【踊る大捜査線】

【ひぐらしのなく頃に】

「ジャンル」

推理・ミステリー・戦闘

<オリジナルキャラクター>

あり

ウツキー君からの小説説明

この小説の前半は『名探偵コナン』のメンバーと
『金田一少年の事件簿 殺戮のディープブルー』を
混ぜてアレンジした二次創作です

後半は色々混ぜていきたいと思います（＝未知数）

では、『after story』の始まりです！

どうぞ！

【AS】登場人物

・江戸川コナン（えどがわこなん）

FBI特殊特別捜査官

小学校6年生の途中で海外に行き

今回の話で戻ってきた名探偵の主人公

・灰原哀（はいばらあい）

FBI科学捜査官

主人公と同じく海外に行き今回帰国してきた
科学・化学・薬学に長けている

・江戸川隆起（えどがわりゆうき）

FBI特殊特別捜査官

主人公と同じく海外に行き今回帰国してきた
探偵顔負けの推理力を持ち射撃・狙撃のプロ

・江戸川皋月（えどがわさつき）

FBI語学捜査官

主人公と同じく海外に行き今回帰国してきた
語学に関しては誰一人ついていけない

・小嶋元太（こじまげんた）

帝丹高校2年A組

少年探偵団の後身である探偵倶楽部の部長
『食』以外は苦手

・円谷光彦（つぶらやみつひこ）

帝丹高校2年A組

自称・ニヒルな高校生探偵
昔よりは推理力が上がっている

・吉田歩美（よしだあゆみ）

帝丹高校2年A組

4人が帰ってくるまでは紅一点で人気が高かった
しかし女子2人加入した事で今は落ち着いている

・金田一一（きんだいちはじめ）

不動高校2年D組

祖父が名の知れた名探偵

推理力はコナンに引けを取らないくらい高い

・七瀬美雪（ななせみゆき）

不動高校2年D組

一の幼馴染であり一緒に旅行する度に事件に遭遇する
不動高校では『良い女ランキング』1位

・楊小龍（やんしやおろん）

楊雑技団・団長

頭は悪くなく一とは親友である
得意とする武術は酔拳

【AS】File・0

ここは深い蒼に囲まれた島

とは言つても隣に少し大きい島があるが・・・

そのにはかの有名な財閥が事業としてホテルリゾートを建てていた

その財閥とは『鈴木財閥』

明日はオープンパーティーが行われる

そこに財閥のお嬢様とその友人、顔見知り達も招待されていた

他にも各界の著名人が顔を連ねていた

明日何が起こるとも知らずに・・・

そんな頃ある4人の日本人を乗せた

自家用ジェット機が太平洋上空を飛んでいた

？「あのホテルだよな？今日一泊するの」

窓から外を指差しながら言った

？「ええその筈よ」

？「また事件に遭遇したりしてな」

そう言つてククツと笑う

？「でも今日泊まるホテルつて明日オープンよ？」

？「バーロそれはパーティーだろ

オープンは今日だつて！ちゃんと2部屋とつてあるし・・・」

と言つて茶髪の女の方を見た

？「あら工藤君私と同じ部屋で寝たいのかしら？

それとも同じベッド？」

工藤君と呼ばれた男は赤くなつて
ハンドルから手を離し

工藤君「バツバツローー！！んなつんな訳ねえだろ！！？」

と言つたのと同時に機体が急降下した

？「ちよつと工藤君！私達を殺す気？」

すると機体は安定し始めた

副操縦席にいた男が何とかしてくれたらしい

？「隆・・・助かつたわ」

隆と呼ばれた男は

隆「志保・・・新一はそういうのに弱いから

からかうのも時と場所を弁えろよな」

志保「悪かったわね

そういうのに弱い名探偵さん

私は五月ちゃんと寝るから気にしないで」

隆「当たり前だろ」

ドタバタした中ジェット機が一機

ホテルのある隣の島に着陸した

【AS】File・1

「鈴木財閥招待枠」side

園子「らゝん！早く早く！！」

と呼ぶ声がホテル内に響き渡る

蘭「園子ったら

ほら皆行くよ」

20代半ばの女性が高校生位の男女3人に声をかける

元太「おう！」

そうして明日のパーティー会場になる大宴会場に行った

そこで一人懐かしい人物の名前が挙がった

歩美「ああゝあコナン君も呼べたら良かったね

もちろん哀ちゃんや隆起君、皐月ちゃんも」

光彦「ですよねえ彼らは連絡を全く寄越しませんから
今何処で何をしているのかも分かりませんから
呼びたくても呼べませんよ」

と落胆の色を見せる2人

元太「しかたねーよ

それより明日つてよバイキングなんだろ？
うな重出っかな」

昔と変わらない元太であつた

「藍沢財閥招待枠」 side

4人の顔があつた

ー「うわぁスッゲーなこのホテル」

小龍「ハジメあまりサワぐな

他のヒトにメイワクがかかる」

美雪は「そうよ！はじめちゃん」と窘めている

茜「大丈夫よちょっとくらい」

などと話している

ー「あ、あつちに飯ある！」

と言つてさつさと会場に行つてしまった
残された3人は呆れながらついて行った

コナン side

あの後はきちんと着陸でき

島にある飛行場に泊めることが出来た

哀「一時はどうなる事やらとヒヤヒヤしてたけど
なんとかなったわね」

コナン「まったく灰原があんな事言い出すから悪いだろ
あれマジでびびったんだぜ？」

皋月「でもさあ30近くなってあれじゃちょっとね」

とからかわれまくる俺
そこに助け舟を出す形になった隆

隆起「ほらさつさと行くぞ」

心の中でサンキューと呟いた

隣の島のリゾートホテルに行くにはホバークラフトで行かなければ
ならない
だから当然それで行くことになった

しかしいつも通り（？）殺人事件が起こってしまった

哀「あなたの行くところ来るところ
殺人事件ばかり起こるわね」

と灰原もいつも通り毒づく

俺と隆もいつも通り無視し捜査を始めた

暫く遺体付近を搜索していたところ

ある証拠を隆が見つけた事件は
これもいつも通り俺達2人で解決

そして今日の宿である『SUZUKI Soy profundo
Unaisla Hotel』に着いた

数時間後の翌日パーティー会場となる予定の大宴会場

そしてバイキング形式になっている
今夜の夕食では既に今回の事件を解決した2人が噂されていた

女性A「どうやらその解決した2人
中々のイケメンらしいわよ」

そう聞いて喜ぶ者がいた

園子「ねえ蘭！聞いた？
イケメンだっ〜」

とかなりテイション高めの園子に
ガツカリとなる情報が流れてきた

女性B「でも隣には結構カワイイ女が付いてた
って私は聞いたわよ？」

それを聞いて

蘭「ほら先客がいるのよ
それに探偵なんて」

新一みたい・・・と続く筈だったが
誰かの声でかき消されてしまった

『工藤君!』という声で・・・

【AS】File・2

蘭side

くどうくん？工藤？

って新一？！本当は生きていたのね！？

そう直感した私は声のした方に向かって
全力で走っていった

そこで私が見たものは前に会ったまま成長のしていない
工藤新一の姿があった

しかし彼の隣には見覚えがあるようで無い
とても美人な茶髪の女性の姿があった

その女性はとても驚いているとした様な表情をしていた

私の元いた場所からは園子と探偵倶楽部の3人が
こっちに向かって走ってきている

ついでにいうと今日は博士が来ていない

園子は若いままの工藤新一を見て驚いていた

蘭「新一？あなた新一なんですよ？

ちよつと答えなさいよ！？」

新一はもう死んだのに私はその男に向かって叫んだ
しかしその『新一』は「人違いだよ蘭姉ちゃん」と言った
その言葉に傍にいた園子は激怒した

園子「ちよつとアンタ!!」

蘭を待たせときながらどうして

・・・どうして!死んだふりをしてんのよ!?

どう考えたってアンタ新一君でしょ?!」

その言葉に苦笑いしながら『新一』は
黒ぶちメガネを掛けた

コナン「久しぶり蘭姉ちゃんに園子姉ちゃん

それにオメーらも久しぶりだな」

園子「あ!アンタまさか?!」

と何か分かった様に指を指した

コナン「・・・江戸川コナン探偵さ」

歩美「という事は・・・そっちに居るのは
もしかして哀ちゃん?」

そう歩美が言った方の女性は「ええ」

と言つて軽く笑みを浮かべた

元太「まさかあの2人もいるのか!?!」

と興奮気味に元太は聞く

するとコナンの背後から人影が現れた

隆起「おう」

皐月「何年ぶりかしら？」

と言いながらコナンと哀の隣に来た

探偵倶楽部の3人は友との再会を喜んで

園子は納得のいかない顔をし

蘭はまだ疑惑の表情をしていた

蘭「本当にコナン君なの？」

コナン「そうだよ蘭姉ちゃん」

しかしメガネを掛けている以外『工藤新一』と変わりの無い
『江戸川コナン』にまだ疑問を問いかける

蘭「それじゃあコナン君

ならどうしてコナン君の事を

哀ちゃんが『工藤君』って言ったのかな？

・・・ねえどうして？」

そう蘭が問い詰める

コナンと蘭

そのふたりの間には入ってはいけない空気が流れ出していた

そのためそのどちらかが口を開くまで

その場の空気は変わらないと言った感じであった

そのときどちらかが口を開いた・・・コナンだった

コナン「ねえ蘭姉ちゃん

どうすれば俺が新一兄ちゃんじゃない
っていう証拠になる？」

蘭「やめて新一！」

その声でコナン君の口調を真似しないで！！」

コナン「だって俺はコナンだよ？」

蘭「・・・じゃあ

どうして哀ちゃんが

貴方のことを『工藤君』

って呼んだかきちんと説明できたら

コナン君だって信じてあげる」

その言葉にコナンが黙ってしまった

蘭「ほら・・・やっぱり

貴方は新一なん」

隆起「残念だけどそいつは・・・

正真正銘の江戸川コナンだよ」

蘭が言葉を言い終える前に隆起が遮った

【AS】File・3

隆起「残念だけどそいつは・・・」

正真正銘の江戸川コナンだよ」

隆起はピシャリと言った

しかし蘭はまだ納得せずに

蘭「じゃあ何故

『工藤君』って呼んだの？」

それにも的確に答えた

隆起「何故って？そんなの当たり前じゃん

『江戸川』になる前の苗字が『工藤』

オレらは『工藤コナン』時代から

付き合いがあるから他の奴がいない時は

昔のまま呼び合ってた・・・

ただそれだけの事だよ」

しかしまだ蘭は粘る

蘭「どうして苗字が『工藤』から『江戸川』になったの？」

隆起は間を挟めずに言う

隆起「それは貴方が一番良く解るんじゃないですか？

夫婦間の揉め事だったり・・・とか？」

そこまで言って一回切り
もう一度話を続けた

隆起「・・・新一さんは言っていました

俺の幼馴染は人の事を自分のように考えて

泣いてしまう様な心の持ち主だ・・・と

・・・きつと悲しんでるでしょうね新一さんは
そうゆう風に思っていた人が時が進むにつれ
人の事を深く考えず人の触れて欲しくない所まで
干渉する奴になっていた・・・と知ったら」

隆起はそう言って自分の最高の演技力を駆使し
哀れむ様な悲しむ様な感じの表情をした

すると蘭は

蘭「ごめんね・・・コナン君

ごめんね・・・しんいちい」

そう言って泣き出してしまった

・
・
・

そのまま蘭は崩れてしまい

ホテルの部屋で休んだ

そしてコナン一行も元太達とまた後で会う約束をし
哀と皐月の部屋に集まっていた

哀「あれで良かったの？工藤君」

コナン「ああ俺はもう江戸川コナンであって

工藤新一じゃねーよ

今までオメーらに甘えてたみたいだな

悪かったよ真面目に・・・」

珍しくコナンが謝った

隆起は「らしくねーな」と言っただが

その後の空気を変えるためか

話題を逸らした

隆起「それよりさ！どうだった？

オレの演技力と表現力は」

哀「なかなか良かったんじゃない？」

と灰原も話に乗って

数分後にはさっきの空気は無くなっていた

そんな頃ノックの音が聞こえてきた

皐月「どなた？」

ドア越しからは「歩美だよ」と声が返ってきた

哀「どうぞ」

そう言っただけで中に歩美を招き入れた

コナン「よお歩美なんか用でもあんのか？」

歩美「さつき蘭お姉さんが取り乱しちゃって

夜ご飯まだだろうなって思ったから

皆で食べないか聞きに來たの！

一緒に食べよう？ねっコナン君！」

ニコニコしながらコナンの顔を覗き込む

2人の顔の距離はかなり接近中

そんな状況の中

元太がノックも無しに部屋へ入ってきた

もちろんオマケに光彦も・・・

彼らがコナンと歩美の状況を目撃してしまったため

コナンが2人から説教を受け

時間がただ過ぎていった

【AS】File・4

元太と光彦の説教は元太の腹が鳴った事を
きっかけに2人の説教は終わり

今夜のバイキング会場である大宴会場へ向かった

そして元太は着いた瞬間からハムを食べ始めていた

歩美「もお元太くんったら」

光彦「昔と変わりませんね」

と言っている

そんな時に隆起が「あれ？」と声をあげた

コナン「何かあったのか？隆」

隆起「ああ・・・あの顔

何かの資料で見た顔だなって

ま、記憶に薄いつて事は大した奴じゃないだろ」

その隆が「大した奴じゃない」と思った相手は
のちに解るがIQ180の天才高校生探偵であつた
まあ普段はだらしない奴だが・・・

哀「貴方達早く食べ物確保しておかないと

小嶋君に全部食べられちゃうわよ」

の一言でコナンと隆起も行動を開始した

・ ・ ・

ようやく7人が席に座り食べ始めた

歩美「まさかこんな所で会うとは思ってなかった」

と嬉しそうに話し始め

そこからは女子3人で話している

光彦「そういえば僕達

少年探偵団を解散させて探偵倶楽部

というのを高校で作り活動してるんです」

コナン「で、今何人いるんだよ？」

光彦「3人です」

そんな事だろうとは思っていたが

コナンと隆起はコケた

元太「オメーら4人だったら入ってくれんじゃねーかな

って思ったりしてよ

あ、でもオメー達いつ帰ってくるんだ？」

隆起「今帰国中なんだよね」

元太「マジか?!」

光彦「本当ですか!？」

2人の声は会場内に響き渡るくらいに大きかった

コナン「おい！声の大きさ考えろよ」

と小声で窘める

元太「でもよく人が少なくて良かったな」

実際そうだったのだ

前までは300人位居たが今は25人位に減っていたのだった

光彦「そういえばホバークラフトの中で

事件があっただんですね？

それってどんな内容だったんですか？」

その言葉に基本事件を語る事が好きなコナンは

喜んでその話題に食いついた

その様子を傍から見ていた隆起と灰原は（特に後者）

呆れ顔でその輝いている顔を見ていた

コナンがある程度のお話を終え

今度は光彦に話題を振った

コナン「光彦、お前も此間

殺人事件解決したんだろ？」

光彦「え？なんで知ってるんですか？」

さっきほどではないが驚いている

隆起「あまり大きな声では言えねーんだけど
警視庁の犯罪データを調べてたんだ
もちろん極秘で」

光彦「それってまさかハッキングですか？」

隆起「そこから先はノーコメント」

光彦はため息をし

光彦「分かりました今は深く追求しませんが
でもこれだけは教えてください

貴方達4人は今まで海外で何をしていたんですか？」

一瞬・・・ほんの一瞬だけ空気が固まった

4人は顔を見合わせて何も言わずにコナンが口を開いた

コナン「簡単に説明するけど

これ以上何も詮索しないでほしい・・・

俺達は数年前に日本で発覚し壊滅した組織を追って
アメリカとイギリスに行ってきた

だから今はまだ」

『バシャーン！！』と上のシャンデリアが落ちてきた

？「今からここを我々の占拠下とする！！」

いきなり意味の解らない占拠事件が起こった

【AS】File・5

？「今からここを我々の占拠下とする！！」

と何処からか声が掛かった

他の客もコナン達7人もまだパツとしていなかった
今置かれている状況を把握しきれていなかった

しかしパニックになった客の数名が叫び声を上げた
すると拳銃を持った男が威嚇で天井目掛けて撃った

？「これから無駄な口を利く奴は容赦なく射殺する」

この言葉で一斉は静まり返った

小声でコナンは隆起に話しかけた

コナン「隆、お前ベレッタ持ってるだろ？」

隆起「ああでも今は駄目だ

敵は今1人だが何人いるかも解らねーし
第一ここで銃撃戦やっちゃまずいだろ」

コナン「だよな」

皋月「だったら隆ちゃんと工藤君がビューローだって言えば
向こうも負けを認めるかも」

哀「無理ね・・・相手は命知らずのテロリスト

そんな事で敵の戦意は無くならないわ
寧ろ逆に私達が危なくなるだけだわ」

「うーん」と4人は黙り込んでしまった

そんな時に会場の扉が開いた

？「レッド！他の全職員、全客

追い出すことに成功しました

しかし本当に逃がして宜しかったのですか？」

レッドと呼ばれた男は頷き
人質に向かって話し始めた

レッド「我々は『カラー』だ

今お前達が置かれている状況を軽く説明してやろう

このホテルにいるのはお前達23名と

我々『カラー』の構成員だけだ

あとはグリーン！お前にここを任す

ブラックとブルーを使って良い」

そう言つてレッドは扉の向こうに消えて行つた

また小声で4人が会議を始める

隆起「一瞬見たただけけどアイツらの携帯している武器は

サバイバルナイフと拳銃

拳銃に関してはトカレフしかも中国製ので

中国では『黒星』と呼ばれてる物だと思つ」

哀「それで？私達の武器となる物は？

私は・・・応急手当道具一式ね」

コナン「腕時計型麻醉銃にキック力増強シューズ

それにどこでもボール射出ベルトだけだな」

皋月「私は何も・・・隆ちゃんは？」

隆起「オレはベレッタM1934が1丁

SIG SAUER P230が2丁

フルサーPPKが1丁それにデリンジャーが1丁

それぞれ弾もそこそこある

まあ中国製のよりはドレも強力だぜ？」

他の3人皆が思った事は

「なんでそんなに拳銃を携帯しているのか」
という事だった

哀「まあ良いわ

流石にここでは無理だから

拳銃を持つていることを悟られないで
でも万が一の時は使いなさい」

隆起「なんで上から目線なんだよ？」

哀「仕方ないじゃない

実際問題、私のほうが1才年上よ」

すると隆起がわざとらしく溜め息をして

隆起「今志保は持つてなくて

今必要な物があるのになぁ」

と言つて内ポケットからビンを取り出した

哀「お酒？」

【AS】File・6

隆起「そっだよ」

哀「お酒なんて何に・・・」

隆起「志保なら分かるだろ」

しかし何も分からないという仕草をした

隆起「消毒だよ消毒」

しかもそれアルコール度96のスピリタスだから
かなり良いと思うぜ？

それがダメだったら他にもあるけど・・・」

ここで隆起は墓穴を掘った

哀「貴方まさかとは思っけどお酒隠し飲んでたわね？」

明らかにギクツとしながら否定した

その声が思わず大きくなり『ブラック』に見つかった

ブラック「そこ！何をしている！？」

隆起は瞬時に言い訳を考えた

隆起「あ・・・いやあ

皆がねトイレに行きたいって言ったから

『ここですれば』って言ったら

『レディーにそんなこと言うの?』って
まあそんな感じ
だからここから出してくれない?」

もちろんその答えは決まって「ダメだ」だった
すると横から『ブルー』が話に入ってきた

ブルー「ここですりゃ良いじゃん」

「だよな〜」と思っていると
思ってもみなかった援軍が来た

ー「ちよつと俺も行きたいんスけど
大きいほうで・・・」

美雪「私も・・・」

小龍「オレもダ」

さすがにここまでいると
テロリスト達は困惑をした

ブルー「それじゃあ一人一人順番について来い」

ー「それは効率が悪いな
個室に監禁して外から見張ってくれよ」

とーは言う

ブラック「お前何か企んでるな」

―は手を前で交差させながら

―「違う違う！俺らクタクタなんだよ

それにその方がアンタらも楽な筈だぜ」

グリーン「レッドに聞く」

そう言つて無線で何かを聞いたそして・・・

グリーン「手荷物検査をした者から

個室に案内する」

言葉通り手荷物検査をされた

しかし拳銃を所持していた隆起は引つかからなかった

その謎は後ほど解明されることだろう

まあそれは置いておいて・・・

部屋割りはこの様な感じになった

401 - 灰原哀、江戸川臯月、吉田歩美、七瀬美雪、藍沢茜

402 - 小嶋元太、円谷光彦、斉藤（男性客）、佐藤（男性客）

403 - 清水（女性客）、川上（女性客）白川（女性スタッフ）、

川井（女性スタッフ）

404 - 江戸川コナン、江戸川隆起、金田一、楊小龍

405 - 鈴木（男性客）、小林（男性客）、水野（男性スタッフ）

406 - 三井（男性客）、住友（女性スタッフ）、三菱（女性スタ

ツフ

テロリスト達は神様に見放されていた

まず一つは人質の中に天才が3人含まれていた事

そして二つ目はその3人を一つの部屋に入れてしまった事だ

その3人は確実に光へと歩き始めるのであった・・・

【A S】File・7

404号室では・・・

隆起「お前どつかで見たと思ったら

最近警視庁の手伝いしてる探偵か

どーりで資料で見たことあると思っただけだ

確か・・・不動高校だっけ？」

—「お前！何で知ってんの？」

隆起「ついでにIQ180なんだろ？」

コナン「アイツに貰った資料にそこまで書いてあったのか!？」

流石のコナンも情報の細かさに驚いている

隆起「悪い情報もあるよ

喫煙や飲酒もしてんだろ？」

隆起が個人情報を知っている事に

警戒した人物が一言呟いた

小龍「オマエ怪しいな」

なぐって場違いな会話が行われていた

コナン「とりあえず作戦練るぞ作戦」

その一言で皆の思考は180度変わった

女子部屋401号室では・・・

心配になっている者と余裕綽々な者に分かれていた

歩美「こんな事件に巻き込まれるなんて」

茜「大丈夫よ今にも警察が来るわ」

声が若干震えている完璧な強がりだ

哀「何呑気な事言ってるのよ

このままだったら私達殺されるわよ」

サラッと恐ろしい事を口に出す

美雪「きつと大丈夫よ！

はじめちゃんが何とかしてくれるわ！

何て言ってもはじめちゃんは有能な探偵

金田一耕助の孫なんだから！」

哀「でもテロリストと戦うような探偵じゃないでしょう？」

現実を突き出す発言を躊躇なく言う

美雪「確かに・・・」

とこっちもこっちで納得してしまった

しかし皐月は皆の不安材料を取り除くように声を掛けた

皋月「でも隆ちゃんとコナン君はここに来るわ

絶対に間違いないく

ね？しh・・・哀ちゃん」

ここ数年間は本名で呼び合っていたから

まだその癖が抜けていなかったみたいである

しかしそのミスには幸い誰にも気づかれずに流された

茜「どうしてそんな事を自信持って言えるの？」

と聞いた

皋月「それはね」

と言った時に室内にあった電話が鳴った・・・

404号室・・・

少し時間は遡りあの後4人で話し合って

ここからの脱出法を見つけ出した

その方法とは・・・

隆起「まずテロリストが見回りに来た時に

部屋の内部に踏み込ませて気絶させる

その詳細は小龍に任す

それが終わったらオレがソイツの声を真似て

廊下で待機している2人をここで身動きを封じる

計3人から拳銃やその他武器になるものを奪い

他の客室に向かい救出する

あとは下の階に向かって逃げるだけ
って感じでどうだ？」

他の3人も異議は無かった

しかし新たに情報が入ってきた
それも出来れば知りたくなかった情報だった

その情報は隆起のケータイから
電話を通じてきた物だった

洸太『俺そのホテルのコンピューターにハッキングして
管理やシステムを調べただけど

どうやらその階より下に誰かが行くと
爆弾が爆発する仕組みになっているらしい』

隆起「マジかよ・・・どんなタイプの物だ？」

洸太『核爆弾』

傍で聞いていた3人も震え上がった・・・

【AS】File・8

隆起は焦りながらも冷静に聞いた

隆起「そ、それって解体できそうか？」

洸太「・・・無理だな

ブルトニウムとかも処理しないといけない訳だし
あ、違う！ウランだ」

いや・・・今はそんな細かいところ
気にしている時間は無いから

隆起「まあどつちでも良いけど・・・

日本警察はどの辺まで掴んでる？」

掴んでる？とはこの状況をという意味でだ

洸太「え？ああ・・・どうやら犯行声明は警視庁宛に届いていたみたい

それで、今はそっちに刑事部数名と公安部数名が向かってる
あと他にはコンピューター部門の方でも個人的に動いてる人もいる」

隆起「なあ洸がその捜査内容とかハッキングして調べてよ」

と警察の力をあまり信じていない
隆起が洸に頼む

洸太『今やってるんだけど警察の方も珍しく中々堅くて・・・』

隆起「じゃあとりあえずホテルの内部回線

盗聴されてないかチェックして」

洸太『OK』

と言うと電話口から『カタカタ』キーボードを打つ音が暫く続き止まったのと
ほぼ同時に洸太の声が聞こえてきた

洸太『大丈夫されてない』

隆起「わかった・・・それじゃあ何か分かったら

オレに連絡くれよ

あと情報は後回しにして

自動爆発の機能を解除してくれよ」

そう言つてケータイを切った

コナン「ヤベーな」

一「さっきの作戦は無理だな」

小龍「ドウする?」

隆起「下が無理なら上に行けば良いじゃん」

と言うことで逆に上に立て籠もる作戦を作った
内容は下記の通りだ

まず、初期の作戦と同じように見張りの敵
1名を部屋に誘い込み敵を寝かせる

その後は隆起がその敵に変装して何食わぬ顔で部屋から出て行く
そして非常階段の封鎖を解き戻ってくる
変装したまま残りの見張り役の敵をノックアウトさせ
あとは皆を上階に避難させるという内容だ

コナン「よし！んじゃこれで行こう

内線は大丈夫だったんだよね？」

そう言つて電話機に手を掛け内線に繋いだ
すると女の声が電話口に響いた

哀「もしもし？」

コナン「あゝ灰原？」

哀「盗聴されてないの？」

コナン「ああ」

とりあえず他の皆が無事であることを知り
ホッとしたコナン

しかしまだ作戦の事を言っておらず
今回連絡をした目的が成されていない

哀「用があつて電話したんでしょう？」

コナン「ああ・・・今から逃げる作戦を行うから

今から言うことを他の奴らにも言ってくれ
もちろん他の部屋にいる人にもだ」

そう言ってコナンは今回の作戦を言った

哀「分かったわ

気をつけなさいよ

分かってるでしょうけど

相手はイカれたテロリストよ？」

コナン「わーってるよ」

テロリストの魔の手から逃れる
大脱出劇が今、始まった・・・

【AS】File・9

隆起「んじゃ行つて来る」

そう言った時には

既に見張り役1名が部屋で気絶していて

隆起の顔も既に部屋で気絶している

見張り役の顔になっていた

服装は見張り役から剥ぎ取ったもので

何食わぬ顔で廊下に出て行った

見張り役とはグリーンと呼ばれていた人物で

ここからは隆起が化けてるグリーンは（隆起）と表示します

（隆起）「404号室は異常無かった

オレは地上の様子を見てくるから

ちよつとの時間空ける」

ブルー「任せとけて」

そういった後の隆起は急ぎ足で

非常階段へ向かった

・
・
・

（隆起）「つと後はここをこうやって・・・

よし出来た意外と簡単な封鎖だったな

後は奴らを倒すだけだな」

独り言を呟き

またもと来た道を戻っていった

部屋の前まで来た

するとブラックが声を掛けてきた

ブラック「どうだった？

まだサツは来ていなかったか？」

（隆起）「ああ」

そう答えてブラックが隆起に背を向けた瞬間

隆起は隠し持っていたベレッタで

ブラックの後頭部を強打した

殴られたブラックはそのまま床に倒れこんだ

その音を聞きブルーもやってきた

ブルー「どうした！？」

（隆起）「ブラックがコケた」

ブルーがその言葉を信じしやがみ込んで

ブラックに手を貸そうとした時に

今度は膝でブルーの顔を強打した

そのままブルーもノックアウト

とりあえず第一段階の逃走の段取りが成功した

そこで隆起は変装を解き404号室に入っていた

コナン「その様子だとうまく行ったみたいだな」

隆起「おうでも今は兎に角

早くあいつ等から武器とか盗って
皆を上階に避難させないと」

―「だな」

そう言ったのとほぼ同時に廊下に倒れている
2人から使える道具を盗り
見張り役、計3人を縛って他の部屋に入った

コナン「とりあえず上の階に避難します

質問は後にしてください」

それだけを言つて

封鎖を解かれている非常階段の前まで来た
と、ここで今まで大人しかった
他の人質たちが口を開いた

三井「なあ何故ここまで来たのに

下に逃げないで上へ行くんだい？」

そうだ！説明しろ！と言わんばかりに
他の人質たちの視線がコナンに集まる
コナンは下の階に行くとセンサーが反応し
セットされている爆弾が爆発してしまうため
と言つてそのセットされている爆弾が
「核爆弾」だとは言わなかった

三菱「なら仕方ありませんね」

その後「上へ避難しましょう」と
続けようとした時に廊下の遠くの方で
足音と怒号が聞こえた

隆起「おい早く皆は上に行け
オレが足止めをしとつからよ」

―「お前そんなことしたら死んじまうだろ!？」

小龍「ヤメておけ!早くにげるゾ」

とそれを止めるように指図をする

隆起「つたくオレを誰だと思ってるんだ
なあコナン・・・」

明らかに留まる同意を求めながら
コナンに話を振った
それに対してコナンは

コナン「翼は？」

隆起「ある」

他の者にはわからない会話をして

コナン「じゃ頼んだ」

と言い皆を連れ上へ向かった

その頃、無事避難が出来ていた蘭と園子は・・・

蘭「コナン君たち大丈夫かしら？」

園子「大丈夫なんじゃない？」

あのガキンチョならさ」

と、すでにコナンを新一だという考えは
全く無くなって話していた
そんな時にスーツを着た男が2人に近づいてきた

執事「園子様！」

先程調べるようにおっしゃられた件ですが
今さっき分かりました」

園子「で、どうだった？」

ここでそれまで聞いていた蘭が口を挟んだ

蘭「ねえ園子その調べてもらった事って何？」

園子「ああ・・・調べてもらったのは

あのガキンチョの事よ」

蘭「え！コナン君の事？」

園子「それでどうだったの？」

話しかけられたスーツ姿の男は
「はい」と言ってから話し始めた

執事「その江戸川コナンですが・・・

日本を離れたのが小学校6年生の春
その年の夏アメリカでは

世界を驚かす大事件が起こりました」

園子「悪の巨大組織の摘発と

それに伴った世界的大スター

クリス・ヴィンヤードの逮捕ね」

執事「はい

江戸川コナンはそれに関与していたらしいです」

蘭・園子「ええっ!!」

見事に2人の声が重なった

蘭「本当ですか!」

蘭は男の胸ぐらを今にも掴みそうな勢いで問いただした
男は蘭の勢いに圧倒されながらも言葉を発した

執事「ええ本当です

それには親戚兼友達の

灰原哀、江戸川隆起、皐月の

3人も関与していたのは事実です
しかし、アメリカの組織摘発には

そこまで深くは関わっていないと思います」

その言葉に胸を撫で下ろ蘭
しかし話には続きがあった

執事「しかし・・・

去年のイギリスの組織摘発及び壊滅作戦には
かなり奥深くまで関わっていたようです」

そこで一呼吸置いて

また話し始めた

執事「イギリスでの国際犯罪組織壊滅作戦では

アメリカのFBIとして参加しています

特殊特別捜査官として現場ではかなりの権威があった
と見て間違いないでしょう

他3名も江戸川隆起は特殊特別捜査官

灰原哀は科学捜査官、江戸川皋月は語学捜査官
として作戦に参加していたようです」

蘭「そんな・・・コナン君はまだ高校生でしょ？

なのにそんな

世界・国際レベルの事件まで扱ってるなんて・・・
新一とは比較にもならないくらい凄いんだ」

また、さっき解決した筈の疑問が蘭の頭を掠めた

蘭「やっぱり・・・コナン君は

新一なんじゃないかな？」

すると園子がこう言った

園子「いやぁねーコナン君は確かに新一君みたいだし
実際はFBIになって新一君より凄いけどさ
明らかにおかしい点があるでしょ
蘭には分からない？」

コクンと頷く

園子「コナン君が新一君だったら

この功績が日本で報道されないのは何故？

・・・ねっ？おかしいでしょ

つまり、コナン君は新一君じゃない

っていうのが推理クイーン

鈴木園子様の推理なのだ！！」

とか言って蘭が吹きだしたときに

ホテルからガラスの割れる音が響き渡った・・・

【AS】File・11

隆起side

さてと、皆は上に避難したし

避難した非常階段は向こう側から細工して

こっちからは侵入できないようにしてある筈だし

オレの持つてる拳銃には全て

弾は込められてるし

最悪の場合は背中に隠してある

ハングライダーで逃げれば良いし

準備は万端！

と思っていたら足音が近づいてきた

ベレッタを右手に構え敵が来るのを待った

すると5人が拳銃を片手に走ってやって来た

レッド「貴様あ！！」

と言つなり発砲して来た

それを難無く避けると

荒い口調で聞いてきた

レッド「貴様どうやって

コイツら3人を出し抜いた！」

コイツらと言つて

ブルーとブラック、グリーンを指した

隆起「さあな？FBI特殊特別捜査官に

出来ないことは何も無い・・・ってな」

イエロー「お、ま、まさか!？」

と、何か閃いたのと同時に
驚き恐れた表情をした

隆起「こんな組織的犯行をする奴らなら
知ってるんじゃないの？」

国際犯罪組織Black Wolfの本陣である
イギリスで起こった事件の詳細くらいはさ」

イエロー「と、言うことはやはり

お前は江戸川隆起か・・・

となると人質の中には

江戸川コナンもいるのか？」

オレは左手でワルサーPPKを出しながら
「ああ」と手短に答えた

すると、イエローは半パニック状態に陥った

イエロー「レレ、レッド!

無理です!勝てませんよ!

絶対に!レッドだって知ってますでしょう?

あの、巨大な組織をも潰した立役者が

2人もいるのですよ!？」

レッド「それ以上何か言ってみろ」

イエロー「無理です相手が悪すぎます！

そうだ！ゴールドン」

イエローが言い終わる前に

レッドの拳銃が火を噴いた

そのままイエローが起き上がる事は無かった

レッド「撃て！」

と言ったのと同時にブラックが

発砲してきた

が、残りの2人は軽い放心状態だった

レッド「貴様ら何故撃たない！？

反抗するつもりか！？」

ブルー「そうじゃないっすよ」

グリーン「イエローを何の理由で

殺したのでしょうか？」

おっと、まさかのここで仲間割れか？

レッド「そんなもん決まっているだろ

我々の士気を下げる野郎は全て敵だ！

我々の邪魔をする奴と同じだ！」

グリーン「それは違います！」

レッド「貴様もか！！」

とレッドはグリーンの眉間に弾丸をぶち込んだ
グリーンはそのままもう二度と

浮いて来れない深淵に意識を沈めた

ここまで忠誠を保っていたブラックも疑問を抱いた

本当に今、現在の『カラー』の行動（犯行）は正しいのか？と
そんな時にレッドが

レッド「ブラック！ブルーを撃て！」

その命令にブラックの心は揺れ発砲した

【A S】File・12

隆起side

ブラックが引き金を引いた直後

大きな窓ガラスが砕け散り風が吹き込んだ

「ううゝ！！」悲鳴にも叫びにも

聞こえる声がその場に響いた

ブラックが飛び散ったガラスの破片で

顔を切ったのであった

ブルー「大丈夫か！？」

レッド「ふん！情けない」

この言葉がブラックの心の揺らぎを止めた

ブラック「レッド！

俺はお前を殺してでもこの作戦を止めさせる」

そう言ったのとほぼ同時に激怒しているレッド

冷静に静かに燃えているブラックの

双方の拳銃から弾丸が放たれた

レッドの撃った弾はブラックの肺を貫き

ブラックの撃った弾はレッドの左目を貫いた

2人は崩れ落ちるように倒れた

レッドは即死

ブラックは辛うじて一命を取り留めていたが
しかし出血が酷くもう助からないのは
端から見ても明らかだった

そんな状態の中ブラックは言葉を発した

ブラック「えどがわ・・・」

暴走している『カラー』を止めてくれ・・・」

隆起「わかったからもう喋んな」

ブラック「ブルーも頼んだ・・・」

最期に俺の名は黒田和毅って言っんだ」

最後まで言い終わる前にブラックこと黒田和毅は
力尽きパタリと動かなくなってしまった

ブルー「くっ」

ブルーは声を殺して泣いた

オレはブルーが少し落ち着いてから話しかけた

隆起「なあ・・・もう大丈夫か？」

ブルー「・・・ああ」

そこでオレは思い切った行動に出た

隆起「お前・・・」

オレと『カラー』を漬す気はあるか？

もし、あるんだったら

名前を覚えてくれ

無いんだったら・・・

今さっき死んだ奴らから

拳銃を取ってオレを撃て」

明らかに向こうは驚いている
が、「フツ」と笑って

ブルー「俺は青田佳希ってんだ

これからよろしく」

隆起「おう」

2人は同時に手を出し
ガツチリと手を握った

隆起「とりあえず・・・どうしようか」

佳希「俺、実は拳銃使ったこと無いんだよね

とりあえず、持たされていたって感じで」

隆起「そっか」

と言った時

佳希が持っていた無線から

「ピッ」と音が聞こえた

オレはジェスチャーで「出る」と合図した

佳希「もしもし？」

ゴールド『おい！銃声が聞こえたがどうしたんだ？』

佳希「あ、えーっと・・・はい

特に問題はありません」

ゴールド『・・・もういい

レッドに代わってくれ』

その言葉に佳希は

口パクで「どうすればいい？」

と聞いて来た

オレは佳希が持っていた

無線を取ると

レッドの声色と口調を真似て話し始めた

隆起「・・・すみません

代わるのに少し手間取りました

こちらレッドです」

隣で見ている佳希は

目を見開いて驚いている

ゴールド『さっきの銃声が聞こえた件だが

どうなっているんだ？』

隆起「・・・はい

それは人質達が急に暴れたしたので
威嚇として数発撃ちました

負傷者は出していません
報告が遅れすみませんでした」

ゴールド「わかった

そっちは任せたぞ」

隆起「はっ」

そこで無線の電源を切った

【AS】File・13

隆起side

いままで見ていた佳希が声を上げた

佳希「おめえスゲーな」

隆起「まあな・・・

それより佳希

お前って今いくつだ？」

そんな場違いな質問をしたのには
理由があつた

それは、いくら童顔だとしても
20才くらいにしか見えなかったのだ

佳希「17だけど？」

やっぱりか

隆起「学校は？辞めたのか？」

辞めたんだとしたら・・・
今、社会問題になっている『いじめ』とかだろう

佳希「ああ・・・ちよつとあつてな」

やはり、一瞬だが顔が曇つた

この問題はしばらく放置した方が良さだろう
と思ったオレは話を変えた

隆起「なあ『カラー』の存在理由って何だったんだ？」

佳希は、すらすら話してくれた

佳希「最初は平等とか自由を訴えるグループだったんだ
けど、社会は見向きもしなかった
だから半年ほど前に新しい国を作ろう
と今回の作戦のリーダーが言い出したんだ」

なんか・・・規模がデカイ

佳希「簡単に言えば『共産主義陣営』や『社会主義陣営』的な
考えの国を一から作ろうと言う話になったんだ」

隆起「スゲーな・・・その話」

佳希「だろ？俺も最初はそう思ったんだ

学校では不平等で最悪な場所だったから

平等で平和な国を建てるのに貢献できると思ったら

なんだか嬉しくてよ

でも、実際に作戦をやったら

・・・全然違ったんだ

人を傷つけて、脅して

俺が今までされてた事を

自分が人にしてた

俺って・・・勉強が全く出来なくて

クラスメートからはいじめられて

教師からは見放されて・・・
てな感じだったから、さ」

隆起「佳希・・・お前って優しい奴だな」

オレは心の底からそう思った

佳希は否定したけど・・・

隆起「オレは恵まれてたから

お前の苦しみや悲しみは解らないけど

明らかにお前は真っ白だよ

オレと違って」

佳希「バカ言ってるじゃねーよ

俺は犯罪者だぞ？

お前は逆にヒーローだろ？」

隆起「表向きはな

けどオレはお前と違って

幾多の命をオレはこの手で奪って来てんだ

この世で一番『死刑』にならずにちゃダメな奴が
なんでこんなに平和に過ごしてんだろうな」

佳希「お前の罪がどう裁かれるか

なんて俺には全く分からないけどよ

その罪は世界のためには

仕方の無かった事なんじゃねえのか？

もし、隆起が本当に人を殺めた事を後悔してんなら
生きて十字架を背負い続けるしかないと思っぜ？」

解っていたけど

そう言われると「そうだよな」って思った

隆起「サンキューな

分かってはいたけど

自分の答えに自信が無かったんだと思う

今の佳希の言葉で

これからも殺めた人の事を忘れずに

生きて行こうと思うよ」

佳希「気にすんなって」

マジでサンキューな・・・

【AS】File・14

隆起side

隆起「そうだ！

あと『カラー』のメンバーは
何人残ってるんだ？」

佳希「へ？あ、えーっと

ピンクとパープルがコンピューター専門
ゴールドとシルバーがリーダーと副リーダー
だからあと4人だ
いや・・・ピンクとパープルは非戦闘員だから
事実上はあと2人だ」

「コンピューター室に向かおう」となつて
歩き出した時にオレのケータイが鳴った

隆起「もしもし？」

洸太『兄貴、とりあえず核爆弾が

自動で爆発しないようにはした』

隆起「サンキュ」

と手短に返事をし
電話を切ろうとしたら
言葉が続いた

洸太『あと、もう一つ
良い知らせが』

隆起「何？」

洸太『どうやら』

警視庁の刑事さんが
PCを通してピンクとパープルだったわけ？
とチャットして口説いたらしく
こっち側につけたらしい』

隆起「マジで!？」

思わず声が大きくなった

洸太『ああマジで』

だからコンピューター室にいると思うから
早く会いに行つて』

隆起「今向かつてる

・・・てか目の前
じゃ切るわ」

今度はちゃんと切つて

ケータイをポケットにしまった

佳希「誰から？」

隆起「さあ？よく分からないけど

ピンクとパープルが仲間になつたんだつてよ」

やっぱりこの発言には佳希も驚いた

隆起「入るか」

と言ったのが早いか

ドアを開いたのが早いか

分からないくらいの速さで

ドアを開いた

そこには26・7才の女性と

中学生くらいにしか見えない

女の子が事務イスに座っていた

オレ達が入ってきたのに気づくと

2人は体ごとこっちに顔を向けた

女の子の方から口を開いた

女の子「パープルです

いえ、紫舞です」

女性「ピンクでした

桃井遥です」

次はオレが言った

隆起「オレは江戸川隆起

今月一杯まではとりあえず

FBI特殊特別捜査官

で、隣にいる奴は見た事ある顔だろ？

元ブルーの青田佳希だ」

佳希「改めてよろしく」

向こうの2人もブルーであった

佳希が仲間に加わっていたのには驚いていたが、しかし直ぐに話が本題に入った

舞「他の4人はどうしたんですか？」

隆起「簡単に今までの経緯を言うと

レッドが暴走し

イエローを射殺

それに異を唱えた

グリーンもレッドが撃ち

グリーンに賛同した佳希を

ブラックに殺すように指示し

ブラックが反抗してレッドを相撃ち

で、生き残ったのがオレら2人

ってというのが大筋かな」

遥「大変でしたね・・・」

それよりこれからどうするんですか？」

隆起「出来れば上に逃がした皆を

隣の島に避難させたいんだけど」

すると舞が

舞「ダメです！下に行くと

核爆弾が・・・」

隆起「ああそれは大丈夫

オレの仲間が自動爆発を解除したから」

その言葉に哑然としていた2人だった

【AS】File・15

隆起side

舞「そんな凄腕ハッカーがいたんですね」

遥「ええ私か今日ハックしてきた

刑事さんが1番かなと思ってました」

隆起「1番は10年前くらいからアイツだな」

と洸太の事を言った

すると、佳希が話を元にもどした

佳希「なら上にいる人たちを

なるべく早く下に逃がそうぜ

いつ、ゴールドとシルバーが

俺達の裏切りに気付くか分からねーし」

その佳希の言葉をきっかけに

オレの脳をフルに回転させ始めた

・
・
・

20秒くらい経った頃

隆起「エレベーターって動かせるよな？」

舞「はい」

隆起「じゃあそれを最上階からのみ動かせるように
設定してくれるか？」

舞「了解です」

といいながらキーボードをカタカタさせた

舞「完了しました」

隆起「じゃあ2人は先に下へ向かって

悪いけど階段で」

遥「分かったわ

行きましょう?」

と言って舞を連れ出し

階段に向かって小走りで行った

佳希「俺達はどうするんだ?」

隆起「上に行くに決まってるんだろ?」

佳希は不思議そうな顔をしている

いかにも「どうやって?」と言いたげな顔だ
オレは「まあついて来いよ」と言っ

てある所に連れ出した

そこは・・・

佳希「え?ここって

さっきの・・・」

そう、さっきブラックこと黒田和毅が
ガラスを割った現場である

佳希「まさかとは思うけど・・・
ここからとか言わないよな？」

隆起「大正解！ここから上へ行く」

佳希「登んの！？この絶壁で
ピカピカな壁を！？無理だよ
FBIのお前じゃないんだからさ」

隆起「だれも登るなんて言ってないだろ」

すると佳希は益々
訳の分からないといった表情をした

隆起「これで飛ぶから」

と言って背中に隠してあつた
漆黒のハングライダーを見せた

納得した佳希が「なるほど」と言つた瞬間に
オレは佳希の腕を引っ張り
大空へ飛び出していた

佳希「どれくらい飛ぶんだよ
長すぎたら落ちちまう」

隆起「もう終わるよ」

と言った10〜20秒後には
屋上に降り立っていた

隆起「あの通気口から
入って行こう」

オレが屋上に着いてから
直ぐに見つけた穴からホテル内に入っていた

佳希「それにしても

こん中めっちゃ臭くね？」

隆起「もう少しだから我慢しろよ」

とか何とか言っていたら
屋上から1つ下にある階
つまりコナン達が立て籠もってる階に来た

隆起「ここから出るか」

そう言つて廊下の丁度天井になっている
場所をこじ開け廊下に飛び降りた
それに続き、佳希も飛び降りた

佳希「皆が集まってる所は
隆起は何処だと思う？」

隆起「多分この階で1番広い宴会場か
その辺りじゃないか」

オレがそう言っていると

佳希は「こつちだ」と言っ

てオレを案内した

【AS】File・16

哀「銃声が鳴ってから

もうしばらく経つわね」

とボーカークフェイスと言うよりは
表情を全く変えずに言う

歩美「隆起くん大丈夫かな？」

元太「なあやっぱヤバイんじゃないか？」

光彦「ですよね・・・

コナン君があの場合に残らなかったのも
謎ですね

昔のコナン君だったら

間違いなく抜け駆けしてましたから」

ー「アイツ何か自信たっぷりあったけど
そんなあるのか？」

皋月「もう言っても良い頃なんじゃない？」

哀「そうね

心配だけ掛けているのも
悪いしね」

三井「どうゆう事だい？」

と、毎回毎回突っかかってくるのは
決まってこの男

哀「江戸川君

説明は頼んだわよ」

コナン「つつたく・・・」

まず、俺達（俺、隆起、灰原、皋月）が
今まで何をしてきたか
という所から説明します」

皆の視線がコナン一点に定まった

コナン「俺達4人はFBI捜査官として

去年イギリスで起こった

巨大国際犯罪組織摘発及び壊滅作戦に参加しました」

もちろん聞いてる人からは
「え〜」だの「嘘！」など
様々な反応が見受けられた

コナン「そこでは俺と隆が

FBI特殊特別捜査官として現場で動き

灰原は後方で科学的な研究や薬物の検証をし

皋月は語学で色々な調整役をしました」

小龍「FBIなのハわかつた

でもドウ直接的な自信にナルんだ？」

コナン「その作戦に参加したFBIの隊員は全てエリートクラス

もちろん軍隊などの他の部隊も同じ
その中でも圧倒的に総合戦闘能力値が高い
上位3名に名前が入っていたんだよ
・・・江戸川隆起という名前がね」

皆が哑然としている中
ある一人の人物が口を開いた

哀「つまり、隆にとっては
そんなじゃそこのテロリスト数名になら
間違いない勝てるというわけ
それで、目立ちたがり屋で自分勝手な江戸川君も
しかたなく隆の案に賛成した
と言うのが今の現状よ」

皐月「だからとりあえずは
安心して待っていてられる
心の支えになっているわけ」

この話には誰一人も口を挟まなかった

それからしばらく沈黙が続いた
そんな状況の中

何の前触れも無く突然
大宴会場の大トビラが開かれた

隆起「わりい待たせた」

しかし、隣にはもう1つ影があった
その顔は皆が見覚えがあった

三井「なんで敵も一緒なんだ!!」

と叫ぶ

しかしその問いにはまだ答えずにつかつかと2つの影は近づいてきた

隆起「あゝっと

隣にいるのは青田佳希

ま、良い奴だから」

と、軽々しく言う・・・

いや正しく言えば言ったように見えた

哀「ちよつと、隆

きちんと説明しなさい

意味が解らないわよ」

灰原がそう言い

隆起は今までの経緯と

何故さつき会った時は敵だった奴が

今は仲間になつてゐるかを説明し

コンピューター部門の2人も仲間になつたことを説明した

隆起「と言うわけで、エレベーターで

皆一斉に1階まで降りて

後は栈橋までダッシュだ

栈橋には舞と遥がいるはずだから

あとはホバークラフトに乗って

隣の島に逃げたら
オレらの勝ちだ！」

そう言って皆をエレベーターの前に誘導した

【AS】File・17

佳希の誘導によって

エレベーターの前まで最短ルートで
速やかに来ることが出来た

しかしそこで軽い問題が発生した

エレベーターは計3機あったが

あと2人が重量の関係で乗れなかった

隆起「あゝ・・・んじゃ

オレと佳希が降りるわ

1階までノンストップで行くように

設定を書き換えてもらったから

着いたら直ぐに棧橋に向かえよ」

そう言つてさつさとエレベーターが並んでいる

この空間から出て行つた

哀「ここで突つ立っていたって

何も始まらないし何も終わらないわ

早く隆の言う通り下の棧橋へ向かいましょう」

この灰原の一言で

エレベーターの作動スイッチを押し

皆はエレベーターに乗り込んだ

そして各エレベーターは

ノンストップで地上に着いた

皆は急いで棧橋へ向かった
すると丁度、隆と佳希も降りて来た

隆起「早く乗ってこの危険区域から出ようぜ

さつき飛んでいる時に

佳希から聞いたんだけど

どうやらシルバーは中々の狙撃手らしいからな」

と言いながら

全員をホバークラフトに入れ

隆起が舞と遥という

奴らに出航するように指示した

するとホバークラフトは静かに危険な島から離れていった

・ ・ ・

舞「到着しました

静かに上陸してください」

という船内アナウンスを利用し

無事に隣の島へ避難することができた

~~~~~

この後のことだが

人質が全員無事解放されたことによって

SATがホテル内に突入

ゴールドとシルバーは逮捕された

裁判では、佳希と舞は1年間の禁錮

遙は3年間の禁錮

シルバーこと神木銀太郎は無期禁錮

首謀者であるゴールドこと金田亮は死刑が確定された

最初の2人はまだ未成年者と言うことと

首謀者逮捕、人質解放に協力したことによって

1番軽い罰となり

遙は人質解放に協力と言うことで軽くなり

最後の2人は最後まで抵抗したことなどの

理由から最も重い刑罰を受けることが決まった

~~~~~

とりあえず事件は一件落着し

コナンの操縦により

今月まではFBI捜査官である

4人は工藤家の自家用ジェット機で

日本本土にやつと着陸した

哀「それにしても

本当に貴方達って事件を呼ぶわよね」

といつも通り

事件に巻き込まれた後に

毒づく灰原をコナンと隆起は無視をして

隣では、皐月が苦笑いをする

という少し和んだ雰囲気の流れから

数年ぶりに帰宅する工藤邸に向うため

自家用ジェット機から車に乗り換えて
国道を法定速度ギリギリ(?)のスピードで疾走した

翌日

皐月「隆ちゃん！工藤君！もう昼よー」

という声が工藤邸に響き渡る

何故、今呼ばれた（起こされた）2人が

ここまで寝過ごしているかと言うと

理由は昨日の晩

数年ぶりに工藤邸に帰ってきたから

家中の何処も彼処も埃だらけだったのである

そこで夜も寝ずに掃除をさせられ

やっとの思いで寝れたのが

朝の5時しかもソファで・・・

そんなこんなで昼まで爆睡

という羽目になってしまったのだ

しかしそんな2人を哀が優しく許すわけもなく・・・

哀「起きなさいって言ってるでしょ！！」

その後2人はしばらく音が聞こえたとか聞こえなかったとか・・・

・
・
・

時間と場所が変わり今は夕方の阿笠邸

博士「おお新一！やっと戻って来おったか哀君もおかえり」

と再会の喜びを分かち合っていた最中に
隆起があることに気が付いた

隆起「あれ？左手の薬指・・・」

実はそうなのだ

隆起が発見した指輪は
なんと『婚約指輪』だったのだ

すると博士は頬を赤らめながらフサエさんとの結婚を認めた

コナン「おおすげーじゃん博士」

哀「おめでとう博士」

それに続き隆起と皐月も褒め称えた

博士は照れながら「ありがとう」と言って
続けて「見せたい物がある」と言い残し
地下室へと下りていった

博士の姿が見えなくなってから
コナンが口を開いた

コナン「なあ博士の言ってた見せたいものって
まともなやつだと思つか？」

哀「ええまあ数年掛けて造った物でしょうから
ただのガラクタでは無いでしょう」

コナン「それもそうだな」

と言ったのと同時に地下室から博士が出てきた

博士「これじゃこれ」

と出してきたのは・・・

博士「これはのお

ジェットエンジン付きホバーボード（博士命名）
と言つての前作の

ターボエンジン付きスケートボードを
超越している代物なんじゃよ

これの最高時速は何と時速120km！

どうじゃ？すごいじゃろ」

博士はとても嬉しそうに話している

そして、もうひとつ発明品が出てきた

今度のは丁度、硬式の野球ボールくらいの大きさの球だった

博士「次のこれも凄いんじゃないよ

これはのお

ホイポイボール（博士命名）

と言つての

このボールの真ん中にあるボタンを押して

そして物に当てるとそれが簡単に収納できるんじゃないよ

最大で普通の家くらいの大きさまでだったら

何とか入るはずじゃよ」

しばらく沈黙が流れた・・・

そしてしばらく経ってようやくコナンが口を開いた

コナン「ちよつと待ってくれよ博士

質量保存の法則とか

かなり無視してねーか？それ

どう考えても・・・」

と言った所で博士が「ああ！」と声を上げた

哀「何なのよ博士

急に大声なんか上げて・・・」

博士「実はのお

真ん中のボタンを2回押すと

さらに小さくなって

卓球のピンポン玉くらいにまでなるんじゃ！」

4人は呆然と博士の言葉を聞き流していた・・・

あの博士の非現実的な

今の科学では解明できない『物体』を見てから早2日

俺たち4人は帝丹高校の校門を通っていた

そして今は職員室の奥にある

とある部屋に4人は座らされていた

校長「いやぁ君は容姿も声も

あの工藤新一君にそっくりだねえ」

コナン「アハハハ・・・

仕方の無いことですよ」

そうここは校長室である

校長「なになに

君も工藤君に負けぬよう

頑張ってくれよ」

コナン「は、はぁ」

コナンはその『工藤君』が自分だとは言えず

この校長にかなり押され気味だ

周りの3人は苦笑していた

校長「ところで・・・」

と話を変えてきた

校長「ところで・・・君たちは

昔は帝丹小学校に通っていたそうじゃないか
ということは

この高校にも友達がいたりするのかね？」

この問いには隆起が答えた

隆起「ええ・・・まあ居ますが

なぜそんな事を？」

すると校長はニコニコしながら答えてくれた

校長「実は来週の水・木・金曜日に

体育祭があつて

ああ体育祭っていうのはな

昔で言う球技大会みたいなものでな

クラス対抗戦のトーナメント形式でやるのだ

団体種目の競技をしたことがある人なら分かると思うが

何より大切なのは『チームワーク』！！」

とか何とか校長が熱くなって語っている内に

女教頭が4人全員A組だという事実を教えてくれて

この暑苦しい部屋から逃してくれた

そして今は2年A組へ向かう為

教頭先生とクラスのある2階へ上がっていた

そこで皐月が質問をした

皐月「あの〱先生

1つの組に4人が入っても大丈夫なんですか？」

教頭「ええ大丈夫ですよ

2年A組は元から他のクラスより1人少なくてね
しかも転校しちゃった子も2人居て
だから貴方たち4人が入ってやつと
他のクラスと同じになるのよ」

と、説明がちょうど終わったところで
教室に到着した

そして「頑張つて」と言つて教頭は帰つていった

哀「江戸川君

早く行きなさいよ」

の一言でコナンはドアを開け
ほぼ一斉に4人が入った

すると教室内からは
意味の分からない悲鳴や奇声
ため息などが聞こえてきた

帝丹小学校出身の者からは

「おかえり」などの声も聞き取れる

その後、多少の混乱があつたにしろ
(隣のクラスにも混乱の渦は広がっていたが・・・)

とりあえず無事に4人は自己紹介が終わり席に着いた

席に着いた時にコナンが
ボソツと愚痴(?)を零した

コナン「なぐんでオメエがいつも俺の隣なんだよ?」

哀「知らないわよそんな事」

などと小言をいつも通り言い合っていた
2人だがそれが裏目に出て・・・

担任「江戸川コナンと灰原哀!

ホームルーム始めるぞ」

と言われ初日から無駄に
目立ってしまった2人であった・・・

そんなこんなで始まった高校生活
もう1時限目も終わり2時限目に入った

担任「よし2時限目は各クラス

ロングホームルームになっている

まず男女に分かれて話し合ってもらおう

あ、体育祭のことな

男子はグラウンドでサッカー

女子は体育館でバスケットをやることになった

そこでだ

レギュラーメンバーの決定や

作戦会議をする時間とする

じゃ分かれて始めて」

そう指示が出ると男子は窓際

女子は廊下側へ自然と別れていった

鈴木「どうする？」

ウチのクラスにサッカー部いねえぞ」

活躍のチャンスあり！！

と思い内心喜んだコナン

光彦「大丈夫ですよ！

ウチにはコナン君がいます

ですよねっコナン君？」

コナン「ああまあな」

そして今は内心ガッツポーズまで決めている

隆起「お前の実力は超高校生級だからな

手加減はしとけよ」

と呟くように言ったのは

コナンを含め誰の耳にも届かなかった・・・

と思いきや何故か一番遠くにいた

哀の耳には届いていた

哀「そうね・・・

でも今の彼の耳は

馬の耳に念仏、馬耳東風よ」

という返事が小言で返された

もちろんその小言は誰の耳にも届くことはなかったが・・・

時間は進み

話題の内容も進み最終確認に入った

男子の司会進行役は何故か光彦がやっていた

光彦「じゃ確認しますね

フォーメーションは4・5（2・3）-1で

ポジションは、えーつと・・・

ゴールキーパーが元太君

ディフェンダーが僕と鈴木君、刈田君、米田君の4人

ミッドフィルダーが川島君、川田君、川原君、川藤君

それと隆起君

フォワードのワントップはコナン君
残りの人たちはベンチで出番待ち
という事でよろしいですね？」

まわりの男子からは「うーっす」などの
間延びした返事がチラホラ聞こえてきた

それとほぼ同時に女子の方も
話し合いが終わったらしかった

その成り行きを教卓から
眺めていた担任が前触れもなく口を開いた

担任「よし無事に話し合いは終わったようだな

チャイムまではあと3・4分あるが

ちよつと早めに各自休み時間にして良いぞ

あ、でも隣のクラスとかは

話し合い等をやってるだろうから

チャイムが鳴るまでは静かにしろよ

それから廊下にも出るなよ」

と言いつつ残し教室から出て行った

そこは高校生

今さっき先生が注意したことは

既に頭から削除されていて・・・

ある者は元気にペチャクチャお喋りを

ある者は既に廊下で走り回っていた

そしてある者たちはコナンと灰原の席にタム口していた

哀「で？あなたはまた

大人気無く堂々と主役の座に居座り

女の子を自分の虜にしようと

頑張るわけね？」

といつもと変わらぬ毒舌で発言

すると今は懐かしい光彦と元太のツツコミ

しかし一人だけは異変に気がついていた・・・

歩美「（哀ちゃん・・・もしかして・・・？）」

【AS】File・20（後書き）

迷宮に迷い込みそうです……

【AS】File・21

4人での帝丹高校初登校日の授業も終え
歩美からの提案でこれから皆で

何処かへ出かけようということになり
皆で意見を出し合っていた
すると隆起が言葉を発した

隆起「工藤邸にパソコンが1台もねえから

秋葉原で部品とか集めたいんだけど・・・」

コナン「あつたろ

奥の部屋に2台くらい」

と反論をするものも

灰原曰くそれは「パソコンの形をした粗大ゴミ」だそうで・・・
結局、隆起が言った秋葉原に決定した

・
・
・

そして一同は秋葉原でパソコン部品を買い漁り・・・

哀「これくらいあつたら

中々のものが出来上がりそうね」

と珍しい上機嫌モードの哀に

「ありがとっ」と言われ頬を赤らめる光彦は

光彦「いいえ／＼

男として当然の事をしたまでです！」

と言つて視線を逸らしたが

光彦「あ！」

と当然声をあげた

それを不審に思つたコナンが声をかけた

コナン「どうした？光彦

ありえねーもん見た様な顔して・・・」

光彦「どーした？じゃありませんよ！！

あつちにいるのは今流行の

AKB48の『あっちゃん』と『ゆっこ』と『麻里子様』！！

SK E48の『じゅりな』と『れな』

SDN48の『ノンテイー』

そして！！ついこの間上越でデビューしたばかりの

JET48の『みーたん』と『さつち』ですよ？！」

歩美「あ！ホントだ」

補足

勝手に上越にユニットを作つてしまい申し訳ありません……

もしかしたら今後もJET48を出すかもしれません

そこのところ大目に見てください……

何年経つても光彦はミーハーであつた

元太「おお！本物だぜ本物

何かのテレビ撮影か？

おい！俺らも映りに行くこうぜ」

言っなや否やもう既に

テレビカメラの方に向かって走っている
それを追いかけるように皆が走る

元太が野次馬の列に飛び込み

手招きしている・・・

どうやらここまで来い
というらしい

そこで歩美と光彦は行ったが

4人は近くで座って待っていることにした

そうしてしばらく待つと

黒服を纏ってサングラスをかけた

いかにも怪しげなオッサンが近づいてきた

オッサン「ちよつと君達

そこの喫茶店で少しお話でもしないかい？」

隆起「え？オレ達全員ですか？」

少しばかり警戒しながら聞き返す

オッサン「そうだよ

もちろん金額はこっちで持つからさあ」

哀「あら新手の詐欺師か何かかしら？」

オッサンは苦笑しながら否定した

臯月「もしそうなら今の内に止めておいた方が

自分の身のため、賢明よ？

こっちは全員元FBIの小集団なんだから」

と臯月の言った言葉に反応して

3人が一斉に臯月をジト目で軽く睨んだ

数秒の間が経ち

やっと隆起が小声でツツコミを入れる

隆起「おい

あまり軽々しくFBIの名を出すな！」

皐月「あ・・・ごめん」

そこでオッサンが口を挟んできた

オッサン「元FBI？んなバカな

君達は精々高校生くらいだろ？
制服も着てるし・・・」

コナン「あゝそれには色々と

深い理由がありまして・・・」

オッサン「ならその喫茶店で

お茶しながら聞くよ」

そう押し切られ俺達4人は喫茶店へ
強制連行されてしまった・・・

・
・
・

そして今はその喫茶店の中

オッサン「久しぶり！マスター！

いつものコーヒー5つ頼むよ」

マスター「おお誰かと思ったら岩崎さんじゃないですか

こりゃこんにちは

で？その美男美女の4人組は

タレントの卵ですか？」

タレントの卵・・・ってまさか

岩崎「いいえ金の卵です」

マスター「おおそれはそれは大きく出ましたな

ああもう少ししたらAKBさん達が

ここへ来るので着いたらトーンを下げてくださいですよ」

岩崎「あいよマスター」

そう返事をし

岩崎という名の男は俺らの方に顔を向けた

岩崎「今の話でピンと来るものがあるかもしれないけど

僕は『猪原芸能プロダクション』の岩崎哲治だ

君達を呼び出したのは他でもない

芸能界に引き込もうと思ってるね」

哀「私達そういうのには興味はありませんので」

岩崎「話だけでもいいから聞いてよ

お世辞無しで君達4人だったら
本当の本当で売れると思うんだ」

と熱弁すると丁度そこに

コーヒー5つを運んできたマスターがやってきた

マスター「岩崎さんボリュームボリューム」

岩崎「あ、すみません

つい熱くなっちゃって」

すると外から「AKBさんはいりまゝす」と声がかかった

マスター「静かにお願いしますよ岩崎さん」

と言いカウンターに戻っていった

岩崎「熱くなっちゃって申し訳ない」

隆起「いえ大丈夫です

ところで其方の事務所で

有名な芸能人の方は輩出されてないんですか？」

言われても多分分からないだろうが

話を繋ぐため質問をした

岩崎「もちろんいるよ

JET48の『さつち』こと

東野桜ちゃんだよ

もちろん知ってるよね？」

コナン「ええまあ・・・はい（さっきだけだな）」

そこから暫らく『さっち』を語り始めてしまい

俺らは適当に相槌を入れていた

その途中でAKB48、SKE48、SDN48、JET48が店内に入って

なにやら取材みたいな事をしていた

もちろんその間も岩崎によるトークは続いていた

そんな何時もと少し変わった日も

1つの悲鳴で何時も通りに戻ってしまった

・・・そう事件が起こったのだ

【A S】F i l e ・ 2 3

・・・・・・・・・・キャアアア！！！！

小さな喫茶店に大きな悲鳴が木霊した

コナン「何？！」

言葉が早かったか行動が早かったか分からないが
悲鳴の聞こえた位置に隆起と2人向かっていった
・・・・いや既に着いていた

隆起「これは・・・・K C Nだな」

コナン「ああ」

と小声で話していると

A K B , S K E , S D N , J E T それに関わるスタッフが
金魚の糞の様に集まってきた

隆起「皐月！警察に連絡！」

コナン「灰原！出入口の封鎖！

外の野次馬に混ざってるはずの
アイツらにも協力してもらえ」

その作業はともきれいに進んだ
野次馬達はその4人の動きを啞然と眺めていた

隆起「さてとどうする？」

殺人事件か自殺かまだ断定はできねえけど
状況的に見て自殺の線は低いな
で、殺人だった場合おそらく・・・」

コナン「ああ犯人の目星は大体ついてんだけど」

隆起「あの様子じゃもう物的証拠は処分済み
例えこの喫茶店から証拠が出てきても
あの表情だと逃げられるな
でも、証拠が無かったら」

コナン「本人から出させるだな」

隆起「ああ」

と2人が死体の前でしゃがみこみ
小声で話し合っていると
後ろから控えめな声で声をかけられた

敦子「あのどうされたんですか？」

その声に反応し2人は振り向いた

コナン「確証はまだ無いけど
これは多分殺人」

敦子「えええ?!」

優子「どうなってるんですか？」

隆起「まあまあ落ち着いて」

桜「これが落ち着いていられる状況じゃ・・・」

と泣き出しそうな子までいる

するとプロデューサーらしき人物が話しかけてきた

??「あのさ悪ふざけなら止してくれないかね

こっちだって忙しいんだ」

隆起「いいえこれは悪ふざけでも

お遊びでもないこれは歴とした殺人事件です

証拠にこの人の口からは

アーモンド臭がしましたし

唇や肌の色が紫色になるのではなく

逆にピンクになっていることから言える事です」

一旦ここで言葉を切り

また、話し始めた

隆起「すみませんが少し協力してもらいたい事があるんですが

どなたか錆びた十円玉を持つてる方いませんか？

貸してもらいたんですが・・・」

そう言うとき光彦が『麻里子様』と呼んでいた

女の人が「はい」と言って

十円玉を隆起の手の平に置いた

隆起は「あ、どうも」と言い被害者の飲んでいた
ドリンクの液体に浸した
・・・すると

十円玉の錆がどんどん剥がれ落ち
新品同様ピカピカになった

コナン「これはKCNに触れ酸化還元反応が起こった証拠です」

ここで暫らく黙っていた

岩崎さんが口を開いた

岩崎「あの〜KCNってなんだ？」

隆起「シアン化カリウムの事ですよ

皆さんには青酸カリと言った方が良いですか？」

??「き、きみたちはい、いったい？」

コナンはフツと不敵な笑顔を見せこう言った

コナン「江戸川コナン・・・探偵ですよ」

??「た、探偵？」

コナン「ええ」

丁度その時

外がさつきより騒がしくなった

そして何とも懐かしい声が聞こえてきた

?「あの！通してください！

警察です！！」

とその声が段々と近づいて

声の持ち主は店内へと入ってきた

渉「警視庁捜査一課から来ました高木です
通報者からは殺人だ、と来ましたが」

コナン「その通りですよ

高木刑事」

高木刑事はコナンを二度見して

渉「えええええ！！コナン君?!」

コナン「お久しぶりです

5・6年ぶりですね」

渉「見ないうちにすっかり大人になって

全く誰だか分からなかったよ

あれ？という事は

アメリカから帰ってきたのかい？」

軽く頷いてから

コナン「ええまあイギリスに

居た時間の方が長かったですけど」

渉「じゃあこれからも

捜査協力はしてくれるのかい？」

コナン「僕の手の負える範囲では」

すると灰原も入り口の方からやってきた

哀「あら貴方にしては随分と謙遜するのね」

高木刑事のリアクションもおもしろい

渉「え！あ！哀ちゃん？！

えらく別嬪さんになったね」

そこで蚊帳の外だった

番組プロデューサーらしき男が口を開いた

??「刑事さん

いったいこの子らは何なんですか？

探偵とか言っていましたか」

渉「失礼ですがその前にお名前を」

南部「すみません申し遅れました

私、イ申TVプロデューサーの南部と言います」

渉「南部さんですね

では・・・この江戸川コナン君は

かの有名な名探偵『眠りの小五郎』に

手解きを受けていた少年、いや青年です

それと小学校1年生だった頃に何度も

怪盗キッドとの頭脳戦で

宝石を幾度と無く死守していて

当時の新聞では『キッドキラー』の

異名を付けられていた超天才児ですよ

そこまで言えば知っている方もいるでしょう」

実際店内に居る人の7割方が

解ったような表情をした

その反応にお構えなく

高木刑事はコナンに小声で状況の説明を聞いた

渉「うーんなるほど

という事は犯人の目星は付いているけど

決定的証拠に欠けるということか」

そう言い考える姿勢に入った時

いつの間にか姿を消していた隆起の姿があった

隆起「高木刑事ありましたよ」

犯人を示す決定的な証拠が」

高木刑事が良いリアクションを取る前に
コナンがつつこんだ

コナン「おめえどこ行ってたんだ？」

隆起はそれを軽くスルーした

隆起「高木刑事ちよつとこれを見てください」

そう言つて高木刑事にあるものを見せた

渉「これは・・・ビデオカメラだね」

隆起「はい

これはAKBファンの野次馬から
借りてきた物です

これを再生すると・・・」

そこにはカウンターでドリンクに粉を入れる
マスターが映っていた

しかもその粉の入っていたビンには
『KCN』と表記されていた

渉「マスター・・・犯行を認めますね」

マスターは「はい」と言いながら

カウンターから出てきた
その右手には凶器を持って・・・

【A S】File・25（前書き）

A K Bファンの方は覚悟を決めて読んでください（笑）

【A S】F i l e ・ 2 5

マスターの右手に持っていた物は
木製のバットだった

そのバットで近くに居た
制服警官をなぎ倒し
店から出られなくするように
出入口のドアの前に立った

マスター「そうだ！この俺が犯人だ

この温厚そうな俺がなあ！！」

隆起「何言つてんだオメー

オレは知ってるぜ

お前はこの殺人が初犯じゃないはず」

その一言に明らかに動揺している

隆起「殺人未遂に強姦、傷害、恐喝もしていて

全国指名手配犯のリストにも載ってる室井一哉

それがアンタの名前

・・・そうだろ？」

不覚にも隆起は楽しんでいる様にも見える

すると隆起曰く『室井一哉』という男は
何語か分からない言語で何かと呟くと
いきなり暴れだしバットを振り回し始めた

そのバットはカメラマンの持っていた
撮影機材を破壊し、壁を破壊し

次々と物を壊していく

徐々に徐々に人は後ろに追い詰められていく

コナンも腕時計型麻醉銃で麻醉針を放ったが
運悪く木製バットに弾かれてしまった

圧倒的に不利になった状況で

コナンが隆起に話しかける

コナン「なあ隆起！今日に限って

拳銃を持ってきたんじゃないだよな」

隆起「たりまえだろ

学校だったんだから」

すると今まで暴れていた

室井一哉がニヤリと笑い

ある人の頭を目掛けて思いつきバットを振り下ろした

そのある人とは

隆起に十円玉を貸してくれた

AKB48の篠田麻里子であった

その場に居る誰もが目を瞑った

しかし血飛沫は飛ばず

人が倒れる様子も無かった

1秒また1秒と時が流れるにつれ
一人また一人とキツく閉ざしていた目を
開いていった

そこにあつた光景とは

犯人の室井一哉が目を見開いたまま

隆起にもたれ掛かり

振りかざそうとしていたバットは

隆起の掲げた左手に

乗っかっている光景だった

ついでに言うとも右手は

きつちりと鳩尾に入っていた

ターゲットにされていた篠田麻里子は
ヘナヘナと座り込んでしまった

隆起「高木刑事

手錠早く掛けてくださいよ

それから臯月！

・・・は居なかった

哀！救急車」

それから暫らくして救急車も来て
室井一哉はパトカーで連行されていった

隆起「これでオレの勝率は4割9部0厘だな」

コナン「バール推理は勝負じゃねーつつたろ」

隆起「この勝負持ちかけたのお前からだろ」

それを言われると

言い返せないのはコナンの方であつた

コナン「あんな俺と言い合つてゐる時間があつたら

さつきギリギリのところであつた

女の子のトコでも行つとけよ」

隆起「それがな女の子って言うほどの歳

じゃないってさ

オレらの実年齢から見ても

2つ3つくらいしか違わないって」

コナン「へーそうなんだ・・・

じゃなくてさっさと行つて来い！」

その日は結局

南部さんに拒否られて

話すことは出来なかつた

しかしまた直ぐに顔を合わす事になるのだつた・・・

【DATE】No.1（前書き）

ちょっと休憩です

ストーリーとは直接は関係ありません

この情報には一部作者の偏見と独断が混ざっておりますのでご注意ください

【DATE】No. 1

江戸川コナン

他名・工藤新一

身長・174cm

体重・58kg

江戸川「スコット」隆起

他名・大友隆

・伊達隆之介

・スピリタス

・アクアビット

・怪盗ファントム

身長・176cm

体重・60kg

灰原哀

他名・宮野志保

・シェリー

身長・170cm

スリーサイズ

B90 W59 H85

江戸川「イレネ」皋月

・最上五月

身長・162cm

スリーサイズ

B80 W60 H80

円谷光彦

身長・175cm

体重・56kg

小嶋元太

身長・183cm

体重・93kg

吉田歩美

身長・151cm

スリーサイズ

B75

W55

H75

【AS】File・26

あの事件から約1週間が経った

事件の翌日、翌々日、翌々々日までは

ニュースやテレビで騒がれていたが

今はだいぶ落ち着いてきた

特に翌日は学校にまで報道陣が来て大変だった

（まあ渦中の隆起は

顔を変えて登下校していたから

質問攻めにされることは無かったが）

お陰で帝丹高校体育祭も危ぶまれた

しかし報道陣も暇ではないようで

体育祭は本日最終日となっているが

報道関係者は一人も来ていないみたいだ

話を本題へ

コナン達2年A組の成績は

女子のバスケットは2回戦敗退

これは残念な結果となってしまった

男子のサッカーは決勝リーグ進出

これを当たり前と見るか見ないかは貴方次第！

決勝リーグは4チーム

4つのトーナメントで勝ち進んできた

（1年〃7クラス、2年〃7クラス、3年〃6クラス）

上位4チームの総当り戦だ

残ったチームは3年B組、3年C組

3年F組そして2年A組の4クラスだった

試合内容を細々と記載するのはとても大変
ということでは進み

・
・
・

今の上位4クラスの成績は

2年A組 - 2勝0敗0分

3年B組 - 0勝2敗1分

3年C組 - 2勝0敗0分

3年F組 - 0勝2敗1分

~~~~個人記録~~~~

得点王・江戸川コナン

(15ゴール)

アシスト・江戸川隆起

(13アシスト)

~~~~~  
5試合中

~~~~~

となっていた

2年A組男性陣はクラスの陣地で  
集まって作戦を練っていた  
もちろんコナン中心に

そんな時、皆の集中力を削り取る音が鳴った  
ケータイの着信音だ

その携帯電話の持ち主は「わり」と  
一言だけ謝ると皆から少し離れて  
通話ボタンを押した

隆起「もしもし？」

岩崎『あつ岩崎だけど』

隆起「なんだ岩崎のおじさんか

今、すごく忙しいから

また後で掛け直してくれない？」

その言葉を完全無視し勝手に話し始めた

岩崎『うちの事務所に

江戸川隆起はどこに居る？つて

報道陣達が雪崩れ込んで来たんだ』

隆起「はあい？オレが契約するのは

来週の月曜日付けのはず・・・」

そう結局、隆起は芸能界入りすることを決めたのだ  
他の者たちには話していないが最大の決めては  
昔シャロン・ヴィンヤードに勧められたのを

思い出したからである

岩崎『そうなんだけどさ

・・・まあいいや今から

お客さん連れて行くから待ってて』

隆起「おい?! その客って

もしや報道の連中なんじゃ」

岩崎『それは無いから安心しろ

仕事の合間を縫ってお前さんの所に行くんだからなあんまり冷たい態度をとるんじゃないぞ』

隆起「はいはい」

もう既に右から左に聞き流している

岩崎『で、今どこだ?』

隆起「帝丹高校」

最後は乱暴に言い切った

【AS】File・27

電話を切ったあと隆起は

深いため息を付いた

このあとに起こる

大変な騒動を見据えて・・・

とりあえずみんなの輪の中へ戻った

会話からはカウンターがどうのこうの

と言う言葉が聞こえてくる

そういう会話は全て聞き流し

今は対策を考えていた

すると誰からか後ろから声を掛けられた

哀「何を考え込んでいるのかしら

もしかして、さっきの電話？」

隆起「ああ」

灰原はまだ何か言おうとしていた様だったが

アナウンスが流れグラウンドに行かなければならなかった

隆起「じゃ岩崎のおじさんが来たら

オレが分かるように合図して」

そう言っググラウンドに向かって走っていった

それから直ぐに試合は始まった



3年C組にはサッカー部が6人いて  
その内の一人がゴールキーパーだった  
それが原因か中々試合が進まない展開となっていた

しかし前半のロスタイム

3年C組が攻めにまわりゴール前がお留守になった  
その時、光彦が偶々ボールを取り

隆起へパスした

隆起は横のラインぎりぎりの所を突っ走り  
反対のライン側を走っていたコナンにパス  
コナンはゴールに向かって侵攻

次々と目の前に現れる相手プレーヤーを  
華麗なボール捌きで翻弄し

矢のようなボールを放った

そのボールはキーパーの左脇を抜け  
ゴールに突き刺さった

それとほぼ同時にホイッスルの笛の音が鳴り響き  
前半が終了した

隆起「ナイスシュート」

コナン「まーあれぐらいはな」

そう言いながらも少しは照れがあるのか  
観客席の方に顔が向いていた  
が、「あれ？」と不思議そうな声をだした

コナン「あれって岩崎さんじゃねーか？」

そう言うと隆起は軽く焦った顔をして

隆起「やべ忘れてた！

オレ後半は出れねーから後は頼んだぞ」

そう言ったや否や既に観客席に向かって走り去っていた  
その様子を傍から見ていた光彦が

光彦「彼のピンチヒッターは

川崎君でいいでしょうか？」

とコナンに聞いたが

コナンは「ああ」としか答えられなかった

隆起 side

場面は変わって観客席

オレは急いで岩崎の所へやって来た

岩崎「ああやっと来た

お客さんも時間が無いんだから

ホントすみませんね」

????「いえ私も頼んだのが急でしたし」

その客という人は麦わら帽子にサングラス  
服は花柄のワンピースで、靴はサンダルだった  
身長は170cmくらいと言ったところか  
さっき聞いた声は女のものだった

その人物に心当たりがあった

隆起「約1週間ぶりですね

AKB48チームAの篠田麻里子さん？」

麻里子「こんにちは」

隆起「あのオレらかなり目立ってません？」

岩崎「そうだな

とりあえず車に」

そう言つてオレと麻里子さんは

他の人の視線を浴びながら車へと向かった

そして今は車内

ついでに言うつとすでに動いている  
最初に口を開いたのはオレだった

隆起「あのとりあえず何て呼べば？」

麻里子「んゝ麻里子で良いよ麻里子で

私も隆君って呼ぶから」

“も” っていう接続詞はおかしいだろ  
と思ったがそこは突っ込まない事にした

隆起「こないだの十円玉

ありがとう助かった」

と言って十円玉を手渡した

そして外を見るとオレが余り見かけない場所だった

隆起「あれ？ここってお台場か？

つか検問やってるし」

検問のせいで軽く結構な渋滞が起こっていた

するとなぜかオレの超スーパーコンピューターが作動した  
そこで1つの仮定が出来上がった

隆起「なあ麻里子

もしかしてこの後に収録とか入ってる？」

麻里子「え？あ、うん」

隆起「到着予定時間まであと何分？」

麻里子「あと・・・30分」

30分か・・・この渋滞ならキツイだろうな  
バイクでもあればなあ

と考えているとある事を思い出した

阿笠博士の発明品『ホイポイボール』の事を

それは確か今日ケータイにキーホルダーみたいにして付けたはず  
そしてその中身は・・・

そう思つてポケットに手を突っ込み  
ケータイを取り出す

案の定キーホルダーっぽく

『ホイポイボール』がぶら下がっていた

オレはそれを外に持ち出し

博士が言つた用法で昨日の内に保管しておいた  
赤いバイクを召還（？）する事に成功した

その出てきたバイクにオレは跨つた  
今までの様子を啞然と見ていた麻里子を後ろに乗せて  
スタジオに向けてバイクを走らせた

車の間を通りながら走らせること数分

検問をしている所まできた

とりあえず検問を敷いてる理由を聞く事にする

隆起「あの刑事さん

こちら辺で何か起きたんですか？」

刑事「ああ強盗殺人が4件も

しかも連続して」

隆起「という事は同一犯の可能性が高いと」

刑事「まあそういうことに」

すると女の刑事がひょっこり現れた

女刑事「ちよつと青島君

係長に昇進したからって浮かれないで

あと何で一般人に情報漏らしてるのよ?!」

青島君と呼ばれた刑事は

青島「あ、すみれさん

どうしてここに？」

と会話がずれていた

青島刑事の言葉を聞き流してオレに質問をしてきた

すみれ「はい

まずは免許証の確認」

その指示に従った

すみれ「はいどうも

2人ともヘルメット外してくれる」

その言葉を聞いた瞬間

オレら2人は同時に「え」と言葉を漏らした

すみれ「何よ見せられない理由でもあるの？」

と言われ渋々ヘルメットを外した

すみれ「あら？この2人何処かで

見た様な見てない様な」

途中からいままで口を挟んでいなかった

青島刑事が「もしかして」と言葉を放った

青島「もしかして

今人気のAKB48の篠田さんと

最近マスコミが騒いでる

江戸川隆起くんなんじゃない？」

その言葉に反応して

つい大きな声になって

すみれ刑事も話に食いついて来る

すみれ「ええ?!あの今流行ってる

いけ好かないアイドルグループの子と

指名手配中の犯人を逮捕したって

1週間前から騒がれてる

元FBIだかの高校生?!

でも確かマスコミがどんなに探しても

出てこないって・・・

まさか駆け落ち？」

隆起「違います!

兎に角オレらは怪しくないでしょ?

急いでるんで通してもらえませんか？」

すみれ「いいえ

これをマスコミに売ったら

大スクープ

お金も入って美味しい物もたくさん・・・」



と妄想に取り付かれてしまった

隆起「青島さん通っていいですか？」

青島「どーぞ」

隆起「本店の人に

湾岸署の青島さんは

頑張ってると報告します」

そう言って検問をクリアした

麻里子「あゝあと14分しかない」

隆起「間に合うって」

などと話しをしていたら

あっという間に着き

オレは見送ってさっき来た道を折り返した

その途中でバイクをホイホイボールにしまい

検問をやっと通れた岩崎のおじさんの車に乗せてもらった

隆起「岩崎のおじさんもオレに

何か用事があたんじゃないの？」

岩崎「やっぱ気付いてたか」

ハッハッハと笑った

岩崎「あのな月曜日が契約執行日だろ

実は嬉しい事に番組に出てくれっていう  
オファーがかなり舞い込んできてな  
ギャラも新人とは思えないくらい高くて  
特に日売なんかは生放送の特番まで考えてるらしい」

オレもそれには驚いた

隆起「はあ?! 逆に生の特番でオレに

何を話してもらいたいんだ?

オレその趣旨で決めるわ

他には？」

岩崎「他に? 他には

クイズ番組とかもあつたな

それと探偵・推理・学園が1つになった

ドラマの主演候補にも

お前の名前があつたらしい」

隆起「おっそれは面白そうだな」

岩崎のおじさんは「他にもあつたんだよね」と

言ってそれが何だったか思い出そうとしていた

するといきなり大きな声で「思い出した!」と言った

その声のポリウムに驚きジト目で睨んだ

しかしオレの視線には気付かず話し始めた

岩崎「そうそう『おしゃべり007』だよ

即興トークバラエティーのやつ」

隆起「オレはニュースしか見ねえから分かん  
でもまあ顔が売れるまでは

そこそこ頑張らないと駄目って事なんですよ

じゃあ生放送以外は承諾

生放送は内容をちゃんと説明してもらってから  
じっくり決める

収録番組はその中で被ったものは早く連絡が来た方  
じゃあ暫らくはそんな感じでよろしく」

そこからオレは寝てた

## 【AS】File・30

隆起side

車が工藤邸に着いたときに  
オレは起こされた  
でも眠いものは眠い

隆起「おじさんサンキュ」

そう言つてスライド式のドアを閉じた  
今日のオレはケータイ1つの手ぶら状態だったから  
荷物の確認も必要なかった

そして車が発進し角を曲がるまで見送った  
それも終わりオレはゆっくりと工藤邸の門を押し  
鍵を使い家の中へと入っていった

隆起「ただいま」

哀「あら？おかえり

　　案外早かったのね」

オレは今日2人が履いた靴が  
玄関に無い事に気が付いた

隆起「あれ新一と皐月は？

　　まだ帰ってきてないのか？」

哀「ええ警視庁にお呼ばれしたそうよ」

オレは警視庁と聞き事件だと分かった  
そして新一が呼ばれたであろう事件に心当たりがあった

隆起「あゝ連続強盗殺人事件ね」

すると哀はいかにも

「この人は何を言ってるのかしら」という  
表情をした

隆起「え？それじゃないの？

でもそれ以外に思い当たる節が・・・」

哀「違うわよ

今回呼ばれたのは

何でも麻薬の密売人を逮捕したまではいいけど

その人の話している言語が分からなくて  
って事らしいわ」

オレはその説明でやっと納得した  
あゝそれで皐月もいないのか、と

しかし段々と瞼が重くなっていく

隆起「眠いから今日はもう寝るわ」

そう言っただけ階段を上っていく

2階には貸してもらっている部屋がある  
そこを今は自室として使っている

階段を上っている最中に  
下から声を掛けられた

哀「晩御飯はどうするのよ？」

隆起「悪いけど知らない」

そう今のオレの状況は  
食欲より睡魔の方が圧倒的に勝っていたのだ

そして自室のドアを開き  
即行今まで着ていた服を脱ぎ捨て  
部屋着に着替えてベッドの中に潜り込んだ

時は流れ・・・

隆起が寝てから1時間と20分後

哀side

私は今洗濯物を洗濯機の中に放り込んでいる  
そして何時も通りポケットの中に  
物が入っていないか確認してから放り込んでいた  
するとある人のポケットから紙くずが出てきた  
それは一見汚く破かれたメモにも見えるが  
書かれた内容を見たら直ぐに  
その推理が間違っていると分かった  
それは何とデートのお誘いだったのだ

しかも筆跡が一目で分かるほど  
その紙切れの持ち主と違った

哀「これは皐月ちゃんに報告ね」

私は気づかずにそう呟いていた  
がその声の大きさに驚き

哀「私らしくもないわね」

と言葉を続けた

それから皐月が帰って来るのを  
今か今かと待ちながら

洗濯物を脱水にかけそれを干す  
という単純作業を行っていた

すると「ガチャ」と玄関の扉が開く音が聞こえた  
それに続き

コナン「灰原あゝメシい」

という『音』が聞こえた

哀「そこにあるのを温めて勝手に食べなさい」

と言いながら玄関へ向かう

そして玄関へ入ってきた皐月を捕まえ  
私の部屋へ連れて行った





【A S】F i l e . 3 1

皐月「ちよつと何？何？！

いつもの哀ちゃんらしくないよ？」

とかなりこの行動に驚いている様子

哀「これを見て」

そう言つてさつき発見した

紙切れを皐月に見せた

その書かれてあつた内容は以下の通りだ

こないだはありがとう

何かお礼がしたいと思つてゐるんだけど

あつそつだ今度ウチでカレーご馳走するよ

住所は 東京都 区 ××××

電話で連絡ちよーだい

0 8 0 - \* \* \* \* \*

まりこ

これを読んで皐月の表情は変わった

皐月「え・・・これって

食事の誘い？

でも誰に・・・」

哀「これは隆のポケットから出てきたものよ」

皐月「ってことは」

そこまで言って青くなってしまった

哀は直接聞いたことはなかったけれど

皐月が隆起のことが好きなのではないかと前々から感じていた

皐月「もう行っただの？」

さっきから見当たらないけど」

哀「大丈夫よ

隆は自室で熟睡のはずよ」

その一言で少し落ち着きを取り戻したように見えた

皐月「これ隆ちゃんは知ってるのかな？」

哀「さあ

さつきかなり眠そうだったから

それは何とも言えないわね

でも1つだけ言える事は

この状況は皐月ちゃんにとっては

とてもよろしくないってことね」

その後しばらくは2人とも黙っていたが

皐月が「わかった」と声をあげた

皐月「ちよつとアプローチかけてみるわ

それもピンそばに

情報ありがとね哀ちゃん」

そう言つて部屋から出て行つた

哀は「ピンそばにアプローチ」の意味は

分からなかったがとりあえず

良しとし寝ることにした

翌日

防音壁になっているはずの個室から大声が聞こえた

もちろん廊下には響いたが

右隣の新一の部屋と左隣の哀の部屋も

防音になっているためそこまでは届かなかった

「何だこれえ?!」と

状況を詳細に説明しよう

まず隆起が起きた

そして左腕に妙な保温感を感じる

左側を見る

皐月が大きめのＴシャツで寝ている

視線を下げて自分の左腕を見る

メロン！とまでは行かないも

オレンジくらいの『ブツ』と

皐月の腕によつて自分の左腕が

拘束されている事に気が付く

驚き声をあげながらベッドから落ちる

まあこんな感じだった

当然のことながら皐月は今の声で目を覚ました

皐月「おはよ」

しかし隆起の思考回路は

この状況を完全には把握できていない

隆起「・・・何で？」

皐月「27年間分の吐き出しちゃいなよ隆ちゃん」

隆起「はああ？」

まだ完全には働いていない脳で

その言葉の意味を検索する

5秒くらいの間が空いた後にヒットした  
するとフツと笑い

隆起「オレ童貞じゃないけど

組織にいた時にヤツたから志保と

それに皐月は抱かねーよ

オレは」

皐月の頭の中は

どうやら「フラれた」という事実と

哀と関係があつたらしいという事実で

頭がいつぱいになってしまった

## 【AS】File・32

皋月の表情が崩れたのを見て  
隆起はそのまま部屋を出た  
そしてキッチンにいった

ポトポトとコーヒーの液体が落ちるのを  
眺めながら早く起きてしまった事を悔いていた  
何たって今日は土曜日  
誰だって遅く起きたいはずだ

コーヒーをコップに注ぎ  
テールに運ぶ  
熱々のコーヒーを飲みながら

隆起「さっきのは不味かったかな？」

と独り言を漏らした

しかし今は特にする事も無いため  
近くにあったりモコンでTVをつける  
それをテキストに眺めてたら  
あっという間に3時間が経ち  
9時になり新一が降りてきた  
その30分後には哀も降りてきた  
そして開口第一声が

哀「隆あなたまさか」

隆起「おはよ」

哀「そう」

隆起が話しながらない様子を見て  
イヤラシイことをしたのだろうと勘違いしてしまった

哀「今日は3食抜きね」

その言葉にトゲがあるのと  
突き付けられた事実を考えて  
隆起にはある案が浮かんだ

隆起「あ、オレ今日出かけるから

それと・・・

志保おまえオレに隠し事あるんじゃない」

そう隆起は皐月の表情の崩すタイミングが  
不自然な事が気にかかっていたのだ

するとキッチンに向かった足を

こちらに方向を変えて哀が近づいてきた

哀「はいこれ」

と出されたのは紙切れ

という事はただの思い過ごしだろうかと思い  
さっき気になっていた事を頭の隅に追いやった

隆起「何コレ」

そう言いながら受け取り  
内容に目を通した

そしてポケットに突っ込んだ

隆起「長野に日帰りだから」

そう言つて皐月がまだいる筈の自室に向かった

そして15分後には

工藤邸を出てバイクを走らせていた

目的地は前世とも言える

大友隆時代暫らくの間

住んでいた雛三沢村だ

そして4時間半バイクを走らせ  
ようやく雛三沢に着いた

とりあえず何か食べないとヤバイ

昨日の晩、今日の朝、昼と

3食も飯を抜かしているのだから

どこか飯が食べれるところ・・・

そう考えてパツと浮かんだのは

エンジェルモートだった

しかしこの顔で行くと流石にマズイ  
次に出たのが家

それも駄目



親には大友隆は死んだ事しか知らないはずだ  
という事で洸太が今住んでいる  
古手神社に行く事にした

そして本堂に続く長い階段を上った  
すると境内に人影が見えた

その人物は最近では声でしかこの作品に登場して  
寂しがってたであろう洸太だった

隆起「洸！久しぶり」

洸太は隆起がいる事に驚きを見せていたが  
テクテクとこっちに向かってきた

洸太「っーか何やってんだ？

芸能界なんかに入って」

その時だった隆起は背後に忍び寄る  
妙な雰囲気気がついた

隆起「羽入だろ？」

と言つて後ろを振り向いたが誰もいなかった  
そして前を向くと巫女姿の羽入がいた

羽入「やっぱり隆なのですか？」

## パラレルワールド・未知との遭遇

パラレルワールド・未知との遭遇

~~~~~原作~~~~~

【ひぐらしのなく頃に】

【名探偵コナン】

【涼宮ハルヒの憂鬱】

【ONE PIECE】

【NARUTO - ナルト疾風伝】

【ドラゴンボールZ】

【灼眼のシャナ】

「ジャンル」

学園・戦闘・SF・ファンタジー・推理・チート

<オリジナルキャラクター>

あり

ウツキー君からの小説説明

この作品はクロスオーバー超大作です

要点要点で見られるのも良いのではないのでしょうか？

ついでにオリキャラが主人公です

あと後半から『オリキャラ最強』や

作者の自己満足になる可能性が・・・

ついでに言つとかなり早く終わらせる予定です

それでもよろしければどうぞ

【PW】File・0

羽入「やっぱり隆なのですか？」

隆起「やっぱりって

知ってたような口ぶりだな」

羽入「隆の生命反応が感じられてた

気がしてたのです

まさか年をとってないとは思いませんでした」

隆起「いや体が縮んで小4まで戻ったのさ

そして今は高校2年の体

で、梨花にオレが生きてるかもって事話した？」

そこで洸太が答えた

洸太「誰にも話してない

母さん父さんも含めて」

隆起「で、今の雛三沢の状況は？」

説明された状況は大体以下の通りだ

園崎詩音と北条悟史がゴールイン

子供が1人

竜宮レナと前原圭一もゴールイン

双子の子供がいるらしい

古手羽入と大友洸太がゴールイン
子供が1人

北条沙都子は婚活（？）中
そして・・・

隆起「は？魅音は結婚してないのに子供が1人？

それもオレの子？

いや意味わかんねー

そんな事してないぞ絶対」

羽入「そんなに慌てなくても大丈夫なのです

魅音が勝手に病院から隆の精子を持ち出し
人工授精をしただけなのですから」

それ犯罪だぞ

羽入「久々に来た隆のために

キレイにしたばかりの祭具殿に招待なのです」

何故か飯を食べる前に祭具殿に連れて行かれた

そして置かれている物を次々と説明され

最後の1つになった

羽入「これは『最強兵士育成ノ玉』

というものなのです

持つだけで最強になれるとされています」

そう説明され隆起はその玉に触れた

それがこれから起こる元凶だった

すると玉が急に発光し辺りが光の渦に巻き込まれた・・・

【PW】File・1

隆起side

オレが目を開くと見慣れない天井が視界に入った

??「大丈夫」

隆起「ああ・・・ここ何処」

??「私の部屋」

状況的に見てそれはわかる

隆起「君は誰？」

有希「私のパーソナルネームは長門有希

貴方にも関係がありそうな事だけを説明しておく

上手く言語化出来ない

情報の伝達に齟齬が発生するかもしれない

でも聞いて

貴方はこの世界の人間ではない

他にも普通の人間ではない人がある

人間の周りに集められている

その名は涼宮ハルヒ

彼女の周りには私を含め

宇宙人、未来人、超能力者

そして異世界人の貴方がいる

私はこの銀河を統括する
情報統合思念体から造られた
対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェイス
それが私」

今オレは脳を120%動かしているが

長門有希と名乗る少女の話にはついて行けていなかった

隆起「で、オレはこの世界で何をすればいいんだ」

有希「わからない」

隆起「とりあえず未来人と超能力者にも

話を聞きたいんだけど

何処にいるんだ？」

有希「学校」

隆起「じゃあその学校に連れて行ってくれ」

有希「あなたは転校してくる事になっている」

そう言いながらカーテンを開けた

すると外からは朝日が光り輝いていた

隆起「って今から?!」

有希「そう」

そしてオレはまだ訳の分からんまま

学校へ向かった

そして放課後・・・

有希が日課といっていた部屋に足を運んだ

隆起「ここに来るのか？」

未来人と超能力者が」

有希「そう

あと1分22秒後と

2分52秒後に」

それから1分22秒後と

2分52秒後に人が入ってきた

隆起「お前が古泉で

お前が朝比奈か」

古泉「ええ」

隆起「でさ何でオレがここに呼ばれたんだ？」

古泉「それは涼宮さんが望んだからですよ

つまり貴方は涼宮さんにとって必要ないと思われたら

もしくは満足させられたら

きつと貴方の世界へ帰れる

それが僕の意見です」

うーん

という事はこの世界は『涼宮ハルヒ』を
中心に動いている訳か

隆起「つまり事件が起これば良いって事だな
ちよつと待てよ

涼宮ハルヒが死んだらどうなるんだ？」

その問いには誰も答えられなかった
部室が静まり返った時
頭の中で声が聞こえた

羽入『聞こえてますですか？』

隆起『ああ』

と頭の中で答える

羽入『どうやらその世界から出るには
閉鎖空間というものを
完全に破壊しなければいけないのです』

隆起『その壊し方分かるか？』

羽入『あうあうそれが・・・それが・・・
その元凶を倒さなければいけないのです』

隆起『つまり・・・殺せと？』

羽入『もう1つだけ方法がありますのです』

そつちを早く言えよ
と心の中で突っ込む

羽入『それは・・・』

【PW】File・2

羽入『それは・・・』

隆起『それは？』

羽入『貴方が命を絶つことなのです』

手っ取り早いのは

隆起『自殺・・・か』

羽入『しかしその様に強制終了を行うと

また他の世界に飛ばされる可能性があるのです
それと死んでもその世界に

隆の死体は残らないので安心するのですよ』

それで良いと思い

科学室にある薬品を全て持ってきてもらった

古泉『これで何を？』

朝比奈『なんだか危ない臭いが・・・』

薬品を混ぜているときに

ドアが開かれた

涼宮『誰？あんだ』

確実にオレに向けられた言葉だった

隆起「魔法使い

だったりして」

そう誤魔化して

調合を続けた

涼宮「へえなら何かやって見せてよ

ねえアンタも見たいでしょキヨン」

キヨン「ああまあな」

そんな会話を聞き流しながら

調合を続けた結果完成した

オレはそれを躊躇うことなく飲みきった

そしてオレは意識を手放した

【PW】File・2（後書き）

2話目にしてハルと終了

どうなることやら・・・

【PW】File・3

今度は何だ？

ゆらりゆらりと動いている

体を起こすと麦わら帽子を被った青年を見つけた

隆起「あゝ誰？」

ルフィー「起きたか

その果物食っていいぞ

俺はルフィー

海賊王を目指してる

お前は？」

隆起「オレは江戸川隆起」

そしてオレは勧められた果物を口に入れた

しかし不味い

吐き出しはしなかったが

近くにあった水で流し込んだ

隆起「今の何？」

ルフィー「ああゝ！！！！

それスイスイの実だ

悪魔の実だ

確か普通は食べるとトンカチになるんだけどよ
その実だけは水を操れるようになるんだ」

そう言われたとほぼ同時にまた
視界が真っ白になった

あゝ何時になったら戻るんだ

【PW】File・3（後書き）

作者「ワンピース終わり」

隆起「はやくね?！」

まあ早く現実世界に戻りたいから
その方がありがたいけど・・・」

【PW】File・4（前書き）

今度はナルトの世界に突撃い！！

【PW】File・4

そして次に目を覚ました時には
目の前に銀髪の顔をマスクで大半いや
右目を残し他の部分を隠している男が目の前にいた

カカシ「俺の名は、はたけカカシ

好きな食べ物は何々

目標は・・・ま、教える必要は無いっしょ

今から隆起は俺と1対1の特訓をする事になる」

どうやらまた意味不な世界に
飛ばされてしまったらしい
とりあえず話を合わせておこうと思った

隆起「ええ」

カカシ「じゃまず

この紙を持つて

チャクラをそれに集中させるんだ」

いきなりチャクラと言われても
思いもしたが

集中すれば良いと思い突っ込むのをやめた

そして渡された紙に集中した
するとその紙に変化が起こった
濡れて・・・感電して・・・燃えた

カカシ「お前3つも持つてるのか」

そう驚かれても

オレにはどう反応したらよいのか分からないけれど濡れた理由は分かった

多分・・・『スイスイの実』の能力

隆起「よく話している意味は分かりませんが

水は自由に操れると思いますよ」

カカシ「それなら話が早い

真似してみる

水遁・水陣壁」

「真似してみろ」と言う事はその形に水を操ると言う事か

隆起「水遁・水陣壁」

すると自分のイメージ通りの物が目の前に現れた

カカシ「この様子じゃ水は問題なさそうだな

次、雷遁

左手にチャクラを集中させる

俺がやったら

ま、こんなんだ」

どうやらチャクラとは

この世界では自分の内面に秘める力のことを

指すのだということが分かった

そして言われる通りにした

銀髪の男ほどでは無いが確かに雷が手の中に出てきた

やつと『最強兵士育成ノ玉』の意味が理解できた

そしてこれはきつと戦時中に作られた物だとオレは推測した

隆起「なるほどこれは最強になるわけだ」

誰にも聞こえないほどの

大きさでそう呟いた

カカシ「ほー雷遁も未熟ながら既に来るのか

じゃ最後は火遁だな

火遁・豪火球の術」

すると口元から大きな火の玉が出てきた

いままで通りそれに続いて

オレもその真似をした

「ゴオオオ!!!!!!」

確かに出た

出たけれども明らかにオレの出した球体の炎は

・・・蒼かった

【PW】File・5

蒼色は紅色より火力は上のはず

隆起「これは先生のやったのと同じ？

それとも同じではない？」

カカシ「うゝん・・・似て異なるものかな

たぶん火遁に間違いは無いんだけどな」

隆起「オレの火遁と雷遁を融合させたら

先生は新しい技が出来ると思う？

オレは相当なオリジナルの新技が出来上がると思う
けど多分かなり危険だから下がってて」

カカシ「しかしそれは血継限界という・・・

って聞いてないか」

左手に雷遁、右手に火遁

バランスに気をつけながら

ちょうど50：50になった時に両手を合わせる

それが上手く行く計算だったが

中々思うように行かない

それから約2時間ほど経った頃

隆起「今だ！」

そう直感し両手を合掌した

「バチチチチいいいい！！！！！！」

合掌した手から物凄いエネルギーを感じた

カカシ「プラズマか？！

・・・よしそれを形態変化させてみる」

形態変化？まあそのままの意味だろう
そう思い試してみたが全然できない

カカシ「ま、数時間でここまでとは驚いたよ

この続きはまた明日

俺はこれから戦場に行ってくる」

隆起「つて事は今は戦時中？」

カカシ「ああ第四次忍界大戦中だ

言つとくが付いて来るなよ」

念を押してから消えていった
だがそんな事で黙ってるオレじゃない
当然の如くあとをつけた

暫らく追いかけていると

戦闘の気配を感じた

それも凄い数の・・・

しかしそれに臆することなくその殺気で
充満している空間に足を踏み入れた

すると戦闘中の誰かが

オレの気配に気が付いたみたいで

何処からともなく火の玉と手裏剣が飛んできた

隆起「水遁・水陣壁」

さっき教わった技でその攻撃を退けた

そして攻撃の発信源（？）を特定し反撃に出る

隆起「我流・豪火球」

「ゴオオオ！！！！」

オレの放った蒼い炎は戦闘空間の
半分近くを焼き尽くしてしまった

『ごーかく！』

頭の中でその声が聞こえ

またもやオレは違う世界へ移動させられた

【PW】File・6（前書き）

ドラゴンボール編スタート！

今までよりは長くする予定w

【PW】File・6

??「ちよつと君、大丈夫？」

上のほうから声が聞こえる

聞いたところ声が高い、女の子だろうか？

そう物思いに耽っていると

体の節々が痛んだ

また体が縮んだのだろうか？

そしてオレは今の状況を確認するために

まだ痛む体に鞭を打ち、体を起こした

??「よかつた〜でもどうして君

わたしの家の前で倒れてるのよ？」

隆起「へ？いついやあ〜それが・・・」

今聞かれた内容が自分でも不思議に感じる

つまり答えられる要素を何一つ持っていない

そんな時オレは自分の手を見た

体の痛みが縮んだ事が原因かを調べるためにだ

そして自分の手を見るために視線を下げた

やっぱり・・・

オレが見た自分の手は明らかに小さくなっていた
6才くらいだろうか？

そう判断したオレは記憶喪失の6才の子を

演じることにした

隆起「僕、記憶がなくなっちゃったみたい・・・」

??「えっ!？」

今、この高校生くらいの女の子に
驚かれてもどうしようもない
そこで、子供の姿を利用して
話を180°変えることにした

オレ「お姉ちゃんだれ？」

??「え?わたし？」

わたしはビーデル

ここ、サタンシティの名前の由来にもなっている
ミスターサタンの娘よ

君は？」

このビーデルという子は

オレが『記憶がない』と言ったことを

もう忘れたのか?とも思ったが

とりあえず記憶喪失の子を演じ続けることにした

隆起「わかんない」

ビーデル「あ!それもそうよね

記憶が無いんじゃない・・・

じゃあ私が決めてあげる」

するとビーデルは『うん』と
声をあげながら考え込んだ

そして数分の時が流れた
何か閃いたように『あっ！』と
声をあげてこう言った

ビーデル「君！わたしの弟にならない？」

突然の提案に流石のオレも面食らい

隆起「ほへえ？」

とマヌケな声を漏らしてしまった

ビーデル「かわいーうん！決まりね

今日から君はわたしの弟の・・・」

で、言葉が詰まり部屋を見渡した
すると視線が定まり

あるPS2のゲームが視線の先にあつた
その名は・・・

ビーデル「・・・『龍が如く』か

決めた！

今日から君はわたしの弟のリユウガくんね
これからよろしくね」

<以後、この物語の最中は
リユウガと書いて行きます>

リュウガ「よろしくお姉ちゃん・・・

ところでさ

この事、お父さんとかに

言わなくて良いの？」

ビーデル「大丈夫よ

家は部屋もお金も有り余ってるから」

軽くサラツと言いやがったな

まあ親の名前が街の名前になるんだったら

相当すげえか・・・

ビーデル「わたし弟か妹がほしかったのよね」

悟天くんやトランクスクんの位の年頃の」

と言ったところで思い出したように

急に前触れもなく立ち上がった

ビーデル「今日の稽古！忘れてた！

リュウガもついて来る？」

オレはその問いかけに

答える間も無く連行された

【PW】File・7

そして小型ヘリの様な小型飛行機の様な物に乗せられてド田舎に到着した

すると青い胴着を着た男の子（高校生くらいに値する）とオレンジ色の胴着を着た男の子（こちらは小学校低学年くらいに値する）が待っていた

??「あれ？ビーデルさん

その子は？」

ビーデル「紹介するわね

今日から弟になったリウガよ

悟飯君も悟天君もよろしく」

そしてオレも挨拶を強要され

ある程度、ちつこい方とも仲良くなり

修行？稽古？に入った

すると悟飯も悟天も宙に浮いているではないか!？

ビーデルも頑張って浮こうとしている

そしてオレは根拠のない自信だが

『この異世界なら飛べる気がする』と思い

悟飯にコツを教えてもらい挑戦してみた
すると・・・

ビーデル「えー?!もう飛んでる!!!」

やはり飛べた

次は悟天が『気』の出し方を教えてくれた
・・・が今度は

火遁や水遁、雷遁しか出なく今日の所は終わってしまった
しかし火や水、雷を操るのは珍しいらしく
3人ともかなり驚いていた

翌日も修行に励んだ

今回も『気』は出せなかったが「プラズマ」は
かなりスムーズに扱えるようになった

そのまた翌日

ビーデルはやっと自由に飛べるようになっていた
そしてオレは『気』を自由に扱えるようになった

またまた翌日

今度は『技』を教えてもらった

そしてそのまた翌日

今回は『オリジナル技』を一気に3つ作った

『ダークエネルギー弾』（エネルギー弾に相当）

『ダークエネルギー波』（かめはめ波（初期）に相当）

『ダークエネルギー砲』（ギャリック砲に相当）

すべての技名に「ダークエネルギー」とついているが

『宇宙に存在するエネルギーの半分以上を占めると

されるが正体が明らかでないエネルギー』の事なので

『気』を隆起自身が不思議な力だと思ったからそう命名したのである

そして数日経ち第25回天下一武道会が始まった・・・

【PW】File・8

まずここ最近に起こった出来事をざっと説明しなければならない

第25回天下一武道会でまずは子供の部が始まった

そしてオレは残念ながら3位だった

何故かというと悟天とトランクスが金髪になって（これをスーパーサイヤ人と呼ぶらしい）

強さが通常の50倍になったためだ

そして大人の部では常人離れた奴らがベスト16まで残った

その後が問題なのだ

何か良く分からない奴らが乱入してきて

悟飯を襲撃

そしてダーブラや魔人ブウと戦い

悟飯とオレは現職の界王神に連れられ

15代前の界王神に究極的に強くしてもらった

その時に表面上の変化は悟飯は艶のある髪

オレは黒に近い蒼色の髪となり

悟飯の戦闘力はどれほど上がったか分からないが

オレは通常の1000倍以上パワーアップしていたらしい

そしてその後はオレも戦いに参加し

最終的には悟飯の親父が

全宇宙から集めたエネルギーを集めた

『元気玉』を放って終止符が打たれた

そしてまたこの世界ともお別れの時が来た

気が遠くなりしばらくお世話になった

この世界の人にもお別れの言葉も言えないまま

また別の世界に飛ばされた・・・

【PW】File・9

隆起side

異世界に移動中のオレに誰かが呼びかける

『・・・次が最初で最後の試験だ

これに合格できたらお前は無事もとの世界に帰れる
だがこの試験に落ちたら

お前は存在もろとも誰の記憶からも消え去られる
それはお前の死を意味する

・・・・・・幸運を祈る』

その声が聞こえなくなると視界が開けた

すると目の前に

とても嫌な雰囲気醸し出している
ドーム状の空間が現れた

他の人たちはその場所を無意識に避けているように見える

そしてオレは意を決してその空間に足を踏み入れた

するとさっきの声がまた聞こえた

『最後の試験の内容を教えてやろう

お前は少女・・・シャナと言うが
よりも早く‘紅世の徒’を倒さなければならない

私は今までお前がどんな事をしてきたかは知らない
だが、この試験をクリアできた輩は今まで誰一人いない
それぐらい難しいという事だ

お前が一番最初の成功者となることを見守ってる』

と言ったかと思えば既に声は聞こえなくなっていた

隆起「なるほど・・・」

そうなるとフルパワーの状態で
行かないとヤバイな」

そしてオレは『アルティメット気』を一気に高め
究極状態になってドーム状になった空間に入ってしまった

奥に飛んでいくと

確かに少女と、でっかい化け物、が対峙していた

とりあえずオレは何が何でも脱出したいので

まずはライバルとなる少女・・・シャナの動きを封じに出た

隆起「水遁・水陣壁！」

その間に一気に片をつける

隆起「真・ダークエネルギー波導光殺砲！！」

これはアルティメット状態の時にしか使えない
オレの中で史上最強の技だ

流石の最終試験もこれには耐え切れず
化け物を倒したのと同時に

オレの意識は雛三沢の祭具伝に戻っていた

洸太「一体何が起きたんだ？」

と目を見開いて驚いている

いつも冷静沈着なこの男がここまで驚いている姿は珍しい

羽入「あうあう途中までは反応していたのですが

途中からは全く反応しなくなったので心配したのですよ」

そしてオレは疑問に

思っていることを尋ねてみた

隆起「で、オレはどうなってたんだ？」

洸太「さっきまでこの世から

存在が消えてたんだってよ

羽入が言うには」

隆起「そうなのか？」

羽入「はい、なのです

正確に言うと1分52秒47の間ですが」

隆起「そうか・・・

ってことはオレは浦島太郎みたいな事をしていた訳だ」

そう言ったただけだが

頭の切れが良い洸太は意味がすぐに理解できたらしい

隆起「その『玉』は破壊したほうが良い

オレも相当な危ない目に遭ってきたし」

羽入「分かりましたです

隆が言うなら間違いないのです

この『最強兵士育成ノ玉』は

僕が責任を持って厳重に処分しますです」

洸太「ところで兄貴は最強になれたのか？」

隆起「ああ1225km/hマッハ1で移動できるようになった

それに炎に水に雷、プラズマも自由に使えるようになった

あとは・・・」

洸太「いや、もういい」

とここで話を遮られてしまった

その後は昔話に花を咲かせ

帰りはバイクを使わずに空を飛んで帰ることにした

がある事を思い出し

連絡を取って寄り道することに決め

飛んで目的地に向かって行った

現実世界と多忙な毎日

現実世界と多忙な毎日

~~~~~原作~~~~~

【名探偵コナン】

【金田一少年の事件簿】

【踊る大捜査線】

【相棒】

「ジャンル」

芸能界・推理・事件・刑事・アイドル

<オリジナルキャラクター>

あり



## ウッキー君からの小説説明

この作品からA K B 4 8、S K E 4 8、N M B 4 8

J E T 4 8（これは作者が勝手に作中で作ってしまった姉妹グループです）

S D N 4 8が作品の深くまで入ってきます

なので、もしかしたらファンの方には

面白くない描写が入ってくるかもしれないので

その時は自主的にB a c kの方をよろしく願います

## 【RW】登場人物

・江戸川隆起（えどがわりゆうき）

帝丹高校2年A組

猪原芸能プロダクション所属

大友隆時代から計算すると

「中学生探偵」高校生探偵」刑事（ここまでが隆時代）

（ここからが隆起時代）FBI捜査員」タレント・俳優」

とかなり仕事をしている

今は、第2の人生を楽しんでいる最強人間である

・江戸川コナン（えどがわこなん）

帝丹高校2年A組

こつちも隆起同様第2の人生を楽しんでいるようだが

彼には結局「探偵」にしか脳がないみたいで

2回目の人生も高校生探偵として活躍中

・江戸川皋月（えどがわさつき）

帝丹高校2年A組

今も尚、外国語に力を入れていて

既に地域を除いた言語はほぼ扱えるまでになっている

そのため最近増えてきた国際犯罪の捜査の

ために呼ばれたコナンに協力することも自然と増えてきている

・灰原哀（はいばらあい）

帝丹高校2年A組

持ち前の化学、薬学の知識でコナンの相棒を務める

最近ではアメリカの科学雑誌などに取り上げられることもあり

局地的に知名度がうなぎ登り

・円谷光彦（つぶらやみつひこ）

帝丹高校2年A組

自称・ニヒルな高校生探偵は江戸川コナン、隆起

金田一には届かないが全国の高校生探偵の5本の指に入るほどの推理力の持ち主となった

・小嶋元太（こじまげんた）

帝丹高校2年A組

少年探偵団の後身である探偵倶楽部の部長だがクラブは基本お遊びサークルなので部としての活動はしていないに等しい

・吉田歩美（よしだあゆみ）

帝丹高校2年A組

学校では「哀か皇月か歩美か」と言われるほど人気が高い先の2人はそういうのには相手にしないが歩美は相手をするので競争率が激しくなっている

・金田一（きんだいちはじめ）

不動高校2年D組

現在、高校生探偵としては3本の指に確実に入るであろう人物だが飲酒に喫煙と法破りな奴  
美雪とは幼馴染関係のまま進展なし

・七瀬美雪（ななせみゆき）

不動高校2年D組

容姿も性格も良いのに彼氏いない歴〃実年齢理由は多分、いや絶対に幼馴染が原因

うん・・・恋に悩むお年頃

【RW】File・0

隆起side

その後、メモに書いてあった  
住所に飛んでいった（これは文字通りの意味）

そしてチャイムを鳴らした  
すると「ガチャ」と鍵が開く音と共に  
篠田麻里子の姿が見えた

隆起「来たよ」

麻里子「あ、入って入って」

と言われるがままに誘導されて  
カレーライスとロールキャベツをご馳走になった

会話もしながら食べてはいたが  
だんだんと話す内容も無くなってきた頃  
オレの新しく買った  
仕事用のケータイ（黒）が鳴った

隆起「もしもし？」

その電話は岩崎さんからだった

岩崎『あのな実はな

・・・ドラマの主演が決まったぞ」

隆起「へえ、出演、じゃなくて

もう、主演、が決まったのね  
で、どんな？」

岩崎「AKBの『マジすか学園』って見たことあるか？」

その時はまだオレらはイギリスにいた

隆起「知らない」

岩崎「その続編をやるんだけど

今度の視点は違うところから撮りたいらしくて

ちようど人を探していたらしんだ

そして秋元康さんの目に付けられたのが

隆起！お前だったんだよ」

隆起「ふゝんじゃAKBの人には知らされてるの？

そのドラマを撮るって事」

岩崎「どうなんだろうな？

でも良いチャンスだから頑張れよ

あつあと、お前のマネージャー決まったぞ

田救っていう新人だ

俺からは以上だ」

と言って勝手に切りやがった

会話の種が出来たので早速撒いてみる

隆起「『マジすか学園』の続編やるって知ってた？」

すると麻里子はかなり驚いて「知らない」と答えた

隆起「その続編にオレも出ることになったって」

麻里子「え?! 隆君が？」

でもどんな役柄で？」

隆起「そこまでは良く分からないけど

今分かつてることは前とは別の視点から撮ることと

何かオレが主演に抜擢されたことだけけど

多分この間イ申テレビのロケ収録中に

事件が起きてそれを解決させたから呼ばれたんだと思うから

そんなに柄の悪い役ではないんじゃないか？」

麻里子「で、誰に推薦されたの？」

と興味津々といった様子で尋ねてきた

隆起「秋元康っていう人」

麻里子「ええ?! 秋元さん!？」

オレが秋元康という人物が

どれほど凄いのかを分からずにいると

意外にも分かりやすい説明でオレを納得させてくれた

そんなこんなで会話をしていると

今度はプライベートのケータイ（白）が鳴った

隆起「もしもし？」

哀『今何時だと思ってるのよ？』

とかなり呆れている声が聞こえてくる

そう聞かれてケータイの時間表示を見てみる  
するともう22時になりそうだった

隆起「・・・今から帰る」

哀「言っとくけどご飯はないわよ」

と言うと「ブチッ」と切られてしまった

そうして「次は仕事場で」と別れを告げて  
玄関が閉まったのを見計らって

空に身を投げマッハで家へ帰った



## 続・マジすか学園

続・マジすか学園

~~~~~原作~~~~~

【マジすか学園】

「ジャンル」

学園・学校・学院・暴力・喧嘩・刑事

<オリジナルキャラクター>

あり

ウツキー君からの小説説明

この小説はドラマ『マジすか学園』のその後を
作者（私）が自分の都合に合わせて造った作品です
そのためAKB48、SKE48ファンの方には
とても不愉快な事が起こりうるので

読まれる際にはお気を付けください。><

「マジすか」登場人物

よろしくきょうがくん
夜露死苦共学院

『つい3年前に出来たばかりの新しい学校

ダークホースとも言うべき存在で

警視庁の捜査四課もある死体遺棄事件を

きっかけに目を付け始めた学校

そしてこの小説の主人公が潜入捜査するターゲットになった

この高校は共学である』

～主人公～

・大友隆（江戸川隆起）

警視庁組織犯罪対策部暴力団排除第2係巡査

警視庁組織犯罪対策部暴力団排除第2係巡査部長

警視庁刑事部刑事総務課刑事部特別捜査係警部補

・江戸川隆起（江戸川隆起）

夜露死苦共学院3年D組

年齢は19歳の新米警官だが父が警視總監

母は元ヤンキーという凄い家系に生まれた子

今回、警視總監である父から直接ある学校の潜入捜査を頼まれ

夜露死苦共学院の3年D組に転入してきた

剣道・合気道・居合道・柔道・空手道などの

かなり高レベルの技を使う事が出来る

もちろんバイクと自動車の免許は取得済み

・新田進（市原隼人）

夜露死苦共学院3年D組白虎派

ヤンキーの中では温厚派、慎重派と呼ばれる

夜露死苦共学院の白虎派に属する人物
隆起と仲良くなる

・里崎（高岡蒼甫）

夜露死苦共学院2年A組黒龍派

過去に少年院に入っていたという事実がある

夜露死苦共学院の黒龍派に属する人物

黒龍派2年部の幹部を務めている

・黒崎大河（城田優）

夜露死苦共学院3年D組黒龍派

夜露死苦共学院黒龍派のトップ

黒龍四天王と幹部、部下の総勢100人を
纏めるだけの力がある

まじすかじよがくえん
馬路須加女学園

『ヤンキーばかりがいる女学園（通称・マジ女）

ここのトップレベルになると

周辺のヤンキー高校全部に顔が知られる程の強さを誇る

近年まではラッパツパ（吹奏楽部）が

トップに君臨していたが今は前田敦子率いる

友情メンバー的な（？）グループがトップに君臨している』

くトップく

・前田敦子（前田敦子）

馬路須加女学園3年C組

「マジ」をスイッチに性格が凶変し最強の女子高生へ変貌する

パンチ力138kg（これは某アニメのミスター・サタンに相当と

思われる)

亡き親友のために介護士を目指している
一時は喧嘩を相当嫌っていたが今は売られたら普通に買っている

└自称・前田四天王┐

・鬼塚だるま(なちゅ)

馬路須加女学園3年C組
喧嘩っ早い奴で自称前田敦子の舎弟

・学ラン(宮澤佐江)

馬路須加女学園3年A組
自分を男だと思っている奴
前田敦子の恋人候補(!?)

・大歌舞伎(河西智美)

馬路須加女学園3年B組
歌舞伎シスターズを兼任

・小歌舞伎(倉持明日香)

馬路須加女学園3年B組
同上それと舎弟

└チームホルモン┐

・ヲタ(指原莉乃)

馬路須加女学園3年C組
チームホルモンリーダー

・ウナギ（北原里英）

馬路須加女学園3年C組

一時期ホルモンを食べられなくなるという悲劇に遭った

・アキチャ（高城亜樹）

馬路須加女学園3年C組

特筆する事はなし

・バンジー（仁藤萌乃）

馬路須加女学園3年C組

上に同じ

・ムクチ（小森美果）

馬路須加女学園3年C組

その名の通り無口

＼山椒姉妹＼

・みやお（宮崎美穂）

馬路須加女学園2年

長女である

・らぶたん（多田愛佳）

馬路須加女学園2年

次女である

・まなまな（奥真奈美）

馬路須加女学園2年

三女である

くOGく

・大島優子（大島優子）

多分あのまま寝てしまい意識不明・・・

・サド（篠田麻里子）

このメンバーよりは年が上

なぜなら留年していたから・・・

・シブヤ（板野友美）

この作品に出る気は無さそうだ・・・

・ブラック（柏木由紀）

シングルマザーだけど子は死んでしまった

・ゲキカラ（松井玲奈）

今回も警察沙汰を起こすだろう・・・

・トリゴヤ（小嶋陽菜）

覚醒しなかったら大人しくて良い子

くその他メンツく

・ネズミ（渡辺麻友）

馬路須加女学園2年

悪知恵の働く奴

・峯岸みなみ（峯岸みなみ）

馬路須加女学園2年

自称・生徒会長

・ダンス（矢神久美）

馬路須加女学園2年

シブヤの舎弟

・珠理奈（松井珠理奈）

馬路須加女学園2年

前田敦子を倒し世代交代を目論む

・エレナ（小野恵令奈）

馬路須加女学園2年

高橋みなみの妹、誤解は解けた

・アニメ（仲谷明香）

馬路須加女学園2年

・ジャンボ（田名部生来）

馬路須加女学園2年

・ライス（米沢瑠美）

馬路須加女学園2年

・昭和（片山陽加）

馬路須加女学園2年

上記4名は予定では出場予定なし・・・

やばくねじこじこじ
矢場久根女子高校

『馬路須加女学園のライバル校だったが

現マジ女トップの前田敦子と
当時ラッパッパ副部長のサドに
ボコボコにされ今は寂れてきている』

八木女子高校やぎじょしこう

『昔、前田敦子とその親友

高橋みなみがいた高校

そして事件が起こり高橋みなみは亡くなった』

警視庁けいしちやう

『日本警察の本部で首都東京にある』

警視總監（鹿賀丈史）

階級警視總監

江戸川隆起演じる江戸川隆起、本名・大友隆の父親
日本警察の警視總監を務めている

兄貴（松田翔太）

警視庁刑事部捜査第一課課長階級警視

江戸川隆起演じる江戸川隆起、本名・大友隆の兄貴
キャリア組で相当なエリート

江戸川隆起演じる江戸川隆起より5つ年上

東京地方検察庁とうきやうちほうけんさつちやう

『原則的に地方裁判所、家庭裁判所での裁判を担当する』

姉貴（深田恭子）

特別捜査部所属検察官

江戸川隆起演じる江戸川隆起、本名・大友隆の姉貴

こちらにも相当なエリートで『東京地検のマドンナ』と呼ばれている

江戸川隆起演じる江戸川隆起より7つ年上

【マジすか】第1話 また、動き始めた・・・

？「警視總監・・・僕のような巡査に
何か特別な用でしょうか」

極めて落ち着いた
いや冷めた口調が部屋に響く
その言葉には触れず話を始める

警視總監「隆・・・お前にしか頼めない無理な頼みだ
2日前に複数の惨殺死体が
遺棄された状態で発見された事件は知ってるな」

隆「ええ確かその死体の身元が
地元の高校生から始まり
チンピラや暴力団関係者のもありましたから
しかし殺人事件になると
僕の管轄からは外れています
四課の刑事なので」

すると警視總監は『フー』と
大きく息を吐き出しこう言った

警視總監「簡潔に言おう
上の者達の会議で超極秘の潜入捜査が決まった」

その言葉に反応した隆が思わず
いつもの口調に戻った

隆「はあ？ちよつと待てよ

その捜査員にオレを推薦したつての？

言つとくけど親父

オレは四課の刑事であつて

潜入は公安とかの仕事で管轄外」

警視總監「ああでも決まつた事だ

会議で決まつた満場一致で」

息子の隆でも滅多に見ない

警視總監の鋭い目を見て断る事を断念した

隆「・・・分かりました

で、何処でしょう？その潜入捜査場所は」

少しの間が空いて

警視總監「夜露死苦共学院

事件に関係していると思われる学校だ

この学校は俗に言うヤンキー校で

そういう高校はその近辺にも多々ある」

隆「なるほど・・・それで？

喧嘩を売られた場合の対処方法は

どのようにすれば良いのでしょうか？

買つて逮捕しても・・・」

その言葉に『いや』と警視總監が口を挟んだ

警視總監「言った通り今回は『超極秘』だ

対象はまだ高校生なんだからな

それで・・・喧嘩は買っても良いが絶対に売るな
その時は幾ら潜入捜査でも不味いからな」

隆「了解しました」

警視總監「それと」

と言つて書類を隆に渡した

警視總監「それは近くの高校の名簿だ

ヤンキー校がごっそり在るから気をつけろよ
そして潜入捜査は明日からだ」

隆「明日?!」

すつとんきょんな声で聞き返した
しかし次の言葉を発するまでには
いつもの冷静さを取り戻していた

隆「いつまでですか?」

警視總監「短くて1ヶ月長くて1年間だ」

隆「わかりました

では四課の人達に軽く話してきます」

そして警視總監が頷き

次に顔を上げた時には既に目の前から消えていた

隆
Side

隆「（まったく高校なんてついこの間まで行ってたのに

でもまあ今度は勉強受けなくても

良いような場所だからその分マシか」

そう国語と社会、雑学以外は

留年に成らなかったのが奇跡かと思

われるくらい酷かったのだ

そんな事を考えながら歩いていたら

いつの間にか捜査四課の部屋の前まで着いていた

【RW】File・i（前書き）

お遊びです^^

会話はっかりなので

しゃべくり007の雰囲気に分かる方ではないと分らないと思います

【RW】File・1

上田「さあ今夜も始まりましたおしゃべり007!!」

パチパチパチ・・・

上田「えーっと？何々・・・今夜のゲストは

今や国民的アイドルグループのお二人と

彗星の如く現れた芸能界の超新星！

・・・ほぉーこれは相当のゲストが

来てくれているようです

という事で、では早速登場してもらいましょう

今夜のゲストはこの方達です」

そして音楽が流れ

ドアが開かれ会場が盛り上がった

上田「今夜のゲストは

AKB48の前田敦子さんと篠田麻里子さん

そして江戸川隆起君の三人です」

敦子「こんばんわ」

麻里子「こんばんは」

隆起「よろしくお願いします」

有田「いやーこんな凄いゲストがね

ウチの番組に来るかね？」

徳井「と言う事は？」

隆起「御察しの通り番宣で来ました」

名倉「どんな番組なんや？」

敦子「良く聞いてくれました

えーっと今回はドラマを

やらせていただく事になりましたですね

前はテレビ東京のドラマ24の枠で

やらせていただいた『マジすか学園』を

今回は日テレの土曜9時で

続編をやらせてもらってます」

上田「へえーどんな作品になってるのかな」

麻里子「一応、続編にはなっているんですが

全然内容が変わっていて始めてみた方にも

とても面白い内容になっています・・・」

上田「って終わり？」

麻里子「はいもう終わりですね」

上田「あ、そうですか

まあ随分と適当な感じの番宣でしたね

じゃあ早速皆さん席の方へ移動してください」

敦子「あのーこれって何処に座ったら」

上田「空いてる前の席に座ってください」

敦子「はい」

と、妙に軽い感じで番組が始まった

上田「まず最初の企画は『とりあえず話せ』
ってどんなカンペじゃい！」

名倉「そう怒るなや晋也」

ホリケン「師匠そろそろ

桃太郎電鉄をする時間です」

名倉「あっホンマや

・・・ってアホか！」

上田「えーいつものやりとりなので
どうぞお気になさらずに」

隆起「あ、はい」

上田「何か最近あった
面白いエピソードでもあったら・・・」

麻里子「あゝ意外とありますね」

上田「ほお一体どんな話なんですか？」

麻里子「あのですね今回のドラマの撮影で

一回だけホテルに一泊したんですよ」

上田「ええ」

麻里子「で、恒例の寝起きドッキリを仕掛けたんですね」

上田「はいはい」

麻里子「続きは週刊AKBのDVDで」

上田「話さんかい!!」

隆起「面白いというか迷惑だった話なら僕もありますよ」

上田「あ、はいどうぞ」

隆起「ドラマの収録の間とかに

話したりすると篠田さんが

かなりのSに変身していたりだとか」

上田「へえ例えば・・・」

隆起「例えばですね

篠田さんはいつも僕に

悪戯をしてくるんですが

その度合いがかなり上がってくるんです」

泰造「悪戯するんですか？篠田さんは」

麻里子「え、ちょっと待ってくださいよ
ストップお願いします」

上田「え、なんで？」

麻里子「今日絶対おかしいんですよ」

上田「誰が？」

麻里子「いつもは“麻里子”って呼び捨てなのに
今日に限って篠田さんになってるし
一人称もオレから僕になってるし」

隆起「へ？」

上田「そうなんですか？前田さん」

敦子「そーですね

まあ隆起君は毒の無い生意気キャラなんですよ
でも今日はちょっと違うんで
視聴者の好感度を上げに来てるんじゃないかなーと
私も薄々感づいてはいたんですけどね」

上田「と、お二人にボロクソ言われていますが
実際どうなんですか？江戸川君」

隆起「そうですねでも基本はタメ口が多いですよね」

上田「じゃあ普段どういう感じで

話しているのかやって下さい
よーいスタート！」

隆起「え？やるんですか？」

上田「お願いします

では気を取り直してスタート！」

麻里子「今日の撮影もノーミスだったんじゃない？」

隆起「そうだったっけ？」

麻里子「もう今日は全部終わったしょ？」

隆起「たぶんね」

麻里子「じゃあさカレー食べに行こうよ」

隆起「また？晩もカレー食べたら

今日も三食カレーになるんだけど・・・

麻里子のせいで」

麻里子「と、まあ私とはこんな感じですかね」

上田「ありがとうございました

では前田さんの場合

よーいスタート！」

隆起「おーい敦子」

って寝てるし・・・」

上田「お、終わり？」

敦子「っばいですね」

上田「会話はしないの？」

隆起「いやするんですけどパツと浮かんだのが

麻里子の場合はカレーで

敦子の場合は楽屋で寝てるとき

だったのでこうなりました」

上田「なるほど

でもそんなには口は悪くないみたいだね」

隆起「そうですね

犯人と対峙したとき位ですか？」

とこんな感じでダラダラと番組は進んでいき

最後にもう一回ドラマの宣伝をして収録は終わった

敦子「ありがとうございました」

麻里子「ドラマ見てくださいね」

隆起「お騒がせしました」

するとスタジオから出た瞬間

麻里子「カレー行っちゃう？」

隆起「一人で行ってろ」

チャン
チャン

【RW】File・1（後書き）

次回予告

第2話 サド現れる！

【マジすか】第2話 サド現れる！

隆 side

オレはいつもの朝と同じように扉を開け
室内に入っていった

隆「おはようございます」

するとポツポツと『おはよう』という声が返ってくる
その声を聞きながら課長がいる席まで歩いていった

隆「おはようございます課長」

課長「おはよう何か用事でもあるのかな」

隆「はい」

実は暫らく調査の方で来れそうにありません」

課長「警視総監には？」

一応補足しておくオレが警視総監の息子
という事は既に知れ渡っている

隆「警視総監からの命令です」

課長「じゃあ私がとやかく言う問題じゃないね
行っってらっしゃい」

その言葉にオレは一礼し部屋を出て
自宅に帰るため帰路に着いた

そして帰宅後は今日中にここを出発する予定だったから
直ぐに旅の準備をし始めた

その数時間後には
少し散らかっていた部屋もきれいになり
準備も完全に終えていた

隆「ケータイ、ノートパソコン、現金、カード

警察手帳に免許証

学校の制服・・・は書類に

部屋に掛けてあるって書いてたし

一応勉強道具も置いてあるらしいし

あとはこの書類の束だけだな

よし確認も大丈夫だ

最後に車にバイクを積んでOKだな」

そうしてオレは車を走らせ

途中コンビニに寄って

晩御飯と明日の朝飯の調達はしたが

その日の午後4時には高校の近くにある

アパートに無事到着した

隆「案外きれいなんだな借りた部屋」

そう呟きしなくてはいけない事を
淡々とやり始めた

夜も更けてきた頃

膨大な資料も読み終え

近所の観察、偵察も兼ねて

オレは深夜の散歩に出掛けた

それから散歩を始めて12分と少しが経った頃

前方から歩いてきた歩行者の肩が

オレの腕にぶつかった

今は状況的には相手の方が悪かったが
反射的にオレは謝った

隆「あ、ごめんなさい」

オレは普段通りに謝り通り過ぎようとした

しかしその相手は

オレに向かってガンをつけてきている

オレはその顔を見て

ある資料を思い出していた

それはパソコンメールに

追加で入ってきた詳細資料の中で

特徴はヒールの靴にモフモフの毛皮

それに長身で170cmくらいある

そう詳細資料の中には書かれてあった

そしてそれは要注意人物の一人『サド』であった

隆「サドか・・・」

オレは無意識の内にそう呟いていた

その声が偶々サドには届いていた様で
目を細めてこう言った

サド「誰だ？てめえ」

完全にサドは戦闘体勢に入ってると思うが
オレは今ここでサドを倒しても
捜査に支障をきたすだけ
という事で大人しく立ち去る事を選んだ

隆「ただの通りすがりって事で

・・・とは行かないみたいだな」

何故かというといつの間にか
周りを囲まれてしまったからである

隆「あんたら刑法第二〇八条あたりに
引っ掛かるんじゃないのかよ」

すると何処からともなく一斉に飛び掛ってきた

【RW】File・2

隆起side

ある日のドラマ撮影が一時休憩に入った頃
オレはある人物に声を掛けられた
その人物とは

‘自称・魅惑のポーカーフェイス’

篠田麻里子であつた

まあオレに言わせれば

‘カレーの亡者’篠田麻里子なのだが・・・

麻里子「今日どうする？」

隆起「奢りなら行こうかな？」

最近奢らされてばっかだし」

そうだったのだ

実はここ数回連続で勘定をほぼ強制的・・・

と言つか極上の笑みに負け

払わされていたのだった

麻里子「じゃあ割り勘は？」

と言う事で今日は割り勘になりそれで落ち着いた

隆起「他に誰か誘う？」

と聞いたが「どっちでも」という曖昧な返事が返ってきた
一応同年の‘小野恵令奈’、‘宮崎美穂’、‘渡辺麻友’の3人に
声を掛けてみたが残念ながら返事はいずれもNOだったので
結局いつも通り2人で行く事にした
もちろん行き先は『COCO壱番屋』である

いつもCOCO壱番屋に来て驚くというか
感心するのが店に入ってから注文を終えるまでの時間だ
麻里子はそれを平均で約20秒でそれを済ますのだった

その後はある程度会話をしながらカレーを
美味しく頂いたが

2人ともたったの25分で食べ終わった

麻里子「ごちそうさま」

ふと、麻里子の皿を見てみると何も無かった
つまり洗ったばかりの様にキレイに食べていた
オレはそれにも感心し店を出た

すると反対車線の方もつと細かく説明すると
グレーのワゴン車が停まっている方向が
何かピカッと光ったような気がした
その原因は翌日知る事になった・・・

【RW】File・2（後書き）

次回予告

第3話 オレの名は・・・

【マジすか】第3話 オレの名は・・・

隆side

オレは四方八方から飛んでくる攻撃をかわしながら
今の状況と作戦を頭をフル回転させ考えていた
まずは状況

敵は10人しかも何らかの武器

（鉄パイプ、木刀、金属バット）を所持

それに対してこっちはオレだけ

武器になりそうな物も持っていない

この間軽く習った‘あれ’をやるしかないか・・・

とついつい考える方に集中していたら

鉄パイプが頭を強打した

隆起「・・・つつ!!」

すると殴られたオレの後頭部から

日本の川のように血が流れ出してきてきた

そしたら流石のオレもフラツとして

一瞬だったが見界も狭まった

そんな様子を見て遠目からサドが

フツと軽く微笑んだようにオレには見えた

・・・あの“超ドS女”め

そう思いながら次にオレの頭目掛けて

飛んできた鉄パイプを受け止め

そのままその鉄パイプを今度は逆方向から
やってきた奴の鳩尾にキレイに決めた
それが例の‘あれ’なのだ

アクションドラマやアクション映画

時代劇などで良く出てくる『殺陣』をしたのだ

読み方は『たて』です

もしその時に通行人が通っていたら

アクション映画の撮影か？と思われたであろう

華麗な動きで相手側総勢10人を

一瞬の内にノックアウトさせてしまった

しかし敵側はいたい何人いるのだろうと

思わせられるくらい

影からまだ何人もの人が出てくる

いくらオレでもこんな大勢には構ってられない
瞬殺で終わらせないと・・・

ここから先は言語化出来ないという理由と

倫理的問題も発生しかねませんので

効果音だけでお送りいたします

バキ！ボコ#ドカ\$ザス！ビキ

p:。 「@¥p^@ pg¥¥¥

ここで効果音は切らせていただきます

隆起「つと」

オレは最後に倒した相手が

気絶し頭が直接地面に叩きつけられるのを避けてから
後ろの方で完全に観戦していたサドを見た

隆起「サド・・・一つだけ質問があるんだけど

答えてくれたりは・・・しねえよなあ」

サド「何時もなら答えてたかも知れないが

今の私はちよつと機嫌が悪くてな」

絶対何時もでも答えてくれないだろ

と突っ込みたかったが止めておく

何故なら遠くにいたはずのサドがもう既に
オレの目の前にまで迫ってきていたからだ

隆起「うわつと」

サドの拳をギリギリで回転しながら避け

その遠心力を使ってそのまま裏拳を繰り出した

でもまあサドにこんな生半可な攻撃が

効くわけもなく難なくかわされた

が、次の瞬間！

サド「グフツ！！」

見事なオレの一撃がサドの鳩尾に入った

サド「お前・・・一体

・・・何者・・・だ？」

途切れ途切れに言葉が聞こえてきた

隆起「オレの名は・・・江戸川隆起

今晚はちょっと話を聞かせてもらつよ」

そう言いサドの後ろに回り込んで

首の根っこをチョップし

今の自宅へ担いで運んでいった

【RW】File・3（前書き）

【RW】File・2の翌日の出来事です

【RW】File・3

皐月side

私は学校に行く途中にコンビニに寄って
何時も読んでいる週刊誌を買った

その日の休み時間の事である

いつも通り元気な名探偵

江戸川コナンとその仲間達は

グラウンドにサッカーをしに行った頃

私と志保（哀）ちゃん、歩美ちゃんの3人は

教室で登校中に私が買った週刊誌を読んでいた

するとページを開くと毎日見る顔が

デカデカと載っていた

（記事の内容）

秋元康プロデュースのアイドルグループ

AKB48に所属している篠田麻里子（24）と

アメリカ連邦捜査局、通称FBIに

小学校4年生から勤めていたという異例の経歴を持つ高校生

しかも今は俳優・タレントとして活躍中の

江戸川隆起（17）が2人つきりで

ドラマの収録の合間に食事にとりに

出かけているところが目撃された
もしこれが交際なのであれば7歳差の恋愛となる
成人ならば問題は無いと思うが高校生となると
色々難しい面も出てくるのではないかと思われる

く以上が記事の内容く

一番初めに声を出したのは歩美だった

歩美「あちゃー

もうスキャンダル撮られちゃったよ
しかも相手が相手だしねく」

哀「でも隆のことだから

考えも無しにお昼を食べに行った
っていう線も考えられないわね」

そこで私が隆起のケータイに電話を掛けてみると
いつも通りの反応が返ってきた

隆起『週刊誌に撮られたって？

やっぱりあの時に撮られてたのか・・・』

皐月「で、ホントに2人で食べてたの？」

隆起『何でそんな事聞くんだった？

・・・まあ最近はしばらくな
あ、今から午後の撮影始まつから』

そう言つとプチンと切られた

歩美「で?どうだったの?」

皐月「うゝん食べてたのは本当らしいんだけど

そんなに慌ててなかったから

そういう関係じゃないのかな?」

とここでチャイムが鳴った

【RW】File・3（後書き）

次回予告

第4話 事情聴取・・・？

【マジすか】第4話 事情聴取・・・？

隆起 side

さっきの戦闘地域で地元の警察と救急車を呼び
オレはサドを抱えさっさと退散してきた

と言うわけでここは今現在オレが住んでいる自宅である

隆起「おゝい起きろ」

サド「聞いてつか？」

気絶しているので聞こえているわけは無いのだが
という事で今度は揺すってみることにした
すると意外にも早く目が覚めた

サド「・・・ここは」

隆起「おつもつ目覚めたか

いくら加減をしたとはいえ

オレの攻撃を食らって

こんなに早く目覚めるとは凄いな」

サドは今も尚

オレにキツイ視線を浴びせている

サド「私がこんなガキに

一発の攻撃も当てれずにやられるなんて」

隆起「自分で言うのもなんだけど

オレ結構強いから

逆にこんなに早く目覚めた奴は
見たこと無いんだけど」

サド「それ褒めてるつもりか？」

さつきより視線が厳しくなった

隆起「まあね

ついでに言うとおレは19才で
お前と一つしか変わらねえんだけど」

サド「そうか」

このままでは話が進まないの
でとりあえず単刀直入に聞く事にする

隆起「じゃあ質問に答えて

まず一つ目の質問は・・・

つい最近起きた惨殺死体遺棄事件は知ってるか？」

その問いにサドは「ああ」と答えた

隆起「じゃあその犯人に目星が付いているとかは？」

サド「強いて言えばゲキカラか？」

隆起「ああ警察もそいつには目を付けているんだけど

上層部は夜露死苦共学院の生徒じゃないか？って見解だ」

サド「お前サツか？」

今日一番の動揺に見えた

隆起「いいや夜露死苦の生徒だけど」

今回は「超極秘捜査」なので嘘を吐いた

サドは19才で高校生という事に疑問を持ちながらも多分留年なのだろうと結論付け追及はしてこなかったそんなちよつと間違つてはいるが氣遣いに意外と良い奴かも？とオレは思った

隆起「で、次は頼み事なんだけど

明日オレ学校早退するからさ

馬路須加女学園に連れてつてくれない？」

明らかに「なんで私が？」という表情をしている

隆起「だってオレ一人で乗り込んだら

生徒が黙ってないだろ？

だから顔の知れてるお前と行ったら態々戦わなくて済む」

サド「お前喧嘩嫌いなのか？」

隆起「嫌いなわけじゃないけど

面倒くさいし疲れるし目立つし

なるべくやめておけって言われてるし
と言う事で明日の・・・

つてもう12時回つてるし

今日の午後１時にオレン家に来て」

サド「わかった」

と了承してくれたが

かなり渋々といった感じだ

隆起「ところで・・・どうする？

送っていつてやるか？

女の夜道は危ないって言うし

最近物騒だしさ」

サド「私を舐めんな」

隆起「いや最近、拳銃が密輸ルートで

出回ってるからマジで危ねえんだ

だから一人で行かせる訳にはいかない」

とりあえず送っていく事になり

サドのナビゲーシオンで彼女宅に無事送り届けた後
即刻今の自宅に帰りソファアーにダイブした

【RW】File・4

隆起side

今日は久しぶりに麻里子が
ドラマの撮影現場に来ていなかった
何でも次に発売する写真集の撮影とかで
ハワイに行っているらしい

という事で今日は誰と出かけようかな？と考えていると
ちよつと前にある人物と

カラオケに行く約束をしていたのを思い出した
その人物とは某テレビ局で

お天気お姉さんとして活躍中のリアクション女王で
現在AKB48のチームBキャプテンとして頑張っている

‘ 柏木由紀 ’ である

彼女は通常、カラオケに行くときは

お母さんと2人で行くらしいが

約束をしたときは何故かその場のノリで

『 今度2人で行こうか 』 という話になり

約束を取り付けたのだった

という事で声を掛けてみる事にした

が、相手はリアクションの女王という事もあって

あえて気配を消して後ろから声を掛けた

隆起「お疲れ」

由紀「わあ！！ビックリした
あ！おつかれ」

流石はリアクション女王
期待を裏切らない反応だった

隆起「ところでさ次の

由紀の出番まであと何時間ぐらい？」

由紀「えーっと・・・4時間ないくらい」

隆起「じゃあ行けるな」

その意味が良く分からなかったらしく
首を傾げている

隆起「カラオケに」

と言うと多少の抵抗は見せたものの
オレがちょっと押し切ると

『じゃあ行こうよ』となったので早速行く事にした

何故ここまでオレが出かける事に積極的だったかと言うと
午前中に撮る出番はいつも通り
予定よりかなり早く終わり
次の撮影は暗くなってからだから
かなり退屈になるからだった

と言う事で徒歩15分ほどのところにある

カラオケボックスに着いた

結局2時間歌って・・・

と言うよりはほぼオレは聴いていたが

由紀はそこそこ満足し

オレはオレで良い暇つぶしになった

そして会計も済ませて

カラオケボックスを出たところ

またもやグレーのワゴン車が停まっていた

多分一緒に店から出たところを撮ったのだろう

オレは半分あきらめムードで撮影現場に戻った・・・

【RW】File・4（後書き）

次回予告

第5話 夜露死苦！！

【マジすか】第5話 夜露死苦！！

隆起 side

ソファで爆睡して6時間ほど経った頃
オレは寝返りをしたことによってソファから転げ落ちた

隆起「痛ってー」

その衝撃で目が完全に覚めてしまった
時間的にもそろそろ起きなくてはいけない時間だったから
その方が良かったのかもしれないが・・・

起きた後はシャワーを浴び

昨日コンビニで買っておいた朝飯を食べ

歯磨きをし・・・とほぼ普段通り行い

全ての準備が終わった頃には8時を回っていた

隆起「確か学校の登校時間は8時30分だったから

もう出ないと危ないよなあ」

そして家に鍵をかけて学校へ向かった

オレは無事(?)に3年D組に入る事が出来た

まあ校庭で10人ほど倒れている者もいるが・・・
すると新田という名札をつけた奴が近づいてきた

新田「見てたぜ！さっきの

お前なかなか強いんだな」

隆起「かもね」

新田「でもアイツら倒したのは不味いぜ」

オレは言っている意味が良く把握できなかった

新田「アイツらはな夜露死苦の中にある

二大派閥の一つ黒龍派に属している1年坊なんだ

黒龍派は少年院に入ってた奴とかゴロゴロいて

そりゃタチが悪いつて評判よ

だから俺は白虎派に属してんだけどよ」

隆起「なあ新田

って事は最近起きた惨殺死体遺棄事件は

その黒流派の仕業か？」

すると声を細めてこう言った

新田「ああ少なくとも白虎派と無所属達は

そう考えてるみたいだぜ」

とここまでは小声だったが

次の言葉は正常に戻っていた

新田「なんで新入りのお前が知ってたんだ？」

隆起「風の噂で耳にしたから」

「本当はその捜査で来たんだが」と心の中で付け足した

新田「今日学校終わってからさ

ゲーセンにでも遊びにいかね？

何かお前とは気が合いそうな気がするし」

隆起「ああオレも気は合うとは思っただけど

生憎今日は先着がいるから

悪いけどまた今度にして」

新田「先着がいるなら仕方ねえよな

・・・ってまさか女かよ?!」

思わず吹き出しそうになるほどの
オーバーリアクションで反応した

隆起「女である事には間違いねえんだけど

デートとかそういう方じゃないからな

あと、ついでに今日は午前中だけ授業には出て

早引きするから」

新田「ほら！やっぱりデートだあ！」

オレはその様子に苦笑いした

その後先生が来て自己紹介をさせられ

午前中の授業は全て寝て過ごし

12時45分になった

新田に「じゃあな」というと

「デート楽しんで来い」と言われ

だから違うんだけどなと思いながらも学校を出て
校門を通り抜けようとした時だった

??「オイ！待て」

と突然呼び止められた

振り返るといかにも悪そうな奴が

こっちに向かって歩いてきた

後ろには十数人の部下も引き連れている

里崎「俺は黒龍派の2年幹部里崎だ

さっきは俺の可愛い部下達が

何か騒ぎを起こしたみたいでな」

オレは『この人は何が言いたいのだろうか？』と疑問に思っていた

里崎「ちよつとついて来いや

お前をボッコボコにしてやるからよ」

隆起「マジで急いでるからさ

また今度の機会に・・・」

と言い終わる前に里崎曰く「可愛い部下達」が襲ってきた
その様子を客観的に見ながら『あーあ1時過ぎちまった』とぼやいた
すると・・・

サド「何約束破って

雑魚共の相手してんだよ？江戸川

と校門の外からサドの声が聞こえてきた

【RW】File・5（前書き）

【RW】File・4の翌日の出来事です

【RW】File・5

皐月side

私は学校に行く途中にコンビニに寄って
何時も読んでいる週刊誌を買った

その日の休み時間の事である

いつも通り元気な高校生名探偵
江戸川コナンとその仲間達（円谷光彦、小嶋元太）は
グラウンドに今日もサッカーをしに行っていた頃

私と志保（哀）ちゃん、歩美ちゃんの3人は
先週と同じく教室で登校中に
私を買った週刊誌を読んでいた
するとページを開くとほぼ毎日見る顔が
またまた載っていた

しかも今度はお相手が変わっている

↓記事の内容↓

秋元康プロデュースのアイドルグループ
AKB48に所属している柏木由紀（19）と
俳優・タレントとして活躍中で
先週は今回のお相手と

同じアイドルグループの篠田麻里子（24）と
食事をとっていたのが

公になってしまったばかりの

江戸川隆起（17）が2人つきりで

今撮影中のドラマ「続・マジすか学園」の

撮影の合間に今度はカラオケをしに

出かけているところが目撃された

そして事務所にお問い合わせしてみたところ

お互いの事務所は声を揃えて

『仲の良い友達です』と答えた

く以上が記事の内容く

その記事を読んだ後

一番最初に言葉を発したのはやっぱり歩美だった

歩美「あちゃーまた写っちゃってるよ

隆起君！」

哀「隆は勘は凄く働くけど

気づいても気にしないことには

本当に気にしないところがあるから

多分今回も気づいてはいたんじゃないかしら？」

そこで前回同様私が電話を掛けてみた

するとこちらでも前回同様いつも通りの反応が返ってきた

隆起『あゝやっぱりね

でも別に良いんじゃないの？

普通に暇つぶしに行ってただけだし
マスコミっていうか

週刊誌が大げさなんだよ多分
どーせ「熱愛発覚?！」とかそういうノリなんだろう?
やらせておけって

まだ向けられてるのがカメラなだけ可愛いだろ
だってオレらはつい此間まで
拳銃を向けられてたんだから』

という返事で

やはり気にしていなかった
だから今後も反省することなく
既に第2の人生と化した

‘江戸川隆起’を楽しむのだろう・・・

【RW】File・5（後書き）

次回予告

第6話 - 馬路須賀!!

【マジすか】第6話・馬路須賀！！

隆起 side

サドの登場に周りの雑魚共が騒ぎ出した

部下1「あんだ？オメー！」

部下2「里崎さん！この女

近年稀に見る上玉ですよ」

その様子に里崎も加わってきた

里崎「その女！コイツに用があるんなら止めときな！

コイツはしばらく動けなくなるんだからよ！

その前にこっちに付くか？

それなら可愛がってやるぜ」

『ワッハッハッハ』と下品な笑い声が飛び回る

里崎「それならそれで

さっさとその馬鹿を渡してくれよ」

ここまで意外に黙っていたサドが

かなりの殺気を撒き散らしながら言葉を発した

サド「うるせーなあ・・・

私の物に何してくれようとしてんだよ」

その文脈には誤解を招く可能性が・・・
それにせめて物じゃなく者にしてくれよ
とオレは心の中で呟いた
そしてとりあえず早くこの場を離れたかったので
話題を変えることにする

隆起「おいサド

わざわざ迎えに来てくれなくなたって良かったのに」

里崎「・・・さど？」

すると里崎の表情が見る見るうちに青ざめていった

里崎「まさかラッパッパのサドか?!」

オレはその言葉を見無視し

かなりピリピリしているサドに向けて声を掛けた

隆起「行こーぜサド

お前が今コイツらと喧嘩しても意味ねえだろ？
結果も目に見えてるし」

サド「・・・・・・・・」

その言葉に反応はしなかったが
さっきまであった殺気が感じられなくなったので
オレはそれを勝手にOKサインと受け取り
サドを引っ張ってその場を後にした

残された者達は啞然とその成り行きを眺めていた

場所は変わり

ここは馬路須加女学園3年C組

チームホルモン5名とだるま、前田敦子が焼肉を楽しんでいた頃
校庭が騒がしい事に気がついた

ヲタ「何騒いでんだ？」

バンジー「さあな」

だるま「まさかあつ姐に勝負を

申し込んできた奴なんとちゃうか？！」

と言って前田敦子とムクチを除く5人が窓際に飛んでいった

アキチャ「あれってサドだよな？」

ウナギ「しかも男を連れてきてるぜ」

だるま「あれってまさか・・・」

ヲタ「ああ夜露死苦の制服だな」

隆起 side

隆起「やっぱ目立ってるな

それにしても助かったぜサド

お前のお陰で顔パスで入れたもんな」

サド「・・・・・・・・」

まだ完全には機嫌が回復していないようだった
すると校舎の出入り口に

メイドさんの格好をした3人組を見つけた

隆起「あれ何だ？」

サド「山椒姉妹っていう馬鹿トリオだ」

やっとサドが口を利いてくれた事にホッとし
校舎に入ろうとした時

校舎内から足音が聞こえてきた

それも1人や2人じゃない複数のものだった

そして一番最初に顔を出した奴は
なんと学ランを着ていた

学ラン「・・・サド」

それから次々と人が流れ込んできた

【RW】File・6

隆起side

今日はまだ麻里子は撮影中だ
という事で今オレは一緒に
スキャンダルを撮られる
暇そうなメンバーを探している

いたいた・・・アイツなら
何も考えないでついて来るだろう
ちようど今は一人で雑誌読んでるし

隆起「美穂！暇ならどっか行こうぜ」

と声を掛けた
しかしその考えが甘かった
確かにホイホイと出かける事になって
近くのちよつと寂れた商店街に買い物に出かけたが
それが長い長い

周りの人には顔バレしてコソコソと何か噂されているし
週刊誌のカメラマンはカメラマンでコソコソと影で蠢いているし
しかし美穂はその様子に気づく事無く買い物を満喫していた

そしてやっぱり翌日の週刊誌に載ることになった

【RW】File・6（後書き）

次回予告

第7話・やっと始まった捜査

【マジすか】第7話 - やつと始まった捜査

前田敦子、鬼塚だるま、学ラン、チームホルモン
歌舞伎シスターズの計10人が集まっていた
そしてだるまがサドが来た理由の核心（？）に迫った

だるま「今更何の用やサド！

しかも男なんか連れて来よって」

と表面上は全く臆する事無く
そう言い放った（本当の所は分からない）
しかしサドは正当・・・なのは分からないが
自分がここに来た理由を言った

サド「私は江戸川に頼まれて

ここに連れてきただけだ」

そう言っただけで顎を動かして隆起を指した
するとサドの行動に疑問を持つ者が出てくる

バンジー「どういう事だ？」

ヲタ「というより

どういう風の吹き回しだ？」

それもそのはず

サドがそう人の頼み事を

易々と聞くタイプじゃない事ぐらい

分かり切っているからである
するとある1人が

勝手に結論を造り上げてしまった
それはもちろんサドとしては
言われて面白くない内容だった

敦子「サドさん・・・まさか

foreign loveしちゃったんですか？」

と軽く笑いながら聞いてきた
すると向こう側サイドは
その結論に妙に納得してしまっていた
がしかし隆起は英語の意味を
サッパリ理解出来ていなく

既に蚊帳の外であつた（実際の隆起は英語は完璧だが）
それに構うことなく会話はどんどん盛り上がって行く

ウナギ「とうとうサドさんにも春が来ちゃいましたか」

アキチャ「でもその相手に

年下を選ぶとは驚いたな」

ヲタ「ああしかもカツコイイ系かカワイイ系かと言うと

カツコイイ系を選びそうなサドさんが

どっちかと言うとカワイイ系の男の子をチョイスするとはな
あ」

ムクチ「・・・」

とムクチはいつも通り微笑んだが

一言も話さなかった

するとこちらにもいつも通りツツコミを入れる

チームホルモン「お前も何かしゃべろよ！」

そろそろサドの顔色が変わってきたところで

やっと隆起が口を挟んだ

隆起「盛り上がってるところ

申し訳ないんだけど」

と隆起が突然言葉を発した事で

そこにいたサド以外全員の視線が突き刺さった

隆起「今いるサド以外の全員に聞くんだけど

最近起きた惨殺死体遺棄事件は知ってる？」

その質問に対する反応は

全員が「知ってる」だった

隆起「じゃあその事件の犯人や

してもおかしくない人物

もしくはそういう事件を起こしそうな人物に心当たりは？」

そう質問をすると

数名の視線が疑惑の持つ視線に変わった

小歌舞伎「て言うか何でその事件を

お前が調べてるんだ？」

大歌舞伎「まずその話は置いて

誰だ？お前」

隆起は『まあ普通にそうなるわな』と
思いながらその逆質問に答えた・・・

【RW】File・7

皐月side

私は学校に行く途中にコンビニに寄って
例の週刊誌を買った

その日の休み時間の事である

今日は雨で珍しく

いつもならサッカーをしに行ってる3人もいた
その3人を含めた6人で週刊誌を読んでいた
するとやっぱり載っていた

しかもまた相手が変わっている

↓記事の内容↓

秋元康プロデュースのアイドルグループ

AKB48に所属している宮崎美穂(17)と

俳優・タレントとして活躍中で

最近はスキャンダル男と化してきた

江戸川隆起(17)が2人つきりで

今撮影中のドラマ「続・マジすか学園」の

撮影の休憩時間に商店街で

お買い物を楽しむ姿が目撃された

平成のスキャンダル男

江戸川隆起の暴走は今日も止まらない

く以上が記事の内容く

コナン「何か・・・ボロクソに書かれてるな」

そう呟いて皆がそれに賛同するのかわかれたら

光彦「隆起君・・・どうして不倫なんか」

コナン「どれだけ話が膨らんだよ！」

元太「今度紹介してもらわねえとな!!」

コナン「おいおい」

男子3人（特に光彦と元太）は
勝手に盛り上がって熱くなっていた

その様子を女子3人は呆れ顔で眺めていた・・・

【RW】File 7（後書き）

次回予告

第8話 ゲキカラを探せ！

【マジすか】第8話 ゲキカラを探せ！

隆起 side

隆起「夜路死苦共学院に

今日から通っていて

3年D組に入った江戸川隆起だ

紹介が遅れたのは

そっちにも非があるから

謝るつもりは無いよ

それとオレがこの事件を

調べている理由は残念なんだけど

少なくとも事件が解決するまでは

誰にも教える訳にはいかないんだ・・・

っていうので今は納得してくれないか？

そしてオレの捜査にも協力してくれたら

もの凄く助かるんだけど」

とオレが言っていると学ランが口を開いた

学ラン「仕方ねーなあサドの『コレ』」

『コレ』と言った時に親指を天に向けていた

アキチャ「古くねーか？」

学ラン「良いんだよ！・・・で、どこまで言っただけ？」

そうだサドの『コレ』って事で

特別に手伝ってやるよ・・・俺等が」

するとやはりツツコミが入る

ヲタ「勝手に俺等まで

巻き込むんじゃないよ！」

しかし学ランは悪気なく敦子を誘う

学ラン「なあ敦子一緒にやろうぜ」

すると敦子は・・・

敦子「皆で手伝おうよ

ちょうど暇してたところだし」

と学ランの意見に意外にも賛同した

そしてまわりの奴らも「仕方ねーな」という雰囲気になり
協力してくれる事になった

正直ラッキー！とオレは思った

隆起「サンキュじゃあ・・・とりあえず

ゲキカラの行方を探してくれるか？

一応容疑者に上がっているからさ

そしてサドは・・・」

サド「私はお前にやられた

馬鹿な奴らを引き取りに行く」

と堂々と言うものだから

ちよつとからかい半分でツツコミを入れてみた

隆起「それを言ったらお前も馬鹿になるんじゃない・・・

だって2発でノックアウトになつたし？」

一応はサドのメンツを考えて

小声で言つたつもりだったのだが

一番近くにいた

だるまにだけは聞こえてしまっていた

だるま「サドがこんな男なんかに負けたんか！？」

しかも『2発』で！？」

無駄に『2発』を強調して言つた

バンジー「おいおいマジかよ？」

と冗談まじりにそう言つと

サド「マジだよ」

とあまりにもあつさりとして認めてしまつた

すると周りのメンバーたちは急激に顔色が変わってくる

チームホルモンはコソコソと会議を行い始めた

が、残念ながら丸聞えである

ウナギ「2発ってなんだよ？2発って」

ヲタ「確か前田でもかなり挺子摺ってたよな」

アキチャ「それを踏まえるとアイツ相当だぜ？」

バンジー「でもよそれにしては

サドに傷一つ残ってねえぞ」

サド「当たり前だろ鳩尾目掛けて

キレイに入れるんだから」

ヲタ「あくなるほど・・・って聞えてた?!」

大歌舞伎「丸聞こえだっつーの」

とツツコミが入る

そして一つの疑問が生まれた

学ラン「でもどうして鳩尾しか狙わねーんだ？」

隆起「『女は顔』って言葉もあるから

顔を怪我させるのはどうかと思うし

他の部分の体を攻撃するのも

万が一間違って子宮にでも衝撃がいったら

将来やっぱかわいそうじゃん

その分鳩尾は入ったら寝て抵抗できなくなるし

戦いが終わったら警察と救急車を

呼んでおけば何とかなるじゃん

・・・っていう理由」

その後、連絡先の交換をした

そして分かれてゲキカラを探しに行った

【RW】File・8

隆起side

今日の撮影のお昼はスタッフさんからの差し入れで
ピザハットの「家族みんなのハーフ&ハーフ」だった

江戸川隆起としてはオレの方が年下だから

本当はオレが気を利かせるべきなのだろうが

今回ゲキカラを演じている松井玲奈が

気を利かせてオレの分を持ってきてくれた

それを持ってきたのが麻里子や美穂なら疑ったかもしれないが
持ってきたのが玲奈だったので

オレは何の疑いも無しに礼を述べてピザを口に運んだ
すると・・・

隆起「辛!!」

・・・つーかもう通り越して痛い

玲奈お前タバスコどんだけ入れたんだよ」

オレは既に怒る気力も吸い取られてしまっている

まあこんなことで怒るオレではないが

25年ぶりくらいに涙が出そうである

それを必死に我慢しているオレを見て

笑いを必死に堪えているAKBのメンバーを見ると

無性に腹が立つてくる

そして遂に・・・

ボオオオオ!!!

本当に口から火が出た（これはわざと）

【RW】File・8（後書き）

次回予告

第9話 繋がった糸

【マジすか】第9話 繋がった糸

隆起 side

馬路須加の10人が二手に分かれて

ゲキカラの捜索をしていた頃

サドは部下を集めに行き

オレは警視庁から貰った書類の資料と

パソコンメールで送られた資料を片手に

ある少年院の入所者記録を調べていた

隆起「ん？あつた」

今調べていたのは夜路死苦の黒龍派の関係性だった

するとやはり全員が全員同じ時期では無いにしろ

黒龍派所属のメンバーが一度も途切れる事無く

とある少年院に入っていることになる

そして想定内ではあつたが意外な人物の名も入っていた

その時！脳内に稲妻が走った！！

隆起「ああ・・・なるほど」

謎が全て解けたのである

チームホルモン side

捜査の基本である『足』を使って

地道に聞き込みをして1時間が経った

バンジー「何か飽きてきたな」

アキチャ「ああ疲れたな」

ウナギ「こんなんで見つかんのか？」

ヲタ「さあな」

と諦めムードが漂ってきた時
ムクチがヲタの肩を叩いた

ヲタ「何だよムクチ」

そしてある方向に指を指した
それにつられて他の3人もその方を見た

ウナギ「あれってゲキカラじゃね？」

バンジー「男もいねえか？」

アキチャ「ヲタ！連絡！連絡！」

ヲタ「おっおう」

そしてもう一つのゲキカラ搜索班のリーダーである
前田敦子と仲間を引き取りに行っているはずのサドと
今、調べ物最中の江戸川隆起に一斉送信のメールで
ゲキカラが見つかったこととその隣に男がいたこと

追跡することと応援を頼むことを打って送った

バンジー「それにしてもサドと言いゲキカラと言い

最近の馬路須加OGは男作りが流行ってるのか？」

ヲタ「さあな・・・おい！動き出したぞ」

と言って追跡を開始した

隆起side

隆起「もしもし？」

警視總監「隆起か？どうした」

隆起「逮捕令状の発行を申請します

それと警視庁からの応援も要請します」

警視總監「何？もう真相が解けたのか？」

隆起「はい

応援には優秀な人材を1人と

その部下数名をお願いします

では」

他に何かを聞かれる前に電話を切った

隆起「さてと」

と言った時にケータイが震えた
内容はゲキカラが男といるのを見つけたとのこと
その返信に「前田班と合流して追跡の続行」を頼んで
オレは警視庁からの応援を待つことにした
するとまたケータイが震えた
今度は電話だ

隆起「もしもし？」

兄貴『俺だ』

隆起「兄貴か・・・どうした？」

兄貴『今飛ばしてるからあと2時間で着きそうだ』

そこでやっと兄貴から電話が来た理由が分かった

隆起「ああ応援組に兄貴が入ってるのね」

兄貴『逮捕令状は持ってきたからな』

その後は逮捕する手順と待ち合わせ場所
部下の待機場所などを確認した

【RW】File・9（前書き）

AKBINGO!

【RW】File・9

佐田「今日は久々に超スペシャルゲストが来てくれている様です

では早速入って来てください」

と司会のバッドボーイズの佐田が言った事で

スタジオ（AKB48・SKE48が座っている方）が大いに盛り上がった

が、中には「どーせイジリー岡田か芸人だろ」といった諦めの雰囲気醸し出している人もいたが

その人達を良い意味でも悪い意味でも裏切る人物が登場した

隆起「やつぽー」

佐田「はい今夜のゲストは

平成のスクヤンダルボーイ江戸川隆起君です！」

と紹介されながらゲスト席に誘導された

隆起「スクヤンダルって程

ヤバい写真は撮られてないでしょ」

と笑いながら言うと

佐田「いいえ篠田さんとバッチリ撮られていますから

問答無用のアウトですね」

とバツサリ切られた

篠田推しは健全な佐田なのでした
こんな雰囲気では番組は始まった

佐田「江戸川君はAKBやSKEのメンバーとは

プライベートでも仲が良いようですが

・・・実際ね

推しメンとかがって決まってるの？」

隆起「決めることに抵抗があつたんで、まだですね」

清人「まあ友達をランク付けするのはね抵抗あるよね」

隆起「ですよ」

と司会席とゲスト席で話していた
すると・・・

清人「江戸川君とは気が合いそうだから

アドレス交換しようよ」

と意外にも早く意気投合してしまった

佐田「はいはいアドレス交換は

収録が終わってからしてください

話は戻るけど今日の企画は

推しメンを選ぶのが企画になってるから」

隆起「はい了解です」

佐田「では早速行きたいと思います」

1 s t ステージぶっちゃんクエストョン！

【RW】File・9（後書き）

次回予告

第10話 チェックメイト

「マジすか」第10話 チェックメイト

馬路須加10人side

あの後すぐに前田班5人と合流して
ゲキカラの尾行を続けた

すると色んな場所に立ち寄りながら

今は使われてなさそうなボロボロな倉庫に入っていた

ヲタ「何時間歩き回ってたんだよ」

バンジー「2時間は歩いたな」

と愚痴をこぼしていた

だが学ランが現実に戻した

学ラン「どうするよ？」

江戸川かサドに連絡したほうが良いんじゃない？」

その言葉に賛同した敦子がメールを打って送信した

無事に「送信しました」と出たすると時を同じくして

倉庫の扉が開かれて男が20〜30人ほどこっちに向かって歩いて
きた

その男たちに引つ張られて倉庫の中へと連れて行かれた

引つ張られやっとな開放されたと思いい顔を上げたら

尾行中ゲキカラの隣にいた男が目の前に立っていた

ヲタ「何だ？オメエ」

と聞くと後ろにいたゲキカラが

ゲキカラ「ふふふ・・・ねえ何してた？」

と言ったや否や手で合図をした

その途端に周りを囲んでいた男衆たちが一斉に掛かってきた

その戦いに防戦一方なのはチームホルモンと歌舞伎シスターズ、だ
るま

互角に戦っているのは学ラン

そして互角以上に戦っているのが前田敦子だった

ゲキカラと隣の男は観戦中だ

そしてゴタゴタになって戦っている馬路須加10人は
かなりへたばって来ている

遂に防戦一方組がやられていった

残りの2人もジリジリと体力が消耗してきている

その時だった

閉ざされていた扉から集団が入ってきた

倒れて動けない奴以外全員が身構えた

そして声が聞えてきた

しかし残念ながら逆光で姿は見えるが顔までは見えない

サド「ウチの後輩に何してくれてんだよ

夜路死苦の黒崎」

ゲキカラの隣にいた男が口を開いた

黒崎「おうおう馬路須加のサドか

此間は良くもノコノコと俺等の土地まで来やがったな」

その言葉には触れずにサドはこう言葉を返した

サド「ウチの後輩を早く返してくれないか」

黒崎「無理だと言ったら？」

その返答にサドはこめかみをピクピクさせていた
すると黒崎の隣にいたゲキカラが

ゲキカラ「ねえ・・・怒ってる？」

サド「殺されなけれりや分からねえみたいだな」

と静かに激しくキレていた

そして扉が「ボタン！！」という大きな音を出しながら閉じた

それと同時に向こうサイドの歩兵と

サド側の歩兵の白兵戦が始まった

サド側にはサドと前田敦子と学ランの3人も参加している

が、サド側が有利になってきた所に

黒崎とゲキカラも参戦してきた

その様子はもうまさに“地獄絵図”

血飛沫が飛び散りゲキカラは笑う

そんな悲惨な戦闘に幕が下りてきた

隆起「黒崎大河と松井玲奈の両名を

殺人と死体遺棄の罪で逮捕する」

令状を片手に持った隆起が裏口から入ってきたのであった

【RW】File・iO（前書き）

AKBINGO!

隆起「じゃあ1つ目の質問は

“付き合うとしたら年上が良いか年下が良いか”」

佐田「手元のボードに書いてください」

そして皆が書き終わり一斉に解答を見せた

佐田「年上、年下、年上、年上・・・

ああ年上が圧倒的に多いですね」

清人「まあ一人変な奴いるけどね」

佐田「おい峯岸！それ言ってみ」

峯岸「恋愛に年齢も性別も国境も関係ありません」

清人「やかましいわボケ！」

佐田「続いてのクエスチョンは？」

隆起「次はですね

“僕と一緒にスキャンダルを撮られても良いか悪いか”」

佐田「これは重大な質問ですね

では一斉にお書きください」

そして皆が書き終わり一斉に解答を見せた

佐田「あゝノーコメントが多いですね

宮崎！“良い”にした理由は？」

美穂「だってもう撮られちゃったから

良し悪しじゃなくて仕方が無いですもん」

清人「また変なのいるけどね」

佐田「はい峯岸」

と多少投げやりに振った

峯岸「“良い” いやもう寧ろ一緒に撮られたいです」

そして1st推しメンは痛いほど頑張っていた
‘峯岸みなみ’になった

【RW】File・10（後書き）

次回予告

第11話 終わりと始まり

【マジすか】第11話 終わりと始まり

隆・隆起side

黒崎「確か・・・お前

夜路死苦のグラウンドで里崎を蹴散らした奴か
それが今度は警察気取りか？」

と言い馬鹿にした笑いを鼻でした

その様子に表情を微塵も変えずにもう片方の手で警察手帳を出した

隆「警視庁組織犯罪対策部暴力団排除第2係の

刑事を務めています大友です

今の状況を含めると監禁致死傷罪の件でも

お話を伺いたいので署までご同行を」

そう極めて冷静に言う

今度はその態度が気に食わなかったみたいで

黒崎「俺がサツを怖がると思うか？！」

と言って内ポケットから

黒い鉄の塊を取り出して構えた

隆「銃砲刀剣類所持等取締法違反の容疑で現行犯逮捕します」

そう言ったのと同時に

表の扉が開き警視庁からの応援組と

地元の警察官が流れ込んできた

黒崎「随分といるな」

隆「銃を捨てなさい」

と言いながらオレも拳銃を構える

隆「そんな中国製の拳銃で抵抗するな」

しかし黒崎は銃を構えたままだ

隆「まずは馬路須加の10人と

サドを含めたサドグループを引き渡してもらおうか」

黒崎「じゃあお前が拳銃を捨てて

両手を上げた状態でこっちに来てからだ」

オレはそれに従うことにした

オレのいる反対方向からは兄貴が止めているのが聞こえる

そして手を上げたまま黒崎の目の前まで来た

銃口はオレの眉間に標準が定まっている

そのまま黒崎はオレの背中にまわって

首を絞めるようにしてオレの事を捕まえた

その後ジリジリと後ろの出口に向かって後退し始めた

そして黒崎が裏口に視線を向けた瞬間

黒崎「ぐふお！！・・・」

オレの肘が鳩尾にしっかりと入っていた
その様子を隣で見ていたゲキカラが殴りかかってくる
が、合気道の技で逆に縛り上げた

隆「公務執行妨害の容疑で15時56分現行犯逮捕」

と2人に手錠を掛けると

黒崎とゲキカラの手下たちも素直に投降した

そして残されたのはオレと兄貴

馬路須加の10人、サドグループだけとなった

アキチャ「やっぱサツだったんじゃないか」

隆起「まあそうなるな」

バンジー「って事はもう帰るのか？」

ウナギ「事件が解決したんだろ？」

なら事件を調べてた理由教えるよ」

ヲタ「それはサツだからだろ」

ウナギ「あっそうか」

といつも通りのやり取りをしていた
そんな時にサドが言葉を発した

サド「で、帰るんだろ？」

帰るならさっさと帰れ」

隆起「ああそのつもりだったんだけどよ

・・・なあ兄貴」

兄貴「そうだなまた新たに

洗い直さないといけない事件が出来たからな
俺から親父にそう伝えておくよ」

と言って去っていった

隆起「って事でまだ帰らないから」

佐田「では次行きたいと思います

2ndステージとシアター！

そして最初のお題はこちら

“初デートの別れ際に言われてグツと来る一言”
江戸川君はデートのプロなんじゃないですか？」

隆起「いやそれがですね

デートはしたことないんですよ」

それ以上なことはしたことがあるが（笑）

佐田「いやいや週刊誌にバッチリ写ってましたよ」

隆起「あれはカレーを食べに行っただけと

カラオケに行っただけと買い物に行っただけですよ」

人はそれをデートと言っんじゃないか？

清人「でもね隆起君ならね

誘われたりとかあったでしょうに」

隆起「つい最近までイギリスで

Black wolfの摘発と捜査、壊滅に
力を注いだものですから
そういう時間は無かったんです」

ナレーター「メンバーと江戸川君は高校の同級生という設定

初デートの別れ際に江戸川君がぐっとくる一言にチャ

レンジ

まずは前田敦子から」

敦子「もうここまででいいよ

家まで送ってくれたら帰るの遅くなっちゃうでしょ？」

隆起「そうか？じゃまた明日な」

と言って背を向けた

敦子「あ、ちよつと待って！

・・・チュツ」

もちろん本当にはしてないが
カメラのアングルからはしたように見えた

チン！チン！チン！チン！

と鐘が鳴った

佐田「おい！前田

今マジでやったやろ？」

後ろは後ろで盛り上がっている

敦子「やってないですよ！」

清人「で、ホントのところは？」

隆起君」

隆起「10cm離れてましたよ

でも女優やってるだけあるなあと」

その後は「高橋みなみ」「仲川遥香」

「松井玲奈」「高城亜樹」の4人も挑戦したが
前田敦子には若干ながら劣り

2nd推しメンは前田敦子になった

【RW】File・11（後書き）

次回予告

第12話 殺人犯サド

【マジすか】第12話 殺人犯サド

隆起 side

学ラン「洗いなおさなきゃいけねー事件ってなんだ？」

大歌舞伎「お前また手伝うとか

言っんじゃないやねーだろうな？」

と半分確信しながら聞く

学ラン「どーせ暇だろ？良いじゃん

で？教えてくれよ」

隆起「ああ黒崎が持っていた拳銃の

密輸ルートや入手ルートを調べるだけだけど」

だるま「何を手伝えれば良いんや？」

以外にもやる気があるらしかった

隆起「お前からまだ未成年だろ？」

と協力を軽く断ったが

サド「お前もな」

と厳しく（？）突っ込まれた

隆起「あ、そつか・・・

じゃあお前らまだ学生だろ？

もう捜査の協力はしてくれなくて良いよ
気持ちだけ受け取っておく」

敦子「そう？なら良いや

じゃ私帰る」

と言って歩き出した

すると金魚の糞みたいに皆も帰っていった

そして残されたのはサドグループと隆起になったが

その後は特に何事もなくそれぞれ帰宅した

後日オレには警察勲功章

サドと馬路須加10名には警視総監感謝状が贈られた
そしてオレは巡査から巡査部長に昇進した

そんな良いこと尽くしの1週間後に事件は起きた

それはオレが新田進とゲーセンに行った帰り道のことである
新田とは別れて細い脇道を歩いていると

怒鳴り声と聞き覚えのある声が聞こえてきた

隆起「サド？」

オレは不思議に思いその声が聞こえる方向へ向かった
するとやはりサドが見えた

怒鳴っている方はどうやら男らしい

男「親父に言いつけてやるからな！

俺の親父は真田組の親分なんだぞ！」

サド「知るかそんなもの

さっさと私の前から失せるよ」

オレは「あゝあ」と思いながら

現場に急行した

すると男の靴下が膨らんでることに気がついた

隆起「警察の者ですが

その靴下に隠している物はなんですか？」

男「なっ！？何でもねえよ！！」

と言つて靴下を庇うような姿勢をとつた

明らかに挙動不審だ

隆起「そうですか

なら見せていただけませんか？」

そう言つと男は突然暴れだし

サドに隠し持っていたバタフライナイフで斬りつけた

が、サドにそんな不意打ちが効くわけもなく

次の瞬間にはその男が地面に倒れていた

隆起「脳震盪だなこれは」

と呟きながら靴下に隠していた物を見た

サド「何だつたんだ？」

隆起「覚せい剤だよ

真田組も絡んでくるかもな」

サド「とりあえず救急車でも呼ぶか？」

その後、監視も含めて

サドと一緒にやってきた救急車に乗り込んだ
そして医師からの第一声は

医師「頭蓋骨陥没で

残念ながらもう手遅れです」

死亡診断書を見せられた

隆起「・・・」

サド「・・・」

オレらは言葉を失った

【マジすか】第13話 これって、もしかして・・・

隆side

それから暫くが過ぎた

まずは状況の説明から行うとしよう

サドはあの後近くの交番に自首し

オレは真田組の捜査が終わって

直ぐに巡査部長から警部補になった

（これは拳銃の密輸ルート等その他の犯罪も見破ったからである）

そして警視庁組織犯罪対策部暴力団排除第2係から

警視庁刑事部刑事総務課刑事部特別捜査係に配属された

名目上は栄転だが事実上の左遷であった

つまり追い出される形となった

そして今日、サドの裁判がある

そこにオレは弁護側の証人として呼ばれている

オレが話した証言は

完全なる正当防衛であること

救急車を呼んだのはサドであること等

すべて真実を話した

当然のことながら弁護側は無罪を主張した

検察側の検事は敵にすると厄介な姉貴だった

それは小さい頃からよく知っている

逆に味方になってくれると心強いが・・・

そんな検察側からの求刑は懲役3年6ヶ月だった

難しい話は分からないから飛ばすが

結果から言うと懲役1年の実刑判決だった

隆「控訴しないのか？」

サド「ああ・・・どうせ1年だ」

というサドがいつも小さく見えた

隆「・・・ごめん

守ってやれなくて」

するとフツと笑って

サド「私が守ってくださいなんて言う

か弱いお姫様にでも見えてるのか？」

その問いには答えずに

隆「1年後迎えに来るから

・・・紙を持って」

暫しの別れであった

【マジすか】第13話 これって、もしかして・・・（後書き）

次回からは少し馬路須加女学園の様子を描いてエンドに向かわせ
ます

【マジすか】前田軍団vsネズミ軍団

〈前田軍団〉

・前田敦子（前田敦子）

馬路須加女学園3年C組

現在、馬路須加女学園のトップである

・鬼塚だるま（なちゅ）

馬路須加女学園3年C組

自称・前田敦子の舎弟

・学ラン（宮澤佐江）

馬路須加女学園3年A組

実力的にはNo.2だと思われる

・大歌舞伎（河西智美）

馬路須加女学園3年B組

前田四天王の1人

・小歌舞伎（倉持明日香）

馬路須加女学園3年B組

前田四天王の1人

・ヲタ（指原莉乃）

馬路須加女学園3年C組

チームホルモンのリーダー

・ウナギ（北原里英）

馬路須加女学園3年C組

チームホルモン会員ナンバー2

・アキチャ（高城亜樹）

馬路須加女学園3年C組

チームホルモン会員ナンバー3

・バンジー（仁藤萌乃）

馬路須加女学園3年C組

チームホルモン会員ナンバー4

・ムクチ（小森美果）

馬路須加女学園3年C組

チームホルモン会員ナンバー5

・峯岸みなみ（峯岸みなみ）

馬路須加女学園3年A組

自称・馬路須加女子学園の生徒会長

・エレナ（小野恵令奈）

馬路須加女学園2年

今は前田敦子を姉の代わりとして見ている

（ネズミ軍団）

・ネズミ（渡辺麻友）

馬路須加女学園2年

頭脳派でネズミ軍団のリーダー

・珠理奈（松井珠理奈）

馬路須加女学園2年

武道派のリーダー格

・みやお（宮崎美穂）

馬路須加女学園2年

構成員その1

・らぶたん（多田愛佳）

馬路須加女学園2年

構成員その2

・まなまな（奥真奈美）

馬路須加女学園2年

構成員その3

・ダンス（矢神久美）

馬路須加女学園2年

構成員その4

・アニメ（仲谷明香）

馬路須加女学園2年

構成員その5

・ジャンボ（田名部生来）

馬路須加女学園2年

構成員その6

・ライス（米沢瑠美）

馬路須加女学園2年

構成員その7

・昭和（片山陽加）

馬路須加女学園2年

構成員その8

「マジすか」第14話・・・戦争だ

ネズミ「大島優子は意識不明

サドは服役中

ゲキカラも同じく服役中

ブラック、トリゴヤは行方知れず

矢場久根はボロボロ

夜路死苦はガタガタ

馬路須加は平和ボケ

そしてそろそろネズミ軍団旗揚げの時期」

珠理奈「さあ革命返しの始まりだぜ」

そんな会話がされた翌日のことである

ここは前ラッパッパの部屋

ヲタ「おい聞いたか？そろそろ2年坊が

前田に喧嘩吹っ掛けてくるらしい」

ウナギ「って事は前田の初めての防衛戦って事になるな」

実を言うと半年近く喧嘩は殆ど無かったのである

バンジー「ああ他の高校は前田にビビって

何もして来なかったからな」

アキチャ「きつとこの辺のヤンキー高校

全部に噂は広がってるな」

大歌舞伎「尾びれ背びれフカヒレが付いてな」

学ラン「それを言うなら胸びれじゃねーか？」

とナイスな突っ込みをしたのにも拘らず

だるま「どっちでもええやないかい

あつ姐が勝つんやから」

と流された

峯岸「でも暴力は良くない」

エレナ「私も心配だから

お姉ちゃんみたいな人だから
心配なの」

と言った時だった

開いていた窓から紙飛行機が飛んできた
それを直接掴んだ敦子が読み始めた

敦子「バカな前田軍団へ

貴方達に私達への挑戦権を与えます

勝つ自信があるのであれば

直ちにグラウンドに出てきなさい

万が一勝てる自信が無いのであれば

まあ来なくても良い

天才的なネズミ軍団より

・・・だつてさ」

これにプチンと来ない様な奴らではないため
飛んで出て行った奴らが計7名

そして暫くしないうちに派手な音が聞こえてきた

その様子を敦子と学ランが見に行くと

既に7名が気絶していた

しかも階段は油まみれである

敦子「ネズミの奴・・・」

沸々と湧き上がってくる何かに押され

敦子と学ラン、ムクチの3人は

滑らないように細心の注意を払いながら飛び出していった

残されたエレナと峯岸みなみは祈るような表情で

走り去っていった誰もいなくなったドアを眺めたあと

ハッと気づいたように気絶している7人を介抱し始めた

ネズミ「何人が無事にここまで辿り着けるかな」

みやお「さあ」

まなまな「どっちにしろ」

らぶたん「山椒姉妹がやっつけてやるぜ」

とか言っていた

するとネズミの目が何かを捉えた

ネズミ「無事に来れたのは3人みたいねえ」

珠理奈「ここからは・・・戦争だ」

既に10m先に前田敦子、学ラン、ムクチの3人が
息を切らしながらやって来ていた

敦子「はあはあ・・・どういう、つもりだ」

ネズミ「喧嘩を申し込んだのさ」

学ラン「あんな汚ねえ・・・やり方あるか?！」

戦いの始まる前から圧倒的に不利な3人

ムクチ「・・・・・・・・・・」

そして何の前触れも無く

突然死闘が繰り広げられた

もちろんネズミは傍観している

そして5分も経たないうちに戦いは終わった

9対3だったのが

0対1になったのである

学ラン「敦子！敦子！しっかりしろ」

そう最後には敦子と珠理奈が相討ちで残ったのが学ランという結果で

敦子 side

『弱気の敦子は嫌いだよ』 『マジに生きるってな、しんでえんだ』

『今日からマジジョはお前のもんだ』 『俺のマジはお前の為にある』

『私のお姉ちゃんみたいな人だから』 『私も行く』

『オメエ一人に行かせる訳にはいかねえんだよ』 『ここから先は厄介だぜ』

『道案内させて貰おうか』 『付き合っぜチームホルモン』 『桜の花は、涙の栞』

??? 「敦子！敦子！しっかりしろ

おい敦子！」

私を呼ぶ声によって目が覚めた

学ラン「・・・よかった」

と聞こえたときには

もう・・・唇を奪われていた

学ラン「これからは絶対に俺が守るから」

【RW】File・12

佐田「はい最後に江戸川君から
重大な発表があります」

隆起「『続・マジすか学園』次回が最終回です」

「見てね見てね」とAKB席が騒いでいる

清人「でもそれだけならAKBのメンバーにも出来たよね」

と言われたが隆起には切り札があった

隆起「そうなんです

実はこの番組、今日で終わりです」

当然のことながら何も聞かされていないメンバーと
司会のバッドボーイズの2人は驚いている
そして誰かが大きな声でこう言った

優子「でも、この後も収録が続くって

予定表には書いてあった！」

その言葉に思い出すように「そうだ！そうだ！」の大合唱になった
隆起「でもそれにはAKBINGO!の収録とは書かれていないは
ず……

はい、と言うわけで次回からは『AKBIGBANG!』」

として放送していきます

司会は代わらずバッドボーイズさんのお2方
レギュラーメンバーにはAKBの裏の顔を知るこの江戸川隆
起が入ります

そして、テレビに出られるメンバーの制度が変わります
チームA、K、Bからは各5人、SKE48からは計5人、
NMB48とJET48からも計5人

そしてまさかのSDN48からも計5人という感じで
ということですので以上AKBINGO!でした」

【RW】File・12（後書き）

次回予告

第15話・ハッピーエンド

AKBIBBANG!!をいつ描くかはまだ決まってません><

【マジすか】第15話・ハッピーエンド

隆 side

あれから1年という月日が経った
サドこと篠田麻里子に会うのも約1年ぶりだ
と言う訳で今オレは拘置所の前にいる
ひとつの手土産を持って・・・

そして数分がたった頃

頑丈そうな門が開き人影が見えた
確かに髪は伸びているが間違いないサド・・・いや篠田麻里子だった

隆「おい！こっちこっち」

そう呼ぶと一年前ではあまり見ることの出来なかった

麻里子の笑顔が見えた

その笑顔を見たときにオレはやっぱ好きなんだと改めて実感してしまった

麻里子「久しぶり」

隆「久しぶり・・・元気にしてた？」

刑務所で元気にしてた？と聞くのはおかしい気もするが一番気になっていた事だった

麻里子「あゝまあまあ」

隆「そうか・・・なら良かった」

そこから意外と本題に切り出せなくてモタモタしていると麻里子に「らしくない！何か言いたい事があるんだったら言いな！」と軽く一喝されやつと口に出せたのが

隆「・・・・・・・・・・・・・・・・結婚しよう」

という字数で言つと5字

音で言つと6字という短い文だった

あああ！！もうちょっと言い言葉考えてたのになあと心の中でガツクリしていた
すると・・・

麻里子「よろしくお願いします」

という初めて聞いた麻里子の敬語に驚いたのと同時に嬉しさが溢れ
出た

・・・・・・・・

それから何年かが経ち今では家庭も出来た
子供が出来るまではカワイイ妻だったが最近子供が生まれてからは
サドに戻りつつある

トホホ・・・

【マジすか】第15話・ハッピーエンド（後書き）

遅れて申し訳ございませんでした。しかも、出来は良いとはいえませんが・・・。

この話は、小説の中のしかもドラマ内の設定ですので、くれぐれもご注意を・・・

意地悪な神と振り回される迷子

意地悪な神と振り回される迷子

~~~~~原作~~~~~

【NARUTO】

【NARUTO - 疾風伝 -】

「ジャンル」

戦闘・転生・ハーレム

<オリジナルキャラクター>

あり

ウツキー君からの小説説明

この物語の上半期はNARUTOの世界を恋に任務に駆け回り



後半期はONE PIECEの世界を駆け回る（予定）です。  
そして、神世界へと強制連行されたリュウの運命は如何に・・・？

## 登場人物 - 主人公紹介

### 主人公

#### ・江戸川「スコット」隆起

現在17歳の帝丹高校2年生の俳優兼タレントの少年。  
しかし本当は、大友隆という27歳の青年。

なぜ名前と年齢を誤魔化しているかというAPT X 48  
69を飲み

体が10年分退化してしまったからだ。

同じくAPT X 4869を服用してしまった仲間に

江戸川コナン（工藤新一）、灰原哀（宮野志保）、江戸川  
皋月（最上五月）の3人がいるが

今回この3人に出演予定はない。

大友隆時代は、中学生の時から探偵をし高校在学中にア  
メリカの大学を卒業し

高校を中退。その後に国家公務員試験をトップの成績で合  
格。

キャリア組として刑事になった。刑事になってからはトン  
トン拍子で昇格し

長野県警では20歳にしてナンバー2になるという快拳を  
成し遂げている。

Black Wolf 日本支部壊滅作戦では、コード  
ネーム・スピリタスとして作戦に参加

日本支部壊滅に大きく貢献した。

Black Wolf スイス支部壊滅作戦では、コー  
ドネーム・アクアビットとして作戦に参加

ほぼ一人で、この作戦を実行、成功させた。

Black Wolf イギリス本部壊滅作戦では、コードネーム・メタノールを捕獲し

その後メタノールに化け作戦成功への道を大きく切り開いた。

そして今は芸能界にいる訳だが、コナンと同様に日本警察に捜査の協力を

求められることがよくある。

ついでに親交のある芸能人はAKB48グループで、その中でも親しくしているのが

篠田麻里子（team A）、柏木由紀（team B）、宮崎美穂（team B）の3人。

## 忍者 第一篇↳転生先

・うちはサスケ

木ノ葉隠れの里一番の名門“うちは一族”木ノ葉唯一の生き残り。

原作では、超クールな復讐者、カッコイイ系のキャラだが今回は、隆起が転生してしまっているのでキャラ崩壊が確実視されている。

隆起は、サスケが生まれた時に転生してしまう。

隆起自体は、『パラレルワールド・未知との遭遇』でかなりパワーアップしていて

最強なはずなのだが能力が一部規制されているため、最強ではない。

しかし、原作よりも強いのは確か。

中身が隆起なので、性格が原作のサスケと比べてかなり丸くなっている。

そのためアカデミー時代からも友達というべき存在が出来

ている。

たまに、おふざけメンバー（うずまきナルト、奈良シカマル、秋道チヨウジ、犬塚キバ&

赤丸）の中に入って授業をサボったりすることもある。

女子からの人気は健在で、性格が丸くなっているからか声をかけられること自体は

原作よりも圧倒的に増えている。

座学の成績は学年で下から数えたほうが早くなっていて、原作に比べると

かなり下がっているが、戦闘能力は格段に上がっている。

（イタチが、うちは一族を滅亡に追いやった日の夜に原作のサスケは

写輪眼の能力を1つ（洞察眼）開眼しているが、今回はその時点で

3つの能力（洞察眼、催眠眼、術写し）を使用可能にしている。）

忍者 第二篇・第三篇→転生先

・うちはリュウ

容姿は江戸川隆起（大友隆）そのまんま。経験値や術は第一編のものを引き継ぎや

強化を行って更にチート化に磨きがかかっている。

海賊 第一篇→転生先

・リュウ

前回までに得た術を修行により一層強くなった状態で登

場する。最強無敵までは

流石に行かないが、三大将を相手にとることは可能。

錬金術師 第一篇↳転生先

・リュウ・カーティス  
記憶が無い状態。

超能力者 第一篇↳転生先

・御坂流砂  
多重能力者。

異世界人 第一篇↳転生先

・涼宮リュウ  
双子の弟。人世界からありえない力により、とある母の胎内に引き込まれた。

忍者 番外篇↳転生先

・蒼龍  
もう一人の自分探し。

今度、直します。

オレは、いつもの様に目を覚ました。そう、いつものように・・・しかし、そこは見慣れた工藤邸に与えられたオレの部屋の天井ではなく

もつと日本家屋っぽい天井だった。

すると隣の方から女性の声が聞こえてきた。

母「サスケ？もう目を覚ましたの？」

あ・・・サスケ？・・・まさか前世の夢でも見ているんじゃないかな？

と、思いながらもまだ呑気に構えているオレ  
すると母親の後ろから足音が聞こえてきて、横引きのドアが開いた。

兄「サスケはもう起きたのかい？母さん」

母「あらイタチ。父さんとの朝修行は？」

兄「ああもう終わったよ」

母「そう。お疲れ様。お腹減ったでしょう？朝ご飯作るからちよつと待ってて」

と言つて部屋を出ようとした。  
すると兄が止めに掛かる

兄「あつちよつと母さん！サスケは？」

母「あゝ・・・イタチが少しの間、相手してなさい」

と言われた兄・イタチは

快く聞き入れて赤ん坊のオレの相手をした。

その三カ月後、オレは立てるようになった。

そのまた二カ月後、歩けるようになった。

そして言葉が話せるようになったのが、その一カ月後だった。

だから約半年で普通の生活が出来るようになったのだ。

それから約一年半が経った2歳の誕生日を迎えてからは、朝の修行に参加させられ、  
段々と昔使えた“術”はこの体でも使えるようになっていった。

そしてこの世界に迷い込んでから数年の月日が流れ家族や友達とも良好な関係を作れていた。

いや、少なくともオレはそう思っていた。しかし実際は違っていた。実は数日前にオレはこの世界の両親を失った。それも、かなり仲の良かったこの世界の兄貴によって

正直、かなりショックだった。昔に得た力を今も持っていればこの悲劇は食い止めることが出来たのに、今のオレには兄貴の暴走を止



められる力はなく。出来る限りの説得、抵抗はしたが兄貴のほうが1枚も2枚も上手だったのだ。

そして数日後の今日、オレは久しぶりに忍者学校通称アカデミーに来ていた。

やはり、木ノ葉の名門“うちは一族”の滅亡の噂は世間に広まっているらしく、みんなオレの顔を見ると罰の悪い顔をして目を背けた。

しかし、一週間、一ヶ月、半年と、時を重ねることによって普通に接してくれるようになり

意外と仲良くしている「おふざけメンバー」と一緒に授業をサボったり、実技では、中忍又は上忍レベルの術を披露して目立ってみたりして、その時その時を満喫しているとあっという間に卒業試験も  
終え

合格者が集められてスリーマンセルのチーム編成発表となった。

するとそこには思いがけない人物も混ざっているのだった・・・

## 【GW】File・1

オレが説明会集合時刻ギリギリに教室に来るといつも俺が座っている席の隣に馬鹿はいた

・・・そうクラスの中では仲の良くしている、うずまきナルト、だ

サスケ「あれ？ナルト・・・お前受かったのか？」

確か試験内容はナルトが一番苦手だった

『分身の術』だったような気がしたが・・・

ナルト「当たり前だってばよ！俺みたいな天才忍者が落ちる訳無いってばよお」

とか言っただけ

他にも仲良くしていた奴らは全員合格しているらしい

と、頭の中で回想していたら五月蠅い連中が回りに集まってきた

そして隣でナルトは羨ましそうな顔をしてこっちとジトツと見てくる

そんな様子を上忍の先生方と三代目火影は覗き見（？）していた

上忍「あれですね？今年のナンバーワン・ルーキーのうちはサスケは・・・」

三代目「そうじゃ」

紅「例のうちは一族の生き残り・・・」

その中で一人意味深に心の中で呟いた  
(・・・うずまきナルトか・・・)

場所は戻り説明会会場

イルカ先生のとてもありがた〜いしかし面倒くさ〜いお話が終わり  
やつと班分けを発表し始めた。

その頃、ナルトはこう思っていた。

『まずはサクラちゃんでしょ。あとは・・・ま、仲の良い奴らの中  
だったら誰でも良いや』

そして、サクラはこう思っていた。

『絶対サスケ君よ！あと一人は・・・ナルト以外なら全然OK！』

ついでにオレはというと・・・

『まあ女子が入らなかつたらそれで良つか』

という感じでそれぞれ考えていた。

イルカ「第7班・・・うずまきナルト！春野サクラ！うちはサスケ  
！第8班・・・」

と続いていき班発表は終了した

その後は、各自昼ご飯を食べた後に担当上忍が迎えに来る予定だそ  
うだがオレらの班の担当上忍は何時まで経ってもやってくる気配が  
微塵も感じられない。そしてついに残っている人も第7班の3人の  
みとなってしまった。

そして馬鹿なナルトがジツと落ち着いていられる訳が無くウロウロ  
ウロウロして、第7班の紅一点であるサクラに注意されている。し  
かしナルトはそれを無視して黒板消しトラップを作り上げた。

またもやサクラがガミガミと言っているがこの際無視しよう。  
すると間も無く少し開いているドアに手が見えた。そして・・・

ポトン

黒板消しが入ってきた者の頭に直撃した。

カタン

そしてキレイに地面に落ちた。

ついでにナルトは「ギャハハハ！」と指を指して笑っている。

そしてついに上忍の先生が第一声を発した。

カカシ「んゝ何て言うのかな。お前らの第一印象は・・・嫌いだ。」

あ、『最強兵士育成ノ玉』に出できたカカシ先生だ。

## 【GW】File・2

場所を移して今はアカデミーの屋上

カカシ「あゝまずは自己紹介からしてもらおうかな。」

サクラ「自己紹介ってどんな事を言えばいいの？」

と普通に疑問に思ったことを聞く

カカシ「そりゃあ好きなもの、嫌いなもの。将来の夢とか趣味とか・  
・ま、そんなのだ。」

しかしナルトも黙ってはいない。「名を聞くときはまずは名乗れ」  
的な趣旨のことを言い

まずは、先生からの自己紹介となった。

カカシ「じゃあ俺からか？俺の名前は、はたけカカシって名前だ。  
好き嫌いをお前らに教える気はない。将来の夢って言うて  
もなあ。趣味は・・・色々だ。」

サクラが話しかけてきたが軽く無視し、ナルトとサクラとオレの順  
で自己紹介をすることになった。

ナルト「俺さ、俺さ、うずまきナルト。好きなものはカップラーメ  
ン！」

もっと好きなのは一楽のラーメン！嫌いな物はお湯を入れ  
てからの3分間！

趣味はラーメンの食べ比べ！んで将来の夢は・・・火影を越す！！

で、もって里の奴ら全員に俺の存在を認めさせてやるんだ！」

カカシ「はい、次。」

は、早送りしてオレの番に回ってきた。

サスケ「オレはうちはサスケ。意外と大切だなと思うのは仲間、嫌いなものは裏切り、そして・・・

夢というか目標は、うちは一族滅亡の真実。事實は知っているから

・・・オレは真実が知りたい。」

カカシ「（男子2人は精神的に成長したな・・・）

・・・明日から任務やるぞ」

するとナルトは待つてました！！と言わんばかりに目を輝かせている。

カカシ「まずはこの四人だけで任務をやる。それは・・・サバイバル演習だ。」

やはりと言うかサクラは「演習」という言葉に突っかかってくる。が、ここもやはりスルーをする。

ナルト「どんな演習をするんだってばよ?」

すると不気味に笑い出すカカシ

サクラ「何が可笑しいのよ？」

との問いには答えずに

カカシ「いや・・・俺がこれを言ったらお前ら絶対引くから。」

そう言ったのにも関わらずカカシは話を続ける。

カカシ「卒業生27名中、下忍と認められるのはわずか9名。残り18名は再びアカデミーへ

戻される。つまりこの演習は脱落率66%以上の超難関テストだ。」

オレ以外の2人の表情が固まった・・・

カカシ「ほらあゝ引いたあ！

という訳で、明日朝5時第3演習場集合！あ、忍び用具一式持って来い！

・・・あと、朝飯は抜いて来い・・・・・・・・吐くぞ。」

と、言われたもののそんなに動くんだったら食べてから行かないと絶対に腹が減る“腹が減っては戦は出来ぬ”とも言っしなということでは飯は食ってから行こうと心の中で呟いた。

## 【GW】File・3

翌日の朝5時

みんな眠そうな眼で集まった。しかし集合時間を過ぎてもカカシがやって来る気配は無い。それから1時間また1時間と、ただただ時間だけが過ぎていつて、挨拶がもう「こんにちは」になる頃にやって来た。しかも悪びれることなく「目も前を黒猫に横切られて」とか言ってるし、是非とも一言言わせていただきたい言葉がある・・・  
・・・ふざけるな！ボケエ！！

と心の中で思いつきり突っ込みを入れていたがその間にも話は進んでいった。

その内容を簡潔にすると、12時までにカカシ先生から鈴を取らなければいけなく、もしも取れなかったら弁当を目の前で食べられるという半ば拷問のような罰ゲームが用意されているらしい。

そして演習開始の合図が・・・今出された。

カカシ「よい・・・スタートオ！！」

その合図で下忍3名は一斉に隠れた・・・と思われたが馬鹿がいた。それはやはり割愛して・・・ナルトは宙ブラりんになっていた。そしてサクラも 魔幻・奈落見の術 に掛かっていた。

カカシ「(うずまきナルト・・・意外性ナンバー1忍者、影分身を得意とする。か)」

(春野サクラ・・・座学はアカデミートップの成績、他は今の所なし。)

(うちはサスケ・・・既に中忍レベルの術を使いこなせる。



時には上忍レベルの術も。か」

と、カカシは昨日の晩に読んだ資料を思いかえしていた。が、それが命取りになるとは知らずにその隙を見たオレは、直ぐに攻撃を仕掛けた。

火遁・鳳仙火の術

カカシ「何?!」

と、驚きながらも術を発動させてオレの術から身を守る

水遁・水陣壁

チツ・・・そう来たか  
だったら、その水ごと蒸発させるまでだ!

火遁・豪火球の術

ゴオオオオオ!!!!!!と焼き尽くしたのだが、カカシ先生を見失ってしまった。  
すると地面が軽くグラグラつて来た。そして、

土遁・心中斬首の術

と、生首のようにされてしまった・・・

カカシ「ま、こんなもんでしょ」

と言ってオレの目の前にノコノコと出てきやがった。掛かったな・・・

・  
魔幻・枷杭の術

オレは写輪眼の催眠眼の能力を使って、カカシ先生を幻術に陥れた。その隙に、影分身を作り出し鈴を1つ取った。（影分身はさつき割愛した時にコピーした物である。）

カカシ「（そうか、もうサスケは写輪眼を開眼させていたのか・・・）」

そう、カカシは幻術を既に解いていたのだった。

それと、ほぼ同時に12時を知らせるベルが演習場内に鳴り響いた。  
・  
・

## 【GW】File・4

現在12時を少し回ったところ・・・

オレ達は丸太の前、慰霊碑の前に来ていた。そしてオレは、弁当を呑気に食べている。

その様子をナルトとサクラが羨ましそうに眺めているのが横目で確認できる。

すると何の前触れも無しにカカシが口を開いた

カカシ「お、腹の虫が鳴ってるな。ところで、この演習についてだが・・・

ま、お前らはアカデミーに戻る必要もないな。」

その言葉の意味を履き違えていると思われる2人は大喜びした。

カカシ「そ、二人とも・・・忍者をやめろ!!」

ナルト「どうゆうことだよ?! そりゃさ・・・そりゃさ! 確かに鈴は取れなかったけど・・・

何で『止める』まで言われなくちゃならねんだよ?!」

カカシ「お前ら忍者舐めてんのか? ああ?!」

そのカカシの怒気の含んだ問いにビビる2人

カカシ「何のために班ごとのチームに分けて演習やってると思ってる?」

サクラ「どういう事？」

カカシ「つまり・・・お前らはこの試験の答えをまるで理解していない。」

その言葉通り2人はポカンとしている。ついでにオレも良くは分かっていない・・・

カカシ「そう・・・この試験の合否を判断する答えだ。」

サクラ「だから、さつきからそれが聞きたいんです!!」

と、考える前に答えを聞きたがるサクラ。

それに呆れながらも答えてあげる優しいカカシ先生。

カカシ「まったく、お前の脳みそはオカラか？ああ？！

スリーマンセルの意味分かってんのか？」

それまでイライラしていたナルトが口を挟む

ナルト「ああゝもう！三人一組が何だつてばよ?!」

カカシ「それは、チームワークだ」

サクラ「・・・協力し合えってこと？」

カカシ「そういうことだ。・・・手遅れだが協力し合って俺に挑めば鈴も取れたかもな

ま、そこで弁当を食っている奴は別だがな」

サクラ「なんで2つしかないのにチームワークな訳？三人で必死に鈴取ったとしたって

1人我慢しなきゃならないなんて・・・チームワークどころか仲間割れよ！」

カカシ「当たり前だ！これはわざと仲間割れをするように仕組んだ試験だ。この状況下でも、

自分の利害に関係なくチームワークを優先できる者を選抜するのがこの試験の目的だ。

それなのにお前らと来たら・・・サクラ！」

いきなり名前を呼ばれて体に緊張が走るサクラ

カカシ「お前は、目の前で戦っているナルトの事ではなく

何処に居るのかも分からないサスケの事ばかり気に掛けていた」

その言葉が凶星だったのかシユンと大人しくなるサクラ  
続けてカカシの矛先がナルトへ向く

カカシ「ナルト！お前は1人独走するだけ

・・・任務は班で行う！確かに忍者にとって卓越した技能は必要だ。が、

それ以上に重要視されるのは『チームワーク』だ。『チームワーク』を乱す個人プレイは

仲間を危機に落とし入れ、時には殺すことになる。」

## 【GW】File・5

さつき発した言葉の後に、少し間隔を入れて話し始めた。

カカシ「任務は命がけの仕事ばかりだ。これを見る。この石に刻まれている数多くの名前。

これは全て里で英雄と呼ばれている『殉職』した忍者たちだ。」

その『殉職』という言葉に一同の雰囲気は更に暗くなる。その雰囲気嫌うようにカカシは声を張り上げて言葉を発した。

カカシ「……………最後にもう一度だけチャンスやる。」

ただし！昼からはもっと過酷な鈴取り合戦だ。挑戦したい奴だけ飯を食え。

ただし、ナルトには食わせるな。ルールを破って昼飯を食おうとした罰だ！

もし、そいつに食わせたりしたら、そいつをその時点で失格とする。

ここでは、俺がルールだ。分かったな……」

と、反論は全く聞きませんよオーラを纏ったまま消えた。

そして、オレの弁当の具は残り少なくなり、又、サクラも食べ始めた。

ナルトは丸太に縛り付けられている上に、飯も食べていない為。いつもの強がりさえ出てこなかった。

そんなナルトを惨めに思い、ナルトを紐の束縛から解放して残り少なくなつた弁当を渡そうとしたら隣で、サクラがルールがどうか、ヤバイとか言つてオレの行為を止めさせようとするが、やっとこの試験の内容の全貌が読めたオレが聞き入れるわけもなく、ナルトに弁当を食わせた。どうやらサクラも諦めて弁当のおかずを少しナルトに分けているようだった。

・・・すると、間もなく前方で小規模の爆風が吹き荒れ、鼓膜が破れそんな音量で怒鳴り声が聞こえた。

カカシ「お前らああ！！！！！！」

思わず身構えるオレと、腰を抜かす2人  
すると、急にカカシ先生の顔が笑顔になり・・・

カカシ「ごーかつく！」

てつきり、怒られると思つていた2人はボカンとしていた。  
その様子にもう一度カカシが言つた

カカシ「合格」

サクラ「合格？なんでえ？」

カカシ「忍者は裏の裏を読むべし。忍者の世界でルールや掟を破る奴はクズ呼ばわりされる。

・・・けどな！仲間を大切にしない奴は、それ以上のクズだ。

これにて演習終わり！全員合格！第7班は明日より任務開始だ！」

その言葉にサクラは納得し、ナルトは『忍者』という言葉を連呼していた。

そして第7班として活動をし始め、早2週間が過ぎた頃、何時もの様に火影様の所へ行き任務を受注しに行った。すると、いままでDランク任務だったのだが、次に行く任務はCランク任務をするように頼まれた。そしてオレ達、第7班は、波の国へと向かうのであった・・・



カカシが集合時間に30分遅れると言うアクシデント(？)があったものの無事一行は波の国に向け木ノ葉の里を出発した。そして暫く、歩いていると不意にサクラが話し始めた。

サクラ「ねえタズナさん・・・タズナさんの国って『波の国』でしょ？」

タズナ「それがどうした？」

サクラ「ねえカカシ先生・・・その国にも忍者っているの？」

カカシ「いや、波の国に忍者はいない。だけど、大抵の他の国には文化や風習こそ違うが、

隠れ里が存在し、忍者がいる。大陸にあるたくさんの国々にとって

忍びの里の存在っていうのは国の軍事力にあたる。つまり、それで隣接する他国との関係

を保っている訳だ。が、かと言って里は国の支配下にあるんじゃないくて、

あくまで立場は対等にあるんだがな。波の国のように他国から干渉されにくい

小さな島国なんかでは忍びの里が必要でない場合もあるしな。それぞれの忍びの里を

持つ国の中でも、『火』、『水』、『雷』、『風』、『土』の五ヶ国は、

国土も大きく力も絶大なため、忍び五大国と呼ばれている。

火の国〓木ノ葉隠れの里、水の国〓霧隠れの里、雷の国〓雲隠れの里、

風の国〓砂隠れの里、土の国〓岩隠れの里、各隠れ里の長のみが影の名を

語る事を許されている。その火影、水影、雷影、風影、土影の所謂、五影は

全世界、何万の忍の頂点に君臨する忍者達だ。」

ナルトとサクラは何か、心の中で火影様の悪口を言っていたらしく、カカシ先生に凶星にされていた。

カカシ「ま、安心しろ。Cランク任務で、他国の忍との戦闘なんて滅多にないから。」

その言葉に安堵したサクラと、表情を曇らせたタズナがいた。

それから川沿いを暫く歩いていると、何故か水溜りがあった。妙な・・・と思いながらも無視して進んでいくと急に後方で殺気が発生した。

カカシ「何っ?!」

という言葉を発したかと思うと、先生の体はチェーンでバラバラに引き裂かれた。

その後、敵はナルトの後ろへ回り、引き続きチェーンを使おうとしたときにオレは、手裏剣とクナイで相手の動きを封じ込め、身動きが取れていない隙に術を発動させた。

火遁・火龍弾

これで、1人は焼死した。もう1人には別の術で・・・

### 火遁・火龍炎弾

つと、これでこちらも焼死。

すると死んだ振り（変わり身の術）をしていたカカシ先生が、パチパチ手を叩きながら出てきた。

カカシ「とりあえずサスケ。中々良かったぞ」

サスケ「そりゃどうも」

ナルトは自分が動けなかったから悔しかったみたいだ。

カカシ「ところで、タズナさん・・・ちょっとお話があります。」

その言葉で場の空気が少し引き締まった・・・。

## 【GW】File 7

さっきの忍者はカカシ先生の土遁を使って埋めた。そして、話は戻る。

カカシ「さっきの忍者は、霧隠れの中忍ってトコだ。こいつ等はいかなる犠牲を払っても

戦い続けることで知られる忍だ。」

タズナ「アンタそれを知っていて、何故ガキにやらせた」

その言葉には若干だが、怒りも混ざっているように見えた。

しかし、カカシの話す内容が後半になっていくにつれ、その表情にも変化が現れた。

カカシ「私とその気になればこいつくらい瞬殺できます。が、私には知る必要が

あったのですよ・・・この敵のターゲットが誰であるのかをね。つまり狙われているのは

あなたなのか。それとも、我々忍のうちの誰なのか、ということですよ。

我々はあなたが忍に狙われているなんて話は聞いていない。依頼内容はギャングや

盗賊など、ただの武装集団からの護衛だったはず・・・そうになると、Bランク以上の任務だ。

依頼は橋を作るまでの支援護衛という名目だったはずですよ。敵が忍者であるならば、

迷わず高額なBランク任務に設定されたはずですよ。何か訳

ありみたいです、

依頼で嘘をつかれると困ります。これだと我々の任務外でことになりますね。」

サクラ「止めましょ？こんな任務まだ私達には荷が重過ぎるわ

サスケ君には大丈夫かもしれないけど・・・私やナルトは動けなかったし」

その場で話し合い、とりあえず家までは送り届ける。その後は、また話し合いで決める。という風に決まった。まあ、そうなるだろうとは思っていたけど・・・

そこからは、船に移動した。そこでは、誰に狙われているかなどの詳細を聞いた。そしてそこで、カカシ先生が「応援を要請することにする」と言つて、伝書鳩に紙を持たせて。

そんなこんなで、時間は進み無事に陸地に着いた。そしてそこから少しばかり歩いた所である。

するとカカシ先生がいきなり大声を出して指示した。

カカシ「全員、伏せろ！！」

それがまるで合図だったように、大きな刀が上空を飛んでいった。そしてその大きな刀はオレ達の目の前にあった大木に勢い良く突き刺さった。

カカシ「（あいつは確か・・・）」

へえゝこりやこりやゝ霧隠れの抜け忍、桃地再不斬君じゃないですか？」

と、アホな口調で話してはいたがかなり警戒をしている。とオレは思っている。

しかし、空気の読めないナルトは飛び出していった。が、やはりカシ先生に止められた。

カカシ「（こいつが相手となると・・・）このままじゃちっとキツイか・・・」

そう言って、額当てを正常位に戻した・・・

再不斬「ほお噂に聞く写輪眼を早速見られるとは・・・光栄だね」

しかし、それには答えずにオレらに指示を与える。

カカシ「お前ら、卅の陣だ。タズナさんを守れ！それが、ここでのチームワークだ。」

すると、空気の読めないナルトが疑問に思っていたことを聞く。

ナルト「写輪眼ってなんだってばよ?!」

再不斬「写輪眼・・・眼光が生み出し、瞳が発する力。所謂、瞳術の使い手は、全ての幻術、

体術、忍術を瞬時に見通し、跳ね返してしまう眼力を持つという・・・写輪眼は

その瞳術使いが特有に備え持つ瞳の種類の1つ。しかし、写輪眼の能力は

それだけじゃない。それ以上に怖いのが、その目で相手の技を見極め

瞬時にコピーしてしまうことだ。・・・俺様が霧隠れの暗殺部隊にいた頃、

携帯していたビンゴブックに、お前の手配情報が載ってたぞ。それには、

こつも記されていた・・・千以上の術をコピーした男・・・コピー忍者のカカシ」

ナルトやサクラが各自心中で感想を述べていたが、戦闘は既に始まりそうだった。

再不斬「お話はこの位にしとこうぜ・・・俺はそのじじいをさっさと殺んなきゃならねえ」

と言われ、オレ達はそこでやっと卅の陣をとった。すると再不斬が、猛スピードで、動き始めた。

そして、どんどん霧が濃くなっていく。ついには、ほぼ、視界が無いくらいまでになった。

### 忍法・霧隠れの術

カカシ「あいつがまず最初に狙うのは俺だろう。桃地再不斬、奴は霧隠れの元暗部で

無音殺人術の達人として知られた男だ。その名の通り無音で一瞬の内に暗殺する術だ。

気がついたらあの世だったなんてことになりかねない。俺も写輪眼を全て上手く

使いこなせるわけじゃない。・・・お前たちも気を抜くな  
！」

オレは、少しでもこの状況を把握しようと『写輪眼』を使用した。

### 写輪眼

だめだ、視界が悪すぎて何もわからねえ・・・すると、再不斬の聲が不気味に響いた。

再不斬『八カ所・・・咽喉、脊柱、頸動脈に鎖骨下動脈、腎臓、心



臓・・・・・・・・

さて、どの急所がいい？・・・・・・・・」

その言葉に、完全ビビってしまったサクラ。既にガタガタ震えている。

カカシ「サクラ、安心しろ。俺の仲間は絶対に殺させやしないよ。」

ホッと息をついた瞬間、声の持ち主は近くにいた。

再不斬「それは、どうかな？・・・・・・・・？！」

オレが瞬時に放った裏拳は、見事に再不斬の顔面にクリーンヒットした。が、しかし

『ジャバーン！！』という音を立てて、消えた。チツ水分身だったか・・・

すると、ナルトが

ナルト「先生！後ろ！！」

と、その瞬間にカカシ先生は斬られたのであった・・・。

## 【GW】File・9

『ジャバーン』と音を立てて、カカシ先生は水になった。

再不斬「（水分身だと?!・・・あの霧の中でコピーしたっていうのか）」

カカシ「動くな」

背後にはカカシがクナイを持って立っている。

カカシ「・・・終わりだ。」

形勢逆転だ。しかし、再不斬は笑った。

再不斬「フツハツハツ・・・終わりだと?分かってねえな

サルマネ如きじゃあこの俺様は倒せない。絶対にな」

と、言った瞬間にカカシ先生の後ろには、再不斬がいた。そして今まで、カカシ先生の前にいた、再不斬は既に、水と化していた。

カカシ「何ッ?!」

### 水牢の術

大きな水球が出来、その中にカカシ先生が閉じ込められてしまった。再不斬「カカシ、お前との決着は後回しだ。まずはあいつらを片付

けさせてもらっぜ。」

### 水分身の術

そう術を発動させると、水分身が3体出てきた。

再不斬「額当てまでつけて忍者気取りか。だがな、本当の忍者ってのはいくつもの死線を

乗り越えた者の事を言うんだよ。つまり、俺様の手配書に載る程度になつて

初めて忍者と呼べる。お前らみたいなのは忍者とは呼ばねえよ。」

と言ったと同時に、水分身がものすごい速さで、攻撃してくる。・  
・  
・フンツ

### 火遁・灰積焼

この術で、水分身を一気に消して見せた。そして！

### 土遁・心中斬首の術

をさつきこつそり造っておいた影分身に再不斬本体を攻撃させた。

再不斬「何ッ?!」

と、かなり驚いてはいたが避けられた。まあ本来の目的は達せたから良いけど・・・

『バシヤアア』と水飛沫をあげ 水牢の術 が解かれた。

カカシ「サスケ！良くやってくれた」

再不斬「ハッ・・・ついカッとなって術を解いてしまつとはな！」

カカシ「術は解いたんではない・・・解かされたんだ。」

その言葉にもカッとなる再不斬。

カカシ「言っておくが、俺に二度同じ術には掛からない。・・・どうする」

と、言つた途端に間を取り印を結び始めた。そして同時に

水遁・水龍弾の術

術を発動させ、相殺した。そしてオレは・・・

水遁・水牙弾の術

で、再不斬を殺す勢いでぶつ飛ばした。そして再不斬の体は木にぶつかり静止した。

カカシ「・・・終わりだな。」

再不斬「お前らには、未来が見えるのか？」

カカシ「ああ・・・お前は死ぬ。」

その時だった。再不斬の首に千本が刺さつたのは

？「ふふ・・・死んじやった。」

その言葉を確かめるように、カカシ先生は再不斬の首に手を当てた。

カカシ「確かに死んでいるな・・・お前は、霧隠れの追ひ忍だな」

？「流石ですね。よく知っていらっしやる。」

カカシ「（背丈や声からしてナルト達と差ほど変わらないな）」

？「あなた方の戦いは、一先ずここで終わりでしょう。僕は、この死体を

始末しなければいけません。何かと秘密の多い体のもので・・・それじゃあ、失礼します。」

そうして、追い忍部隊の忍者は消えていった。そして、気が付けばいつの間にかカカシ独自の額当ての仕方に戻っていた。

カカシ「俺達の任務は終わった訳じゃない。タズナさんを取りあえず家までは、送り届けるぞ」

タズナ「みんな！超悪かったのう。わしの家でゆっくりしていけ！  
ワハハハハ」

カカシ「よおし！元気良くいくぞ！！」

とは言ったものの、パタリと倒れてしまった。

サクラ「カカシ先生ええ！！！！！！」

とヒステリックな叫び声をあげているが、オレは直ぐに気絶しているだけだと分かり、ナルトと協力してカカシ先生をタズナさんの家まで運んでいった。

家に着いたら、お言葉に甘えて『超』ゆっくりさせてもらった。そして、数時間が経った頃にカカシ先生は、ようやく目が覚めた。

サクラ「写輪眼ってすごいけど、そんなに疲れるんだったら考え物よね」

サスケ「いや、それはカカシ先生がうちは一族じゃないからだ」

サクラ「え？どうゆうこと？」

全く分からない。と言った感じでたずねるサクラ。

サスケ「写輪眼はうちは一族の血継限界で、しかも一部の人間にしか開眼できない

特異体質なんだ。それを何で、カカシ先生が持っているのかまでは知らないけどな。」

そして、今まで会話に参加していなかったナルトも参加する。

ナルト「じゃあさ！じゃあさ！サスケもできんの？写輪眼」

サスケ「出来るも何もさっきの戦闘で使ってたろ・・・まあ、いや、カカシ先生。」

カカシ「ん？何だ？」

サスケ「オレ、さっきから考えてるんだけど・・・再不斬は多分まだ生きてる。」

その言葉に、オレとカカシ先生以外の表情が強張り固まる。

カカシ「そうなんだよな。実は俺も引つ掛かってたんだ。・・・・よし、再不斬は

まだ生きているという最悪のシナリオを設定として、お前らに修行を課す。」

と言って、場所を移した。・・・・・・そして森へ来た。

カカシ「では、これから修行を始める。その修行の内容は・・・木登りだ。」

ナルト「木登りい?!」

カカシ「そうだ。しかも、手を使わずにな。これは、チャクラコントロールの修行だ。

上手くコントロールできれば、その分だけ無駄なチャクラを使わなくて済む。

つまり、簡単に例えて言うと、今のチャクラ量で5回しか出来ない術があったとしたら

コントロールが上手くなるだけで8回出来る。と言う訳だ。

」

なるほど・・・お得心たつぷりな修行だな。・・・って事は、チャクラが足りなくて出来なかった

あの術も、これが上手くいったら出来るかもしれないって事だな。

ナルト「よっしゃー!! やってやるってばよ!!」

の掛け声で木登り修行が始まった。



今は、みんな集中している。もちろんオレもだ。チャクラを足の裏に集中させて

・・・・・・・・・・・・・・・・今だ！

全速力で、大木の側面を駆け上がった。が、丁度、真ん中の所で弾かれてしまった。

ついでに、ナルトは、オレより少し下の方で断念。サクラに関してはもう上まで行っている。

サクラ「案外、簡単ね」

カカシ「ほー今一番チャクラコントロールが上手いのは、どうやら女の子のサクラみたいだな」

やはり、人に負けるのは悔しい・・・特に女には負けたくない。そして、オレとナルトに火を付けるためか、こうも言ってきた。

カカシ「サクラはチャクラコントロール、スタミナ共に中々のものだ。この分だと、

火影に一番近いのはサクラかなあ。誰かさんとは違ってね。

それに、うちは一族ってのも、案外大した事無いのね。」

やっぱり・・・腹立つ・・・・・・・・

カカシ「（とは言っても、ナルトとサスケ、こいつ等はサクラとは、比べ物にならないくらいいの

チャクラの量を秘めている……。もしかすると、俺以上の量だ……。

それでこの修行が上手くいけば、後にこれがかなり大きな財産になる。」

ナルト「勝負だ！サスケ！！」

サスケ「ああ受けて立つ！！」

それから1時間が経った……

しかし、オレもナルトも、あまり成長していない。腹立つなあ……。サクラはもう出来てるのに。

サクラ「（私、もうヘトヘトよ……。2人とも何てスタミナしてるの?!）」

すると、ナルトがサクラの方ヘトコトコ歩いていった……。なるほど、コツを聞くのか！

そして、サクラはコツを教えながらそれを見て見せる。それならオレは、コツを見えることにする。

## 写輪眼

なるほどな……。チャクラの量はあれぐらいか、今までオレが出していた量の5分の4……。か？

……。いや6分の5だな。よし、それでやってみるか……。おつと、写輪眼はしないでおう。

そしてコツを教えたサクラは、橋へ向かっていった。

それから、また1時間が経った頃には、2人とも頂上まで登っていた。

カカシ「良くがんばったな、お前ら。よし次、歩いて上まで。」

おい、こら、鬼！と心の中で叫んだのは言うまでも無い。

でもまあ、それをその日の内にやって遂げたのは言うまでも無いけどな。

その日の晩飯はクソ不味かった。

翌日は水上歩行の術をマスターし、やはり、その日もクソ不味い飯を食って寝ようとしたら、

玄関の戸を叩く音が聞こえ、その後、カカシ先生に呼ばれた。

すると、そこには、木ノ葉の額当てをした、忍者2人と変態2匹がいた・・・。

テンテン「（左にいる黒髪の子、結構タイプかも・・・）」

ほんわか頬を赤く染めるテンテン。それを不審に思ったナルトが口を開いた。

ナルト「誰だつてばよ？この人達・・・」

カカシ「ああこいつ等は・・・」

すると変態（大）が話し始めた。

ガイ「俺の名は、マイト・ガイ！第3班の上忍だ。そして右から」

リー「僕は、木ノ葉の美しき碧い野獣ロック・リー

貴女の名前は？」

と、いきなりサクラに話を振った。サクラはかなり引きながらも名前を言った。

リー「春の野原に咲くはサクラの花、その姿は儂く、されど綺麗な花・・・」

美しい貴女にふさわしい名前です。」

オレとナルトは、笑わずにただで殺されそうだ。腹が痛い・・・。

その様子を見ている、お団子頭の女の子は「あちゃ」という表情を

している。

そして決め手は・・・

リー「僕とお付き合いしましょう！死ぬまで貴方を守りますから！」

サクラ「ごめんなさい！！！」

と、即答。それには、流石にオレもナルトも我慢できなく、吹いてしまった。

沈んでいる「野獣」は放って置いて、次に行った。

テンテン「私は、1期上のテンテンよ。よろしく」

と、明るく言われたから取り合えず軽く頭を下げる。

ネジ「今年のナンバーワン・ルーキーはお前か？うちはサスケ」

こいつは、かなり敵対心もってやがるな・・・。

サスケ「それが、どうした？」

ネジ「フンツ・・・なんでもない。」

この白い眼は、日向の者だな。

すると、今まで沈んでいた「珍獣」が動き出した。

リー「今、ここで僕と勝負してください。」

・・・・・・はあ？

サスケ「悪いが、今、お前と戯れている時間は無い。オレは、明日の修行のために寝る。」

と、宣言しオレは上にある貸し与えられた部屋へと戻った。  
その頃、下では・・・。

カカシ「ま、さっきの奴がうちはサスケね。で、この金髪が意外性ナンバー1忍者の

うずまきナルト。そして、俺が担当上忍のはたけカカシ。  
よろしく。」

リー「（この人でしたか。ガイ先生の永遠のライバルと言うのは・・・）」

テンテン「（ビジュアル的にはガイ先生の完敗ね）」

ネジ「（コピー忍者のカカシか・・・）」

と、上記の通り三者三様に思っていたことがあった。

ガイ「ところで、カカシ。お前の所の下忍はどうだ？少しは強くなつたのか？」

カカシ「ん？まあな」

ガイ「どのくらいだ？」

カカシ「ん？サスケは、忍術、幻術に関しては、上忍レベルだ。」

ガイ「ぬぁに?!」

カカシ「ナルトはナルトで、影分身を上手く使いこなせるようになった。」

ガイ「影分身だとお?!」

カカシ「サクラはチャクラコントロールに関してはピカ1だ。」

と、最後は若干教え子自慢大会になっていた・・・。

翌日の朝。オレは機嫌が悪かった。なぜなら、叩き起こされたからだった。しかも、あの変態に。

その後に、隣にいた、お団子頭の女の子に謝られたのだが……。朝飯を食べた後、何時ものようにナルトと森へ修行に行こうとしたら、さっきの女の子に止められ声を掛けられた。

テンテン「ねえ、サスケ君。・・・勝負しましょう？」

オレは、特に断る理由も無かったからその申し出を受け入れた。それを、カカシ先生に伝えると、先生はそれを許可しナルトをつれて橋へ行った。しかし、何故か他の1期上の人達は連れて行かなかった。

そして、場所を移して、修行をしていた、森の少し開けた場所。そこには、何故か、ロック・リーと日向ネジも来ていた。

テンテン「それじゃあ・・・始めるわよ。よい・・・・・・・・スタート！」

向こうが勝手に『スタート』を言った挙句、手裏剣やクナイもそれと同時に飛んできた。

しかし、オレはそれを難なく避けて見せた。その間に、テンテンとは距離がかなり開いてしまった。

テンテン「（やるわね・・・。）」



そして、オレはテンテンのいる場所までは、木を使って素早く移動していた。そして、オレが丁度、空中にいる時に手裏剣を投げた。

### 影分身の術

オレは、影分身を使って咄嗟に空中での攻撃を避けた。

リー「（術を使うタイミングが上手いですね。）」

オレは、今のことを経験し、空中移動は不利だと思い、一先ず地面に降りた。・・・しかし、そこに待っていたのは、トラップの数々。四方八方から飛んでくる、飛び道具に対処できるのは、これしかない！

### 水遁・水陣壁

ネジ「（こいつ、水の無い場所でも水遁を使えるのか?!）」

テンテン「甘い!」

一発目は、それで防げたが、次に見えてきた、二発目は、無理があった。

### 土遁・土流壁

と、外側に『水陣壁』、内側に『土流壁』という風に、二重の壁を回りにたて、防御した。

リー「（上手いです。流石はうちはサスケ君ですね。でも・・・。）

」

テンテン「（今度は上から！）双昇龍・・・これで、終わりよ！」

今度は、オレの上空から忍具の雨が降ってきた。けど・・・。

### 瞬身の術

オレは、瞬時に移動し、テンテンの後ろに回った。そして、『ボコ』と一発だけ殴り、しばらく動けなくした。

テンテン「君って、ホントに強いよね。」

・・・・・・つもりだったが、口は、利けるみたいだった。すると、今まで見ていた、ロック・リーが目の前に現れこう言った。

リー「サスケ君。僕と勝負してください！」

テンテン「リーったら、もう・・・絶対勝てっこないわよ・・・。」

と、呟いているが、ロック・リーの耳には、届いていないらしい。  
今回の申し出も断る理由が無い為、受けて立つ事にした。

テンテン「しょうがないわね。・・・それじゃあ『よい、スタート』で始めね。」

『よい・・・スタート!』」

リーは、真っ直ぐに突っ込んできたが、兎に角、速い!そして、直ぐに拳が飛んできたが、避けるので精一杯だった。・・・仕方が無い・・・。

### 写輪眼

ネジ「(アイツも写輪眼を開眼しているのか・・・。)」

これなら、リーの速過ぎる動きも、サクラくらいに見える!

リー「それが、噂の写輪眼ですか・・・。お目に掛かれて光栄です。  
では、僕も

本気を出させて頂きます。」

そう言うと、足につけていたプロテクターらしき物を全て外した。

リー「では、行きますよ。」

と、言った瞬間にはオレの後ろに回り込まれていた。

サスケ「何?!」

木ノ葉旋風!

『ダッダッダン!!』と、攻撃を受け軽く飛ばされた。

木ノ葉烈風!

『ダッダッダン!!』と、またもや攻撃を食らった。  
クソッ・・・写輪眼でさえ見切れないなんて・・・こうなったら。

影分身の術

リー「影分身ですか。残念ですが、僕にそんな小細工は、効きません。・・・行きます!」

影舞葉

その言葉通り、リーは3体出した分身の内、2体を一瞬の内に消して見せた。が、次の瞬間!

『ドッカーン!!!!!!』分身が、リーを巻き込んで、爆発した。  
そう、これが・・・

分身大爆破

という、かなり効果的で、強力な術だ。一応、死なない程度に、手加減はしたが・・・。(ついでに言うと、オレは、影分身をした際

に、瞬身の術で離れて、分身が爆発した後に、また、瞬身の術で戻ってきた。)しかし、その代わりにチャクラを結構、消耗させてしまふ。それをモロに食らった、リーは、気絶してしまっている。

テンテン「(全く、仕方ないわね。)・・・しっかりしなさいよ！リーー!!」

と、テンテンが介抱(?)していた。すると、最後まで、遠目から見ていた、日向ネジがやって来た。

ネジ「最後は、俺だ。」

その言葉に、テンテンが口を挟んだ。

テンテン「ちょっと、ネジ。流石にサスケ君も疲れちゃったと思うからさあ、また今度にしたら?」

しかし、オレはまだ、行けた。

サスケ「いや、テンテンの心配は無用だ。オレは、まだ戦える。」

ネジ「だ、そうだ。」

テンテン「そう、なら好きにしなさい。」

そう言うと、タズナさんの家に、リーを連れて帰って行った。・・・  
つてもう、動けるのかよ!?

テンテンが見えなくなった所で、ネジが口を開いた。

ネジ「お前のタイミングで、始めて良いぞ。ちょっとしたハンデだ。」

馬鹿が・・・

サスケ「フンツ・・・なら、『スタート』だ！」

火遁・豪龍火の術

オレは、スタートとほぼ同時に、術を発動させた。しかし・・・

白眼 八卦掌回天

何か、シールドのような物で、弾かれ当たりはしなかった。・・・  
チツ、なかなかやるな。

ネジ「（印を結ぶスピードが速過ぎる。）」

白眼は、視野とチャクラの細かな流れを見るのに適している瞳術。  
ならば、視力を奪うのみ！

幻術・黒暗行の術

ネジ「（何だ？急に視界が・・・。周りが、真っ暗で、何も見えん

！？）」

サスケ「終わりだ。」

『ドス』と、さつき、テンテンにやった時とは、比べ物にもならないパンチを鳩尾に加えて、完勝した。そして、完璧に気絶している、ネジを抱えて、瞬身の術で、一先ずマイト・ガイ、ロック・リー、テンテンが、いるであろう、タズナさんの家へ向かった。

着くと、やはりそこには、3人ともそろっていて、気絶しているネジを預けた。

ガイ「お前、3人とも倒したのか？！しかも、服を汚さずに！？」

と、かなり驚いているようだ。しかし、ちょっと訂正する。

サスケ「いや、リーに蹴られた所には、少し、泥が付いている。」

テンテン「ネジは？」

オレが、抱えている。ネジを心配顔で見つめるテンテン。

サスケ「大丈夫だ。幻術は既に解いている。後は、自然に目が覚めるだろう。じゃ」

## 瞬身の術

オレは、カカシ先生達がいる、橋へ飛んでいった。そこが、今どうなっているのかも知らずに……。そして、残されて且つ起きている2人はこう思った。

ガイ「（うちはサスケ・・・とんでもない奴だな。）」

テンテン「（てゆうか、私達が応援に来た意味って・・・ある？）」

そして、場所は移してここは、建設中の大橋。

再不斬『待たせたな、カカシ。相変わらず、そのガキを連れて。また、震えてるじゃないか、

可哀想に・・・。』

すると、目の前に再不斬の水分身が7体現れた。

ナルト「武者震い・・・だつてだよ！」

カカシ「やれ、ナルト」

水分身の抹殺許可が出た瞬間にナルトの影分身が再不斬の水分身を倒した。

再不斬「ほお、水分身を見切ったか。あのガキ結構成長したな。ライバル出現つてとこだな。白。」

白「そうみたいですな。・・・たいした少年ですね。此間の少年と言ひ、今の少年と言ひ。」

再不斬「だが、先手は打った。・・・行け。」

白「はい。」





向こう側で、何か動きがあったのをカカシは目撃した。すると、反射のように素早くサクラに指示を出し、自分も警戒を強めた。

カカシ「サクラ！お前は、タズナさんを守れ。アイツはナルトに任せるんだ！」

サクラ「うん。」

その場面になって、オレがやっと到着した。

サクラ「サスケ君！」

ナルト「サスケ！」

サスケ「そこのお面！最初の相手は、オレだ！」

白「君を殺したくは無いのですが、引き下がってはもらえないのでしょうね。」

サスケ「当たり前だろ。」

そして、急激に接近して、クナイと千本での鏝迫り合いになった。

白「しかし、貴方は、僕のスピードに付いて来れなくなる。」

秘術・千殺水翔

そしてオレは、千本に包囲された。この様子だと逃げられそうも無いな。

#### 火遁・炎弾

で、敵に直接、攻撃し術を無効化させた。

カカシ「ガキだ、ガキだと、うちのチームを舐めてもらっちゃ困るなあ。

・・・こう見えても、サスケは、木ノ葉の里のナンバーワンルーキー。

サクラは、凄いチャクラコントロールセンスの持ち主。

そして、さっき水分身を一瞬にして倒したのが・・・」

ナルト「今、木ノ葉で最も伸びている忍者！そして、意外性ナンバーワン忍者！

そしてんでもって、いずれ火影の名を受け継ぐ男！うずまきナルトだってばよ！！」

その言葉を半ば無視し、再不斬は、白に何かを言った。

するとその言葉が引き金だったのか、白が冷気を出し始めた。

そして、オレを取り囲むように、氷の鏡が次々と出来ていった。

#### 秘術・魔鏡氷晶

そして白は、鏡の中へ入っていった。

カカシ「（何だ？あの術は・・・。）」

やはり、使っしかないか……。

## 写輪眼

白「じゃあ、そろそろ行きますよ。僕の本当のスピードを……。」

この短い間で、分かった事がある。1つは、本体は1つだと言うことと、それともう1つは、全くもって、コピー出来ないと言うことだと、頭の中で、分析していたら。四方八方から千本が飛んでくる。それも量が多すぎて避けれない。しかも、印を結ぶ時間すら無い。こうなったら、一か八かで、今のオレの中で“最強”且つ一番短い印の術を発動させるしか勝てる方法が、無い。

## 火遁・獄龍炎の術

その術は、『ゴオオオオオ』と蒼白い炎を立てながら、意志があるように、動き回り、オレの周りにある物（秘術・魔鏡氷晶とその術者である、白）を一瞬にして、焼き尽くした。塵をも残さずに……。

そして、その術を使い終わったオレは、チャクラ切れになり、気を失ってしまった。

『ちよつと？ちよつと！大丈夫？』

オレが、目を開くと心配顔のテンテンの顔がドアップで見えた。

サスケ「ああ・・・ちよつと、チャクラを使いすぎただけだ。・・・  
つてどうなった！？」

テンテン「何が？」

と、呑気に聞き返された。

サスケ「再不斬だよ！」

テンテン「ああその人なら、カカシ先生が倒したって。」

そうか、なら良かった。

テンテン「私達が応援に行った頃にはさあ、かなりの人数がいた武装集団もナルトが全部

多重影分身の術でやつつけてるところだったし。」

と、テンテンが愚痴を言っているが、割愛。  
そして、1週間位お世話になった。波の国と、人々にお別れを言つて、オレ達は、里へ戻った。

それから、1週間が経ったある日の頃だ。

オレらは、カカシ先生に呼ばれ、とある橋の上に集まっていた。そこで、何時ものように待ちぼうけを食らい、結局、この日の待ち時間は3時間15分だった。

カカシ「やあ諸君！おはよう・・・今日は道に迷ってな。」

ナルト＆サクラ「はい！それ！嘘！！」

・ そんなやり取りが行われる1時間前に遡り、場所も火影様の部屋・

三代目「さて、中忍選抜試験を開催するに当たって、まず、新人の下忍を担当している者。前へ。」

その言葉に、はたけカカシ、夕日紅、猿飛アスマの3名が前へ進み出た。

三代目「どうだ？お前達の手の者に、今回推したい下忍はおるかな？」

イルカ「（聞くまでも無い。あいつ等には、まだ早すぎる。）」「

三代目「じゃ、カカシから」

カカシ「カカシ率いる第7班。うちはサスケ、うずまきナルト、春野サクラ、以上3名、

はたけカカシの名を持って、中忍選抜試験に推薦します。」

イルカ「（何?!）」

紅「紅率いる第8班。日向ヒナタ、犬塚キバ、油女シノ、以上3名、夕日紅の名を持って、左に同じ。」

アスマ「アスマ率いる第10班。山中いの、奈良シカマル、秋道チヨウジ、以上3名、

猿飛アスマの名を持って、左に同じ。」

すると、周りの人はザワザワし始めた。まあ当然と言えば、当然だろう。何たって、中忍選抜試験にルーキーが出ること自体が異例なのに、しかも全員を推薦したとなると、それは、そうなるだろう。そして、黙ってはいられなかったイルカが、遂に口を挟んだ。

イルカ「ちょっと待ってください!」

三代目「なんじゃ?イルカよ」

イルカ「火影様!一言言わせてください!差し出がましいようです、が、今、名を挙げられた9名は、

アガデミーで、私の受け持ちでした。確かに皆、才能のある生徒でしたが・・・、

まだ、早すぎます!もっと、場数を踏ませてから、受験させるべきです!」

誰もが納得する中、その言葉に反する言葉が飛び出たのであった。

カカシ「私が、中忍になったのは、ナルトより6つも年下の頃です。」

イルカ「ナルトは、あなたとは違う！あなたは、あの子を潰す気ですか？！」

と、いつもは優しい口調も少し荒くなる。

カカシ「大切な任務にあいつ等は、いつも愚痴ばかり、一度、痛い目に合わせて見るのも良し。」

・・・潰してみるのも面白い。」

イルカ「ぬあ、なんだと・・・」

イルカの心は、沸々と煮えてきた。

カカシ「と、これはまあ、『冗談として、イルカ先生。あなたの言いたい事も分かります。』

腹も立つでしょう。しかし・・・」

紅「カカシ、もうやめときなつて。」

姐さん肌の紅に止められるが、カカシは・・・

カカシ「口出し無用！あいつらはもう、あなたの生徒ではない。今は、私の部下です。」



アスマ「（つつく、めんどくせえ奴らだな）」

紅「（はぁ・・・）」

と、2人とも呆れてしまっている。

イルカ「しかし、中忍試験とは別名！」

三代目「イルカよ。お前の言い分も分からなくてもない。」

イルカ「火影様・・・。」

三代目「よって、今回の新人下忍には、特別な予備試験を行うことにする。」

イルカ「予備試験？」

そして時と場所は、さっきに戻る。

カカシ「やあ諸君！おはよう・・・今日は人生という道に迷ってな。」

ナルト＆サクラ「はい！それ！嘘！！」

カカシ「まあ、なんだ。いきなりだが、お前らを中忍選抜試験に推薦しちゃったから。」

これ、志願書な。と言っても、推薦は、強制じゃない。受験するかしないかは

お前達の自由だ。受けたい者だけその志願書にサインをして、5日後の午後3時まで

学校の301号室に来る事。以上。」

まさかとは、思うが今日呼ばれた理由って・・・

サスケ「これだけ？」

カカシ「ま、そういうことになるな。これにて解散！」

と、言葉通り解散し、帰路に着いていると、町外れでいきなり襲われた。

サスケ「その額当て、雨隠れの者か？」

雨忍「フッフッフ・・・」

写輪眼

たいした奴じゃないな。

忍法・金縛りの術

・・・これで、暫くは動けまい。  
それから、2時間後・・・

イルカ「(クソォ)、変化の術は解けたのに、サスケに掛けられた金縛りの術が解けない・・・)」

すると、近くに人が現れた。

カカシ「どうでした？・・・って、金縛りの術中に嵌ったままですね。・・・解！」

イルカ「すみません、助かりました。」

カカシ「その様子から見ると」

イルカ「はい。折角の予備試験でしたが、ルーキー9名中9名合格全員合格でした。

やはり、貴方達の言うように確実に成長しています。」

【DATE】No.2

はたけカカシ

忍：5 体：4 幻：4 賢：4 5  
力：3 5 速：4 5 精：3 印：5

総合能力：

潜在能力：

運：

得意忍術：写輪眼、雷切

うちはサスケ

忍：4 5 体：3 幻：4 5 賢：5  
力：3 速：4 5 精：3 印：4 5

総合能力：

潜在能力：

運：

得意忍術：写輪眼、火遁系忍術、幻術

うずまきナルト

忍：2・5 体：2 幻：1 賢：1  
力：2・5 速：2・5 精：5 印：1

総合能力：  
潜在能力：  
運：

得意忍術：影分身の術、多重影分身の術

春野サクラ

忍：1 体：1 幻：3 賢：4  
力：1 速：1 精：1 印：4

総合能力：  
潜在能力：  
運：

得意忍術：??

5日後の301号室(?)前・・・

何だか騒がしい。すると、テンテンがオレの方にぶっ飛んできた。  
・何してんだ?こいつら

サスケ「テンテン・・・何で遊んでんだ?」

テンテン「あ、サスケ君!」

サスケ「それにネジとリーも何やってんだ?お前ら、その下忍に  
化けている中忍よりは、強いだろ?」

と、中忍を馬鹿にしたことで睨まれる事になった。

サスケ「ま、ここはオレ達の目的としている場所じゃない。行くぞ、  
ナルト。」

ナルト「おーっす!」

と言って、オレに付いてきた。もちろんサクラもだ。  
そして、今度は本物の301号室の前に来た。

カカシ「そうか。サクラも来たか。中忍試験、これで正式に申し込  
みが出るな。」

サクラ「どうゆうこと?」

カカシ「実の所、この試験は始めから三人一組、スリーマンセルでしか受験できなくなってる。」

「サクラ」でも、先生。受験するかしないかは、個人の自由だって・

カカシ「ああ言ったな。でも、もし本当のことを言ったなら、サスケやナルトが、無理にでも

お前を誘うだろ？例え志願する意志がなくても、サスケに言われれば、お前は、

いい加減な気持ちで試験を受けようとする。サスケとナルトの為に・・・ってな。

でも、お前らは自分の意志で来た。・・・・・・行つて来い。（頑張れよ。）」

とりあえず、許可が出たところで、教室のドアを開いて3人で踏み入れた。

すると、そこには、ルーキーナイン（オレら含め）が全員集合していた。

いの「サスケくん。おっそ〜い！」

と、オレの死角から飛び込んできた奴がいた。

いの「久々に会えると思ってえ、ずっと待ってたんだからあ。」

サクラ「離れろ！イノブタ！！」

まあこうなる事は、ある程度予測できたことだが・・・面倒くさい。

シカマル「何だ。このメンドーな試験。お前らも受けんのか。」

ナルト「何だ？おバカトリオか！」

キバ「これはこれは、皆さんお揃いで。」

ヒナタ「こんにちは。」

この中の数名とは、仲が良いと思うが、あまり関わらなかった奴らも入っている。

キバ「つけ、なるほどねえ。ルーキー全員受験って訳か。」

しかし、皆、ライバル意識が高く、ピリピリしている。  
すると知らない顔の奴が、近づいてきた。

カブト「君達、もう少し・・・。」

## 写輪眼 魔幻・枷杭の術

ウザかったから黙らせた。すると、ナルトがガタガタ震えだした。  
・こいつにも緊張することって、あるんだな。と、驚いていたが、  
違うと言っことに直ぐ、気がついた。

ナルト「たあああああ！！！！俺の名は、うずまきナルトだあ！  
お前らなんかにや負けねえぞ！」

・・・・・・おい！





『静かにしやがれ！！このクソ野郎どもが！！』

と、煙が発生したのと同時にこのセリフが教室中に響き渡った。

イビキ「待たせたな。中忍選抜第一の試験。試験官の森野イビキだ。  
では、早速だが、中忍選抜第一の試験を始める。志願書を  
提出し、代わりに番号札を

受け取り、その番号の席に着け。その後、筆記試験の用紙  
を配る。」

すると、何かナルトがブツブツ言い始めた。そして、いきなり大きな  
声を上げた。

ナルト「ペーパーテストオオオ？！？！」

やばい、この世界ではオレも勉強は出来ないからな……………  
・カンニングでもするか。

そして、席に着いた後に、このテストのルールが説明された。  
それを、簡単に説明すると下記の通りだ。

- 一つ・持ち点10点ずつの減点方式。
- 二つ・チームの合計点で可否を判定。
- 三つ・試験中にカンニング行為1回に付き、減点2点。
- 補足・無様なカンニングをすれば、自滅する。
- 四つ・チームで、1人でも0点がいた場合、失格。
- 五つ・10問目は、試験開始45分後に出題。

それで、オレはこの試験の求めている答えが分かった。

イビキ「試験時間は、一時間だ。………始める!!」

こうして、中忍選抜第一試験が始まった。

まず、オレは、問題を見る訳でなく、スラスラと筆を進めている奴に目を向けた。

そして、そいつの動きを写輪眼で、コピーした。

時間が経つにつれ、無様なカンニングをした奴らが次々と失格になつていく。

そしてオレも、一抹の不安を覚える。ナルトは大丈夫か?とそんな不安の中、試験開始45分が経った。

イビキ「これから第10問目を出題する!……と、その前に一つ。最終問題については、

ちよつとしたルールを追加させてもらう。」

と、言った時にドアが開く音がした。ああ……さつき小便に行つた、砂の奴か。

イビキ「では、説明しよう。これは、………絶望的なルールだ。

まず、お前らには、10問目を受けるか、受けないか、を選択してもらう。」

すると、周りがざわめき始める。が、イビキが、それを一喝し、鎮火させ、説明を再開させる。

イビキ「受けないを選んだ者と、そのチームメイトは失格になる。  
そして、もう一つのルール。」

サクラ「（まだあるの?! いい加減にしてよ・・・）」

イビキ「受けるを選び、正解できなかった場合・・・・・・。その  
者については、今後永久に

中忍選抜試験受験資格を剥奪する。」

サスケ「（何?!）」

すると、キバが立ち上がった。

キバ「んな、馬鹿なルールがあるか!! 現にここには、何度か中忍  
試験を何度か受験している

奴もいるはずだ!!」

その後、イビキの不気味な笑い声が響いた・・・。

イビキ「フッフッフ……運が悪いんだよ、お前らは。今年は、この俺がルールだ。

その代わりに、引き返す道も与えてるじゃないか。自信のない奴は、大人しく、

受けないを選んで、来年も、再来年も受験したら良い。」

サクラ「（つまり、3人の内、誰かが受けないを選べば、他の2人も道連れに……

受けるを選んで、もし正解が出来なければ、その人は、一生下忍のまま。

どっちに転んでも、分が悪い。こんなの、普通の神経じゃ選べない……）」

イビキ「では、始めよう。この第10問目を受けない者は手を挙げる。

番号確認後、ここから出してもらう。」

ここで、チームメイトのナルトとサクラは葛藤していたらしいが、オレは迷わず受ける。

なぜなら、解答を知っている輩を、既にマークしたからだ。

すると、1分もしない内に、パラパラと……いやドンドン辞めていった。

そして、遂にオレが、恐れたことをやってしまった。ナルトが、手を挙げた。

と、思ったら、思いつきり手を机に叩きつけた。

ナルト「なめんじゃねえ！！俺は、逃げねえぞ！！受けてやる！もし、一生、下忍になったって、

意地でも火影になってやるから、別に良いってばよ！！怖くなんかねえぞ！！！！！！」

・・・とりあえず、一安心。だけど、本当に大丈夫なのか？

イビキ「もう一度聞く。人生を掛けた選択だ。止めるなら今だぞ。」

ナルト「真っ直ぐ・・・自分の言った言葉は曲げねえ。それが、俺の忍道だ！」

場の空気が変わったな。

イビキ「（フンツ。面白いガキだ。こいつらの不安を、あつという間に蹴散らしやがった。

78名か、予想以上に残ったな。これ以上、粘っても同じだな。）

良い決意だ。では、ここに残った全員に、第一の試験・・・合格を申し渡す！」

そして、この試験の意味と、本当の意味の答えをネタバレらしした。このテストが、カンニング前提であったことや解答の知っている、中忍が混ざっていることなどを次々と話していった。・・・・・・まあ、オレは最初のほうに気が付いていたんだけどな。

ナルト「（な？！そうだったのかぁ・・・。）」

そして、「そいつを探し当てるのに苦労したよ」とか話し声が聞こえてきた。

ナルト「アツハハ！バレバレだったの！気付かないほうが可笑しいってばよ。なあヒナタ」

あの様子だと、全く気付かなかったみたいだな。  
その後、イビキが、情報について熱く語り、最後に

イビキ「・・・健闘を祈る。」

という、言葉で締めた。

ナルト「よっしゃあ！！祈っててい！！」

と、言った瞬間だった。いきなり、窓ガラスが割れ、黒い物体が飛んできた。

アンコ「私は、第2試験官みたらしアンコ。次行くわよ！次い！！  
ついてらっしゃい！！」

ポカンとしていたら、イビキが一言。

イビキ「空気を、読め。」

適切な突っ込みにオレは同意し、アンコは赤くなっていた。

アンコ「78人？イビキ、あんた26チームも残したの？今回の第一試験、甘かったのね。」

イビキ「今回は、優秀そうなのが多くてな。」

アンコ「まあ良いわ。次の試験で、半分以下にしてやるわよ。・・・はあ、ゾクゾクするわ。」

詳しい説明は、明日。場所を移してやるから。集合時間、場所は、

各々担当上忍から聞くように。以上！解散！」

その後、カカシ先生のところへ行き、第一次試験通過と次の試験場所、時間を聞いた。それを聞き終わった後に、あることを聞かれた。

カカシ「ところで、サスケ。どうして、写輪眼状態のままなんだ？」

サスケ「そのほうが臨機応変に動ける。それに、先生と違って、チャクラの消費量もほぼ無に

等しいからことが、わかったから、これからは、ずっとこのままのつもりだ。」

そして、翌日。オレ達は、言われた通りの場所に来ていた。



ナルト「何だ？ここ・・・」

アンコ「ここが、第二の試験会場。第44演習場。別名、死の森よ。この森が、死の森と呼ばれる由縁、直ぐに実感することになるわ。

それじゃ、第二の試験を始める前に、あんたらに、同意書を配っておくわね。

試験に参加する者については、まずこれに、サインをしてもらうわ。

こつから先は、死人も出るから、それについて、同意を取っておかないとねえ。

あたしの責任になっちゃうからさ。アッハッハッ・・・。」

何、恐ろしいことサラツと言ってんだよ・・・。

アンコ「それじゃあ、第二の試験の内容を説明するわ。早い話、ここでは、究極のサバイバルに

挑んでもらうわ。地形は、塔を中心に半径10？。この限られた空間で、

あるサバイバルプログラムをこなしてもらう。その内容は、何でもアリアリの・・・。

巻物争奪戦よ。・・・天の書と地の書を巡って、戦ってもらうわ。

一次試験を通過したのは、全部で、26チーム。その半分に天の書を、もう半分に地の書

という風に、各チームに一巻き渡す。簡単に言うと、それを、奪い合うの。

それで、合格条件は、天地両方の巻物を持って、3人で、塔に来る事。しかも時間内に。

期限は、120時間。つまり、5日間。」

すると、ナルト曰く、‘おバカトリオ’チームが騒ぎ始めた。・・・  
が、無視。

最高、13組39名だけど、常識的に考えて、良くて10組30名  
ってとこだな。

アッコ「説明は以上。同意書3枚と巻物をそこで、交換するから。  
その後、ゲート入り口を決めて

一斉にスタートよ。最後にアドバイスを一つ。・・・・・・  
・・・死ぬな！」

同意書3枚と、天の書を交換した後に、ゲート12に移動した。どうやら、ナルトもサクラも気合いは入っているようだ。そして、時計の針が2時30分を指した瞬間。

アンコ「これより、中忍選抜試験。第二の試験を開始する！」

その合図で、オレ達は、森へ足を踏み入れた。

それから5分も経たない後の事だった。遠くの方で、悲鳴が聞こえたのは。

サクラ「今の、人の悲鳴よね。・・・なんだか、緊張してきた。」

ナルト「ちょっと、小便。」

サクラ「このお馬鹿！レディーの前で、何垂らそうとしてんのよ？！草陰行きなさいよ！」

その言葉に従ったようで、少し経つとナルトは戻ってきた。その様子に、オレはピンと来た。

『バシ！』と、思いつきり殴った。

ナルト「何すんだってばよ?!」

サスケ「本物のナルトは何処だ？」

この状況を理解できていないサクラは、戸惑っていた。

??「アンラッキー。ばれちゃ仕方ない。実力行使だ!」

と、変化を解き、真っ直ぐ向かってきた。

### 手裏剣影分身の術

は、陽動!次でとどめだ!

### 火遁・豪火球の術

作戦通り、敵は焼死体となった。その後、近くに縛られてたナルトを見つければ解いた。

そして、3人で合言葉を決めた。その瞬間に今まで感じたことのない、風が吹き3人はバラバラになった。その後、サクラと合流した。(合言葉は完璧だった。)そしてナルトにも合流した。(こちらも合言葉は完璧だった。)・・・偽者だ。そして、クナイを投げるとそれを避けた。・・・クソッ!・・・今度は、出来る奴だな。すると、そいつは変化を解き殺意剥き出しの眼差しで睨んできた。こいつの殺気・・・只者じゃない!!

大蛇丸「(へえこの殺気を食らっても、立っていられるなんて大したものね。)」

### 口寄せの術

『ドロン』と馬鹿でかい大蛇を出しやがった。こいつに、どう対応すれば良い?!

そう考えながら、全ての攻撃を避けている。・・・仕方がない。なるべく引き付けてから

火遁・豪龍火の術

で、燃えている蛇に続けて

風遁・大突破

風（酸素）を送り更に引火！！すると、計算通り、口寄せされた蛇は消えた。

大蛇丸「（やるわねえ。）流石は、うちは一族。血が騒ぎ始めたようね。ゆつくりと実力を

確かめさせてもらおうじゃないの。」

その直後から、始まった、忍具を用いた肉弾戦は、五分と五分だった。何も、馬鹿正直に、肉弾戦をやる必要は全くない。

火遁・鳳仙火の術      火遁・豪火球の術

2つの術を続けて使用した。が、敵に土遁で避けられた。すると、ナルトが飛んできた。

そのナルトは、目が充血している為か、瞳が紅く見えた。そして、危機が迫っていたのか、チャクラもかなり荒れている。しかし、それがナルトだと直ぐに分かった。

サスケ「ナルト！こいつは、かなりの強者だ！気を抜くな！」

大蛇丸「（サスケ君、良い動きね。・・・あれは確か、九尾のガキ）」

サスケ「いくぞ！ナルト！」

ナルト「ああ！！！」

オレ達2人の連携は、何の合図も無かったが全て上手く決まっていた。決定打は無いものの、確実に今は敵より優位に立っている。・・・そして、ナルトが攻めている間に、決定打とするための下準備が今、終わった。

操風車三ノ太刀

ワイヤーと手裏剣をうまく使って、敵を木に束縛した。・・・死ね！！

火遁・龍火の術

サクラ「やったあ！！！」

と、いままで何も働いてない奴が喜んだ。しかし、・・・チツ逃げられたか。でも、ラッキーな事に地の書を置いていってくれたみたいだった。これで、天地両方の巻物が揃った。

ナルト「これで、俺達合格だってばよ！」

と、いうナルトの瞳とチャクラは、通常状態に戻っていた。

サスケ「よし、少し休憩した後には塔へ向かう！」

・・・どうして、敵が集まってくるのかね。もしかしたら、前世で、周りが事件だらけだったのがこの世界にも影響してるのかもしれないな。と、思いながら遠目から監視している敵に注意を向けた。

ナルト「どうしたんだってばよ？サスケそんな怖い顔して・・・」

サスケ「ナルト。動けるか？敵だ。」

ナルト「分かったってばよ！」

サスケ「よし、お前は女を狙え。」

視点を、移して第3班。

ネジ「予定通り、このときを狙う。まず、3人に分かれて偵察に行く。ただし、他のチームを

見つけても見つけなくても、ここに戻ってくる。・・・良い

な？」

テンテン「オーケー」

ネジ「よし、散！」

そして、ターゲットの搜索を開始した。すると、間もない内にテンテンが、何かを見つけたようだ。

テンテン「あ、サスケ君！」

そう、見つけられたのはオレだった。オレを見つけたテンテンは、素早くこちらに移動してきた。

テンテン「やつほ」サスケ君。」

ちょうど良い。手伝ってもらうことにする。

サスケ「今から、そこに隠れている奴らを倒す。手伝ってくれ。」

テンテン「どうしようかなあ」

と、多分既に、協力するという、答えは出ているはずなのに・・・焦らす。ハッ！と何か閃いた表情をして、こう言った。

テンテン「倒した奴の巻物を交換条件になら、飲むわ。」

サスケ「それで良い。行くぞ。ナルト！テンテン！」

そうして、音忍討伐作戦（？）が始まった。





オレは、高速で敵の後ろへ回り込んだ。・・・ここだ！！と、腕を振り上げたら気付かれ、

#### 斬空波

をモロに食らった。・・・・フリをした。そう、今食らったのは影分身。本体は、

#### 水遁・水鮫弾の術

を発動した。これだと、避けられまい。しかし、敵は術を使ってそれを相殺した。

#### 斬空極波

ザク「はあはあ・・・」

相当、チャクラを使ったみたいだな。これで、こいつは、仕留める！

#### 水遁・水瀑布の術

これで、殺れたかは、ぶっ飛んでしまって分からないが、再起不能は、間違いない。

次は、テンテンの方へ行くか。すると、やはり既に戦闘は、始まっていた。

テンテン「やるわねえ。この女」

そう、テンテンはキン・ツチ、ナルトはドス・キヌタと戦っていた。  
サスケ「テンテン！伏せろ！」

これで、こいつも終わりだ！

土遁・土龍弾

サスケ「つと。」

終わったな。すると、いきなり後ろから抱きつかれた。

テンテン「流石、サスケ君。」

・・・こいつも、“いの化”してきたな。とか、思っているとナルトが、敵を倒して戻ってきた。

ナルト「終わったってばよ。……………」

そして、ナルトが、固まった。

ナルト「……………。ごゆっくり、どうぞ、だってばよ。」

それからというものの、誤解を解くのに時間が掛かり（特にサクラ）、夜明け前になってようやく、塔へ向けて出発する事ができた。あ、テンテンは敵の持っていた地の書を持って、愚痴りながら、さつさと、帰ったぞ。

すると、やはりというか恒例というか、敵が待ち伏せをしていた。  
・これは、幻術の中でも、狐狸心中の術 というやつだな。しかし、写輪眼を使っているオレの前では、通用しない。ここは、ナルトに任せることにしたオレは、敵本体の位置を指示し、それをナルトが、多重影分身で、フルボッコにする。という、単純明快すぎる戦略で、敵を倒した。

そしてその敵を倒してからは、他の敵に遭遇することもなく、無事、塔へ辿り着いた。扉を開くと、その中には、誰もいなかった。

ナルト「誰も、いないってばよ。」

するとサクラが、何かを見つけた。そして、何かを閃いた。

サクラ「これって、天地両方の巻物を開けば、良いんじゃないかしら？」

そう言ったかと思うと、さっさと巻物を取り出し開いた。・・・これは、口寄せの術式！

やはり、その通りだったようで、煙を発した後に、ある人物が出てきた。そして、それは、オレら3人も良く知る人物だった。

イルカ「よお・・・。久しぶりだな。」

イルカ「よお……。久しぶりだな。」

ナルト「イルカ先生！」

サクラ「どうゆうこと?!」

イルカ「苦勞したみたいだな。……皆、第二の試験、突破おめでとう。」

合格を祝って、一樂のラーメンでも、奢ってやりたい気もあるが……。」

その『ラーメン』の言葉に反応し、舞い上がるナルト。……………なるほどな。

サスケ「もし、オレらが試験の最中に巻物を見たら……、

イルカ先生はどうするつもりだったんだ？」

イルカ「察しの通りだ。この試験のルールは、お前達の確実な任務遂行能力を試すものだった。」

つまり、もし、試験中にルールに反する条件で、巻物が開かれた場合。

その目の前の受験者には、第二の試験終了時まで、気絶させるよう、命じられていた。」

サスケ「良かったな、先生。オレらが、開かなくて。もし、開いたら返り討ちに遭ってたぞ。」

イルカ「（ははは・・・こいつの場合、有り得ないから恐ろしい。）」

その後、壁に掛けてある、文（中忍の心得）の説明を聞き、奥の部屋へと通された。

その頃、塔の最上階では、ある話し合いがされていた。

中忍『アンコ様。第二の試験通過者、18名を確認。中忍試験規定により、第三の試験は、

5年ぶりに予選を開催します。・・・第二の試験、終了です。

』

三代目「とりあえず、試験はこのまま続行じゃ。まあ、あやつの動向を伺いながらじゃがな。」

アンコ「はい。」

その3日後、第二の試験、通過者が会場に集められていた。（なぜ、3日後かというと、オレ達が塔に到着したのが2日目だったからだ。）そして、その顔ぶれは、以下の通りだ。

木ノ葉：うずまきナルト、うちはサスケ、春野サクラ、日向ヒナタ、犬塚キバ、油女シノ、

山中いの、奈良シカマル、秋道チョウジ、日向ネジ、ロック・リー、テンテン。

砂：我愛羅、カンクロー、テマリ。

音（木ノ葉として受験）：薬師カブト、赤胴ヨロイ、剣スミス。

の以上、18名だった。すると、アンコが話し始めた。

アンコ「まずは、第二の試験通過おめでとう。（第二試験者数78名、残ったのは18名か。

しかも、ルーキーが半分以上も占めてる。やるわねえ……」

それにしても……結構、残ってやがるな。しかも、同期が全員通過とは……やるな。

各々、思っていることはあるのだろうが、それを一々語るのは止めておこう。でも……、26チーム中、たったの6チームしか残らなかったんだな。まあそれだけ厳しかったって事か。

そして、説明が行われた。簡潔に言つと、数が多いから予選をやる。って事と、この試験が、模擬戦争だということだった。そして、その説明は風邪っぽい月光ハヤテがした。

そして、早速、予選が始まった。

ハヤテ「えー、それでは、早速予選を開始します。これからの予選は、1対1の個人戦。

18名いるので、本戦へ行けるのは9名です。ルールは一切なしです。どちらか一方が

死ぬか、倒れるか、または、降参した場合に勝負は終了します。

えー、死にたくなければ、直ぐ負けを認めてください。ただし、勝負がついたと私が、

判断した場合。止めに入ります。そして、対戦相手は、このボードで決めさせて頂きます。

・・・・・・では、第一回戦は・・・・。」

そして、電光掲示板に表示された名前は。

ハヤテ「赤胴ヨロイvsうちはサスケですね。2名は前へ。他の者は、ギャラリーへ。」

その指示に従い、他のメンツは、ギャラリーへ行った。

ハヤテ「では、第一回戦。・・・・・・始めてください。」

ヨロイ「モルモットが・・・・。」

魔幻・地獄業火の術



・・・フンツ幻術か。それをそっくりそのまま返してやるぜ。

### 魔幻・地獄業火の術

ヨロイ「（何？！俺のした術が、何故俺に?!）」

サスケ「写輪眼・・・だよ。」

こんな奴、忍術を使うまでもない。上に蹴り上げた後、影舞葉で追尾。・・・そして！『バキ！』『ボコ！』『バシ！』の3テンポで叩き落した後、ラスト！！

サスケ「獅子連弾！！」

この体術を、使った後、リーと、ガイ先生を見ると、かなり驚いていた。まあ、蓮華の最初の動作を取り入れたからな。驚くのも、無理ないだろう。かくして、オレは、予選を通過した。

テンテン「サスケ君！お疲れ」

他に、サクラといのからも言葉を貰ったが、割愛。

大蛇丸「（素晴らしい。益々欲しくなったわ。）」

何か、悪寒が走ったのは気のせいだろうか・・・と、考えたりしている内に、第二試合が始まった。シノとチョウジか、多分シノだな。そして、数分の内に決着がついた。

ハヤテ「勝者、油女シノ！」

その後2試合の試合結果は、こうなった。

【第三試合】    カンクロウ    VS    ×剣ミスミ

【第四試合】    春野サクラ    VS    山中いの

そして、第五試合目は・・・。

テンテン「あ、私だ。行ってくるわね！サスケ君。」

そう、テンテンと砂の忍テマリに、決まった。

ネジ「砂の2人目か、面白い戦いになりそうだな。」

確かに、そうなると良いよな。

リー「テンテン！ガンバです！青春パワーです！！」

ガイ「テンテン！青春に限界は無い！！！」

上記2名は、暑苦しくて苦手だ。

ハヤテ「第五回戦、テンテン対テマリ。・・・・・・・・・・開始。」

隣の緑の獣2匹が五月蠅いのは耳を塞いで我慢しているが、試合が始まっているのに、一旦間を取った後は、全く動かない。・・・一体何考えてんだ？

テマリ「様子を見ようってんのかい？言っておくけど、私が攻撃を始めたら、

あんたは一瞬で終わる。格好つけて、こっちの出方を見ようなんて、100年速いわよ。」

・・・そうか、相手の背中に背負ってる物は、馬鹿でかい扇子か！

サスケ「おい、テンテン！相手の扇子には、気をつけろ！お前にしたら最悪の相性だぞ！」

テンテン「（了解。サスケ君）」

と、助言はしては見たものの、さっきボソツとシカマルが呟いたように、残念ながらこの試合・・・テンテンは負ける。何故なら、勝てる要因が全く無いからだ。そして・・・

忍法・カマイタチの術

で、見事にボロボロにされた。・・・見るからに痛そうだ。そして、空から落ちてきたところに扇子の柄の部分に、落とされたそれを、見たナルトが、思わず呟く。

ナルト「ひ、ひदैってばよ。」

テマリ「つまらないなあ……。本当に。」

ハヤテ「第五回戦勝者、テマリ。」

そう、コールされると、テマリは、思いっきり、テンテンを、クナイや手裏剣が転がっているところに目掛けて投げ飛ばした。このままだと……。マズイ！

そしてオレは、瞬時に瞬身の術を使って、テンテンの体が落ちる前に、受け止めた。

テマリ「……。ナイスキャッチ。」

サスケ「チツ、お前、マナー悪くねえか？」

テマリ「お前、そいつの‘これ’か？」

‘これ’と、言った時に、小指を立てた。イチイチ癢に障る奴だな。それに対して、かなり、イラっときているオレを、ガイ先生が止めに来た。その後、ガイ先生は、砂の忍び達に何か言っていたが、それを、放っておいて、オレは、テンテンを医療班に預けた。それを見届けたハヤテが、次の対戦カードを出した。

【第六回戦】 奈良シカマル VS x 薬師カブト

上記の戦いは、五分と五分の頭脳戦が展開されたが、薬師カブトの降参により、決着がついた。

そして、第七試合がコールされた。

ハヤテ「第七試合、うずまきナルト、犬塚キバ。前へ。」

その戦いは、オレ、サクラ、カカシ先生。の3人以外は、正直に、ナルトが勝つのは難しい。勝つのはキバだろうと、誰もが予想していた。が、しかし、試合が始まると、その予想を裏切る展開が待っていた。影分身を使ってその上、変化の術も使いながら惑わす。そして、常人では、考えられないほどの、多重影分身を作り出し、戦意喪失させてからの・・・？あれ、オレの使った技に似てねえか？

ナルト「う・ず・ま・き！ナルト連弾！！」

ハヤテ「勝者。うずまきナルト！」

・・・パクリやがったな。でも、まあナルトが勝って良かったじゃねえか。

## 【GW】File・29

次の第八回戦は、日向ヒナタと日向ネジの日向宗家VS日向分家の戦いとなった。思った以上に、ヒナタは頑張り、一時は、互角に思えた、いや、ヒナタが、押しているようにも見えた。しかし、写輪眼で、見ていたオレには、分かった。日向の攻撃は、ネジには全く効いていない事が。そして、柔拳使い同士の戦闘は、結局のところ、ネジの勝利で、終わった。

そして最後の第九回戦は、我愛羅VSロック・リーとなった。

その戦いは、八門遁甲の第五・杜門までを開放し、禁術・究極奥義『裏蓮華』までを発動させるといって、無茶をリーが成し遂げたが、我愛羅の『砂縛柙』砂瀑送葬』に破れ、敗退した。

そして、本戦に行くことになったのが、下記の8名だ。ついでに、予選までで、明らかになった能力や得た情報なども載せておく。

【うちはサスケ】所属・木ノ葉隠れの里

得意な術：火遁系統全般と幻術。

特筆事項：写輪眼を常時使用。

【油女シノ】所属・木ノ葉隠れの里

得意な術：寄壊蟲の術。

特筆事項：蟲使いの一族。

【カンクロウ】所属・砂隠れの里

得意な術：傀儡の術。

特筆事項：傀儡「烏」をいつも背中に背負っている。

【テマリ】所属・砂隠れの里

得意な術：カマイタチの術。

特筆事項：残忍な性格。

【奈良シカマル】所属・木ノ葉隠れの里

得意な術：影真似の術。

特筆事項：IQ200の天才。

【うずまきナルト】所属・木ノ葉隠れの里

得意な術：影分身の術。と応用。

特筆事項：九尾の人柱力。

【日向ネジ】所属・木ノ葉隠れの里

得意な術：日向流の柔拳。

特筆事項：白眼の使い手。

【我愛羅】所属・砂隠れの里

得意な術：砂縛柙、砂瀑送葬。

特筆事項：一尾の人柱力。

以上だ。

ハヤテ「これで、第三の試験、予選を全て終わります。中忍試験第三の試験、本戦進出を

決めた皆さん。おめでとございます。」

三代目「（木ノ葉5名に、砂3名か。）では、これから、本戦の説明を始める。」

その頃、裏では、不穏な動きがあったが、この時オレが、知ることは無かった。

三代目「本戦は、諸君の戦いを、皆の前で晒す事になる。各々は、各国の代表戦力として力を

遺憾なく発揮し、見せ付けて欲しい。よって、本戦は、一カ月後に開始される。

これは、相応の準備期間ということじゃ。それと、各国の代表や忍頭に予選の終了を

告げると共に、本戦への召集を掛ける為の準備期間。そして、これは、受験生の為の

準備期間でもある。この時間を無駄にすることなく、各々精進するように。以上。」

そして、その後に、くじを引き、本戦の対戦相手が、決まった。

#### 【第一回戦】

?・うずまきナルト VS 日向ネジ

?・我愛羅 VS ちはサスケ

?・カンクロウ VS 油女シノ

?・テマリ VS 奈良シカマル

#### 【準決勝】

?・?と?の勝者。

?・?と?の勝者。

#### 【決勝】



？・？と？の勝者。

そして、その後、一ヶ月間、みっちり修行をするのであった。

【DATE】No. 3

【うずまきナルト】

忍：2・8 体：2 幻：1 賢：1・2  
力：2・5 速：2・5 精：5 印：1

総合能力：

潜在能力：

運：

得意忍術：影分身の術、口寄せの術

【日向ネジ】

忍：2・5 体：3・5 幻：2 賢：2・5  
力：2・5 速：3 精：2 印：3

総合能力：

潜在能力：

運：

得意忍術：八卦掌回天、八卦六十四掌

【我愛羅】

忍：3・5 体：1 幻：2・5 賢：2・5  
力：1 速：2 精：4 印：3・5

総合能力：？

潜在能力：？

運：？

得意忍術：砂縛柩

### 【うちはサスケ】

忍：4・5 体：3・2 幻：4・5 賢：5  
力：3 速：4・7 精：3・3 印：4・5

総合能力：

潜在能力：

運：

得意忍術：火遁系忍術、幻術、千鳥

### 【カンクロウ】

忍：3・5 体：1・5 幻：1・5 賢：2  
力：2・5 速：2 精：2・5 印：3・5

総合能力：？

潜在能力：？

運：？

得意忍術：傀儡の術

【油女シノ】

忍：3 . 5 体：1 . 5 幻：2 賢：3  
力：1 . 5 速：1 . 5 精：2 印：2

総合能力：

潜在能力：

運：

得意忍術：寄壊蟲の術

【テマリ】

忍：3 体：2 . 5 幻：1 . 5 賢：2 . 5  
力：3 速：2 . 5 精：2 印：2

総合能力：？

潜在能力：？

運：？

得意忍術：忍法・カマイタチの術

【奈良シカマル】

忍：2・5  
力：1・5  
速：2  
精：1・5  
印：2・5  
賢：5

総合能力：

潜在能力：

運：

得意忍術：影真似の術

一カ月後の本選会場には、勝ち残った8人が揃っていた。

ゲンマ「お前ら、シャんと胸を張って、客に顔見せしとけ。今日の主役は、お前らだ。」

すると、火影様の声が会場内に響き渡った。

三代目「えゝ皆様、この度は、木ノ葉隠れ中忍選抜試験にお集まりいただき、

誠にありがとうございます。これより、予選を通過した、8名により、本選試合を

始めたいと思います。どうぞ、最後まで、ご覧ください。」

火影様が、話し終わると、試験官のゲンマが口を開いた。

ゲンマ「試合前に、ちょっとした確認だ。地形は違うが、予選と同じで、

ルールは一切無しつてのが、ルールだ。勝負は、どちらか一方が、死ぬか、

負けと認めるまでだ。ただし、オレが、決着がついたと判断したら、そこで、

試合は止める。反論は、許さない。わかったな。

それじゃあ、一回戦は、うずまきナルト。日向ネジ。その2人だけを残して、

他は、控え室まで下がれ。」

その言葉に従い、オレらは、ナルトとネジを置いて、待機場所へ移動した。

正直な、オレの分析によると、ナルトには、少々キツイ結果が出ている。でも、望みが全く無いわけじゃない。何たって、ナルトのチャクラ量は、オレやカカシ先生の量を優に超してやがる。それに、あいつは、ツキというか、何というか・・・運がめっちゃ良い。お、試合が、始まったようだ。

最初は、接近戦か・・・、馬鹿だろ。・・・ほら、柔拳だ。あ、避けたな。そして、ナルトの十八番、影分身の術・・・か。しかし、それも消された。ちよつとは、考えろよ！そして、懲りずに多重影分身か。あゝあ、そうやって困んだら、あの技をやられるに決まってるだろ?! ほら、来た。八卦掌回天だ。オレもあの技で、火遁・豪龍火の術を避けられたからな。ナルトの影分身なんか、朝飯前だろ。そして、ネジが、見たことも無い、構えをとった。

#### 柔拳法・八卦六十四掌

ネジ「八卦二掌！四掌！八掌！十六掌！三十二掌！六十四掌！」

何?! オレには、チャクラの点穴は、見えないが、確実に狙っている!! これで、ナルトは、チャクラを練ることが、出来ないな。ここまでか。・・・と、思ったら、ナルトのチャクラが、前の中忍試験第二の試験の時、クソ強え蛇使いの草忍と、戦った時みたく、荒く荒れ始め、瞳の色も、蒼から紅へと変わった。・・・こうなったら、ナルトの勝ちだな。どういうカラクリかは、わからねえが、この状態のナルトを止める事は、今のネジには出来ない。

やはり、その予想通り、その後、ゴタゴタはあったものの、結果は、ナルトの勝利で、終わった。

そして・・・次が・・・、このオレだ。





そして、オレは瞬身の術で、舞い降り、『スタート』の掛け声を待った。

ゲンマ「……………始め。」

オレは、高速移動を使いながら、相手を翻弄させた。でも、砂が邪魔し、しっかりとした攻撃が、当たったのは、7発目の時だった。すると、当たった顔面が、ボロボロになった。これが、砂の鎧か。この砂も、オレが考えるに、土遁に近い性質で、土遁が、苦手とする、性質は、雷遁。この間までは、そんな術を持っていなかったが、今のオレは違う！

オレは、奥の手を取っておきながら、高速移動と影分身を使いながら、相手の隙……いや、砂の隙を狙って攻撃を放つ。

オレの攻撃を大分、食らった我愛羅は、何を思ったのか、砂の殻に閉じ籠ってしまった。

こうなったら、面倒くせえが、その殻を、割るまでだ！

水遁・水龍弾の術

チツ……駄目か。仕方ない、新術で、決めてやる！

そして、オレは、かなり間をとって、ある術を発動させた。

ガイ「まさか、あれは?!」

カカシ「俺が、サスケの修行に付き合ったのは、俺と似たタイプだったからだ。」

ガイ「そうか・・・、だから、体術ばかりを鍛え、スピードを上げたのか。」

カカシ「そゆこと。」

サクラ「チャクラが、目に見える。一体どうなってるの?！」

ガイ「（これが、うちは一族の血なのか?!）」

ナルト「何だつてばよ?あの音はよお?!」

ガイ「ただの突きだ。・・・しかし、木ノ葉一の技師。コピー忍者カカシ、唯一の

オリジナル技。暗殺用にとっておきの技だ。その極意は、突きのスピード。

そして、強大なチャクラに耐えうる肉体活性だ。膨大なチャクラと突きでの一点集中。

更には、そのスピードも相俟って、千羽の鳥の共鳴音のような独特の攻撃音を奏でる。

・・・よって、この技はこう呼ばれる。」

食らえ!!

千鳥

そして、クソ硬かった、絶対防御と言う名の盾を貫いた。でも、ターゲットには腕が、届かないようだかな。でも、・・・・・・そして、ここからはオレのアレンジだ。

千鳥流し

砂の殻の中で、数秒間の悲鳴が轟いた後に、砂が、パラパラと地面に落ちていった。

カンクロウ「嘘だろ。我愛羅の絶対防御が、破られるなんて。」

テマリ「……………ありえない。」

バキ「…………まさか?!」

…………ふう。終わったな。殺しはしていないが、何ヶ月かは寝たきりになるだろう。何たって、感電させたのだから。その様子を見ていた、試験官が、宣言した。

ゲンマ「勝者。うちはサスケ。」

と。これで、準決勝は、オレとナルトで、決まりだな。

ガイ「千鳥・・・つまり、雷切。」

サクラ「雷切？」

ガイ「雷切は、あの術で、雷を切った。という、事実由来して、付いた異名だ。その本来の

術名は、千鳥。人類の限界とも言うべき、突きのスピードと、その腕に集約された、

チャクラ。そして、その腕はまるで、切れぬ物の無い、名刀の一振りと化す。

・・・しかし、何て無茶な技を・・・。」

カカシ「お前が言うなよ。」

やはり、その名刀を超えた、アレンジまでは、見破れなかったか。まあ、仕方ない、砂で、中までは見られなかったからな。

そして、次の試合は、何故か、カンクロウが、棄権した事により、不戦敗となり、必然的に、勝者は、シノとなった。

そして、今はその次の第四試合、奈良シカマル対テマリを、行っている。

シカマルの奴、頭は良いけど、面倒くさがりだからな、そこだけが心配な面だ。

しかし、オレの心配を裏切って、良い勝負をしているみたいだ。奴は全下忍、中忍をひっくるめた中でも、頭脳だけで見ると多分トップだからな。

そして、陽動などを取り入れ、ようやく、影真似の術を成功させ、誰もがシカマルの勝利を確信したときだった。爆発が、起こったのは。そして、煙が、モクモクと上がり始めた。

ゲンマ「悪いが、中忍試験は、ここまでだ。各自、担当上忍の所へ行き、指示を仰げ。」

控え室のところで、その指示を聞いたオレは、すぐさま、カカシ先生のところへ、飛んで行った。

すると、そこには、寝ているナルトと、寝たふりをしているシカマル、起きて蹲っているサクラがいた。

カカシ「ナルトとシカマルをを起こせ、久々の任務だ。心して掛かれよ、波の国以来の

・・・Aランク任務だからな。」

サクラ「この状況で、Aランクの任務?!」

サスケ「さっき、どこかへ消えた、砂の3人の追跡か!」

カカシ「そうだ。そして・・・」

#### 口寄せの術

カカシ「このパッくんについて行ってくれ。」

そして、サクラは、ナルトの幻術を解き、オレは、シカマルを叩き起こした。

カカシ<sup>一</sup>では、お前達4人に、任務を言い渡す。聞き次第、今の戦闘で、ガイが空けた

穴から行け。砂の下忍3名を追跡して、何か、不穏な動きがあったら止める。

我愛羅<sup>二</sup>つて子は、サスケの攻撃で、かなりの深手を負っているはずだ。

そう、遠くには行っていない。・・・さあ、早く行け。」

そして、オレ達は、まだ理解をし切れていない、ナルトを引つ張って、砂の忍びの追跡を開始した。そして、そのやり取りを傍から隠れて聞いていた、シノが、急に動き出した・・・。

そして、火影様が大蛇丸との戦闘を始めた頃。

ようやく、ナルトはこの状況を飲めたようだ。そして、追っ手もやって来たか。それに、パッくんも気が付いたようだった。

パッくん「もつと、スピードを上げろ！追っ手が来た。」

シカマル「もう追っ手が来たのかよ。めんどくせえ」

パッくん「2小隊8人いや、もう1人いるな。全部で、9名だ。ま  
ずいな、どんどん距離を

縮めて来ているな。」

それは、確かにマズイ状況だ。すると、サクラが「待ち伏せ」を提案した。しかし、シカマルがこう、反論した。

シカマル「待ち伏せ成功の必須条件は、敵の位置を正確に突く事。そして、優位な場所に

潜伏する事の2点。敵の位置を正確に突く事は、忍犬の鼻と、サスケの写輪眼でOK

だが、優位な場所に潜伏するのは、一見、俺等にも出来るようにも、思えるが、

相手は、大蛇丸の部下だ。大蛇丸と言ったら、昔、木ノ葉にいたこともあるんだ。

奴の部下じゃあ、その手は効かない。きっと、木ノ葉の地形を教え込まれて、

この戦いの為に模擬練習を重ねてきたはずだ。おまけに、

当然、追跡術をマスターした

忍者ばかりだろうからな。そして、敵さんは、この戦いの為だけに編成された特別部隊。

ところが、こっちは、馬鹿1人に、何の取り得も無い、くノ一が1人と、犬1匹。

まあ、サスケは、甘く見て上忍1人分と考えても、残るは・・・、

逃げ腰ナンバーワンの俺だぜ。そこでだ、今の俺達に、出来ることは、ただ一つ。

待ち伏せに見せかけた、陽動だ。一人が残り、待ち伏せに見せかけて、足止めをする。

・・・つまり、囷ってな訳だ。足止めを食らわせることが出来りゃ、残りの4人の

位置は、掴めなくなる。ただ、そうすりゃあ、追跡は、負けるが、多分、

囷になった奴は、・・・死ぬ。」

その言葉を、言い放った後、空気が固まった。

シカマル「で？誰がやる。・・・犬さんは、砂の奴らを追うのに必要だ。と、すると。」

サスケ「わかった、ここは、オレが」

その言葉を、遮ったのはシカマルだった。

シカマル「俺がやるしかねえか。」

サクラ「（シカマル?!）」



ナルト「何でお前が?!」

シカマル「全滅するより、マシだろ。」

サスケ「馬鹿言うな、オレなら、火遁・獄龍炎の術で、倒せる可能性が、あるかもしれないが、

お前に、そんな術持ってねえだろ?!」

シカマル「いや、俺には、影真似がある。それで、奴らの追跡を食い止める。それにだ、

最悪の場合、我愛羅が暴走したときに、止めれるのは、お前だけだろ。サスケ。

ほら、行けよ。」

もう、反論は、許さないと言った、表情と目で、オレらを先に行かせた。

その後、暫くして、追っ手の動きが止まった。そして、オレらは、シカマルに感謝しながら、スピードを上げると、視界に何かを捕らえた。待ち伏せか?! いや、違う。こいつは、罔だ。

カンクロウ「俺が、お前らの相手をしてやるじゃん。」

すると、もう1人、視界に現れた。

ナルト「シノ!」

シノ「お前の相手は、俺だ。なぜなら、さっきの試合が、まだ、終わっていないからだ。

先へ行け。ナルト、サスケ。こいつは、俺がやる。」

サスケ「そうか、・・・なら頼んだぞ。」

そう言って、オレ達は、また我愛羅とテマリの追跡を再開した。それから、10分ほど、追いかけた後に、我愛羅とテマリを視界に捕らえた。

テマリ「我愛羅。動けるか? お前は、もう少し先へ、逃げる。私が、足止めをしておく。」

その言葉に、珍しく我愛羅は、従い、視界から消えてしまった。

サスケ「ナルト、サクラ。先へ行け。オレは、直ぐに片付けて、写

輪眼で、見つけてやる。」

ナルト「分かったってばよ。」

と、言つて2人と1匹が、また、追跡を続行させた。

それにしても、千鳥流しで、もう何ヶ月かは、動けないと思つていたが、もう、動けるとは……。化け物並みの回復力だな。

テマリ「お前、結構、私好みの顔してるわね。食らえ!!」

忍法・カマイタチの術

と、いきなり仕掛けてきやがつた。まあ、避けれたが。

テマリ「（相手は、うちは。こっちのチャクラは、もう残り少ないつてのに。それに、

写輪眼も使われている。分が悪すぎるな。ここは、何としても、あいつに大量の

チャクラを使わせないと……。）」

サスケ「オレに大量のチャクラを使わせないと……。ってか？」

テマリ「（何！？こいつ、読心術でも、持つてるのか?!）」

分かりやすい表情してやがる。誰かさんの言葉を借りると、浮気したらばれるタイプだな。

サスケ「安心しろ。オレは、女とオレより下の子供は殺さない。」

忍法・風砂塵

チツ・・・厄介だな。

火遁・鳳仙火の術

相殺完了。面倒だから気絶していてもらう事にする。

魔幻・奈落見の術

数秒後、森に悲鳴が、響いた。

テマリ「なんてな、こんな下忍レベルの術で、私を倒そうとでも、思ったのか？」

やっぱ、駄目か。では、次は、寝てもらう。

涅槃精舎の術

これは、超高等忍術の一つ。これは、幻術で、鳥の白い羽を降らせ、深い眠りの世界へと誘う術だ。

よし、今度は、幻術返しも出来ないみたいだな。

それを、チャクラの流れで確認し、ナルト達を追いかけた。

物凄い爆発と、爆発音が聞こえた。そして追いつくと、そこには、何千ものナルトがいた。多重影分身の術を発動させていた。そう、戦闘は、既に始まっていた。

サスケ「でも、さっきの爆発音は何だったんだ？」

パッコン「木ノ葉隠れ秘伝体術奥義・千年殺し・・・だ。起爆札付きのクナイでな。」

なるほど、それで、ナルトの方が、優勢なのか。

ナルト「ここからが、うずまきナルト忍法帖の始まりだぜ!!」

ゴタゴタ言っていないで、さっさとやれ。と、思ったのはオレだけじゃないはずだ。

ナルト「よっしゃああ!!皆!行くぞおお!!!!」

四方八方手裏剣の巻!!

ナルト「う!!!!ず!!!!ま!!!!き!!!!」

ナルト二千連弾!!!!!!

ただ、化け物みたいな外見の我愛羅をタコ殴りにしているだけだろ。・・・まあ、数が多いのは認めるけど。よって、迫力とイン

パクトは絶大だ。

ナルト「の巻！！次は、四千連弾！！行つくぞお！！！」

と、言ってもう一度、殴りに掛かったその時だった。我愛羅（外見化け物）が巨大化したのは。

サスケ「何だあれは！？」

パッコン「守鶴と呼ばれる一尾の尾獣だ。」

### 口寄せの術

と、ナルトが術を発動させると、こつちも馬鹿でかい蝦蟇を出しやがった。

何時の間に、あんな術を……。すると間も無く、馬鹿でかい化け物同士の戦いが始まった。すこし、動いただけでも地震のように大地は揺れ、大気が揺れた。

そして、今気が付いたが、サクラが砂の手に捕まって、木に押さえ込まれている。オレは、その砂の手に、千鳥を流し込み、無効化させた後に、その化け物同士の危険すぎる戦闘区域から、気絶したサクラを抱えて離脱した。

その数時間後には、侵攻してきた、敵の忍び全てが、引き返していた。

そして、この戦闘及び戦争『木ノ葉崩し』は終結し、その全貌が明らかとなったから、説明しよう。

まず、首謀者であったのは、伝説の三忍の一人である大蛇丸。そし

て、こいつは、三代目火影様との戦闘で、封印術・屍鬼封尽という禁術により、火影様の命と引き換えにこいつも封印、事実上は死んだ。そして、大蛇丸の直属の部下達である音忍は、敗走。そして、裏で、大蛇丸に操られていた砂隠れの里とは、終戦し、残っていた全軍は、撤退。里の東側に出た、馬鹿でかい蛇も、こちらも、三忍のひとりである、自来也によって、討伐された。こうして、大蛇丸の大いなる野望『木ノ葉崩し』は、多くの犠牲を出しながらも、咲くことなく散って行ったのであった。

木ノ葉に、平和が戻ってからの、ある日の事。

オレは、カカシ先生との、待ち合わせがあったが、オレとシカマルは、火影様の部屋に呼ばれていた。もちろん、火影様にはない。里の上層部、もっと、細かく言くと、ご意見番の水戸門ホムラとうたたねコハルに呼ばれたのだ。しかし、そこには、誰も居なかった。すると、突然、今まで黙っていた、シカマルが、オレに話しかけてきた。

シカマル「なあ、サスケ。俺達何で、呼ばれたか、検討付くか？」

サスケ「いや、全然。全く。身に覚えがない。」

と、否定した。すると、シカマルが、

シカマル「だよなあ。まず、俺とお前が組むって言うことは、まず無いし、もし、この間の

Aランクの追跡任務の事だとしたら、とっくに聞かれている筈だしな。」

と、これからの事を予測していたら、オレ達を呼び出した、張本人達が、入ってきた。

すると、前置きも無く、顔を見るなり、いきなり本題を言った。

ホムラ「うちはサスケ、奈良シカマル。お前達は、今日から中忍として、任務を遂行してくれ。」



そう言う、コハルが、木ノ葉の中忍以上の奴が、着る物をオレ達に、手渡した。

オレ達が、中忍になった理由は、三つ。まず、一つ目が、中忍選抜試験の本選時に総合的な動きが、良かった事。二つ目が、里の国力が、低下している為、下忍としての人員を割くより、中忍として、任務に当たってもらうほうが、里として、良かった為。三つ目は、二つ目に言った、中忍として、任務に当たっても、当たり障りが無い。という理由だった。

そして、用件を済ませたオレらは、今貰った、防護服(?)を早速着て、その部屋から出て来た。その後、シカマルと別れて、カカシ先生と、待ち合わせ場所としていた、団子屋の前まで、瞬身の術で向かった。すると、そこには、珍しく、カカシ先生が既に、待っていた。そして、アスマ先生と、紅先生も何故か、集まっていた。

カカシ「お、来たな。」

サスケ「先生が、オレを待つなんて明日は、豪雨かな。それにしても、何で他の先生たちも……。」

そう言う、カカシ先生がアイコンタクトをし、アスマ先生と、紅先生が頷き消えていった。確かに、団子屋内に、妙なチャクラの流れが、確認できたが……。まあ、先生との用件が終わったら、行ってみるか。と、その時は、軽く考えていた。それが、木ノ葉に居るはずの無い人物と会うことになるとは知らずに……。

その後、先生に中忍になったことを告げ(これは、先生も知っていたが。というよりは、それが目的で呼んだらしい)、店を出ると、先生が急いで何処かへ消えた。

オレもそれについて行こうと微量ながらチャクラの足跡を辿ってい

く  
の  
だ  
っ  
た  
・  
・  
・  
。

時はほんの少し、巻き戻しアスマと紅が、黒地に赤雲の模様が描かれた外套のようなものと笠を装束としている二人組と、対峙しているところ。

アスマ「お前ら、里の者じゃないな。一体何しに来た？」

すると・・・

???「お久しぶりです。アスマさん、紅さん。」

そう言って、その瞳を見せた。すると、アスマと紅の表情が驚きに変わる。そして、笠をとった。

アスマ「お前は・・・うちはイタチ。」

??「イタチさんのお知り合いですか？なら、私も自己紹介をさせていただきますましょう。」

干柿鬼鮫・・・以後、お見知りを。」

アスマが、切り返した。

アスマ「以後なんてもんはねえよ。お前らは、今から俺が取っちめる！」

すると、今まで黙っていた、紅も話し始める。

紅「あなたも知っているわ。干柿鬼鮫。元霧隠れの忍で、大名殺し、国家破壊工作等の容疑で

水の国より各国へ指名手配中の抜け忍。」

イタチ「アスマさん、紅さん。オレに関わらないでください。あなた達を殺すつもりは無い。」

アスマ「同胞殺しのお前が言うセリフじゃないな。目的は何だ？」

イライラの積もっていた、鬼鮫が、大剣を地面に叩き付けた。

鬼鮫「結構、五月蠅いですねえ、この方。殺しますか？」

イタチ「素直に里から出られそうにも無いな。だが、やりすぎるな。お前の技は目立ちすぎる。」

その言葉を聞いた、鬼鮫が不気味に笑ってこう呟いた。

鬼鮫「決まりですねえ。」

その瞬間に、大剣を片手で軽々と振り回した。その大剣をアスマが止めた。その隙に、紅が幻術を掛ける。

#### 魔幻・樹縛殺

イタチ「これは・・・幻術。」

写輪眼で、見切られた後、その術をそっくりそのまま返された。

イタチ「オレに、その程度の幻術は効かない。」

紅「（そんな・・・幻術返し?!）」

何とか、幻術を見切った後、蹴っ飛ばされて、川へ飛んでいった。  
また。

その様子をアスマが、横目で見て

アスマ「紅!!」

と叫ぶが、

鬼鮫「よそ見している暇は、無いですよ。」

図星にされた。

イタチ「流石、紅さん。でも、」

すると、今まで居なかった、人物の音がイタチの後ろで、聞こえた。

カカシ「でも、ま、ここまでだよ。・・・お前がな。」

そして、川の外、つまり川沿いの道では、アスマと鬼鮫が戦闘をしていた。そして、アスマのチャクラ刀が、鬼鮫の顔を掠め、切り傷ができた。

そして、ちょうど、その時オレが、到着した。

鬼鮫が印を結んでいる。ああ、・・・確かこの印は。瞬時にコピーした。

水遁・水鮫弾の術

水遁・水鮫弾の術

術を瞬時にコピーして、相殺させた。

鬼鮫「（何？！私と同じ術！）」

アスマ「何で、お前まで出て来るんだよ？カカシ。」

やれやれといった感じで言い、振り向いて、オレを見て驚いた。

アスマ「サスケ！？」

その声に、紅先生とカカシ先生の視線も突き刺さる。そして、怒号が聞こえてくる。

カカシ「何やってんだ！サスケ！お前は、さつさと逃げろ！」

サスケ「逃げるのだとしたら、先生。あなた達の方だ。それに、オレが居ても、足手纏いには

ならない筈。・・・いや、逆に戦力だ。」

その様子を見ていた、鬼鮫が

鬼鮫「ほお、これは驚いた。道理で私の忍術が、コピーされる訳だ。本当に、イタチさん以外で、

その目を持っている人が、いたんですね。削り甲斐がある。」

イタチ「鬼鮫………そいつは、オレの弟だ。」

その言葉に、振り上げていた大剣をゆっくりと下ろす鬼鮫。

サスケ「兄貴とは、オレがやる。……兄貴の手の内はオレが、よく知っている。」

イタチ「言うようになったな、サスケ。でも、」

そして、何かを言いかけた時に、オレは、瞬時にイタチの後ろに回った。

イタチ「なるほど、スピードだけで見れば、中忍……いや、上忍レベルか。……だが、

お前には、オレを、殺せない。」

サスケ「当たり前だ。オレは、兄貴を殺しに来た訳じゃない。ただ、あの日の真実を……

聞きに來ただけだ。それに、兄貴も戦いに來た訳じゃないのは、知っている。

……そこで、取引だ。」

オレが言った、「取引」という言葉に、全員の耳が、オレの言葉に集中する。

サスケ「オレ達が、お前らを見逃す代わりに、兄貴は、あの日の真実を吐く。」

イタチ「確かに、見逃してくれるというのは、良い条件ではある。・



・が、NOだ。」

そう言った瞬間に、水遁・水牙弾を発動させてきた。

水遁・水陣壁

イタチ「避けたか。」

その言葉で、こっちは水分身を出し、水に潜って、水遁・水陣壁を解いた。

イタチ「流石、我が弟。」

と言うと、水分身をイタチの影分身がクナイで刺した。

紅「（影分身？術スピードが、速すぎる！）」

すると、影分身が爆発した。これはオレが、リーと戦った時に使った、分身大爆破。何時の間にか、傍にいた力カシ先生が、紅先生を連れ避けたみたいだ。よし、今だ。

千鳥流し

水中でイタチに向けて千鳥を流した。この術のスピードなら、避けることは、出来まい。それに、このままだと、水牢の術を食らいそうだしな。そう思って、千鳥流しを発動後、直ぐに水中から出てきた。

千鳥流し

避けれるはずが無い。と、思った。

イタチ「（術のキレは、良いが。まだまだだな。）」

避けられた！そして、オレは、水面に着水した。

アスマ「（うちは一族・・・恐るべし。）」

紅「（まさか、サスケが、ここまで強いなんて・・・。幻術以外なら負けてるかも。）」

イタチ「サスケ、写輪眼の使い方、マスターしたようだな。カカシさんも流石ですね。」

でも、写輪眼に合う、うちは一族の体ではない。」

兄貴は、既に、カカシ先生の欠点を見抜いているらしい。

イタチ「うちは一族が、何故最強と謳われ、畏れられたか。・・・  
・・・写輪眼という

血継限界の本当の力を見せてやろう。」

まずい！！

カカシ「皆！奴の目を見るな！」

と、言われるが、オレと、先生の左目は見ている。

カカシ「絶対に目を開けるな。今の奴と目が合うと、終わりだ。・・・あれと、

遣り合えるのは、恐らく。」

サスケ「写輪眼を持つ者だけだ。」

イタチ「確かに、写輪眼を持つてすれば、この万華鏡写輪眼に多少の抵抗は出来る。しかし、

この特別な写輪眼の瞳術。幻術・月読は、破れない。オレを、倒せるのは、

同じ血継限界を持つ、写輪眼使いだけだ。」

そして、次の瞬間には、オレとカカシ先生は、月読の世界へいた。

イタチ『月読の世界では、空間も時間も質量も、全てオレが支配する。』

それから、現実世界では一瞬。しかし、精神的には、72時間突き刺されるといふ、拷問が、始まった。

イタチ『幻と思って、タカを括らない方が良い。この苦痛は、幻ではない。この苦痛は、

現実のそれと、全く変わらない。いつまで、お前の精神が、持つか・・・。

試させてもらおう。あと、71時間59分59秒99。』

そして、その72時間は、途轍も途方なく、長く苦しい時間となっ

た。そして、現実世界に意識が、戻ったとき、オレは、安堵と膨大なる疲れによって気を失った。

紅「サスケ?!」

咄嗟に、紅先生が、水中に沈みかけている、オレを（目を開かずに）抱きとめた。ここからは、オレの意識が無い間に起きた、出来事である。

紅「どういう事?! カカシ!」

アスマ「まだ、目を閉じてると言っのか!?!」

『バシャン』と水の音を立てて、カカシが、体制を崩した。

カカシ「はあはあ・・・まだ、だ。」

アスマ「奴が、喋り終わった途端、急にサスケは気を失うし、お前は、倒れるし。

一体どうなってんだ?!」

カカシ「（あの世界の3日間は、現実世界での、ほんの一瞬にも満たないと言っ訳か。

なら、何故殺さない? その気になれば、簡単に・・・。）

」

すると、高速で、鬼鯨がやって来た。

鬼鮫「ほお・・・あの術を食らって、精神崩壊を起こさないとは。でも、まあそちらの

イタチさんの弟さんは、精神崩壊を起こしてしまっているようです・・・。」

イタチ「いや、アイツは、精神崩壊を起こしたのではない。精神的に疲れて、一時的に

気を失っているだけだ。」

鬼鮫「ほう。イタチさんの弟さんも中々やりますねえ。流石は、イタチさんの弟とでも、

言っておきましょうか。でも、イタチさん。その目を使い過ぎるのは、貴方にとっても

危険。あまり、酷使しない方が・・・。」

すると、「はあはあ」息を乱した。カカシが、口を開いた。

カカシ「狙いは、ナルトの中の九尾か。お前らの所属している、組織名は、曉だったか？」

その言葉に、敏感に反応し、顔色を変えた。

イタチ「鬼鮫。カカシさんを連れて行く。その他の方には、消えてもらおう。」

その言葉で、鬼鮫が動いたときだった。あの男が、飛んできたのは。

ガイ「木ノ葉剛力旋風!!」

完璧に油断をしていた、鬼鯨にクリーンヒットした。

鬼鯨「何者です?」

『キラーン』という効果音を付けたいくらいに輝く歯を見せながら言った。

ガイ「木ノ葉の気高き蒼い猛獣。マイト・ガイ。」

鬼鯨「なんて格好だ。珍獣の間違いでは?」

それに対して、冷静に突っ込む鬼鯨。しかし、イタチに念を押される。

ガイ「(やはり・・・イタチ!)」

すると、ガイの登場に気が緩んだのか、カカシも気を失った。そのカカシを、しっかりと沈み切る前にガイが、受け止めた。

ガイ「カカシをよくもここまで・・・。」

アスマ「イタチと目を合わせるな。ガイ!」

ガイ「大丈夫だ。目と目を合わせなければ、問題は無い。さあ、お前らも、目を開け。」

その言葉に、従い2人とも目を開いた。

紅「確かに、言われて見ればそうかもしれないけど。」

ガイ「良いか？足だけをよく見て行動するんだ。難しい話だが、今はやるしかない。」

紅は、カカシとサスケを医療班のところへ連れて行ってくれ。アスマは、俺の援護だ。」

アスマ「よし。」

と、2人とも頷いた。

ガイ「後は、俺が手配した、暗部の増援部隊が来るまで、少し間、相手をしてやる。」

鬼鮫「面白い。良い度胸ですね。」

と、やる気になっていた鬼鮫にストップを掛けたのは、イタチだった。

イタチ「鬼鮫、止めだ。オレ達は、戦争をしに来たのではない。残念だが、これ以上の戦いは

ナンセンスだ。帰るぞ。」

鬼鮫「折角、疼いてきたところなのに・・・、仕方ありませんね。」

そう言つと、一瞬の内に消えていった。

ガイ「逃がしたか。まあいい。俺達も帰るぞ。カカシ持つぞ。」

そう言って、ガイがカカシを抱えた。

アスマ「紅。サスケは、」

その言葉を遮るようにして

紅「結構よ、サスケは、私が・・・」

そして、病院へ向かった。



ガイ「奴らの様子じゃあ、ナルトはまだ、見つからないみたいだな。」

アスマ「それなんだが、おかしくねえか？アイツらは、既に木ノ葉に入り込んでいた。

この里で、ナルトを見つけるなんて、造作も無いことだ。

イタチはナルトの顔を

知っているんだぜ？」

すると、ハッと何かに気が付いたように話し始めた。

紅「そうよ！と言うことは、今、里内には、ナルトはいないと言う事になるわ！」

ガイ「それは大変だ。俺は今からナルトを探しに行く！アスマは、里の上層部に

報告しに行ってくれ。紅は、引き続きカカシとサスケを頼んだぞ。」

紅「ええ」

そう返事を聞くと、ガイとアスマは、飛んでいった。

紅「（サスケ・・・）」

眠っているサスケを心配顔で、見つめる紅と、気を失っているカカ

シ、サスケの3人が、その病室に残された・・・。

そして、その翌日、オレは、目を覚ました。そして、下半身の方に、妙に重みを感じた。それが、気になり、上半身を軽く起こし見てみると・・・そこには、何故か紅先生の寝顔が、こっち向きであった。

サスケ「紅・・・先生？」

ふと、疑問に思ったが、昨日イタチと戦い、幻術・月読を食らって、気絶した事を思い出し、それで看病してくれていたのか。と、解釈し、それなら、まだ、疲れているだろうと思い、起こさずにすることにした。

横を見ると、やはり、オレと同じ様に、幻術・月読を食らった、カシ先生が、寝込んでいた。

それから数分後、オレが、起きた気配に気が付いたのか、紅先生が目を覚ました。その様子を、見てみると、紅先生と目が合った。すると、紅先生が、急に赤くなって、気まずい空気が流れた。

・・・どうしよう。と、考えていると、タイミングが良いのか、悪いのか、ちょうどテンテンが病室に入ってきた。

テンテン「やつほーサスケ君。何か、入院してるって聞いたから、お見舞いに来ただけど・・・。

大丈夫だったかな？」

そう言い終わったか、終わってないか、くらいの時に、サクラというのが、同時に入ってきた。どうやら、こちらの2人も、オレのお見舞いに来てくれたらしい。もっとも、サクラは、カシ先生の事も一緒にだったが、それにしても、もっと静かにしてられないもの

なのだろうか？サクラといのは、五月蠅くて適わない。そう思っていたら、数分も、しない内に、看護師達によって連れ出されていた。

テンテン「ところで、サスケ君。今、里中で話題に、なってるんだけど、あの、うちはイタチが

帰って来たってホントなの！？」

サスケ「ああ本当だよ。だから、オレがこんな所にいる。」

すると、テンテンが驚く。

テンテン「まさか、うちはイタチとやり合ったの?!よく、生きていられたわね。」

サスケ「兄貴の弱点は、知ってるつもりだったんだけどな。・・・  
返り討ちにされちゃった。」

ハハハ・・・と、力無く笑って見せた。

テンテン「何言ってるのよ?サスケ君が、生きてるだけで、私は、  
良いわよ。」

・・・なぐんてね!ちよつとは、元気出た  
?じゃあ、私は、これで

帰るから。ちゃんと、休みなさいよ!」

そう言って、部屋を出て行った。

全く、こいつは、お見舞いに来たのか、からかいに来たのか、どっちかにしろ!ってんだ。

と、心の中で、愚痴(?)を吐いた、オレだった。

そして、ベッドから、降りた時、紅先生に止められた。

紅「サスケ。何処へ行くの?あなたは、あの幻術を食らったのよ?  
悪いことは言わないから、

まだ、寝ていなさい。」

と、かなり、心配オーラで、言われたので、オレはもう、大丈夫だということ、丁寧に伝えた。

サスケ「オレは、もう大丈夫だ。カカシ先生とは、違ってオレは、純粋な写輪眼の継承者だ。」

あの術のリスクも、先生よりは、少ない。

それに、兄貴に今度会ったときには、少なくとも負けないようになっておかなきゃ

ならないしな。だから、今から、うちは一族の禁術を、会得しに行く。」

後半の言葉に、驚きの表情を露にした紅先生。

サスケ「ていうのは、冗談で、・・・紅先生。ちょっと、頼みたいことがある。」

オレに、先生の得意な幻術。教えてくれないか？」

その言葉に、戸惑いの表情をする、紅先生。

サスケ「ダメか？」

という、オレの押しに負けて、やっと教えてもらえる事になった。

とは、言っても、先生が、オレに幻術を掛けて、それをオレが、写輪眼でコピーして、会得する。という、流れ作業的な感じなのだが、

・・・あ、そうそう、常に、写輪眼を使っているオレだが、気を失ってからは、まだ、写輪眼を発動させていない為、今は、最近では、珍しい、うちは一族の伝統である黒い瞳だった。

そして、病院の屋上へ紅先生と2人で、行き。早速だったが、術の会得を始めた。

それから時間は経ち、さっきは、朝だったのが、今は、夕方になった頃。

魔幻・樹縛殺、魔幻・桜花葬祭、幻術秘術・闇？

その後、上記3つの術を会得はした。が、3つ目の術を使いこなすには、まだまだ修行が足りず、実践で、使うのは、まだまだ先のことになりそうだった。しかし、それを既に使える紅先生は、やはり凄い幻術使いだと言う事を、改めて実感させられた。

あれから、一週間と少しが経った頃。オレは、紅先生と修行をした翌日の朝に退院した。しかし、カカシ先生は、まだ肉体的疲労、精神的疲労（半精神崩壊）が癒されていない、今も尚、入院しているが、ナルトが連れてきた、五代目・火影様によって、だいぶ良くなり、もう少して、退院ができるらしい。

その五代目・火影様はその翌日に、木ノ葉の里で、お披露目され、その後直ぐに、里の体制は、立て直されていった。

そして、第7班にも、任務が入ってきた。その任務の内容は、Bランクで、時には、Aランクにもなりうる要人警護だった。しかも、カカシ先生が不在という、結構ハードな任務だった。

早速、茶の国へ行くことになった。その道中、変な男にサクラが絡まれるという、いざこざもあり、その男と追いかけることという惨事（？）もあつたが、無事に次郎長親分という人のところまで辿り着いた。

そして、今は、任務の詳細な内容を聞いているところだ。

次郎長「実は、お前さん達は、今年の轟大社の奉納の儀というのを知っているか？」

ナルト「とど・・・とどろ？」

次郎長「まあいい。事の始まりは、大昔、嵐が吹き荒れる中、轟大社に竜虎の宝玉を

奉納したところ、嵐が収まったという伝説から、始まった

ことなんだ。今は、

4年に1度の慣例行事なっていて、最初は、宝玉を奉納するだけだったが、

数十年前から、国の一番手のものが歳をとる。という祭りとなった。だが、最近になって

この祭りは、もう一つ別の顔を持つようになった。この町には、古くから、我々

山葵一家と和芥子一家という、2つの侠客集団があつてな。恥ずかしいことだが、

この2つの一家は、争いが絶えず、町の指揮権を巡り、常に反発しあっていた。抗争が

激化するにつれ、町の住人にも被害が出るようになった。激化する抗争に終止符を

打つため、大名立会いの下、初めて手打ちの話が持ち上がった。これからは、

喧嘩ではなく。競技によって、町の顔役を決めるようにと。それが、4年ごとに行われる。

轟大社の奉納の儀と言う訳だ。そして、4年前。忍びを雇った和芥子は、今年も忍びを

雇ったという情報が入った。そこで、ワシらも対抗手段として、木ノ葉に依頼をしようと、

伝令を走らせたところ、待ち伏せをされ、襲われてしまった。」「

そこまで、延々と話していた次郎長親分が、突然オレ達に向かって、土下座をした。その行為に、戸惑っていると、こう頼まれた。

次郎長「頼む！ワシらに力を貸してくれ。このレース。和芥子一家に負けるわけには、いかんだ。」



ナルト「任せろってばよ！」

サスケ「で、どいつを警護すれば良いんだ？」

すると、次郎長親分が合図を出し、部屋に入ってきたのは、さっきの奴だった。

ナルト「・・・ああ！！！！？」

次郎長「何だ？知り合いか。ならば、話が早い。」

と、喜んでいるが、実際は、視線が火花を散らしている。というのが、今の現状だ。  
するとサクラが

サクラ「そうでもないです。」

と、的確に状況を説明していた。

それからというもの、ナルトとさっきの奴（伊達というらしい）は、ずっと口喧嘩している。

オレ達は、今観光地を巡っているわけなのだが、ちょっとした、いざこざを仲介している。

村人「か、勘弁してくださいえ・・・」

チンピラ1「誰のお陰で、商売していられると思っただ！？」

チンピラ2「まさか、和芥子一家に齒向かおうつてのか！？」

村人「滅相ありません。しかし、御代を頂かないと・・・」

ああ・・・半窃盗まがいな事をしたんだな。そういう結論に達し、止めることにした。その時、チンピラの1人が、おっさんを殴ろう

としたから、その拳を受け止めた。

チンピラー「な?! 何だオメエ?」

サスケ「物取りは、どの世の中でも、犯罪だ。とつとと消える。」

すると、店の女の人何かオレに言っていたが、サクラが止めていた。そして、女の人が目を瞑っている瞬間に、片付けた。弱い犬ほど良く吠えて帰って行った。

村人「お兄さん。ありがとうござんした。」

女の店員「ほんと、スッキリしたわ。今度のレースでは、山葵の次郎長さんに

勝ってもらわなきゃ。」

その言葉を聞いて、この任務は、村人の生活も掛かっているのだ。と感じた。これは、何としても、任務を成功させないとな・・・。

その日の夜は、山葵一家の屋敷に泊まり、翌朝早くにレースが始まった。

ナルト「うつひゃゝ。こんな、でけえレース何で、思わなかった! 一体、どんなレース何だ?」

サクラ「おバカさんねえ・・・・・・・・」

と、サクラがレースの内容を、ナルトに伝えているが、そこは、割愛して……。両家の選手のコールが、始まった。

司会「では、皆様。轟大社大競争。まもなく、スタートです。

山葵一家ランナー、森野伊達。」

すると、歓声上がる。

森野？どっかで、聞いたような・・・。

司会「和芥子一家ランナー、飛脚屋福助。」

また、歓声上がる。

司会「位置に付いて、・・・・・・・・・・・・・・・・」

門が開き、陽が昇り始め、陽が目眩しく感じられるようになった瞬間！

司会「・・・スタート!!」

一斉に、門の外へ飛び出て行った。・・・と、思いきや、全然違う方向に伊達は、走っていった。

何故、そんな行動をしたか、分からなかったが、伊達が止まってようやく理解した。裏ルートか。

伊達が、止まるまでに、ナルトと伊達が、敵忍の幻術に嵌る。という、ハプニングもあったが、間一髪のところ、助けて、漁村に着き、そこから、船に乗り込んだ。

それから、40分と少しが経った。

伊達「（そろそろ、ナギ島の港が、見えるはずだ。福助より、先回り出来てりや良いが・・・。）」

そんな頃、サクラはナルトに、小声で話しかけていた。

サクラ「伊達さん、絶対、只者じゃないわ。だって、あの足の速さは、普通じゃないわよ。」

それに、幻術だって解いてたし・・・。もしかして、どこかの隠れ里で、訓練でも

受けてたのかも・・・。」

ナルト「あんなバカに、忍者は務まらねえってばよ！」

すると、ここまで小声だったのが、段々と大きくなっていく。

サクラ「アンタだって、負けず劣らずのバカでしょ?！」

ナルト「むっ!でもさ、でもさ、オレってば、中忍試験の本選に残ったぜ?」

その言葉に、伊達が、反応する。

伊達「お前が、中忍試験の本選に?!」

ナルト「おうよ!途中、邪魔が入んなきゃ、オレは、トーナメントで優勝して、

中忍になれたんだ!」

サクラ「でも、サスケ君は、もう中忍になったわよ。」

すると、ナルトは、そのことを知っていなかったらしく、かなり驚いていた。っていうか、オレの服装を見て、何も気付かなかったのかよ。コイツは……。

伊達「けっ、よっぽど、甘っちょろい試験官に当たったんだろうよ。……全く、中忍試験の

レベルも下がったもん?!」

急に、口を覆ったが、既に遅し。サクラとオレには、気付かれていた。

サクラ「伊達さん。あなたやつぱり……。」

サスケ「思い出した。お前、中忍試験第一試験官の森野イビキの弟か。」

すると、凄い形相で、こっちを向いてきた。

伊達「何だって!?!イビキ兄貴は、生きてんのか?!」

ナルト「そりゃあ、生きてるに決まってるっばよ！アイツっばさあ、10問目に変な問題

出しゃがってさあ。」

伊達「ホントか？本当に生きてるのか！」

そう聞いてきた瞬間に、伊達の目の前に、矢が、飛んできた。

ナルト「何だっばよ？」

サスケ「敵襲だ。敵の数は、2名。中忍選抜試験第二の試験の時に戦った、雨隠れの下忍だ。

そいつ等の仲間を最初に、オレが1人。最後に、お前が、多重影分身の術で、

ぶっ倒した奴らだ。」

・・・チツ、待ち伏せか。でもまあいい。コイツ等なら、一瞬で終わる。

すると、矢の雨と呼ぶに相応しい数の矢が、降ってきた。

サスケ「オレとナルトは、奴等を木っ端微塵に、ぶっ潰す。サクラは、伊達を守れ。」

そして、雨隠れの下忍2名との戦闘が、始まった。

矢が、また飛んできた。しかも、今度は、ロープ付きだ。そして、敵船が、どんどん近づいてきた。

サスケ「ナルト！ロープを切れ！」

ナルト「分かってるってばよ！」

そう言っ、ロープを切ると、敵船は、遠ざかっていった。と、思ったら、朧分身と、本体が、本船にいつの間にか、乗り移っていた。

ナルトの気転により、朧分身は、消え、本体は、敵船へと、逃げた。

ナルト「逃がしたか！」

敵船sideでは、

夢火「影分身野郎は厄介だな。朧の敵討ちだ。篝！」

そう言われると、篝は、術を発動させた。

水遁・黒雨の術

すると、黒い雨が降ってきた。これは？もしかして、油か！？クソッ、火遁が、使えないか……。でも、オレには、他の術もまだある。



## 水遁・水衝波

を、発動させて、敵船ごと、海に沈めた。そして、留めの一撃は、敵に狙いを定めて・・・

## 千鳥流し

それから、直ぐに敵の体が、海面へ浮かんできた。・・・死んだな。その死体を放っておき、陸地へ、到着した。すると、雨隠れの忍者が、また、いた。しかも、そいつは、傘を持っており、その中には、仕込み千本が、入っているものだと思われた。そこでは、嚴重忠告をされ（レースを諦める。という内容）、戦闘までは、進展をせずに終わった。その後、伊達に、レースを諦めるのか？と、問いただした所、案の定、続けるとの回答だったので、オレ達の任務は、続行。伊達の警護を続けながら、歩を進めた。それから間もなく、藻土呂木神社へ到着した。そして、伊達が、虎の宝玉を手にして、そのまま、轟大社へと、向かっていった。それに、オレ達3人も、続いた。

それから暫く、疾走すると、吊り橋の前まで、来た。すると、橋の真ん中あたりに、福助の姿が見えた。

伊達「（いた！福助の野郎だ！）」

そう思って、スピードを上げようとすると、何者かによって、伊達が、倒された。攻撃してきた方向を見ると、やはり、さっきの奴だった。

葵「大したもんだ。まさか、ここまで来るとは、思わなかったぜ？」

伊達「（あれは、雷神ノ剣！）」

サスケ「それは、二代目・火影様の雷神ノ剣だな。何故、お前が持っている？・・・まあいい。

お前を殺すついでに、木ノ葉に返してもらおう！ナルト！」

ナルト「おう！行くつてばよ！」

### 影分身の術

ナルト「（集中・・・集中、集中集中）はあああ！！」

### 螺旋丸

何だ？！この術は・・・でも、直線的過ぎて危ないな。そう思った、オレは、すぐさま援護に向かう。

### 双牙千鳥

両手に千鳥を発動させ、右の千鳥で、葵の雷神ノ剣の動きを止め。左の千鳥で、青いが持っている、雷神ノ剣を弾き飛ばした。

サスケ「今だ！ナルトオ！！」

そう、叫んだのと同時に、ナルトの螺旋丸が、葵の腹部に直撃。谷底にある、激流の川に、飲み込まれ、帰らぬ人となつたに違いない。

それから、伊達は、もしかしたら、オレの高速移動並の速さなのではないかと、思わせるくらいのスピードで、轟大社まで突っ切って行った。まあ、もちろん、今のは、比喩だが……。その結果は、言うまでも無いが、勝ち、轟大社には、虎の宝玉が、奉納された。

その数週間後に、耳に届いた話。オレ達には、関係の無いことだが、和芥子一家の不祥事も、発覚し、茶の国、出芥港には、平和が、訪れたという。めでたし、めでたし。

そして、時間は、現在に戻るが、伊達と、別れのとかが来た。別に何とも思っていないが……。

伊達「世話になったな、ナルト。」

ナルト「伊達、お別れだな。」

すると、木ノ葉の船から、あの男が出てきた。

イビキ「おい、お前ら。里へ帰るぞ。それとも、今、帰らないなら、また、歩きで帰ってくる

ことになるが。それでも良いのか？」

サクラ「イビキさん！」

伊達「兄貴……！」

その言葉を、あえて無視したような感じで、言葉を続けた。

イビキ「早く乗れ！明日からも任務は、あるんだぞ。」

ナルト「うん。」

そして、オレ達3人は、船へ乗り込んだ。すると、伊達が、イビキを止める。

伊達「兄貴、待ってくれ！兄貴！」

それに、振り返ることなく。こう言葉を発した。

イビキ「どなたかな？俺を兄と呼ぶ男は、3年前に死んでいるが。」

その言葉に、暫し伊達は、言葉を失ったが、その言葉の裏を、読み取ったらしく、それ以上、口煩くは、止めなかった。

伊達「（兄貴。俺は、10問目の答えが、分かったぜ。もう、二度と仲間を裏切ったりはしねえ。」

今なら、他人を信じられる。）

そう、心の中で、宣言をして、自分に、背中を向けている兄貴に対して、深々と一礼をした。

一方のイビキは、

イビキ「（ふふ、良い顔になった。）」

と、心の中で、弟の成長ぶりを喜んでいた。船は、発進し港から、離れていった。

ナルト「じゃあな、伊達。また、会おうぜ！」

サクラ「さよなら。またね。」

伊達「ああ。お前らもまた来いよ。」

ナルト「親分も、達者でな！」

お前、上から目線って可笑しいだろ！と、心の中で、突っ込むオレとサクラ。しかし、心の広い、次郎長親分は、笑顔で、

次郎長「ああ！」

と、答えてくれていた。

イビキ「（相変わらず、面白い奴だ。流石は、五代目が、認めただけの事は、あるってことか。）」

それから、どんどんスピードを上げていく船に付いて走り、伊達は、

伊達「ナルト！頑張れよ！！！」

ナルト「今度は、俺と勝負だつてばよ！！！」

などと、会話をしていた。そんな様子を、オレとサクラは、後ろから眺めていた。

## 【GW】File・48

ある日の任務受付会場での事・・・。

ガイ「任務完了！！例の海峡の海賊どもに、倍の拳骨！食らわせてきましたよお！！これを

機に、彼らが更生してくれば、私も！涙を流した甲斐がある！ってものです！！！」

と、誠に五月蠅いガイが飛び込んできた。すると、前触れ無く五代目が、話し始めた。

五代目「お前の班にやつてもらおうか。」

ガイ「はい？」

五代目「只でさえ、忙しいってのに、ナルトの奴が、仕事を増やしてくれてねえ。」

そう言うと、付き人のシズネが、任務表を見直した。

シズネ「でも、ガイさんには、S級の任務が入ってますね。先方からの名指しです。今日中にも

出発してもらわないと・・・。」

五代目「じゃあ、ガイ抜きで。」

すると、眉をびくびくさせながら、

ガイ「随分、あっさりと……。」

そんな様子を、意にも介さずに、

五代目「日向ネジ、テンテン、リーを呼ぶんだ。」

愛弟子の名前が、呼ばれると、急にハイテンションに戻った。

ガイ「ほぉーお！我が教え子たちなら、無事、任務を果たす事、間違いないでしょう。」

付き人のシズネが、また任務表を見て、こう言った。

シズネ「綱手様。ネジ君は、現在、他の任務に当たっています。」

五代目「なら、この任務を持ってきた、張本人うずまきナルトと、日向ネジの代理でうちはサスケ

それに、テンテンとリーで、今回はこのフォーマンセルでやってもらおう。」

すると、この編成に、ガイが、食って掛かった。

ガイ「思わしく！！世界中に愛されるべき！我が教え子達だけではいけないのですか？！

ええ？！綱手様！！答えてください！！！！」

あっさりと、

五代目「ふん。何となく。」

その答えに、今まであれだけ勢いのあったガイだったのに、一気に撃沈した。

そんな出来事があつて、直ぐに呼ばれた、オレ達は、至急に任務受付会場へ行つた。そして、皆が集まると、直ぐに、任務の内容が説明された。

五代目「ナルトが、助けてきた3人は、カタバミ金山から、任務依頼をしに来ていたんだ。

カタバミ金山は、川の国有数の鉱山村だが、半年前から、村の警護を口実に、

黒鍬ファミリーと名乗る、ならず者達が、入り込み、村を支配し、さしたる理由も無く

村の人々は、殺されているらしい。」

リー「なんて酷い！」

五代目「お前たちの任務は、その3人の体力が、回復し次第、カタバミ金山へ送り届け、尚且つ、

黒鍬ファミリーの排除。シンプルな任務だ。どうせ、金目当てのチンピラの集まりだろう。」

すると、ナルトが、

ナルト「何で、こんな簡単な任務で、俺を呼ぶかなあ。」

と、聞こえるように呟いた。





ナルト「何で、こんな簡単な任務で、俺を呼ぶかなあ。」

五代目「お前は、何様だ！」

と、一喝されているが、それに構うことなく、自分の主張を続けるナルト。

ナルト「俺ってば、エロ仙人との修行とかで、色々忙sh」

言葉を全て言い終わる前に、五代目・火影様、綱手様に捕まった。

五代目「呼んでない任務には、強引に入ってくるくせに！下忍の分際で、任務を選ぶな！！

アカデミーへ、送り返されたいか！？ああ？！」

凄い、・・・迫力。すると、オレに話を振られた。

五代目「うちはサスケ！」

サスケ「はい？」

五代目「小隊長は、お前だ！」

と、言ったと同時に、ナルトの体が、飛んできた。それを、もちろん受け止めた。

五代目「中忍の小隊長として、糸の切れた、タコを手なずけるのも、良い修行になる。」

サスケ「それは、断りますが、分かりました。」

そう、オレの言葉を聞いた、五代目・火影様は、ピクツと眉を上げたが、無視してその部屋から出て行った。その後、オレは、何やらテンテンに、こっ酷く怒られたが、それを、聞き流した。

それから、ガイ先生からの、信憑性の超高い(?)情報として、黒鋤ファミリーのボスが、元霧の忍刀七人衆の一人である、黒鋤雷牙だという情報が、入ってきた。それにより、Cランクの任務だったのが、一気にAランクの任務となってしまった。

そして、川の国、カタバミ金山から来た3人の回復が終わった、2日後。オレ達は、門の前に集まっていた。

サスケ「じゃあ、これから、カタバミ金山へ、黒鋤ファミリーを、掃討しに行くぞ。」

すると、リーが話しかけてきた。

リー「金山の近くに、僕の馴染みの店があります。そこを拠点に、しましょう。」

テンテン「馴染みの店って?」

リー「それは、旅のお楽しみです!」

その提案を、受け入れ。残り、あと1人となった、メンバーを待つ

た。すると、門の上から、飛び降りてきて、その第一声が・・・

ナルト「じゃんじゃじゃーん！！・・・やっと、全員、集まったってばよ。」

サスケ&テンテン「誰のせいだ！誰の！！」

という、息のピッタリと合った、ツツコミも入れ終え、ようやく、オレ達は、木ノ葉の里を出発し、カタバミ金山へと向かった。

途中休憩も入れ、夕方頃には、拠点とする、「命のカレー屋」という、店に着いた。

そこでは、殺傷能力のあるカレーを食べ、危うく、気を失いかけたところを、テンテンに助けられ、九死に一生を得た気分だった。もしかしたら、今回初めて、テンテンに感謝したかもしれない。その夜の事だった。護衛している3人の内の1人が、消えたのだった。

【GW】File・50

テンテン「サスケ君！六助さんが、居なくなっただって！」

リー「不味いですね。奴らに捕まったら、六助さんは・・・」

その報告に、

ナルト「こうなりや、作戦なんか、立てている暇は、ねえぜ！当たって碎けるだつてだよ！」

行くぞ！サスケ。」

数秒考えたが、既に、答えは出ていた。

サスケ「・・・仕方ない。行くぞ！」

そうして、六助を探しに、行くことになった。

・  
・  
・

だいぶ、陽も昇ってきた頃。カタバミ金山の麓へ着いた。そこで、ナルトが、ある提案をしてきた。

ナルト「なあ、六助さんと唐司さんを助ける何て言わず。この際、一気に、黒鋤ファミリーを

打っ潰してしまおうぜ！」

テンテン「何言ってるのよ？ナルト。」

ナルト「でもよお、黒鋤ファミリーのボスってば、忍刀七人衆の一人かもしれないだろ?！」

六助さん、何されるか、わかんねえぞ?」

サスケ「確かに、ナルトの言っていることには、一理ある。」

そう言ったときに、テンテンが、

テンテン「サスケ君!」

と、止めるようにしてオレの名前を呼んだ。

サスケ「でも、まだ、向こうの戦力も、良く分かってないのも、現状だ。早まるな。」

そう言つて、金山の出入り口の見張りを続けた。すると、暫くしない内に、通行量が、一気に増えた。勤務時間が、始まったのか・・・。そんな事を考えていると、1人の老人が、倒れた。その老人に対し、黒鋤ファミリーの末端そうな、4名の黒ずくめの男たちが、食つて掛かった。それを、見ていた、ナルトとリーが、遂に、出て行つてしまい、一瞬で、片付けてしまった。そして、オレとテンテンは、頭を抱えながら出て行つた。

すると、その助けた老人から、ある情報を得た。

老人「黒鋤ファミリーのボス、雷牙は、自分を裏切った奴には、生きたまま葬式を出すんじゃない。」

テンテン「生き埋め?!何て、残酷な・・・。」

老人「それがの、雷牙が、葬式を出すと、泣くつちゆうんだ。」

ナルト「よくわかんねえ奴だな。」

老人「六助の葬式も、もう直ぐ、挙げられる事にあるじやろう。」

「っていうことは、やっぱり、今まで見つからないと思ったら、捕ま  
ってたのか。」

リー「助けに、行きましょう！サスケ君！」

サスケ「ああ。」

そう言つて、老人に教えて貰った、墓場の方に向かつていった。すると、そこには、既に、棺桶と、黒鍬ファミリー数人がいた。まずいな、時間がない。

サスケ「ナルト。影分身で、全員を倒してくれ。オレ達3人は、増援に対処する。」

ナルト「OK！」

そう言つと、数十体という、数の影分身を出し、一瞬で、片をつけた。でも、敵が、1名、逃げ出したのに、気が付いていたのは、オレだけだった。

いや、オレだけじゃなかったみたいだ。リーも発見し、追尾した。そして、殴ろうと、したとき、敵の顔面直前で、止めた。すると、敵は、尻餅をついた。

リー「貴方は・・・。」

ナルト「何だつてばよ？そいつ。」

リー「いえ。この人が、唐司さんですよ。」

そして、オレとテンテンが、その場に着いた。

テンテン「じゃあ、山椒婆さんの！」

ナルト「こいつが、唐司？」

リー「唐司さん。まさか、山椒婆さんの言うように、自ら望んで、黒鍬ファミリーに？」

と、聞くと、不貞腐れた態度で、

唐司「だったら、どうだってんだよ？だってよ、雷牙様は、すごいんだぜ？カタバミ金山から、

悪代官一味を追い出して、村の皆を解放したんだ！」

サスケ「そうかよ。お前が、本当にそう思っているんだったら、オ



レが、お前を殺すまでだ。」

その発言に、皆が驚いた。そして、オレは、本当に殺すぞ。という脅しの意味で、千鳥を左手に発動させた。すると、テンテンがまた、止めに入った。

テンテン「サスケ君！それは、何でも、やりすぎじゃ……。」

しかし、テンテンの言葉には、無視をして、問いただす。

サスケ「本当に、そう思ってるのか？そう、思っているんだったら、黒鉄ファミリーとの縁は、

切れ。そして、婆さんの待っている、カレー屋に戻れ。」

すると、今までの態度を一変させ、土下座をし、

唐司「すまなかった。」

と、謝った。それと、同時に、発動させていた、千鳥も収めた。

ナルト「まあ良かったってばよ。」

リー「そうですね。これで、山椒婆さんに、会わす顔が、出来ました。」

テンテン「それにしても、サスケ君。もっと、優しい言い方は無かったの？」

と、ちょっぴり頬を膨らませながら言われても、何の覇気も感じられなかった。

サスケ「写輪眼の催眠眼を使って、帰らせることも、出来たが、それじゃあ、アイツの為には、

ならない。だから、あえて、面倒な方をとっただけだ。」

そんな時に、すっかり、忘れられていた、人物が、棺桶の中から、声を上げた……。そうして、六助を、助け出すと、何処からか、視線を感じた。……あそこか。

ナルト「サスケ？どうかしたのか？」

サスケ「ああ、多分、あの岩山の上から、雷牙が、オレ達の事を、監視している。」

テンテン「何ですって!？」

リー「唐司さんは、六助さんを連れて、山椒婆さんの所へ、行つてください!」

唐司「ああ、分かった。」

その返事を聞くと、オレ達4人は、崖を登って、岩山の頂上へ行つた。すると、濃い霧が掛かってきた。

## 【GW】File・52

### 忍法・霧隠れの術

リー「霧隠れの術と言えば、霧隠れの忍者が、得意とする忍術。」

テンテン「まさか、ガイ先生の言ってたことって、本当だったの？」

サスケ「どうやら、そうだったな。」

すると、声が、聞こえてきた。

雷牙「見よ！」

### 忍法・雷の牙

雷牙「ウオオオ！！！！！」

サスケ「動き出したな。」

雷牙「雷よ・・・落ちろおお！！！」

すると、まるで、雷に意志があるように、こっちに向かってきた。もちろん、オレは、視覚で見ているのではなく、感覚で、感じ取っているのだが。

サスケ「皆！避ける！」

オレの指示に、一瞬は、混乱したようだが、何とか無事に回避した。  
蘭丸「雷牙、皆、避けたよ。」

その言葉に、もう一度、攻撃を仕掛けてきた。

#### 雷葬・雷の宴

随分な電気質な攻撃だな。風遁で、相殺させるか。

#### 風遁・神風

電撃が、何本も、襲い掛かってくるのを、竜巻を、何本も出し、全て、相殺させた。すると、少しずつ霧が薄れてきた。そして、雷牙の姿が、見えた。その瞬間に、ナルトが、影分身で、陽動を掛け、後ろを取った。

テンテン「ナルト、結構やるじゃない！」

しかし、それが、災いとなって、

#### 雷球

を、直接食らってしまった。そして、ナルトは、気絶してしまっている。

サスケ「テンテンは、ナルトの警護。リーは、攻めろ！」

リー「押忍！……八門遁甲・開門。開！」

そこから、高速攻撃が、始まり・・・、

## 表蓮華

の最後、フィニッシュを決めようと、巻き付いた時だった。

## 忍法・雷の鎧

という、術を発動され、リーも動けなくなってしまった。・・・オレの出番か。敵は、今、雷を身に纏っている。ということは、体術で、戦うと、今のリーみたいに、なっちまう。ってな訳か。そして、遠距離戦か、もしくは、あの術を発動不可に、させないと・・・。

サスケ「テンテン！援護を頼む。」

テンテン「オーケー。で、何をすればいいの？」

サスケ「敵の気を引き付けさせといてくれ。」

テンテン「了解！」

それと、同時にテンテンが、双昇龍を発動させた。よし、敵の目が、そっちを向いている間に。

## 魔幻・樹縛殺

で、幻術世界に陥れ、身動きが、取れなくなっている間に、更に

## 魔幻・桜花葬祭

を、重ね合わせて、発動させた。この術は、魔幻・樹縛殺での、大木を、満開の桜にし、その桜の花びらが、散るたびに、精神的、ダメージを食らわせる。という、幻術で、月読と同様、現実世界では、一瞬。しかし、幻術世界では、かなりの時間が、経っているように思える。という恐ろしい、幻術だ。

雷牙は、この恐ろしい、二重幻術に掛かり、絶大な精神的ダメージで、身動きが、取れなくなっている間に、まだ、続いていた、テンテンの双昇龍の攻撃が、モロに当たり、絶命した。

無事に、任務を終えた、オレ達は、翌日、帰路へ着けていた。

ナルト「なあ、サスケ。アイツ、どうやって倒したんだってだよ？」

サスケ「ああ、それは、」

と、説明をしてあげようと、思ったのに、テンテンが、横から無駄口を挟んできた。

テンテン「愛のパワーよ！」

ナルト「・・・はあ？やっぱり、お前らあ！！」

という、誤解を招くのであった。

とある日の早朝。木ノ葉隠れの里には、超S級非常警戒態勢が、発令された。最低限の忍びを残し、多くの上忍、特別上忍、中忍は、国境周辺へ、警備に出かけた。そして、オレも、含まれている。中忍2名、下忍10名からなる。第3班、第7班、第8班、第10班の計12名が、特別任務を言い渡され、慰霊碑前に集合させられている。ついでに、まだ来ていないのは、あと、1人だけだ。すると、しばらくして、集合時間15秒前に呑気な姿を現した。

チョウジ「あれ？もう、皆、揃ってるの？」

いの「どう見ても、アンタが一番、後でしょ。」

と、オレの左腕に腕が、当たりそうな距離で、指摘する。

シカマル「皆揃ったな。そんじゃ、始めるぞ。皆、もう気付いていると思うが、現在、里には、

超S級非常警戒態勢が、取られている。そもその発端は、  
「

キバ「タベの煙幕だろ？」

シカマルの話を遮って、そう言った。すると、ナルトが、ボケをします。

ナルト「ゲ！お前ら、気付いてたのか？」

ネジ「当然だ。」

シノ「蟲達が、やたらと騒ぐのでな。」

ボケをかますのは、ナルトだけじゃないみたいだ。

チヨウジ「へえ」。僕は、気付かなかったな。」

すると、またオレの左側を陣取っている、いのが突っ込む。

いの「アンタ、ホントいつも、鈍くさいのよ！」

そんな、いのに対抗するように、オレの右側を陣取っている、サクラは何故か、落ち込んでいる。

両サイドを、固められているオレだが、そんな、2人のことなど、見えていない。と、でも言うようにして、オレの後ろ・・・というよりは、背中にべったりとくっ付いている、テンテンが、オレに聞いてきた。

テンテン「あれって、一体なんだったのか。知ってる？サスケ君。」

オレは、この状況に息苦しさを、覚えながらも答えた。

サスケ「暗部が、動いていた気配があったから、オレは、そのまま、任せておいた。」

シカマル「ああ、正解だ。暗部が、動いていた。」

ヒナタ「や、やっぱり。」



シカマル「タベの遅くのことだ。2週間前から暗部が、密かにマクしていた男が、木ノ葉一の

頭領の家に忍び込んだ。そして、その家の、隠し金庫から、里の重要施設の図面を

盗み出していった。」

リー「図面・・・ですか？」

そこで、バカが発言する。

ナルト「それで、何がマズイんだ？建物の図面が、盗まれただけだろ？」

そんな、アホな疑問に、ネジが、分かりやすく説明をし、やっと事の重大さが、分かったらしい。そこで、シカマルが、本題へ話を戻す。

シカマル「タベの煙幕は、その盗人が、逃げる際に、ばら撒いたものだ。最終的に、西の森で、

暗部に追い詰められ、口を割る前に、自爆した。だが、厄介な事に、自爆したとき、

そいつは、盗んだ図面を持っていなかったんだ。もし、その図面が、既に、敵の手に

渡っていたら・・・。『木ノ葉崩し』の悪夢の再現だ。それを、防ぐために今朝、

里に、超S級非常警戒態勢が、とられた。」

【GW】File・54

そして、任務の内容が、シカマルによって、語られた。

シカマル「そして、残された俺達に任された任務は、紛失した図面の所在を調べ、奪い返すこと。

それが、今回の任務だ。」

すると、ネジが、もつともな事をいう。

ネジ「雲を掴むような話だな。」

テンテン「相手が、辿った、来た道を、搜索すれば良い、って事じゃない？」

シカマル「そいつは、かつては、一流のトラップ使いとして、名を馳せていたそうだ。図面の

在り処に、トラップを仕掛けている。という可能性も、十分に考えられる。」

シノ「納得できる話だな。」

いの「分かったわ。アンタの指示に、従うわ。」

そう言った、いのの言葉に、全員が、頷き、今回の調査方法が、伝えられる。その前に、盗人の顔写真が、全員に、配られた。その写真を見て、サクラとナルトの表情が変わった。

シカマル「こいつの名前は、玄翁。」

サクラ「あ、この人！」

ナルト「……………嘘だ。」

その、小さな呟きは、誰にも、突っ込まれる事は、無かった。

そして、玄翁の事を、聞くために頭領の家へ、まず向かった。その、道中のことである。

ナルト「こんなの、ありえねえってばよ！！玄翁のじいちゃんは一楽のラーメンがな、

大っ好きだったんだぞ？！そんな人が、木ノ葉の里を、潰すようなマネなんて、

する訳ねえってばよ……………」

シカマル「はあ。あのな、敵の里の侵入する奴が、始めから悪いトコ晒す訳ねえだろ。」

相手に、油断させる為に、良い人間を演じるんだよ。」

その言葉に、ナルトが、ズバツと斬り込んだ。

ナルト「ラーメン好きに、悪い奴はいねえ！」

その斬り込みに、また斬り込むチョウジ。

チョウジ「いや、それは、違うぞ、ナルト。」

シカマル「チョウジ。お前から、しっかり言い聞かせてやってく

れ。」

その言葉に、頷いて発した言葉が、

チョウジ「一楽のラーメンが好きな奴に、悪い奴はいない！だ。」

その発言に、ナルトと、それを言った張本人のチョウジ以外の10人は、皆、ずっこけた。

そして、その言葉に、頭を抱える、シカマル。

シカマル「ったく、どいつもこいつも・・・。」

そんな、珍道中も、終え、無事に（どこまで、無事で、どこから、無事ではないか。という境界線が、とても、怪しいところだが・・・）、木ノ葉一の頭領の屋敷に着いた。

そこでは、盗まれた、図面のリストと、玄翁の人柄を、教えてもらった。念の為、ということ、図面のリストに載っている、建物の確認作業に、日向ネジ&ロックリー、日向ヒナタ&テンテンの4名が出て行った。

シカマル「まだ、図面が、敵の手に渡っていない可能性もある。逃げる途中で、何処かに、隠した

という事も、考えられるからな。」

それを、当たるのが、キバ&赤丸、シノ、ナルト、オレの4人と1匹だ。

キバと赤丸は、嗅覚を使い、シノは、蟲を使い、オレとナルトは、多重影分身を使って、片っ端から、調べるといいう、事になった。

外へ出てから、オレとナルトは、術を発動させた。

### 多重影分身の術

オレが、500体で、ナルトが、1000体。というところだろう。

一方、まだ、中に残っている4人は、サクラといのは、玄翁の死体を調べなおす。シカマルとチョウジは、玄翁が使っていた、部屋を調査。という風に、役割が決められ、動き始めた。

それから、しばらく探し回っていると、ナルトの影分身の1人が、暗部に本体を尋ねられ、ナルト本人が、何処かへ、連れて行かれた。その頃、団子屋では、シカマル、チョウジ、リー、テンテン、ネジ、ヒナタによる。現状報告が、行われていたが、特に報告するようなことはなく、ヒナタは、サクラといのがいる死体安置所へ。ネジ、リー、テンテンの3人は、オレと、キバ、シノの増援。と、割り振られ、また行動を、開始した。

シカマルとチョウジも、まだ残っている場所を、調査しに、席を立ったが、いつの間に来たのか、シズネに呼び止められた。

シズネ「シカマル君。綱手様が・・・。」

シカマル「五代目が？」

そこでの、簡単な、話の内容を、まとめると・・・。滝隠れの里が大演習という、名目で、総力を結集させているため、そのまま、木ノ葉に攻めてくる可能性が、高い。ということ。それに伴い、現在、里に、残っている、第3班、第7班、第8班、第10班も、滝隠れの里との国境に、向かって欲しい。と、言われたが、キレ者のシカマルは、それを断った。理由として、仮に滝隠れの里との、戦闘になっても、自分達12名では、あまり戦局に、変わりがない。ということ。玄翁の行動が、あまりにもキレイすぎて、もしかしたら、このまま行くと全て、玄翁の手のひらで、躍らされているだけかもしれない。という、事を挙げた。すると、五代目・火影様も、その意見を、取り入れ、このまま調査続行と、なった。

その後、暗部の調査から解放されたナルトは、シカマルとチョウジと合流して、玄翁が、一度でも、通ったことのある場所を、調査しに行った。その後は、片っ端から、頭領の家にある、帳簿を調べた・・・。

その頃、オレ、キバ、シノ、ネジ、テンテン、リーの6人は、自爆現場に、来ていた。オレは、事件現場や事故現場で、色々と見つめてくる能力は、前世（転生前？）の時から高かったから、何か、不思議な点を、見つけることは、造作も無かった。

サスケ「遺留品は無し、か。でも、ここら辺の木々に、付く筈のない爆発痕が、両面にあるな。

自爆したのなら、こんな痕跡は、残らない。と言う事は、起爆札を自爆地点周辺の

木々に、貼って、爆発をより大きく、したのかもしれないな。タイミングを考えて

爆発を起こせば、一回の爆発に見えるだろう。」

シノ「しかし、そのためには、事前の準備が、必要だ。もしかしたら、ここで、起爆札で

死んだという話も、間違いなのかもしれない。」

そのシノの言葉によって、それを裏付ける証拠探しが、始まった。とは、言うものの、ネジの白眼で、直ぐに見つけた。それは、人が、1人通れるくらいの抜け道だった。

それを、火影様の所へ、報告に行くと、やはり、死体は、偽者。しかも、図面が、空から、降って戻ってきた。というのだ。そして、シカマルの睨んだ、アカデミーを、12人で、徹底的に調べることになった。

そして、今、アカデミーの教室内を、調べようと、しているのだが、

言うことの分からないガキばかりで、ナルトだけでなく、オレまで腹が立ってきた。仕方がない。催眠眼で移動させよう。案の定、オレの写輪眼と、目を合わせると、次々に教室から、出て行った。しかし、何も見つからなかった。

そして、最後に、よくサボりの時に使っていた、練習場に来た。そこで、ヒナタとネジが、クナイの的の中に、起爆札と、遠隔操作用のワイヤーを、見つけた。しかも、それを辿っていくと、木ノ葉の里が、蜘蛛の巣に、掛かったように、張り巡らされているらしいことが、分かった。

それを、地道に取っていく作業が始まった。それから、時間が過ぎ、1人平均5枚ほど集めたとき。ナルトが、何かに気付き、火影岩へ向かった。

そこで、ナルトが、見つけたものとは……。

ナルト「何だつてばよ？これ！」

ナルトが、起爆札を見つけると、玄翁が、姿を現した。

玄翁「やれやれ、見つけてしまったか。」

ナルト「じいちゃん？」

玄翁「ここから、返すわけには、いかなかったな。」

ナルト「何で、こんな事、したんだよ？」

玄翁「昔、山の国に、陽炎の里というのがあった。わしが、生まれ育った、場所だ。」



ナルト「（陽炎の里？）」

その里は、今は戦争に敗れ、滅びている里だ。

玄翁「陽炎の里が、木ノ葉と戦争をしているとき、わしは、木ノ葉に、潜入し、里中に、起爆札を

仕掛けた。それが、わしの任務じゃった。起爆札の爆発と同時に、陽炎の里の主力が、

木ノ葉隠れの里に、攻め入る。壊滅的な、打撃を与える。そういう作戦でな。

わしは、あちこちの工事現場に出掛けては、起爆札を仕掛けた。木ノ葉内部の暗部も、

今ほど、充実しておらんかったからな。わしも、楽に動き回ることが、出来たよ。

そして、二ヶ月が過ぎた頃には、ほぼ、全ての仕掛けを終えて、あとは、見方が攻めて

来るのを、待つだけだったのじゃが、見方が、来ることは、無かった。」

ナルト「どうしてだってばよ？」

それは、徹底抗戦を主張していた、陽炎の里長が、急に事故で、死んでしまつて、次に、就いた新しい里長が、木ノ葉との停戦条約に合意したからだった。しかも、戦争を続けて、弱りきっている時に今度は、雨隠れの里から、奇襲を受けて、陽炎の里が、滅びたからであつた。

玄翁「わしとしては、直ぐに、木ノ葉隠れの里に戻ってくる、つもりだったのじゃ。どうせ、

停戦など、一時の事だろうと、思つてな。じゃが、陽炎の里

が、わしに任務を与えることは、

二度と無かった。陽炎の里は、滅びてしまっていたからの。」

ナルト「じゃあ、何で？今更、ノコノコと、戻ってきたんだってばよ？！じいちゃんが、起爆札を

仕掛けた行つたのは、任務だったからだろ！？陽炎の里が、無くなつちまつたんなら、

わざわざ、木ノ葉を潰す理由は、無いってばよ！・・・まさか、誰かに頼まれたのか？」

その問いに玄翁は、ハハハと笑って、それは無いから安心せい。と言った。

ナルト「だったら何で？」

玄翁「何というのかな・・・、何だか勿体無くなったの。」

ナルト「起爆札の事か？何だよそれ！じいちゃんの変な気分で、里の人を殺そうとした

ってのか？そんなの、絶対におかしいってばよ！」

玄翁「トラップ使い、最後の大事な事じゃ。」

ナルト「そんなことは、させねえ！今、俺の仲間達が、起爆札を全部、回収している所だ！」

玄翁「甘い。小僧。起爆札を爆発させなくても、活用は、出来るのじゃよ。」

ちょうど、その頃、9割方の起爆札を回収した。そして、オレとシ

カマルが、この量のトラップが、陽動だと言ふ事に、気が付き、既に、皆が、行動に移していた。

『キューーン』という、鳥の鳴き声が、聞こえた。

玄翁「全員戻ってきたようだな。では、起爆装置を作動させるとするか！」

ナルト「そんなこと、絶対させないってばよ！」

すると、玄翁は、起爆装置に向けて、クナイを放った。

影分身の術

ナルトの影分身が、玄翁の放ったクナイを全て受けとめた。

玄翁「ほほ、やるな。なら、これでは、どうだ！」

次に放ったクナイの数は、さっきの倍以上もあった。

ナルト「（これは、・・・マズイってばよ!!!）」

牙通牙

キバ「はっ、間一髪ってところだな。」

赤丸「ワンワン！」

ナルト「キバ！赤丸！どうして、ここが!？」

と、大層驚いた表情をしながら聞いた。

キバ「ヒナタに感謝するんだな。お前が、理由も無くないなくなるのは、変だと思って、白眼で、

必死に、探してくれたんだ。とは、言っても、シカマルとサスケが、大体お前が、

いそうな場所を、・・・というのが、ここなんだが、目星を付けていたから案外簡単に

見つけられたって訳だ。」

玄翁「なるほどな、若者相手だといい、侮ってはいかんと言っ訳か。」

すると、シノが、玄翁の後ろに立っていた。

シノ「そうだ。お前は、我々の力を見誤った。」

そう言った時には、奇壊蟲が、玄翁の足をよじ登っていた。

玄翁「（何?!）」

次の瞬間には、変わり身を使って爆発。逃亡をしていた。

シノ「・・・逃がしたか。俺達も追いかけるぞ。」

そう言つて、3人と1匹は、外へ向かった。そして、玄翁は、火影岩の上に来ていた。

玄翁「これで、終わりだ!」

と、言いクナイを、起爆札に切り付けようとした。

#### 影首縛りの術

シカマル「成功。」

玄翁の動きが、シカマルの影に捕まった。

玄翁「読まれていたか。」

シカマル「ああ、王手だ、じいさん。そのまま、こっちに来てもらおうか。」

そう言つて、シカマルの影に操られ、シカマルと対峙する形となった。

シカマル「チョウジ。こいつを、拘束してくれ。」

その指示通り、チョウジが、拘束しようと、玄翁の体に触ると、煙が出て、逃がしてしまった。

玄翁「これで、木ノ葉はおしまいじゃ！」

そして、クナイを起爆札に命中させた。・・・しかし、何も起こらない。すると、テンテン、ネジ、オレ、そして、火影岩から、出てきた3人と1匹が、現れた。

テンテン「お生憎様。その起爆札は、解除したわ。」

ネジ「顔岩内部の起爆札も全て、解除した。」

ナルト「これまでだってばよ。じいちゃん。」

そついうと、サクラ、いの、ヒナタ、リーも現れた。

サクラ「そつよ。観念なさい。」

リー「もう、逃げても無駄ですよ。」

ナルト「じいちゃんが、どんな凄げえトラップ使いか、知らねえけど、俺達のチームワークは、

それ以上なんだってばよ！」

すると、空に向かって、花火を上げた。皆の視線が、そっちに向いている間に、印を結んでいる。

サスケ「じいさん！それは、幻術の印だな。止めておきな、この写輪眼の前では、通用しない。」

その言葉に、途中まで、結んでいた、印を止めた。



印を結ぶのを止めた。と、思ったら、違う印を結びなおした。

### 口寄せの術

すると、呼び出した、鳥で、逃走を図った。

いの「させないわ!」

### 心転身の術

で、玄翁に乗り移って、鳥から、離れたかと思うと、直ぐに術を解いてしまった。

サクラ「どうしたの!?!いの!」

いの「アイツの体、凄く痛い。よく、あんな痛みに耐えながら、戦えるものよね。」

そして、玄翁は、起き上がり、また、逃走を図ろうとした。が、リ  
ーの体術に破れ、捕まった。

シカマル「そういや、さっきアイツが、口寄せした鳥は?」

その言葉に、皆が、一斉に探した。

ヒナタ「あそこ!」

ヒナタが、指を指す方向を見ると、いた。

ヒナタ「足に、起爆札が！」

玄翁「三代目の顔岩には、亀裂の修復した跡がある。そこは、他の箇所より脆い。

そこにも、仕掛けをしておいた。そして、その起爆札が、爆発すると、連鎖反応を起こし

他の顔岩も、崩れ、この台地ごと、潰れるという訳じゃ。」

テンテン「そんなところにまで、仕掛けを……。」

ネジ「あの鳥を、顔岩に近づけさせるな！」

サスケ「ああ、分かってる。」

オレの千鳥の新しい改良型の術で……、あの鳥を消す！

千鳥鋭槍

と、千鳥を形質変化させ、鳥に突き刺すと、思ったとおり、鳥は、消えた。

その小規模な爆発は、下にいた、ガイ先生たちにも見えていた。

そして、日も傾き始めた頃。玄翁の治療をサクラが、していた。

サクラ「体の中は、もうボロボロよ。こんな体で、今日まで生きていたことが、

不思議なくらいよ。」

ナルト「じいちゃん。」

と、心配そうにナルトが、玄翁を見る。すると、玄翁が、口を開いた。

玄翁「残念じゃ。歴史に名を残し損ねた。じゃが、・・・楽しかったぞ。」

そついい残すと、安らかに死んでいった。

ナルト「どうゆう事だよ？じいちゃん？楽しかったって、どうゆう事だってばよ？！

玄翁のじいちゃん！！」

すると、一枚の写真が、落ちた。それを、シカマルが、拾った。

シカマル「（え？！ナルト？いや、違うか。）」

一瞬見間違えるほど、写真に写っていた人物は、ナルトにそっくりだったのだ。そして、裏面にメモを、見つけた。

シカマル「（私との、宝探しに勝ち、得意満面の息子、か。・・・  
・・・宝探し？）」

すると、突然シノが、話し始めた。

シノ「気付いていたか？今回の事件で、木ノ葉には、1人も犠牲者は、出ていない。」

オレも気付いてはいたが、その発言で、皆は、ハッと気が付かされた。

もしかしたら、本気で、木ノ葉を漬す気は無かったのかも、知らない。まあ、今となっては、分からないことだが・・・。

ある日、風の国、砂隠れの里からの緊急応援要請が、木ノ葉の里に入った。詳細な、内容は、我愛羅に挑戦状を叩きつけた4名が、人質を連れて、木ノ葉方面に逃走中。それを、追跡しているのが、我愛羅、カンクロウ、テマリ の3名。それ以外は、よく分からないが、とりあえず、緊急らしい。そこで、応援として、呼ばれたのは、第3班、第7班、第8班、第10班の中忍2名、下忍10名からなる、通称、ルーキーナイン＋スリーだ。今回の小隊長は、シカマル、副隊長は、オレとなった。集合場所の木ノ葉大門へ行くと、シノ、サクラ、ネジ、ヒナタ、の4名が、欠けていた。

シカマル「よし。全員揃ったな。じゃあ、出発するぞ。」

ナルト「ええ！？これだけか？里に残っている、下忍総動員の作戦って、聞いたぜえ？」

シカマル「これで、全員だ。」

ナルト「おかしいだろお！サクラちゃんは、修行中だから仕方ないとしても！シノだって、

ネジやヒナタだって、いるはずだってばよ！」

キバ「確かに、索敵能力のある忍者が、俺と赤丸しかないってのは、変だな。」

リー「このチーム、『イケイケ超攻撃型チーム』という、事ですか？」

サスケ「まあ、そんな所だ。」

そして、そのいない4人が何故いないのか、という説明を、オレが続けた。

サスケ「ついでに、何で、シノ、サクラ、ネジ、ヒナタ、の4人がここにいない理由を

説明すると、奴らは、既に出発済みだ。その4人は、別行動で、今後も戦闘には、

参加しない。理由としては、広範囲の索敵行動と、そして、戦闘が始まった場合の

医療行為に、専念してもらう事になったからだ。」

テンテン「なるほどねえ。よく考えてるじゃない！流石、サスケ君！」

あ、いや、これ考えたときには、シカマルも入ってたんだけどな。と、思いながら、シカマルのほうに、視線を送ると、溜め息を付いて、首を振っていた。どうやら、否定はするな、という事らしい。

ナルト「よし！皆！早速、行くつてばよ！！」

と、仕切ると、キバとチョウジに突っ込まれた。

キバ「てめえは、リーダーじゃねえだろ！？」

チョウジ「小隊長と副隊長は、中忍のシカマルとサスケでしょ。」

ナルト「そうだった……。そんじゃあ、早いとこ作戦を決めてさ

つさと、出発しようぜ！

隊列は、どうすんだってばよ？縦か？横か？それとも、騎馬戦の時みたくするのか？」

騎馬戦は、おかしいだろ！と、突っ込もうと思ったが、時間口入を避けるため、心の中にしまっておくことにした。

シカマル「追跡をするのであれば、縦の隊列かもしれない。しかし、今回は、待ち伏せだ。」

異例だが、今回は、基本ツーマンセルでの行動にする。  
単独行動は、いかなる場合も

禁止だ。良いか？絶対に、犠牲は出さない。」

ナルト「ああ。分かったってだよ！」

それから、直ぐに、木ノ葉の里を後にした。そして、移動中に、シカマルから、ツーマンセルのペアが、発表された。ついでに言うが、これは、オレも知らない。

シカマル「いのは、俺に付け！」

いの「うん！」

次のペアは、

シカマル「チョウジは、キバと！」

キバ「頼むぜ！チョウジ！赤丸！」

チョウジ「うん！」

赤丸「ワンワン！！！」



その次のペア、

シカマル「リーは、ナルトと!」

リー「はい!勝手な行動は、謹んでくださいね、ナルト君。」

ナルト「そんな、念を押すなってばよ。」

って、事は、最後に残ったのは、

シカマル「最後は、サスケとテンテンだ。」

テンテン「よろしくサスケ君。まあ、私達の相性は、100%よね。」

一体何が、100%なんだか……。と、思いながらも、どんどん進んでいった。すると、急に、シカマルが、止まった。

ナルト「おい、シカマル。どうしたんだってばよ?」

シカマル「しばらくここで、待機する。」

ナルト「待機するって・・・、こんなところで、油売ってて良いのかよ?!」

すると、ナルトに集中砲火という、言葉の嵐が、飛んでいく。

キバ「少し、黙ってる!ナルト。」

いの「そうよ。シカマルには、ちゃんと、考えがあるのよ!」

チヨウジ「そうそう、ナルト。リーダーには、ちゃんと従わなきゃね。」

ここまで、言われると、ナルトも折れるしかなかったようだ。

シカマル「（シノ、頼むぜ。）」

その頃、テマリと敵忍1名が、交戦状態に入った。

そして、暫くも経たない内に、カンクロウも敵忍1人と、交戦状態に入った。

その後、残り1人で追跡を行っていた、我愛羅も、敵忍1人と、交戦状態に入った。

それから、暫く経った後の事、視点はこっちに戻る。

ナルト「なあ、シカマル。いつまで、こうやってるつもりなんだ？」

シカマル「うっせーなあ、待ち伏せってのはな、面倒が、多いんだよ。今は、その面倒を、

シノとネジとヒナタが、引き受けてくれてんじゃねえか。だから、ちつとは、

我慢しろ。」

そう言った後、直ぐに、シノの寄壊蟲が、シカマルの元へ、飛んできた。

シカマル「おい！情報が、来たぜ。」

その言葉に、全員の耳が、ダンボになった。

ナルト「待ちくたびれたってばよ！」

そして、情報の内容を、シカマルが、話し始めた。

【GW】File・62

シノの寄壊蟲達が、暗号文の形になった。

シカマル「何てこった！もう、始まつてるぜ。よし、キバとチョウジは、西の森！

俺といのは、北東の丘。ナルトとリー、お前達は、北西の森だ！

サスケとテンテンは、逃走している、もう1人と戦ってくれ、お前たちなら、

2人で、何とかなるだろ。」

その指示に、それぞれ返事をし、散った。

テマリ・シカマル・いのside

戦闘開始から、大分経ち、テマリもへたばってきた。

テマリ「（アイツは、私の攻撃をことごとく、避けた。こうなったら、あれしかない。）」

風遁・龍ノオオシゴト

それを、発動させると、物凄い風が、敵忍（以下、孔雀）に襲い掛かった。しかし、孔雀は、

風返し

という術で、跳ね返し、逆にテマリが、ダメージを食らい、気絶した。

孔雀「そのまま寝てろ！永久にね！」

そう言うと、風を操り、気絶しているテマリに攻撃をした。しかし、気絶しているはずのテマリが、回避した。

孔雀「何?!」

すると、テマリが、目を覚ました。

テマリ「はっ?!」

後ろには、シカマルというのが、立っていた。

シカマル「間一髪だったが、影真似の術。成功。」

孔雀「お前達は?!」

シカマル&いの「砂の同盟国、木ノ葉の忍だ。」

すると、孔雀は、怪訝な表情をした。

孔雀「木ノ葉の援軍か。」

テマリ「木ノ葉の援軍が、お前だとはな。我愛羅とカンクロウが、里の娘をさらった奴を

追っている。こっちは、良いから追ってくれ。」

シカマル「情報は、入ってる。我愛羅もカंकろうも、それぞれ、戦闘に入ってる。

今、木ノ葉のツーマンセルが、カバーに向かっている。そして、人質を

持っている奴には、自称、最強のコンビのツーマンセルが、直に戦闘に入る。」

テマリ「手回しが良いな。面倒臭いが、やる以上は、きっちりやるんでな。」

すると、孔雀が、風を操り、攻撃を仕掛けてきた。その風は、シカマルの頬を切った。

シカマル「（何で、チャクラの量だ。）」

テマリ「いや、どうやら、あの剣が、チャクラを増大させているようだ。」

シカマル「（どうして、心の中を？まあ、いいや。）攻守の全てを、あの剣に頼っている訳か。

でも、俺の術の射程内までは、距離がありすぎる。テマリ。」

そう言うと、コソコソと相談をした。

いの「（私の居場所が、ないみたい。）」

すると、テマリが、

テマリ「やってみるか。」

そう言うと、術を発動させた。

大カマイタチの術

孔雀「はん。どこ狙ってるんだい？」

その途端に、孔雀の自由は、奪われた。

影真似の術

孔雀「何故だ!？」

【GW】File・63

シカマル「何故つか？見せてやるよ。その隣にある滝だ。透明な水でも、これだけ太い

水流なら、影が出来る。滝を持ち上げることで、俺の術の間合いは、飛躍的に

伸びたんだよ。今だ、テマリ！」

テマリ「ああ、分かってる。」

口寄せ・斬り斬り舞

身動きの取れない、孔雀にクリーンヒットし、滝壺へと落ちていった。

テマリ「いっちょ上がりだ。」

そう言うと、大層嬉しそうに笑った。

シカマル「やれやれだぜ。」

カンクロウ・キバ&赤丸・チョウジside

カンクロウは、既に防戦一方の展開になっていた。そして、敵忍（以下、竜眼）の避けきれない一発が、来た時！

双頭狼・牙通牙



が、その攻撃を、防いだ。

カンクロウ「何！？」

竜眼「何者だ！」

キバ&チョウジ「砂の同盟国、木ノ葉の忍だ！」

と、カツコよく(?)決まった。

カンクロウ「俺は、良いから、我愛羅を！」

キバ「大丈夫だ。他の2人のところにも、仲間が、向かってる。」

カンクロウ「何だ、結構やるじゃん。」

キバ「お前は、この戦いに集中しろ！」

カンクロウ「生意気言っじゃん。」

竜眼「僕の竜眼ガリアン刀の前では、1人や2人増えたところで、意味はないよ。」

その後、戦闘に入ったが、息が、完璧なほど合わず、逆に竜眼を、逆撫でしていた。

しかし、最後の一発には、こちらでも完璧なほどに息が合い、カンクロウの黒秘技・機々一発で、抹殺した。

竜眼「わああああ！！！！！！」

という、悲鳴を森中に響かせて。

カンクロウ「終劇。」

キバ「やったぜ！」

チヨウジ「うん！」

赤丸「ワンワン！」

我愛羅・ナルト・リー side

一方の我愛羅は、優勢だった。ナルトとリーが、遠めから見てもそう分かった。我愛羅は、敵忍（以下、宝亀）の、チャクラを吸う防具に手間取りながらも、確実に追い詰めていった。

我愛羅「（砂縛柩は、使えない。）」

そう、砂縛柩を一度、試してみると、チャクラを吸われてしまつて、逆効果だったのである。そこで、我愛羅は、チャクラを吸われることを、覚悟して、宝亀の忍具を、ガツチリと砂で固め、遠心力を有効に活用して、投げ飛ばした。

そこに、ようやく到着した、リーの木ノ葉旋風を腹部に、ナルトの螺旋丸を背中に受けた。これらの、攻撃は、不意打ちだったらしく、チャクラが、吸われる事は、無かった。

我愛羅「（アイツ・・・、ナルト？）」

ナルト「我愛羅！留めの一発だ！決めてやってくれればよ！」

我愛羅「そうか、木ノ葉の援軍か。」

最硬絶対攻撃・守鶴の矛

で、宝亀の心臓部分を串刺しにした。

ナルト「よっしゃ！サスケとテンテンの応援に行くつてばよ！」

そう言つて、まだまだ元気な2人と我愛羅は、マツリを奪還すべく、そこを立ち去つた。

## 【GW】File・64

ネジ・ヒナタ・シノ・サクラside

この4人は、ネジとヒナタは、別行動。シノとサクラが、一緒にいた。

白眼

ネジ「（シカマル達の方は・・・、片付いたようだな。キバ達の方は・・・、ああ、キバ達の

方も、片付いたな。ナルト達は、ほとんど、我愛羅で片付けたな。」

白眼

ヒナタ「子供を、背負った忍者に、サスケ君とテンテンさんが、どんどん近づいている。」

そして、多くの奇壊蟲に囲まれている、シノは、

シノ「田の国へ、向かっている。」

サクラ「え？それって、確か・・・。」

シノ「そうだ。昔、大蛇丸が、治めていた音隠れの里が、ある国だ。治療部隊が、遅れるわけには

行かない。そろそろ、距離を保ちつつ追いかけるぞ。」

サクラ「分かったわ。（誰も、怪我をしていないのは、良い事なんだけど、それじゃあ、私が、

来た意味、あまり無いじゃない！しゃんなろー！！）」

田の国へ、向かっている事を、シノの奇壊蟲が、全員に伝え、皆が、追いかけて行った。

サスケ・テンテン side

オレとテンテンは、人質を持っている、敵忍（以下、水虎）を、追跡していた。暫く追いかけていると、道筋は、どんどん曲がっていき、田の国のとの国境へ向かっていた。

テンテン「ねえ、サスケ君。敵は、どんどん国境付近に向かっている気がするんだけど？」

サスケ「ああ、その通りだ。国境を越えられると、厄介だからな。もっと飛ばすぞ！」

そして、待ち伏せとトラップに、気をつけながら、テンテンが、出せるスピードの限界で、追跡をした結果、水虎を、崖に追い込むような形で、追いついた。

水虎「ハッ、追いつかれたか。まあ、良い。貴様らは、この最高傑作の剣で、

蹴散らしてくれるわ！！！」

そう言って、黒刀を、振り回すと、炎が、出てきて、こっちに、攻

撃をしてきた。

サスケ「テンテン。あの人質の女の子（以下、マツリ）に当たらないようにしながら、忍具の雨を、

降らすことは出来るか？」

テンテン「もちろん！任せなさい！」

そう、自信満々に言った。オレは、の言葉を信じて、術発動の合図を出した。その合図に、テンテンは、頷いた。

#### 操具・天鎖災

で、忍具の大雨を降らせた。しかも、水虎の背中にいる、マツリを、一切傷付けることなく。そんな、技術に感心している時間もなく、オレは、術を発動させた。

#### 幻術秘術・闇？

この術を、完璧にマスターするには、紅先生にも、迷惑をかけながらも、24時間もの時間を費やした。しかし、本来は、10年以上も掛かってマスターする術らしい。

そして、この術に掛かった者は、幻術世界の暗闇という恐怖の中で、行き続けなければならないらしい。水虎は、その恐怖と死後も戦う羽目になった。テンテンの忍具が、急所のハヶ所すべてに命中したのだった。

【GW】File・65

オレ達が、水虎を倒してから、10分もしない内に、今回の任務に参加した全員（我愛羅、カンクロウ、テマリ、リー、ネジ、テンテン、ナルト、オレ、サクラ、シカマル、チョウジ、いの、シノ、キバ&赤丸、ヒナタ）が、この場所に、集まっていた。すると、気を失っていた、マツリが、目を覚ました。

マツリ「我愛羅先生！」

我愛羅「マツリ……。」

という、多分、感動の再会を果たした。

テマリ「お世話になったな、木ノ葉の忍びさん達よ。」

カンクロウ「結構、助かったじゃん。」

そういう、やり取りをすると、砂の忍3名と、その弟子1名が、自国へと戻っていった。

すると、シカマルが、ボソツと呟いた。

シカマル「やっぱ、サスケとテンテンを組ませたのは、正解だったのかもな。」

しかし、その言葉は、テンテンの耳には、届いていた。

テンテン「だから、言ったでしょう？私とサスケ君は、相性100

%だって。コンビネーションも

ばっちり合ってたし。ねっ？サスケ君。」

そう言ったテンテンの発言は、いのとサクラの耳にも、しっかりと届いていた。

いの「何言ってるのよ！サスケ君と相性が一番いいのは、私でしょ？！」

サクラ「コンビネーションなら、任務が一番多く、一緒に、こなしている、私に適うわけが

ないでしょ！？（しゃんなろー！！サスケ君のパートナーは、私よ！！！！）」

その様子に、やれやれと思っているのは、どうやらオレだけではなく、シカマルや、その他の人間も感じていることだった。（ナルトは、複雑な心境。）

そんな様子を、崖の上から、眺めている者達がいた。

カカシ「ふむ。折角、駆けつけたのに、終わっちゃっていますね。」

自来也「まだまだ、未熟なボンクラ共が、ほんのちょびつと、成長した……。」

というだけの話じゃのう。」

カカシ「手厳しいですね。ところで、予定している、ナルトの長期間による修行の旅は、

いつ、出発する、お考えですか？」



自来也「そうじゃのう……。大体1週間後と、考えておる。」

カカシ「ナルトを、頼みます。」

その言葉に、自来也は、力強く頷き、

自来也「お前も、精々、暁が、本格的に、動き出す前の2年間を有効に使うが、良いのう。」

カカシ「はい。」

そんな、会話が、なされてから、ちょうど、1週間後、ナルトと自来也は、木ノ葉を出発した。

そして、残された忍達も、再会の日に、恥をかかぬように、修行と任務に明け暮れる日々が、始まった。次からのお話は、ナルトと自来也が、帰って来たところから、始まるのであった。

【GW】File・66

今日は、3月8日。既に、木ノ葉には、春が、到来していた。そんな頃、約2年半前に修行に出発した者が、帰ってきていた。

ナルト「2年半ぶりくらいだってばよ。」

自来也「そうじゃのう。」

そう言うのと、ナルトは、電柱に登って、木ノ葉の景色を一望した。

ナルト「懐かしい！全然、変わってないってばよお。皆！うずまりナルトが、帰ってきたぞ！！」

お、そういや、綱手のばあちゃんの顔岩が、増えてやんの。

「

そんな、感想を持っていると、下から、懐かしい声が、聞こえてきた。

サクラ「ナルト？ナルトなの？ナルトなんでしょ！？いつ帰ってきたの？」

ナルト「たった今だってばよ。」

そして、電柱から、飛び降りた。すると、そこには、サクラと木ノ葉丸、ウドン、モエギの4人がいた。

ナルト「久しぶり、サクラちゃん。」

そう言っで、目の前に行くと、目線の変化に気がついた。

サクラ「（何か、随分見ない間にたくましくなっちゃって。）どう？・・・私、少しは、

女らしくなった？」

女心を、全くと言って良いほど、理解していないナルトは、

ナルト「大丈夫！全然！変わってないってばよ！」

と、言っでサクラを怒らせてしまった。その後、木ノ葉丸達と、軽く会話をした後、火影室に向かった。

五代目「久しぶりだな、2人とも。修行の成果は、あつたんだろうな？」

自来也「何の成果もなしに、戻ってくるとでも、思っていたのかのう？」

ナルト「ばっちりだっでばよ！」

五代目「では、早速、成果を見せてもらうつとしよう。」

すると、綱手は、人を呼んだ。

五代目「入れ。」

呼ばれた人物は、窓の外から入ってきた。

カカシ「よ、でかくなつたなあ、ナルト。」

ナルト「カカシ先生！・・・先生つてば、全然変わってないつてばよ！そうだ！」

そして、何かを手渡した。

カカシ「ぬわぁにい？！お前！こ、これは・・・！？」

ナルト「これつてば、イチャイチャシリーズ3年ぶりの最新作。すんげえ詰まんねえけど、

先生、これ好きなんだろ？」

その様子を、見ていた自来也が、拗ねた。

五代目「よし！お楽しみは、その辺で、終わりだ。今回、ナルトとサクラの相手を

するのは、カカシだ。カカシ相手に、どれだけやれるか・・・。その結果によって、

今後の任務に関する、処遇を決める。サクラ！お前も、無駄に私の元で、修行を

してきたのでは、あるまい。」

サクラ「はい！」

カカシ「それじゃあ、始めるか。第三演習場に集合だ。じゃあな。」

すると、カカシは消えた。

ナルト「ぜってー、本を読む気だつてばよ。先生の奴。」

それから、3時間後に、第三演習場に行った。

移動中に、ナルトは、シカマルとテマリに会い、デートだと、疑った。それは、兎も角、木ノ葉の、元ルーキーナイン＋スリーの中で、下忍なのは、ナルトだけという、事実を知り、我愛羅は、風影になったということも知って、逆に闘志を燃やしているのだった。

そして、第三演習場で、待つこと、2時間。

カカシ「いやあ、悪い悪い。実は、ここに来る途中で、お婆さんが、困っててな。」

カカシが、言い訳を言い終える前にナルトとサクラは、突っ込んでいた。

それから、懐かしの丸太の場所まで誘導された。すると、昔よりは、勘が良くなった、ナルトが、疑問を抱く。

ナルト「ここってば、一番最初の場所だよな？ってことは、サスケも来るのか？」

カカシ「いや、アイツは、来ないよ。」

ナルト「じゃあ、今は、何してるんだってばよ？」

カカシ「いや、それは俺にも分からん。何せ、最近、奴に会った奴は、いないしな。」

ナルト「それって、どういう意味だつてばよ?！」

カカシ「さあな。でも、無事に生きてるのは、確かだろうさ。」

その言葉を聞いて、安心したのか、それ以上問い詰めることはしなかった。

カカシ「さて、本題に入る。お前たちは、この鈴を、俺から奪えば良い。ルールは、昔と一緒で、

何でもありだ。制限時間は、明日の夜明けまでだ。・・・

よーい、始め！」

それから、激戦(?)は、数時間にも及んだが、最後は、呆気なく、弱点を読まれた、カカシが、破れた。その後、一楽のラーメンを久しぶりに会った、イルカ先生に奢ってもらい、その翌日。

今日一日までは、休暇を貰っていた為、木ノ葉の里をブラブラと散歩をしているナルトがいた。すると、懐かしの面々に合う羽目となった。

シノ「久しぶりだな、ナルト。」

と、御神木のそばを通り過ぎようとした時に、声をかけられた。

ナルト「あ?誰?」

その反応は、ある意味合っていた。なぜなら(笑)、顔が、ほぼ隠れていて、判断に支障をきたすからだ。

シノ「俺だ。」

そう言ってから、1分後位に、やっとナルトが気がついた。

ナルト「お前ってば、シノ！」

やっと、思い出してもらえた、シノは、若干いや、かなり拗ねていた。すると、今度は、キバと赤丸が、やってきた。

キバ「おお！ナルトじゃねえか！」

ナルト「キバ！・・・もしかして、そこにいる犬ってば、赤丸か？」

キバ「何言ってたんだ？赤丸に決まってたんだろ？」

その後、どんだけデカくなってんだ・・・。という話をしていたら、ヒナタが突然現れ、そしてまた、突然倒れた。それから、少し経ち、旧第8班とは、別れ、また散歩を再開した。



それから、ナルトは、昔、リーが建てた道場の近辺を歩いていた。すると、そこでも、懐かしのメンツに会うことになった。

リー「ナルト君？ナルト君ですか！？」

ネジ「ナルト？」

テンテン「え？！帰ってきてたの？」

ナルト「久しぶりだってばよ！ゲジマユにネジ、それから……・テンテン！」

テンテン「（絶対、忘れてたわね。）」

実際に、ナルトは、テンテンの名前を忘れていた。すると、ナルトが、そういえば！といったような口調で、話し始めた。

ナルト「そっぴゃあさ、テンテン！サスケ知らねえか？お前ってば、確か、すげえサスケと

仲良かったよな？」

テンテン「そうね……、1年くらいは、会ってないかもしれないわね。」

そう言うと、ナルトが茶化し始めた。

ナルト「やっぱ、お前つてば、サスケにフラられたんだな？ かわいそーに。」

すると、やはりゲンコツが、飛んできた。そして、ナルトが、打たれた頭を撫でていると、急にテンテンの背後に人影が、現れた。その人物は、暗部の仮面と格好をしていた。が、その手は、テンテンの首元があり、手には、クナイが、あった。その様子に、その場にいた、全員が、身構えた。

ネジ「何者だ！」

そうネジが、言うと、その人物は、「久しぶりだな。皆。」と、言う。手元にあった、クナイは、いつの間にか、バラの花になっていた。そして、困惑気味の様子に、フツと笑って、仮面をはずした。

ナルト「サスケー!!」

今、ナルトの口から出た、名前を聞いて、テンテンも振り返った。

テンテン「サスケ！」

サスケ「・・・ったく、うるせーな耳元で。というより、ナルト。いつ帰ってきてたんだ？」

ナルト「昨日だってばよ？ それより、サスケ。その格好つて、もしや・・・。」

サスケ「ああ、暗部のだ。」

やっぱり。という顔を、そこにいた全員が、していると、ネジが、

口を挟んだ。

ネジ「だが、暗部の者が、顔を見せていいものなのか？」

サスケ「五代目から、許可は、出ている。ナルトに会ったら、仮面をはずしても良いってな。

オレも昨日の晩に帰ってきたばかりなんでな。正直、ここにナルトが、いるとは、

思わなかった。」

テンテン「じゃあ、どうしてここに？・・・まさか！」

サスケ「ああ、ここに来たのは、去年のオレの誕生日にプレゼントくれたろ？まあ、あん時には、

任務で、里を空けていたから、見たのは、1ヶ月後くらいだったんだけどな。

まあ、なんだ。・・・そんな時のお返しだ。」

テンテン「ありがとう、サスケ。・・・でも、1本って、ケチ臭くない？」

サスケ「あのな！」

と、弁解を始めようとしたところを、テンテンが止めた。

テンテン「なぐんてね。嘘よ。大事にするから安心して。」

その後を訪れた、沈黙は、とても息苦しいものとなっていた。

ナルト「（サスケ、テンテン。どうにかしろってばよ!）」

ネジ「（息が、詰まりそうだ。）」

リー「（青春とは、こういうものも、含まれているのですね!ガイ先生!ですが、苦しい。）」

息苦しいのは、当の本人も同じようだった。

テンテン「（久しぶりすぎて、会話が、続かないじゃない。）」

サスケ「（・・・そろそろ、時間だな。行くか。）これから、任務に就くことになってるから、

ナルトも、精々頑張れよ。じゃ。」

この任務が、後で、色々と関係してくることになるのだが・・・。  
今は、その事を、置いといて、その時が、来たら、話すことにしよう。話は、戻る。

そう言うと、仮面を付け直して、消えていった。その様子から見ると、サスケは、全くと言って良いほど、何も感じていないようだった。そして、サスケが消えてから、皆の心肺機能が再開した。

ナルト「つぶは!はあはあはあ・・・。オイ!テンテン!息苦しいってばよ!」

テンテン「知らないわよ！私に言わないでよね！私だって、苦しかったわよ！」

すると、冷静なネジが、やっと、口を開いた。

ネジ「それにしても、サスケが、暗部にいるとは、思いもしなかったな。」

リー「ええ・・・ですが彼の強さは、昔からずば抜けていましたからね。今更、別に、大して

驚くことでも、ないでしょう。」

ナルト「なるほど！だから、最近アイツにあった奴が、見つからねえ訳だってばよ。」

うんうん。と1人で、頷きまくっていた。それから、まもなく、ナルトは、彼らとも別れて、また里内をブラブラと散歩をしていた。すると、今度は、アスマ班、旧第10班のメンバーに会った。

ナルト「よお、シカマル！また会ったな。チョウジといのは、久しぶりだってばよ！」

チョウジ「ナルト！」

いの「ナルトじゃない！元気にしてた？」

これから、いのが延々と話し始め、面倒くさがり屋のシカマルだけじゃなく、ナルトやチョウジもだんだん時が経つにつれて、面倒になっ

それから、暫く過ぎて、ようやくナルトは、適当な理由を付けて、逃げて家に帰ってきた。

ナルト「ったく、いのの奴、何時まで話すんだっつーの。」

と、愚痴を零しながらも、冷蔵庫を漁りはじめた。が、しかし、まだ何も買っていない為、何もあるはずがない。そこで、カップラーメンの大人買いと、牛乳を買いに行った。その帰りには、一楽のラーメンを食べて、その日の食事は済ませた。そして、翌朝、大変な任務を言い渡されることになるのだった。

翌日。ナルトは、久しぶりの任務を行うため、昨日キバ達と会った場所で、カカシ先生とサクラと待ち合わせをしていた。恒例になつてはいるが、カカシ先生が、遅刻してきた。その時、砂最速の鳥。鷹丸が、飛んできたのが、見えた。その後、任務を受けに行くために、任務受付会場へ、3人は向かった。

すると、入って直ぐに、任務が言い渡された。

五代目「砂隠れの風影が、暁のメンバーによつて連れ去られた。それに伴い、砂から、正式に

応援の要請があつた。そこで、お前たちは、直ちに砂隠れの里へ行き、状況を把握し、

木ノ葉へ伝達。その後、砂隠れの命に従い、彼らを、バツクアップしろ！」

それから、カカシ班が、里を出発したのは、間も無くの事だった。

サクラ「師匠、行つてまいります。」

五代目「ああ！」

ナルト「行くつてばよ！カカシ先生、サクラちゃん！」

と、行つた矢先に、自来也が、現れた。

自来也「おう、ナルト！これから任務か？」

ナルト「ああ、我愛羅を助けに行くんだってばよ。」

自来也「何?!もう、情報は、まわって来ていたのか!」

五代目「そういう事だ。」

そんな、会話をすると、自来也は、ナルトだけを呼び出して、小声で言った。

自来也「良いか、ナルト。暁相手に、決して無理はするな。」

ナルト「アイツ等は、俺に用があんだ。今度は、こっちから出向いてやらあ!」

自来也「確かに、お前は強くなったがのう、冷静を欠けば、必ず墓穴を掘る事になるぞ。」

直ぐに、熱くなるのは、お前の悪い癖だからのう。最後に、分かっているとは、思うが、

絶対に、あの力だけは、使つなよ。」

その言葉に、ナルトは、視線を下げながら頷いた。そして、カカシ班は、木ノ葉を出発した。それから、半日程、経った頃、帰路に着いていた、テマリと合流し、砂隠れへの道を急いだ。

それから、1日半もの間、走りっぱなしだった。その間の食事は、非常食である、兵糧丸だけであった。そして、1日半ぶりに、一時休憩をとってから、カカシ班とテマリは、また走り始めた。

その頃、五代目は、宝くじで、1等を、とった為、縁起が悪い。もしかしたら・・・、という勘が働き、新たに、砂隠れへ増援部隊を



送ることにした。

そして、日が昇ってきた頃に、カカシ班とテマリは、やっと砂漠に出ることが、出来た。

砂漠に足を踏み入れてから、間もなく、砂漠独特の砂嵐に見舞われ、あと少し、というところで、足止めを食らって、特にナルトが、イライラしていた・・・。

カカシ班が、砂漠で、砂嵐により、足止めを食らっていた頃。

五代目「お前達には、カカシ班と同様に、砂隠れに行き、その後、砂隠れの命に従い、彼らを、

バックアップするのが、今回の任務だ。わかったな？」

その言葉に、その班の全員が、返事をした。

ガイ「ははっ！」

リー「任せてください！」

テンテン「了解です。」

ネジ「承知。」

その良い返事に、綱手も言葉を返した。

五代目「よし！」

ガイ「ガイ班、これより出発します！・・・よし、皆。砂隠れまで、1日で行くぞ！」

リー「ガイ先生！1日とは言わずに、半日で行きましょう！」

そんな会話に、テンテンとネジの本音が零れる。

ネジ「どう考えたって、3日は、掛かる。」

テンテン「そういう、ノリでする会話、やめて下さい。もう。」

そんな非難の声には、聞く耳を持たず、ガイが、

ガイ「出発だー！！皆、俺に続け！青春ダッシュー！！」

リー「はい！ガイ先生！」

そう言つて、走っていつてしまった。

テンテン「もう、恥ずかしい！」

ネジ「諦めろ、テンテン。」

それから、2人も先に行つてしまった、2人を、追いかけるようにして、走っていった。

そして、取り残された、綱手とシズネは、

五代目「相変わらず、元気な連中だ。」

シズネ「そうですね。」

と、笑っていた。

そして、次の日の日の出の時間帯に、駆け込みで、カカシ班とテマリが、砂隠れの里へ入った。そこで、カンクローも、暁のメンバー

により、意識不明の状態だということを耳にし、まずは、カンクロウの治療を先行することにした。その為に、医療施設内にある、治療室3に入ると、サクラは、早速、動き始めた。すると、そこにいた、お婆さんが、いきなり、カカシを襲った。

チヨ「おのれー！覚悟ー！」

カカシ「（ええ！？）」

よく状況を、飲み込めていなかった、ナルトだが、反射的に、影分身を2体出して、応戦した。が、1体は、直ぐに消されてしまい、自分の体術も、流されてしまった。

ナルト「カカシ先生に、いきなり何するんだってばよ？！この、皺くちゃクソババア！！」

（このババア・・・、出来る！）

チヨ「あの時は、よくも！木ノ葉の白い牙め。息子の仇、今こそ、わしが、成敗してくれる！」

その言葉に、カカシ先生が、何かを言いたげだったが、婆さんの隣にいた、爺さんが、婆さんの暴走を止めた。

エビゾウ「姉ちゃんよ、良く見よ。良く似とりはするが、こいつは、白い牙ではねーよ。

それに、木ノ葉の白い牙は、当の昔に死んだ。知らせを受けたとき、息子の仇を

討てなかったと、泣いて泣いて、悔しがっていたらうに。  
なあ？姉ちゃん。」

チヨ「・・・・・・・・・・なゝんてな。ボケたフリ。」

その言葉に、カカシは、はぁ。と、ため息をついた。

今までのゴタゴタで、手の止まっていた、サクラは、カンクロウの叫び声に近い、うめき声で、また、動き始めた。

サクラ「診させてもらいます。」

テマリ「頼む。」

サクラ「カカシ先生たちは、少し、離れていてください。」

そこから、長い長い、新種の毒物との戦いが、始まった。

そして、サクラが、カンクロウの体内にある、毒素を引き剥がし始めたとき、廊下に出されている方の会話は・・・、

ナルト「なあ、カカシ先生。さっき、この婆ちゃんが言ってた、木の葉の白い牙ってどんな人？」

この婆ちゃんといった時に、隣にいるチヨ婆さんを指しながら、イチャイチャタクティスを読んでいた、カカシに聞いた。

カカシ「どんな人って、言われてもなあ・・・。そうだなあ・・・。

まっ、一言で言うと、俺の父親だ。」

その発言は、ナルトの隣にいた、チヨ婆さんにも、聞こえていて、表情を変えた。

チヨ「お主！白い牙の息子か！」

カカシ「はあ。」

と言って、頭を掻いた。

エビゾウ「道理で、良く似とる訳じゃ。」

そんな上空で、飛び交う会話を、ナルトが、ムスツとした表情で、聞いていた。

カンクロウの毒抜きが、ひと段落した頃。木ノ葉から、砂への返書が来た。その内容は、ガイ班の4名を、砂隠れの里に、増援部隊として、送った。というものだった。

そして、カンクロウが、目を覚ました。

テマリ「カンクロウ！カンクロウ！大丈夫か？」

カンクロウ「何だよ？もう、帰ってきたのかよ。テマリ。」

と、無駄口を叩けるようには、なったみたいだ。

テマリ「里の危機だと、聞いてな。」

カンクロウ「心配かけて、済まねえな。」

テマリ「馬鹿。くだらない事、言うな！」

そこまで、姉弟の会話をすると、カンクロウが、カカシに向かって、こう言った。

カンクロウ「木ノ葉の援軍か？匂いで、追跡できる、忍犬がいれば、追跡は、可能だぜ。」

俺の烏の手に、しっかりと、赤砂の蠍が、身に着けていた、布を、握らせといた。」

カカシ「転んでも、ただでは起きない、流石は、砂の忍。」

そう言われ、カンクロウは、軽く笑うと、体に響いた。そして、ナルトが、視界に入った。

カンクロウ「（・・・うずまきナルトか。）」

そう思いながら、また、眠りについた。そして、カカシが、忍犬達を、口寄せした。

#### 口寄せの術

すると、パックンを含めた。八忍犬が、現れた。

ナルト「パックン！」

パックン「ナルトか？久しぶりだな。」

ナルト「パックンちつとも、変わってねえなあ。」

パックン「お主もな！」

その言葉に、若干不満を持ったナルトであったが、直ぐに、八忍犬は、蠍の服の匂いを嗅ぎ、どこかへ消えていった。





その日の夜は、砂隠れの里側に用意して貰った、宿泊場所で、一夜を過ごし、翌日の朝。

パッくんが、暁のアジトと思われる場所を、発見し、報告をしにやってくる。

カカシ「なるほど。ここに奴らのアジトが・・・。」

そう言って、見ていた、地図を指差しながら言った。

パッくん「恐らくな。我愛羅の匂いもそこから、しとった。」

カカシ「もう1つ、頼みがあるんだけど良いか？」

その返答を、待たずに言葉を続けた。

カカシ「今、川の国辺りにいる、ガイ班を、そこに誘導してくれ。」

パッくん「分かった。」

そこまで、話すと、隣で寝ていた、ナルトが、目を覚ました。

ナルト「お！パッくん！」

カカシ「じゃあ、パッくん頼んだぞ。」

パッくん「じゃ、またな。ナルト。」

そう言つて、走り去つていった。その様子に、ナルトも勘付いたようだった。

ナルト「カカシ先生！ひょっとして、暁のアジトが、見つかったのか！？」

カカシ「ああ、直ぐに出発するぞ。」

それから直ぐに、出発の準備を整え、外で、砂の忍が、来るのを待っていた。

カカシ「では、砂の用意が、出来次第、彼等と共に、我愛羅君を救出に向かう。」

すると、やっと、砂の忍5名が、現れた。

テマリ「待たせたな。」

サクラ「テマリさん！」

ナルト「よーし！なら、出発だつてばよ！」

そう言つて、ナルトが、準備体操を始めたときだった。「待て！」という、声が、聞こえたのは。

バキ「テマリ！お前たちは、里に残つて、国境警備に当たれ。」

当然、その指示には、反論が、出たが、上からの指示だ。という、言葉で、引き下がるしかなかった。その時だった。建物の屋上か

ら、チヨ婆さんが、飛び降りてきたのは。

チヨ「わしが行く。砂の忍の代表として、わしが行く。・・・元々隠居の身。どう、

行動しようとして、わしの勝手じゃろ。」

すると、砂の忍の一人が、「無理をなさらない方が。」と、注意をした。その言葉に、チヨ婆さんは、

チヨ「わしを、年寄り扱いするでないわい。それに、可愛い孫に、久しぶりに会えると

いうんじやから、張り切って、可愛がりたいんでのう。」

そして、カカシ班＋チヨ婆さんの4名で、暁のアジトへと、向かう事となった。

カカシ「では、我々は、出かけます。」

バキ「済まぬ。これから、我々も何とか、上役たちを説得してみる。」

テマリ「必ず。後から行くからな。」

その言葉に対して、ナルトは、

ナルト「へっ。その頃には、とつくに、我愛羅は、俺達が、助け出してるってばよ!」

そして、暁のアジトがある、川の国に向かった。



その頃、パツクンが、ガイ班と合流し、暁のアジトへ、直接案内しようとしているのだった。

そして、カカシ班では、こんな会話が、なされていた。

サクラ「ナルト。1つ聞いても良い?・・・いつから、暁に狙われてたの?」

その返事は、「わかんねえ」だった。そして、カカシが、口を挟んだ。

カカシ「一度、暁の2人が、ナルトを狙って、接触を試みようとして、木ノ葉まで来た事がある。

あれから3年、今になって、動き始めた。・・・理由は、分からないが。」

サクラ「どうして、3年も待ったんだろう。」

その呟きにも近い、疑問に、カカシは、答えた。

カカシ「手を出さなかったんじゃないんで、出せなかったのかもしれないな。ナルトには、常に、

自来也様が、ついていたからな。」

その答えに、なるほど。と、思ったサクラに、否定の声が上がった。

チヨ「いや。わしの得た情報では、もっと、別の理由が、あると聞

いた・・・。

人に封じられている尾獣を、引き剥がすには、それ相応の準備がいるからのう。

それに、手間取ったのじゃ。」

その話の中に、出てきた、単語に引っかけた、サクラが、聞いた。

サクラ「その・・・、尾獣って？」

チヨ「何じゃ？綱手の弟子のクセして、尾獣も、知らんのかい？木ノ葉には、九尾がおつたろう。」

すると、カカシ班の表情が、曇った。そして、カカシが、話し始めた。

カカシ「九尾の事は、木ノ葉では、完全に極秘扱いですので。」

チヨ「まあ、それもそうかのう。」

と、言つて、さつきサクラが、聞いた事に関して、説明をし始めた。

チヨ「尾獣とは、その名の通り、尾を持つ魔獣の事じゃ。砂は、昔から、一尾を持つておる。」

それが、我愛羅に封じられた、守鶴の事じゃ。」

サクラ「一尾？それじゃあ、九尾以外にも、魔獣が？」

チヨ「そうじゃ。この世に尾獣は、全部で9体おる。尾獣には、特徴があつてな、それぞれ、

尾の数が、違う。一尾には、尾が一本。二尾には、二本。そ

れらが、九尾まで、

その名の通り、名は、尾の数を、表しておる。尾獣は、莫大なチャクラの塊で、

忍界大戦期には、各国隠れ里が、軍事利用しようと、競って手に入れようとしたのもじや。

しかし、人智を越した、その力を制御することなど、誰にも、出来んのじや。

暁が、何のために、それを欲しとるのは、分らんが、危険すぎる力じや。

まあ、平穏な情勢の中、時代も移り、今や尾獣は、世界各地に、散り散りに存在して

おるらしいがの。」

その話が、終わってから、ナルトの表情は、良くならなかった。



それから暫く、川の国内にある、暁のアジトに向かって、進軍している、カカシ班は、うちはイタチと、ガイ班は、干柿鬼鮫と戦闘に入った。その戦闘は、イタチは、ナルトの大玉螺旋丸で、鬼鮫は、ガイの朝孔雀で、勝負が決まったが、戦っていたのは、本人ではなく、本人のチャクラ30%を貰った、全く別の人間だった。そんな足止めもあつたが、休憩も挟んで、何とか、暁のアジトの前まで、辿り着くことが、出来た。そして、一足早かったガイ班と、後に来たカカシ班は、合流した。

ガイ「遅かったな、カカシ。」

カカシ「いやいや、途中面倒臭いのに、絡まれちゃって。」

チヨ「カカシよ、面倒臭いのは、わしの事では、あるまいな。」

ナルト「オッス！」

すると、封印されている、洞窟の入り口を見ながら、

ガイ「よし。やるか、カカシ。」

カカシ「ああ。」

という、やり取りをした。

ナルト「（我愛羅・・・、待ってるよ・・・。）」

そして、ネジの白眼で、洞窟内を見てみたが、詳しくは、つかみ取れなかったようだった。

サクラ「どうだったの？」

ネジ「口では、説明しにくい。」

その言葉にガイが、確かめてみると、やはり・・・、

ガイ「・・・結界か。」

リー「どうします？」

ガイ「まずは、結界を外さないといけないな。」

テンテン「どうやって？」

サクラ「それには、まず、この結界が、どんな物なのか、調べる必要があるわね。」

その、案に、ガイは、頷き、カカシに、見極めるように指示した。

カカシ「・・・これは、五封結界ですね。」

チヨ「うむ、同感じゃ。」

ナルト「五封結界？」

カカシ「この五封結界は、『禁』と、書かれた札を、近辺の五カ所

に貼り付け、結界を

作ってるんだ。目の前にある『禁』の札と、他の四カ所にある札。その五カ所に

貼ってある札、その全てに貼ってある札を、全て同時に剥がさなければ、結界は、

外れない。そういう、仕組みの結界術だ。」

その他に、ある4枚の札を、ネジの白眼で、見つけ出して、ガイ班が、その位置についた。そして、5人一斉に札を剥がして、カカシ班は、突入した。しかし、ガイ班は、敵の術に嵌まり、自分自身と戦うことになってしまった。その後、デイダラは、カカシとナルトが、サソリは、サクラとチヨ婆さん。というふうに、二手に分かれて、戦った。そして、暫くは、どちらも激戦が繰り広げられたが、サソリの方は、ある情報を残し、死んでいった。一方のデイダラ戦は、まだ、決着が、ついていなかった。そこに、ある男が、飛び込んできた。

カカシ「（・・・暗部か？）」

しかし、それが、誰かは、分からなかった。が、ソイツの第一声で、誰なのか、分かった。

サスケ「随分と押されているみたいだな。ナルト、カカシ先生。」

ナルト「サスケ！」

まだ、サスケは、木ノ葉暗部の仮面を外していない。

デイダラ「（ふん。木ノ葉の暗部か。うん。）」

そして、サスケが、ナルトに聞く。

サスケ「敵の術は？」

ナルト「爆発しか使ってこないってばよ！しかも、全部、変な形の・・。」

そこで、デイダラは、突っ込んだ。

デイダラ「何だと？！オイラの起爆粘土製の芸術的造形を、馬鹿にしようってのか！？」

その発言が、墓穴を掘ることになった。そして、サスケとナルトに向けて、百足型の起爆粘土を仕向けた。・・・そして、

デイダラ「喝！！」

しかし、何も、起こらない。

デイダラ「何故だ？」

サスケ「千鳥千本を、その粘土に刺した。お前の術は、土遁。雷遁

は、苦手だろ？」

デイダラ「クソッ！（一発で、読みやがって……。一体、何者だ？）」

サスケ「何者か？つてか、お前が、死ぬ前に、教えてやるよ。最近他の里では、結構有名な、

木ノ葉の龍使いの神童……。そう言えば分かるか？」

その言葉に、デイダラは、反応した。

デイダラ「うちはイタチの弟か？！確か名は、うちはサスケ。だったかな。うん。

それなら、このオイラの命に代えてでも、抹殺しなくちゃならねえな。うん。」

すると、ガイ班と、サクラ、チヨ婆さんも、やってきた。そして、暗部の姿をしている人が、いることに、疑問を持つ。

サクラ「誰？」

ナルト「サスケだってだよ。」

サクラ「嘘！！」

そんな、会話を横目で、見ていた、サスケが、一旦逃げる様に指示した。その言葉に、大人しく従い、全員が、離れて、待機した。すると、サスケが、何故か、天に向かって、火遁・豪龍火の術を放った。

サスケ「これで、終わりだ！」

すると、上空に、暗雲が、立ち込めた。

デイダラ「何をしようと無駄だ。これが、オイラの最期の芸術だ。」

そう言うと、上半身の服を脱ぎ捨て、胸のところにある口から、起爆粘土を良く噛んで、飲み込んだ。すると、どんどんデイダラの体が、膨張していく。

デイダラ「・・・芸術は、爆発だ！！！」

サスケ「（・・・マズイ。）」

口寄せの術

デイダラ「喝！！」

と、ものすごい爆発が起こった、のと同時に、サスケの術が、発動した。

麒麟

神威

その爆発源を、押さえ込むようにして、発動した、サスケの術ごと、空間が、歪んだ後に、消えてなくなった。その様子に、その場にはいた、全員が、驚いていた。そして、皆の視界に入った、馬鹿でかい物を見たときには、また、驚きの表情をした。

ガイ「それは、確か……。」

サスケ「ああ、大蛇丸のマンダだ。とは言っても、もうすっかり、爆死してるかな。」

そして、サスケは、暗部の仮面を外して、聞いた。

サスケ「カカシ先生。さっきの瞳術は、まさか。」

カカシ「ああ、万華鏡写輪眼だよ。」

すると、テンテンが、口を挟んだ。

テンテン「それにしても、どうしてここが、分かったのよ？」

サスケ「あゝそれはだな、実は、3日前までオレは、田の国、音隠れの里で、大蛇丸が、

開発した、禁術の巻物を、ごっそり盗って来る任務に当たってたな。その帰り道に、

火影様から、連絡が来て、こっちに行くように、と命令された訳だ。ま、巻物は、

暗部の仲間が、持って行ったから、問題はないしな。それと、あのマンドと

契約したのは、巻物を探しているときに、こっそりと、した訳だ。」

と、長々とサスケが、説明していると、我愛羅を支えている影分身ナルトが、

ナルト「そんなの後で聞いてやるから、サクラちゃん！早く、我愛羅を！」



そう言うと、サクラも頷き、森林から、少し離れた、野原へ出て、我愛羅を診た。その時には、サスケは、「用があるから」と言って、暗部の仮面を付け直して、一足先に、帰っていった。そして、話は、戻す。

サクラは、我愛羅の容態を診た。そして、静かに、首を横に振った。

ナルト「・・・何で、我愛羅ばかり、我愛羅ばかりが・・・。こんなんで死んだんじゃ、

風影だぞ！風影になったばっかじゃねーか！」

チヨ「冷静になれ、うずまきナルト。」

その言葉に、ナルトが、涙を滝のように、流しながら、振り向いて言った。

ナルト「うるせええ！！！！お前ら！砂の忍が！我愛羅の中に、化け物なんか入れなきゃ！

こんな事には、ならなかったんだ！お前ら！我愛羅が何を思っていたのか、

少しは、聞いた事あんのか？！・・・何が、人柱力だ。偉そうに、そんな言葉、作って、

呼んでんじゃねえ！！！」

サクラ「（・・・ナルト。）」

ナルト「3年も必死に修行して、俺は、・・・何も、守れなかった。」

すると、チヨ婆さんが、転生忍術を始めた。

サクラ「チヨ婆様！その術は！」

その止める声に、ニッコリと目を細めて、笑って見せた。

サクラ「（チヨ婆様・・・。）」

途中、チャクラ不足になったが、ナルトの力添えで、それも乗り切り、チヨ婆さんの命と引き換えに、我愛羅は、息を吹き返した。

そして、我愛羅が、周りを見渡すと、大勢の砂の忍が、歓声を上げた。それから、チヨ婆さんの遺体と共に、帰郷し、カカシ班とガイ班も、我愛羅を砂隠れの里に送ってから、木ノ葉隠れの里への帰路に着いた。木ノ葉に到着したのは、それから2日半後の事だった。

カカシ班、ガイ班が、木ノ葉に帰ってきて、直ぐにカカシを入院させた。そして、サクラが、サソリから得た、ある情報を、綱手に、報告した。それに、関する任務が、サスケに託された。

五代目「サスケ。お前は、今から、天地橋に行つて、偵察をしてくれ。そして、何か、不穏な

動きがあつたら、直ちに知らせろ。」

サスケ「なるほどな。と言うことは、増援部隊を出すか、出さないかを決めかねている。

という、事ですね。」

五代目「ああ。」

サスケ「ところで、もし、そこに、敵が、待ち伏せをしていて、見つけた場合は、

戦闘をしても良いのですか？」

五代目「ああ、相手が、暁の複数人じゃなかったらな。」

サスケ「了解。」

そう言うと、サスケは、その場から、消えた。それから、6日後、サスケからの報告書が、届いた。それは、木ノ葉にとって、信じられがたい、事だった。

五代目「何?!」

シズネ「どうされました?」

五代目「これを、読め。」

そうして、渡された、報告書を読み始めた。

シズネ「『五代目へ。緊急報告。1つ、天地橋での報告。やはり、暁のメンバーであるサソリが、

言ったように、大蛇丸の部下が、やってきた。その部下の名は、薬師カブト。

しかし、カブトは、サソリを裏切り、天地橋にて、暗殺をしようとしていた模様。

その為か、音の五人衆を名乗る、優秀な部下を連れてきた。その後、オレは、見つかり、彼等6名と交戦。かなり梃子摺ったものの、勝利。

音の五人衆を抹殺後、カブトに尋問を掛け、今後の音隠れの里の動向を含めた、

情報入手。しかし、その情報が、重大。2つ、その情報とは、木ノ葉崩し第2弾。

参加国は、音隠れの里、滝隠れの里、草隠れの里の三カ国。至急に、その周辺地域の、

国境警備に、力を入れるべき。そして、オレは、今、音隠れの里に向かっている

最中だが、念の為に、増援部隊を1チーム、派遣を要請する。音・滝・草からの宣戦布告

と、同時に、オレは、音を滅亡させようと思う。以上。』  
・  
・ 大変です!綱手様!!」

その反応に、

五代目「だから、言っただろう。・・・よし！シズネ！国境警備と、里の周辺の人員を増やせ！

・・・もしかしたら、第四次忍界大戦もありうる、話になつてきたぞ。」

そして、五代目火影・綱手の命により、ヤマト、ナルト、サクラ、サイの4名が、サスケの増援部隊として、派遣されることになった。しかし、そのチームワークは、まだガタガタだ。

そして、それ以外の班も、国境警備に借り出された。

つまり、超S級非常警戒態勢が、敷かれたのだった。

音・滝・草が、木ノ葉に対して、宣戦布告をしてきたのは、その3日後だった。そして、サスケのところへ、その連絡が、入ったのが、その数時間後だった。そして、音隠れの里のみならず、田の国までが、滅亡したのは、その半日後となる。

ナルト「宣戦布告されたのか？サスケ。」

サスケ「どうやら、そのようだ。」

サクラ「と言うことは……。」

ヤマト「戦うしか、ないみたいだね。」

サイ「……行きますか。」

そして、簡単にサスケが、指示をだした。

サスケ「ヤマト先輩と、サクラは、オレ達3人の支援。オレとナルトは、口寄せで、ある程度、

片付ける。サイは……、絵描きで、殲滅させる。」

その後、「了解。」という、言葉が、うまくハモツて、散った。そして、ナルトとサスケは、パートナーを呼び出した。

口寄せの術

ナルトは、ガマブン太とガマ吉、ガマ竜を。サスケは、白龍（その名の通り白い龍で、大きさは、大蛇並）と黒龍（その名の通り黒い龍で、大きさは、大蛇並）と神龍（濃い緑の鱗を持つ龍で、大きさは、マンダより、少し大きい）を出した。

そして、ガマブン太は、ドスで。ガマ吉は、火遁で。ガマ竜は、水遁で、周囲の敵を圧倒した。サスケの呼び出した。白龍は、橙色の炎で。黒龍は、紫色の炎で。神龍は、黄金の炎で、周囲の建物を蒸発させた。その様子に、サイ、サクラ、ヤマトは、本当の戦争だと認識し、また、自分達は、必要ないんじゃない。とも思った。

そして、最初に書いたとおり、半日後には、田の国諸共、音隠れの里は、滅亡した。

サクラ「どうやら、終わったようね。」

ヤマト「やれやれ、こんなに派手にするものかね。」

その言葉通り、ナルトとサスケの呼び出した、口寄せ動物たちが、いた場所は、都市らしきところも、焼け野原、荒れ野原と化していた。

サイ「僕の出番も無かったですしね。」

と、作り笑いを浮かべている。正直、その笑顔の方が、無表情の時よりも、近寄りやすい。そして、今回、ほとんどの戦闘を、口寄せ動物たちに、任せていた、ナルトとサスケは、休憩なしで、滝と草を討伐しに行こうと、していた。・・・そして、

ナルト「よっしゃー！！他の班の応援に行ってくてばよー！」

そう言っで、立ち上がったときだった。サスケの元に、綱手から、連絡が、入ったのは。

ヤマト「火影様は、何だって？」

サスケ「『砂の援軍は、草との戦闘に入った。そちらが、片付いたのなら、滝隠れの里に、

向かってくれ。』だとさ。」

そして、5人は、滝隠れの里へ、全速力で向かった。



それから暫く、国境線沿いに行くと、滝隠れとの国境線付近にたどり着くと、木ノ葉が、劣勢ながら、戦闘は、まだ、繰り広げられていた。

サスケ「さつきと同じ、編成で、行くぞ。でも、今回は、サクラも動いて良い。」

口寄せ・雷光剣化

で、右手には、大蛇丸の遺産である草薙の剣を。左手には、妖刀・村正を、手に召喚した。

千鳥刀・双剣

そして、敵目掛けて、ありえないスピードで、無双をしてのけた。その様子を見て、ナルトも、多重影分身を用いて、次々と、滝の忍を、やつつけていった。そしてサイも、お得意の 忍法・超獣偽画で。ヤマトは、木遁。サクラは、馬鹿力で、殲滅させていつてる。この5人が、来たことによって、形勢は、直ぐに、逆転した。そして、退却をし始めている、敵を、追跡しながら、滝隠れの里への、入り口を見つけた、木ノ葉の忍び達は、一気に、滝隠れの里内に、攻め込み、壊滅、滅亡させた。

その後、ナルトとサスケ以外の木ノ葉の忍は、里へ帰還し、ナルトとサスケは、お隣の草隠れへと、向かった。その頃の草隠れの戦況は、木ノ葉の主力を投じているのにも、関わらず、五分と五分だっ

た。その為、ガイ班、紅班、アスマ班もそこへ出向いている。

距離も距離だった為に、意外とあっという間に2人は、到着した。しかし、そこは、激戦区だった。遠くには、同期のメンバーが、戦っているのが、目で確認できる。すると、仲の良い2名に危機が、迫っていた。

サスケ「ナルト！お前は、ヒナタの所へ行け！」

ナルト「分かったつてばよ！」

そして、サスケは、もう一人の方へ向かった。

敵忍「・・・死ね！」

テンテン「きゃあー!!」

千鳥鋭槍

と、テンテンが、敵忍の刀に切られる寸前に、敵忍の刀を、真つ二つにしていた。

敵忍「何?!」

そう、驚いたのが早いか、死んだのが早いか、分からないが、テンテンが、サスケの事を見たときには、今まで、テンテンが戦っていた、敵は、倒されていた。

そして、ヒナタの方に行った、ナルトも無事に、ヒナタを救済できたようだった。

テンテン「ありがと、サスケ。助かったわ。」

そんな、のんびりと、礼を言われても……。と、思うサスケだったが、

サスケ「どういたしまして。ほら、さつさと、他の奴を援助しに行くぞ。」

そう言って、また、戦鬪を繰り広げに行った。それから、間もなくのことだった。草隠れの里から、全面降伏してきたのは。そして、戦鬪も、停戦し、生き残った者は、それぞれの里に戻っていった。

今回の戦争を、哀れな視線で、見つめる、6つの影があった。

あの戦争が、終結し、暫く経った後のことである。まずは、報告から、暁のメンバーである、角都と飛段が、木ノ葉の精鋭達によって倒された。角都は、ナルトの新術である、風遁・螺旋手裏剣によって、飛段は、シカマルの戦術とサスケの水遁奥義 水遁・激流葬（簡単に説明をすれば、我愛羅の流砂瀑流→砂瀑大葬の水遁バージョンと考えてくれたら良い。）によって、圧死もしくは、一生溺れている。かのどちらかになった。まあ、少なくとも戦闘不能ってな訳だ。

そして、次は、悲しい報告になる。まずは、角都&飛段戦でのことだ。その戦いの第1戦で、猿飛アスマが、殉職した。そして、伝説の三忍と、呼ばれた、自来也が、雨隠れの里内で、情報収集の最中、暁のメンバーである、ペイン（正確には、ペイン六道にだが）と小南に殺されてしまったのである。

その後、暁の残るメンバーは、ペイン、小南、うちはイタチ、干柿鬼鮫、ゼツ、トビ（うちはマダラ）の6名となった。しかし、残る尾獣も、あと八尾と九尾を、残すのみとなっていた。

そして、今現在の木ノ葉の状況としては、ナルトが、妙木山にて、仙術の修行をしている事と、サスケとネジ、テンテンの3名にうちはイタチ抹殺命令が、下された事くらいだ。その3名は、うちはイタチを探し、増援部隊として、後を追いかけるように、来ているのが、カカシ、ヤマト、サクラ、サイ、ヒナタ、キバ&赤丸、シノの7人と1匹だ。

そして、やっこの思いで、うちは一族のアジトにいる事が、分かった、サスケ、ネジ、テンテンの3名は、早速、その場所に向かい、後を追ってきている者達には、伝書鳩を送って、その趣旨を伝えた。そして、うちは一族のアジトの前まで来た。すると、あの男が、立

っていた。

鬼鮫「ここからは、サスケ君1人で、行ってください。イタチさんの命令でしてね。他の方々は、

ここで、待っていて貰いましょうか。」

サスケ「そんな訳には、行くかよ。これは、任務だ。それに、お前は、信用ならん。」

鬼鮫「そうですか。ならば、力尽くで、通っては、いかがですか？  
まあ、それが、出来ればの

話ですがねえ。」

口寄せ・雷光剣化

千鳥刀

で、先制攻撃を仕掛けた。

鬼鮫「そうきますか。残念ですねえ。では、こちらからも行かせてもらいましょう！」

そう言うと、大刀・鮫肌を振り上げ、攻撃してきた。そこに、テンテンからの忍具の嵐と、その隙を突いた、ネジの八卦空掌が、鬼鮫の邪魔をする。そして、

サスケ「・・・消える。」

雷遁秘術・大雷

その後、大きな雷が、鬼鮫一点に集中すると、悲鳴とも叫び声とも、取れる、鬼鮫の聲が、大きく木霊し、そして、鬼鮫ごと、消えて無くなった。

テンテン「やったあ！」

ネジ「ああ。」

しかし、とどめの一撃を放った、本人は、

サスケ「はあはあはあ……。」

かなりのチャクラを使ってしまったようだ。その様子に、テンテン、ネジが、心配する。

テンテン「大丈夫？サスケ。」

ネジ「その様子じゃあ、うちはイタチは、倒せない。一旦、木ノ葉に戻るか？」

サスケ「大丈夫だ。」

そう言うと、ポーチから、何か、丸い球体を出した。そして、口の中に運んだ。

テンテン「何それ？泥団子みたいだけど……。」

サスケ「サクラ特製の兵糧丸だ。クソマズイけど、チャクラと疲労回復には、良い薬だ。」

そして、顔色が、悪くなりながらも、飲み込んだ。

サスケ「よし。行くぞ。」

その言葉で、他の2人は頷き、早足で、イタチが、待っているであろう場所へ、向かった。

すると、やはり、イタチが、座って待っていた。そこから、会話が、突如始まった。

イタチ「来たか、サスケ。だが、邪魔者も、混ざっているようだが。」

サスケ「邪魔者だと？何言ってやがる。こいつ等は、オレの仲間だ。」

イタチ「そうか。ならば、鬼鮫は、やられたのか。」

サスケ「ああ。ついでに、宣言しておく。オレは、任務で、兄貴を殺しに来た。」

イタチ「任務で・・・か。お前に言っただろう。このオレを、殺したくば、恨め、憎め。」

・・・と。」

サスケ「ああ。確かに、オレは、兄貴を、憎んではいる。だが、憎しみの反対は、愛情だ。」

イタチ「そうか。ところで、お前の写輪眼は、どこまで、見えている？」



サスケ「・・・そうだな。あの日の、兄貴の気持ちの内面まで、全て、お見通しだ。」

イタチ「ほう。それは、楽しみだ。」

サスケ「オレを、甘く見ないほうが良い。・・・あの頃のオレじゃない。それにだ。」

今や、木ノ葉の龍使いの神童とまで、呼ばれるようになった男だ!」

その瞬間から、写輪眼での幻術合戦となった。その戦いは、五分と五分だったが、しかし、イタチは、まだ、万華鏡写輪眼を使っていない。

テンテン「どうなってるの?何か、止まっちゃってるけど。」

ネジ「幻術だろう。」

すると、突然幻術世界から、現実世界に戻ってきて、会話を始めた。

イタチ「サスケ、お前はまだ、オレと同じ目を、持っていないようだ。大切な者を

殺しきれなかったか?」

サスケ「オレは、敵には容赦しないが、仲間は、大切にするほうだ。」

イタチ「そうか、ならば、良いことを教えてやろう。オレは、あの時。最も親しい友を殺すことに

よって、万華鏡写輪眼は、開眼する。と言ったが、本当は、

最も親しい者の死を経験

することだけで、良いのだ。」

サスケ「何が言いたい。」

イタチ「プレゼントだ。お前に、万華鏡写輪眼をやるう。」

そう言うのと、物凄い数の手裏剣を投げてきた。

サスケ「ネジ！」

すると、ネジは、回天を発動させた。そして、イタチの手裏剣を投げる手が、止まったのと同時に、今度は、テンテンの、一方的な、手裏剣やクナイの嵐を巻き起こす。しかし、烏分身で、ことごとく避けられたり、外される。

サスケ「プレゼントか。面白い。オレが、兄貴を倒したら、兄貴のその眼を貰うってことか？」

イタチ「そうではないが・・・まあ、いいだろう。その代わりにオレが、勝ったら、お前の

眼をもらう。そして、その前に、お前の眼を、万華鏡写輪眼にしてやる。」

・ ・ ・ ・ ・

すると、イタチは、テンテンに右目の焦点をあわせた。そして、この世で最も聞きたくない、悲鳴を上げながら、黒炎により、テンテンは、見るも無残な姿に変わり果てた。

ネジ「テンテン！」

その様子に、サスケは、一瞬ボーッと突っ立ってしまったが、その写輪眼という名の瞳からは、一筋の涙が、零れ落ちた。そして、その瞳の模様が、六芒星となった。

サスケ「イタチ・・・、貴様あ！！！！絶対、殺す！！！！！」

そう宣言し、ネジにお構いなく、最大級の千鳥を放った。すると、その部屋の天井が、壊れ、イタチは、そこから、アジトの屋根に、逃げた。

サスケ「殺す！殺す！！殺す！！！！！」

#### 火遁・豪火球の術

相打ちになった。しかし、今は、力任せに放っている、サスケの方が、優勢だ。そして、そのまま、殺そうとしたとき。

#### 天照

を発動させ、自分の豪火球ごと、黒炎によって、燃やし尽くそうとした。しかし、今のサスケは、万華鏡写輪眼を、手にしている。

サスケ「ふざけるなあああ！！！！！」

#### 神炎

こちらは、白炎を、発動させ、天照の黒炎ごと、イタチを殺そうとしている。それは、食らうまいと、イタチは、逃げる。

サスケ「そうは行くかよ!!!」

### 炎遁・加具土命

すると、神炎の白い炎は、蛇のような形になり、まるで、蛇のように執念深く、イタチを追い掛け回した。そして、ついに、イタチの足に、白炎の蛇が、食らいついた。そして、テンテンと、同じように、悲鳴という名の、叫び声を上げた。

サスケ「……………終わった。うっ！」

そして、両目を、押さえた。すると、両手には、べったりと、血が付いた。

???「本当に、強くなったなあ。サスケ。」

誰の声か、分かるけれども、分かりたくない声が、サスケの耳に届いた。

イタチ「これが、無ければ、やられていた。」

そう言うと、イタチを中に、取り込むような形で、スケルトンみたいな物が、半透明で、出現した。

サスケ「何だ！？それは！」

イタチ「今度は、オレの番。……………須佐能乎だ。」

須佐能乎

サスケ「須佐能乎？」

イタチ「月読と天照。この2つの能力を開眼したときに、瞳に宿った、もう1つの術だ。

まだ、チャクラが、残っているなら、出し惜しみは、しないほうが良い。」

そういうと、さっきまで、骨だけだった、須佐能乎に筋肉が、付きはじめ、最終的には、防具や武器まで、持ち合わせたものとなっていた。そして、どんどんサスケとの距離を、縮めて歩いてきている。サスケ「テンテンの為にも、オレが、負けるわけには、いかねえんだよー！」

口寄せの術

それで、相棒である3匹の龍を呼び出した。

サスケ「行くぞ皆。」

白龍「はい。」

黒龍「おう！」

神龍「ああ。」

### 炎遁秘術・四死龍火の術

その炎は、四色（サスケの神炎の白。白龍の橙炎。黒龍の紫炎。神龍の黄金炎で）の龍を象り、イタチの須佐能乎ごと、攻撃をした。その様は、四色龍の特攻の様だった。それを発動し終わると、白龍、黒龍、神龍の三龍は、消えた。

サスケ「やつと・・・、終わった。」

イタチ「それで、終わりか？うっ！クハッ！ゴホゴホッ・・・。」

サスケ「まったく、しぶとい奴だ。吐血してるくせに。お前の須佐能乎も消えてるだろ。」

イタチ「全くだ。最期に1つ、忠告だ・・・。ゴホゴホッ・・・クハッ！オウエ。」

うちはマダラには、気をつける。そして、オレに勝った、・・・・褒美だ。」

そう言うと、自分で、自分の眼球を取り外して、何か、液体の入った、ケースに入れて、サスケに投げ渡した。そして、絶命した。その死に顔は、死闘を繰り広げた後とは、思えない、安らかな表情をしていた。そして、チャクラ切れし、疲労も溜まっていた、サスケは、気を抜いた瞬間に、気絶した。

ここで、1つ纏めようと思う。まず、暁のメンバーは、今回の一件で、うちはイタチ、干柿鬼鮫の2名が、絶命した。それにより、残る暁のメンバーは、ペイン本体である、長門とペイン六道、小南、ゼツ、トビ（うちはマダラ）の4名（ペイン六道を含めると10名）となった。実は、このうちはイタチVSうちはサスケの兄弟対決は、暁のメンバーである、ゼツにしっかりと見られていて、他のメンバーにも、その結果は、報告されているのであった。

話は、戻し、木ノ葉の増援部隊は、サスケを発見し、サクラの応急手当をした後に、木ノ葉病院へ、搬送された。そして、サスケが、目を覚ましたのは、運ばれてから、7日後のことだった。



話は、だいたい戻るが、ナルトは自来也の死の報告を受けた場所は、妙木山であった。なぜなら、自来也が、雨隠れの里へ潜入する前に、そこに預けて、仙術の修行をつけて貰っていたからだった。

サスケ side

そして、サスケがイタチとの戦闘に勝った日から、7日が経った。ここは、サスケが、寝ている木ノ葉病院のとある病室。

オレは、目を覚ました。そして、下半身の方に、妙に重みを感じた。それが、気になり、上半身を軽く起こし見てみると・・・そこには、何故かテンテンの寝顔が、こっち向きであった。しかし、何故、テンテン？確か・・・、確か、あの兄貴の野郎に、殺されたはず。という事は、ここは、夢？なのか？それとも・・・。そんな、思考を巡らせながら、夢でも、もう一度、テンテンの顔が見られたから、良いか。と、自分に言い聞かせ、これで最後だと言わんばかりに、穴が開くようにテンテンの寝顔を、眺めていた。すると、そんな視線に気が付いたのか、目を覚ました、テンテンと視線がぶつかった。そして、暫くの沈黙が、続いた。

サスケ「・・・よお、起きたのか？」

すると、何故かいきなり、両目に涙を浮かべて、飛び込んできた。  
・・・なんで？良く、状況を飲み込めていないオレは、とりあえず、テンテンに聞いた。

サスケ「え、あ、どうした？テンテン。」

テンテン「どうしたじゃないわよ！あなた、何て無茶な事をするのよ！？」

と、目の周りが、腫れている顔を向けて、怒られているが、オレは、全くと言って良いほど、自覚が無い。一体何のことだ？

テンテン「あなた！分かってないかもしれないけど、火影様やサクラに、もしかしたら、

最悪の場合もありえるって言われてたんだから！」

その言葉で、ようやく理解した。なるほど、それで、テンテンは、怒ってるのか。・・・って、待てよ、と言うことは、もしかして、

サスケ「もしかして、お前、死んでないのか？」

そのオレの反応に対して、何言ってるのこの人？みたいな表情を返された。そして、

テンテン「勝手に殺さないでよね。」

と言った。ということは、やっぱり、テンテンは、殺されていない。そして、その事実を知ったオレは、今まで一方的に、抱きついていたら、テンテンを包み込むようにして、抱いた。

テンテン「え？あ、え、ちよっ」

と、戸惑って頬を赤らめていた。

テンテン「ちょっと、何するのよ？」

とは、言っているものの、全く抵抗はしてこない。

サスケ「そうか、あの時には、もう兄貴の月読に……。」

そう呟いたとき、『バン!!』と病室のドアが、開かれた。

すると、いきなり『バン！』という、音と共に、病室のドアが開かれた。あまりにも、突然だったから、オレもテンテンも反応し切れていなく、体勢はそのまま、かなり色々と危険な状態だった。そして、この病室に勝手に入ってきた人物が、声を発した。

五代目「なんだ、元気そうじゃないか。色々と……。まあ、この様子じゃあ、明日にでも、

退院できるだろう。じゃあな。」

そう言つて、引き返そうとした。それを、オレが、止める。

サスケ「あ、ちょっと待ってください。」

すると、五代目は止まって、

五代目「何だ？」

サスケ「お願いが、1つあるんだが。」

五代目「朝から、女を抱くような奴が、何を頼むと言つのだ？」

その言葉に、一瞬、たった一瞬だったが、このクソババア。と思つた。そして、テンテンも離れた。この場合、とても賢い選択だろう。

サスケ「オレが、運ばれたときに手に持っていた、眼球を、オレの眼と、取り替えてくれ。」

何故かは分からないが、それを兄貴は、望んでいたらしい。  
・・・最後の兄孝行だ。」

シズネ「何故そう思うのですか？」

サスケ「兄貴は、オレに、月読でテンテンが、天照で殺されたように、見せた。そして、敵である

オレに、万華鏡写輪眼を開眼させた。その前に、幻術合戦をやっている間に、兄貴は、

こう言った。『万華鏡写輪眼は、一族の他者の万華鏡を自分の目に取り込むことで、

視力が低下しない《永遠の万華鏡写輪眼》となり、目の文様も能力も変化する』とな。

兄貴は、今回の戦いで、どちらかが、そうなる事を、望んでいたと、オレは思った。」

そして、頼む。と言った。視線で、五代目の目を見た。すると、ため息をひとつして、

五代目「いいだろう。それなら、5分もあれば、出来る。来い。」

サスケ「ありがとうございます。」

それから、直ぐに、両目の移植手術をして、兄貴曰く、オレは、永遠の万華鏡写輪眼を手に入れた。そして、病室に、戻る際に、シズネから、小声で、

シズネ「分かっているとは、思いますが、木ノ葉のルールでは、18歳以上でなければ、結婚は、

出来ませんので、そこら辺は、しっかりしてくださいね。」

と、にこやかに念を押された。それでも、腹は立つが、あの現場を見られたのが、大人だったから、まだ良しとしよう。もし、それが同期とかだったら・・・、とか考えるだけで、恐ろしい。

そして、自分の病室の前まで、来たときだった。室内から、色々な人の声が、聞こえてきたのは、その声の持ち主たちの顔を思い浮かべると、入ることを、躊躇わざるを得なかった。

自分の病室前で、躊躇うこと、2分。そこに立っていても、仕方が無い。と言うことで、とりあえず、病室内に入った。すると、そこにいたのは、やはり、イタチ抹殺任務時の、メンバーだった（しかし、ヤマトとカカシはいない）。

サスケ「何で、お前らがここにいる？」

オレは、ため息交じりで、そう言った。すると、知られていないはずの情報を握っていた奴がいた。

キバ「なーに、お前が、テンテンと、とうとうデキた。って聞いてな。ちょっと、からかって

やろつと、思ってたな。なあ、皆！」

シカマル「誤解だ。それは、副産物に過ぎないだろうが。・・・ったく。」

そのシカマルの発言で、オレは、分かった。こいつ等は、普通に、見舞いに来たが、その道中で、さっきの現場を目撃した、何者かによって、あの事を知らされた。という訳か。まあ、あの2人の内のどちらかだ。問い詰めれば、簡単に、吐くだろう。

サスケ「テンテン！こいつ等の誤解、ちゃんと、解いとけよ！」

そう言い残すと、火影の執務室に飛んでいった。そして、残された奴等は・・・、

テンテン「とは、言われても……。」

ネジ「時、既に遅し。……だな。」

サクラ「テンテンさんは、もう認めちゃってるもの。」

と、そんな会話（？）が、なされていた。

そして、ここは、オレが飛んでいった、五代目とシズネがいるであろう、火影の執務室。

サスケ「さっきのを、あいつ等に漏らしたのは、どっちだ！？五代目か？シズネか？」

すると、シズネが、「あひいゝ」という変な奇声を上げた。

サスケ「アンタか。シズネさんよ。」

そう言つて、近づくと、シズネは、ペコペコと頭を下げ、謝り始めた。その光景は……、何だか、とても笑える。そんな態度のシズネに、軽く説教をし、適度なところで、やめておいた。そんな、様子を、椅子に座りながら、呑気に眺めていた、五代目が、話しかけてきた。

五代目「サスケ。次からの任務は、通常任務、上忍として、やってくれ。」

そのいきなりの命令に、何で？が、来た後に、とりあえず、了解の意を伝えた。



五代目「よし。じゃあ、まず今日までは、入院だ。ゆっくり休ん  
け。」

そして、その言葉どおり、病室に戻ったのだが、まだ、奴等がいた。  
その後、そいつ等の誤解を解く為に、頑張つて見たオレだったが、  
既に、テンテンが、認めてしまっていた、という、かなり、弱い立  
場にあったオレは、その事実を認めざるを得なくなってしまった。  
そして、やっこの思いで、帰らせ、夕方には、眠りに付いた。

それから言うもの、少しでも、テンテンと一緒にいたところが、目撃でもされたら、瞬時に、木ノ葉の里内に広がるという、イジメにあった。しかも、任務が、同じになった時にも同じことだ。これに関しては、絶対に、裏で、五代目が、操って、ニカニカと笑っているに違いない。

しかし、テンテンは、その状況を、あまり嫌がってはいないみたいだった。無論、オレも、テンテンと一緒にいること自体は、全然問題無いのだが、それによって巻き起こる、冷やかしが、嫌なのだ。

イルカ「どうだ？色々と順調か？サスケ。」

ほら、来た。いらん迷惑で、お節介な奴らばかりだぜ。ほんと・・。

そんな感じながらも、茶化される生活にも慣れてきた頃。雲隠れからの情報で、八尾が捕まり、残るは、あと、ナルトの九尾のみとなった事が、分かった。そして、暁のメンバー、ペインと小南が、動き出した。そう、ペインによる、木ノ葉襲撃が、始まったのだ。しかし、その時は、ちょうど単独のAランク任務で、出払っていた時間で、オレが、帰ってきたときには、里は、ぐちゃぐちゃだった。戦況としては、カカシ先生が、修羅道倒した時に、オレも戦闘に加わった。町では、次々と、口寄せ動物が、荒らしていた。

### 口寄せの術

印を結び、デカイ奴等は、でかい者同士で、やり合ってもらう事にする。白龍、黒龍、神龍は、木ノ葉情報部の前に、出てきた、動物

たちを相手にし、そして、オレは、口寄せをしたペインと戦闘に入った。こんな、奴は、一発で終わらせてやる。

天照

そして、ピントを合わせると、黒い炎が、超微量引火した。そこに、

神炎

で、黒い炎を、食らうようにして、白い炎を増幅させた。

シズネ「ふう、助かりました。」

いの「流石、サスケくん！」

しかし、そのペインを倒した瞬間に、また、新たな長髪ペインが、現れた。

サスケ「コイツは、オレがやる。あんた等は、早く謎を解明するんだな。」

そう伝えると、「気をつけて」という言葉と共に、走り去っていった。

影分身の術

影分身を2体出して、手にチャクラを集めた。集中・・・集中・・・集中・集中！！・・・出来た！！そして、影分身は、消さずに、陽動として、突っ込ませた。最後に、その術を持っている、本体であるオレが、フィニッシュを決めた。

## 火遁・豪炎螺旋丸

そして、残るペインは、あと、地獄道、餓鬼道、天道の3体となった。しかし、今の術で、オレに、残っているチャクラも、大きく減ってしまった事も確かだった。

それでも、そこで立ち止まることは、木ノ葉の状況から見ても、ありえなかった。そして、敵を探していると、小南に、ばったりと出くわしてしまった。

サスケ「お前が、暁の紅一点かよ。まあ、良い。くたばれ!!」

千鳥鋭槍

で、先制攻撃をするが、紙になって、避けられた。しかし、なんだ？あの術は。

式紙の舞

それを全て避けるのは、容易なことではなかった。だが、所詮、紙は紙。燃やしちまえば、灰となる。

火遁・鳳仙火の術

もちろんこれは、陽動だ。そして、次の3連発で、仕留める！

天照

神炎

炎遁・加具土命

黒い炎が、引火。その黒炎を食うようにして、増大する、白炎。それが、蛇を象り、執念深く、全てを無にするまで、消えない。それを、最後まで、見ることはせずに、他の敵の搜索を開始した。すると、忍術をことごとく、吸い取る輩を発見した。という事は、オレの中では、一番苦手な、体術でしか、戦えないってことだな。危ないが、やってみるしかない。

八門遁甲・開門・開

オレは、第一開門を開放し、手裏剣で、陽動を掛けながら、一気に、決めることにした。

影手裏剣の術

操手裏剣の術

そうやって、敵の注意をこっちに、引き寄せておいて、

八門遁甲・休門・開

口寄せ・雷光剣化

右手には、草薙の剣を。左手には、妖刀・村正を呼び出して、反応しきれない速度で、近づき、切り裂いた。まさに、瞬殺というべきものだった。

サスケ「はあはあはあ……。やっぱ、きついな。」

軋む体に鞭を打って、また、残る敵の搜索を始めた。少しすると、木ノ葉丸の呻き声が、耳に届いた。その発信源に、飛んでいくと、

地獄道に捕まっている、木ノ葉丸の姿が見えた。そして、その傍には、倒れている、ムツツリスケベが、いた。写輪眼を通して見ているから、分かるが、敵は、幻術を使っている。そして、オレは、敵の背後から、両腕を、斬りつけ落とした。すると、当然のことながら、木ノ葉丸も解放された。

木ノ葉丸「サスケの兄ちゃん！」

サスケ「相手が悪すぎる。お前は、その変態野郎を連れて、逃げる！」

一応は、その言葉に従って、離れたようだった。

サスケ「さてと、オレもボロボロだが、幻術戦ならば、負けねえぞ。」

すると、地獄道の背後に、閻魔の顔が、現れた。・・・やられるかよ。

魔幻・鏡天地転

それと全く同じ幻術を、掛け返した。そして、

月読

しかし、全然と言っていい程、聞かなかった。マズイ、チャクラがもう無いに等しい……。せめてもの、足止めだ。

魔幻・枷杭の術

すると、いきなり、木ノ葉丸が、飛んできた。

サスケ「バカ！逃げろって言っただろ！？」

その言葉を、無視して、

螺旋丸

それを、地獄道の腹部に命中させた。そして、オレは、気を失ってしまった。・・・たく、どうして、いつも戦闘の後には、気絶しちゃうかな、オレは・・・。



オレが、目を覚ましたのは、物凄い爆発音と、突風が、原因だった。そして、辺り一面を見回すと、木ノ葉の里全体が、クレーターと化していた。

サスケ「何だ？これは・・・。」

それから、直ぐに、爆心地の場所で、白い煙を發した、小規模な爆發が、起こった。そして、妙木山に行っていたはずの、ナルトの姿があった。他にも、蛙が何匹か、いるようだった。

オレは、せめて、ナルトの援護として、また、奴等呼び出した。

口寄せの術

黒龍「何か用か？」

白龍「また、ですか？」

神龍「今度は、何だ？」

サスケ「ナルトの援護を頼んだ。オレは、もう動けそうにもないんでな。」

そして、三龍を向かわせた。

ナルトside

ナルト「どこだってばよ、ここ・・・。」

ガマブン太「敵は、どこにおるんがな。」

フカサク「どういう事じゃ、母ちゃん。なして、木ノ葉の里に口寄せするなんぞ。」

シマ「ここが、木ノ葉隠れの里じゃ。」

前に見たときは全く違う、木ノ葉の里に、驚いた。

ガマ吉「どういう事じゃ？シマ婆。」

その言葉に、

シマ「辺りを良う見て見んさい。」

しかし、木ノ葉のシンボル。歴代の火影岩は、しっかりと残っていた。

ガマブン太「まさか？」

すると、今まで、土煙が上がっていて、はつきりとは、見えていなかった地面は、だんだんと見えてきて、その惨事の度合が分かる。

シマ「誰が、これをやったかは、明白じゃ。自来也小僧の肩といった時と同じ、物を感じる。」

ナルト「それで、ペインは？」

すると、そこに、サスケが口寄せした三龍が、到着した。

白龍「修羅道はカカシさんが、地獄道は木ノ葉丸さんが、」

黒龍「その他の天道以外のペインと、それに、小南という、暁の間も、サスケが殺ったぜ。」

神龍「ありがたく思うと良い。うずまきナルト。」

白龍「ですが、一番厄介な者を、残してしまいました。」

そして、改めて状況の悲惨さに気が付いたとき、衝撃が走った。そして、目の前に天道が、現れた。

天道「探す手間が、省けたな。」

すると、爆心地から、ほんの少し離れたところから、綱手が、やってきた。

五代目「私は、五代目火影だ。先代たちの宝を、夢を踏み弄ったお前らは、絶対に許さん！」

ここで、火影として、決着をつける！」

勢いはあるものの、しかし、額に集めていたチャクラまでも、使い果たしてしまっている。

天道「少しは、痛みを理解したようだな。・・・だが、お前などには、用は無い。あるのは、」

ナルト「俺だろ!!」

そこから、ナルトVSペイン・天道による、人間離れた、激闘が繰り広げられた。

激しい戦いの中では、三龍も三蝦蟇もペイン・天道の 神羅天征のより、呆気なく倒された。その後も、戦いは続いたが、ナルトが八本の尾を出して暴れたところと、それを自ら押さえ込んで、通常状態に戻って、ペイン・天道を倒したことまでは、何とか分かった。そして、その頃にちょうど任務で、里を出ていた者たちも、一斉に帰還してきた。それからの事は、見えなかったから分からなかったが、どうやら、ペイン本体の居場所を突き止め、一瞬にして、戦死していた者が、元に戻って、生き返って来た。そして、ペインは、その術と引き換えに死んでいった。そして、残る暁のメンバーは、ゼツとトビ（うちはマダラ）の2人となった。

そして、ペイン本体、長門とも決着をつけ終った、ナルトが、カカシ先生におぶられて、里に帰還した。その迎えられ様は、まるで、英雄の様だった。いや、英雄だった。

ナルト「何だつてばよ？これ。」

と、かなり驚いていたが、カツユにこの状況について説明を受けると、一応は、納得したみたいだった。しかし、驚いていることには、変わりはない。そして、里の子供たちに、揉みくちやにされている。そんな、人気者のナルトに、特に同期、元ルーキーナイン＋スリーは、それぞれ思うことは、あるようだった。

ヒナタ「良かった。ナルト君。」

涙を拭きながら、ヒナタは、そう呟いた。

すると、サクラが、つかつかとナルトの方へ近づいて行って・・・、頭に拳骨をした。そして、ナルトが、サクラに倒れ掛かった。いつもならば、ぶっ飛ばされるところだが、逆に抱きつかれているという、状況の方が近い気がする。そんな、いつもとは違う態度のサクラを不審に思ったのか、小さな声で、

ナルト「サクラちゃん？」

と、聞いた。

サクラ「無茶ばかりして、この・・・バカ。」

あゝえゝつと、サクラってここまで、ツンデレ激しかったか？そう思った、オレが少々考えている間にも、話は、進んでいく。

サクラ「・・・・・・・・・・ありがとう。」

その様子を、少し離れていた場所から見ていた者達は・・・。ついでにその中に、オレも混ざってはいる。

リー「やりましたね！ナルト君。」

ガイ「おう！あれこそ青春だ！」

シカマル「本当に、やっちまうとはな。」

チョウジ「うんうん。」

いの「ちょっと、惚れちゃうかも。」

その発言に、周辺の同期が、耳を疑った。

キバ「やるじゃねえか、ナルトの奴。流石は、俺の同期！」

シノ「随分と、差を付けられた物だな。」

等々他にも、たくさんあったが、最後にオレの感想としては、

サスケ「オレの存在も忘れないでくれよ……。」

という、悲しいものだった……？

それから、数年の月日が、流れた。暁という、組織自体は、消滅した。もっと、細かく言うと、ゼツの白い方は、サスケが、黒い方は、ナルトがそれぞれ倒した。しかし、暁の真のリーダートビこと、うちはマダラは、姿を消し、結局未解決の部分が残ったまま、暁の謎は、迷宮入りしてしまったのである。しかし、ペイン・・・長門が、死亡したため、口寄せで、外道魔像を出すことが出来なくなったから、尾獣8体が、出てくることは、半永久的に無いだろうと判断され、この一件は、収まった。

そして、この大事件の終止符を打ったとされ、旧第7班の3人には、新たに『伝説の三忍』と名乗ることを、許された。

そして、ペイン六道との戦いで、はちゃめちゃになっていた、木ノ葉の里もほぼ全て修復し、というよりは、かなりハイテク化し直し、全てが元通り以上になった今日この頃。春の日差しが、ポカポカとして、とても気持ちの良い朝を迎えていた。しかし、サスケは、叩き起こされる事になる。

隆起「父さん、起きなよ。」

隆盛「父さん！」

瞳「パパ！起きて！」

揺すられ、叩かれ渋々返事をした。

サスケ「何だ？今日は、任務は無いし、あいつもいないし、もう少し



し寝かせるよ。」

そう言うのと、また、布団の中に顔を埋めた。すると、瞳が、爆弾発言をする。

瞳「ママ帰ってきたよ？」

その言葉に、飛び起きた。

サスケ「そういうことは、早く言えよ！」

と、小声で叱った。が、次の瞬間には、子供達の前からいなくなっていた。そして、その姿は、台所にあった。

サスケ「随分と早かったな。帰ってくるのは、明日じゃなかったのか？」

テンテン「ええ、その予定だったんだけど、ガイ先生とリーが、後は任せる！後は、男の出番だ！」

って、燃えちゃったから、お言葉に甘えてきたの。」

なるほど、アイツ等なら十分ありえる話だ。と思っていたら、テンテンが、「あ、そう言えば！」的な口調で、話し始めた。

テンテン「そう言えば、さっき火影様のところ行って来たんだけど、やっぱり退屈みたいよ。」

書類は、ほとんどサクラがやってたし、火影様は、ただ回転椅子でクルクルクルクル

回ってるだけだったわよ。」

確かに、六代目火影ならば、その様子は、目に見えるように理解できる。

サスケ「あいつの夢は、叶ったんだろうけど、暇そうだな。」

テンテン「あ、そうそう。火影様が、後で、遊びに来るって言ってたわよ。」

サスケ「おいおい。サクラに見つかったら、オレまで巻き添え食うことになるんだけど・・・。」

そんな、会話をしていたら、台所にある窓に、奴が、現れた。

テンテン「全く、噂をすれば・・・。」

と、苦笑いをしていた。すると、ちょうど台所に来た子供達が、声を揃えて「ナルトの兄ちゃん!!」と喜んで、招いていた。そして、台所の窓から、遠慮なく入ってきた。

六代目「よ！元気にしてたか？お前ら。」

サスケ「ちつとは、遠慮しろ。ナルト。」

すると、悪びれることなく、

六代目「わりいわりい。サクラちゃんから、逃げるのに、飛雷神の術まで使わされたってばよ。」

サスケ「って事は、その外には、術式が、施してあるって事だよな。」

六代目「ああ。もちろんそうだってばよ!」

サスケ「後で、燃やしておく。ついでに、木ノ葉の至る所にある、飛雷神の術式も燃やして、

ついでにその位置を、全部サクラに報告しておく。安心しろ。」

その脅しに、見る見るうちに、顔が青ざめていく。そして、

六代目「分かったってばよ。．．．ぜってー！お前には、超S級の長期任務を回してやる

ってばよ！覚えとけ！」

そう言うのと、また、飛雷神の術で帰っていった。

テンテン「ドタバタ忍者は、健在ってとこね。」

サスケ「だな。」

そんな会話をしていると、子供達が、だんだんと騒ぎ始めた。

隆盛「術、早く教えてくれよ！」

隆起「今日、教えてくれるって言ってたろ？」

瞳「パパ早く早く！」

サスケ「6才になったらな。」

瞳「あゝ！！それ、私達が、3才の時には、4才になったら。って言ったもん！」

そっいう風に、言い返されると、確かに言ったような気もする。

サスケ「でも、お前ら、まだ4才になってないんじゃないのか？」

すると、テンテンが、大きなため息をした。

テンテン「はあゝ・・・。いい加減、自分の子供の誕生日くらい、覚えなさいよね。今日よ！」

あと、自分のも覚えなさい。あなたに、プレゼントあげても、パツとしないのよね。」

最後は、愚痴も混ざっていた。それから、押し切られるような形で、渋々子供達の修行に付き合うことになった。その前に、それぞれどんなタイプか、調べると、とても面白い結果がでた。三つ子なのに、全然一緒では、なかったのだ。隆起は、火遁・雷遁の忍術タイプ。隆盛は、火遁・風遁の幻術タイプ。瞳は、火遁・水遁の体術タイプだったのだ。

テンテン「って事は、お腹の中にいる子の形質変化は、火遁・土遁かしら？」

その発言に、その場にいた、皆が、食いついた。が、割愛。

子供達の修行は、チャクラコントロールから、始めようと思ったが、それは、既に、マスターしていて、水面も歩けるまでになっていた。

【DATE】No.4

前話の8年後4月1日現在

うちは サスケ(30・男)

下忍・中忍・上忍・暗部・上忍・暗部・上忍

基本値

忍：5 体：4・5 幻：5 賢：5  
力：4・4 速：5 精：5 印：5

総合能力：

潜在能力：

運：

形質変化：【火遁】・水遁・風遁・土遁・【雷遁】・炎遁

血継限界：写輪眼・万華鏡写輪眼

誕生日：7月23日

一言：段々と前世(転生前)の口調に戻り始めたが、周りは子供が出来たからだと思っており、

さほど気にはされていない様子。

うちは テンテン(31・女)

下忍・中忍・育児休暇

基本値

忍：3 体：3・5 幻：2・5 賢：3  
力：2 速：3・5 精：2 印：2・3

総合能力：

潜在能力：

運：

形質変化：【火遁】

血継限界：無し

誕生日：3月9日

一言：ここ最近は、子育てが忙しい模様で、木ノ葉の運営側も承知している様子。しかし、

偶には、任務もこなしている。

うちは 隆起<sup>りゅうき</sup>（12・男）

下忍 - 中忍

### 基本値

忍：4・4 体：2・8 幻：2・9 賢：3  
力：2・9 速：3 精：3・1 印：3・8

総合能力：

潜在能力：

運：

形質変化：【火遁】・水遁・風遁・土遁・【雷遁】

血継限界：写輪眼

誕生日：4月8日

一言：最初の三つ子の長男。忍術が得意な中忍で、アスマと紅の間に来た『<sup>せき</sup>汐（14）』

の事が、好きな様子。それをからかうのは、テンテンの役割。

うちは 隆盛<sup>りゅうせい</sup>（12・男）

下忍・中忍・特別上忍

基本値

忍：3 体：2・8 幻：4・7 賢：3・3  
力：2・8 速：2・9 精：3 印：3・9

総合能力：

潜在能力：

運：

形質変化：【火遁】・水遁・【風遁】・土遁・雷遁

血継限界：写輪眼

誕生日：4月8日

一言：最初の三つ子の次男。幻術が得意で、うちは一族の中では、  
珍しい特別上忍。

うちは 瞳<sup>あい</sup>（12・女）

下忍・中忍

基本値

忍：2・6 体：3・8 幻：2・7 賢：3・5  
力：3 速：3・1 精：2・6 印：3・2

総合能力：



潜在能力：

運：

形質変化：【火遁】・【水遁】・風遁・土遁・雷遁

血継限界：写輪眼

誕生日：4月8日

一言：最初の三つ子の長女。体術系統のタイプで、顔もテンテンに近く、兄弟内でのまとめ役。

うちは 悠（ゆう8・男）

下忍

### 基本値

忍：2・6 体：2・5 幻：2・5 賢：2・8  
力：4 速：2・7 精：5 印：2・4

総合能力：

潜在能力：

運：

形質変化：【火遁】・水遁・風遁・【土遁】・雷遁

血継限界：写輪眼（能力2つ）

誕生日：10月6日

一言：三男。スタミナとチャクラ量では、他の下忍や中忍の追隨を許さない。が、他の面は、

まだまだ改善の余地あり。

うちは 神（しん4・男）

下忍

基本値

忍：3・8 体：2・5 幻：3・8 賢：4  
力：2・5 速：3・2 精：4 印：4

総合能力：

潜在能力：

運：

形質変化：【火遁】・水遁・風遁・土遁・雷遁・【炎遁】

血継限界：写輪眼

誕生日：12月25日

一言：四男。歴代最年少で、アカデミーを卒業。実力は既に、中忍レベルに達している。

名の由来は、サスケ曰く、生まれたてのときに纏っていた才一ラが違ったらしい。

うちは 青<sup>せい</sup>（0・男）

基本値

未知数

誕生日：5月6日

一言：二度目の三つ子の五男。

うちは 蒼<sup>そう</sup>（0・男）

基本値

未知数

誕生日：5月6日

一言：二度目の三つ子の六男。

うちは 藍<sup>あおい</sup>（0・女）

基本値

未知数

誕生日：5月6日

一言：二度目の三つ子の次女。

今年も木ノ葉で、中忍選抜試験が行われていた。そして、今年の見物は、何と云ってもルーキーシックス。第1班・・・はたけカカシ（44）担当班には、六代目火影の愛娘うずまきコスモス（8）に、うちは悠（8）、そして、歴代最年少で、下忍となった、うちは神（4）の3名。第2班の担当は、マイト・ガイ（44）で、班員は、日向ヒノデ（8）、奈良シカリ（9）、山中いのき（8）の3名の計6名のことを示す。

そして第一の試験では、試験官が、うちは隆盛で、昔のようなカンニングをさせる問題を出したが、上記の6人は、難なくクリアし、第二の試験でも、その実力を他の者達に見せ付けて、本選の予選、それから、本選へと勝ち上がっていった。そして、下記が最終戦に残った10名だ。

【うずまきコスモス（8）】所属・木ノ葉隠れの里

得意な術：怪力、医療忍術、螺旋丸。

特筆事項：新三忍の六代目火影とサクラの実子。

【うちは悠（8）】所属・木ノ葉隠れの里

得意な術：火遁系と土遁系。

特筆事項：写輪眼を完璧ではないにしろ使う。

【うちは神（4）】所属・木ノ葉隠れの里

得意な術：火遁系とその上位である炎遁系。

特筆事項：歴代最年少の下忍で、写輪眼も完璧。

【日向ヒノデ（８）】所属・木ノ葉隠れの里  
得意な術：日向流の柔拳。  
特筆事項：白眼の使い手。

【奈良シカリ（９）】所属・木ノ葉隠れの里  
得意な術：影真似の術と風遁系。  
特筆事項：五大国史上初の木ノ葉と砂のミックス。

【山中いのき（８）】所属・木ノ葉隠れの里  
得意な術：心転身の術。  
特筆事項：運と自信だけは、誰にも負けない。

【皆愛（<sup>かい</sup>１２）】所属・砂隠れの里  
得意な術：砂縛枢、砂瀑埋葬と土遁。  
特筆事項：五代目風影の愛娘。

【カンタロウ（１３）】所属・砂隠れの里  
得意な術：傀儡の術。  
特筆事項：五代目風影の姪。

【イー（２０）】所属・雲隠れの里  
得意な術：雷遁系とおいろけの術（？）。  
特筆事項：ナイスバディな四代目雷影の姪。

【湘南（２６）】所属・雨隠れの里  
得意な術：幻術と体術。  
特筆事項：体格だけで見ると鬼鮫並。

そして次が、トーナメント表だ。

【第一回戦】

? ・うずまきコスモス VS 山中いのき  
? ・日向ヒノデ VS うちは悠  
? ・皆愛 VS 奈良シカリ  
? ・カンタロウ VS イー  
? ・うちは神 VS 湘南

【準決勝】

? ・?と?の勝者  
? ・?と?の勝者  
? ・?と?の勝者

【決勝】

? ・?と?の勝者。

そして、予選から一ヶ月が過ぎ、いよいよ本選のときがやってきた。

【GW】File・95

本選会場最上壇には、六代目火影のうずまきナルトと四代目風影の我愛羅が、既に到着していた。

ナルト「久しぶりだなあ我愛羅。」

我愛羅「・・・半年ぶりだけだな。」

火影と風影がこの2人になるまでは、付き添い人が、必ずいたが、この2人になってからは、一緒にいるのは、妻のみとなっていた。

我愛羅「お前の子供も出ると聞いたが。」

ナルト「もちろん出るってばよ。それから、サスケの子供も2人。」

サクラ「そう言えば、我愛羅さんのお子さんも出ていますよね。」

我愛羅「ああ。カンクロウとテマリのも出ている。」

ナルト「って事は、あん時の子供版同窓会だな。」

と言った感じで、火影や風影レベルの会話ではない会話が弾んでいた。そして、試験官から、試合開始の合図が、出され一回戦の第一試合、うずまきコスモスVS山中いのきの試合が始まった・・・。  
その試合は、距離は離れているもののサクラといのの応援合戦も行われていた。

その試合は、コスモスが、最後に螺旋丸を決めて勝利した。その後、いのきの腹部の治療を自分でやり、医療忍者の技量も観衆に見せ付けていた。そして、次の試合は、日向ヒノデVSうちは悠だった。

試験官「よい・・・始め！」

悠Side

その合図と同時に、2人は、自身の瞳術を使用した。

白眼

写輪眼

悠「白眼か・・・。チャクラの細かな流れや、更には点穴の位置までも、見通す事が出来る

木ノ葉隠れの日向家に伝わる瞳術。・・・だったっけか？」

ヒノデ「その瞳術は、うちのエリートのみが、開眼出来るとされる、写輪眼。でも、お前は、

弟にも負けていたような気もするが・・・。」

悠「バーロオ。神が強えただけだろ？」

その言葉に、ヒノデは、フツと笑って、

ヒノデ「・・・そろそろ始めるぞ。」

その言葉で、両方が互いに、距離をとった。そして、戦いが始まっ



た。

### 多重影分身の術

印を組んで、術を発動させると、一気に1000体ほどの影分身を出し、会場内を分身で埋め尽くした。その風景に、会場観客席が、ザワザワし始めた。

悠「これなら、白眼であつても、本体が分からないだろ？ここは、一発KOじゃなくて、千発KOで

速攻、片付けてやる！」

本体が、そう宣言したのと同時に、1000人の悠が、一斉攻撃を仕掛けた。

ヒノデ「無駄だ。」

そう言つて、

### 八卦掌回天

チャクラ穴からチャクラを一気に放出しながら、攻撃してきた悠の影分身を、次々に弾き消し飛ばしていった。しかし、持続時間の問題で、100体ほど倒した後に、回天は収まってしまった。

悠「もらった！！」

悠「もらった!!」

ここぞとばかりに、攻勢を強めた。が、しかし、それが墓穴を掘ることになってしまった。

ヒノデ「（掛かったな。）」

### 守護八卦六十四掌

それから突っ込んで行った者達は、八卦の領域内に入った瞬間、飛んで消えていった。その防御で、影分身の数は、100体にまで、減ってしまった。そこで、悠は自分なりに考えた結果、次のようになった。

悠「一斉に豪火球だ!」

そして、100体一斉に、

### 火遁・百倍豪火球の術

その豪火は、物凄い大きさになり、その光景は、ヒノデの母であるヒナタは、最悪の事態をモロに想像してしまい失神してしまったほどだった。

しかし、そんな心配は、無用だったようで、多少の火傷はしたものの、豪火が収まってから、ヒノデはしっかりと出てきた。その様子に、観客達は、歓声を送った。が、次の瞬間!

## 土遁・蟻地獄

それに飲み込まれて次々に消えていく影分身。それと数と比例して、どんどんと蟻地獄の効力範囲が、広がっていく。それに伴い、ヒノデもとうとう蟻地獄の餌食となり、沈んでいった。そこで、試験官より、仲裁が入り、

試験官「勝者、うちは悠！」

というコールが、なされた後に、ヒノデが、地中から上がってきた。そして、悠は控え室に悠々と帰っていった。

神「おめでとう、兄貴。」

コスモス「悠、なかなか良かったわよ？」

悠「まあな、これぐらいは、やらねーとな！」

コスモス「って事は、次は私とね。」

悠「（やばっ。こいつの馬鹿力、半端無いんだよな。）」

と、やる前から、トホホな気分の悠であった。

そして次の試合は、皆愛VS奈良シカリの従姉妹対決だった。大体の実力は、五分五分だったが、やはり風影の子は、強かった。頭脳戦により、序盤から中盤は、押されていたものの、最終的には、チャクラ量やスタミナという風なところで、皆愛が、勝利した。

その次の第4試合は、カンタロウ VS イーだった。その試合は、

カンタロウも良く頑張ったが、イーとの実力差は、隠し切れずに、あっさりと敗れてしまった。

そして、遂に歴代最年少下忍、超天才忍者、通称・木ノ葉の超新星の実力が、見られるときが来た。

悠「頑張れよ！神！」

コスモス「気をつけてね。」

神「うん、絶対に倒す。うちらの名に懸けて！」

そう言ったかと思うと、控え室には、どこにも気配が無かった。そして、会場内を見ると、既に中央に立っていた。

試験官「第5試合・・・開始！」

最初に歓声が、上がった後に、会場内は、シーンと静まり返った・・・。

## 【GW】File・97

神side

試験官「第5試合・・・開始！」

その瞬間に、神の辺り一面が、炎の海と化した。

写輪眼

神「（これは・・・、魔幻・地獄業火の術。）」

解

すると、目の前に湘南の握り拳があった。それを避けてから、一瞬で反撃をした。

千鳥拳

たった一発を超速スピードで湘南の鳩尾に入れ、再起不能とした。とは言っても、拳に雷のグローブを、着けているから当たり前だと言え、当たり前なのだが。

そして、湘南がパタリと倒れると、歓声が上がった。その時には、既に神は、控え室に戻っていた。

神「2人とも頑張った。」

そして、コスモスと悠は、出て行った。

悠 side

試合直前だが、とても悩んでいた。その内容とは・・・、

悠「（コスモスは、弱い男は、嫌いだと思うし、かと言って、ここで圧倒的な差で、

勝っちゃったら、面目丸潰れで、嫌われるだろうし・・・。  
困ったなあ。」

そんな心配事も、戦闘に入ってしまったら、忘れてしまふのだが、

試験官「試合・・・始め！」

しかし、最初の方、悠は防戦一方の展開だった。そこは、ちゃんと考えて動いていたからだろう。だが、その事も、時が経つにつれて忘れていき、最終的には、間違ったら殺しかねないような 土遁・おとし蓋 や 土遁・岩柱槍 など、高度な土遁を使い始めた。最後の一撃は、コスモスが螺旋丸を当てようとした瞬間に、 土遁・黄泉沼 で、上半身まで沈ませながら身動きを封じて、 土遁・土流大河 で、戦闘不能。そして、勝った瞬間に、最初に考えていた事を思い出して慌て始めた。

悠「大丈夫！？大丈夫か！？おい！」

命に別状は無かったから、全く問題は無かった・・・。

試験官「勝者、うちは悠。」

そして、次の試合は、第7試合目。皆愛とイーの対決だった。最初の方は、互角にやり合うも、皆愛の決め技 砂縛柩／＼砂瀑埋葬 が、ミスると、そこから崩れていき、結果的には、イーが勝ち残った。と言う事で、第8試合は、うちは神V S イーという対戦カードとなった。

神side

試験官「両者、前へ。」

写輪眼

口寄せ・雷光剣化

で、腰に双剣を帯刀してから控え室から出て行った。

イー「随分とめんこいガキだね。」

かなり上から目線。それもそのはず、何たって16才差だ。

試験官「試合開始！」

という合図があつた瞬間には、印を結び終えていて、早速、術を發動させた。

炎遁・蛇炎

すると、地面から炎が、イーに向かって猛スピードで、進み始めた。

炎遁・鳳凰炎舞

そして、腰に帯刀していた、刀を抜刀すると、その剣は、炎を纏っていた。



炎遁・鳳凰炎舞

術を発動させてから、帯刀していた2本の刀を、抜刀した。するとその両刀は、刃に炎を纏った形で、現れた。そのときには、蛇の炎は、イーを追い掛け回し、それによって、地面は、火の海と化していた。そして、イーの意識は、炎蛇に集中しささっていた。その状況に「しめた!」と思った、神は、影舞葉で、一気に、イーとの距離を縮め、炎蛇と挟み撃ちとなるような形で、追いついた。

イー「(しまった!)」

と、思ったときには、時既に遅し。神は、イーに斬りかかっていた。しかし、そんな状況でも、イーは、負けていられない。強い反射神経で、ギリギリのところだったが、完全に避けた。

イー「(所詮、お子ちゃまは、お子ちゃまね。)」

そして、神は、何を思ったのか、炎蛇を消して、片方の刀も鞘に収めた。そして、『カチャン』という、音が聞こえて、神が、

神「結!」

と、言うと、『バサッ』とうつ音を立てて、イーの服が破れた。そして、それによって露出されてしまっている、肌には、軽度の火傷ではあるが、数多くの傷も垣間見える。

イー「どうして!？」

イーは、ポロリしてしまっている、大きな胸を両腕で、隠しながら聞いた。

神「さっきの刀は、ただ炎を纏っていただけじゃなくてね、風の性質変化も混ぜてあったんだ。

だから、直接当たらなくても、物体は、切れるんだ。」

その説明に、イーは、納得したが、次に、神の口から出た言葉には、絶句した。

神「あ、それと、今、持っている、もう1つのこの刀を、鞘に収めると、お姉さんごと、

燃えて無くなるから、今の内に、降参しておいた方が、身の為だよ。」

その忠告を聞き入れるしか、今のイーには、生き延びる方法はなく、16才も年下の男の子の言葉に従って、イーは、泣く泣く降参した。

試験官「勝者、うちは神!」

そのコールと同時に、巻き起こった歓声の嵐の最中に、神は、イーに呼び止められた。

イー「ちょっと、待ちなさいよ!神君!私の服は、どうすりゃいいのよ?!」

という、嘆きの声に、神は、

神「控え室にある、バスタオルでも使って、凌いでよ、イー。」

と、立場は、かなり逆転してしまっていた。そして、その言葉を言った後には、既に、神の姿は、そこには無かった……。次に、姿を現したところは、控え室だった。

コスモス「さて、最後は、あんた達のうちは兄弟対決って事よね。」

回復力が早いと思ったのは、神だけでは、無いはずだ。そして、最後の選手呼び出しのコールが、された。その声は、六代目火影・うずまきナルトのものだった。

## 【GW】File・99

本日の最終試合、決勝戦の試合開始の合図は、火影自らが、出した。

ナルト「決勝戦！うちは悠VSうちは神。・・・・・・、最終試合開始！！」

そう宣言されたのと同時に、うちはの名を騙る者同士の戦いが始まった。

### 火遁・豪火球の術

その炎の球体の大きさは、既に上忍レベルであった。そのレベルの高さに、皆が驚いた。

悠「まだまだ！」

### 多重影分身の術

印を結んで、本体含めて悠が、500体になった。この数を出して、火遁のレベルを下げずに出来るのは、ずば抜けた、チャクラ量と、スタミナがあつての事だろう。

### 火遁・五百倍豪火球の術

四方八方からの豪火球。これには、流石の神も、太刀打ちできない物とだと思われた。が、一旦、空高くジャンプして、逆に、その火を利用した。

## 炎遁・灼熱地獄

そして、手から蒼炎を幾つか発射すると、蒼炎が、豪火球を飲み込むようにして、勢力を拡大し、次々と、悠を消していった。その炎は、地面に燃え移り、会場内が、蒼い火の海となっていた。

その光景に、母親であるテンテンや、兄姉である隆起、隆盛、瞳は、満足そうな表情を浮かべていた。が、父親であるサスケは、この後の、会場整備が大変になる事を予想して、1人ため息を付いていた。そして、その作業には、今試合をやっている2人にも強制参加させようと思ったところで、思考を止めた。

神「（兄貴には悪いけど、この試合は、もらった!）」

## 炎遁・鳳凰仙火の術

その術を発動させると、数個の火の玉が、数羽の鳳凰を象って、悠を追尾した。

悠「（ヤバッ! 神に殺される!）」

そう思って、必死に逃げたのは、言うまでもないが、兄のメンツとしても、ここで負けるわけには行かない。と言う事で、土遁・土流壁で、身を守りながら、土遁・土龍弾を発動させて、応戦している。そんな神が攻め、悠が守るという様な形で、術の応酬戦は、暫く続き、人と比べて圧倒的にチャクラ量の多い2人も、とうとうへたばってきた。

悠「（体術戦に移るしか、勝つ手段はなさそうだな。）」

そして、土遁・土矛で、防御と攻撃力（破壊力）を一気に高めて、神に突っ込んで行った。

神「（あの術の威力は、・・・痛い。）」

すると、こちらも応戦する為に、準備に入った。

悠は、そのまま真正面から、突っ込んでくる。そこに、カウンターで、

### 千鳥拳

を食らわせようとしたが、写輪眼で見極められ、逆に痛い拳を食らった。が、しかし、次の一手には、対応しきれなかった。

### 分身大爆破

『ドカーン!!』という大きな爆発音と共に、悠の体が宙を舞った。そして、神は、土遁・土中映魚の術で、身を潜めていたが、ひよっこりと姿を現した。今の爆発の威力じゃ、死んでいたが、悠は、土矛を使っていたから、命に別状は、無いだろう。そして、優勝者の名が、コールされた。

試験官「勝者、うちは神！よって、優勝は、うちは神！！」

中忍選抜試験本選から約1ヶ月が過ぎた今日この頃。関係各方面から、好からぬ噂が、舞い込んでくるようになった。そこで、五影とも交渉し、久々に五影会議を開く事となった。そして、事件は、起こってしまった。それは、会議も終了間近になった時の事であった。サスケが飛雷神の術を駆使して、この場に、乱入してきたのは（術式は、ナルトが所持していた）、

ナルト「どうした？サスケ。」

その問いに、小声で、報告した。

サスケ「岩隠れの忍と霧隠れの忍が、それぞれ、上・中・下忍合わせて、200人ほどの大隊が、

火の国との国境を侵して、火の国、木ノ葉隠れの里領域内に進入。国境警備班と、

交戦後、オレ達、うちは一族の応援で、敵は、退却した。

それと、日向の者が、

他の国の国境を見た所、雷の国と風の国にも、侵攻している輩がいるらしい。」

正直、うちは一族と言っても、サスケ、隆起、隆盛、瞳、悠、神の6人しか援軍に行っていない。そして、この報告は、他の五影も耳をダンボにして聞いている。

ナルト「話は、聞いていただろうな！土影殿と水影殿。これは、どういう事なんだってばよ?!」

すると、土影と水影は、悪びれることなく、他の三影に、ある公式文書を手渡した。そして、

水影「これより、火の国・木ノ葉隠れの里、風の国・砂隠れの里、雷の国・雲隠れの里に対し、

全面戦争・第四次忍界大戦を宣戦布告する！」

そう言った瞬間に、サスケの写輪眼の模様が変化し、万華鏡写輪眼となった。その瞬間に、視界に入っている、土影には 神炎 が、水影には 天照 が、発動された。土影は、五影らしからぬ逝き方で、あっさりとポックリ逝ってしまったが、水影に当たるはずだった、天照 は、通り抜けた。

サスケが、攻撃を仕掛けた事もあり、土影、水影の護衛役は、戦闘に加わるうとしたが、我愛羅の砂によって、難なくノックアウトにされた。そして、水影が、話し始めようとしたときに、サスケが、何かに気が付く。

サスケ「もしかして、お前が、うちはマダラか？」

水影「・・・よく分かったな、俺の事が。」

サスケ「兄貴には、気を付けろという遺言をもらっている。どうせ、この戦争の首謀者が、

お前つてところだろ。だが、どうする？お前には、分が悪すぎるぞ。」

と、言った瞬間には、サスケの 千鳥鋭槍 が、心臓に突き刺さっていた。・・・が、良く見るとその部分だけ貫通していて、全く効いていない。



水影「うちはサスケ。最初で最後の交渉だ。木ノ葉を裏切り、うちは一族ごと、俺に付くか、

愚かな木ノ葉に死ぬまで奉仕するか。さあ、どちらだ？」

サスケ「今、ここでお前を倒す。それが、平和を保つ為の犠牲だ。」

そして、究極奥義 須佐能乎 を発動させたが、その時には、マダラは消えていた。

第四次忍界大戦は、火風雷VS水土の総力を挙げた大戦争となった。その期間は、約4年も続いた。土の国・岩隠れの里が、降伏し取り潰されたのは、戦争が始まって、1年が経つか経たないか位と、かなり早かったが、水の国・霧隠れの里が強かった。しかし、実質、木ノ葉のエリート忍者達や、三影も死力を尽くして、叩き潰した事によって、水の国・霧隠れの里が、壊滅滅亡したのは、戦争開始から2年目の時だった。それから2年間は、うちはマダラの搜索で時間が掛かった。そして、遂にうちはマダラのことを掴んで、三影であるうずまきナルト、我愛羅、エーと三忍の1人であるうちはサスケが、追いついた。

そして、見つけた時には、既にマダラは、ガリガリのヨボヨボの見るも無残な姿になって、生き永らえていた。

ナルト「やっと見つけたってばよ！マダラ！」

我愛羅「・・・覚悟。」

サスケ「念には念を入れて、ここは、オレがやる。」

そう言うと、万華鏡写輪眼に変えて、

須佐能乎

を発動させた。そして、その須佐能乎が、手に持っている十拳剣、別名・酒刈太刀で、マダラを突き刺そうとした時だった。

## 呪術・四日後の死魔境

マダラが、そう言い終えると、ちょうど酒刈太刀が、マダラに突き刺さり、絶命した。

エー「これで、終わったのか!？」

我愛羅「多分な。」

ナルト「これで、忍の世界に平和が戻るってばよ!」

と、言ったときだった。サスケが急に苦しみだしたのは、

サスケ「うつ!!わああ!!!!!!」

様子があまりにも変過ぎるので、三影は急いで、木ノ葉病院へ連れて行った。

・ ・ ・

そこでの診断は、何にも分からない。という、言葉だった。そして、その四日後に病院内で、サスケは、目を覚ました。そしてサスケが寝ているベッドの周りには、家族が取り巻いていた。

月日とは、早いものだ。上の3人は16才になり上忍に、悠は12才の中忍で、神は8才で上忍だ。下の3人は4才で今はアカデミーの生徒をやっている。そして、テンテンのお腹の中には、また新しい子供が・・・。

と、回想していると、また激痛が体を襲う。その様子に皆の視線が、

痛々しそうにサスケを見つめるが、何も出来ない。強いて言えば、声をかけてあげられるくらいのことだ。そして、その激痛に耐えながら、サスケは、言葉を発した。

サスケ「お前達には悪いけど、オレは、もうこれ以上は生きられなさそうだ。残念ながら

これから先の未来は、一緒に見てやれない。」

そして、ここから、1人1人に言葉を遺していった。最後に、

サスケ「テンテン。もしお前が良ければ、このオレの眼を貰ってくれないか？この眼は、

オレだけじゃなくて、兄貴の形見でもあるんだ。」

テンテンは、その言葉に、ゆっくりと頷いた。

サスケ「面倒事ばかりで、わりいな。それと最期に・・・」

そう言うと、体を起こして、テンテンの耳元で、他の誰にも聞こえないような小声で、

「・・・らいせもよろしく」

と言い遣し、テンテンの肩にもたれ掛かりながら安らかに眠っていた・・・。

オレは、真っ白い空間に1人ぽつんといった。すると、目の前に、いきなり幼い少女が、現れた。

・・・ここでは、本名中の本名で行こう。

隆「誰？」

神様「神様よ。」

自分で自分を神様だと言ったコイツは、何者だろうか？もしかすると、コイツが、オレをさっきまでいた世界に迷い込ませた張本人かもしれないと、直感した。

隆「どうして、オレはここにいるんだ？」

神様「選ばれたからです。」

隆「なんで？」

神様「何で？と言われましても・・・では、まずはあなたの世界の説明から始めましょう。」

そう言うと、ペラペラと話し始めた。

神様「あなたの生まれ育った、最初の世界の時間は、止めてあるの  
で、特には問題ありません。」

そしてその世界では、数年後、大変な事が起こります。それ

は、私にも分かりませんが、

とりあえず、とんでもない事が起こるのです。そして、私は、その世界の神。

私はあなたにその世界を守ってもらわなくては、武者修行に出てもらったのです。」

隆「それなら『最強兵士育成ノ玉』で、かなり反則的に強くなったけど？」

神様「違つのです！あなたは、精神的に不安定すぎるのです。」

オレは、何の事が、さっぱり分からなかった。

隆「例えば？」

神様「例えばですか？例えば、1回目の小学生の時は、最上五月という従姉に、1回目の

中学生、高校生の時は、園崎魅音という女に振り回され、黒の組織だとやりに

入った時には、宮野志保とやりに、そしてそして、芸能界と言う世界に入ったら、

少しは自重するかと思いきや、アキバヨンジュウハチという集団に加入している、

女達と遊んでは、ネタにされて、ネタにされて、ネタにされて・・・」

いや、アキバヨンジュウハチじゃなくて、AKB48なのだが・・・、

神様「それでは！この世の救世主として、恥です！屑です！塵以下

です！」

あゝ聞いてないのね。

隆「じゃあ、他を当たればいいだろ。オレは別に、女垂らしじゃない。ただ、仲が良かった

だけだろうがよ。全く……。」

神様「でも、あなたしか居なかったので、さっきまで居た世界を創らせていただきました。

そして、そこではちゃんと1人に絞れたのですね？子供もいっぱい居ましたし……。

そこで最後の試験です。あなたには、もう一度あの世界へ行ってもらいます。

ですが、今度は、あなた自身として、生きてもらいます。ただし、今までの経験値は、

あなたのものです。見事この試験に合格できたら、ご褒美をあげます。お楽しみに。」

そう言つて、手を振られると、視界が段々と狭まりやがて、眠ってしまった……。

オレは、目を覚ました。ここは、見慣れた我が家だった。とは言っても、とても似ている別の世界なのだろうが……。そして、よく回らない首で、辺りを確認した。すると、隣には、赤ん坊が、すやすやと気持ち良さそうに寝ている。ついでにオレも赤子の姿だ。

ミコト「リュウ？もう目を覚ましたの？」

と、オレの顔を覗き込んできた顔は、二十数年振りに見る、こつちの世界の母さんの顔であつた。

すると母親の後ろから足音が聞こえてきて、横引きのドアが開いた。

イタチ「もう起きたのかい？母さん。」

ミコト「あらイタチ。父さんとの朝修行は？」

イタチ「ああ、もう終わったよ。」

ミコト「そう、お疲れ様。お腹減ったでしょう？朝ご飯作るからちよつと待ってて。」

と言に残すと部屋を出て行つた。するとイタチが止めようとする。

イタチ「あつちよつと母さん！サスケとリュウは？」

その返事は、「少しの間相手をしていて。」というものだった。



イタチ「わかったよ。・・・それにしても、双子なのに似てないな。」

オレは、この兄貴が、数年後一族を滅亡させる事実を知っている。しかし、その内に秘められていた真実の扉を開いてしまったオレは、その暴挙を、止めることは無いと思う。いや、もしかしたら、手助けすらもしてしまうかもしれない。

それから1年後には、影分身を森の中に隠して、身体エネルギーの経験値を得るために活動させた。精神エネルギーは、そのまま引き継げたみたいだったが、体が赤ちゃんなので、身体エネルギーは、1からやらないと駄目そうだったからだ。

そして、また1年後には、自分で付けた奥義レベルの術以外は、ほぼ前と変わりなく発動させる事が出来る様になつた。あと、家族には、見せていないが、写輪眼と万華鏡写輪眼も使えている。ただ、万華鏡写輪眼の方の術は、チャクラ消費が高いので、試してはいない。

3歳の誕生日を迎えたある日の事である。その日から、フガクとイタチとサスケとオレで、朝の修行が始まった。その時は、写輪眼や万華鏡写輪眼を全く使わずにやっている。今、開眼させてしまったら、クーデターに参加させられると思ったからだ。そして、そんな日が続いていて、晩の事だった。影分身が、自分で術を解いて外の状態を覚えてくれたのだった。

それは、緊急事態だった。オレは、前に兄弟3人で、木ノ葉の里を散歩したときに、目を盗んで、ある術式をあちらこちらに貼っていたのを使って、まずは、日向家へ飛んだ・・・。



オレは、日向家の門に着いた。今は、身を潜めて様子を伺っているが、かなりバタバタしている。そして、日向ヒザシが、飛び出していった。オレも、それに着いて行く事にする。

それから、森の方にまで来た頃、やっとヒナタを抱えている敵に追いついた。

ヒザシ「はあはあ・・・大人しく、ヒナタ様を返せ！」

忍頭「では、貴様には、大人しく死んでもらおう。」

そう言つて、一気に突っ込んできたときだった。オレが、万華鏡写輪眼を開いて、ヒザシの目の前に出て行ったのは、

ヒザシ「（?!）」

ヒザシも雲隠れの忍頭もかなり驚いているようだが、オレに構わず、忍頭は、突っ込んできた。その時、忍頭との視線がぶつかった。

月読

忍頭『（何！？）』

リュウ『これから、24時間、お前を灼熱地獄の中に陥れた上での拷問と尋問に移らせてもらう。』

これが、幻術だとおもつて、高を括らないほうがいい。空間も、時間も、質量も、

全てはオレが支配する。』

忍頭『何者だ?! うわわああああつつ!!!!!!』

そこから、長い長い24時間を過ごして頂き、この計画の黒幕なども全て吐いてもらった。そして、オレは、一足早く現実世界に戻ってきた。その後、直ぐに、忍頭が倒れた。その腕の中にいた。ヒナタが地面に叩きつけられる前に、受け止める事も出来た。

ヒザシ「君は、一体?」

リュウ「それより、ヒナタを見てあげてよ。きっと、疲れちゃってると思うからさ。」

歳相応の言葉遣いで、ヒナタをヒザシに預けると、さっさと背を向けて帰ろうとした。しかし、ヒザシの後を追いかけてきた、日向分家の者達に、取り囲まれてしまった。

ヒザシ「君には、お礼もしたいんだ。付いて来てくれるかな?」

その言葉に、渋々だったが、表面上は元気良く頷いて日向家の門を潜った。そして、通された間には、日向家の上層部と里の上層部が、先に運ばれた、精神崩壊を起こしている忍頭を見下しながら、座っていた。

ヒアシ「その子か? ヒザシ。こやつを倒し、ヒナタを助けたという男の子は。」

ヒザシ「はい。」

すると、前に出されたので、とりあえず頭を下げておく。

ヒルゼン「うむ、お主は、確か……。」

リュウ「はい。うちはフガクの子、うちはリュウです。」

ヒルゼン「やはりそうか。で、何故お主が、こんな夜に外に出ておったのかの？」

その問いには、困った。が、黙っているわけにも行かず、

リュウ「何となく、外を眺めていたら、不穏なチャクラの流れを感じたから。」

すると、年寄りの目が、厳しくなっていた。

ヒルゼン「……お主、まさか？」

ヒルゼン「・・・お主、まさか。写輪眼を使っているのではあるまいな？」

オレの脳は、咄嗟にYesと言った場合と、Noと言った場合を考えた。Yesと言った場合は、少なくとも、父フガクの耳に届いてしまうだろう。Noと言った場合は、ならばどうやって忍頭程の忍を倒したのか？となつて、面倒臭い。・・・仕方ない、認めるか。

リュウ「うん。おじいちゃんも見たい？」

それには、周りの者たちも頷いた。そして、皆がオレの目を見つめていた。これは、好都合だ。尋問した時の内容を言わなくても、幻術で、そのまま見せればいいや。と言う事で、幻術を掛けた。

リュウ『どう？熱ついよね、そこ。そろそろ、諦めて吐いたらどう？女の子をいじめた理由。』

忍頭『ハハ・・・言える訳ねえだろうがよ。』

リュウ『僕、別に拷問狂じゃないんだけどさ・・・。上空をご覧くださうい。本日の天気は、

『千本』時々『クナイ』後に、『刀』でしょう。』

そう言い終えた瞬間から、忍頭の上だけに、様々な武器が降ってきた。

リュウ『そろそろ、吐いたら？その子はね、恥ずかしがり屋で、不器用で、忍には、

向いてないくらい優しい子だけど、良い子なんだよ？反省してくれないと、怒るよ？』

それから、暫く、武器の大雨が、忍頭に突き刺さった後に、やつと吐いた。

忍頭『白眼だ！白眼の能力の解明を目的として、送り込まれたんだ！！』

リュウ『へえ、誰に？』

忍頭『………、雷・か……。』

リュウ『誰に！？』

忍頭『雷影様です！』

リュウ『そ、……。ありがとう、おじさん。でも、女の子を虐めたから、罰ね。』

そう言うと、ワイヤーで、両手両足をそれぞれ逆の方向へ引つ張つて、忍頭の叫び声と共に、引き千切った。そして、映像は、途切れ、現実世界へと意識は戻った。

ヒルゼン『そういう事じゃったか……。』

リュウ『うん。だから、殺さない方が、良いのかな？と思って……。こづいうのって、

確か、外交カードって、いうものなんだよね？」

3歳の口から、そんな言葉が出るとは思っていなかったらしく、皆大層驚いていた。

リュウ「もつと、その人から情報を聞きだしたかったら、今は、精神崩壊を起こしているから、

ちゃんと治療できる人を、連れてこない駄目だよ。」

それから、外交の事は、どうなったか良く分からないが、かなりの大金を送ってきたのと、雷影は、関与していない。という、2点は、後々知る事が出来た。

それからは、あくまでオレ1人だが、日向との交流も深め、度々稽古場で、体術の稽古を教えてもらうまでになった。しかし、一族同士はまだ、ライバル視している。

そして、写輪眼の事も、親にバレてしまった。が、万華鏡写輪眼を開眼している事は、バレなかったから、良しとしよう。と思った。。。



それから、暫くの間は、朝は兄弟で修行（たまに父も参加）。昼は日向家へ行き、ネジやヒナタと軽い修行。時々、ヒアシやヒザシも相手をしてくれる。夜は、影分身に委託。という、流れで、着々と身体エネルギーを溜めていった。

そして、ある日の事、日向家から戻る途中で、自分より少し年上か同じくらい（もちろん、実年齢ではなく、こっちの身体年齢）の女の子を見つけた。それから、次の日も次の日も会った。そして、声をかけてみた。

リュウ「最近良く会うけど、どうしたの？友達いないの？」

すると、女の子は、頷いた。

リュウ「じゃあ、家に来なよ。」

そう言つて、半ば強引に手を引いて、家に向かった。すると、やはり、いつもの様に、サスケが門のところで、待っていた。

サスケ「リュウ！おかえり・・・、って誰？その子。」

リュウ「わかんないけど、友達。サスケもなつたら？」

サスケ「うん！」

何て、子供は、純粹なんだろう。と改めて実感してしまった、1コマであつた。そして、その子は、多由也という名前の女の子で、笛

が得意というのが、分かった。

それから、半年くらいが経ち、外が肌寒くなってきた頃に、また出会いはあった。夕方頃、いつもの様に、オレとサスケと多由也の3人で、森の方で、遊んでいると、木の陰から、視線を感じたのであった。

サスケ「誰だろう?」

そう言つて、そっちの方へ行くと、誰かを連れてきた。そして、オレは、どこかで感じた事のある、チャクラの質だな……。と感じて、写輪眼を通して、見てみた。……。確かに、前の世界で会った事があるはずなんだが、思い出せない。

サスケ「へえ、白っていうんだ。」

すると、オレが、ジーっと写輪眼で、見つめていたから、どうやら不審な目で見られているらしい。すると、白が、意外にも、話しかけてきた。

白「その目は、血継限界なんですか?」

リュウ「そうだけど。もしかして、君も血継限界持ってるの?」

すると、かなり迷いながら、頷いた。

白「ボクにも、血継限界があつて、それが原因で、木ノ葉の里に逃げてきたんです。」

それから、いきなり始まった、告白劇は、結構いや、かなり悲惨なものだった。そして、全てを話し終えたときに、涙を一粒流して、白「すみません。ボクのほうが、年上のクセに、男のクセに、泣いてしまつて。」

こんなに可愛くて綺麗な顔立ちしてるのに?!と内心驚いた自分だったが、他の2人みたいなリアクションは、とらなかった。

それにしても、前の世界では、こんな展開なかったよな・・・。

それから、暫くして、オレ達は、アカデミーに入学した。それから間も無くの事だった。うちは一族が、滅ぶのは……。そして、とある日の夕方。サスケを白と多由也に預けてアカデミーに置いて、さっさと帰宅したオレは、兄イタチを探した。すると、直ぐに見つかった。

イタチ「今日は早いんだな、リュウ。」

リュウ「兄貴の仕事の手伝いをしようと思って。これから、皆を殺すんでしょ？木ノ葉の為に。」

図星をど真ん中ストレートに、決められてたイタチは、柄にもなく表情を変えた。

リュウ「オレには、兄貴の考えている事全て、手に取るように分かる。痛みは分けようよ。」

じゃあ、オレは、西をやるから、兄貴は東ね。」

その答えは、待たずに、事前に仕掛けてあった、飛雷神の術で飛雷神の術式の場所に飛んでいき、草薙の剣と妖刀・村正を出して千鳥刀・双剣で、容赦無く殺していった。その際は、2人とも返り血を一滴も浴びることなく、終えた。そして、全てが終わったときに、サスケが帰ってきた。その時は、都合良くちょうど、兄貴とオレが対峙していたときだった。

サスケ「どうしたんだよ?!これ……。」

そう言ったや否や、悲鳴を上げて倒れた。・・・月読か。

イタチ「リュウ。サスケを頼んだ。それと、ダンゾウとマダラという男には、気をつける。

あと、お前の手を汚す事になって、申し訳ない。」

そう言い残すと、月夜に紛れて消えていった。

それからと言うもの、サスケは、変わってしまった。しかし、まだ幼いサスケに、真実を教えるには、早すぎて、何も言うことはしなかった。2人で修行や普段の生活は、続けていたが、全てに対して『無言』に等しかった。

オレは変わらず、普通にアカデミーでも人と話している。白も多由也もサスケのことは、気に掛けてはいるのだが、本人が、拒否しているから、今は、大人しく見ているらしい。

そして、今は、アカデミーに行っているから、昔のように毎日は来ていないが、たまに日向家に遊びに行くときもある。今日は、気分で寄ってみた。すると、そこには、ネジがいた。

ネジ「なんだ、リュウか。」

リュウ「久しぶり、ネジ。早速なんだけど、相手してくれる?」

ネジ「フツ・・・いいだろう。」

と、かなり上から物を言われている気もするが、体術に関しては、五分と五分。その他に関しては、圧倒的に、オレの方が強い事は確かだ。

それからチャクラを使わずに、柔拳のみで戦って、汗をかいた。そ

して、別れ際に、

ネジ「明日は、面白い事があるそうだ。」

と言っていたが、何の事だろうか？

翌日。オレは、いつもの様に、アカデミーへ行っていた。そして、何の予告もなしに、野外演習をする事が伝えられる。そして、その引率者として、現在の下忍が、特別に呼ばれていた。ネジが、言っていた事は、この事か……。すると、イルカ先生が、説明を始めた。

イルカ「今回の野外演習は、1泊2日のサバイバル演習で、各班は、タクラミ山の山頂に

隠してある、巻物を取って里に帰ってきたら、この演習は、終了となる。ただし、

巻物は、1つしかないから、他の班とは争奪戦になるぞ。

途中我々教官が扮した、

仮想敵忍者や、トラップなどの妨害もあるから、気をつける。生徒は、班長の言う事を、

ちゃんと聞いて、決して無理はしないように、がんばって来い。」

そして、班分けされた、班会議に参加させられる事となった。

ヒナタ「あ、あの、どうするのでしょうか？班長さん。」

ヒナタが、「班長さん」と呼んだ人物は、オレも良く知るあの人があった。

テンテン「勝つための方法は、2つよね。1つ目は、一番早く取って、そのままゴール。2つ目は、

どこかの班が、持ってきた巻物を狙って横取り。ねえ、どっちにする？」

と、顔を近づけてきた。この顔の超どアップには、慣れてはいたつもりだが、色々と危ない。

リュウ「顔、近過ぎない？」

テンテン「べつつに〜。」

多由也「近い。近すぎる。」

何故か、多由也の機嫌も悪くなってきたところで、とりあえず、二歩くらい離れた。

リュウ「正攻法。チャツチャと巻物取りに行こう。」

結局その後も、オレの判断で、物事が決まっていた。つか、テンテン・・・班長の仕事くらい、しっかりやれよ。

それから、テクテクと歩いていき、陽も落ちてきた頃にようやく休憩になった。そして、今は、狭すぎるテントの中だ。ただでも狭いのに、暴れてもらいたくは無いのだが・・・。

多由也「だから、幼馴染として、ウチが、隣で寝るって言うてるだろ?!」

テンテン「アンタをリュウ君の隣にすると、危ないでしょ？だから、私がそれを抑える為に、

リュウ君の隣は、私って言うてるのよ。」



ヒナタ「あ、あのお、そのお、私なら幼馴染でもあるし。危なくないと思うから、隣は、私が、」

多由也&テンテン「ヒナタは黙ってて！」

と、ばっちしハモツた。おおゝ怖。

それからも口論は、暫く続き結局、ヒナタ 多由也 オレ テンテンの順番で寝た。最初っからそうすりゃ良かったのに。

そして、朝早くから行動を開始し、遂に巻物を手に入れた。

巻物を手に入れたオレ達は、学校への帰路に着いていた。その途中には、様々な邪魔者が、出現した。その一先生達。

イルカ「ここから先は、通さん！」

リュウ「父さん？ああ、通さんね。」

火遁・鳳仙火の術

で、蹴散らす。邪魔者その二。巻物を狙っている生徒諸君。

キバ「行くぜ！赤丸！」

金縛りの術

キバ「うつ、動かねえ・・・。」

サスケ「巻物は、俺が頂く！」

火遁・豪火球の術

サスケの野郎、マジだ。

水遁・水陣壁

風遁・大突破

それで、飛んでった。最後にその三。他の班の班長である下忍。

リー「はああ!!」

土遁・土流大河

リー「そ、そんな・・・。」

濁流に飲み込まれ、その班員たちも行動不可。

ネジ「テンテン、リュウ。大人しく、その巻物を渡してもらおうか。」

リュウ「無理。」

□寄せの術

を、発動させて、白龍と黒龍を呼び出した。そして、テンテンに飛雷神の術式を持たせて、白龍はテンテンが乗り、黒龍にはヒナタと多由也が乗った。そして、先に行かせた。

リュウ「勝負だ。」

ネジ「いいだろう。お前ら、下がっている。」

白「ネジさんだけでは、勝てません。援護します。」

すると、印を結んだ。あの術は、確か……。マズイと思ったオレは、写輪眼でコピーした。

水遁秘術・千殺水翔

その千本は、どちらも足を掠めるくらいだった。

白「ネジさん、今です!」

ネジ「ああ、分かっている。」

柔拳法・八卦三十二掌

ネジ「八卦二掌!」

それを避ける。

ネジ「四掌!」

また避ける。

ネジ「八掌!」

危うくなってきたが、避ける。

ネジ「十六掌!」

もう、ギリギリだが、避ける。

ネジ「三十二掌!」

最後の最後で、掠めてしまった。が、点穴一箇所を掠めただけなら、

それほどの問題は無い。

リュウ「そろそろ、足止めは、終わりにして、帰る。じゃーな。」

### 飛雷神の術

そうすると、次の瞬間には、白龍に乗っていた。

テンテン「いつの間に!？」

リュウ「たった今、飛雷神の術で、飛んできただけ。それより、もうそろそろ着くぞ。」

そして、結果はもちろん1位だった。テンテンが、班の代表として表彰的な、紙を授与していたが、はつきり言って、テンテンは、何もしていないような気がする。強いて言えば、多由也と口喧嘩をしていたくらいだった。

それから、時は流れ、卒業試験も終えた。合格者が集められてスリーマンセルのチーム編成発表となった。するとそこには仲の良いメンバー達が、集まっているのだった……。

オレが説明会集合時刻ギリギリに教室に來ると、いつも俺が座っている席の隣に、ナルトが座って待っていた。

ナルト「遅いってばよ！リュウ。」

リュウ「分身のテストだったのに、受かったんだ。」

ナルト「当たり前だってばよ！俺みたいな超一流の天才忍者が落ちる訳無いってばよ。」

とか言っただけだ。他にも仲良くしていた奴らは全員合格しているらしい。すると、それ程仲良くしていない、女子達が、回りに集まってきた。すると、遠目から、多由也、いの、ヒナタ、が、オレをにらんでいるのが、分かる。睨むなよ、オレは、無実だ。あ、女子は、サスケの方にも少しは行っている。

そんな、教室の様子を　遠眼鏡の術　で、観察している、火影とこれから班分けされる班の担当上忍達がいた。

上忍「あれですね？今年のナンバーワン・ルーキーのうちのリュウは・・・」

三代目「そうじゃ」

紅「例のうちは一族、双子の生き残り・・・」

その中で一人意味深に心の中で呟いた  
(・・・・・・・・うずまき・・・・・・・・ナルトか・・・・・・・・)

視点は、戻り教室。

色々な説明は、割愛して……。イルカ先生が、班分けを発表した。

イルカ「第7班、うずまきナルト、春野サクラ、うちはサスケ。

第8班、犬塚キバ、日向ヒナタ、油女シノ。

第9班、白、多由也、うちはリュウ。

第10班、奈良シカマル、山中いの、秋道チョウジ。」

あと、6班も名前を呼ばれたが、仲のいい奴は、入ってなかったし、面倒臭いんで、割愛。

そして、その後、それぞれの担当上忍が、クラスに迎えに来て、生徒の数は、どんどん減っていった。残るのは、第7班と第9班となった時、突然教室の窓ガラスが割れた。そして、横断幕が、靡いていた。それには、『みたらしアンコ 只今見参!』と書かれてあった。

その様子に、いつもは煩いナルトも啞然としている。

アンコ「第9班の子達、行くわよ。」

と、言ってツカツカと歩いて行ってしまった。仕方なく、オレ達は、それについていった。

そして、着いたところは、アカデミーの屋上だった。すると、そこには、もう1人の上忍がいた。

シズネ「こんにちは、皆さん。私は、この班の副担当を勤めるシズネです。」

アンコ「何で、アンタまで？」

シズネ「火影様からの命令です。何でもこの班は、即戦力として、行動する班らしいので、

とはいっても、子供は子供。ということで、イレギュラーですが、私も班員です。」

確か、シズネは綱手と一緒にだったから、もしかすると、この世界では、綱手は上忍として木ノ葉にいるのかもしれない。



アンコ「自己紹介、右から順に。はい。」

そして、多由也から順に始めた。

多由也「ウチは、多由也。得意な術は、笛を使った幻術。」

白「ボクの名前は、白です。得意な術は、血継限界の氷遁です。」

リュウ「オレは、うちはリュウ。好きなものは、色々。嫌いなものは、多々ある。あと得意な術は、

ほとんど全部満遍なく使える。強いて言えば、風遁のレパ  
ートリーが少ない。」

そして、自己紹介が終わった。

アンコ「じゃあ、明日は、アンタ達の実力を見るから、演習場に9  
時集合！」

そう言っで、今日のところは、解散になった。

アンコ・シズネ side

シズネ「それにしても、とんでもない生徒を、持たされたものでは  
ね。」

アンコ「全くだよ。」

と、軽く愚痴っていた。

そして、視点は、戻って、その翌日。オレ達は、演習場に来ていた。するとそこには、アンコ先生とシズネ先生が、既に待っていた。

アンコ「揃ったね。じゃあ、説明するわよ。私かシズネのどちらかが、鈴を持っている。それを、

協力して、奪う事。これは、なんでもアリアリだから、気をつけなさい。」

多由也「先生達も、気をつけな。」

アンコ「いい度胸だね。それじゃあ、行くわよ。よいい・・・スタート!」

その合図で、オレ達3人は、一旦離脱した。そして、草陰に隠れて、作戦会議中だ。

リュウ「2人のターゲットは、シズネ先生。多由也は、笛の幻術を使って、白は、その援護

という事で、千殺水翔の準備をよろしく。オレは、アンコ先生を狙う。」

白「分かりました。」

多由也「分かった。」

リュウ「散！」

と、合図を掛けると散って、それぞれの目標に向かっていった。そしてオレは、アンコ先生の目の前に出て行った。

アンコ「舐められてるのかしら？私。」

リュウ「まさか。チャクラ量と幻術に関しては、一目置いてますよ？でも、」

## 月読

万華鏡写輪眼を発動させて、幻術の世界へ引つ張り込んだ。

リュウ『（何かが、おかしい。）』

そう思ったオレは、意識を現実世界へ戻した。

アンコ「甘いよ。」

後ろに、アンコ先生が、立っていた。

リュウ「なるほど、影分身だったわけね。流石、先生。でも、やっぱり・・・、」

すると、先生の後ろにオレ（本体）が立って、鈴を取っていた。

リュウ「甘いよ。」

その事実を知ったアンコは、かなり驚きの表情をしていた。

アンコ「そんな！バカな！」

そして、アンコが空に何か合図を出して、暫くすると、シズネ、白多由也の3人も帰ってきた。そっちの戦いは、大体五分五分だったそうさ。

そして、全員が集まると、アンコ先生が、こう宣言した。

アンコ「アンタらは、明日から、第9班としてBランク以上の任務に就いてもらう！」

ある日突然、第9班は、先生2名に呼び出された。

リュウ「何か急用？」

アンコ「急用って訳じゃないんだけど、まあ、中忍選抜試験に推薦しておいたから、頑張りな。」

あと、私は、試験官に任命されてるから、あまり関わらない事。何か質問があったら、

シズネに聞いて。はい、解散。」

そう言うと、アンコ先生は、消えた。オレ達も特に聞く事は無かったから、その場で解散した。

その5日後。オレ達第9班は、アカデミーの301号室に来ていた。すると、そこには、第3班、第7班、第8班、第10班が既に、到着済みだった。

そして、いのとサクラと多由也が口喧嘩を始めた。「リュウがどうだこうだ」と言っていることからして、話題は、オレである事は、間違いない。ヒナタはそれを、止めようとしているみたいだったが、明らかに力量不足だろう。そして、テンテンは、その様子に、ニヤツとして、思う存分絡んできた。

そんな様子に、大蛇丸の部下である、薬師カブトが近づいてきた。

カブト「おい、君たち。もう少し、静かにした方がいいな。君達が、ルーキー12。アカデミー」

出立てホヤホヤの新人12人だろ？可愛い顔して、キヤツキヤツと騒いで、全く。」

いの「誰よ！アンタ！偉そーに。」

カブト「僕は、薬師カブト。君達の先輩だよ。そこで、プレゼントとして、君達に、ちょっとだけ

情報を別けてあげようかな。」

と、言つて認識札を取り出した。

サクラ「何それ？」

カブト「これは、認識札と言つて、情報をチャクラで図面化して、焼き付けている札だよ。

この試験用に、4年も掛けて、情報収集を行った。札は全部で、200枚程度ある。

見た目は、真つ白だけどね。このカードの情報を開くには、僕のチャクラが必要なんだ。」

そう言つて、チャクラを札に流し始めた。すると、札に図面が描かれていた。それは、今回の総受験者数とその参加国、そして、それぞれの隠れ里から出てきている人の数をまとめたものだつた。そして、何か持論を展開して、話していたが、カット。オレは、聞いていなかった。

すると、サスケが口を開いた。

サスケ「その札に、個人情報詳しく入ってるやつ、あるのか？」

カブト「あるよ。例えば……。」

と、言っで、見せてみたのは、何とオレの物だった。

カブト「うちはリュウ。Dランク0回、Cランク0回、Bランク9回、Aランク1回、Sランク0回だ。

っで、君じゃないか！」

そう言っで、オレを指差した。・・・コイツ狙ったな。他の皆は、驚いてるし、警戒しているし、参ったなこれ。

カブト「君、すごいんだね。Aランクの任務まで、やってるなんて。」

リュウ「それは、班員の白と多由也もだけど。」

と言って、白の方を見たが、

白「いえ、リュウ君の方が、圧倒的に強いですよ。というか、足元にも及びません。」

と言ってしまい、あまり驚きの緩和には、ならなかった。と言うか、逆効果だった。

カブト「まあ、君は、ずば抜けている様だけど、強いのは、別に君だけじゃない。各国の

各隠れ里から、エリートと呼ばれる下忍の集まりだからね。」

そう言うと、ナルトがプルプルし始めた。あ、確かこいつ、挑発するんだったよな。すると、思った通り他の受験者を挑発して、サクラといのに怒られていた。他の皆も溜め息を付く勢いだ。

すると、不穏な動きが、感じ取れた。・・・音隠れの奴等だな。そして、音隠れの3人が、カブトの目の前に現れたとき、オレは、動いた。殺してはいないが、瞬殺だった。皆の視界に音の3人が、映ったときには、泡を吹いて気絶していた。



シカマル」(・・・コイツ、マジで強えーじゃんかよ。)

すると、煙が発生したのと同時に大声が響き渡った。

『静かにしやがれ！！このボンクラ野郎どもが！！』

そして、中忍選抜第一試験の試験官の森野イビキによる、説明と試験を行った。しかし、オレは、前の世界で、この試験の真の目的を知っている為、全て無回答で、その試験を終えた。そして、イビキが、残った者に対して、

イビキ「・・・健闘を祈る。」

という、言葉を言っただけ。そして、ナルトが、

ナルト「よっしゃあ！！祈っててい！！」

と、言った瞬間だった。いきなり、窓ガラスが割れ、黒い物体が飛んできた。

アノコ「私は、第2試験官みたらしアノコ。次行くわよ！次イ！！  
ついてらっしゃい！！」

オレと白、多由也が、「あちゃ」と思っていたら、イビキが一言。

イビキ「空気を、読め。」

ナイスツッコミ！座布団一枚進呈したい位だ。すると、やっとこの場の空気が、読めたのか、頬を赤くして、それを隠すようにして、人数を数え始めた。

アニコ「81人？イビキ、あんた27チームも残したの？今回の第一試験、甘かったのね。」

イビキ「今回は、優秀そうなのが多くてな。」

アニコ「まあ良いわ。次の試験で、半分以下にしてやるわよ。・・・はあ、ゾクゾクするわ。」

詳しい説明は、明日。場所を移してやるから。集合時間、場所は、各々担当上忍から

聞くように。以上！解散！」

そして、集合時間と場所をシズネ先生に聞いて、翌日を迎えた。

そして、翌日。第44演習場、別名・死の森にやって来ていた。

ナルト「何だ？ここ・・・」

アッコ「ここが、第二の試験会場。第44演習場。別名、死の森よ。この森が、死の森と呼ばれる由縁、直ぐに実感することになるわ。

それじゃ、第二の試験を始める前に、あんたらに、同意書を配っておくわね。

試験に参加する者については、まずこれに、サインをしてもらうわ。

こつから先は、死人も出るから、それについて、同意を取っておかないとねえ。

あたしの責任になっちゃうからさ。アッハッハッ・・・」

そう言うと、多くの下忍達は、とても嫌な顔をしていた。まあ、当然だろう。

アッコ「それじゃあ、第二の試験の内容を説明するわ。早い話、ここでは、究極のサバイバルに

挑んでもらうわ。地形は、塔を中心に半径10？。この限られた空間で、

あるサバイバルプログラムをこなしてもらう。その内容は、何でもアリアリの・・・

巻物争奪戦よ。・・・天の書と地の書を巡って、戦ってもらうわ。

一次試験を通過したのは、全部で、26チーム。その半分に天の書を、もう半分に地の書

という風に、各チームに一巻き渡す。簡単に言うと、それを、奪い合うの。

それで、合格条件は、天地両方の巻物を持って、3人で、塔に来る事。しかも時間内に。

期限は、120時間。つまり、5日間。説明は以上。同意書3枚と巻物をそこで、

交換するから。その後、ゲート入り口を決めて、一斉にスタートよ。

最後にアドバイスを一つ。……………絶対に死ぬな！」

そう言うと、オレ達、第9班のメンバーに向かって、小さくウィンクをした。まあ、多分、お前達なら大丈夫。的な感じのメッセージだろう。

それから、同意書3枚と、地の書を交換した後に、ゲート28に移動した。そして、時計の針が2時30分を指した瞬間。

アンコ「これより、中忍選抜試験。第二の試験を開始する！」

その合図で、オレ達は、死の森へと足を踏み入れた。

オレ達は、無駄な殺戮を楽しむような輩ではないので、天の書を1つ奪うと、さっさと塔へ向かった。その結果、1時間を切るタイムで、到着する事が出来た。ついでに、タイムは、52分48秒47だったらしい。そして、天地両方の巻物を開いて、話を聞いた後に、休憩室みたいところで、残りの約119時間を過ごす事となった。はつきり言って、飽きる。と言うか、1時間居ただけで、既に退屈になってしまっていた。もしかしたら、オレにとっては、暇が最大

の天敵なのかもしれない。

その4日後、第2試験の通過者が会場に集められていた。その顔ぶれは、以下の通りだ。

木ノ葉：うずまきナルト、うちはサスケ、春野サクラ、うちはリュウ、白、多由也、

日向ヒナタ、犬塚キバ、油女シノ、山中いの、奈良シカマル、秋道チョウジ、

日向ネジ、ロック・リー、テンテン。

砂：我愛羅、カンクロウ、テマリ。

音：ザク・アブミ、ドス・キヌタ、キン・ツチ。

音（木ノ葉として受験）：薬師カブト、赤胴ヨロイ、剣スミス。

の以上、24名だった。すると、アンコ先生が祝福した。

アンコ：まずは、第2試験通過おめでとう。（第二試験者数81名中、残ったのは24名か。

しかも、ルーキーが半分以上も占めてる。まあ、私の可愛い部下は、

当然の結果なんだけど・・・。）

その後、説明が行われたが、内容を知っているから、割愛。そして、第3試験予選が、始まった。

第一試合の対戦者の名前が、電光掲示板に表示された。

【第一試合：赤胴ヨロイVSうちはサスケ】

ハヤテ「では、掲示板に示された2名、前へ。第一回戦対戦者。赤胴ヨロイ、うちはサスケに

決定。では、これから、第一回戦を開始しますので、対戦者2名を除く、皆さん方は、

上の方に、移動してください。」

そして、皆が、ギャラリーへ移動し終えた頃を見計らって、ハヤテが、

ハヤテ「それでは、始めてください。」

と、試合開始の合図をした。その試合を見てみると、かなりサスケの動きが、悪い。最初は、その原因が、良く分からなかったが、試合の後半にあるものを見つけた。それは、左肩の痣だった。そしてそれは、空中で影舞葉を使っている時に、広がったように思えた。が、『バキ！』『ボコ！』『バシ！』の3テンポで、敵を叩き落した。あ、これ。

獅子連弾

最後は、見事に決まって、サスケの勝利で終わった。

その後、直ぐにサスケは、カカシ先生によって連れて行かれた。と言う事は、やはりあの痣は、呪印の一種だろう。とオレは、判断した。そして、第二回戦の対戦者の名前が、掲示された。

【第二試合：薬師カブトVSうちはリュウ】

とても熱い声援を送られながら、オレは、下のステージに降り立った。

ハヤテ「では、始めてください。」

その合図があつたと共に、オレは、瞳は写輪眼から万華鏡写輪眼になった。

大蛇丸「（あの目は、確か、万華鏡写輪眼。）」

カブト「全力で、行かせてもらつよ。」

そう言つたときに、カブトの足に、黒炎が、着火した。

天照

そして、その黒き炎食い尽くされる痛みと恐怖で、

カブト「ギブ！ギブ！ギブアップ！！うわああ！！！！」

と、なつた。という事なので、もう一度、ピントを合わせて、黒炎を止めた。

大蛇丸「（欲しい。欲しいわあ！リュウ君！！）」

とてもイヤな視線を背中に感じたが、それは、放って置いてギャラリーに戻ってきた。



オレが、ギャラリーに戻つてくると、ナポレオンが凱旋した時のように盛りあがっていた。それを鎮火するのには、【第三回戦：ザク・アブミVS油女シノ】の戦いが、終わるまで時間を要した。三回戦の結果は、シノの勝利だった。これからは、少し結果だけをお送りたいと思う。次の試合【第四回戦：ドス・キヌタVS白】は、敵の奇妙な音波攻撃で、危なかったものの、白の勝利。その次【第五回戦：剣ミスミVSカンクロウ】は、カンクロウの圧勝。【第六回戦：犬塚キバVSうずまきナルト】の試合は、ナルトが、サスケの獅子連弾をパクって辛勝。【第七回戦：春野サクラVS山中いの】は、引き分け。そして、今は、【第八回戦：テンテンVSテマリ】の試合が、テマリの圧倒的勝利で終わった後の事である。

ハヤテ「第五回戦勝者、テマリ。」

そう、コールされると、テマリは、思いつき、テンテンが、双昇龍で、投げたクナイや手裏剣が転がっているところに目掛けて投げ飛ばした。ところが、投げ飛ばした瞬間に、ギャラリーにいるはずの、オレの腕の中に、テンテンはいた。その様子に、投げ飛ばしたテマリだけでなく、息を吞んでいた、周りの人間も驚いていた。ナルト「どうやったんだってばよ・・・。」

カカシ「（今のは、確か、先生の術！）」

皆が、驚いているのは知っているし、テンテンが負けて、こうされる事も知っていた。が、腹が立ったのは、間違いなかった。思いつ

きり、テマリの事を睨むと、笑って、

テマリ「お前、そいつの‘これ’か？」

‘これ’と、言った時に、小指を立てた。こうされる事も分かつてはいたが……。堪忍袋の緒が切れる。というのは、こういうことを言うのだろう。月読で、1時間刺し続けて、ようやく収まった。現実世界では、一瞬なので、テマリが突然倒れたのにも、驚いていた。

オレは、カカシ先生やガイ先生に止められたが、テンテンをお姫様抱つこの状態で、医療班のところまで、運んでいった。

それから、帰ってきた時に、当然の事ながら、カカシ先生に問い詰められた。

カカシ「リュウ君。さっきのは、どういう事なんだい？」

リュウ「先生は、分かっているでしょうけど、飛雷神の術ですよ。」

ガイ「何!？」

カカシ「（やはりか……。）」

ついだから、この術を知っている人が、もう1つ疑問に思っているだろう事を、先回りして、説明した。

リュウ「実は、テンテンには、アカデミーの野外演習の時に飛雷神の術式を渡しておいたんだ。

それを、今も尚、お守り代わりにして、肌身離さず持っていたから、今回、とつさに

飛雷神の術で、助けに行けた訳。」



そう説明をし終わると、ある程度納得はしてもらえたが、オレが何故、四代目火影の術を使えるのか、という疑問は、解決しなかった。まさか、前の世界で、大きくなって六代目火影になったナルトが、使って、それをコピーした。なんて、言える筈も無く、納得はしてもらえなかっただろうが、誤魔化した。

その後も、当然の事ながら、予選は進んでいった。そして、【第九回戦：日向ヒナタVS日向ネジ】は、前の世界では、仲のとても悪かった従兄妹関係も、この世界では、普通に良かったからか、圧勝楽勝ではあったが、普通にネジが、勝利した。【第十回戦：キン・ツチVS奈良シカマル】では、シカマルの頭脳プレーで、シカマルの勝利。【第十一回戦：ロック・リーVS我愛羅】は、リーが、八門遁甲の第五・杜門までを開放し、禁術である、究極体術奥義裏蓮華　までを発動させるという、無茶を成し遂げたが、最後、その反動で、ボロボロになったところを、我愛羅の　砂縛柩　を食らい破れた。そして、予選最終戦の【第十二回戦：秋道チョウジVS多由也】は、多由也の幻術で、周りの人々にも迷惑を掛けながらも、多由也が、勝った。これで、全予選が終了した。

ハヤテ「これで、第三の試験、予選を全て終わります。中忍試験第三の試験、本戦進出を

決めた皆さん。おめでとうございます。」

三代目「（木ノ葉8名に、砂3名か・・・。）うむ。では、これより、本戦の説明を始める。

本戦は、諸君の戦いを、皆の前で晒す事になる。各々は、

各国の代表戦力として力を

遺憾なく発揮し、見せ付けて欲しい。よって、本戦は、一ヵ月後に開始される。

これは、相応の準備期間ということじゃ。それと、各国の代表や忍頭に予選の終了を

告げると共に、本戦への召集を掛ける為の準備期間。そして、これは、受験生の為の

準備期間でもある。この時間を無駄にすることなく、各々精進するように。

という訳でじゃ、そろそろ解散させてやりたいのじゃが、その前に1つ、本選の為に、

やってもらう大切な事がある。アンコが持っている箱の中から紙を一枚とるのじゃ。」

そういうと、話は、アンコ先生にバトンタッチされた。

アンコ「私がまわるから、順番にね。一枚だけよ。」

そして、皆が、一枚ずつ取った。そして、最後に余ったのが、今の場に居ない、サスケのものとなった。これにより、本選のトーナメントが、決定された。

#### 【本選トーナメント】

? ・うちはリユウ VS 多由也

? ・うずまきナルト VS 日向ネジ

? ・我愛羅 VS うちはサスケ

? ・カンクロウ VS 油女シノ

? ・テマリ VS 奈良シカマル

? ・?の勝者 VS 白

? ・?の勝者 VS ?の勝者

|   |   |   |
|---|---|---|
| ? | ? | ? |
| ? | ? | ? |
| の | の | の |
| 勝 | 勝 | 勝 |
| 者 | 者 | 者 |
| V | V | V |
| S | S | S |
| ? | ? | ? |
| の | の | の |
| 勝 | 勝 | 勝 |
| 者 | 者 | 者 |

【DATE】No. 5

【うちはリユウ】

忍：5 体：4 幻：5 賢：5  
力：3 速：5 精：5 印：5

総合能力：

潜在能力：

運：

特筆事項：万華鏡写輪眼

【多由也】

忍：2 3 体：3 1 幻：5 賢：3 3  
力：3 速：2 精：2 5 印：2

総合能力：

潜在能力：

運：

特筆事項：魔笛使い

【白】

忍：4 体：1 2 幻：1 1 賢：4 5  
力：1 5 速：4 2 精：2 5 印：4 3

総合能力：  
潜在能力：  
運：  
特筆事項：氷遁使い

【うずまきナルト】

忍：2・8 体：2 幻：1 賢：1・2  
力：2・5 速：2・5 精：5 印：1

総合能力：  
潜在能力：  
運：

特筆事項：九尾の人柱力

【日向ネジ】

忍：2・5 体：3・5 幻：2 賢：2・5  
力：2・5 速：3 精：2 印：3

総合能力：  
潜在能力：  
運：

特筆事項：白眼

【我愛羅】



忍：3・5 体：1 幻：2・5 賢：2・5  
力：1 速：2 精：4 印：3・5

総合能力：？

潜在能力：？

運：？

特筆事項：一尾の人柱力

### 【うちはサスケ】

忍：2・5 体：2・5 幻：1・5 賢：2  
力：2 速：3 精：2・5 印：3

総合能力：

潜在能力：

運：

特筆事項：写輪眼

### 【カンクロウ】

忍：3・5 体：1・5 幻：1・5 賢：2  
力：2・5 速：2 精：2・5 印：3・5

総合能力：？

潜在能力：？

運：？

特筆事項：傀儡使い

【油女シノ】

忍：3 . 5 体：1 . 5 幻：2 賢：3  
力：1 . 5 速：1 . 5 精：2 印：2

総合能力：

潜在能力：

運：

特筆事項：寄壊蟲使い

【テマリ】

忍：3 体：2 . 5 幻：1 . 5 賢：2 . 5  
力：3 速：2 . 5 精：2 印：2

総合能力：？

潜在能力：？

運：？

特筆事項：巨大扇子使い

【奈良シカマル】

忍：2 . 5 体：1 . 5 幻：2 . 5 賢：5  
力：1 . 5 速：2 精：1 . 5 印：2 . 5

総合能力：

潜在能力：

運：

特筆事項：影使い

オレは、中忍選抜試験本選までの1ヶ月間を、どう過ごそうか考えていた。そのまず前提に、中忍試験は、合格として考えて、途中で前みたいに大蛇丸が、砂を丸め込んで一緒に攻めてくる。となると、我愛羅の暴走もあるだろう。そう考えると、木ノ葉の忍に、多くの死傷者が出るはずだ。でも、今のオレに、その人達を救える術は持っていない。・・・よし！シズネ先生に教えてもらおう。

という事で、オレは、早速シズネ先生の所へやって来た。

リュウ「先生。中忍試験本選までの1ヶ月間に、医療忍術教えてくれない？」

シズネ「えっ？まあ、良いけど、医療忍術は、個人の素質に大きく関わる忍術だから、

いくらリュウ君でも、1ヶ月じゃ厳しいと思うよ？」

リュウ「・・・まあ大丈夫、何とかなるから。」

そして、半ば強引に、1ヶ月間の修行に密着してもらう事に成功した。

後々聞いた話だが、シズネ先生曰く、オレは、医療忍術の才能は、あまり無かったらしい。そんなオレだったが、シズネ先生の教え方が良かったのと、影分身を利用した、経験値増効果のお陰もあって、たった1ヶ月の間で、掌仙術を完璧にマスターする事が出来た。

オレが、そんな1ヶ月を過ごしている間に、ナルトは、自来也に口寄せの術と螺旋丸を、サスケは、カカシ先生に千鳥をそれぞれ伝授してもらうなどして、他の者達も、短期間で大幅にレベルアップを成し遂げていた。

そんなこんなで、今日は、中忍選抜試験本選の当日。本選会場内には、勝ち残った10人が揃っていた。そして、何故か、サスケはまだ到着していない。

ゲンマ「お前ら、シャンと胸を張って、客に顔見せしとけ。今日の主役は、お前らだ。」

すると、三代目の声が会場内に響き渡った。

三代目「えゝ皆様、この度は、木ノ葉隠れ中忍選抜試験にお集まりいただき、

誠にありがとうございます。これより、予選を通過した、8名により、本選試合を

始めたいと思います。どうぞ、最後まで、ご覧ください。」

そう言って、話し終えると、試験官のゲンマが口を開いた。

ゲンマ「試合前に、ちょっとした確認だ。地形は違うが、予選と同じで、

ルールは一切無しつてのが、ルールだ。勝負は、どちらか一方が、死ぬか、

負けと認めるまでだ。ただし、俺が、決着がついたと判断したら、そこで、

試合は止める。反論は、許さない。わかったな。

それじゃあ、一回戦は、うちはリュウ。多由也。その2人だけを残して、

他は、控え室まで下がれ。」

そして、会場に残ったのは、オレと多由也、ゲンマの3人となった。

ゲンマ「では、始める。」

ゲンマ「では、始める。」

その言葉と同時に、多由也は、会場内のどこかに身を潜めた。きつと、幻術に陥れる機会を狙っているのだろう。オレは、探し出すのも面倒だ。という事で、洗い出す事にした。

水遁口寄せ・大海原

すると、会場の地面が割れて、まるで間歇泉の様に水が飛び出していった。そして、1分もしない内に、会場内は、術名の通り大海原と化していた。それには、多由也も試験官のゲンマも水面に立たざるを得なくなっていた。

ゲンマ「(つたく、何て量の水を出しやがったんだコイツ。)」

リュウ「これで、逃げも隠れも出来なくなったわけだ。」

多由也「チツ・・・そうみたいだな。」

リュウ「じゃ、覚悟を決めて。」

そう言った瞬間には、水遁・水牙弾が、多由也の背後を狙っていた。しかし、それは、避けられてしまった。が、

リュウ「終わりだ。」

## 水遁・龍巻地獄

すると多由也の足元から龍を象った間歇泉が、勢い良く天に向かって昇っていった。それをモロに受けた多由也は、水面下に沈んでいた。

リュウ「ゲンマさん？」

と、催促をした。

ゲンマ「あ？あ、ああ。勝者、うちはリュウ。」

オレは、そうコールされたと同時に、水を一気に引かせた。そして多由也は、ぬかるんだ地面の上で、気を失っていた。医療班が動いていたから、そのままにして、控え室に向かった。

その後の試合は、ナルト対ネジの試合は、ナルトが九尾のチャクラを開放させて、ナルトの勝利。サスケと我愛羅の試合は、サスケがまだ来ていないが為に延期。カンクロウ対シノは、この後起こる『木ノ葉崩し』の為にチャクラ温存の為に、カンクロウが棄権して、シノの不戦勝。シカマル対テマリは、頭脳戦となり、シカマルがテマリを追い詰めるも、チャクラ切れでギブアップそれにより、テマリの勝利。と、大分時間は、経った筈なのだが、サスケの姿は、まだ見えない。そして、次は、オレと白の出番となった。

白「本気で、行きますよ。」

リュウ「でも、負けないし。」

ゲンマ「始めるぞ？・・・じゃ、始める。」



それと同時に、白は印を結んでいる。そのスピードはかなり速い。

水遁秘術・千殺水翔

千本が、追尾するように飛んできた。流石に避けきれないと判断したオレは、

水遁・大瀑布の術

で、弾きながらそのまま白を攻撃した。

白「危ないですね。」

そう言っで、風遁・大突破で、相殺させられた。

リュウ「まだまだ!」

そして、オレは、水遁・水衝波と水遁・水龍弾の術を連続で、発動させた。

その様子に、三代目は、

三代目「（なんて水量じゃ。この量じゃと、既に二代目様を超えておるぞ!?!）」

と、かなり驚いているようだった。しかし、驚くのはまだ早かった。

リュウ「ラスト!」

### 水遁・水鯨弾の術

既に、白の視界は、『水衝波』と『水龍弾』により、前が見えなくなっているのにも関わらず、更には、後方にも『水鯨弾』が現れ、挟み撃ちにしたのだ。その3つの水遁忍術にサンドウィッチにされた、白は、その水圧によりノックダウンした。

その圧力は、半端なかったらしくご自慢の白い肌は、赤くなってしまっていた。それをやった、張本人は、オレなのだが、余りにも痛々しかったので、掌仙術で、元通りの肌に戻した。

ちょうどその時だった。会場内にサスケとカカシ先生の姿が出てきたのは。それから、遅刻の説教は後に回され、我愛羅対サスケの試合を即刻始めた。

その試合は、サスケの千鳥で、我愛羅の肺を貫通させて試合はサスケの勝利に終わった。普通だったら、死んでいただろうが、一尾のチャクラのお陰もあってか、何とか一命は取り留めたようだった。そろそろ、大蛇丸による『木ノ葉崩し』が、始まってもおかしくは、無いのだが、今のところその気配は、全くと言って良いほど、

感じられない。

話は戻して本選。サスケは、続けての試合だったが、今度は、ナルトが九尾のチャクラを引き出す前に、螺旋丸と千鳥の激しいぶつかり合いを制して、サスケが、勝った。次は、シノ対テマリだったが、残っているチャクラの量の問題で、終始シノのペースで、事が運び、シノの勝利で終わった。

そして、準決勝。オレ対サスケの、うちは双子兄弟対決となった。

ゲンマ「両者、前へ。うちはリュウ対うちはサスケ。・・・試合開始。」

それと共に、うちはの代名詞とも言える、火遁合戦が始まった。

### 火遁・豪火球の術

その術の規模は、大体五分と五分。全力を出せば、問題無く勝てるだろう規模だ。その間に、影分身を1体出して、地中に待機させた。すると、急に向こう側の豪火球に勢いが無くなったと思うと、サスケは、オレの上空で、千鳥を発動させていた。その様子だと、間違いなく、手加減無しで突っ込んでくる事は、間違いなかった。

サスケ「食らえ!!」

オレも負けてはいない。そっくりそのまま返してやる。・・・いや倍にして返そう。

### 双牙千鳥

両手に千鳥を発動させると、ジャンプして、迎え撃った。そして、サスケの千鳥を両手の千鳥で、無効化させてから、地面に投げ飛ば

した。しかし、相手はサスケだ。何とか着地された。だが、

#### 土遁・心中斬首の術

と、地中に 土遁・土中映魚の術 で、潜らせておいた、影分身が発動させた。そして、サスケを生首みたくして、本体のオレが、幻術を掛ける。

#### 涅槃精舎の術

これにより、戦闘不能とゲンマに確認され、勝負ありだった。

ゲンマ「勝者、うちはリュウ。」

そうコールされて、歓声が上がったときだった。爆発が起こったのは。そして、煙が、モクモクと上がり始めた。遂に始まったか、『木ノ葉崩し』が・・・。

そして、オレは、三代目に、こっそり付けておいた飛雷神の術式を使って、天井で大蛇丸と対峙しているであろう、三代目の援護に向かった。ホンのタッチの差で、四紫炎陣を発動される前に着いた。そして、着いた瞬間に 四紫炎陣 が、発動された。

大蛇丸「あらあら、態々出向いてくれるとはね。好都合だね。うちはリュウ君。」

リュウ「別に、三代目を援護しに來ただけだ。誰が、お前なんかの口からゲロゲロ気持ち

悪い奴の為に、来るかよ。（出来れば、会いたくもねえよ。）」

大蛇丸「随分な良い様ね、リュウ君。でも、まあ良いわ。サスケ君の体より、貴方の体の方が、

欲しかったのよね。」

そう言くと、長い舌で、舌なめずりをした。うう・・・キモイ。そして、大蛇丸が印を結んだ。それを、阻止しようと、三代目が、手裏剣影分身をやったが、突如出てきた棺によって、阻まれた。

三代目「その術は!!」

すると、棺からそれぞれ人が出てきた。

初代「久しぶりよのお・・・サル。」

二代目「ほお、お前か、年を取ったな猿飛・・・。」

四代目「お久しぶりです。三代目様。」

三代目「まさか、このような事で、貴方と再びお会いしようとは、残念です。」

・・・覚悟してください。初代様、二代目様、ミナト殿。」

この術は、確か禁術にも指定されているとても危険な術。だとしても、相手は、死人。何か、弱点があるはずだ。何か、弱点が・・・。

二代目「穢土転生か・・・。禁術でわし等を、呼び出した若造は、お前か。」

初代「大した奴よのう。」

そう、大蛇丸を見ながら言った。

リュウ「波風ミナト。あなたの息子、うずまきナルトは、元気にやっていますよ。」

四代目「そうかい。それは・・・よかった。」

そう嬉しそうに言うと、大蛇丸が、攻略の鍵となりえる札を、先代

の火影達に埋め込むと、今まで保っていた自我を失い、ただの殺戮兵器となった。

リュウ「ナルトの父さんを殺すのには、多少戸惑うけど、死んでもらうしかない。」

そして、写輪眼から万華鏡写輪眼に変えた。

リュウ「三代目は、大蛇丸をお願いします。」

そう言った瞬間に、初代と二代目の体が、黒炎により燃え始めていた。

大蛇丸「欲しい！欲しいわ！！リュウ君！貴方の体がああ！！！！！」

リュウ「お前は、後回しだ。四代目、覚悟！」

火遁・獄龍炎の術

火遁・獄龍炎の術

その術は、『ゴオオオオ』と蒼白い炎龍を象り、四代目に突進していった。しかし、相手は四代目。ギリギリのところで、避けられる。そこに、時間を置くことなく、千鳥鋭槍。しかしやはり、避けられてしまった。

口寄せ・雷光剣化

右手には、草薙の剣を。左手には、妖刀・村正を、手に召喚した。それを、横目で見ていた、大蛇丸が、驚いた。まあ、当然だけど。

大蛇丸「（あれは、私の草薙の剣！）」

オレは、それに構うことなく、千鳥刀・双剣を発動させて、四代目に斬りかかった。流石は、木ノ葉の黄色い閃光。速い、速すぎる。その頃には、初代と二代目は、天照により完全に消滅していた。四代目が、急に目の前に現れたと思うと、その手には、螺旋丸が、握られていた。マズイ！と、思ったときには、左腕が、挟まれていて全く動かなくなっていた。

大蛇丸「（これで、君は、私のものよ！！）」

三代目と戦いながら、横目で、オレと四代目の戦闘を見ていた。大蛇丸が、これで、動けないと思ったらしく、そう判断した。……  
・・負けてたまるか！！



八門遁甲・開門・休門・生門・傷門・杜門・景門・驚門・開

八門遁甲の第七門の驚門までを、一瞬だけ開放したオレは、一撃で四代目を撃破した。

リュウ「はあああああ………。」

その後に、来る疲労感、半端無い。関節とかが、ミシミシ言っている感じがする。

リュウ「後は、お前だけだな。大蛇丸。」

大蛇丸「アハハハ……。……あのイタチ以上の化け物じゃない。」

顔が引き攣っている。何だ、もう怖気づいたのか？

三代目「うむ。行くぞい、リュウ！」

リュウ「はい。」

とは、言ったものの印が結べない。

火遁・火龍炎弾      神炎

大蛇丸「うわあああああ………！！！！！！」

と、三代目の『火龍炎弾』とオレの『神炎』が、クリーンに当たり倒した。

三代目「やったか！」

しかし、大蛇丸特有の変わり身の術で避けられていた。

大蛇丸「はあはあはあ・・・やるわねえ。これじゃあ、分が悪いわ・・・帰るわよ。」

そう部下に告げると、内側に張っていた結界を解いて、大蛇丸を支えた後に、外側の大きな結界も解いて、退散して行った。暗部はそれを追いかけようとするが、敵のうちの1人の『蜘蛛の巣』によって、追跡は、出来なかった。

リュウ「三代目。」

三代目「何じゃ？」

リュウ「左手を貸してください。」

そして、オレの右手と三代目の左手で、印を結んだ。

口寄せの術

神龍「・・・何だ？」

リュウ「悪いけど、ナルトが一尾と戦ってるはずなんだ。」

そういうと、理解したらしく、

神龍「了解した。」

と行って行ってしまった。

その後、神龍が、向かった場所は、既に一尾VSガマブン太の壮絶な戦いを繰り広げられていた。途中、コンビ変化によって、一尾VS九尾&神龍となったりもしていたが、最後は、ナルトの頭突きによって、我愛羅を撃破し、ほんの少し心を開く事が、出来たらしい。

街に出てきた、大蛇共は、自来也と呼び出した蝦蟇達が、倒し、『木ノ葉崩し』の最中に、長期任務から帰ってきた、綱手は、カツユを分裂させて、木ノ葉の負傷者の治療に全力を尽くしていた。

そして、全ての黒幕である大蛇丸が、退散した知らせを聞いた、木ノ葉の忍達は、勢いを増して追い返し、逆に、大将が敗走した、砂と音の忍達は、各部隊が、次々と逃げ帰っていった。そして、オレは、シズネ先生にお世話になっていた。

シズネ「リュウ君ねえ、無理し過ぎですよ。とりあえず、私の医療忍術で、応急処置は施して

おくので、暫くは絶対安静。分かりましたね？」

と、念を押された。左腕を動かせないのも忍にとって痛いし、それ以上に今現在、とても左腕が痛い。とりあえずは、その忠告を飲み込む事にした。そして、超簡単に、治活再生の術 をしてもらって、ある程度の痛みと見るも無残だった左腕の外観は、何とか普通の生活を送れるくらいまでには、回復させてもらった。

リュウ「さんきゅ！先生。じゃ、オレは、他の負傷者を診て来るから。」

そう言つて、その場を後にした。その場に残された、シズネ先生は、かなり大声で、叫んでいたみたいだったが、その時には既に、距離が開いていた為、内容までは、聞こえなかった。でも、これだけは分かる。後で、こつ酷く叱られる事は・・・。

ま、そんな面倒事は、後回しにして、オレは、まず砂の下忍追跡班の治療をして、ある程度自分で、動けるくらいまでに、回復させた。その後は、街中で治療を頑張っている綱手を、少しでも手助けすべく奮闘した。

そして、今回の世界では、大蛇丸は、倒せなかったが、三代目は、死なずに済み、木ノ葉側にもあまり大きな損害も無く、無事では決していないが、『木ノ葉崩し』は、未遂つてトコで、終える事が出来たと思う。しかし、これを期に、三代目は、火影の座を引退し、隠居生活に入る事にしたそうだ。そして、五代目火影は、自来也が、推薦されたが、自来也は、綱手に半分押し付けるような形で、譲り、最初は、渋っていた綱手も、最終的には、納得して、五代目火影に就任した。

それから、1週間も経たない内に、オレは、火影の執務室に呼ばれたのだった・・・。

オレは、執務室のドアをノックした。すると、中から、「入れ。」という催促の声が、返ってきた。それに対して、「失礼します。」と、答えながらドアを開けて入っていった。そして、室内には、五代目火影である綱手と、その秘書をしているシズネ先生、三忍の一人である自来也、ご意見番となっている猿飛ヒルゼンと水戸門ホムラ、うたたねコハル、最後に志村ダンゾウという、層々たるメンバーが、揃っていた。

リュウ「何か、場違いじゃないですか？かなり。」

一応、その場にいるメンツがメンツだから、敬語で感想を述べてみた。

五代目「まあな。」

と、その感想を認めた上で、五代目火影から直々に命令が下された。五代目「おっほん！・・・お前には、明日から、上忍の任務と平行して、暗部の任務にも

参加してもらうつもりだ。よって、明日からの暗部としての活動は、『蒼龍』を名乗れ。」

オレは、その命令に、度肝を抜かれた。

リュウ「えっ！？ちょっと、待ってくださいよ。オレは、まだ下忍だし、しかも中忍を抜かして

いきなり上忍ですか？しかも、暗部って、色々おかしいでしょ。」

まあ、上忍レベル・暗部レベルの実力がある事は、認めるけど、それにしても、物事には、段階って物があるでしょ。段階って物が。

自来也「まあのお。お前が、普通だったらのう。でも、お前は、あの大蛇丸のみならず、先代の

火影殿達をも、蹴散らしたような奴だからのう。」

ヒルゼン「うむ。わしも異例の事だというのは、十分承知じゃ。しかしな、お主の実力では、

中忍というのは、あまりにも釣り合わんのじゃ。」

それは、本人が一番知っております。はい。

五代目「という事でだ。里から正式に、上忍及び暗部の位を進呈する。」

リュウ「ありがとうございます。」

と言って、軽く頭を下げた。そして、頭を上げて、息苦しいこの空間から出ようとしたときに、五代目に呼び止められた。

五代目「ところで、リュウ。お前の同期や一期上の中で、既に中忍としてやっていけるの実力が

あると思う奴はいるか？」

その問いに、少し、考えてから答えた。

リュウ「ネジと白、シカマルにシノ。まあ、その中にサスケを入れても良いんじゃないかな？」

その、5人ですかね。」

五代目「・・・そうか、分かった。もう良いぞ。」

と、言われたからそのまま、一礼して、その部屋から離脱した。

それから、1週間後だった。暗部の『蒼龍』としての初任務が、言い渡されたのは。そして、それは、あの事件に関するものだった。



オレが、『蒼龍』として、初めて、言い渡された任務は、黒地に赤雲の模様が描かれた外套を纏った敵2名の排除であった。それは、ほぼ間違いないく、ナルトを探しに来た、兄貴と鬼鮫だ。

（以後、暗部の仮面を装着している時は、『蒼龍』と表記します。）

五代目「では蒼龍、頼んだぞ。」

蒼龍「ハッ！」

そう返事をする、瞬身の術で、現場に向かった。

アスマ・紅side

そして、時間は少し遡る。

アスマ「お前ら、里の者じゃないな。一体何しに来た？」

すると・・・

???「お久しぶりです。アスマさん、紅さん。」

そう言って、その瞳を見せた。すると、アスマと紅の表情が驚きに変わる。そして、笠をとった。

アスマ「お前は・・・うちはイタチ。」

??「イタチさんのお知り合いですか？なら、私も自己紹介をさせていただきますましう。」

干柿鬼鮫・・・以後、お見知りを。」

アスマが、切り返した。

アスマ「以後なんてもんはねえよ。お前らは、今から俺が取っちめる！」

すると、今まで黙っていた、紅も話し始める。

紅「あなたも知っているわ。干柿鬼鮫。元霧隠れの忍で、大名殺し、国家破壊工作等の容疑で

水の国より各国へ指名手配中の抜け忍。」

イタチ「アスマさん、紅さん。オレに関わらないでください。あなた達を殺すつもりは無い。」

アスマ「同胞殺しのお前が言うセリフじゃないな。目的は何だ？」

イライラの積もっていた、鬼鮫が、大剣を地面に叩き付けた。

鬼鮫「結構、五月蠅いですねえ、この方。殺しますか？」

イタチ「素直に里から出られそうにも無いな。だが、やりすぎるな。お前の技は目立ちすぎる。」

その言葉を聞いた、鬼鮫が不気味に笑ってこう呟いた。

鬼鮫「決まりですねえ。」

その瞬間に、大剣を片手で軽々と振り回した。その大剣をアスマが止めた。その隙に、紅が幻術を掛ける。

### 魔幻・樹縛殺

イタチ「これは・・・幻術。」

写輪眼で、見切られた後、その術をそっくりそのまま返された。

イタチ「オレに、その程度の幻術は効かない。」

紅「（そんな・・・幻術返し?!）」

何とか、幻術を見切った後、蹴っ飛ばされて、川へ飛んで行ってしまった。

その様子をアスマが、横目で見て

アスマ「紅!!」

と叫ぶが、

鬼鮫「よそ見している暇は、無いですよ。」

凶星にされた。

イタチ「流石、紅さん。でも、」

すると、今まで居なかった、人物の声がいタチの後ろで、聞こえた。

カカシ「でも、ま、ここまでだよ。・・・お前がな。」

そして、川の外、つまり川沿いの道では、アスマと鬼鮫が戦闘をしていた。そして、アスマのチャクラ刀が、鬼鮫の顔を掠め、切り傷ができた。

アスマのチャクラ刀が、鬼鮫の顔を掠め、切り傷ができた。そして、それにより少し本気を出そうとした鬼鮫が、印を結び、術を発動させた。

水遁・水鮫弾の術

が、全く同じ術により、それがアスマに当たる事は無かった。

鬼鮫「（何？！私と同じ術！）」

アスマ「何で、お前まで出て来るんだよ？カカシ。」

と、呆れた口調で聞くとアスマに近い方のカカシが、

カカシ「ま、さっきは、お2人をお願いしちゃったけど。」

そして、イタチの後ろを取っているカカシが、

カカシ「ま、気になるじゃない？」

と、答えた。

紅「（影分身！）」

この戦闘は、カカシが来たことによって、少しの間は戦況が良くなった様にも、思えたが、それも、イタチが、『万華鏡写輪眼』を発

動させたことによって、逆に追い込まれる事になってしまった。なぜなら、カカシが、イタチの 月読 を食らってしまったて、ほぼ動けなくなっているし、イタチの万華鏡写輪眼を見てはいけない。ということ、アスマと紅は、目を開いている事も出来ない状況だからだ。そして、『バシヤアン』と水の音を立てて、カカシが、体制を崩した。

カカシ「はあはあはあ・・・。まだ、目を開くな。」

アスマ「奴が、喋り終わった途端、お前は、倒れるし、一体どうなっただ？」

カカシ「（あの世界の3日間は、現実世界での、ほんの一瞬にも満たないと言っ訳か。

なら、何故殺さない？その気になれば、簡単に・・・。）

」

すると、高速で、鬼鮫がイタチの隣に移動して来た。

鬼鮫「ほお・・・あの術を食らって、精神崩壊を起こさないとは。流石は、コピー忍者のカカシ

とでも、言っておきましょうか。でも、イタチさん。その目を使い過ぎるのは、

貴方にとっても危険。あまり、酷使しない方が・・・。」

すると、「はあはあ」息を乱した。カカシが、口を開いた。

カカシ「狙いは、ナルトの中の九尾か。お前らの所属している、組織名は、曉だったか？」

その言葉に、敏感に反応し、顔色を変えた。

イタチ「鬼鮫。カカシさんを連れて行く。その他の方には、消えてもらおう。」

その言葉で、鬼鮫が動いたときだった。あの男が、飛んできたのは。

木ノ葉剛力旋風

完璧に油断をしていた、鬼鮫の顔面にクリーンヒットした。

鬼鮫「何者です？」

ガイ「木ノ葉の気高き蒼い猛獣。マイト・ガイ。」

『キラーン』という効果音を、付けたいくらいに輝く歯を、見せながらそう言った。

それに対して、冷静に突っ込む鬼鮫。

鬼鮫「なんて格好だ。珍獣の間違いでは？」

しかし、イタチに念を押されて、気を引き締めなおした。

ガイ「（やはり・・・イタチ!）」

すると、ガイの登場に気が緩んだのか、カカシも気を失った。そのカカシを、しっかりと沈み切る前にガイが、受け止めた。

ガイ「カカシをよくもここまで・・・。」

アスマ「イタチと目を合わせるな。ガイ!」

ガイ「大丈夫だ。目と目を合わせなければ、問題は無い。さあ、お前らも、目を開け。」

その言葉に、従い2人とも目を開いた。

紅「確かに、言われて見ればそうかもしれないけど。」

アスマ「そんな芸当をやって退けれるのは、ガイ。お前くらいのもんだぞ。」

ガイ「ハハ。そうかもしれないな。でも、今は緊急時だ。それで、諦めてはいられない。

コツとしては、足だけをよく見て行動するんだ。難しい話だが、今は、やるしかない。

紅は、カカシを医療班のところへ連れて行ってくれ。アスマは、俺の援護だ。」



アスマ「よし。」

と、2人とも頷いた。

ガイ「後は、俺が手配した、暗部の増援部隊が来るまで、少し間、相手をしてやる。」

鬼鮫「面白い。良い度胸ですね。」

と、言った時にちょうどオレが、到着した。

蒼龍「ガイさん、遅れました。」

仮面を被っている時は、極力敬語にするようにと、言われていたの  
で、敬語で話している。

ガイ「おお、速かったな。だが、お前1人か？」

蒼龍「はい、問題ありません。」

ガイ「それは頼もしい限るだが、イタチの目は見るなよ。幻術に掛  
かるぞ。」

蒼龍「それも、問題ありません。」

すると、鬼鮫が、

鬼鮫「早速、増援が着ましたか。」

その時だった。兄貴の万華鏡写輪眼と目が合ったのは。オレの万華

鏡写輪眼で対抗することも、可能だったが、それは、あえてせずに、月読の世界へ引きずり込まれていった。

イタチ『久しぶりだな、リュウ。随分と大きくなったものだ。』

その言葉に、オレは仮面を外した。

リュウ『兄貴は、相変わらず。瞳の奥は、綺麗なままだな。』

その返しに、フツと笑った。そして、真面目な顔に直ぐ戻した。

イタチ『ところで、お前は、暁についてどれだけの情報を知っている？』

リュウ『そうだなあ……。構成員全員の名前と尾獣を狙っている事、位か？』

イタチ『なるほどな。自来也様からの情報か？』

リュウ『まあ、そんなところだ。』

すると、「そうか……。」と返した後に、話題を変えてきた。

イタチ『リュウは、無事に暗部まで、上り詰めたらしいな。』

リュウ『うん。まあまあかな。』

イタチ『サスケは、どうしている？』

リュウ『ああ、大蛇丸の呪印に侵されてるよ。』



リュウ『大蛇丸の呪印に犯されているよ。』

と、言うときちよつと表情を濁した。

イタチ『アイツは、お前と違って純粹過ぎるところがあるからな。気をつけて見てやつてくれ。』

リュウ『分かった。』

そう言つて、頷いた。

イタチ『じゃあ、オレと鬼鮫は、ここら辺で退散するでしょう。』

リュウ『分かった。』

すると、オレの意識は、現実世界に戻ってきた。

鬼鮫「では、行きますよ！」

と、やる気になっていた鬼鮫にストップを掛けたのは、イタチだった。

イタチ「鬼鮫、止めだ。オレ達は、戦争をしに来たのではない。残念だが、これ以上の戦いは

ナンセンスだ。帰るぞ。」

鬼鮫「折角、疼いてきたところなのに・・・、仕方ありませんね。」

そう言うと、一瞬の内に消えていった。

ガイ「逃がしたか。まあいい。俺達も帰るぞ。あ、暗部の者よ。ご苦労だった。」

蒼龍「はい、では。」

そして、オレは、一足速くその場から立ち去った。そして、今回の任務の報告をしに、火影の執務室に飛んでいった。

五代目「で、どうだった？」

蒼龍「敵は、暁と呼ばれる組織の一員で、今回里に足を踏み入れた者は、その構成員の中の1人

である、うちはイタチと干柿鬼鮫の2名でした。今は、その両名とも退散しています。」

その名前を出した時に、ピクツと顔の筋肉が動いたのは見えた。が、何も言わずに、

五代目「ご苦労だった。もう仮面を外して良し。下がれ。」

と、言われたのでその言葉通りに従って、執務室を後にした。

その後、家に帰ると、何故か、第3班と第7班、第8班に第9班そして第10班の計15人が、集まっていた。

テンテン「お帰りなさい！リュウ君。もう、晩御飯の準備は、出

来てるわよ?」

他に数名からも、同じような内容の事を言われ、半宴会場と化した大きな和室に通された。(とは言っても、ここは、オレン家なのだが、)

そして、疑問に思っていた事を尋ねた。

リュウ「で、一体全体これは、どういう状況なんだ?」

テンテン「あゝこれ?これは、リュウ君の上忍昇進記念とネジ、シノ、サスケ、白、シカマルの

中忍昇進記念を合わせてのお祝いをしようと思って。」

半分は、そうだろうが、半分は間違っているはずだ。こいつ等は、皆で騒ぎたかっただけなのだ。多分・・・、いや絶対に。でもまあ、祝ってくれる気持ちも本当なのだろうし、その気持ちは、ありがたいから、良しとしよう。

そして、オレも混ざって晩御飯を皆で食べながら楽しんでいると、時間はあっという間に過ぎて、解散の時間帯となった。そして、それぞれ帰って言った後に、既に片付いているテーブルの上を見ると、紙切れが、置いてあった。何だろう?と、見てみると、それは請求書だった。その金額のケタを数えると・・・。

リュウ「・・・嵌めやがったな。」

と、ピクピク米神を動かす事となった。

ある日、オレは1週間くらい里を離れる暗部の活動としてのSランク任務を無事にやり遂げて、帰還していた。しかし、里の中は、何だかソワソワしていた。その原因は、掴めないまま何時もの様に、任務完了報告をしに、火影の執務室へ出向いていた。

蒼龍「要人暗殺任務無事完了しました。」

五代目「おお！いい所に来た。」

と、言つて手招きした。その指示にオレも従う。

五代目「実はな、サスケが、大蛇丸の手の者により、拉致された。」

あの大蛇丸なら、やりかねないな。と、オレは思った。

蒼龍「それで、あなたは、どうするおつもりですか？五代目様。」

五代目「それなら既に、シカマルを小隊長とした、追跡班を編成して奪還任務を与えている。

でも、何か腑に落ちなくてな……。と言つ事で、リュウ。お前は、いい時に来た。

暗部の仮面を外した任務を言い渡す。サスケ奪還班に今すぐ追いつき、援護せよ。

敵の4名は、シズネらを筆頭にした、上忍と特別上忍で組んだフォーマンセルをも、

倒した奴等だ。気を抜く事は、一切無いように！」

そして、仮面を外しながら。

リュウ「りょーかい。」

と、答えて、その場から立ち去った。

そして、田の国、音隠れの里方面に向かって森を突き進む。それから、暫く突っ切って行くと、多分見覚えのある顔が、木に倒れ掛かった寝ていた。多分、間違いないと思うのだが、それは、かなり痩せ細ったチョウジだった。心臓の動きが、弱い事から見ても、かなり危ない状況だと言う事が、分かる。

そこで、皆の所に遅れてしまうのは承知で、一旦 飛雷神の術 で、家に貼ってある術式の場所にまで、チョウジを抱えて戻ってきた。そのチョウジを緊急治療室に運び込んでから、また再出発となった。そして、さっきチョウジを見つけた場所から、更に進んでいくと、今度は、ネジが体に穴を開けて、倒れていた。その様態は、どう考えても、オレの医療忍術の技量じゃ助けられない。と言う事で、また 飛雷神の術 で、家に戻った。しかし、今度は、その前に、ネジの居た所に飛雷神の術式を置いてから、戻った。一応、2度目の失敗はしない様に、心掛けたという事だ。

そして、また 飛雷神の術 を使って、さっきネジを助けた場所まで飛び、歩を進めた。すると、少し最短距離からは、離れていたが、悲鳴が、微かに聞こえた。そこに急いで駆けつけると、カンクロウとキバが、いた。そして、キバは、重傷だったが、今回ののは、治せる範囲だったので、自分で歩けるくらいまでには、傷を癒してあげて、オレはまた、森を突き進んでいった。





オレは、スピードを上げつつ前進していくと、今度は、テマリとシカマルを発見した。

リュウ「大丈夫か？」

シカマル「なんだ、リュウか。俺は何とか大丈夫だ。それより、ナルトを追ってくれ。

アイツは今、多分だが、サスケと戦ってるはずだ。」

その言葉に、オレは、耳を疑った。

リュウ「え？サスケは、大蛇丸の手下に拉致されたんじゃない……。」

シカマル「ああ、俺達も最初はそうだと思っていたが、敵の話によると、どうやら違うらしい。

サスケは、力を求めて自分から大蛇丸のところへ向かったんだとよ。」

うーん。確かに、アイツならありえない話でもない。って事は、サスケがナルトを殺しかねないな。多分アイツにとつて最も親しい友は、ナルトだろうし、それを殺せばイタチを殺せると思ってるはずだからな……。

リュウ「分かった。オレは、急いでナルトとサスケを止めに行く。シカマルは、あまり無理を

しないように。ま、その体じゃあ無理は出来そうも無いな。

」

シカマル「頼む。」

リュウ「また、後でな。」

シカマル「ああ。」

そんな会話をしてから、今度は、ナルトとサスケの激突を止める為に森を突っ走っていった。

そして、オレは、終末の谷という場所で、打っ倒れているナルトを発見した。そして、その頃には、小雨だった雨もとうとう本降りになっていた。

リュウ「・・・遅かったか。」

どうやら、この状況を見る限りサスケは、ナルトを殺す事はしなかったようだったが、激突は、既にあつたと見て間違いないだろう。すると、直後にカカシ先生が現れた。

カカシ「・・・遅かったか。」

この人は、オレと全く、同じ事を言った。

カカシ「リュウか、お前がここにいると言う事は、お前が来たのも、ついさっきという所か。」

その言葉に頷いて、

リュウ「本当に今さつき来たばかり。まあ、チヨウジとネジを見捨てていたら間に合ったとは、

思うけど、それは流石に、出来なかったからさ。」

カカシ「・・・そうか。（サスケとリュウは双子なのに、ここまでも考え方や生き方等が、

正反対とは。全く、・・・コイツは、面白い奴だ。」

リュウ「サスケは、いずれ何とかする。これでも一応、双子の片割れだからな。」

それに、兄貴にも託されちまつてるからな。サスケの事は。

そして、一先ずサスケ奪還任務は、中断。帰還した。

それからと言うもの、ナルトは、サスケに辿り着けそうな任務には、強引に入ってくるし、それ以外の任務ならば、全て断って、修行に集中していた。

次は、そんな事が一種の木ノ葉の習慣と、なってしまうていた頃の出来事である。

ある日の任務受付会場での事・・・。

ガイ「任務完了！！例の海峡の海賊どもに、倍の拳骨！食らわせてきましたよお！！これを

機に、彼らが更生してくれば、私も！涙を流した甲斐がある！ってものです！！！」

と、誠に五月蠅いガイが飛び込んできた。すると、前触れ無く五代目が、話し始めた。

五代目「お前の班にやつてもらおうか。」

ガイ「はい？」

五代目「只でさえ、忙しいってのに、ナルトの奴が、仕事を増やしてくれてねえ。」

そう言うと、付き人のシズネが、任務表を見直した。

シズネ「でも、ガイさんには、S級の任務が入ってますね。先方からの名指しです。今日中にも

出発してもらわないと・・・。」

五代目「じゃあ、ガイ抜きで。」

すると、眉をびくびくさせながら、

ガイ「随分、あっさりと・・・。」

そんな様子を、意にも介さずに、

五代目「日向ネジ、テンテン、リーを呼ぶんだ。」

愛弟子の名前が、呼ばれると、急にハイテンションに戻った。

ガイ「ほぉーお！我が教え子たちなら、無事、任務を果たす事、間違いないでしょう。」

付き人のシズネが、また任務表を見て、こう言った。

シズネ「綱手様。ネジ君は、現在、他の任務に当たっています。」

五代目「なら、この任務を持ってきた、張本人うずまきナルトと、日向ネジの代理で白。

それに、サクラと多由也で、今回はこのフォーマンセルでやってもらおう。」

すると、この編成に、ガイが、食って掛かった。

ガイ「思わしく！！世界中に愛されるべき！我が教え子達では！いけないのですか？！

ええ？！綱手様！！答えてください！！！！」

あっさりと、

五代目「ふーん。何となく。」

その答えに、今まであれだけ勢いのあったガイだったのに、一気に撃沈した。

そんな出来事があつて、ナルト達は、直ぐに呼ばれて、至急に任務受付会場へ行つた。そして、皆が集まると、直ぐに、任務の内容が説明された。

五代目「ナルトが、助けてきた3人は、カタバミ金山から、任務依頼をしに来ていたんだ。

カタバミ金山は、川の国有数の鉱山村だが、半年前から、村の警護を口実に、

黒鍬ファミリーと名乗る、ならず者達が、入り込み、村を支配し、さしたる理由も無く

村の人々は、殺されているらしい。」

リー「なんて酷い！」

五代目「お前たちの任務は、その3人の体力が、回復し次第、カタバミ金山へ送り届け、尚且つ、

黒鍬ファミリーの排除。シンプルな任務だ。どうせ、金目当てのチンピラの集まりだろう。」

と、その時に、前の任務から帰ってきたオレ達第9班が、任務完了の報告をしにその場に、現れた。

リュウ「今回のAランク任務も、無事完遂した。」

五代目「そうか、ご苦労。」

そして、ある情報を伝えた。

リュウ「それと、さつき廊下にいるときに、聞こえてきた黒鋤ファミリーって、言うのは、

確かチンピラの集まりじゃなくて、リーダーには、元忍刀七人衆の1人、黒鋤雷牙だ

という情報を、この間のBランク任務の時に、聞いたんだけど……。」

すると、その情報に五代目の顔色が変わった。

五代目「何！？それは、本当か？だとすると、これはAランクにまで上がるぞ……。」

（ならば、班編成を考え直さないとな……。）よし！リュウ。」

リュウ「はい？」

五代目「お前を小隊長として、隊員に白、ロック・リー、テンテンを加えた3人で、この任務を

遂行してこい。」



リュウ「はい。」

そして、リーを連れて、テンテンの家に向かおうと部屋を出た時だった。ナルトが後ろで、騒ぎ始めたのは。

ナルト「綱手のばあちゃん！オレもその任務に入れてくれってばよ！！相手は、忍刀七人衆

なんだろう？だったら、鬼鮫の情報も知ってるかも知れねえし、それが分かったら、

イタチの情報も知ってるかも知れねえし、それに、それに！もしかしたら、サスケに

繋がる重要な情報も入ってくるかも、しれねえってばよ！  
？」

その熱弁により、ナルトも加わる事となり、4人で行く事になった。

そして、川の国、カタバミ金山から来た3人の回復が終わった、2日後。オレ達は、門の前に集まっていた。

リュウ「じゃあ、これから、カタバミ金山へ、黒鍬ファミリーを、掃討しに行くぞ。」

すると、リーが話しかけてきた。

リー「金山の近くに、僕の馴染みの店があります。そこを拠点に、しましょう。」

テンテン「馴染みの店って？」

リー「それは、旅のお楽しみです！」

その提案を、受け入れ。残り、あと1人となった、メンバーを待った。すると、門の上から、飛び降りてきて、その第一声が・・・

ナルト「じゃんじゃじゃーん！！・・・やっと、全員、集まったってばよ。」

テンテン「誰のせいだよ！全く、もう！」

という、テンテンのツツコミも入れ終え、ようやく、オレ達は、木ノ葉の里を出発し、カタバミ金山へと向かった。

途中休憩も入れ、夕方頃には、拠点とする、「命のカレー屋」という、店に着いた。

そこでは、殺傷能力のあるカレーを食べ、危うく、気を失いかけたところを、テンテンに助けられ、九死に一生を得た気分だった。その夜の事だった。護衛している3人の内の1人が、消えたのは・・・。

テンテン「リュウ君！六助さんが、居なくなっただって！」

リー「不味いですね。奴らに捕まったら、六助さんは・・・」

その報告に、

ナルト「こうなりや、作戦なんか、立てている暇はねえぜ！当たって碎けるだつてだよ！」

行くしかないつてだよ！リュウ！」

数秒考えたが、既に、答えは出ていた。

リュウ「・・・仕方ない。行くか！」

そうして、六助を探しに、行くことになった。

・ ・ ・

だいぶ、陽も昇ってきた頃。カタバミ金山の麓へ着いた。そこで、ナルトが、ある提案をしてきた。

ナルト「なあ、六助さんと唐司さんを助ける何て言わず。この際、一気に、黒鋤ファミリーを

打っ潰してしまおうぜ！」

テンテン「何言ってるのよ？ナルト！」

ナルト「でもよお、黒鋤ファミリーのボスってば、忍刀七人衆の一人かもしれないだろ？！」

六助さん、何されるか、わかんねえぞ？」

リュウ「確かに、ナルトの言っていることには、一理ある。」

そう言ったときに、テンテンが、

テンテン「リュウ君！」

と、止めるようにしてオレの名前を呼んだ。

リュウ「でもなあ、相手には人質を捕られているわけだしな。早まるな。」

そう言つて、金山の出入り口の見張りを続けた。すると、暫くしない内に、通行量が、一気に増えた。勤務時間が、始まったのか・・・。そんな事を考えていると、1人の老人が、倒れた。その老人に対し、黒鋤ファミリーの末端そうな、4名の黒ずくめの男たちが、食つて掛かった。それを、見ていた、ナルトとリーが、遂に、出て行つてしまい、一瞬で、片付けてしまった。そして、オレとテンテンは、頭を抱えながら出て行つた。

すると、その助けた老人から、ある情報を得た。

老人「黒鋤ファミリーのボス、雷牙は、自分を裏切った奴には、生きたまま葬式を出すんじゃない。」

テンテン「生き埋め?!何て、残酷な・・・。」

老人「それがの、雷牙が、葬式を出すと、泣くっちゅうんだ。」

ナルト「よくわかんねえ奴だな。」

老人「六助の葬式も、もう直ぐ、挙げられる事にあるじやろつ。」

「っていうことは、やっぱり、今まで見つからないと思ったら、捕ま  
ったたのか。」

リー「助けに、行きましょう!リュウ君!」

リュウ「そうだな。」

「そう言つて、老人に教えて貰った、墓場の方に向かつていった。すると、そこには、既に、棺桶と、黒鍬ファミリ―数人がいた。まずいな、時間がない。」

リュウ「ナルト。影分身で、全員を倒してくれ。オレ達3人は、増援に対応する。」

ナルト「OKだつてばよ!!」

ナルト「OKだつてばよ!!」

そう言うのと、数十体という、数の影分身を出し、一瞬で、片をつけた。でも、敵が、1名、逃げ出したのに、気が付いていたのは、オレだけだった。と、思ったが、オレだけじゃなかったみたいだ。リ―も発見していて、既に追尾していた。そして、殴ろうと、したとき、敵の顔面直前で、止めた。すると、敵は、尻餅をついた。

リ―「貴方は・・・。」

ナルト「何だつてばよ?そいつ。」

リ―「いえ。この人が、唐司さんですよ。」

そして、オレとテンテンが、その場に着いた。

テンテン「じゃあ、山椒婆さんの!」

ナルト「こいつが、唐司?」

リ―「唐司さん。まさか、山椒婆さんの言うように、自ら望んで、黒鍬ファミリーに?」

と、聞くと、不貞腐れた態度で、

唐司「だったら、どうだつてんだよ?だつてよ、雷牙様は、すげえ

んだぜ？カタバミ金山から、

悪代官一味を追いついて、村の皆を解放したんだ！」

リュウ「なるほどな。って事は、今オレ達とは、敵にあたる存在であり、オレ達の任務では、

黒鍬ファミリーの掃討となっている訳だから、殺しても構わない存在って訳だ。」

その発言に、皆が驚いた。そして、オレは、本当に殺すぞ。という脅しの意味で、千鳥を左手に発動させた。すると、テンテンがまた、止めに入った。

テンテン「リュウ君！それは、何でも、やりすぎじゃ・・・。」

しかし、テンテンの言葉には、無視をして、問いたです。

リュウ「本当に、そう思ってるのか？もし、思っていないんだったら、黒鍬ファミリーとの

縁はしっかりと切って、婆さんの待っている、カレー屋にちゃんと戻って謝りな。」

すると、今までの態度を一変させ、土下座をし、

唐司「すまなかった。」

と、謝った。それと、同時に、発動させていた、千鳥も収めた。

ナルト「まあ良かったってばよ。」

リー「そうですね。これで、山椒婆さんに、会わす顔が、出来まし

た。」

テンテン「それにしても、リュウ君。もっと、優しい言い方は無かったの？」

と、ちよっぴり頬を膨らませながら言われても、何の覇気も感じられなかった。

リュウ「写輪眼の催眠眼を使って、帰らせることも、出来ただけど、それじゃあ、この人の

為にはならない。だから、あえて面倒な方をとった。」

そんな時に、すっかり、忘れられていた、人物が、棺桶の中から、声を上げた……。そうして、六助を、助け出すと、何処からか、視線を感じた。……あそこか。

ナルト「リュウ？どうかしたのか？」

リュウ「ああ、あの岩山の上から、雷牙が、オレ達の事を、監視している。」

テンテン「何ですって！？」

リー「唐司さんは、六助さんを連れて、山椒婆さんの所へ、行ってください！」

唐司「ああ、分かった。」

その返事を聞くと、オレ達4人は、崖を登って、岩山の頂上へ行つた。すると、濃い霧が掛かってきた。





忍法・霧隠れの術

リー「霧隠れの術と言えば、霧隠れの忍者が、得意とする忍術。」

テンテン「まさか、奴が現れたの？」

リュウ「どうやら、その様だな。」

すると、声が、聞こえてきた。

雷牙「見よ！」

忍法・雷の牙

雷牙「ウオオオー！！！！」

リュウ「来るぞ。」

雷牙「雷よ・・・落ちろおおー！！！」

すると、まるで、雷に意志があるように、こっちに向かってきた。もちろん、オレは、視覚で見ているのではなく、感覚で、感じ取っているのだが。

リュウ「皆！避ける！」

オレの指示に、一瞬は、混乱したようだが、何とか無事に回避した。  
蘭丸「雷牙、皆、避けたよ。」

その言葉に、もう一度、攻撃を仕掛けてきた。

#### 雷葬・雷の宴

随分な電気質な攻撃だな。風遁で、相殺させるか。

#### 風遁・神風

電撃が、何本も、襲い掛かってくるのを、竜巻を、何本も出し、全て、相殺させた。すると、少しずつ霧が薄れてきた。そして、雷牙の姿が、見えた。その瞬間に、ナルトが、影分身で、陽動を掛け、後ろを取った。

テンテン「ナルト、結構やるじゃない！」

しかし、それが、災いとなって、

#### 雷球

を、モロに食らってしまった。そして、ナルトは、気絶してしまっている。

リュウ「テンテンは、そこで伸びているナルトの警護。リーは、一気に攻める！」

リー「押忍！……八門遁甲・開門。開！……」

そこから、高速攻撃が、始まり・・・、

## 表蓮華

の最後、フィニッシュを決めようと、巻き付いた時だった。

## 忍法・雷の鎧

という、術を発動され、リーも動けなくなってしまった。オレの出番か。敵は、今、雷を身に纏っている。ということは、体術で、戦うと、今のリーみたいに、なっちまう。ってな訳か。そしてら、遠距離戦か、もしくは、あの術を発動不可に、させないと。・・・・・・。って言うのは、確か前の世界で、オレが考えた事だったはず。

リュウ「テンテン！援護よろしく。」

テンテン「オーケー。で、何をすればいいの？」

リュウ「双昇龍だ！」

テンテン「了解！」

それと、同時にテンテンが、双昇龍を発動させた。よし、敵の目が、そっちを向いている間に。

## 幻術・黒暗行の術

で、視界を真っ暗にしている間に、更に

## 魔幻・枷杭の術

を、重ね合わせて、発動させた。

雷牙は、この二重幻術に掛かり、身動きが、全く取れなくなっている間に、まだ、続いていた、テンテンの双昇龍の攻撃が、モロに当たり、絶命した。

無事に、任務を終えた、オレ達は、翌日、帰路へ着けていた。

ナルト「なあ、リュウ。アイツ、どうやって倒したんだってばよ？」

リュウ「ああ、それは、」

と、説明をしてあげようと、思ったのに、テンテンが、横から無駄口を挟んできた。

テンテン「それはもちろん、私とリュウ君のラブラブのパワーよ！」

ナルト「・・・はあ？ やっぱり、お前らってばー!!」

という、誤解を招くのであった。いや、表面的には、という話だが・・・。

それから暫くの日が経った後の事である。ナルトと自来也は、3年後の暁との対決を前に修行という名目で、木ノ葉を出発した。そして、残された仲間達も、再会の日に、恥をかかぬように、修行と任務に明け暮れる日々が、始まった。

それから時は流れ、早くも3年。ナルトは、無事に成長して帰ってきた。その後、行われた実力試験紛いの物も無事合格し、サスケ以外の同期と一期上との再会も果たしていた。

上忍：日向ネジ、うちはリユウ

特別上忍：春野サクラ（医療関係）、奈良シカマル（戦略担当）、白（学校教師）

中忍：ロック・リー、テンテン、油女シノ、犬塚キバ、日向ヒナタ、多由也、

秋道チョウジ、山中いの

下忍：うずまきナルト

と、なっている事が分かった。

そしてその、翌日、大変な任務を言い渡されることになるのだった。そして、翌日。ナルトは、久しぶりの任務を行うため、カカシ先生とサクラと待ち合わせをしていた。恒例になってはいるが、カカシ先生が、遅刻してきた。その時、砂最速の鳥。鷹丸が、飛んできたのが、見えた。その後、任務を受けに行くために、任務受付会場へ、3人は向かった。

すると、入って直ぐに、任務が言い渡された。

五代目「砂隠れの風影が、暁のメンバーによって連れ去られた。それに伴い、砂から、正式に

応援の要請があつた。そこで、お前たちは、直ちに砂隠れの里へ行き、状況を把握し、

木ノ葉へ伝達。その後、砂隠れの命に従い、彼らを、バツクアップしろ！」

それから、カカシ班が、里を出発したのは、間も無くの事だった。

サクラ「師匠、行つてまいります。」

五代目「ああ！」

ナルト「行くつてばよ！カカシ先生、サクラちゃん！」

と、行つた矢先に、自来也が、現れた。

自来也「おう、ナルト！これから任務か？」

ナルト「ああ、我愛羅を助けに行くんだつてばよ。」

自来也「何？！もう、情報は、まわつて来ていたのか！」

五代目「そういう事だ。」

そんな、会話をすると、自来也は、ナルトだけを呼び出して、小声で言った。

自来也「良いか、ナルト。暁相手に、決して無理はするな。」

ナルト「アイツ等は、俺に用があんだ。今度は、こっちから出向いてやらあ！」

自来也「確かに、お前は強くなったがのう、冷静を欠けば、必ず墓穴を掘る事になるぞ。」

直ぐに、熱くなるのは、お前の悪い癖だからのう。最後に、分かっているとは、思うが、

絶対に、あの力だけは、使うなよ。」

その言葉に、ナルトは、視線を下げながら頷いた。そして、カカシ班は、木ノ葉を出発した。それから、半日程、経った頃、帰路に着いていた、テマリと合流し、砂隠れへの道を急いだ。

それから、1日半もの間、走りっぱなしだった。その間の食事は、非常食である、兵糧丸だけであった。そして、1日半ぶりに、一時休憩をとってから、カカシ班とテマリは、また走り始めた。

その頃、五代目は、宝くじで、1等を、とった為、縁起が悪い。もしかしたら・・・、という勘が働き、新たに、砂隠れへ増援部隊を送ることにした。



そして、翌日の日が昇ってきた頃に、カカシ班とテマリは、やっと砂漠に出ることが、出来た。

しかし、砂漠に足を踏み入れてから、間もなく、砂漠独特の砂嵐に見舞われ、あと少し、というところで、足止めを食らって、特にナルトが、イライラしていた・・・。

カカシ班が、砂漠で、砂嵐により、足止めを食らっていた頃、里では。

五代目「お前達には、カカシ班と同様に、砂隠れに行き、その後、砂隠れの命に従い、彼らを、

バックアップするのが、今回の任務だ。わかったな？」

その言葉に、その班の全員が、返事をした。

ガイ「ははっ！」

リー「任せてください！」

テンテン「了解です。」

ネジ「承知。」

その良い返事に、綱手も言葉を返した。

五代目「よし！」

ガイ「ガイ班、これより出発します！・・・よし、皆。砂隠れま  
で、1日で行くぞ！」

リー「ガイ先生！1日とは言わずに、半日で行きましょう！」

そんな会話に、テンテンとネジの本音が零れる。

ネジ「どう考えたって、3日は、掛かる。」

テンテン「そういう、ノリでする会話、やめて下さい。もう。」

そんな非難の声には、聞く耳を持たず、ガイが、

ガイ「出発だー！！皆、俺に続け！青春ダッシュー！！」

リー「はい！ガイ先生！」

そう言つて、走っていつてしまった。

テンテン「もう、恥ずかしい！」

ネジ「諦める、テンテン。」

それから、2人も先に行ってしまった、2人を、追いかけるように  
して、走っていった。

そして、取り残された、綱手とシズネは、

五代目「相変わらず、元気な連中だ。」

シズネ「そうですね。」

と、笑っていた。

そして、次の日の日の出の時間帯に、駆け込みで、カカシ班とテマリが、砂隠れの里へ入った。そこで、カンクロウも、暁のメンバーにより、意識不明の状態だということを耳にし、まずは、カンクロウの治療を先行することにした。その為に、医療施設内にある、治療室3に入ると、サクラは、早速、動き始めた。すると、そこにいた、お婆さんが、いきなり、カカシを襲った。

チヨ「おのれ！覚悟！！」

カカシ「（ええ！？）」

よく状況を、飲み込めていなかった、ナルトだが、反射的に、影分身を2体出して、応戦した。が、1体は、直ぐに消されてしまい、自分の体術も、流されてしまった。

ナルト「カカシ先生に、いきなり何するんだってばよ？！この、皺くちゃクソババア！！」

（このババア・・・出来る！）」

チヨ「あの時は、よくも！木ノ葉の白い牙め。息子 of 仇、今こそ、わしが、成敗してくれる！」

その言葉に、カカシ先生が、何かを言いたげだったが、婆さんの隣にいた、爺さんが、婆さんの暴走を止めた。

エビゾウ「姉ちゃんよ、良く見よ。良く似とりはするが、こいつは、白い牙ではねーよ。」

それに、木ノ葉の白い牙は、当の昔に死んだる。知らせを受けたとき、息子の仇を

討てなかったと、泣いて泣いて、悔しがっていたらうに。  
「なあ？姉ちゃん。」

すると、婆さんは、

チヨ「・・・・・・・・・・なぐんてな。ボケたフリ。」

と言つて誤魔化した。その言葉に、カカシは、はぁ。と、ため息をついた。

今までのゴタゴタで、手の止まっていた、サクラは、カンクロウの叫び声に近い、うめき声で、また、動き始めた。

サクラ「診させてもらいます。」

テマリ「頼む。」

サクラ「カカシ先生たちは、少し、離れていてください。」

そこから、長い長い、新種の毒物との戦いが、始まった。

そして、サクラが、カンクロウの体内にある、毒素を引き剥がし始めたとき、廊下に出されている方の会話は・・・、

ナルト「なあ、カカシ先生。さっき、この婆ちゃんが言つてた、木の葉の白い牙つてどんな人？」

この婆ちゃんといった時に、隣にいるチヨ婆さんを指しながら、イチヤイチャクティスを読んでいた、カカシに聞いた。

カカシ「どんな人って、言われてもなあ・・・・。そうだなあ・・・・。

まっ、一言で言うと、俺の父親だ。」

その発言は、ナルトの隣にいた、チヨ婆さんにも、聞こえていて、表情を変えた。

チヨ「お主！白い牙の息子か！」

カカシ「はあ。」

と言って、頭を掻いた。

エビゾウ「道理で、良く似とる訳じゃ。」

そんな上空で、飛び交う会話を、ナルトが、ムスツとした表情で、聞いていた。

カンクロウの毒抜きが、ひと段落した頃。木ノ葉から、砂への返書が来た。その内容は、ガイ班の4名を、砂隠れの里に、増援部隊として、送った。というものだった。

そして、カンクロウが、目を覚ました。

テマリ「カンクロウ！カンクロウ！大丈夫か？」

カンクロウ「何だよ？もう、帰ってきたのかよ。テマリ。」

と、無駄口を叩けるようには、なったみたいだ。

テマリ「里の危機だと、聞いてな。」

カンクロウ「心配かけて、済まねえな。」

テマリ「馬鹿。くだらない事、言うな！」

そこまで、姉弟の会話を見ると、カンクロウが、カカシに向かって、こう言った。

カンクロウ「木ノ葉の援軍か？匂いで、追跡できる、忍犬がいれば、追跡は、可能だぜ。」

俺の烏の手に、しっかりと、赤砂の蠍が、身に着けていた、布を、握らせといた。」

カカシ「転んでも、ただでは起きない、流石は、砂の忍。」

そう言われ、カンクロウは、軽く笑うと、体に響いた。そして、ナルトが、視界に入った。

カンクロウ「（・・・うずまきナルトか。）」

そう思いながら、また、眠りについた。そして、カカシが、忍犬達を、口寄せした。

#### 口寄せの術

すると、パックンを含めた。八忍犬が、現れた。

ナルト「パックン！」

パックン「ナルトか？久しぶりだな。」

ナルト「パッくんちつとも、変わってねえなあ。」

パッくん「お主もな！」

その言葉に、若干不満を持ったナルトであったが、直ぐに、八忍犬は、蠍の服の匂いを嗅ぎ、どこかへ消えていった。



その日の夜は、砂隠れの里側に用意して貰った、宿泊場所で、一夜を過ごし、翌日の朝。

パッくんが、暁のアジトと思われる場所を、発見し、報告をしにやってくる。

カカシ「なるほど。ここに奴らのアジトが・・・。」

そう言って、見ていた、地図を指差しながら言った。

パッくん「恐ろしくな。我愛羅の匂いもそこから、しとった。」

カカシ「もう1つ、頼みがあるんだけど良いか？」

その返答を、待たずに言葉を続けた。

カカシ「今、川の国辺りにいる、ガイ班を、そこに誘導してくれ。」

パッくん「分かった。」

そこまで、話すと、隣で寝ていた、ナルトが、目を覚ました。

ナルト「お！パッくん！」

カカシ「じゃあ、パッくん頼んだぞ。」

パッくん「じゃ、またな。ナルト。」

そう言つて、走り去つていった。その様子に、ナルトも勘付いたようだった。

ナルト「カカシ先生！ひょっとして、暁のアジトが、見つかったのか！？」

カカシ「ああ、直ぐに出発するぞ。」

それから直ぐに、出発の準備を整え、外で、砂の忍が、来るのを待っていた。

カカシ「では、砂の用意が、出来次第、彼等と共に、我愛羅君を救出に向かう。」

すると、やっと、砂の忍5名が、現れた。

テマリ「待たせたな。」

サクラ「テマリさん！」

ナルト「よし！なら、出発だつてばよ！」

そう言つて、ナルトが、準備体操を始めたときだった。「待て！」という、声が、聞こえたのは。

バキ「テマリ！お前たちは、里に残つて、国境警備に当たれ。」

当然、その指示には、反論が、出たが、上からの指示だ。という、言葉で、引き下がるしかなかった。その時だった。建物の屋上か

ら、チヨ婆さんが、飛び降りてきたのは。

チヨ「わしが行く。砂の忍の代表として、わしが行く。・・・元々隠居の身。どう、

行動しようとして、わしの勝手じゃろ。」

すると、砂の忍の一人が、「無理をなさらない方が。」と、注意をした。その言葉に、チヨ婆さんは、

チヨ「わしを、年寄り扱いするでないわい。それに、可愛い孫に、久しぶりに会えると

いうんじやから、張り切って、可愛がりたいんでのう。」

そして、カカシ班＋チヨ婆さんの4名で、暁のアジトへと、向かう事となった。

カカシ「では、我々は、出かけます。」

バキ「済まぬ。これから、我々も何とか、上役たちを説得してみる。」

テマリ「必ず。後から行くからな。」

その言葉に対して、ナルトは、

ナルト「へっ。その頃には、とつくに、我愛羅は、俺達が、助け出してるってばよ！」

そして、暁のアジトがある、川の国に向かった。



その頃、パッケンが、ガイ班と合流し、暁のアジトへ、直接案内しようとしているのだった。

そして、カカシ班では、こんな会話が、なされていた。

サクラ「ナルト。1つ聞いても良い？・・・いつから、暁に狙われてたの？」

その返事は、「わかんねえ」だった。そして、カカシが、口を挟んだ。

カカシ「一度、暁の2人が、ナルトを狙って、接触を試みようとして、木ノ葉まで来た事がある。

あれから3年、今になって、動き始めた。・・・理由は、分からないが。」

サクラ「どうして、3年も待ったんだろう。」

その呟きにも近い、疑問に、カカシは、答えた。

カカシ「手を出さなかったんじゃないんで、出せなかったのかもしれないな。ナルトには、常に、

自来也様が、ついていたからな。」

その答えに、なるほど。と、思ったサクラに、否定の声が上がった。

チヨ「いや。わしの得た情報では、もっと、別の理由が、あると聞

いた・・・。

人に封じられている尾獣を、引き剥がすには、それ相応の準備がいるからのう。

それに、手間取ったのじゃ。」

その話の中に、出てきた、単語に引っかけた、サクラが、聞いた。

サクラ「その・・・、尾獣って？」

チヨ「何じゃ？綱手の弟子のクセして、尾獣も、知らんのかい？木ノ葉には、九尾がおつたろう。」

すると、カカシ班の表情が、曇った。そして、カカシが、話し始めた。

カカシ「九尾の事は、木ノ葉では、完全に極秘扱いですので。」

チヨ「まあ、それもそうかのう。」

と、言つて、さつきサクラが、聞いた事に関して、説明をし始めた。

チヨ「尾獣とは、その名の通り、尾を持つ魔獣の事じゃ。砂は、昔から、一尾を持つておる。」

それが、我愛羅に封じられた、守鶴の事じゃ。」

サクラ「一尾？それじゃあ、九尾以外にも、魔獣が？」

チヨ「そうじゃ。この世に尾獣は、全部で9体おる。尾獣には、特徴があつてな、それぞれ、

尾の数が、違う。一尾には、尾が一本。二尾には、二本。そ

れらが、九尾まで、

その名の通り、名は、尾の数を、表しておる。尾獣は、莫大なチャクラの塊で、

忍界大戦期には、各国隠れ里が、軍事利用しようと、競って手に入れようとしたのもじや。

しかし、人智を越した、その力を制御することなど、誰にも、出来んのじや。

暁が、何のために、それを欲しとるのは、分らんが、危険すぎる力じや。

まあ、平穏な情勢の中、時代も移り、今や尾獣は、世界各地に、散り散りに存在して

おるらしいがの。」

その話が、終わってから、ナルトの表情は、良くならなかった。

それから暫く、川の国内にある、暁のアジトに向かって、進軍している、カカシ班は、うちはイタチと、ガイ班は、干柿鬼鮫と戦闘に入った。その戦闘は、イタチは、ナルトの大玉螺旋丸で、鬼鮫は、ガイの朝孔雀で、勝負が決まったが、戦っていたのは、本人ではなく、本人のチャクラ30%を貰った、全く別の人間だった。そんな足止めもあつたが、休憩も挟んで、何とか、暁のアジトの前まで、辿り着くことが、出来た。そして、一足早かったガイ班と、後に来たカカシ班は、合流した。

ガイ「遅かったな、カカシ。」

カカシ「いやいや、途中面倒臭いのに、絡まれちゃって。」

チヨ「カカシよ、面倒臭いのは、わしの事では、あるまいな。」

ナルト「オッス！」

すると、封印されている、洞窟の入り口を見ながら、

ガイ「よし。やるか、カカシ。」

カカシ「ああ。」

という、やり取りをした。

ナルト「（我愛羅・・・、待ってるよ・・・。）」



そして、ネジの白眼で、洞窟内を見てみたが、詳しくは、つかみ取れなかったようだった。

サクラ「どうだったの？」

ネジ「口では、説明しにくい。」

その言葉にガイが、確かめてみると、やはり・・・、

ガイ「・・・結界か。」

リー「どうします？」

ガイ「まずは、結界を外さないといけないな。」

テンテン「どうやって？」

サクラ「それには、まず、この結界が、どんな物なのか、調べる必要があるわね。」

その、案に、ガイは、頷き、カカシに、見極めるように指示した。

カカシ「・・・これは、五封結界ですね。」

チヨ「うむ、同感じゃ。」

ナルト「五封結界？」

カカシ「この五封結界は、『禁』と、書かれた札を、近辺の五カ所

に貼り付け、結界を

作ってるんだ。目の前にある『禁』の札と、他の四カ所にある札。その五カ所に

貼ってある札、その全てに貼ってある札を、全て同時に剥がさなければ、結界は、

外れない。そういう、仕組みの結界術だ。」

その他に、ある4枚の札を、ネジの白眼で、見つけ出して、ガイ班が、その位置についた。そして、5人一斉に札を剥がして、カカシ班は、突入した。しかし、ガイ班は、敵の術に嵌まり、自分自身と戦うことになってしまった。その後、デイダラは、カカシとナルトが、サソリは、サクラとチヨ婆さん。というふうに、二手に分かれて、戦った。そして、暫くは、どちらも激戦が繰り広げられたが、サソリの方は、ある情報を残し、死んでいった。一方のデイダラ戦は、まだ、決着が、ついていなかった。そこに、ある男が、飛び込んできた。

カカシ「（・・・暗部か？）」

カカシ「（・・・暗部か？）」

蒼龍「五代目様の命により増援として、やってきた蒼龍です。」

一応、オレは、暗部だと言う事は伏せてあるから、他人の振りをしておく事にした。

デイダラ「（ふん。木ノ葉の暗部か。うん。）」

そして、昔ここで倒した事があるから、知ってはいるが、

蒼龍「敵の能力はどのような物です？」

と、尋ねてみた。すると、ナルトが、

ナルト「爆発しか使ってこないってばよ！しかも、全部、変な形の・・・。」

そこで、デイダラは、突っ込んだ。

デイダラ「何だと？！オイラの起爆粘土製の芸術的造形を、馬鹿にしようってのか！？」

そして、蒼龍とナルトに向けて、百足型の起爆粘土を仕向けた。・・・そして、

デイダラ「喝!!」

しかし、何も、起こらない。

デイダラ「何故だ？」

蒼龍「千鳥千本を、その粘土に刺させてもらいました。貴方の術は、土遁系の禁術。

つまり雷遁は、苦手ですよね？」

デイダラ「クソッ！（一発で、読みやがって……。一体、何者だ？）」

そして、こちら辺でカミングアウトをする事にする。

蒼龍「何者だ？つてか？お前が、死ぬ前に、教えてやるよ。最近他の里では、結構有名な、

木ノ葉の神龍使い……。そう言えば大体分かるか？」

しかし、「うん」と唸ってパツとしなかったので、仮面を外しながら名を乗った。

リュウ「兄貴が、暁にお世話になってる、うちはリュウだ。」

その言葉に、デイダラは、反応した。

デイダラ「うちはイタチの弟か？！確か名は、うちはリュウ。だっ  
たかな？うん。

それなら、このオイラの命に代えてでも、抹殺しなくちゃならねえな。うん。」

すると、ガイ班と、サクラ、チヨ婆さんも、やってきた。そして、暗部の格好をしているオレが、この場にいることに、疑問を持つ。

サクラ「どうして？」

ナルト「リュウの奴、暗部もやってたんだってばよ。」

サクラ「嘘!!」

テンテン「流石、リュウ！私を射止めただけの事は、あるわあ。」

そんな、会話を横目で、見ていた、オレが、一旦逃げる様に指示した。その言葉に、大人しく従い、全員が、離れて、待機した。そして、オレが、天に向かって、火遁・豪龍火の術を放った。

リュウ「これで終わりだ。デイダラ。諦めろ。」

すると、上空に、暗雲が、立ち込めた。

デイダラ「何をしようと無駄だ。これが、オイラの最期の芸術だ。」

そう言うと、上半身の服を脱ぎ捨て、胸のところにある口から、起爆粘土を良く噛んで、飲み込んだ。すると、どんどんデイダラの体が、膨張していく。

デイダラ「・・・芸術は、爆発だ!!!」

カカシ先生。頼む！

デイダラ「喝！！！！！」

と、ものすごい爆発が起こった、のと同時に、オレは術を発動した。

麒麟

神威

その爆発源を、押さえ込むようにして、発動した、オレの術ごと、空間が、歪んだ後に、消えてなくなった。その様子に、その場にいる、全員が、驚いていた。

その爆発源を、押さえ込むようにして、発動した、サスケの術ごと、空間が、歪んだ後に、消えてなくなった。その様子に、その場にいる、全員が、驚いていた。その今、生じた疑問を解決する為に、オレが皆を代表して、カカシ先生に聞いた。

リュウ「カカシ先生。さっきの瞳術は、やっぱり、」

カカシ「ああ、万華鏡写輪眼だよ。」

その後、万華鏡写輪眼の説明と、神威の説明を長々としていると、我愛羅を支えている影分身ナルトが、

ナルト「そんなの後で聞いてやるから、サクラちゃん！早く、我愛羅を！」

と言った。そうすると、サクラも頷き、森林から、少し離れた、野原へ出て、我愛羅を診た。

そして、サクラは、我愛羅の容態を診た。そして、静かに、首を横に振った。

ナルト「・・・何で、我愛羅ばかり、我愛羅ばかりが・・・。こんなで死んだんじゃ、

・・・風影だぞ！！まだ、風影になったばっかじゃねーか！！」

と、感情的になっているナルトを、落ち着かせようと思って、チヨ婆さんが、

チヨ「冷静になれ、うずまきナルト。」

と言った。その言葉に、ナルトが、涙を滝のように、流しながら、振り向いて言った。

ナルト「うるせええ！！！！お前らあ！砂の忍が！我愛羅の中に、化け物なんか入れなきゃ！

こんな事には、ならなかったんだ！！お前ら！我愛羅が何を思っていたのか、

少しは、聞いた事あんのか？！！！！！！！！何が、人柱力だ。偉そうに、

そんな言葉、作りやがって、呼んでんじゃねええ！！！！！！！！！！

サクラ「（・・・ナルト。）」

テンテン「（ナルト。）」

リー「・・・ナルト君。」

そして、呟くようにしてナルトが言った。

ナルト「3年も必死に修行して、俺は、・・・何も、何も守れなかった・・・。」

すると、チヨ婆さんが、転生忍術を始めた。その忍術の副作用を知っているサクラが、



サクラ「チヨ婆様！その術は！」

と、止める声に、ニッコリと目を細めて、笑って見せた。

サクラ「（チヨ婆様・・・。）」

それから、もう止める事は無かった。その転生忍術の途中、チャクラ不足になったが、ナルトの力添えで、それも乗り切り、チヨ婆さんの命と引き換えに、我愛羅は、息を吹き返した。

そして、目を覚ました我愛羅が、周りを見渡すと、大勢の砂の忍が、歓声を上げた。それから、チヨ婆さんの遺体と共に、帰郷した。そしてカカシ班とガイ班も、我愛羅を砂隠れの里に送ってから、木ノ葉隠れの里への帰路に着いた。木ノ葉に到着したのは、それから3日後の事だった。

まずは、通常の報告から始める。暁のメンバーである、角都と飛段が、第2戦の時に木ノ葉の精鋭達によって、倒された。角都は、ナルトの新術である、風遁・螺旋手裏剣 によって、飛段は、シカマルの戦術とオレの水遁奥義 水遁・激流葬 によって、水圧死もしくは、一生涯溺れ苦しんでいる。のどちらかになった。まあ、少なくとも戦闘不能ってな訳だ。それともう1つ。里を抜けて大蛇丸の元にいたサスケが、とうとう大蛇丸を裏切って、乗っ取るうとしていた大蛇丸を逆に乗っ取った。そして、その後、イタチへの復讐を目的とした小隊『蛇』のリーダーとなり、活動を活発化させてきている。

そして、次は、悲しい報告になる。まずは、角都&飛段戦のことだ。その戦いの第1戦で、猿飛アスマが、殉職した。そして、伝説の三忍と、呼ばれた、自来也が、雨隠れの里内で、情報収集の最中、暁のメンバーである、ペイン（正確には、ペイン六道にだが）と小南に殺されてしまったのである。

その後、暁の残るメンバーは、ペイン、小南、うちはイタチ、干柿鬼鮫、ゼツ、トビ（うちはマダラ）の6名となった。しかし、残る尾獣も、あと八尾と九尾を、残すのみとなっていた。

そして、今現在の木ノ葉の状況としては、ナルトが、妙木山にて、仙術の修行をしている事と、オレとネジ、リー、テンテンの4名にうちはイタチ捕獲命令が、下された事くらいだ。その4名は、うちはイタチを探してる。そして、増援部隊として、後を追いかけるように、来ているのが、カカシ、ヤマト、サクラ、サイ、ヒナタ、キバ&赤丸、シノの7人と1匹だ。

そして、オレを隊長とした『イタチ捕獲班』が、うちのはアジトに到着する前に、サスケを筆頭として、鬼灯水月、香燐、重吾の4名

からなる『蛇』が、到着していた。

鬼鮫「ここからは、サスケ君1人で、行ってください。イタチさんの命令でしてね。他の方々は、

ここで、待っていて貰いましょうか。」

サスケ「分かった。小隊で動いていたのは、元々一対一に、邪魔が入らないように、する為

だったからな。ちょうど良い。」

香燐「サスケ。それは、ダメだ。コイツを倒して全員で行くんだ。」

鬼鮫「私は戦う気などありませんがねえ。しかし、戦うのであれば、容赦しませんよ。」

サスケ「香燐。大人しくしている。これは、俺の復讐だ。」

そう言うと、1人で鬼鮫の横を通って去っていった。

そして、『イタチ捕獲班』が到着したのは、暇つぶしにと、水月と鬼鮫が戦い始めた頃だった。

オレ達4人は、サスケがイタチの所へ行つた後、直ぐに着いた。そして、香燐が、オレの瞳・・・写輪眼を見て驚いていた。

鬼鮫「やれやれ、今度は木ノ葉の皆さんですか・・・。」

ネジ「小隊『蛇』のメンバーと、暁の一員である干柿鬼鮫と見受けられる。」

すると、香燐が騒ぎ始めるが重吾に咎められる。その内容から、香燐はサスケの事が、心配だと言う事が、簡単に推測できた・・・よし。『蛇』も連れて行こう。何かの役に立つかもしれない。

リュウ「香燐と重吾・・・だったか？それと、再不斬の大刀を持つてる奴。サスケの事を、

心配してくれているなら、ついてきてくれ。」

鬼鮫「私と殺り合うつもりですか？」

それには、口では答えずに瞳で答えた。万華鏡写輪眼を発動させたのだ。

鬼鮫「何?!その眼は!?!」

そう言ったのが早いか、月読の世界に陥ったのが早いかは、分からないが、兎に角、月読の世界へと引きずり込んで、手加減は一切無しで120時間の悪夢を見てもらった。それを食らうと流石の鬼鮫

も精神崩壊を起こした。その隙に、千鳥で、心臓を一突きして、『蛇』と『イタチ捕獲班』は、サスケとイタチがいるであろう、うちのはアジトへ向かった。

すると、既にアジトの天井を破って屋上での戦闘に入っていた。

リュウ「お前ら6人は、ここで待つてろ。これはオレ達兄弟の戦いだ。」

そして、その場に6人を残して、兄貴とサスケを止めさせる為に、オレは、アジト屋上へ飛んで行った……。残された6人は、

香燐「どういうことだ！？さっきの奴もサスケと同じ写輪眼を使ってた！」

リー「彼もうちは一族なんですよ。そして、サスケ君の双子の弟でもあります。」

その情報に、『蛇』の3名は、驚愕していた。

水月「って事は、奴もイタチを殺しに来たのかい？」

テンテン「いいえ、あくまでも今回の任務は、イタチの捕獲拘束だから違うとは思っけど……。」

リー「ええ。イタチを殺す可能性もあるでしょうね。」

と、言った。が、ネジは意味深な発言をした。

ネジ「いいや、リュウは、イタチをそこまでは憎んでいなかったようにも思える。それに、断言は

出来ないが、多分リュウは、一族滅亡の真の理由まで、感づいているようだったしな。

と言う事は、奴の性格からして、イタチとサスケの仲介をしに行った。と、考えるのが、

一番妥当だろう。」

そのネジの推測は、当たっていた。そして、オレは、サスケの誤解を解くために、戦闘区域に迷わず入っていった・・・。

オレが、サスケと兄貴の戦闘区域に入ってしまった瞬間、火遁・豪火球の術の撃ち合いとなっていた。そして、それはサスケ優勢だった。が、イタチが天照を使った。これは、マズイ。

神炎

まずは、兄貴の天照を、オレの神炎に食わせてから、ピントをもう一度合わせて、消化した。

イタチ「・・・リュウか。」

サスケ「邪魔をするな！リュウ。」

リュウ「そういう訳には、いかないんでね。ちょっと、真実を知ってもらうところから始めると

するか。良いだろ？兄貴。」

その問いに、兄貴は、

イタチ「・・・良いだろう。少しの間、お前達に時間をやる。」

と言って、少し下がった。その行動を見たオレは、サスケに近づいた。

サスケ「何の真似だ？俺の邪魔をする様なら、お前も殺すぞ。」

## 月読

そして、時間と空間を自分の好きなように出来る、幻術世界へと連れ込んだ。

サスケ『幻術か。』

リュウ『そうだ。』

サスケ『殺すぞ。』

リュウ『その前に、サスケの知っている知識の中から、1つ訂正をさせてもらおう。』

サスケ『訂正・・・だと？』

リュウ『ああ、訂正だ。』

サスケ『一体何をだ？』

リュウ『一族滅亡の原因。黒幕とも言える真犯人だ。』

そう言うと、サスケの顔から少しの動揺が見られた。

サスケ『何の冗談だ。』

リュウ『冗談じゃない。今から話す事は、全て真実だ。それをサスケが信じるか、信じないかは、

また別の話だけだな。』



サスケ『・・・話せ。』

リュウ『まず、あの夜、兄貴が一族を皆殺しにしたのは事実だ。そして、そうなる事をオレも

知っていた。』

オレが、手伝ったという事は、今のところ伏せておく。

リュウ『そして、木ノ葉の抜け忍となった。それは、木ノ葉から下された任務だった。』

サスケ『何?! って事は、黒幕は木ノ葉か! ?』

リュウ『早まるなよ、サスケ。話はまだ途中だ。何故、木ノ葉がうち一族を滅亡にまで、

追いやったか・・・。うち一族は、優秀な戦力だ。だけれども、その中途半端な

力のせいで、オレ達の父親は、思い上がりクーデターを起こそうとしたからだ。

兄貴は、そもそもこのクーデターが成功するとは思っていなかった。けど、それが、

例え失敗に終わっても、木ノ葉の里に尋常ではない被害をもたらす。そうなれば、

他の国や里が攻めてきて、忍界大戦にもなりかねないと思っただ。となったら、

また関係の無い人々が死んでいく。それは、どうしても避けたかったんだよ。兄貴は、

だから、仕方無く一族を犠牲にした。』

サスケ『だったらやっぱり木ノ葉が・・・。』

サスケ『だったらやっぱり木ノ葉が……。』

リュウ『だから！話は、最後まで聞けつて。』

サスケ『……。続ける。』

リュウ『ああ、じゃあ、率直に言つと、木ノ葉もうちは一族も、黒幕の手の平の上で、思うが俥に、

弄ばれていたのさ。そしてその黒幕とは、木ノ葉隠れの里の創設者のうちの1人でもある

うちはマダラ。』

サスケ『うちは……。マダラ……。』

リュウ『そうだ。ソイツが真の黒幕であり、暁の裏のリーダー。』

すると、サスケは、目を瞑った。そして、

サスケ『……。そうかよ。そういう事だったのか……。』

リュウ『そして、九尾の妖狐襲撃事件の真犯人でもある。』

サスケ『俺は、そんな奴の手の平で、踊つてたと言つのか。』

リュウ『まあ、そうなるな。』

それから、数秒の沈黙があった。そして、サスケが遂に口を開いた。  
サスケ『これから、俺は、一旦木ノ葉に戻る。それから、うちはサスケの再スタートだ。』

リュウ『ナルト達も喜ぶと思うぜ？それより、兄貴はどうする？このまま暁で、うちはマダラの

監視を続けてもらうか？』

サスケ『いや、・・・木ノ葉に連れて帰ろう。』

リュウ『よし。そうと決まれば、善は急げだ。帰るぞ。』

サスケ『ああ。』

そして、幻術を解いて、現実世界へ戻る。

イタチ「表情が、変わったな。どこまで、聞いたんだ？サスケ。」

サスケ「全部だ。・・・兄貴、俺は一旦木ノ葉に戻る。」

リュウ「その体じゃあ、半年も持たないだろ？今直ぐにでも、手術を受けてもらう。」

すると、イタチは、

イタチ「そこまでもバレていたか。でも、どうするつもりだ？俺は、Sランク級の犯罪者だぞ？」

リュウ「情報部で、脳内を探られるだろう。と、なったら、色々と

分かってくる。兄貴が、

任務でああやった事や、マダラが関わっている事。もちろん木ノ葉も関わっている事

とかもな。五代目は、色々知らな過ぎるけど、三代目のような穏健派だ。

きつと良い様にしてくれるさ。」

イタチ「なるほどな。良く考えたものだ。」

と言って、木ノ葉の里の方向を見ていた。そして、サスケが、

サスケ「帰るぞ。木ノ葉の里へ。」

と言って、帰路についた。その途中で、待機させていた『蛇』と『イタチ捕獲班』の6名とも合流し、その道中で、イタチを拘束していない理由と、ある程度の和解をした事を告げ、ただし情報部に引き渡すと言って納得させた。

そして、木ノ葉に到着したオレ達一行は、まず最初に、全員で、火影の執務室へと入っていった・・・。

五代目「どういう事だ？この状況は・・・。」

かなり驚いているようだが、冷静を保っている風にして尋ねてきた。それに、何でも無いような口調でその質問に答える。

リュウ「今回の任務のターゲットである、うちはイタチと協力をしてくれたうちはサスケ、

鬼灯水月、重吾、香燐の計4名を連れてきた。」

五代目「ご苦労。では早速、情報部に、」

その指示を遮ったのは、サスケだった。

サスケ「ちょっと待った。まず、兄貴を治すのが、先決だ。アンタも医療忍者なら分かるだろ？」

兄貴の病状の具合くらい。」

それに賛成、大賛成なオレも援護に加わる。

リュウ「事情は、後から詳しく話す。兄貴の掛かっている心臓病を治せる可能性が、あるのは、

五代目だけなんだよ。・・・頼む。」

すると、暫くは悩んでいたみたいだが、

五代目「・・・・・・・・良いだろう。直ぐに手術の準備に掛かる。そ

の間に、サスケとその仲間は、情報部に行つて、粗方の情報は、洗い浚い吐き出してもらつぞ。」

その扱いに、少しムツとした雰囲気を出したサスケだったが、

サスケ「分かつた。行くぞ、香燐、水月、重吾。」

と言う風に答えた。まあ、一応抜け忍扱いだしな。という訳で、『蛇』4名は、情報部による軽い尋問を受けた後、解放された。そして、サスケは、カカシ班に配属され、残りの3名は、新しく編成された班に配属出来る。と言う風に、してもらえた。

しかし、兄貴・・・イタチはそう簡単にもいかなかった。とりあえず、手術は成功して、命に関わるような事は、無くなった。が、しかし、抜け忍である上に、一旦はS級の犯罪者に名を連ねた事もある人物だったからだ。

リウウ「だから、一族滅亡の真実が、解明されて、兄貴は一応無実だと言う事が、証明されたので

あれば、別に里にいても問題ないだろ？五代目。」

五代目「しかし、だな。」

と言うような、やりとりを2週間程、続けた事によつて、うちはイタチの居住を許可されたと共に、犯罪者リストからの除名と、『やつぱりイタチは無罪だよ大号令』により、数年振りに家へ帰ることが出来た。

その間に、帰ってきたナルトとも和解をし、今までバタバタとしていた木ノ葉に平穏が、戻ってきた頃。雲隠れからの情報で、八尾が捕まり、残るは、あと、ナルトの九尾のみとなった事が、分かつた。

そして、暁のメンバー、ペインと小南が、動き出した。木ノ葉への襲撃が始まったのだった。

そして、今回は、家でのんびり過ごしていた時だったので、襲撃の第一報を受けたら直ぐに行動に移す事が出来た。



ペイン襲来の一報を受けたのは、普通に家にいる時だった。

重吾「大変だ！木ノ葉が、暁のメンバーに襲われている！」

と、重吾が飛び込んできた。

サスケ「何?!」

とうとう来たか、ペインが……。

イタチ「オレも行こう。多分、相手はペインと小南さんだ。」

リュウ「……行くか!」

サスケ「ああ。」

そして、家を飛び出し各々戦闘区域へと突入していった。

まずは、口寄せ動物を扱う、畜生道からだな。

#### 口寄せの術

で、白龍、黒龍、神龍……通称、三龍を呼び出して、既に畜生道によって呼び出されている大型の口寄せ動物達の抹殺を頼んで、オレは、本体を叩きに行った。

口寄せ・雷光剣化

そして、妖刀・村正を手にした。

千鳥刀

オレは、また、口寄せの印を結んでいる畜生道に斬り掛かった。しかし、それは、避けられた。

火遁・豪龍火の術

それを放って直ぐに、畜生道の後ろに回りこんだ。そして！

火遁・螺旋丸

これで、まずは一人目は、終了。

その頃には、サスケは餓鬼道とイタチは地獄道との戦闘に入っていた。

そして、里の情報部のある場所に行くと、今度は、人間道の姿が、目視できた。ソイツは、瞬時にシズネ先生の背中に戻った。この距離じゃ、シズネ先生を助けるのは、無理だ。そう判断したオレは、万華鏡写輪眼にして、神炎を発動させた。その白炎は、瞬時にシズネ先生の背後を取っていた人間道を捕らえ、完璧なほどまでに亡き者にしようと、食らいついた。その間に、シズネ先生は、その場から少し離れた。

リュウ「先生は、敵の情報分析を、いのといのいちさん、イビキさんもここから離れる！」

ペイン六道は、オレとサスケ、兄貴で片付ける。」

その指示に従って、先生達が、その危険な戦闘エリアから離脱した事を確認してから、人間道に着火している白炎の威力を一気に強めて、灰も残らないほどに燃やし尽くした。

オレが、人間道との戦闘に終止符を打った頃。イタチは、地獄道を撃破し、突然目の前に現れた小南と対峙していた。

イタチ side

イタチ「お久しぶりです。小南さん。」

小南「そうね。イタチ君。」

イタチ「すみませんが、暁との縁は切らせて頂きました。これ以上、弟達に迷惑をかけるのも、

限界だったもので。」

小南「知ってるわ。貴方がどれだけ弟さん達を思ってきたかは。」

イタチ「ならば、知っているでしょう？オレが、木ノ葉の里も大切に思っている事は。」

・・・この里から、手を引いてくれませんか？小南さん。」

そして、風が吹いた。

イタチ「この里から、手を引いてくれませんか？小南さん。」

小南「私は、長門について行く。貴方達の思い描く平和と長門の思い描く平和は、

似て異なるもののプロセスが違う。」

イタチ「そうですね・・・。ならば、残念ですが、ここで小南さんと戦わなければなりません。」

小南「いいえ。その必要は、無いわ。」

と、言ったら、小南の体は、全て紙となって、散り散りになった。

イタチ「紙分身だったか・・・。」

そして、視点は戻る。

リユウside

オレが、人間道との戦闘に終止符を打った後、残りの敵を探して木の葉を右往左往縦横無尽に駆け回っていた。すると、修羅道が、天道と戦っているナルトに突っ込んでいくのが見えた。・・・させるか！

火遁・白虎の術

そして、オレの口から出た火は、小さな虎を描いて修羅道に突進していった。それにより、修羅道の意識は、こっちに向いた。

#### 火遁・白狐の術

術名の読み方は、同じだが、次は、狐だ。しかも、虎よりも素早い。

#### 影分身の術

そして、本体を合わせ3人になった。そして、ラスト！

#### 風遁・隼      風遁・飛燕      風遁・疾風

リュウ「「合わせて！！」」

#### 風遁・神風特攻の術

その術は、風遁系忍術であるのにもかかわらず、修羅道に当たったと同時に、爆発を巻き起こした。そして、その爆発と衝撃波により、修羅道は木っ端微塵となった。よっしゃ！残るは、ナルトと戦ってる天道のみだ。狙うのは、天道が引力と斥力の能力を使った後の5秒間！つまり、インターバルだ。その陽動として、まだ出ている影分身2体を再利用する事にした。そして、オレの影分身は、千鳥を両手に出しながら、天道に向かって一直線に突撃しにいった。

#### 二重双牙千鳥

天道「（増援か。）」

## 神羅天征

その忍術とは到底思えない様な術で、オレの影分身は、蹴散らされた。でも、これで5秒間のインターバルを作り出す事が出来た。そして、本体のオレが、地中から飛び出たときだった。

ナルト「リユウ！！危ないってばよぉ！！！」

確かに、この状況は、オレの命に関わる状況だった。そして、その場から瞬時に離れた。

ナルト「食らえ！」

## 風遁・螺旋手裏剣

すると、それを『ビュウーン』と投げ飛ばして、天道に直撃させた。その術は、凄まじい回転と威力で、天道を倒した。

ナルト「俺は今から本体と話してくる。」

そう言うと、山の方へと走り去ってしまった。

それから、30分程経った後の事である。破壊された木ノ葉の町並みや死者が、生き返り始めたのは。前の世界では、確か、死者しか元に戻らなかったのに……。

それは、兎も角、今回のペイン襲撃も、何とか収める事に成功したのである。

その後の事は、ほぼ前回同様に起こり、子供も10人と恵まれすぎた。今回と前回を比較するとすれば、サスケ（本来）も家庭を築き、イタチも家庭を築けた事と、オレが、マダラの術で死なずに、寿命を真つ当した事ぐらいか……。

そして、オレは、真つ白い空間に1人ぽつんとした。すると、前回同様、目の前に、いきなり幼い少女の姿をした、自称・神様が、現れた。

神様「お久しぶりです。」

隆「これで、合格した事になった？」

と、普通に聞いてみた。すると、

神様「はい。」

と言う返事だったから、「良かったあ〜。」と胸をホツと撫で下ろしている、神様の表情が、怪しくなっていた。

神様「……ですが、あの〜、そのう〜、え〜と……。」

オレは、とても嫌な感じがしてきた。第6感……シックスセンスとでも言っておこうか、オレのシックスセンスが告げているのだ。『まだ、何かあるぞ』……と。

隆「何か、問題でも起きた？」

神様「あなたは、怒るかもしれませんが、怒るかもしれませんが、怒るかもしれませんが……。」

隆「それは、その話を聞いてから判断する。」

すると、暫く躊躇っていた様だったが、口を開いた。

神様「まずは、落ち着いてください。……率直に言います。うう……。でも……、」

隆「早く言えよ。」

神様「……もう一回。」

そして、一旦目を閉じてから、宣言するように力強くこう言った。

神様「もう一回だけ、さっきと同じような世界に飛んでもらいますですー!!」

隆「ちょっと待て！まず、ちゃんと説明をしてもらわないと、意味分かんないし、

約束と違うし、言いたい事は、山ほどあるし。」

すると、神様は、

神様「理由としては諸事情により、色々……。本当にもう一度だけなので、

お願いされてくれませんか？お願いしますです！」



隆「まず、ちゃんと謝ってくれる？意味分かんないんだけどさ。」

その言葉に、神様は、強制力を行使し始めた。

神様「ごめんなさいです！！でも、行ってもらいますです！！本当に、本当に、ごめんなさい！！」

と、言つてオレを別の空間に飛ばしてしまつた。しかし、微かに神様の声が聞こえた。

神様「今度の世界には、あなたに近い存在の方も迷い込んでしまつていますです。」

それと、今回は、前回と前々回の世界のミックスの様な世界となつてますです。

どうか、お氣をつけてくださいです！」

絶対、今度会つたら、ボコボコにしてやる……。と、心に誓つた。  
・・答だ。

オレは、いつもの様に目を覚ました。すると、そこは、見慣れた我が家だった。とは言っても、とても似ている別の世界なのだが・・・そして、よく回らない首で、辺りを確認した。

ミコト「リュウ？もう目を覚ましたの？」

と、オレの顔を覗き込んできた顔は、約七十年振りに見る、こっちの世界の母さんの顔であった。

すると母親の後ろから足音が聞こえてきて、横引きのドアが開いた。

イタチ「もう起きたのかい？母さん。」

ミコト「あらイタチ。父さんとの朝修行は？」

イタチ「ああ、もう終わったよ。」

ミコト「そう、お疲れ様。お腹減ったでしょう？朝ご飯作るからちよっと待ってて。」

と言に残すと部屋を出て行った。するとイタチが止めようとする。

イタチ「あつちよつと母さん！リュウは？」

その返事は、「少しの間相手をしていて。」というものだった。

イタチ「わかったよ、母さん。」

その１年後・・・。

やはり、精神エネルギーの方は、そのまま引き継げたみたいだったが、体が赤ちゃんなので、身体エネルギーは、またもや、１からやらないと駄目そうだった。そこで、前回と同じように、最初の内は、影分身数体出して森の中に隠して、身体エネルギーの経験値を得るために活動させた。そして、身体エネルギーが、どんどん大きくなっていったら、次第にその数も増やしていった。

そして、また１年後・・・。

前回とほぼ前と変わりなく発動させる事が出来る様になつた。が、術の規模が、大きすぎるものに関しては、試していない。あと、家族には、見せていないが、写輪眼と万華鏡写輪眼も使えている。ただ、万華鏡写輪眼の方の術は、チャクラ消費が高いので、試してはいない。が、多分出来るだろうと、推測している。

そして、またまた１年後・・・。

フガクとイタチとオレで、朝の修行が始まった。その時は、写輪眼は、使っていたが、万華鏡写輪眼は全く使わずにやっている。今、開眼させてしまったら、危険視されたり、後にクーデターに参加させられると思ったからだ。そして、そんな日が続いていた、晩の事だった。もうそろそろ、日向家で、ヒナタの誘拐が、起こるだろうと、考えていた時、影分身が、自分で術を解いて外の状況を教えてくれたのだった。それは、緊急事態だった。もっとも、予期してい

たが・・・。そして、オレは、前に兄貴と、木ノ葉の里を散歩したときに、目を盗んで、飛雷神の術式をあちらこちらに貼っておいたのを使って、雲隠れの忍頭が、逃走用ルートに近い場所に貼っている術式の場所にまで飛んでいった。

## 飛雷神の術

それから、小1時間経った頃、やっとヒナタを抱えている雲隠れの忍頭がやってきた。今は、月も雲に隠れていて、姿がこちらからもあちらからも見難い。そこで、奇襲を掛ける。

土遁・心中斬首の術

『ズズズ・・・』という音と共に忍頭が、地中に埋まって、ヒナタは地面に投げ出されるような形となった。その隙に、ヒナタを保護した。そして、その時には、忍頭は、地中から力任せに、這い出していた。

忍頭「何者だ!？」

そう言つて、忍頭は、オレの目を見て、動きを牽制している。これは、都合が良い。そして、万華鏡写輪眼を開眼させた。

月読

リュウ『これから、96時間、お前を灼熱地獄の中に陥れて、刀やクナイで突き刺す。

これが、幻術だとおもつて、高を括らないほうがいい。空間も、時間も、質量も、

全てはオレが支配する。』

月読の世界では、とても長い長い96時間を過ごして頂いた。この計画の黒幕などは、全て知っているから、別に聞きはしなかった。

そして、オレは、一足早く現実世界に戻ってきた。その後、直ぐに、忍頭は精神崩壊を起こして倒れた。

そして、ヒナタを抱えていると、やっとヒザシがやって来た。

ヒザシ「はあはあはあ・・・?! どういう事です? これは・・・。」

当然といえば当然だろう。忍五大国の内の雷の国、雲隠れの里の忍頭が、3歳の子供に踏んづけられているのだから。

リュウ「ヒナタは、無事だよ。」

ヒザシ「ありがとうございます。」

と言って、ヒナタをヒザシに渡した。そして、その頃には、他の日向分家の人々が、オレの周りを囲んでいた。また、この状況か・・・。

ヒザシ「君には、話も聞きたいけど、お礼もしたいんだ。付いて来てくれないかな?」

リュウ「話は、この忍頭に直接聞くと良いよ。殺さないで、精神崩壊に留めておいたからさ。」

じゃ、これにて『ドロン』。」

『ドロン』と言った後に、煙玉と飛雷神の術を使って、瞬時に家に戻った。

その日は、夜中に外出していると、バレなかった。・・・と、思ったのだが、兄イタチには、気づかれていて、問い詰められたが、その時は、適当に誤魔化して終わった。

しかし、翌日には、昨日の日向の事件が木ノ葉の里に知れ渡っていて、それは、当然イタチの耳にも入っていた。その敵の忍頭を倒した時間と目撃された3歳程度の子供、そして、凄過ぎる幻術の3点を合わせられると、その日の内に、イタチはその3歳の子供が、オレだと気づき、里の上層部と日向家も気が付いてしまった。が、しかし、簡単な事情聴取のみで終える事が出来た・・・。

それから、暫くの間は、朝は兄弟で修行（たまに父も参加）。昼は日向家へ行き、ネジやヒナタと軽い修行。時々、ヒアシやヒザシも相手をしてくれる。夜は、影分身に委託。という、流れで、着々と身体エネルギーを溜めていった。

それから、数年が経って、オレは、アカデミーに入学した。アカデミーに入学してからは、日向家に通う事も段々と少なくなっていた。・・・それから間も無くの事だった。うちは一族が、滅ぶのは・・・そして、とある日の夕方。確か、今日だったよな。と思っていたオレは、さっさと帰宅した、そして、イタチを探した。すると、直ぐに見つかった。

イタチ「今日は早いんだな、リュウ。」

その表情から、読み取れるものは無いが、決断が鈍るっている事は、間違いない。

リュウ「兄貴の仕事の手伝いをしようと思って。これから、皆を殺すんでしょ？木ノ葉の為に。」

図星をど真ん中ストレートに、決められてたイタチは、柄にもなく表情を変えた。

リュウ「オレには、うちは一族が考えている事も、木ノ葉が考えている事も手に取るように分かる。

もちろん兄貴の考えている事もね。だから、痛みは分けようよ、兄貴。じゃあ、オレは、



西側をやるから、兄貴は東側ね。」

その答えは、待たずに、予め仕掛けてあった、飛雷神の術式の場所に 飛雷神の術 で飛んでいき、 口寄せ・雷光剣化 で、太刀の龍刀・劫火を呼び出し、一族を容赦無く殺していった。その際は、2人とも返り血を一滴も浴びることなく、終えた。そして、全てが終わったときに、自宅の前で、対峙していた。

イタチ「リュウ……。お前は、どこまで知っていたんだ？」

リュウ「ある程度、全てだよ。オレが、3歳の時に雲隠れの忍頭を倒した際に、少しは、

気づいたでしょ？オレは、普通じゃない事くらいは。」

イタチ「まあな。」

リュウ「里は、これから、何とかする。だから、兄貴は、安心してマダラの監視に行きな。」

オレの口から、うちはマダラの名前が、出た事に驚いてはいたが、それに関しては、何も言わなかった。

イタチ「お前の手を汚す事になって、申し訳ない。オレの弟だから、大丈夫だとは、思うが、

何か遭ったら、心の中で、オレを呼べ。きっと助けに行くさ……。

……じゃ、達者でな。」

そう言うと、月夜に紛れて消えていった。

それから、数日が過ぎたある日の事である。その日は、日向家に遊びに行っていた。何となくの気分で寄ってみたのだ。すると、そこには、ネジがいた。

そこには、ネジがいた。

ネジ「なんだ、リュウか。」

リュウ「久しぶり、ネジ。早速なんだけど、相手してくれる？」

ネジ「フツ・・・いいだろう。」

と、かなり上から物を言われている気もするが、それは気にしない事にする。まあ、1つ年上でもあるしな。

それからチャクラを使わずに、柔拳のみで戦って、汗をかいた。そして、別れ際に、

ネジ「明日は、面白い事があるそうだ。」

そして、その面白い事があるらしい翌日。

オレは、いつもの様に、アカデミーへ行っていた。そして、何の予告もなしに、野外演習をする事が伝えられる。そして、その引率者として、現在の下忍が、特別に呼ばれていた。ネジが、言っていた事は、この事か……。すると、イルカ先生が、説明を始めた。

イルカ「今回の野外演習は、1泊2日のサバイバル演習で、各班は、タクラミ山の山頂に

隠してある、巻物を取って里に帰ってきたら、この演習は、

終了となる。ただし、

巻物は、1つしかないから、他の班とは争奪戦になるぞ。

途中我々教官が扮した、

仮想敵忍者や、トラップなどの妨害もあるから、気をつける。生徒は、班長の言う事を、

ちゃんと聞いて、決して無理はしないように、がんばって来い。」

そして、班分けされた、班会議に参加させられる事となった。そして、その班員が、また面倒事を起こしそうな奴等の集まりだった・・。

ヒナタ「あ、あの、どうするのでしょうか？班長さん。」

ヒナタが、「班長さん」と呼んだ人物は、オレも良く知るあの人であつた。

テンテン「勝つための方法は、2つよね。1つ目は、一番早く取つて、そのままゴール。2つ目は、

どこかの班が、持ってきた巻物を狙って横取り。ねえ、どっちにする？リュウ君。」

と、顔を近づけてきた。この顔の超どアップには、慣れてはいるのだが、今は、周りに危険分子達がいっぱいいる為、色々と危な過ぎる。

サクラ&いの「顔近付けすぎ!!!!」

サクラ「(しゃんなるお!!私もあそこまで近づいた事ないのに!!!!!!)」

いの「（これは、あの女にリュウ君の童貞を盗られかねないわ！！）  
」

とりあえず、五月蠅い方達は、スルーさせていただく事にする。

リュウ「正攻法で、チャツチャと巻物取りに行こう。」

結局その後も、オレの判断で、物事が決まっていた。つーか、テンテン・・・班長の仕事くらい、しっかりやれよ。

それから、テクテクと歩いていき、陽も落ちてきた頃にようやく休憩になった。そして、今は、狭すぎるテントの中だ。ただでも狭いのに、暴れてもらいたくは無いのだが・・・。

そして、テントの中では、女の争いが巻き起こっている。

テンテン「じゃ、リュウ君 私 ヒナタ いの サクラの順で、寝ようよ。」

それが、引き金だった。

サクラ「リュウ君の隣は、私が！」

いの「何、言ってるのよ?!このデコリンが！」

サクラ「何よ!イノブタア!!」

と、視線と視線がぶつかる所で、火花を散らしている。

ヒナタ「あ、あのお、そのお、私なら幼馴染でもあるし。だから、隣は、私が……。」

いの&サクラ「アンタは、黙ってて!!」

2人の鋭く尖った視線と言葉に、ヒナタは呆気無く、ノックダウンしてしまった。

それから口論は、暫く続いたが、結局、先輩命令が通り、最初にテンテンが、提案した順で寝る事が決まった。

そしてその夜の事である。

ついさっきまでテンテンは、寝返りを打ってどんどん接近してきていた。そこまでなら、まだ良かったのだが、とうとうオレの体と当たると、オレを抱き枕のようにして寝始めたのだった。

テンテン「ううん……。」

そして、軽く甘えるような感じの声……。

リュウ「これって、確か……。」

そう、テンテンが、夜の”あれ”を求めるときの常習手段、合図と同じものだった。

リュウ「あれ……だよなあ。」

でも、ここは世界が違うし身体年齢的にも、まだ不味いだろう。しかも、もし仮に、本当に求めているとしても、この状況下でののは、自殺行為に等しい。という訳で、

リュウ「……気にせず寝るか。」

という結論に達した。しかし、翌朝。オレは、悲鳴に近い叫び声で、目を覚ますことになった。それは、もちろん、サクラとヒナタ、いの3名の声で、理由は簡単、昨晚の状況を思い返してほしい……。そう、テンテンがオレを抱き枕のようにして、オレと超密着して寝ていたからだった。

そんな、こんなで、班内は荒れに荒れ狂い、それは、大変なことになった。それを何とか鎮火し終えたと思った時には、他のチームが、巻物を手にしたという合図の花火が上がっていた。

そこからの巻上げが早かった。テンテンは、ここぞとばかりに、他のチームの帰り道に、トラップを仕掛けまくるし、ヒナタは、白眼で他のチームの動向を探る。いのとサクラは口喧嘩で、オレはオレで、色々と頑張った。そして、何とか結果は1位だった。テンテンが、班の代表として、表彰状的な、紙を授与していた。

それから、時は流れ、卒業試験も終えた。合格者が集められてスリーマンセルのチーム編成発表となった。するとそこには仲の良いメンバー達が、集まっているのだった・・・。



神様が言っていた、オレに近い存在の方も迷い込んでしまった現場。

ナルトside

イルカ「卒業・・・おめでとう」

俺は、何がどうなっているのか分からなかった。この言葉は、イルカ先生に、木ノ葉の額当てを貰った時に、聞いたセリフだ。そして、ポカンとしていると、

イルカ「よし！卒業祝いだ！一楽のラーメン奢ってやるぞあ！」

・・・やっぱりだってばよ。って事は、ここに来る前の白い空間で、出会ったあのちっこい奴が、本当に神様で、俺の精神だけを過去に飛ばしたんだな・・・。  
そして、今は懐かしいテウチが作った一楽のラーメンを食べに向かった・・・。

それから1週間が過ぎ、スリーマンセルのチーム編成発表会の日となった。そして、そこには懐かしい小さい頃の仲の良いメンバー達が、集まっているのだった・・・。

シカマル「あれ？何で、ここにお前がいんだよ？今日は、卒業生だけの説明会だぞ。」

とか、

キバ「マグレ合格に決まってるあ！」

とか、軽く小馬鹿にしたような、言葉が多く投げかけられたが、

リュウ「分身のテストだったのに、受かったんだ。」

と、リュウは、普通に言ってきた。だから、この時期はまだ仲良くなってないけど、最近のサスケの様子でも聞いてみようと思った。

ナルト「最近、サスケの奴どうなんだってばよ？」

すると、周りの視線が一気に変わった……。

リュウside

ナルト「最近、サスケの奴どうなんだってばよ？」

すると、一気に周りの視線が、『はあ？何言ってるんだ……コイツ』という物に変わった。だけど、オレは、これで確信になった。オレに近い存在のという奴が。すると、キバが、

キバ「おい、サスケって誰だよ？ナルト。」

その当然の疑問に、ナルトは顔を真っ青にして、言い訳を始めた。そんな、ナルトを引っ張ってトイレに連れ込んだ。

ナルト「何するんだってばよ!? リュウ!」

それは、無視無視。

リュウ「さてと、まずは他の奴らに聞かれないために……、万華鏡写輪眼!」

月読

そして、月読の世界へと引きずり込んだ。

ナルト「何するんだってばよ?!」

リュウ「単刀直入に言う。お前、前の世界の記憶を持ってるな?」

すると、明らかに表情に出して、

ナルト「な?! 何言ってるんだってばよ? 言ってる意味が、全然分かんないってばよ?」

リュウ「ついでに、お前の精神がこの世界に来たのは、アカデミー卒業試験から今日までの間だ。

どうだ、違うか? 六代目火影様。」

すると、やっと自分の口から認めた。

ナルト「……そうだってばよ。」



ナルト『そうだってばよ。・・・ああ！！って事は、お前も！！』

相変わらず、一言一言大声で、五月蠅いな……。でもまあ、

リュウ『察しの通り、オレもナルトと同じ感じだ。』

ナルト『やっぱな！最初からそうだと思ったんだってばよ！』

絶対、気づいてなかったな、コイツ。それは、置いとして、

リュウ『ところで、こっちにきてから九尾とは、会話できるのか？』

ナルト『いや、それが全然出来なくて困ってたんだってばよ。』

リュウ『なら、一回この幻術を解いてから、オレの写輪眼で、お前の精神世界に入り込む。』

九尾と仲直り出来るくらいの手助けはするよ。』

ナルト『マジか！サンキュー！リュウ！』

そして、月読を解いてから、ナルトの精神世界に行って、九尾とナルトの仲介までをすると、オレとナルト揃って、教室に戻っていった。すると、ちょうどイルカ先生も入ってきた。

そんな様子を上忍の先生方と三代目火影は覗き見（？）していた

上忍「あれですね？今年のナンバーワン・ルーキーのうちはリュウは……。」

三代目「そうじゃ。」

紅「例のうちは一族の生き残り……。」

その中で一人意味深に心の中で呟いた

(……うずまきナルトか……)

場所は戻り説明会会場……。

それから間もなくして、イルカ先生のとてもありがたしくいしかし面倒くさくお話が始まった。それは、オレとナルトが寝ている間に終わりやつと班分けを発表し始めた。

イルカ「第7班……うずまきナルト、春野サクラ……うちハリュウ。……次、

第8班……日向ヒナタ、犬塚キバ……油女シノ。第9班……

そして最後、第10班……山中いの、奈良シカマル、……秋道チョウジ。」

そして、昼ご飯を食べるための昼休みの後、それぞれの担当上忍が、クラスに迎えに来て、生徒の数は、どんどん減っていった。そして、残るのは、第7班のみとなっていた。

その昼休みの間に、ナルトと話した所、なるべく前の世界通りに事を運ばせたい。という風に言ってきたから、オレはそれを許可した。

そして、ナルトが、黒板消しトラップを作り上げた。

すると間も無く少し開いているドアに手が見えた。そして・・・

『ポトン』

黒板消しが入ってきたカカシ先生の頭に直撃した。

『カタン』

そしてキレイに地面に落ちた。

ついでにナルトは馬鹿みたいに「ギャハハハ！」と指を指して笑っている。

そしてついにあの名ゼリフをカカシ先生が第一声として発した。

カカシ「んゝ何て言うのかな。お前らの第一印象は・・・嫌いだ。」

場所を移して今はアカデミーの屋上

カカシ「あゝまずは自己紹介からしてもらおうかな。」

サクラ「自己紹介ってどんな事を言えばいいの？」

と普通に疑問に思ったことを聞く

カカシ「そりゃあ好きなもの、嫌いなもの。将来の夢とか趣味とか・  
・ま、そんなのだ。」

しかしナルトも黙ってはいない。「名を聞くときはまずは名乗れ」  
的な趣旨のことを言い

まずは、先生からの自己紹介となった。

カカシ「じゃあ俺からか？俺の名前は、はたけカカシって名前だ。  
好き嫌いをお前らに教える気はない。将来の夢って言うて  
もなあ。趣味は・・・色々だ。」

サクラが話しかけてきたが軽く無視し、ナルトとサクラとオレの順  
で自己紹介をすることになった。

ナルト「俺さ、俺さ、うずまきナルト。好きなものはカップラーメ  
ン！」

もっと好きなのは一楽のラーメン！嫌いな物はお湯を入れ  
てからの3分間！



趣味はラーメンの食べ比べ！んで将来の夢は・・・火影を越す！！

で、もって里の奴ら全員に俺の存在を認めさせてやるんだ！」

カカシ「はい、次。」

サクラ「春野サクラです！好きなもの・・・というよりは、好きな人は」

熱い眼差し・・・

サクラ「でえ、・・・将来の夢は」

またもや、熱い眼差し、

サクラ「って感じでっす！」

その視線、ナルトに向けてやってくれ、将来のナルトの奥さんよ。きっと、ナルトが悲しんでるぞ。

カカシ「次。」

リュウ「オレは、うちはリュウ。好きなもの・・・（家族だよなあ）。嫌いなもの・・・うん。」

将来の夢は、うちは一族の復興。」

カカシ「（女の子は、任務より恋だな。）・・・よし、明日から任務やるぞ。」

するとナルトは待ってました！！と言わんばかりに目を輝かせている。

カカシ「まずはこの四人だけで任務をやる。それは・・・サバイバル演習だ。」

やはりと言うかサクラは‘演習’という言葉に突っかかってくる。が、ここもやはりスルーをする。

ナルト「どんな演習をするんだってばよ？」

と、とぼけている。すると不気味に笑い出すカカシ

サクラ「何が可笑しいのよ？」

との問いには答えずに

カカシ「いや・・・俺がこれを言ったらお前ら絶対引くから。」

そう言ったのにも関わらずカカシは話を続ける。

カカシ「卒業生27名中、下忍と認められるのはわずか9名。残り18名は再びアカデミーへ

戻される。つまりこの演習は脱落率66%以上の超難関テストだ。」

サクラの表情が固まった・・・

カカシ「ほらあく引いたあ！

という訳で、明日朝5時第3演習場集合！あ、忍び用具一

式持って来い！

・・・あと、朝飯は抜いて来い・・・・・・・・吐くぞ。」

とりあえず、何で朝飯抜きと言ったかは、知っているから、朝飯は絶対に食ってから行こうと心の中で決心していた。

翌日の朝5時

みんな眠そうな眼で集まった。しかし集合時間を過ぎてもカカシがやって来る気配は無い。それから1時間また1時間と、ただただ時間だけが過ぎていった。そして、挨拶がもう「こんにちは」になる頃にやって来た。しかも悪びれることなく「目も前を黒猫に横切られて」とか言ってる。それに対してサクラは、ブチ切れているが、ナルトとオレは、内心でクスクスと笑ってみていた。そして、その間にも話は進んでいった。その内容を簡潔にすると、12時までにカカシ先生から鈴を取らなければいけなく、もしも取れなかったら弁当を目の前で食べられるという半ば拷問のような罰ゲームが用意されているという事だった。そして演習開始の合図が……今出された。

カカシ「殺す気で掛かって来いよ。よい……スタートオ!!」

ナルト「螺旋丸!!」

その合図で、ナルトがいきなり 螺旋丸 をぶっ放した。……おいおい。

カカシ「（これは、先生の術?!）」

もちろんナルトは、本気ではやってない。だから、ギリギリのところで、避けられた。ナルトが、実力を少し見せるんだったら、オレも良いよな？

リュウ「ナルト！伏せる！」

と、指示したら、ナルトは地中に潜った。これならちょうど良い。

### 火遁・豪龍火の術

その術は、カカシ先生の擦れ擦れの場所を通って、後方の森へと突っ込んでいった。

カカシ「（コイツら、既に下忍レベルじゃないな。イチヤイチヤパラダイスを読む暇が無い。

とか言う、レベルの話じゃないぞ。）」

そんな事を思っていると、ナルトが地中で術を発動させた。

### 多重影分身の術

すると、地面が『モコモコ』つとしてきて、一斉にカカシ先生に殴りかかった。しかし、それを難なく 変わり身の術 で、回避された。

ナルト「俺の影分身ごとやれつてばよ！リュウ！」

んな事、言われなくても分かってるっの。

### 風遁・大突破

その風は、大蛇丸並の風の強さには抑えてあったが、下忍のレベルには程遠いかった。

カカシ「（何て、風の強さしてやがる！）」

そして、風を止めた時には、カカシ先生を前後を挟むようにして、オレとナルトが立っていた。

ナルト「カカシ先生ってば、まだ本気出してねーよな？」

リュウ「カカシ先生の写輪眼。見せてくれよ。」

カカシ「いやぁね、正直ここまでやるとは、思ってたから、お前ら。でも、良いだろう。」

そして、カカシ先生が、額当てを正位置に戻した。それと同時にオレも発動させることにする。

## 写輪眼

写輪眼

ナルト「へへっ！やっと本気になったってばよ！」

リュウ「行くぞ、ナルト！」

ナルト「おう！！」

すると、カカシ先生が、火遁・豪火球の術を発動させた。そこで、オレは 水遁・破奔流 を、ナルトは 風遁・螺旋丸 を発動させて、颶風水渦の術 で、対抗した。

カカシ「（コイツ等の実力もそうだが、コンビネーションも抜群に冴えてるな。）」

そこにナルトが、桜花衝 を叩き込もうとしたが、写輪眼で見切られた。しかし、避けた先には、オレが既に先回りしていた。

カカシ「何！？」

火遁・螺旋丸

もちろん、急所は外すようにして、当てた。が、流石はカカシ先生。瞬時に、瞬身の術 を使って、何処かに身を潜めた。

今までの戦いを草陰からずっと見ていたサクラは、自分が場違いの

ような気がしてきていた。そして、ナルトが、あまりにもイメージと掛け離れている事にも驚いていた。すると、突然背後に気配がしたのだった。

サクラ「きゃあ！カカシ先生！？」

その時には既に、 魔幻・奈落見の術 に掛かってしまっていた。そして、数秒後には、第3演習場内に、サクラの悲鳴が響いていた。

ナルト「今の悲鳴は、サクラのだってばよ！」

そう言うと、1人で突っ走って行ってしまった。まったく、自分の妻の事になると、甘いんだから……。と内心毒づきながらも、それを追うようにして、ついて行った。

解

ナルトが、今サクラの幻術を解いたところだ。

サクラ「あれえ？どうしちゃったてんだろ。・・・私。」

ナルト「大丈夫か？」

リュウ「サクラも呆けっと思ってないで、手伝えよ。」

サクラ「うっうん。」

そして、作戦を軽く考えてから、それを実行に移すのだった……。その頃、カカシ先生は、視界の開けている野原みたいな場所にいた。



そして、サクラがまず動いた。

サクラ「勝負よ！」

そう言っていると、数枚の手裏剣を先生に向かって投げた。

カカシ「そんな、馬鹿正直に來てもダメでしょ。」

と、言った瞬間に、サクラの放った手裏剣の数が膨大な数に増えた。

カカシ「（手裏剣影分身か。やったのはどっちだ？ナルトか？リュウか？）」

しかしそれを、 土遁・土流壁 で身を守った。

雷遁・螺旋丸

『ドドドオオ』という音を立てて、カカシ先生の 土遁・土流壁 を壊した。そして、その瞬間にナルトが、まるで亡き父、四代目火影・波風ミナトのような速さで、鈴を奪ったのであった。

それには、カカシ先生も今まで以上に驚いていたし、心から参ったとも思っていた。

カカシ「うん。ホントに俺から鈴を奪うとは思ってもみなかったけど、やるねーお前ら。

チームワークもまあ良かったし、第7班は全員合格だな。」

サクラ「やったあ！！（愛は勝つ！しゃんなるー！！！！）」

ナルト「やったってばよ！」

すると、カカシ先生が、語り始めた。

カカシ「任務は班で行う。確かに忍者にとって卓越した技能は必要だが、

それ以上に重要視されるのは『チームワーク』だ。『チームワーク』を乱す個人プレイは

仲間を危機に落とし入れ、時には殺すことになる。

そして、任務は命がけの仕事ばかりだ。・・・これを見る。この石に刻まれている

数多くの名前。これは全て里で英雄と呼ばれている『殉職』した忍たちだ。」

リュウ「だから、この試験の答えが『チームワーク』だった訳か。」

とりあえず知っていたが、とぼけておく。

カカシ「そうだ。でも。お前らは、天然でそれを知っていた。それ

は、誇って良いものだぞ。

忍の世界でルールや掟を破る奴はクズ呼ばわりされる。

・・・けどな！仲間を大切にしない奴は、それ以上のクズだ。

これにて演習終わり！全員合格！第7班は明日より任務開始だあー！！」

そして、解散した後の新人下忍を担当する上忍の報告会での事・・・。

三代目「次・・・第7班、カカシの班はどうじゃった？」

カカシ「はい。実は、アカデミートップの成績を残した、うちはリユウと逆にアカデミーでの

成績は最下位だった、うずまきナルトの2名にしてやられました。」

その発言に、その場にいた誰もが驚いた。それもそのはず、天才忍者『コピー忍者のカカシ』とまで呼ばれた男が、下忍候補生にしてやられたと認めたのだから。そして、次のカカシの発言で、驚きが驚愕に変わった。

カカシ「しかも、ナルトもリユウも四代目火影様が遺した、あの『螺旋丸』を使いまして、

それに、ナルトに関しては、四代目火影様に匹敵するくらいの速さも・・・。」

そして、驚愕から疑惑やそう言った負の感情を芽生えさせる上忍も中にはいた。そう言った人に対して、イルカが、

イルカ「ナルトは、悪人やスパイではないですよ!」

と、説得し始めた。それに対して三代目は、

三代目「そんな事は、分かっておる。じゃが、アヤツが怪しいという事実は変わらん。

そして、わしは里長として注意しなければならぬ。」

そんな感じで、報告会が終わった。

そして第7班として活動をし始め、早2週間が過ぎた頃、何時もの様に火影様の所へ行き任務を受注しに行った。すると、いままでDランク任務だったのだが、次に行く任務はCランク任務をするように頼まれた。そしてオレ達、第7班は、波の国へと向かうのであった・・・

カカシが集合時間に30分遅れると言うアクシデント(?)があつたものの無事一行は波の国に向け木ノ葉の里を出発した。そして暫く、歩いていると不意にサクラが話し始めた。

サクラ「ねえタズナさん・・・タズナさんの国って『波の国』でしょ？」

タズナ「それがどうした？」

サクラ「ねえカカシ先生・・・その国にも忍者っているの？」

カカシ「いや、波の国に忍者はいない。だけど、大抵の他の国には文化や風習こそ違うが、

隠れ里が存在し、忍者がいる。大陸にあるたくさんの国々にとって

忍びの里の存在っていうのは国の軍事力にあたる。つまり、それで隣接する他国との関係

を保っている訳だ。が、かと言って里は国の支配下にあるんじゃないくて、

あくまで立場は対等にあるんだがな。波の国のように他国から干渉されにくい

小さな島国なんかでは忍びの里が必要でない場合もあるしな。それぞれの忍びの里を

持つ国の中でも、『火』、『水』、『雷』、『風』、『土』の五ヶ国は、

国土も大きく力も絶大なため、忍び五大国と呼ばれている。

火の国〓木ノ葉隠れの里、水の国〓霧隠れの里、雷の国〓雲隠れの里、

風の国〓砂隠れの里、土の国〓岩隠れの里、各隠れ里の長のみが影の名を

語る事を許されている。その火影、水影、雷影、風影、土影の所謂、五影は

全世界、何万の忍の頂点に君臨する忍者達だ。ま、安心しろ。Cランク任務で、

他国の忍との戦闘なんて滅多にないから。」

サクラ「なあんだ。良かった!」

そう言ったのと、ほぼ同時にタズナの表情が曇った。それに気が付いたのは、サクラ以外のオレとナルト、カカシ先生の3人だった。

それから川沿いを暫く歩いていると、何故か水溜りがあった。霧隠れの奴等だな・・・と思いながらも無視して進んでいくと急に後方で殺気が発生した。

カカシ「何っ?!」

という言葉が発したかと思うと、先生の体はチェーンでバラバラに引き裂かれた。

その後、敵はサクラの後ろへ回り、引き続きチェーンを使おうとした時に、ナルトが 桜花衝 で、敵1人を打つ潰した。そして、もう1人は、オレが瞬時に後ろに回ってからの手刀を放った一発で、意識を失なった。

すると死んだ振り・・・ 変わり身の術 をしていたカカシ先生が、パチパチ手を叩きながらノコノコと歩いて出てきた。

カカシ「とりあえずナルト、リュウ。中々良かったぞ。」

リュウ「そりゃどうも。」

サクラはオレ達が、何の躊躇も無く敵との初戦闘をやり遂げていた事に驚いていた。

カカシ「ところで、タズナさん・・・ちょっとお話があります。」

その言葉で場の空気が少し引き締まった・・・。

さっきの忍は、カカシ先生の尋問によって拘束されている。そして、話は戻る。

カカシ「さっきの忍者は、霧隠れの中忍ってトコだ。こいつ等はいかなる犠牲を払っても

戦い続けることで知られる忍だ。」

タズナ「アンタそれを知っていて、何故ガキにやらせた？」

その言葉には若干だが、怒りも混ざっているように見えた。

しかし、カカシの話す内容が後半になっていくにつれ、その表情にも変化が現れた。

カカシ「私とその気になればこいつくらい瞬殺できます。が、私には知る必要が

あったのですよ・・・この敵のターゲットが誰であるのかをね。つまり狙われているのは

あなたなのか。それとも、我々忍のうちの誰なのか、ということですよ。

我々はあなたが忍に狙われているなんて話は聞いていない。依頼内容はギャングや

盗賊など、ただの武装集団からの護衛だったはず・・・そうになると、Bランク以上の任務だ。

依頼は橋を作るまでの支援護衛という名目だったはずですよ。敵が忍者であるならば、

迷わず高額なBランク任務に設定されたはずですよ。何か訳



ありみたいです、

依頼で嘘をつかれると困ります。これだと我々の任務外でことになりますね。」

サクラ「止めましょ？こんな任務まだ私達には荷が重過ぎるわ！Bランクって言ったら、

中忍レベルでしょ！？まだ新米の私達には、早いわよ！」

とか、言っていたが、その場で話し合い、とりあえず家までは送り届ける。その後は、また話し合いで決める。という風に決まった。まあ、そうなるだろうとは思っていたけど・・・

そこからは、船に移動した。そこでは、誰に狙われているかなどの詳細を聞いた。そしてそこで、カカシ先生が「念のために応援を要請することにする」と言つて、伝書鳩に紙を持たせて、里に向かわせた。

そんなこんなで、時間は進み無事に陸地に着いた。そしてそこから少しばかり歩いた所である。

するとカカシ先生がいきなり大声を出して指示した。

カカシ「全員、伏せろ！！」

それがまるで合図だったように、大きな刀が上空を飛んでいった。そしてその大きな刀はオレ達の目の前にあった大木に勢い良く突き刺さった。

カカシ「（あいつは確か・・・）」

へえ〜こりゃこりゃ〜霧隠れの抜け忍、桃地再不斬君じゃないですか？」

と、かなりアホな口調で話してはいたがかなり警戒をしている。

カカシ「（こいつが相手となると・・・）このままじゃちつとキツ  
イか・・・」

そう言つて、額当てを正常位に戻した・・・

再不斬「ほお噂に聞く写輪眼を早速見られるとは・・・光栄だね」

しかし、それには答えずにオレらに指示を与える。

カカシ「お前ら、卅の陣だ。タズナさんを守れ！それが、ここでのチームワークだ。」

すると、空気の読めないサクラが疑問に思っていたことを聞く。

サクラ「写輪眼って何？！」

再不斬「写輪眼・・・眼光が生み出し、瞳が発する力。所謂、瞳術の使い手は、全ての幻術、

体術、忍術を瞬時に見通し、跳ね返してしまう眼力を持つという・・・写輪眼は

その瞳術使いが特有に備え持つ瞳の種類の1つ。しかし、写輪眼の能力は

それだけじゃない。それ以上に怖いのが、その目で相手の技を見極め

瞬時にコピーしてしまうことだ。・・・俺様が霧隠れの暗殺部隊にいた頃、

携帯していたビンゴブックに、お前の手配情報が載ってたぞ。それには、

こつも記されていた・・・千以上の術をコピーした男・・・コピー忍者のカカシ！」

「サクラ」（カカシ先生って、そんなに凄い忍だったんだぁ・・・。）

とか、思っていると、戦闘は既に始まりそうだった。

再不斬「お話はこの位にしようぜ・・・俺はそのじじいをさっさと殺んなきゃならねえ」

と言われ、オレ達はそこでやっと卍の陣をとった。すると再不斬が、猛スピードで、動き始めた。

そして、どんどん霧が濃くなっていく。ついには、ほぼ、視界が無いくらいまでになった。

### 忍法・霧隠れの術

カカシ「あいつがまず最初に狙うのは俺だろう。桃地再不斬、奴は霧隠れの元暗部で

無音殺人術の達人として知られた男だ。その名の通り無音で一瞬の内に暗殺する術だ。

気がついたらあの世だったなんてことになりかねない。俺も写輪眼を全て上手く

使いこなせるわけじゃない。・・・お前たちも気を抜くな

！

オレは、少しでもこの状況を把握しようと写輪眼を使用した。

### 写輪眼

だめだ、視界が悪すぎて何もわからねえ・・・すると、再不斬の聲が不気味に響いた。

再不斬『八カ所・・・咽頭、脊柱、頸動脈に鎖骨下動脈、腎臓、心臓・・・』

さて、どの急所がいい？・・・・・・・・・・」

その言葉に、完全ビビってしまったサクラ。既にガタガタ震えている。

カカシ「サクラ、安心しろ。俺の仲間はず絶対に殺させやしないよ。」

ホッと息をついた瞬間、声の持ち主は近くにいた。

再不斬「それは、どうかな？・・・・・・・・・・?!」

オレが瞬時に放った裏拳は、見事に再不斬の顔面にクリーンヒットしたが、しかし

『ジャバーン!!』という音を立てて、消えた。すると、ナルトが、

ナルト「先生！後ろ!!」

と、その瞬間にカカシ先生は斬られたのであった・・・。

『ジャバーン』と音を立てて、カカシ先生は水になった。

再不斬「（水分身だと?!・・・あの霧の中でコピーしたっていうのか!?!）」

カカシ「動くな。」

背後にはカカシがクナイを持って立っている。

カカシ「・・・終わりだ。」

形勢逆転だ。しかし、再不斬は笑った。

再不斬「フツハツハツ・・・終わりだと?分かってねえな。

サルマネ如きじゃあこの俺様は倒せない。絶対にな!！」

と、言った瞬間にカカシ先生の後ろには、再不斬がいた。そして今まで、カカシ先生の前にいた、再不斬は既に、水と化していた。

カカシ「何ツ?!」

## 水牢の術

大きな水球が出来、その中にカカシ先生が閉じ込められてしまった。再不斬「カカシ、お前との決着は後回しだ。まずはあいつらを片付

けさせてもらっぜ。」

## 水分身の術

そう術を発動させると、水分身が3体出てきた。

再不斬「額当てまでつけて忍者気取りか。だがな、本当の忍者ってのはいくつもの死線を

乗り越えた者の事を言うんだよ。つまり、俺様の手配書に載る程度になつて

初めて忍者と呼べる。お前らみたいなのは忍者とは呼ばねえよ。」

と言ったと同時に、水分身が、オレ達に向かって攻撃してきた。

ナルト「リュウ！」

リュウ「おお！」

## 影分身の術

## 変化の術

ナルトが、影分身の煙に乗じて、本体が風魔手裏剣に変化した。

そして、再不斬の水分身をオレ達の影分身が倒すと、ナルトが1体を残して影分身を解いた。そして、オレも影分身を解いた。

再不斬「やるな、小僧。」

そんな発言は、無視して次の動作に移った。

## 風魔手裏剣影風車

そして、オレは、自分の風魔手裏剣を上にも、ナルトの変化を下にし  
て、影手裏剣の要領で、再不斬を狙って、投げた。しかし、オレの  
風魔手裏剣は避けられ、ナルトが変化した風魔手裏剣も避けられた。  
再不斬「だが、やつぱり甘い。」

そして、ナルトの変化した風魔手裏剣が、再不斬を通り越すと、ナ  
ルトが変化を解いた。

### 螺旋丸

と、再不斬が 水牢の術 に触れているほうの腕目掛けて放った。  
再不斬は、それを避ける為に、カカシ先生を閉じ込めている 水牢  
の術 を解かざるを得なくなった。

再不斬「ハッ・・・ついカッとなって術を解いてしまつとはな！」

カカシ「術は解いたんではない・・・解かされたんだ。」

その言葉にもカッとなる再不斬。

カカシ「言っておくが、俺に二度同じ術には掛からない・・・ど  
うする」

と、言った途端に間を取り印を結び始めた。そして同時に

### 水遁・水龍弾の術

術を発動させ、相殺させた。





水遁・水龍弾の術

術を発動させ、相殺させた。そして、その間にオレは、

水遁・水牙弾の術

で、再不斬を殺す勢いでぶっ飛ばした。そして再不斬の体は木にぶつかり静止した。

カカシ「・・・終わりだな。」

再不斬「写輪眼を持つてる、お前らには未来が見えるのか？」

カカシ「ああ・・・お前は死ぬ。」

その時だった。再不斬の首に千本が刺さったのは

？「ふふ・・・死んじゃった。」

その言葉を確かめるように、カカシ先生は再不斬の首に手を当てた。

カカシ「確かに死んでいるな・・・お前は、霧隠れの追い忍だな」

？「流石ですね。よく知っていらっしゃる。」

カカシ「（背丈や声からしてナルト達と差ほど変わらないな）」

？「あなた方の戦いは、一先ずここで終わりでしょう。僕は、この死体を

始末しなければいけません。何かと秘密の多い体のもので・・・それじゃあ、失礼します。」

そうして、追い忍部隊の忍者は消えていった。そして、気が付けばいつの間にかカカシ独自の額当ての仕方に戻っていた。

カカシ「俺達の任務は終わった訳じゃない。タズナさんを取りあえず家までは、送り届けるぞ」

タズナ「みんな！超悪かったのう。わしの家でゆっくりしていけ！  
ワハハハハ」

カカシ「よおし！元気良くいくぞ！！」

とは言ったものの、パタリと倒れてしまった。

サクラ「カカシ先生ええ！！！！！！」

とヒステリックな叫び声をあげているが、オレは直ぐに気絶しているだけだと分かり、ナルトと協力してカカシ先生をタズナさんの家まで運んでいった。

家に着いたら、お言葉に甘えて『超』ゆっくりさせてもらった。そして、数時間が経った頃にカカシ先生は、ようやく目が覚めた。

サクラ「写輪眼ってすごいけど、そんなに疲れるんだったら考え物よね」

リュウ「いや、それはカカシ先生がうちは一族じゃないからだよ。」

サクラ「え？どうゆうこと？」

全く分からない。と言った感じでたずねるサクラに、オレは説明に入る。

リュウ「写輪眼はうちは一族の血継限界で、しかも一部の人間にしか開眼できない

特異体質なんだ。それを、何でカカシ先生が、持っているのかと言うと、確か、

うちはオビトさんからの上忍祝いのプレゼントだったっけか？」

そのオレの言葉に、カカシ先生の表情が一瞬曇る。それから、少し話題を逸らすように違う話をナルトがし始めた……。

その翌日の夜、晩飯を食って寝ようとしたら、玄関の戸を叩く音が聞こえ、その後、カカシ先生に呼ばれた。すると、そこには、木ノ葉の額当てをした、忍者2人と変態2匹がいた……。

そこには、木ノ葉の額当てをした、忍者2人と変態2匹がいた・・・。  
すると、いきなり忍の内の1人がオレに飛び込んできた。

リュウ「うわっ！」

テンテン「久しぶりい、リュウ。」

その様子を見ていた、サクラが、

サクラ「そんなのダメエ！！（私なんか、まだ体に触れたこともないのに！！しゃんなる！！）」

と、言って激怒して、オレとテンテンの間に割り込もうとしてきた。  
すると、いきなり、変態（大）が話し始めた。

ガイ「青春してるな！お前ら！！テンテン！お前も青春を満喫してるんじゃないか！！」

アッハッハッハ・・・。おっと、自己紹介をしていなかったな、俺の名は、マイト・ガイ！

第3班の上忍だ。そして右から・・・。」

リー「僕は、木ノ葉の美しき碧い野獣ロック・リー。貴女の名前は？」

と、いきなりテンテンと未だ争っているサクラに話を振った。サクラは驚いて、しかもかなり引きながらも名前を言った。

リー「春の野原に咲くはサクラの花、その姿は儚く、されど綺麗な花・・・美しい貴女に

とてもふさわしい名前です。」

オレとナルトは、笑わずにただで殺されそうだ。腹が痛い・・・。その様子をオレの隣で見ている、テンテンは「あちゃ〜」という表情をしている。そして決め手は・・・、

リー「僕とお付き合いしましょう！死ぬまで貴方を守りますから！！」

サクラ「ごめんなさい！！！」

と、即答。それには、流石にオレもナルトも我慢できなく、吹いてしまった。沈んでいる「野獣」は放って置いて、次はテンテンが、自己紹介をした。

テンテン「私は、1期上のテンテン。リュウとは、所謂許嫁みたいな仲で、」

と、ふざけて・・・多分ふざけて言った事により、サクラとの喧嘩がまた勃発したから、・・・飛ばして、次のネジ。

ネジ「日向ネジだ。リュウとは、小さい頃からの顔馴染みだ。」

すると、今まで沈んでいた「珍獣」が動き出した。

リー「今、ここで僕と勝負してください。うちはリュウ君！」

・・・・・・始まったよ、コイツの悪い癖。

リュウ「悪いけど、パス。オレは、今から・・・・・・  
寝る。」

そう宣言して、寝室として借りている2階の部屋へと向かった。そして、オレ以外の全員の挨拶を一通りした後・・・・。

リー「（この人でしたか。ガイ先生の永遠のライバルと言うのは・・・・）」

テンテン「（ビジュアル的にはガイ先生の完敗ね）」

ネジ「（コピー忍者のカカシか・・・・）」

と、上記の通り三者三様に思うことがあった。

ガイ「ところで、カカシ。お前の所の下忍はどうだ？少しは強くなつたのか？」

カカシ「ん？まあな」

ガイ「どのくらいだ？」

カカシ「ん？リュウとナルトは、実力をまだまだ隠している。ま、今のところ言えるのは、

優にそんじやそこらの中忍は、超えているだろうな。」

ガイ「ぬぁに?!」

・。そんな会話が行われている中、オレは上でチャツチャと寝ていた・。



翌日の朝。オレは機嫌がなかなか悪かった。なぜなら、叩き起こされたからだった。しかも、あの変態（小）に。その後、何時の間にかオレの布団の中に潜り込んでいた、テンテンによって謝られたのだが、あまり機嫌が改善されたという訳では、なかった。

リー「リュウ君！僕と勝負してください！」

・・・げっ！・・・面倒なことになってきたな。

カカシ「行つてこい。リュウ。」

行きたくはあまり無かったのだが、背中を押されてしまったが為に、行かざるを得なくなってしまった。そして、森のほうへチャッチャと歩いて先に行くと、何故だか他のメンバーまでついて来てしまった。

テンテン「それじゃあ、よいいスタート。で始めね。・・・よいい・・・スタート！」

その合図と共に、リーは、真っ直ぐに突っ込んできた。そして、直ぐに拳が飛んできたが、それを難なく受け止めた。

リー「何！？（受け止められた・・・。）」

そして、驚いている間に、オレは次の動作に入った。リーを思いつきり蹴り上げて空高く飛ばしたのだ。そして、それから 影舞葉

で、リーを空中で追尾。・・・そして、『バキ!』『ボコ!』『バシ!』の3テンポで叩き落した後、ラストを飾る。

### 獅子連弾

その動きを終始見入っていた、ガイはかなり驚いていた。そして、何故か自分から進んで審判をしているテンテンが、気絶をしている、リーのところにまでやって来た。

テンテン「あちゃー、これは完全に伸びちゃってるわね。（全く、世話が掛かるわね。）

・・・しっかりしなさいよお！リー！！！！」

と言いながら、気絶しているリーをブンブン振っている。多分、介抱のつもりなのだろう。

そんな様子を傍目に、ネジが近づいてきた。

ネジ「俺も久しぶりに、お前と手合わせをしたい。」

そういえば、ここ1年くらいは、オレが日向家に遊びに行っても、ネジは任務で擦れ違うことが良くあり、それ故に組み手をする機会もなかなか無くなっていたのだった。

テンテン「ちよっとおネジ？リュウも流石に朝何も食べないで、リーの我俣に付き合わされて

お腹減っちゃったと思うからさ、また今度にしなさい。」

と、腰に手をかけて軽く説教っぽい事をしているが、

リュウ「じゃあやるか。」

と言って流してみたら、案の定「折角、気使ってあげたのにさあ」的なオーラを放ち始めた。でも、腹減ってきたから、遊ばないでチャッチャと終わらせよう。そう心に誓ってから、オレとネジは、向かい合った。

テンテン「もう知らない。勝手に始めなさいよ。」

と言うことなので、勝手に始める事にした。

テンテン「もう知らない。勝手に始めなさいよ。」

と言うことなので、勝手に始める事にした。

ネジ「行くぞ。」

白眼　写輪眼

ほぼ同時に自分の持つ瞳力を発動させた。それから、ネジは間を空けずに柔拳での接近戦へと持ち込もうとしてきた。確かに柔拳は、強力だし痛いけどな、柔拳を使いこなせるのが日向一族だけ何て、決まっては無いんだよ。

そう思いながらも、とりあえずはネジの拳から繰り出されるチャクラと言う名の凶器を纏った拳を全て見切りながら確実に決めることの出来るチャンスを待った。そして、ピンチを招くことになる。

ネジ「お前は、既に八卦の領域内にいる。」

この構えは、柔拳法・八卦六十四掌。そして、オレの点穴を突くために一步前に踏み出してきたときに、隙を見つけた。その瞬間に少しずつ手に溜めていたチャクラを一気に具現化した。

柔歩双龍拳

そしてオレは、龍の形に具現化したチャクラの塊を両手に纏わせ、死なないように手加減はしたもののネジの柔拳法・八卦六十四掌

ごと打ち破った。

その様子に、ナルト以外の全員が驚きの表情を浮かべていた。まあ、カカシ先生は、オレがネジに勝ったことに驚いていたのではなく、柔拳を完全に操っていた方にだと思いが……。

テンテン「(まさかとは、思ったけど、ホントに、去年のNo.1ルーキーの日向ネジを

倒しちゃうとはねえ……。流石、リュウね!)」

ガイ「……俺の愛弟子達をこうもあつさりと……。……。うおおおお!!!」

青春は時に甘酸っぱいものだああ!リーよ!」

リー「はい!ガイ先生!」

と、いつの間にか復活していたリーが返事をした。さてと、何とか面倒事も済んだようだし、ネジを起こしてから、ようやく朝飯を食べるとするか。

そして、気を失っているネジに、少量のチャクラを流して起こしてから、タズナさんの家へ戻った。それから直ぐに、オレだけ食べていなかった朝ご飯を食べてから、橋建設の護衛任務を遂行しに完成間近の大橋へと向かった。そして、その任務中はネジの白眼での周辺注意とナルトの影分身による建設作業のお手伝いなどで午前中はほぼ潰れた。その間のオレを含めた他のメンバー達(オレ、ナルトの本体、サクラ、テンテン、カカシ)は、半分ピクニック状態で、のんびりと過ごしていた。ついでに、リーとガイは、ワンツーマンによる熱血修行の真っ盛りであった。

そんな感じだった午前とは、裏腹に午後は、大荒れとなるのであった……。



サクラ「はーい。今日のお昼ご飯は、私がツナミさんと一緒に作ったサンドウィッチね。」

と言つて、何故か得意げに皆に配り始めた、その時だった。今まで薄かった霧が、妙な感じに濃くなり始めたのは。その霧は、肉眼では見えないが、確かに相当量のチャクラが練りこまれている深く濃い霧だった。

すると、カカシ先生が警戒度をMAXにして、

カカシ「やはり、まだ生きていたか……。再不斬。」

と呟いて、次に発した言葉は、指示に変わっていた。

カカシ「皆！気をつけろ！敵が、お出ましのようだ！タズナさんの周りにつけ！」

サクラ「これって、アイツの霧隠れの術よね？」

再不斬『待たせたな、カカシ。相変わらず、そのガキを連れて……。ん？何か、人数がやけに

増えてないか？……。まあいい。それよりまた、ピンクの子が震えてるじゃないか、

可哀想に……。』

すると、目の前にオレ達を囲むようにして、再不斬の水分身が7体現れた。そして、その水分身が、ピンクの子……。サクラに向かつ

てきた時だった。その場にいる者が、誰も動いていないのにもかかわらず、再不斬の水分身が全て、水となっていたのは。

その様子に、オレ以外の全員が、驚いていた。ついでに言うとオレは、呆れていた。そして、小声で抗議を入れる。

リュウ「おい、ナルト。今、一瞬だったけど、絶対に本気出しただろ。約束だと、確か、

あまり周囲に警戒をさせない為に、実力は、隠して生活するんじゃないかったのか？」

ナルト「そんな難しいこと言うなってばよ。リュウだって、テンテンが危なくなったら、絶対に

我を忘れて、限界突破の実力を出すだろ？」

うーん。確かに、過去に一度だけあったかもしれないから、強くは言い返せないな。

再不斬「ほお、水分身を見切ったか。かなり難解な壁が出現ってとこだな。白。」

白「そうみたいですな。・・・たいした少年ですね。いくら、水分身が、オリジナルの

10分の1程度の實力しかないにしろ、一瞬で・・・彼は、この間も、良い動きをしていた

少年ですよ。大分、手間取りそうですね。」

再不斬「だが、先手は打った。・・・行け。」

白「はい。」



と言ったような、会話をカカシは遠めから見ていた。すると、反射のように素早く全体に指示を出し、自分も警戒を強めた。

カカシ「俺とガイは再不斬を、ナルトとリュウはあの仮面の子を、そして、残りの者は

タズナさんの警護だ！」

その指示に、それぞれが、了解の意を伝えて、それぞれの持ち場に付いた。

カカシ「俺とガイは再不斬を、ナルトとリュウはあの仮面の子を、そして、残りの者は

タズナさんの警護だ！」

その指示に、それぞれが、了解の意を伝えて、それぞれの持ち場に付いた。すると、ナルトが突然慌てだした。

ナルト「やばいってばよ?! すっかり、忘れてたってばよ!」

リュウ「何が?」

ナルト「イナリとツナミさんだってばよ!!」

と言ったかと思うと、既にナルトがいた場所には、誰の姿も無かった。

リュウ「・・・ったく。仕方ない。」

そして、急激に接近して、クナイと千本での鏖迫り合いになった。

白「しかし、貴方は、僕のスピードに付いて来れなくなる。それにボクは、2つの先手を

打つてある。・・・1つ目は、辺りに撒かれた水。そして2つ目に、僕は君の片手を塞いだ。」

すると、片手で印を結んだ・・・。

リュウ「何?!」

この術は確か、白の術!この世界で、見かけないなと思ったら、コイツが白だったって言うのか!?って言うことは、一番最初の世界でオレが 火遁・獄龍炎の術 で、倒した相手が、白だったわけか。しかし、今は敵。元仲間だった者を殺すのは、少々辛いが、今は躊躇している暇はない。そこで、高等忍術の技術を駆使して、この場を離れることにする。

それにはまず、ある程度の布石を一瞬で敷くしかない。そして、オレは、隣に影分身を1体出して、白の 水遁秘術・千殺水翔 が、オレに向かってくるのと同時に、 変わり身の術 で、影分身と本体のオレを入れ替え、白の千本が、その影分身に当たるのと同時に、分身大爆破 を発動させて、白に大きなダメージを与えながら、自分はそれを回避した。

再不斬「(白が、やられるとはな。)」

そして、爆発の衝撃波によって、白は再不斬の後方5m地点にまで、吹き飛ばされていた。そんな、白に後ろを向くことはせずに再不斬は、声をかけた。

再不斬「白、分かるか?このままじゃ、返り討ちだぞ。」

そう言うと、白にスイッチが入って、そして、体から冷気を放出し始めた。

そして、オレを取り囲むように、氷の鏡が次々と出来ていった。これは、白の血継限界でもある必殺奥義。 氷遁秘術・魔鏡氷晶 に間違いない。これは、攻撃される前に、ケリをつけないとな。

白「じゃあ、そろそろ行きますよ．．．。僕の本当のスピードを．．  
」

すると、四方八方から千本がオレを目掛けて飛んできた。それを、

### 八卦掌千鳥回天

と、自分のチャクラ穴から、雷遁の性質変化をさせたチャクラを一  
気に放出させて、全ての千本を弾き返し、最後には、その 八卦掌  
千鳥回天 の勢力を拡大させて、白を気絶にまで追い込んだ。

八卦掌千鳥回天

そして、白がまた再不斬の所まで、吹っ飛んでいって気を失った。その様子を見ていたネジが、驚きの表情を隠せないでいた。

ネジ「（あれは、日向家宗家のみに伝わる、言わば秘伝体術の 八卦掌回天。しかも、あれに

独自に改良を加えている。白眼が使えないことを補う為か。  
）」

などと、まだ驚いていて良く働かない頭で考えているが、全然違う。改良を加えたのは、単なる術の補強、強化という事でしかやっていない。つまり、深く考えすぎたという事である。

再不斬「（白の血継限界が、手も足も出ないだと・・・？）」

と、余所見をしている再不斬に、木ノ葉の上忍2名が言った。

カカシ「余所見をしている場合じゃないだろう？」

ガイ「お前の相手は、俺達だろ！！」

再不斬「そうだったな。」

と言うと、さっきまで薄れていた殺気も元通り以上に戻って、接近戦へと移った。

そして、オレはと言うと、何処からか沸いて来るガトーに雇われた荒らくれ者達に意識を向けていた。いくら数が揃っていても、雑魚には変わりが無いのだが、しかし、量が多い。一発で、敵を殲滅させる術は、多々あるけど、もうすぐ完成の橋を傷付けない為には、チマチマやっていった方が良くに決まっている。と言うわけで、少々面倒だが、肉弾戦で終わらせようと思ったが、改めて考えたら一発で敵を倒せて、尚且つ橋を傷つけない術があった。そして、その術を発動させた。

### 涅槃精舎の術

超高等幻術で、敵の頭の視覚に関わる場所に働きかけ、鳥の白い羽を降ってきた様に思い込ませて、深い眠りの世界へと誘った。

そして、その幻術に掛かった者は、次々に1人また1人と、その場に倒れていった。そして、その中には、首謀者であるガトーの姿もあった。

リュウ「無抵抗な奴を殺す趣味は無いんだけど、コイツはな。」

とオレは呟くと、その瞬間には、ガトーの倒れている場所に立っていた。

リュウ「ご愁傷様。でも、自業自得だろ。」

と聞こえていないだろうけど、ガトーに向かって一言発した。そして、千鳥で、ガトーの心臓を一突きすると、今度は、再不斬の後ろに回りこんだ。

再不斬は、突然背後から気配が感じられたことに驚いてはいたが、オレが放った螺旋丸は、辛うじてジャンプをし避けた。そこで、新開発した術の初披露と共に、倒したいと思う。

## 遠距離螺旋丸

これは、単純に言ったら 螺旋丸 を野球や砲丸投げなどの好きな投げ方で、投げ飛ばしたただけなのだが、投げ飛ばす分だけ、チャクラコントロールが難しいのだ。

そして、オレの新術の人体実験台になった再不斬は、ぶっ飛んで星となって消えていった。

遠距離螺旋丸

オレの新術の人体実験台になった再不斬は、ぶっ飛んで星となって消えていった事によって、島の恐怖も無くなり、そして、橋の建設を邪魔する者もいなくなった為、1週間位お世話になった。波の国と、人々にお別れを言って、オレ達は、里へ戻った。

それから、約1週間が経ったある日の事。ここは、火影様が下忍の担当をしている上忍の先生達が、集められていた。

三代目「さて、中忍選抜試験を開催するに当たって、まず、新人の下忍を担当している者。

・・・前へ。」

その言葉に、はたけカカシ、夕日紅、猿飛アスマの3名が前へ進み出た。

三代目「どうだ？お前達の手の者に、今回推したい下忍はおるかな？じゃ、カカシから」

カカシ「カカシ率いる第7班。うちはサスケ、うずまきナルト、春野サクラ、以上3名、

はたけカカシの名を持って、中忍選抜試験に推薦します。」

イルカ「（何?!）」



紅「紅率いる第8班。日向ヒナタ、犬塚キバ、油女シノ、以上3名、夕日紅の名を持って、左に同じ。」

イルカ「（何！？）」

アスマ「アスマ率いる第10班。山中いの、奈良シカマル、秋道チヨウジ、以上3名、

猿飛アスマの名を持って、左に同じ。」

イルカ「（何い?!?!）」

すると、周りの人はザワザワし始めた。まあ当然と言えば、当然だろう。何たって、中忍選抜試験にルーキーが出ること自体が異例なのに、しかも全員を推薦したとなると、それは、そうなるだろう。そして、黙ってはいられなかったイルカが、遂に口を挟んだ。

イルカ「ちょっと待ってください！」

三代目「なんじゃ？イルカよ」

イルカ「火影様！一言言わせてください！差し出がましいようですが、今、名を挙げられた9名は、

アガデミーで、私の受け持ちでした。確かに皆、才能のある生徒でしたが・・・、

まだ、早すぎます！もっと、場数を踏ませてから、受験させるべきです！」

誰もが納得する中、その言葉に反する言葉が飛び出たのであった。

カカシ「イルカ先生。あなたの言いたい事も分かります。心配なんでしょうし、無茶をさせる

ように思えて腹も立つでしょう。しかし・・・」

紅「カカシ、もうやめときなつて。」

姐さん肌の紅に止められるが、カカシは・・・

カカシ「口出し無用！あいつらはもう、あなたの生徒ではない。今は、私の部下です。」

アスマ「（つつく、めんどくせえ奴らだな）」

紅「（はぁ・・・）」

と、2人とも呆れてしまっている。しかし、生徒思いの優しいイルカ先生は、そう簡単には、引き下がらなかった・・・。

カカシ「口出し無用！あいつらはもう、あなたの生徒ではない。今は、私の部下です。」

イルカ「しかし、中忍試験とは別名！」

と、弁に熱が籠ってきたところで、一旦、三代目が口を挟んだ。

三代目「イルカよ。お前の言い分も分からなくてもない。」

今ので、少しは冷めたようだった。

イルカ「火影様……。」

三代目「よって、今回の新人下忍には、特別な予備試験を行うことにする。」

イルカ「予備試験？」

リュウside

オレらは、カカシ先生に呼ばれ、とある橋の上に集まっていた。そこで、何時ものように待ちぼうけを食らい、結局、この日の待ち時間は3時間15分だった。

カカシ「やあ諸君！おはよう……。今日は人生という道に迷ってな。

」

サクラ「はい！それ！嘘！！」

カカシ「まあ、なんだ。いきなりだが、お前らを中忍選抜試験に推薦しちゃったから。

これ、志願書な。と言っても、推薦は、強制じゃない。受験するかしないかは

お前達の自由だ。受けたい者だけその志願書にサインをして、5日後の午後3時まで

学校の301号室に来る事。以上。」

すると、ポカーンとしていた、サクラが、

サクラ「これだけ？」

と聞くと、

カカシ「ま、そういうことになるな。これにて解散！」

となった。そして、言葉通り解散し、帰路に着いていると、町外れでいきなり襲われた。ああ、確かコイツに最初の世界でも、襲われたよな。とか、回想しながら、前と同じようにしてやった。

忍法・金縛りの術

・・・これで、暫くは動けないだろ。それから、3時間後・・・。

イルカ「（クソォー、変化の術は解けたのに、リュウに掛けられた金縛りの術が解けない・・・）」

すると、近くに人が現れた。

カカシ「どうでした？・・・って、金縛りの術中に嵌ったままですね・・・。」

解

カカシ「あれ？解けないな。全く、どっちだ？イルカ先生に、ここまで強力な金縛りの術を

掛けたのは。うーんと、こっちの道を真っ直ぐ行ったら・・・、リュウの家だな。

って事は、犯人はリュウか・・・。面倒な後始末をやらせやがって・・・。」

と言うと、チャクラを自分の手の平に集中させ始めた。そして、その手をイルカ先生の肩に置き、

解！！

カカシ「ふう〜。やっと解けたな。」

イルカ「すみません、助かりました。」

カカシ「でも、その様子からすると、」

イルカ「はい。折角の予備試験でしたが、ルーキー9名中9名合格。全員合格でした。

やはり、貴方達の言うように確実に成長しています。」



【DATE】No.6

はたけカカシ

忍：5 体：4 幻：4 賢：4  
力：3 速：4 精：3 印：5

総合能力：

潜在能力：

運：

特殊能力：写輪眼

うちはリュウ

忍：5 体：5 幻：5 賢：5  
力：5 速：5 精：5 印：5

総合能力：

潜在能力：

運：

特殊能力：写輪眼、万華鏡写輪眼

うずまきナルト

忍：5 体：5 幻：4 賢：4  
力：5 速：5 精：5 印：4

総合能力：  
潜在能力：  
運：

特殊能力：仙人モード

春野サクラ

忍：1 体：1 幻：3 賢：4  
力：1 速：1 精：1 印：4

総合能力：

潜在能力：

運：

特殊能力：無し

ナルトとリュウのチャクラ量を比べると、ナルトの方が圧倒的に多いですが、段階評価の最高が、『5』である為、こうなりました。

ナルトの能力値は、仙人モード時で計算していませんので、仙人モード時には、これ以上のものになるものと思われます。



5日後の二セモノ301号室前・・・

そこはやはり下忍の溜まり場となっていた。そして、そこにはテンテン、ネジ、リーの姿も確認され、オレがそこをスルーしようとした時に、テンテンが飛ばされてきた。その今飛ばされてきたテンテンの体は、もちろん受け止めた。するとテンテンは驚いて、顔を向けてきた。

テンテン「っ?!あ、リュウー!」

そんなに驚かなくても・・・。と思ったが、取り敢えずこちら辺一帯に敷かれている幻術を解いてから、第7班は第3班と合流して、本物の301号室へと向かった。

そして、今度は本物の301号室の前に来た。

カカシ「そうか。サクラも来たか。中忍試験、これで正式に申し込みが出来るな。」

サクラ「どうゆうこと?」

カカシ「実の所、この試験は始めから三人一組、スリーマンセルでしか受験できなくなってる。」

サクラ「でも、先生。受験するかしないかは、個人の自由だって・・・。」

カカシ「ああ言ったな。でも、もし本当のことを言ったなら、リュウやナルトが、無理にでも

お前を誘うだろ？例え志願する意志がなくても、リュウに言われれば、お前は、

いい加減な気持ちで試験を受けようとする。リュウとナルトの為に・・・ってな。

でも、お前らは自分の意志で来た。・・・・・・行つて来い。（頑張れよ。）」

とりあえず、あまり意味の成さない許可が出たところで、教室のドアを開いて、律儀にも他班の先生の話と一緒に聞いて待つてくれている3人も含めて6人一斉に足を踏み入れた。すると、そこには、ルーキーナイン（オレら含め）が全員集合していた。

いの「リュウくん。おっそ〜い！」

と、オレの死角から飛び込んできた奴がいた。

いの「久々に会えると思ってえ、ずっと待つてたんだからあ。」

サクラ「離れる！イノブタ！！」

テンテン「ストお〜ッブ！！」

まあこうなる事は、ほぼ確実に予測できたことだが・・・面倒くさいな。

シカマル「何だ。このメンドーな試験。お前らも受けんのか。」

ナルト「何だ、猪鹿蝶トリオか！」

キバ「これはこれは、皆さんお揃いで。」

ヒナタ「こ、こんにちは、リュウ君。」

この中の数名とは、仲が良いと思うが、あまり関わらなかった奴らも入っている。

キバ「っけ、なるほどねえ。ルーキー全員受験って訳か。」

しかし、皆、ライバル意識が高く、ピリピリしている。ライバル意識があるのは良い事だとは思っけど、あまり行き過ぎないようにならないとな。

そんなことを思っていると、奴が近づいてきた・・・。

大蛇丸の右腕と言って良い部下である、薬師カブトが近づいてきた。

カブト「おい、君たち。もう少し、静かにした方がいいな。君達が、ルーキーナイン。アカデミー

出立てホヤホヤの新人9人だろ？可愛い顔して、キヤツキヤツと騒いで、全く。」

いの「誰よ！アンタ！偉そーに。」

カブト「僕は、薬師カブト。君達の先輩だよ。そこで、プレゼントとして、君達に、ちよつとだけ

情報を別けてあげようかな。」

と、言つて認識札を取り出した。

サクラ「何それ？」

カブト「これは、認識札と言つて、情報をチャクラで図面化して、焼き付けている札だよ。

この試験用に、4年も掛けて、情報収集を行った。札は全部で、200枚程度ある。

見た目は、真っ白だけどね。このカードの情報を開くには、僕のチャクラが必要なんだ。」

そう言つて、チャクラを札に流し始めた。すると、札に図面が描かれていた。それは、今回の総受験者数とその参加国、そして、それ

その隠れ里から出てきている人の数をまとめたものだった。そして、何か持論を展開して、話していたが、カブトの話は全てカット。オレは、全く聞いていなかった。

すると、『静かにしやがれ！！このクソ野郎どもが！！』

と、煙が発生したのと同時にこのセリフが教室中に響き渡った。

イビキ「待たせたな。中忍選抜第一の試験。試験官の森野イビキだ。では、早速だが、中忍選抜第一の試験を始める。志願書を提出し、代わりに番号札を

受け取り、その番号の席に着け。その後、筆記試験の用紙を配る。」

そして、席に着いた後に、このテストのルールが説明された。それを、簡単に説明すると下記の通りだ。

- 一つ・持ち点10点ずつの減点方式。
- 二つ・チームの合計点で可否を判定。
- 三つ・試験中にカンニング行為1回に付き、減点2点。  
補足・無様なカンニングをすれば、自滅する。
- 四つ・チームで、1人でも0点がいた場合、失格。
- 五つ・10問目は、試験開始45分後に出題。

無論オレとナルトはこの試験の『答え』なるものを知っているから、無駄なことはしない。全て白紙で出すつもりだ。

イビキ「試験時間は、一時間だ。………始めろ！！」

こうして、中忍選抜第一試験が始まった。

・ ・ ・

時間が経つにつれ、無様なカンニングをした奴らが次々と失格になっていく。そして、試験開始45分が経った時だった。

イビキ「これから第10問目を出題する！・・・と、その前に一つ。最終問題については、

ちよっとしたルールを追加させてもらう。」

と、言った時にドアが開く音がした。ああ・・・さっき小便に行ったカンクロウだ。

カンクロウが戻ってきたら、イビキがまた話し始めた。

イビキ「では、説明しよう。これは、……。絶望的なルールだ。

まず、お前らには、10問目を受けるか、受けないか、を選択してもらう。」

すると、周りがざわめき始める。が、イビキが、それを一喝し、鎮火させ、説明を再開させる。

イビキ「受けないを選んだ者と、そのチームメイトは失格になる。そして、もう一つのルール。」

サクラ「（まだあるの?! いい加減にしてよ……）」

イビキ「受けるを選び、正解できなかった場合……。その者については、今後永久に

中忍選抜試験受験資格を剥奪する。」

その言葉を受けた他の下忍たちの反応は、見ていて面白かった。ご苦労さんって感じ。そして、黙っては居られなくなったキバが立ち上がった。

キバ「んな、馬鹿なルールがあるか!! 現にここには、何度か中忍試験を何度か受験している

奴もいるはずだ!!」

その後、イビキの不気味な笑い声が響いた……。

イビキ「フッフッフ……運が悪いんだよ、お前らは。今年は、この俺がルールだ。」

その代わりに、引き返す道も与えてるじゃないか。自信のない奴は、大人しく、

受けないを選んで、来年も、再来年も受験したら良い。」

サクラ「（つまり、3人の内、誰かが受けないを選べば、他の2人も道連れに……」

受けるを選んで、もし正解が出来なければ、その人は、一生下忍のまま。

どっちに転んでも、分が悪い。こんなの、普通の神経じゃ選べない……。）」

イビキ「では、始めよう。この第10問目を受けない者は手を挙げる。」

番号確認後、ここから出てもらう。」

ナルトやオレ、若しくは自信のずば抜けて高い奴等は、葛藤の色を見せてはいなかったが、その場に残っている多くの者からは、葛藤の色が見えた。

そして、1分もしない内に、パラパラと……いやドンドン辞めていった。

すると、その波に押されサクラも手を挙げそうになった気配（勉強の出来ないナルトの為ではあるのだが……）を感じたのか、ナルトが手を挙げた。

・



と、思ったら、思いっきり手を机に叩きつけた。

ナルト「なめんじゃねえ！！俺は、逃げねえぞ！！受けてやる！！もし、一生、下忍になったって、

意地でも火影になってやるから、別に良いってばよ！！怖くなんかねえぞ！！！！！！」

前の世界と全く同じセリフ。そんなセリフにサクラは多少呆れながらも、微笑んでいた。

イビキ「もう一度聞く。人生を掛けた選択だ。止めるなら今だぞ。」

ナルト「真っ直ぐ・・・自分の言った言葉は曲げねえ。それが、俺の忍道だ！」

場の空気が変わったな・・・。

ナルト「真っ直ぐ・・・自分の言った言葉は曲げねえ。それが、俺の忍道だ！」

場の空気が変わったな。

イビキ「（フンツ。面白いガキだ。こいつらの不安を、あつという間に蹴散らしやがった。

78名か、予想以上に残ったな。これ以上、粘っても同じだな。）

良い決意だ。では、ここに残った全員に、第一の試験・・・合格を申し渡す！」

そして、この試験の意味と、本当の意味の答えをネタ晴らした。このテストが、カンニング前提であったことや解答の知っている、中忍が混ざっていることなどを次々と話していった。・・・まあ、オレとナルトは元から知っていたんだけどな。そして、「そいつを探し当てるのに苦労したよ」とか話し声が聞こえてきた。その様子に、全く気付かずに全て自力で解いていたサクラは、「しょぼん」としていた。

その後、イビキが、情報について熱く語り、最後に

イビキ「・・・健闘を祈る。」

という、言葉で締めたその時だった。いきなり、窓ガラスが割れ、黒い物体が飛んできた。遂に来てしまったな、世界一空気の読めな

い前世界のオレの担任。

アンコ「私は、第2試験官みたらしアンコ。次行くわよ！次い！！  
ついてらっしゃい！！」

ポカンとしていたら、イビキが一言。

イビキ「空気を、読め。」

その適切過ぎる、いや、それしか当てはまるものが無い突っ込みに  
オレは激しく同意し、アンコ先生の頬は見る見るうちに赤くなっ  
ていた。

アンコ「78人？イビキ、あんた26チームも残したの？今回の第  
一試験、甘かったのね。」

イビキ「今回は、優秀そうなのが多くてな。」

アンコ「まあ良いわ。次の試験で、半分以下にしてやるわよ。・・・  
はあ、ゾクゾクするわ。

詳しい説明は、明日。場所を移してやるから。集合時間、  
場所は、

各々担当上忍から聞くように。以上！解散！」

そして、翌日。オレ達は、言われた通りの場所に来ていた。そして、  
早速説明がなされていた。

アンコ「ここが、第二の試験会場。第44演習場。別名、死の森よ。  
この森が、死の森と

呼ばれる由縁、直ぐに実感することになるわ。それじゃ、

第二の試験を始める前に、

あんたらに、同意書を配っておくわね。試験に参加する者については、まずこれに、

サインをしてもらうわ。こっから先は、死人も出るから、それについて、

同意を取っておかないとねえ。あたしの責任になっちゃうからさ。アッハッハッ……。

それじゃあ、第二の試験の内容を説明するわ。早い話、ここでは、究極のサバイバルに

挑んでもらうわ。地形は、塔を中心に半径10?。この限られた空間で、とあるサバイバル

プログラムをこなしてもらう……。」

アンコ先生の説明はまだまだ続く。

アンコ「第二の試験の内容を説明するわ。早い話、ここでは、究極のサバイバルに

挑んでもらうわ。地形は、塔を中心に半径10?。この限られた空間で、とあるサバイバル

プログラムをこなしてもらう。その内容は、何でもアリアリの・・・

巻物争奪戦よ。・・・天の書と地の書を巡って、戦ってもらうわ。

一次試験を通過したのは、全部で、26チーム。その半分に天の書を、もう半分に地の書

という風に、各チームに一巻き渡す。簡単に言うと、それを、奪い合うの。

それで、合格条件は、天地両方の巻物を持って、3人で、塔に来る事。しかも時間内に。

期限は、120時間。つまり、5日間。説明は以上。同意書3枚と巻物をそこで、

交換するから。その後、ゲート入り口を決めて一斉にスタートよ。

最後にアドバイスを一つ。・・・死ぬな!」

その言葉で、オレとナルト以外に緊張が走った。

そして、同意書3枚と、天の書を交換した後に、ゲート12に移動した。どうやら、ナルトもサクラも気合いは入っているようだ。そして、時計の針が2時30分を指した瞬間。

アニコ「これより、中忍選抜試験。第二の試験を開始する！」

その合図で、オレ達は、森へ足を踏み入れた。

それから5分も経たない後の事だった。遠くの方で、悲鳴が聞こえたのは。

サクラ「今の、人の悲鳴よね。・・・なんだか、緊張してきた。」

ナルト「大丈夫だってばよ、サクラちゃん。」

などと適当に話をしているが、実際大丈夫だろう。とか思っている  
と、物凄い強風によって、サクラが飛ばされてしまった。そして、  
それを助けに行こうとナルトもどっかへ消えていった。

そして、数分も経たないうちにナルトに化けた大蛇丸がノコノコと  
やってきた。そして、結構な殺気を放ち始めた。まあ、これぐらい  
何とも無いんだが、

大蛇丸「へえこの殺気を食らっても、立っていられるなんて大したものね。」

## 口寄せの術

『ドロン』と馬鹿でかい大蛇を2匹出した。それに対抗して、オレ  
も白龍と黒龍を口寄せした。そして、オレは大蛇丸との戦闘に入る。

## 火遁・劫火弾の術

と、大きな火の玉を大蛇丸に向けて発射するのだが、避けられ後ろの太木に引火した。

大蛇丸「（やるわねえ。）流石は、うちは一族。血が騒ぎ始めたよ  
うね。ゆつくりと実力を

確かめさせてもらおうじゃないの。」

すると、印を結び

潜影蛇手

舌が蛇となって襲い掛かってきた。それに抗う為に

口寄せ・雷光剣化

で、贅殿遮那を呼び出した。その大太刀は、炎を纏っていた。

大蛇丸「初めて見る太刀ねえ。実に興味深いわ。」

と呟くと、『じゅるる』と舌なめずりをした。キモイからやめてくれ。

リユウ「興味深いでは終わらないな。」

何たって、神龍の気まぐれで譲り受けた神刀・贄殿遮那は、完璧なる炎刀で、これさえあれば火遁系統の術は、いらないんじゃないか？と思うほどの代物だからである。

#### 炎遁秘術・飛焰

別に術名を言う必要もないのだが、取り敢えず言ってから、贄殿遮那の炎で、火炎放射らしき攻撃をして見せた。そして、時間を置くことなく、その大太刀で、バツサリ斬りかかった。

#### 炎遁秘術・断罪

これで、大蛇丸の姿は見えなくなったのだが、アイツの生命力は、ゴキブリ以上にしぶといので多分逃げたのだろうと判断したが、深追いはしないことにした。ついでに、白龍と黒龍も大蛇との戦いには既に、決着を付けていた。

それから暫くも経たないうちに、気絶しているサクラを仙人モードのナルトが運んできて合流した。何故、仙人モードなのかは分からないが、多分、大蛇丸対策だろう。

何がともあれ取り敢えず合流できたから良しとしよう。

ナルト「何だかもう終わっちまったみたいだな。仙人モードになった意味無いってばよ。」



リュウ「そうだな・・・。取り敢えず、サクラが気絶しているみたいだから休憩にするか。」

という事で、大木の半洞穴化している場所で休憩することにした。そして、その間にオレは食料調達や汲んできた川の水の浄化作業等をしていた。そんなこんなで結局、飯が出来たのは既に日が暮れた頃だった。そして、ちょうどその頃に気を失っていたサクラも気が付いて飯を食べ始めた。

飯も食べ終えて就寝につき数時間後の事だった。

オレは、近くに何かが蠢いている気配を感じ取り目を覚ました。そして、辺りを警戒して見回すと、背中に起爆札を貼り付けられたりスが目の前に現れた。

リュウ「ったく。」

取り敢えずリスを助けてあげてから、草陰に隠れている人間に向かってクナイを投げた。すると、案外簡単に姿を現した。

ザク「ほらバレちゃった。だから、オレは端ッから止めると言ったんだ！」

等と内輪揉めしている内に光速で、音忍3名の後ろに回りこんで蹴りでぶっ飛ばした。その3人の体は、飛ばされたほうの大木に激しくぶつかった。

口寄せ・雷光剣化

で、また贅殿遮那を呼び出し、さっき喋っていた五月蠅い奴の両腕を飛焰で焼き尽くした。その様子を間近で見ている、音忍のザク・アブミは、流石に恐れをなして、地の書を置いて退散した。

そして、ちょうど戦闘が終わったときにナルトが目を覚ました・・・。

ナルト「・・・おはよ。」

リュウ「天地両方の書は揃ったぞ。」

そして、これまでであった事を適当に説明し塔を目指して、のんびり出発した。

その間に、特筆するような事が無かった為、カットする事を理解していただきたい。・・・あ、強いて言えば、第3班とバッタリ会って、サクラとテンテンが揉めた事ぐらいだろう。

まあ、兎に角、塔に着いて天地両方の巻物を開いてイルカ先生からのお話を聞き、中忍試験規定により、第三の試験は、5年ぶりに予選を開催する事になった。

オレ達が塔に着いたのが3日目の朝、それから約2日後、第二の試験、通過者が会場に集められていた。そして、その顔ぶれは、以下の通りだ。

木ノ葉：うずまきナルト、うちはリュウ、春野サクラ、日向ヒナタ、犬塚キバ、油女シノ、

山中いの、奈良シカマル、秋道チョウジ、日向ネジ、ロック・リー、テンテン。

砂：我愛羅、カンクロウ、テマリ。

音：ザク・アブミ、ドス・キヌタ、キン・ツチ、薬師カブト（木ノ葉として受験）、赤胴ヨロイ（木ノ葉として受験）、剣スミス（木

ノ葉として受験）。

の以上、21名だった。すると、アンコが話し始めた。

アンコ「まずは、第二の試験通過おめでとう。（第二試験者数78名、残ったのは21名か。

半分にするって言ったけど、本当は一桁を考えていたんだけどねえ……。

しかも、ルーキーが半分以上も占めてるとは……やるわねえ……。」

そして、説明が行われた。簡潔に言うと、数が多いから予選をやる。って事と、この試験が、模擬戦争だということだった。そして、その説明は風邪っぽい月光ハヤテがした際に、棄権を勧めると音隠れのスパイである薬師カブトは、棄権してさっさと居なくなってしまうった。

そして、早速、予選が始まった。

ハヤテ「え、それでは、早速予選を開始します。これからの予選は、1対1の個人戦。

20名いるので、本戦へ行けるのは10名です。ルールは一切なしです。どちらか一方が

死ぬか、倒れるか、または、降参した場合に勝負は終了します。

え、死にたくなければ、直ぐ負けを認めてください。ただし、勝負がついたと私が、

判断した場合。止めに入ります。そして、対戦相手は、このボードで決めさせて頂きます。

……では、第一回戦は……。」

そして、電光掲示板に表示された名前は、・・・オレだった。

ハヤテ「赤胴ヨロイvsうちはリュウですね。2名は前へ。他の者は、ギャラリーへ。」

その指示に従い、他のメンツは、ギャラリーへ行った。

ハヤテ「では、第一回戦。・・・・・・・・始めてください。」

ヨロイ「モルモットが・・・・。」

ヨロイ「モルモットが・・・。」

と言うと、何やら手にチャクラを集めていた。良くは分からないが、こんな試合は勝てばいいのだ。そう思い、口寄せ・雷光剣化で、最近お決まりとなった、贄殿遮那を召喚した。

リュウ「棄権することを勧めるけど、多分・・・無理だよな。」

そして、襲い掛かってきたヨロイに対して、まるで流れ作業のように一瞬で、断罪を使つて四肢を胴体から斬り離れた。そして、一連の動作を止めると試験管に

リュウ「ハヤテさん？」

ハヤテ「ゴホツゴホ、はい。勝者、うちはリュウ。」

そうコールされて、戻ると騒ぐのが好きな奴等に揉みくちやにされた。その後の試合は、普通に原作通りに進んで行き（もちろんリュウは、この世界がマンガだとは知らない。）、テンテンがテマリ敗れた後、

忍具の瓦礫という山に投げ飛ばされるといふイベントも、将来的に毎度テンテンの夫になる者としては、黙って見ている事は出来ずに、こちらもやはり毎度の事ながら救出した。

そんな事もありながら、予選は進んで行き・・・

ハヤテ「これで、第三の試験、予選を全て終わります。中忍試験第三の試験、本戦進出を

決めた皆さん。おめでとうございます。」

三代目「（木ノ葉6名に、砂3名、音1名か・・・。）うむ。では、これより、本戦の説明を始める。

本戦は、諸君の戦いを、皆の前で晒す事になる。各々は、各国の代表戦力として力を

遺憾なく発揮し、見せ付けて欲しい。よって、本戦は、一ヵ月後に開始される。

これは、相応の準備期間ということじゃ。それと、各国の代表や忍頭に予選の終了を

告げると共に、本戦への召集を掛ける為の準備期間。そして、これは、受験生の為の

準備期間でもある。この時間を無駄にすることなく、各々精進するよに。

という訳じゃ、そろそろ解散させてやりたいのじゃが、その前に1つ、本選の為に、

やってもらおう大切な事がある。アノコが持っている箱の中から紙を一枚とるのじゃ。」

そついうと、話は、アノコ先生にボタンタッチされた。

アノコ「私がまわるから、順番にね。一枚だけよ。」

そして、皆が、一枚ずつ取った。そして、これにより、本選のトーナメントが、決定された。

【本選トーナメント】

? うずまきナルト VS 日向ネジ  
? うちはリユウ VS 我愛羅  
? カンクロウ VS 油女シノ  
? ドス・キヌタ VS 奈良シカマル  
? テマリ VS ?の勝者  
? ?の勝者 VS ?の勝者  
? ?の勝者 VS ?の勝者  
? ?の勝者 VS ?の勝者



予選が終わり、解散した直後にオレは、ナルトによって何故か拉致された。（方法Ⅱ飛雷神の術）

そして場所は変わって、正直よく分からない暗く湿っぽい場所……。

リュウ「何だ？」

ナルト「……『木ノ葉崩し』をさせる前に大蛇丸を絶対に止めてやるってばよ！！

行くぞ！リュウ！！」

……っておい！んな急な？！でも、コイツ馬鹿だから一回言ったらやるもんな……。

リュウ「ったく、仕方ないか……。よし、悪党全員をこの1ヶ月間に仕留めるか。」

ナルト「おおー！！」

リュウ「そうと決まったら、まずは音隠れの里に行くぞ。」

ナルト「おおー！！」

そして、龍に乗って飛び立とうと思い、いつもと変わらずに印を結んで術を発動させた。

## 口寄せの術

『ボフン』と大きな煙を出して出てきたのは、神龍でもなく白龍でもなく黒龍でもない、ただの爺さんだった。その様子に、

ナルト「・・・何だってばよ？この爺さん・・・。」

と、ポカンとしているし、オレはオレで、

リュウ「・・・新手のギャグか？」

と、思っているところだった。すると、その様子に見かねた（？）爺さんが話し始めた。

??「馬鹿もん！あんたらワシを舐めとるじやろ・・・。聞いて驚くな。

・・・ワシは、神隠れの里の初代長、3代目最長老のロンじや！ついでに年齢は

今年で26547歳。好きなものは、若いピチピチの娘じゃ

！！」

ナルト&リュウ「アホか?!このエロ爺!!」

そう叫んだ後に、『ゴーン』と鐘の音が鳴り、『ピヨピヨ』とピヨコが空を飛んだのは言うまでも無い。

その騒動がやっと鎮火した頃。いきなり真面目モードで話し始めた。

ロン「ワシ等は神じゃ。何でも知っておる・・・。と言う事でお主等、転生したのう。」

ナルト「確かにしたってばよ。それが何だ？もしかしてプレゼントか！？」

ロン「お前ではない。リュウにじゃ・・・ホレ。」

と言って、一つの巻物を貰った。そして、目で巻物を開けと指示され、オレはその指示に従った。それに記載されていた文献の内容は、だいたい以下の通りだ。

昔、十尾に匹敵する魔物がいた。それは邪龍と呼ばれる存在で、その2匹は人間には手の付けられようの無い凶悪な存在であった。（中略）六道仙人が、十尾を9体（一尾、二尾、三尾、四尾、五尾、六尾、七尾、八尾）に、邪龍の力と体を3体（神龍、白龍、黒龍）に邪心は自分自身に封印した。

と、まあこんな感じだ。オレが巻物の文章を読み終えるとロンは、会話を再開した・・・。

オレが巻物の文章を読み終わるとロンは、会話を再開した・・・。

ロン「元々、邪龍は邪心しか持つとらんかった。だから、邪心を抜き取られた神龍と白龍と

黒龍は、始めは心を持つとらんかったのじゃ。しかし、リュウ。お主と数回に及ぶ

平行世界での触れ合っていた時間は全てトータルされて、そして奴等は心を持ち始めた。

そして今、その心は純白そのものじゃ。だから、今の内に3体を元の1匹に戻そうと

思うのじゃ。・・・どうだ？協力してはくれんかの？」

リュウ「オレの三龍を口寄せすればいいのか？」

そのオレの問いにロンは頷いた。そして、さつき結んだ印を結びなおした。

### 口寄せの術

そして、今度こそ神龍、白龍、黒龍の3体が出てきた。

リュウ「で？どうすれば良い？」

ロン「そうなのう。こうして、あゝして、それでこっちはこゝして・・・。。。。。」

地面に何だか馬鹿でかい術式をオレの血で書いたり、印を覚えたりで、多分1、2時間くらいは過ぎた。そして・・・。

### 三位分離封印・解      三位一体復元融合の術

そして、眩い光が暗い空間を支配した後に、さっきまであった3つの龍の気配が消えていた。

ナルト「リュウの三龍が消えちゃったってばよ?!」

ロン「よく見るんじゃ。あそこにおるじゃろ。お前くらいの娘がの。」

その指が指す方向に視線を向けると確かにいた。後光が射す15、6くらいの少女が・・・。

ナルト&リュウ「ああゝ!!!?」

と、耳を劈くような絶叫が木霊した。

ナルト「龍が女の子になっちまったってばよ・・・。」

そうナルトが呟いたときにオレはある事に感づき始めていた。

リュウ「お前もしかして・・・。」

すると、女の子が振り向いた。

「リュウ「姿形が違えども、オレを何度も平行世界に投げ出す神だな。」

女の子「分かってしまったのですか？てへっ」

この発言でオレのイライラはピークに達した。（一応言っておくが、沸点は低くない。）

リュウ「・・・とりあえず今からぶっ飛ばすから、身の危険を感じたら避けるよ。」

そう宣言したと同時に、殺傷能力の高い物理攻撃技を繰り出した。

・  
・  
・

それから30分は経ったであろうか。オレも奴（神）も口で息をしていた。そして、とうとう見かねたナルトの仲裁により大喧嘩？は、終了した。

ロン「おっほん。兎に角、セツナとリュウには、もう一度契約をし直してもらわんと困る。」

それなのじゃが、セツナとの契約はちーと変わっておつてのう。他の血の契約じゃのうて

粘膜接触による契約になるんじゃ。」

女神「という事は、私は貴方とk i」

リュウ「嫌だ。」

と、バツサリ切り捨てた。

女神「ではもしや、・・・あれですね」

リュウ「お前、いい加減にしないと・・・何処かに封じ込めるぞ。」

その脅しに一人が怯えはじめ、もう一人は何か閃いたようだった。

ナルト「そうだってばよ！いつでも呼び出せる封印式だってばよ！  
！リュウなら出来るよな？」

リュウ「確かに・・・十二支封印 だったら、オレが知っている  
中で一番軽い封印式で

その封印された者の力も封印源に供給されるし、逆に封印  
を完全に解きたいときは、

簡単に 十二支解印 で、封印を解除できるな。」

ナルト「それだあ！！」

と、ナルトは喜んでいたが不安が漂っている人物もいた。

リュウ「でもよ。力量が五分と五分なら勝手に出られちゃう位、簡

単すぎる封印式だからなあ。」

ナルト「何とかなるってばよ。」

リュウ「・・・そうか？」

結局、ナルトの適当な押しでリュウも流され、簡易封印が始まった。それは、本当に簡単であった。何せ普通に『子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥』と、印を結んでから封印の対象物を右手で、封印される場所を左手で触れるだけで良かったのだ。ついでに言うと呼び出すときは、封印された場所に封印実行者が手を置くと直ぐに呼び出され、完璧に封印を解く場合には、また封印実行者が『亥・戌・酉・申・未・午・巳・辰・卯・寅・丑・子』と今度は逆に印を結び左手を封印された場所に、右手は一時的に呼び出された封印の対象物に触れると解かれるという仕組みになっている。

というわけで、リュウは女神（精神は転生の女神、肉体は元邪龍の女の子の姿 *ver.*）を自分の右手首に封印した。そして・・・

リュウ「とりあえず収まったな。」

ロン「そんな契約の方法があつたとはもう・・・まあ、何がともあれご苦労じゃった。

とりあえず、予行練習としてホレ。呼び出してみなさい。」

リュウ「はあ・・・残念ながら、アホ神とオレの力量は誰の策略かは知らないけど5対5。

もう少し経てば勝手に出てきちまうよ。」



そう言った本当に数秒後だった。神が出てきたのは・・・

女神「もう！！自己紹介くらいさせてくださいよお。」

リユウ「え、・・・お前キャラ変わった？」

女神「あゝ神世界での口調ですかぁ？あれは、義妹の真似ですよ・・・というのは、本題ではなくてですね。」

と、そこまで言うところ一回視線を反らした。

女神「改めまして紹介が遅れました。”転生の女神”ことセツナです！」

オレは、また人生を終えた。・・・え、暁や音（主に大蛇丸）との戦闘はどうなったかつて？それは・・・ある時は何事もなかったように消し去ったり、ある時は大陸に大きな穴でも空けてしまふような戦闘になったりと色々とあったりもしたのだが・・・まあ、確実に言えることは前回の平行世界や前々回の平行世界みたく平和が崩れることなく（表面的には）終えたのであった。

聖書みたいになってしまふが最後の世界での家族構成はというと、オレ・テンテンの間に「隆起（男）」・「猿飛汐」・「隆盛（男）」・「皆愛」・「？」・「瞳（女）」・「悠（男）」・「うずまきコスモス」・「神（男）」・「イー」・「青（男）」・「？」・「蒼（男）」・「？」・「？」・「藍（女）」・「？」・「春夏（女）」・「秋冬（男）」・「？」。もちろん孫も多く、最初の三人の孫には子供も出来たりして曾孫もいた。というわけで親子孫3代でうちは一族はかなり活気を取り戻し栄えた。

そして、本題に入る。

隆「それで・・・なぜオレは、セツナと共に大神様の所にいるんだ？」

刹那「それはですね。私が大神様唯一の実娘だからですね。まずは神について説明しますね。

まず、神は分野ごとに分けられていてそれは大神様指名の元、行われています。

例えば私は『転生』私の幼馴染は『武術』私の親友は『記憶』等々……」

隆「それは分かった。分かったから早く元の世界に戻して。」

刹那「それは無理です。」

また嫌な予感……。

大神様「いやあすまん。つい転寝していたら、お前の一生が終わってた。」

やはり、オレは生き地獄の迷宮に迷い込んでしまったらしい。

刹那「でも、次は別の世界なので安心して隆？」

安心とかじゃねーよ。オレは帰りたいんだよ……。

刹那「しかしそれまでに少々時間が掛かるので『武術の神』と修行を行っててください。」

その間に準備を整えておきますので……。

（やっと次は、ラブラブデートもとい婚前旅行章です？

でも結婚の前に、父の承諾が必然的に必要となってますが・

……）

この子はアホなんだろうか？オレは一回たりともそういう甘い雰囲気にしたことはないし、しかもどちらかというといつも離れていたんだが……。

そんなこんなで、今回の大冒険は終了を告げたと共に『武術の神』との修行及び後々また別の世界へ飛ばされることになるのであった。

【DATE】No.7（前書き）

後半、今後のネタバレ入ります・・・

## 【DATE】No.7

主神世界の住人主

おおがみさま ぜんしんのおさ げんしじん  
大神様 - 全神の長（原始神）

全ての始まりを創った神。 150億歳で正室に1人、側室に数兆人がいるとされている。

身長は3m50?である。 妻の名は須臾で子供は1人いるその子供こそが刹那である。

? ? - 創造の神（第1貴子）  
そつぞうのかみ

原始神に代わって世界の創造を行っている。

? ? - 破壊の神（第2貴子）  
はかいのかみ

原始神に代わって世界の消去を行っている。

? ? - 思想の女神（第9貴子）  
しそつのもがみ

謎の多い女神。女神のなかでは最高位である。

刹那 - 転生の女神（第13貴子）  
せつな てんせいのめがみ

大神様唯一の実子であり愛娘。その分、結構我侭な所がある。しかし裏腹に

他人思いな点もある。大友隆を異世界に放り込んだ張本人であり、大友隆に一目惚れした恋する乙女でもある。故に人世界に隆を追いかけてくることもある。

見た目は人間で言う7、8歳なのだが、5000年以上生き

ている。

- 龍 ろん

刹那のお世話係を担当している人。容姿はお爺様。  
ふるではにゆう

- 古手羽入《ハイ||リユーン・イエアソムール・ジエダ》

義理の妹であり、転生術の知識を少しだけ受け継いでいる。  
しかし、羽入には

神世界の住人であった記憶は無くなってしまっている。

無双 むそつ - 武術の神（第26貴子）  
ぶじゆつのかみ

刹那の幼馴染で武術（剣術や体術など）に優れている。

心覚 こころえ - 記憶の女神（第39貴子）  
きおくのめがみ

刹那の幼馴染で親友。魂のみとなった死者の記憶を覗いたり  
消したりできる。

?? - 術使の神（第40貴子）  
じゆつしのかみ

基本的なものを含め広く多くの神術を使う。

?? - 火帝の神（第44貴子）  
かていのかみ

神術の‘火ノ書’を得意とする。

?? - 水帝の神（第45貴子）  
すいていのかみ

神術の‘水ノ書’を得意とする。

?? - 風帝の神（第46貴子）  
ふうていのかみ

神術の‘風ノ書’を得意とする。

?? - 土帝の神（第47貴子）  
どていのかみ

神術の‘土ノ書’を得意とする。

?? - 雷帝の神らいでいのかみ（第48貴子）  
神術の‘雷ノ書’を得意とする。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

‡以降ネタバレ注意‡

おおともりゅう ひとのかみ  
大友隆 - 人間の神（第7貴子）

元々は人間で、神の仲間入り当初は第50貴子だった。仕事  
内容としては、

全ての世界に住む人間と触れ合うこと。途中から人間を超越  
した能力を持つて

人世界に介入したので、それから人世界に干渉する時には能  
力を抑えられているか、

若しくはハンデを負わされている。単純な能力では大神様に  
匹敵する実力を持っている。

物語後半になると実質全世界No.2にまでのし上がってい  
る。

きみどりえみり  
- 喜緑江美里

全世界情報管理人を管理・監視をする地位にある。裏表無  
くしつかり者。

ながとゆき  
- 長門有希

情報処理に優れている。無駄なことは一切話さないクール  
キャラだが容赦無い。

すおつくよつ  
- 周防九曜





しんしき・そうえんじゅつ  
神式・操炎術  
しんしき・そうすいじゅつ  
神式・操水術  
しんしき・そうふうじゅつ  
神式・操風術  
しんしき・そうどじゅつ  
神式・操土術  
しんしき・そうらいじゅつ  
神式・操雷術  
しんしんじゅつ・せいしんしょうあく  
心神術・精神掌握

異世界編 part？

ナルト - ナルト -  
がりゅう・ごうかきゅう  
我流・豪火球  
すいとん・すいじんへき  
水遁・水陣壁  
ぶらすま  
高電離気体

ONE PIECE  
スィスイの実

DRAGON BALL  
ぶくつじゅつ  
舞空術  
だーくえねるぎーだん  
ダークエネルギー弾  
だーくえねるぎーは  
ダークエネルギー波  
だーくえねるぎーほう  
ダークエネルギー砲  
だーくえねるぎー  
ダークエネルギー  
波導光殺砲  
だーくえねるぎー  
波導光殺砲  
しん・だーくえねるぎー  
真・ダークエネルギー  
波導光殺砲  
しん・だーくえねるぎー  
真・ダークエネルギー  
波導光殺砲  
はどこうさつほう・かい  
波導光殺砲・改  
はどこうさつほう  
波導光殺砲  
はどこうさつほう・かい  
波導光殺砲・改

異世界編 part？

NARUTO - ナルト -

火遁系

火遁・炎弾  
かとん・えんだん  
火遁・火龍弾  
かとん・かりゅうたん  
火遁・火龍炎弾  
かとん・こうかきゅうのじゅつ  
火遁・豪火球の術  
かとん・ほうせんかのじゅつ  
火遁・鳳仙火の術  
かとん・はいせきしょう  
火遁・灰積焼  
かとん・こうりゅうかのじゅつ  
火遁・豪龍火の術  
かとん・ごくりゅうえんのじゅつ  
火遁・獄龍炎の術  
かとん・りゅうかのじゅつ  
火遁・龍火の術  
かとん・びゃつこのじゅつ  
火遁・白虎の術  
かとん・びゃつこのじゅつ  
火遁・白狐の術  
かとん・こうかだんのじゅつ  
火遁・劫火弾の術  
かとん・だいえんだん  
火遁・大炎弾  
かとん・らせんがん  
火遁・螺旋丸  
かとん・こうえんらせんがん  
火遁・豪炎螺旋丸  
えんとん・ひじゅつ・ひえん  
炎遁秘術・飛焰  
えんとん・ひじゅつ・だんさい  
炎遁秘術・断罪  
えんとん・ひじゅつ・しりゅうかのじゅつ  
炎遁秘術・四死龍火の術  
かとん・ひじゅつ・あまてらす  
火遁秘術・天照  
かとん・ひじゅつ・しんえん  
火遁秘術・神炎  
えんとん・かくつち  
炎遁・加具土命

水遁系

水遁・水牙弾  
すいとん・すいがたん  
水遁・水蛟弾の術  
すいとん・すいこうだんのじゅつ  
水遁・水陣壁  
すいとん・すいじんへき  
水遁・水龍弾の術  
すいとん・すいりゅうだんのじゅつ

風遁系  
 へしきり  
 圧切  
 ふうじんぎり  
 風神切  
 ふうとん・だいとつば  
 風遁・大突破  
 ふうとん・かぜきりのじゅつ  
 風遁・風切りの術  
 ふうとん・かみおろし  
 風遁・神嵐  
 ふうとん・しんくつは  
 風遁・真空波  
 ふうとん・しんくつれんぱ  
 風遁・真空連波  
 ふうとん・しんくつぎよく  
 風遁・真空玉  
 ふうとん・しんくつたいぎよく  
 風遁・真空大玉  
 ふうとん・れつふうしょう  
 風遁・烈風掌  
 ふうとん・らんきやく  
 風遁・嵐脚  
 ふうとん・らんしゅとう  
 風遁・嵐手刀  
 ふうとん・かみかせ  
 風遁・神風  
 ふうとん・はやぶさ  
 風遁・隼  
 ふうとん・ひえん  
 風遁・飛燕  
 ふうとん・はやて  
 風遁・疾風

すいとん・だいはくふのじゅつ  
 水遁・大瀑布の術  
 すいとん・すいしょうは  
 水遁・水衝波  
 すいとん・みずらつぱ  
 水遁・水乱波  
 すいとん・はほんりゅう  
 水遁・破奔流  
 すいとん・だいはくりゅう  
 水遁・大瀑流  
 すいとん・はらんぱんしょう  
 水遁・波乱万衝  
 みずぶんしんのじゅつ  
 水分身の術  
 すいとんひじゅつ・せんさつすいしょう  
 水遁秘術・千殺水翔  
 すいとんくちよせ・おあなばら  
 水遁口寄せ・大海原  
 すいとん・たつまきごく  
 水遁・龍巻地獄  
 すいとん・げきりゅうそう  
 水遁・激流葬  
 すいとん・らせんがん  
 水遁・螺旋丸

風遁・かみかせとつこつじゆつ  
風遁・神風特攻の術  
風遁影分身  
風遁・らせんがん  
風遁・螺旋丸  
風遁・いっかくらせんがん  
風遁・一角螺旋丸  
風遁・らせんしゅりけん  
風遁・螺旋手裏剣

### 土遁系

土遁・しんじゆつざんしゆのじゆつ  
土遁・心中斬首の術  
土遁・どりゆうだん  
土遁・土龍弾  
土遁・どりゆうへき  
土遁・土流壁  
土遁・じばんちんこうのじゆつ  
土遁・地盤沈降の術  
土遁・どりゆうじょうへき  
土遁・土流城壁  
土遁・らせんがん  
土遁・螺旋丸

### 雷遁系

千鳥  
ちどり  
雷切  
らいきり  
雷神切  
らいじんぎり  
双牙千鳥  
そつがちどり  
二重双牙千鳥  
ついがらいきり  
対牙雷切  
ちどりがたな  
千鳥刀  
ちどりがたな・そつけん  
千鳥刀・双剣  
ちどりえいそう  
千鳥鋭槍  
ちどりせんほん  
千鳥千本  
ちどりながし  
千鳥流し  
ちどりがたな・らせんがん  
雷遁・螺旋丸  
ちどりがたな・らせんがん  
雷遁影分身  
きりん  
麒麟  
ちどりがたな・おいかづち  
雷遁秘術・大雷

らいとんひじゅつ・ほのいかづち  
雷遁秘術・火雷  
らいとんひじゅつ・くるいかづち  
雷遁秘術・黒雷  
らいとんひじゅつ・さくいかづち  
雷遁秘術・折雷  
らいとんひじゅつ・わかいかわち  
雷遁秘術・若雷  
らいとんひじゅつ・つちいかづち  
雷遁秘術・土雷  
らいとんひじゅつ・なるいかづち  
雷遁秘術・鳴雷  
らいとんひじゅつ・ふすいかづち  
雷遁秘術・伏雷  
らいとんきんひじゅつ・はちらいしんころし  
雷遁禁秘術・八雷神殺死

## 忍術系

らせんがん  
螺旋丸  
えんきよりらせんがん  
遠距離螺旋丸  
らせんれんがん  
螺旋連丸  
らせんたれんがん  
螺旋多連丸  
らせんちようたれんがん  
螺旋超多連丸  
おおだまらせんがん  
大玉螺旋丸  
おおだまらせんちようたれんがん  
大玉螺旋超多連丸  
ちようおおだまらせんがん  
超大玉螺旋丸  
ちようおおだまらせんちようえつたれんがん  
超大玉螺旋超越多連丸  
にんぽう・かなしばりのじゅつ  
忍法・金縛りの術  
くちよせのじゅつ  
口寄せの術  
くちよせ・らいこうけんか  
口寄せ・雷光剣化  
しゅんしんのじゅつ  
瞬身の術  
ひらいしんのじゅつ  
飛雷神の術  
じくつかんにんじゅつ・しゅんかんいどうのじゅつ  
時空間忍術・瞬間移動の術  
かげぶんしんのじゅつ  
影分身の術  
たじゅつかげぶんしんのじゅつ  
多重影分身の術  
ぶんしんだいばくは  
分身大爆破

## 医療忍術系

掌仙術  
しやうせんじゆつ

体術

かげぶよう  
影舞葉  
おもてれんげ  
表蓮華  
うられんげ  
裏蓮華  
あさくじやく  
朝孔雀  
おうかしよう  
桜花衝  
つうてんきやく  
痛天脚  
ししれんだん  
獅子連弾  
じゆうけんぼう・じゆうほそりゆうけん  
柔拳法・柔歩双龍拳  
はうけしやうちどりかいてん  
八卦掌千鳥回天

幻術系

ねはんしやうじやのじゆつ  
涅槃精舎の術  
げんじゆつ・こくあんぎやうのじゆつ  
幻術・黒暗行の術  
まげん・ならくみのじゆつ  
魔幻・奈落見の術  
まげん・かせぐいのじゆつ  
魔幻・枷杭の術  
まげん・じこくこつかのじゆつ  
魔幻・地獄業火の術  
まげん・おうかそつさい  
魔幻・桜花葬祭  
まげん・じゆばくさつ  
魔幻・樹縛殺  
げんじゆつひじゆつ・くらお  
幻術秘術・闇？  
つくよみ  
月読

特殊

さんみぶんりふういん・かい  
三位分離封印・解  
さんみいつたいふくげんのじゆつ  
三位一体復元融合の術  
しんしんしゆふくゆうこつこのじゆつ  
心身修復融合の術  
じゆうにしふういん  
十二支封印  
じゆしにしかいいん  
十二支解印

けっかいにんじゅつ・ぼうおんけっかい  
結果忍術・防音結果  
けっかいにんじゅつ・ぼうしけっかい  
結果忍術・防視結果  
けっかいにんじゅつ・へいこうけっかい  
結果忍術・平衡結果  
けっかいにんじゅつ・ぜつえんけっかい  
結果忍術・絶縁結果

状態変化

はちもんとんこうかいもん・かい  
八門遁甲開門・開  
はちもんとんこうきゅうもん・かい  
八門遁甲休門・開  
はちもんとんこうせいもん・かい  
八門遁甲生門・開  
はちもんとんこうしょうもん・かい  
八門遁甲傷門・開  
はちもんとんこうともん・かい  
八門遁甲杜門・開  
はちもんとんこうけいもん・かい  
八門遁甲景門・開  
はちもんとんこうきょうもん・かい  
八門遁甲驚門・開  
はちもんとんこうしもん・かい  
八門遁甲死門・開  
きゅうびのころも  
九尾の衣

零尾化

いちびか

一尾化

にびか

二尾化

さんびか

三尾化

よんびか

四尾化

ごびか

五尾化

ろくびか

六尾化

しちびか

七尾化

はちびか

八尾化

きゅうびか

九尾化

せんにんもーど

仙人モード

血継限界

しゃりんがん

写輪眼

まんげきょうしゃりんがん

万華鏡写輪眼



月読 つくよみ  
火遁秘術・天照 かんとんひじゅつ・あまてらす  
火遁秘術・神炎 かんとんひじゅつ・しんえん  
炎遁・加具土命 えんとん・かぐつち  
須佐能乎 すさのお

随時追記予定Ⅱ

変更可能性あり

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

±転生のパターン±

輪廻転生型

肉体精神ともに0歳から始まる一般的な転生の方法。  
死者の魂の10分の1がこれにより人世界に戻ってゆく。

生誕転生型

肉体年齢0歳から始まる転生の方法。  
これを行った場合、幼児期の教育によって性格が変わった  
りする。

しかし、それはその世界でのみ。

降臨転生型

肉体年齢を設定して転生する方法。

この場合、人世界に元からいた設定に書き換えられるため  
人間が気づくことはない。

憑依転生型

人世界に元からいた人間の肉体に魂に割り込むようにして  
転生する方法。

この場合、被害者？は輪廻転生のようにして人生をやり直  
すことになり、

被害者の能力などは割り込んだ者も使えるようになる。そして他の人間は人格の変化には気づかない。

±說明±

- ・神世界での1日は人世界での100年に相当する。
- ・人世界は全部で274あり、類似を含めると20107もある。
- （例：異世界編 part? - NARUTO 編（53番目）の第一篇（53 - 8）、第二篇（53 - 12）、第三篇（53 - 13）（中でも大友隆が一番最初にいた世界（ひぐらし）コナン）は37番目の21だという。）

追記する可能性

あり

[illegible]

【DATE】No.7（後書き）

新学期が始まったので全体的に更新スピードが急降下します。  
ごめんなさい（+o+）

## 【GW】File・188

### ～ 事件其の一 ～

オハラに対してバスターコールの魔の手が掛かる5年前。ある少年と少女がそのオハラの地に足を着けた。そして、その少年と少女は腕を絡ませある場所へ向かっていた。とは言っても少女の方が一方的にくっ付いている様なものなのだが・・・。

それはともかく彼らは、この5年後にとある少女を助けることになる。その少女は懸賞金79,000,000Bの賞金首。そして、その子は人々に『悪魔の子』と呼ばれ恐れられながら生きていく。

### ～ 事件其の二 ～

後の海賊女帝ボア・ハンコックとその妹達が天竜人の奴隷となつて3年後。世界を震撼させる大事件が起こった。それは、世界貴族すなわち天竜人が住む聖地マリージョアで起こったものだった。その内容とは、奴隷の一人がマリージョア内で多くの天竜人の殺害をし、当時警備中の海兵と当時派遣された海軍本部大將を含めた全員を生かしたまま倒し、天竜人に奴隷とされていた者の解放を見事にやって退けたのである。

そして世界政府は、その主犯者と共犯者（計2名）に莫大な懸賞金を懸けた。何とその額は合計で1,000,000,000,000B

|        |          |             |
|--------|----------|-------------|
| 主犯の名は、 | 『変幻のリユウ』 | 6500000000B |
| 共犯の名は、 | 『瞬殺のセツナ』 | 3500000000B |

【DATE】No.8

＋リユウ＋

所属：無所属／麦わらの一味

懸賞金：650,000,000B

通称名：変幻のリユウ

誕生日：不明（覚えてないだけ）

年齢：全て合わせると???歳超だが、精神は永遠の20

歳。容姿は18,9歳

身長：基本176?

出身：地球の日本という場所

夢：元の世界に戻る事

能力：本来の3割程度の力しか使えない。

体・忍・幻術、五遁（火・水・雷・土・風）、写輪

眼・万華鏡写輪眼

武器：忍具、贗殿遮那

特筆：異次元世界を跨ぐ迷子（?）。25年前にこの世界へやって来た。

＋セツナ＋

所属：無所属／麦わらの一味

懸賞金：350,000,000B

通称名：瞬殺のセツナ

誕生日：不明

年齢：5000年位は生きていると思われる（詳しくは不

明）。容姿は15,6歳

身長：155?

出身：神隠しの里

夢：リュウのお嫁さん

能力：神速移動、直死の魔眼（デメリットがあるらしい。）

武器：何と言ってもそのスピードと瞳力

特筆：邪龍を元の姿に戻した姿で、精神に入り込んだのは、

転生の女神。

25年前にこの世界へやって来た。

トモンキー・D・ルフィー+

所属：麦わらの一味

懸賞金：30,000,000,000B（アルビダ・モーガン・

バギー・クロ・クリーク・アーロン撃破。）

通り名：麦わらのルフィー

誕生日：5月5日

年齢：17歳

身長：172?

出身：東の海    ドーン島    ゴア王国    フーシャ村

夢：「海賊王」になること・シャンクスとの再会

能力：ゴムゴムの実

武器：

特筆：超人系悪魔の実の能力者

トロロノア・ゾロ+

所属：麦わらの一味

懸賞金：

通り名：海賊狩りのゾロ

誕生日：11月11日

年齢：19歳

身長：178?

出身：東の海    シモツキ村

夢：「世界一の剣豪」になること

能力：剣術  
武器：和道一文字・三代鬼徹・雪走  
特筆：重度の方向音痴

#### 十ナミ十

所属：魚人海賊団アーロン一味／麦わらの一味  
懸賞金：  
通り名：泥棒猫  
誕生日：7月3日  
年齢：18歳  
身長：169？  
出身：東の海　ココヤシ村  
夢：自分の目で見た世界中の海図を描くこと  
能力：航海術  
武器：木製のステッキ  
特筆：金の亡者

#### 十ウソップ十

所属：ウソップ海賊団／麦わらの一味  
懸賞金：  
通り名：ホコリのウソップ（自称）  
誕生日：4月1日  
年齢：17歳  
身長：174？  
出身：東の海　シロップ村  
夢：「勇敢なる海の戦士」になること  
能力：狙撃  
武器：パチンコ  
特筆：大嘔吐き



トサンジト

所属：オービット号「バラティエ」麦わらの一味

懸賞金：

通り名：黒足のサンジ

誕生日：3月2日

年齢：19歳

身長：177?

出身：北の海

夢：伝説の海「オールブルー」を見つけること

能力：料理人

武器：騎士道

特筆：女つ垂らし

- 東の海 アーロンパーク -

ある日そこには世界最大級の犯罪者リュウとその共犯者であるセツナ（彼女のには婚約者）が麦わらの一味VSアーロン一味の戦いをココヤシ村の人々に紛れ観戦していた。

しかし、最初優勢を保っていた麦わらの一味が圧倒的劣勢になるとようやく動き始めた。

村人

「お、おい?!」

と、アーロンの方へと向かうのを阻止されかけるがその手を弾いてアーロンの方へと行った。

リュウ

「アーロン。久しぶりだな。」

するとアーロンも面識があるようで、

アーロン

「おお、あんたか。あん時はどうも。」

リュウ

「別に昔話をしに来た訳じゃ無いさ。まあ、後悔はしてるけどな。お前を解放した事を。」

アーロン

「シャーハッハッハ！俺が魚人だからか？」

リュウ

「いや、オレは良くも悪くも人種差別が嫌いだね。そうじゃない・  
・お前も人間やその他の人種を差別していたら結局の所、奴らと変わんねーぞ？アーロン。」

その最後の言葉に、アーロンはグツと顔の表情を洩らせた。

アーロン

「・・・・・・・・ところでアンタは何をしにきたんだ？」

リュウ

「半年くらい前に、ナミって言う金には目が無いんだけど顔だけは意外と良い女の子と友達になってね。偶には顔ぐらい見せようかと思って、ここに来たらこの騒ぎってな訳よ。」

そして、ここまでずっと黙ってリュウの隣にいたセツナが話し始めた。

セツナ

「本当は麦わらの御仲間さん達とアナタ方の喧嘩だったから割り込みたくは無かったのですが、今のアナタ達がこの近隣の村々を苦しめているのは、悲しいですが私とdarlingには間接的にはありますが責任があります。」

リュウ

「まあ、途中に無駄な単語が入ってたのは置いて、オレは海軍でも海賊でもないけど一応、自分の正義的な信念みたいな物は持つ

ていてね。生憎、お前はそこから激しく逸脱している。」

そこまで言うと、激しい音と眩しい限りの光を左手に立てながらどんどんとアーロンに近づいていった。それと同時に、アーロンの表情は恐怖へと変わっていった。

アーロン

「昔、アンタに助けてもらった事は一生をかけてでも返せねえ恩だと思っっている。頼むから、命だけはとらねえでくれ！！」

ココヤシ村の村人達と、途中から加わったナミは驚きの表情を浮かべている。それもそのはず、この近辺の村々を力で支配していたアーロンが、命乞いをしているのだ。しかも、そのアーロンはなんと言っただけ？『アンタに助けてもらった事は一生をかけてでも返せねえ恩』だって？

アロン

「頼むから、命だけはとらねえでくれ!!」

リュウ

「どの道、お前は20,000,000Bの賞金首。その首でココヤシ村を始めとする近隣の村人に償うんだな。お前の身柄は、海軍に引き渡す。何、今は殺しはしないよ。」

そこまで言つと、左手の光と音は激しさを増した。そして、

雷切

次の瞬間には、リュウの左腕はアロンの腹部を貫通し、血は辺りに散っていた。そして、リュウとセツナは、村人の方に向き直った。

セツナ

「ごめんなさい、お騒がせしました。後々お詫びを言い直しに来ますので、それでは。」

と言ったかと思うと、2人と共に腹を撃ち抜かれたアロンの姿も消えてなくなっていた。そして残された者たちは、喜ぶ前に啞然としていた。

・とある海軍支部・

ここにリュウとセツナ、瀕死のアーロンがいた。

・  
・  
・

そして、その数十分後。

リュウ

「大佐さん、ごめんなさいね。折角の金蔓だったのに。」

と、アーロンの賞金額20,000,000Bの入ったスーツケースを弄びながらにこやかに牽制する。

セツナ

「では、私達は婚前旅行の真っ最中ですのでさようなら。」

この発言に、後々痛い一発が下されたという。

・ココヤシ村・

状況が良く飲み込めていないルフィーとその仲間達、ココヤシ村を含める近隣の村人達はとりあえず宴会の準備に取り掛かっていた。そんな中での麦わら御一行の会話。

サンジ

「ところでナミちゃん。あのクソ強えあいつ等と面識あったのか？」

ナミ

「ええ、あつたわよ。」

ルフィー

「そんな事よりよお。そいつって強くて良い奴なんだろう？アーロンを勝手に打つ飛ばしたのは許せねえけど、・・・仲間にする！！」

『んな、勝手な！！』というツツコミが入ったことは、報告しておこう。

すると、ルフィーの言葉に対しての謝罪が聞こえた。

リユウ

「やつば怒ってたか？いやゝ悪い悪い。オレにも事情つてものがあったからさ。」

ルフィー

「へえゝ事情つて何だ？」

リユウ

「ああ、困つてるところを助けた。」

ルフィー

「へえゝあんな悪い奴なのにか？」

リユウ

「ああ、困つてたからな。」

ルフィー

「へえゝお前面白い奴だなあ。おれの仲間になれ！」

リユウ

「ああ、良いぞ。オレもお前の考え方が気に入った。」

『ギャグか?!お前ら!!』というツツコミが入った事も報告しておこう。

ルフィー

「おれは船長のモンキー・D・ルフィー。よろしくな。」

リュウ

「オレはリュウ。で、隣にいる奴はセツナ。」

この事を嘆いている人が約1名いた。

セツナ

「（折角のラブラブ2人旅があ・・・。）」



それから数日後

もうすっかり仲間になったリュウとセツナを乗せて船は大海原を漂っていた。

ナミ

「また値上がりしたの！？ちょっと高いんじゃない？アンタんとこ！今度上げたらもう買わないからね。」

とナミが新聞を持ってきた鳥に向かって怒っていたり、ウソップは『必殺・タバスコ星』の開発をしていたり、ルフィーはナミのミカンを狙ってサンジに怒られていたりetc・・・そんな感じの船上で似合わない悲鳴が木霊した。

ルフィー

「わっはっはっは！おれ達やお尋ね者になったぞ。」

ウソップ

「生死に関わらず・・・30,000,000B?!」

ルフィー

「30,000,000Bだってよ！わっはっはっは！」

リュウ

「もっと大物になれば、船長以外だって賞金懸けられるぞ。」

その言葉にサンジとウソップは、はしゃぐがナミはウンザリしていた。

ルフィー

「張り切つて偉大なる航路グランドラインに行くぞ!!」

サンジ&amp;ウソップ

「おおー!!!」

ナミ

「（これは、東の海でのんびりしている暇は無いわね。）」

セツナ

「（これで、この一味の総合懸賞金額は、1,030,000,000Bね。）」

その後、鉄拳のフルボディーと名乗る海軍がやってきて、

フルボディー

「震えて眠れ。」

砲撃してきた為、リュウはその船を・・・

リュウ

「その言葉そのまま返す。 水遁・水龍弾の術」

海から龍の形をした水柱が上がったかと思うと、海軍船を粉々にして消えていった。

ナミ

「何なの・・・今の。」

サンジ&amp;ゾロ

「・・・。」

ウソップ

「うひょー?!?!」

ルフィー

「すっげー!!!何なんだ今の!」

リユウ

「今のか?今は、『水遁・水龍弾の術』だ。」

ルフィー

「そうか。すいとん・すいりゅうだんの術っていうのか!」

ナミ

「それじゃあ、全然分からないわよ!」

『バシッ』と、激しくツツコミを入れられる約2名。

リユウ

「簡単に説明するとオレは、火（炎）と水と風と雷と土を操れるんだ。それをもっと説明すると、大きく分けてオレができるのは、忍術と幻術と体術。火・炎・水・風・雷・土を操るのは、忍術と呼ばれる種類に入っていて、その他に忍術と呼ばれる種類でできるのは医療忍術と時空間忍術。幻術は・・・まあ、俗に言う睡眠術みたいなものだ。体術は普通の武術。その他にも結界術とか封印術とか解

印術とかできることは多々あるけど、全部見せるのも面倒だから、機会があつたらその都度、説明する。」

この説明の間、ルフィーとセツナ以外は『結構やばい奴なんじゃないか?』と思つたらしい。

【GW】File・192

ゴール・D・ロジャーが生まれそして死んだ町ローグタウン。そこに入ってから麦わらの一味は、自由時間であつた・・・。

リュウside

さてと、オレは何十年ぶりにセツナと離れて行動することができた。はつきり言つて羽が伸ばせる。が、ここを仕切る海軍大佐に面識があるものだから、ちよつと話をしてくる予定だ。

時空間忍術・瞬間移動の術

つと、着いた場所はスモーカー大佐の部屋。

リュウ

「よ、スモーカー。今日は頼みごとをしにきた。」

スモーカー

「ん？何だ。6億と5000万の首が何しにきた。」

リュウ

「だから、頼みごとって言ってるだろ。馬鹿かお前は。」

スモーカー

「・・・殺すぞ。」

リュウ

「じゃあヒナに・・・」

スモーカー

「用件だけ言え。」

これは、いつもの言い合いだ。基本オレのペースで事が運ぶ。

リュウ

「モンキー・D・ルフィーって奴には手出すなよ。」

スモーカー

「ルフィー？誰だそれ。」

リュウ

「未来の海賊王。」

そのまま睨み合いがしばらく続いたが、

リュウ

「じゃ、それだけ。（って言ってもスモーカーが黙ってる訳ねえもんな。死刑台にでも先回りしておくか・・・。）ヒナによろしく。」

## 瞬身の術

よっと、死刑台に来てみたもののまだ迷ってやがるな。

・ ・ ・ ・ ・

そして、やっと現れた。何か面倒な奴らも付いて来てるけど・・・。

ルフィー

「おい！リュウお前も上がって来いよ！」

リュウ

「いや、断る！」

ルフィー

「そうか？すつげーぞ。」

そして、お巡りさんに注意されているルフィー。すると、何か騒ぎが起こり始めた。（中略）バギーの一味にルフィーが捕まった。そして、雷雲がどんどん濃く厚くなっていく。ゾロやサンジも登場したが、それでもまだオレは、動かない。

それにあいつはゴムだ。

そして、バギーが刀を振り上げると、

ルフィー

「ゾロ！サンジ！ウソップ！ナミ！リュウ！セツナ！」

ニカッと笑った。

ルフィー

「悪い、おれ死んだ。」

それを合図にオレは動いた。

リュウ

「勝手に死ぬんじゃないよ!!」

麒麟

オレが導いた麒麟を象った雷は、バギーの振り上げた刀に向かって一直線に進んでいった。そして、バギーは死刑台ごと雷に打たれ崩壊し炎上した。そして、中から馬鹿は呑気に現れた。

ルフィー

「わっはっはっは。やっぱ生きてた。儲け。」

リュウ

「てめえ。『やっぱ生きてた』儲け』じゃねーよ。オレが  
麒麟  
やんなかったら死んでたぞ？確実に。」

ルフィー

「な〜んだ。お前だったのか。ありがとな!」

リュウ

「いえいえ、どういたしまして。・・・じゃなくてだな、ちっとは反省しろよ。」





とりあえず現在は、4人揃って逃走中。オレだけだったら別に術でも使って逃げるんだけどなあ。とか思いながらもとりあえず走っている。

その道中に、たしぎ曹長がゾロに用があるとか無いとかで、ゾロを残してまた走っていた。しかし、今度はあの懲りないタバコの大佐が待ち伏せしていた。

スモーカー

「来たな。麦わらのルフィー……。」

リュウ

「ルフィー、サンジ！先に行っとけ。すぐ行く。」

オレの命令にルフィーはムツとしていたが、サンジが引つ張って行ってくれた。

リュウ

「さてと、スモーカー。今ここでオレ達を見逃してくれたらヒナにはあの”とっておきの情報”は伏せておくことにするんだけどな。」

スモーカー

「良いか？リュウ。俺は海軍本部大佐、白猫のスモーカーだ。」

リュウ

「そうか……なら交渉決裂だな。変態のストーカー君。」

スモーカー

「貴様あー！！ふざげやがってエー！！！」

ホワイト・ブロー

煙が拳になって飛んできたが、

万華鏡写輪眼      月読

それから精神世界で、スモーカー大佐を24時間程オレの知っている限りの情報（主にスモーカーに関する絶対に人には知られたくない物）を片手に脅しておいた。

リュウ

「・・・で、まだ立ち向かってくるの？」

スモーカー

「ったりまえだ。はあはあはあ・・・。」

すると、突然誰かの気配が感じられた。

リュウ

「誰だ？」

しかし、スモーカーはすぐに気が付いたようだった。

スモーカー

「政府は、てめえの首を欲しがってるぜ。」

オレは、その言葉で分かった。

リュウ

「あ、なんだ。ドラゴンか久しぶり。」

スモーカー

「顔見知りかよ！」

と、ツツコミを入れられていると隣に妙な密着感が沸いた。

セツナ

「寂しかった」

多分最後まで言われると、面倒だからセツナを右手首に戻した。

リュウ

「じゃ、これでオレは離脱な。これにてドロソ。」

飛雷神の術

よつと、無事メリー号へ帰還した。

ナミ

「遅いじゃないリュウ！……ってセツナは？」

リュウ

「ああ、オレの右手首の中。」

と言ったが、やはり説明が足りなかったらしくきちんとした説明を求められた。

リュウ

「じゃあまずセツナ的能力から説明すると、最速1秒間で1光年の”神速移動”が出来る事と”直死の魔眼”って言うよく分からない瞳術。そして、オレの右手首に封印されている間は、オレの能力、力量が今現在の1.5倍に飛躍するのがセツナの能力。まあ、よく理解できないとは思うけど何とか飲み込んでくれ。」

ルフィー

「分かった。セツナは不思議人間って事だな。」

いやあ、普通に寝過ごした。オレは、いつものように 結界忍術・防音結界 と 結界忍術・平衡結界 を張って寝ていたものだから、いくら世界最大のクジラ、“西の海”<sup>ウエストフル</sup>出身のアイランドクジラが騒ごうと叫ぼうとも全く気が付くことも無く夢の中だった。よって、オレが起きたときには全てが終わっていた。だから、船に見知らぬ2人組が乗っていたときは正直ビックリした。

え？いつから寝てたって？それは、リヴァースマウンテンに無事入ったときだ。だって、リヴァースマウンテンの海流に乗るまでは難しいけど、乗ったら後はそのまま海流に身をゆだねておけば勝手に<sup>グランドライン</sup>“偉大なる航路”に入れるからな。

・・・とりあえず今は、そんなことを悠長に報告している暇はない。なぜなら、この船の航海士であるナミが初めての<sup>グランドライン</sup>“偉大なる航路”でモタモタしているからだ。

ナミ

「180度、船を旋回！！」

ウソップ

「風向きが変わったぞ！！」

ルフィー

「おい！今、向こうでイルカが跳ねたぞ。行ってみようぜい！！」

セツナ

「10時の方向に冰山です!」

サンジ

「ナミさん!!霧だ!!」

そして、ナミは「何なの?!?!」と、とうとう頭を抱えてしまった。

リュウ

「冰山と風向きは任せろ!」

火遁・豪龍火の術

リュウ

「・・・ちと火力不足か・・・」

火遁・獄龍炎の術

リュウ

「(・・・よし溶けた。あとは風向きだ。)」

風遁・大突破

!!!!!!はいOK!と、思ったのだが・・・。

ナミ

「（雲の動きが早すぎる！！）」

ミス・ウェンズデー

「（・・・来る！！）」

リュウ

「これは、無理だわ。・・・オレでも。」

オレらの目の前には、突如大嵐が舞い込んできた。

ナミ

「皆！帆を畳んで！ともに食らったら転覆だわ！！」

すると、何故かサンジが作ったおにぎりを皆で食べて乗り切った。

（こんな、説明で良かったのだろうか？）

そして、オレが起きる前から寝ていたゾロがやっと起きた頃に、最初の目的地ウイスキーピークが目の前に現れた。

Mr.9

「それでは、我らはこの辺で。」

ミス・ウェンズデー

「送ってくれてありがとう。ハニー達。」

そして、声を合わせて

Mr.9 & amp; ミス・ウェンズデー

「バイバイベイベー！！」



と言うと、海へ飛び込んでいった。そんな様子にナミをウソップは、

ナミ

「行っちゃった・・・。」

ウソップ

「一体何だったんだ？あいつら。」

ルフィー

「放っておけ！上陸だ！！」

そして、上陸した先で、よく分からない歓迎を受けるのであった・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4393m/>

---

千里の道も一歩から～組織壊滅への道のり・・・そして、迷宮に迷い込んだ。

2011年11月15日21時56分発行